

クールビューティーな  
紗夜さんを返して（涙）

黒ハム

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これはちよつと(?)頭のネジの外れた男子高校生とちよつと(?)ポンコツが加速した紗夜さんを中心に繰り広げられる物語。

- ・ノリで書いてます。色々と許して。
- ・何人かキャラが崩壊しています。
- ・また、タイトルの最後に☆がついている話は、本文でギミックを仕込んでいる話という意味です。

千聖さんメインヒロインのIFルート『まともな千聖さんを返して（マジで）』はこち  
ら。

↓<https://syosetu.org/novel/262877/>

# 目次

キャラ紹介(という名の何か)	1
ありふれた2年生の日常編	
自分は悪くないです	13
CIRCLEに居るヤバイバイト	23
女性に太ったと言っではいけない	35
それは捕まったら終わりの鬼ごっこ	46
腹黒そうな人と会うときは気を付けろ	
ぼて?ポテポテ!	59
ぼてぼて降臨	86
天才の考えてることは分からない	98
とある普通の日	109
会議って何だっけ?	119
校長の思いつきほど怖いものはない	133
イヌ派?ネコ派?	142
ゲームで有名になっているギルド	155
文化祭! って言いたいけどなあ	

一番盛り上がるのは最後だったりする

176

開戦の鐘はもうすぐ鳴る

192

勘違いって起きてるの知らないと困る

よね？

205

急にリアルファイトが起こると困る

遂に出会ってしまったか……

236

ストレスは人を壊す

251

修羅場ってどうして起こるのか？

その再会は新たな火種を生む

290

ライバルとの対決って燃えるよね

最強の化け物は女神によって目覚める

322

女神の加護の下で

338

徹夜で会議するのはやめた方がいい

え？俺それ聞いてない

362

○○○しないと出られない部屋

○○○しないと出られない部屋 その

R o s e l i a V S 慧人

402

390



	ね ☆	—	780
	Roselia、襲来 ☆	—	797
	V.S. 白鷺千聖	—	827
	紗夜さんの誕生日	—	847
	それは第三勢力と言うには濃すぎるメ ンバー	—	865
	千聖の誕生日	—	884
	Roseliaの復讐(?)	—	897
	Roselia VS 慧人 く第II	—	911
	ラウンドく	—	911
943	サヨVSケイトVSポテト	前編	
	サヨVSケイトVSポテト	後編	
	V.S. 今井リサ	—	974
	短編詰め	—	1006
	崩壊寸前のCIRCLE	—	1037
	ガチャ爆死	—	1071
	地獄ここに在り	—	1084
	ポテト、ポテト、ポテト	—	1120
	宇田川あこの誕生日	—	1139
	慧人、キーボードに挑戦する	—	1156
	冬休み+α編	—	1169
	最強の切り札、その名は……	—	1169
	勝手に訓練の相手にされた件について	—	1191

クリスマスとはなんぞや？ 前編

1209

クリスマスとはなんぞや？ 中編

1227

クリスマスとはなんぞや？ 後編

1249

クリスマスとはなんぞや？ 多分これ

が解答編

—————

1279

C i R C L E L a s t L I V E

……？

—————

1304

V S . 氷川紗夜

—————

彼の消えた日 前編

—————

1349

彼の消えた日 後編 ☆

—————

1369



# キャラ紹介（という名の何か）

主人公

名前：冬木慧人ふゆきけいと

身長：176cm

体重：74kg

血液型：???

所属高校：虎南高校

学年：2年

所属部活：サッカー部

ポジション：MF

役職：副部長↓生徒会長

趣味：ゲーム

特技：料理、裁縫、破壊

好きな食べ物：???

嫌いな食べ物：???

得意科目：家庭科

苦手科目：美術、音楽

好きな動物：はりねずみ

誕生日：1月23日

星座：水瓶座

二つ名：『歩く危険地帯』

容姿

髪色は灰色で染めていない。目つきが悪いため、第一印象で不良とか怖いと言われるタイプ。ちなみに脇腹に傷がある。

性格

マイペース。気分が乗った時の行動力やノリは凄まじい反面、気が乗らないと面倒臭がり発動。

DSで鬼畜だが自称ノーマルらしい。笑顔を見せる時は大抵相手を陥れる時。

親しい相手には時折、優しさを見せるが、大体の相手に興味はない。ちなみに怒らせると怖い。

### 3 キャラ紹介 (という名の何か)

ボケとツツコミ兼任だが、基本はボケらしい (アンケート参照)

クールビューティー教の信者だが信仰対象が迷走したため本人も迷走中。

NFO

プレイヤーネームは「Kei」

ギルド「クールビューティー」は嗜好、ポンコツキュートは神」に所属し、サブギルドマスターを務める。

NFO界限で (色んな意味で) 有名な4人パーティー「Emissary」の1人。

職業はヒーラー。ただ、前線に出て素手でボスをボコる姿から一部からバーサークヒーラーと呼ばれている。

特殊技能 (上段にスキル名。以下に簡単な説明)

・絶対音感

そのまま。

・滅びの歌

歌うだけで地獄を見せられる。相手の精神に多大なダメージ。また、周りの物にもダメージ。ドラ○もんのジャ○アンといい勝負。ただ、ある曲を一度でも完璧に歌えれば、その曲だけは普通になる。

・絶望の演奏

楽器を弾くだけで相手に地獄を見せる。歌よりはマシ（？）だが、そもそも楽器が弾けない。ただし、ある程度のメンテナンスは出来る。

・気配察知

最大で半径100m以内の人の位置が分かる。最近はずっと最大の範囲が広がっている。

・身体能力化け物

平然と屋上から飛び降りる。壁を走ったり、蹴ったりして屋上へ駆け上がることが出来る。ハンマー一振りでコンクリートを破壊する。人を抱えて屋根伝いを走る。金属バットを蹴り砕く……もはや、バトルものの世界に行けばいいんじゃないのか？

・魔王の宣告

相手に対し、威圧しながら命令することでその命令を実行させる。なお、喧嘩でしか使わない。

・トラブルメーカー

トラブルに巻き込まれやすく、また自らトラブルを起こしに行く。大抵、被害が大きくなる。

備考

・画力は壊滅的で千聖さんといい勝負。ただし、ラテアートは行ける。  
・頭はいいが勉強は自分からする気はない。誰かさんのお陰で最近は率先してやっている。

・不良たちなど一部の者から『破壊兵器』と言われ、恐れられている。ただし、本人は否定している。

・回収屋さんという謎の組織と繋がりがあある。

・弦巻家危険度ランク最恐のSS級。『天災』と言われている (本人は知らない)

・サッカーのU-20日本代表に選ばれた。

・隠し事がまだまだある。

参考までにバンドリキャラと出会った順。

(慧人基準。一部のみ。略しているが高校何年。上から順)

月島まりな (1年生春)

湊友希那 (1年生夏前)

松原花音 (1年生夏前)

氷川紗夜 (1年生夏休み)

白金燐子・宇田川あこ（1年生夏休み）

白鷺千聖（1年生秋）

氷川日菜（1年生冬）

今井リサ（2年生春）

オリキャラの簡易説明。

虎南高校組

キャプテン

クラス：慧人と違う。

所属：サッカー部

ポジション：DF

備考：バカ筆頭。サッカー部の人望が厚い。感情で振り回していくタイプ。モテた  
い。ギターを少し嗜んでいた。

森下

クラス：慧人と同じ。

所属：サッカー部

ポジション：FW

備考：イケメン。軽い。やるときはやってくれる。ちやつかりしつかりしている。嫉妬しないメンバーの片割れ。ドラムを少しだけ出来る。

千石

クラス：慧人と同じ。

所属：サッカー部

ポジション：MF

備考：司令塔。頭はキレるが慧人以上の面倒くさがり。嘘をつくことはほとんどない。嫉妬しないメンバーの片割れ。ベースが少し弾ける。

その他サッカー部メンバー

・マネージャーを除き、キャプテンを崇拜している。

・また、全校生徒の七割(男子生徒のほとんど)はバカであり、彼らも例外ではない。

校長先生

- ・ 慧人を生徒会長にした元凶。
- ・ 慧人を含めた生徒と親しく、彼らの起こす問題に胃を痛めている。
- ・ 実は『王』である。

## NFO組

### 小鳥遊秋彦

呼び名：先輩

年齢：18歳（大学一年生）

## NFO

プレイヤーネームは「ぼんちゃん」

ギルド「クールビューティー」は嗜好、ポンコツキュートは神」に所属し、ギルドマスターを務める。

NFO界限で（色んな意味で）有名な4人パーティー「Emissary」の1人。職業はウィザード。超絶火力の大魔法で味方諸共ぶつ飛ばす。尚、最低限の倫理観はある。

## 備考



- ・車の免許は取っている。

- ・周りへの影響力が絶大な人間（お前が主人公か？ヒロイン居ないけど）

- ・慧人が中学一年生となった春に出会った。慧人の中学時代（過去）を知る人物その

1。

- ・元U-15サッカー日本代表である。

- ・慧人と東雲のサッカーの師である。

先輩の主人公に影響を与えたりリスト

- ・クールビューティー教に入信させる（しかし、本人はポンコツキュート教に転教）。

- ・サッカーを始めさせる。

- ・NFOに勧誘し、共にギルドを設立し、多くの伝説（笑）を残す。（本人はネカマ）。

- ・絶対音感持ちだと最初に気付き、教えた。

- ・CIRCLEでのバイトに引き込んだ張本人（尚、慧人が一年生の夏休み前にやめている）。

先輩の主人公以外に影響を与えたりリスト

- ・東雲にサッカーを始めさせる。

- ・東雲を金髪ロリータ教信者として覚醒させた元凶。

・あこちゃんの厨二病を加速させる。

東雲夏樹

高校：桃山浦高校

所属：サッカー部

ポジション：FW

NFO

プレイヤーネームは「トウウン」

ギルド「CBPC、傘下、金髪ロリータ教」に所属し、ギルドマスターを務める。また、傘下のギルドリーダーのトップに君臨する。

NFO界限で（色んな意味で）有名な4人パーティー「Emissary」の1人。職業はタンク。

備考

- ・桃山浦のエースストライカーであり、慧人と中学が一緒。
- ・慧人の（色んな意味で）ライバルであり、よく対決をしている。
- ・金髪ロリコンであり、金髪ロリータ教なるものを設立している。

・白鷺千聖を天使様と崇めている。

・サツカーのU-20日本代表に選ばれた。

・慧人の中学時代（過去）を知る人物その2。

春野めい

呼び名：メイ

高校：桃山浦高校

所属：料理部

NFO

プレイヤーネームは「皐月」

ギルド「クールビューティー」は嗜好、ポンコツキュートは神」に所属。

NFO界限で（色んな意味で）有名な4人パーティー「Emissary」の1人。  
職業はアサシン。

備考

・料亭の娘。

・慧人と東雲と中学が一緒。

・雨の日に路地裏で拾われた……？

・ 慧人の中学時代（過去）を知る人物その3。

## ありふれた2年生の日常編

### 自分は悪くないんです

クールビューティーはこの世の宝である。

涼しげな目元。凛とした態度。感情的にならずに常に冷静。

挙げたらキリがないその素晴らしさ。

ちなみに友人にクールビューティーについて熱く1時間程語ったところ相手は引いていた。

ふむ。クールビューティーを語るのには熱くよりクールに行くべきだったか。

と、クールビューティーの素晴らしさ……この世界の真理に気付いてから数年。俺は最高のクールビューティーと言える存在に出会ってしまったのだ。

氷川紗夜さん。

それが彼女の名だ。そして彼女こそ俺の理想的なクールビューティーを体現した人物である。

あの日の出会いを俺は昨日のように思い出せる。そう、あれは俺がC i R C L Eでバイトしていた時のことだ。声をかけられ、声の方を向くとそこには、

「……あなたが女神ですか？」

女神が、居たのだ。

その日俺は確信したね。このお方は俺の理想を体現した、この世で唯一無二の人物だと。

「……慧人さん。あ、あーん……」

そんな理想を体現した、女神のような彼女と出会ってから月日は流れ現在。

俺は紗夜さんと一言で言うならそこそこ親密な関係になってきていた。

目の前には頬を紅く染めた彼女がいる。

「……………」

差し出された彼女のものを俺は口を閉ざして、首を横に振る。

「そんな遠慮なさらなくても……………ほら。あ、あーん……………」

無言の否定で押し通そうにも、頑なに差し出したそれを引つ込めようとしないう紗夜さん。なるほど。彼女の中にも意地はあるのだろう。

なら、俺にも意地はある。俺は無言で立ち上がり彼女の前に立つ。そして彼女の手を

取り……………」

「紗夜さん……………にんじんが嫌いだからって俺に押し付けようとしなくてください」

「……………記憶にないわ」

「そうですか」

笑顔で否定する彼女に向けて、俺も笑顔を向ける。

「ほら口を開けろよ……………さあ……………！ぶち込んでやるからよお……………！」

「んん……………！」

彼女から箸をそつと奪い取り、そのまま箸の先端のにんじんを彼女の口の中に入れてよ

うとする。

涙目で口を閉ざし、必死に首を振って抗議する彼女。だが今日という今日は食つてもらう。

「抵抗するだけ無駄だつてこと、その身体に分からせてやるよ！」

「んん……………」

この後、俺たちの戦いは熾烈を極めた。

尚周りの見る目は気にしないものとする。



「助けてください！リサの姐さん！」

「おーおーどしたの？」

「クールビューティーな紗夜さんが最近見れなくて……！」

「あははーアタシは結構見てるけどなあー」

「クソオ……！羨まし過ぎます……！」

拳を机に打ち付ける。畜生！なんて羨ましいんだあ……！

昨日、紗夜さんとちよつと激しくバトルした俺は、リサ姐こと今井リサさんにフアストフード店に来てもらって愚痴をぶちまける。対価は彼女のお昼代だ。お昼代で愚痴をぶちまけられるなら安いものだ。………ん？本当に安いものだろうか？まあ、気にしたら負けだなうん。

「聞いてくださいよ！最近紗夜さんのポンコツなどこしか見てないんです！」

「それは慧人くんの特権だよ」

「そんなのいらななんです！俺が求めているのはクールビューティーな紗夜さんなんです！間違ってもポテトを幸せそうな表情で、モシヤモシヤ食べている紗夜さんじゃないんです！」

ビシッ!と俺の隣の席に座る彼女を指さして断言する。

「そうだ!俺が求めているのはこんな彼女じゃない!

「相変わらず本人が隣にいるのによく言うことで……おい。言われてるよー」

「……………」

すると紗夜さんは手を止める。おっと?今回ばかりは言い過ぎたか?

「……………今、ポテトって言いました?」

訂正しよう。この人、ポテトの部分しか聞いてねえわ。

「分かりますか!?普通の人ならここで睨むなり、蔑むなり、怒るなりするとここをこの人は全部スルーしてポテトですよ!」

「うんうん。君は言われても仕方ないって自覚があつて言ってるんだねーそして紗夜?とりあえずお望み通り言つてあげたら?」

「そうですね……………」

すると、少しキリッとした表情になる紗夜さん。おお…………!俺が求めていた理想の…………

「…………ポテトのおかわりに行つてきていいですか?」

「ふぎげんなあああつ!」

俺は思わずその頬を引っ張りたくなる衝動に駆られつつも、公でそんなことをするわ

けにはいかないので彼女の肩に手を置き前後に揺らす。

「アンタの頭にはポテトしかないのか！」

「いえ、ハンバーガーもありますよ（キリッ）」

「そういうことじゃねえええええ！」

さらに激しく揺らすことにする。

「あはは☆相変わらず君たちが揃うと面白いね〜」

「笑い事じゃないんですよ……本当に……！」

俺は紗夜さんの肩から手を離しテーブルに拳を打ち付ける。

「リサ姐……！紗夜さんを……俺の理想の紗夜さんを返して下さい！」

「んー無理ー！」

「そんな殺生なあ……！」

思わず涙がこぼれそうになる。いや、これは大号泣ものだよ？

「リサ姐……俺、紗夜さんを初めて見たとき、女神が舞い降りたのかと思いました」

「あーうん。何度も聞いたよ〜」

「あの頃の彼女は神秘の塊。誰であろうとその神聖さを侵してはいけないうような……そう。触れることすらおこがましいと言えるような神々しさがありました」

「うんうん。そうなんだねー」

「イーカロスの話を知っていますか？ギリシャ神話に登場するイーカロスは蠟で翼を作り、空を飛んだとされます。そして、その身を神聖な太陽に近づけさせたが為に翼は溶け、墜落し死んだとされます」

「へえー」

「かつての彼女も同じです。俺はその御身に近づきすぎでは、イーカロスの翼のように溶けてしまうのではと錯覚したものです………が、近づきすぎたら凄まじい程のポンコツってオチですよ!?!納得できるかあっ!」

俺は、自分がこんなに熱く語ってる中、本当におかわりを取ってきた彼女を指さす。アンタの話をしているんですけどね!何自分は関係ないって感じ出しているんですかね!

「うんうん。君も君で相変わらず変人だよな〜」

「いいですかりサ姐。俺が変人なのは百歩譲って認めます」

「え?百歩も譲るの?」

「で・す・が!俺は認めない!紗夜さんは俺の……いいえ!全世界にいる俺の同士たちの希望なんです!夢なんです!そこは一步たりとも譲りません!」

「あはは………普段はそこそこまともなのに。スイッチ入ると壊れるよね〜」

「………ん?何を言ってるんですか?壊れてるのは紗夜さんの頭ですよ?」



「でもこの紗夜も可愛くて好きでしょ？」

「……………否定はしないで」

「ならいいじゃん☆」

「よくないです！」

認めるわけにはいかない……………！それでもクールビューティー教の端くれ！例え、紗夜さんのこんな一面が可愛くて仕方なかったとしても！……ここを認めるわけには……………！認めるわけには……………！！

この後、紗夜さんから凄いい頬を引つ張られました。後で鏡を見たら真っ赤になっていました。

(これで付き合っていないんだから不思議だよね……………)

そして、その光景を見ていたリサ姐の視線が生温かったです。

## C i R C L E に居るヤバいバイト

遙か昔のこと。

『汝、隣人のクールビューティーを愛せよ』

ある人物——後のクールビューティー教の創始者——は神の言葉を聞いたと言う。そう。これこそがクールビューティー教誕生の瞬間である。

その教えは長い年月を経て、脈々と受け継がれてきた。ある時は親から子へ。ある時は友から友へ。ある時は師から弟子へ。

俺自身もそうだった。俺がクールビューティー教に入信するきっかけを与えた偉大なる先輩。あのお方からクールビューティーの素晴らしさを説かれたとき、俺の中で何が目覚めたのだ。俺こと冬木<sup>ふゆきけいと</sup>慧人。中学一年の夏の出来事である。

ちなみにその先輩は最近、クールビューティー教からポンコツキュート教なる訳の分からんものに鞍替えした。ドロップキックを背後から喰らわせた上で、話し合いの場を設け、お互いの信ずるモノについて熱く語り合った。先輩曰く『クールビューティーから生まれるポンコツキュートこそ真に素晴らしいものなり』と阿呆なことを言っただけで聞かなかったので破門にしておいた。先輩と俺の道が交わることは今後、二度とないだろ

う。何がポンコツキュートだ。断然クールビューティーの方がいいだろう。

「——だから……君もクールビューティー教に入信しないかい？」

「あ、あの……えっと……」

時は平日の夕方。場所はバイト先であるC i R C L E。俺は今、重大な任務……布教活動の一環として、目の前にいる彼を入信させようと勧誘していた。



「ストップよ。……………全く、何やってんのよ……………冬木くん」

するとスタッフである月島まりなさんに声をかけられる。

この人は俺の目上で、上司に当たる人だ。

「止めないで下さいまりなさん……………俺は今！彼にクールビューティー教の教えを説いていたんですよ！」

「……………私が頼んだのは、新人であるこの子にバイトの動きを教えることだけよ……………」

「あ、それはもう終わったんで。空いた時間を利用してクールビューティーの素晴らしさを語っていたんです。ほら空いた時間って勿体ないですよね？」

「……………はあ」

何故だろう。心なしかまりなさんがとても疲れているように見える。確かにここは何かと大変だけど……………不思議だ。一番不思議なのは俺に対して呆れている感じがすることだろうか。俺はただ、新人君をクールビューティーの素晴らしさに目覚めさせてあげようとしていただけなのに。

「冬木くん。ここでの布教活動は禁止です」

「そ、そんなあ……………じゃあ、クールビューティーの素晴らしさを語るの？」

「バイト中はダメです」

「ぐぬぬ……………分かりました。善処します……………」

「善処じゃなくて徹底して頂戴……ゴメンね……こんな人でも普段はまともだから」

失礼な。まるで今はまともじゃないって言われているみたいじゃないか。

「あ、そうだ冬木くん。急で悪いんだけど……」

「はい。何でしょう？」

「明日の夕方なんだけど……シフト入れる？」

「いいですよ。部活サボればいいんで問題なしです」

「部活サボればって……」

「ウチの部活は緩いんで。気にしないでいいですよ」

アイツらも結構自由だし。今更だから問題ない。

「すみませーん」

「じゃ、対応してきまーす」

「お願いね」

俺はやるときはやるらしい。失礼な。普段からやっていますよ。

「お疲れ様です。Roseliaのみなさん。いつも通り後はこちらにお任せください」

夜。Roseliaの皆が使った部屋の後片付けをするために訪れる。まあ、仕事だしね。

「……………お疲れ様。冬木」

一番に返事をしてくれたのはRoseliaのリーダーでボーカルの湊友希那さん。この人とは出会い方が違えば、俺はこの人を慕っていたかもしれない。……………ほんと、出会い方さえ違えば、この人はクールビューティーと言っても差し支えなかっただ

ろうに……。

結論。この人、クールビューティー、違う。

「ちゃんと働いてるんだね〜偉い偉い☆」

続いてベースのリサ姐。この人が居なくては Roselia が成り立たないと言つても過言ではない。皆の頼れる姐さんである。………ちなみにこの人がいなかった時の Roselia は相手するのがクソ大変だった。

結論。頼れるみんなの姐さん。

「……い、いつも、ありがとうございます……！」

そしてキーボード担当白金燐子さん。この人とはとあるオンラインゲームでも知り合ったが、何というか……うん。キャラが違う。まあでも、よくある話か。ゲームの世界で別の自分を作り出すというか……。

結論。リアルで話せるようになってるだけマシ。

「さすがけー兄！いい仕事っぷりだね！」

4人目、ドラム担当の宇田川あちゃん。彼女はの中で唯一歳下でまだ中学生。ちなみにこの子もりんさんと同じゲームをして………まあ、俺より遙かにりんさんとの付き合いは長い。まあ、元気一杯なのはいいが……中二病にはならないほうがいいぞ？

結論。溢れ出る妹感。

「そうだ慧人さん。この後よろしいですか？」

そ・し・て！我が女神様であるギター担当紗夜様！語り始めたら仕事にならなくなってしまうので語ることは断念させてもらう。……くつ。語りたい……！物凄く語りたい……！

と、Roseliaはこの四人の少女と一神によるバンドなのだ……と危ない。これはまたRoseliaの皆から壊れたと言われるパターンだ。壊れたとは酷い。俺は元からこうなの……。……

「この後？」

「いえ、一緒に帰りたいと思いましたが……ダメですか？」

心配そうに聞いてくる女神様。何をおっしゃっているのですか。貴女様の願いを断るわけがないじゃないですか。

「ダメなわけがないですよ。ただ、少し待っていてくれますか？もうすぐあがるので」

「はい。ではお待ちしていますね」

Roseliaの皆が部屋を出て行く……閉じられた部屋。さてと、

「紗夜さんを早く帰すためにも、丁寧かつ迅速に終わらせなければ……！」

皆覚えておくといい。女神の為なら人は人間を超えられるのだよ。

そして十数分後。俺は全ての仕事をこなした。まりなさんからも「相変わらず紗夜

ちゃんが関わると凄いわね……」と若干ひかれたが気にしない。新人君もあり得ないような目で見てきたけど気にしない。

大丈夫だ新人君。君も目覚めればこれくらい容易いから。

「行こうか」

「そうですね」

彼女は花咲川女子学園に通っている。当然ながら俺とは違う高校だ。そのためゲムという登下校イベントなるものは存在していない。だから一緒に帰るこの時間は実はかなり貴重なものだったりする。

「手繋ぎしましょうか?」

「どうしてですか?」

「紗夜さんが迷子にならないように」

「……私を何だと思っています?」

「女神」

「……………即答でしたね」

「はい。即答ですよ?」

何を当たり前なことを言ってるのだろうか? 小学校で1+1=2って習うだろ? あれと同じレベルで氷川紗夜=女神って等式は常識中の常識。義務教育を終えた皆なら

習ったはずだろうに。

「じゃあ、こうします」

すると、差し出した手をスルーして腕に抱きついてくる……ふむ。

「紗夜さん。いいですか？こういうときは『そうですか』と言つてこの手はスルーするんですよ？腕に抱きついてくるのはクールビューティーな人の選択とは思えません」

「いいじゃないですか」

「やり直しましょう。というわけで、一回腕を放してください」

「嫌です」

「放して……」

「拒否します」

………こうなると彼女は放そうとしない。……まあ仕方ない。くう………何だろう。嬉しいのだけど何か複雑な気分だ………！

「勉強はしっかりやっていますか？」

「唐突に嫌な方向へと話を変えましたね……ま、まあまあですよ」

「………本当ですか？」

「ホントホント。オレウソツカナイ」

「嘘ついたら針千本飲ませますよ？」

「おっとガチでやる気だな。……ふっ。認めましょう。成績が下がりそうでヤバいです」

いやね？バイト、部活、女。それにゲームとか……勉強の優先順位が下がるのは当たり前である。

「だと思っていました」

紗夜さんや？俺への評価が低くないですか？まあ、俺の貴女様に対する評価は天よりも高いですが。

「テストが近づいたら教えて下さい。また見てあげます」

「おおっ。マジですか？感謝感謝……っ」と

「気にしなくていいですよ。人に教えるのは自分の勉強になりますので」

「さっすが紗夜さんですね！恩に切ります！今度フライドポテト奢ります！」

「ぼ、ポテ………コホン。そうですね。みっちりしごいてあげましょう。ポテトの為に」

目を輝かせて言う紗夜さん。おっと、俺は余分なことを言ってしまったらしい。彼女の中ではもう俺にポテトをおごって貰う未来図が見えているだろう。

彼女は凄い勉強が出来る。と言っても天才ではなく典型的な努力型。彼女は何事にも熱心に努力する。理想だなんだ言ってるが凄い尊敬できる人でもある。………唯



一心配なのは、頑張りすぎて身体を壊さなきゃいいけど。

「そういや、日菜とはうまくやれてます?」

「ええ。でも、まだまだだけど」

「そりやよかった。少しでも進展してくれてるなら」

「あなたのおかげね」

「ははっ。何言ってるんだが」

俺は別に特別なことなんてしていない。普通のことしかしてないのだ。

「着きましたよ」

「そうね」

そして、彼女の住むマンションの前に。どうやら今日はここまでらしい。腕から放れる彼女。

「少しかがんでくれるかしら」

「ん?ことう?」

俺は彼女の言うとおりに、少し屈む。

「……お疲れ様」

すると頭に手を置かれて撫でられる。……………うえ?

「……………紗夜さん……………」

「あなたの頑張りは知ってるわ」

目が合うと優しく微笑んでくれる紗夜さん。

「……………あなたが聖母でしたか……………」

「……………またおかしなこと口走ってるわよ」

おつといっけね。つい声に出してた。

すると、手を放す彼女。俺はそんな彼女を抱きしめて…………

「……………紗夜さんこそ。お疲れ様です。ゆっくり休んでくださいね」

「……………ええ。そうするわ」

10秒くらいした後放す…………いや、そうしないとマジで帰れなくなりそう。お互いに。

「じゃあ、また」

「ええ。また」

そして俺は自分の家に向けて歩き出す。

その足取りは軽かった気がする。

# 女性に太ったと言っはいけない

冬木慧人。

私が慕っている男性の名だ。

私は彼との出会いを一生忘れることはないだろう。

彼とはC I R C L Eで出会った。

用事があった私はバイトである彼に声をかけた。

「すみません」

「……あなた様が女神ですか？」

「……………は？」

これが彼との最初の会話。まさか、初対面の男性にいきなりこんなこと言われるとは思ってもしなかった。

この後、正気を取り戻した(?)彼は普通に対応してくれたが……私の彼に対する最初の印象は変人の一言に尽きる。それと同時に、何故か彼からは近寄っはいけない空気を感じた。

彼は確かに変人だった。クールビューティーは尊いものだとか何とか話してきた。

何度も何度も。

正直、意味が分からない。今も意味は分かってない。

私は彼に対して素っ気なかっただろう。それどころかその頃のストレスから厳しい言葉もかけてしまっただろう。でも彼はそんな私から離れず、かと言って近づきすぎず。見守ってくれる……と言うと変かもしれないが、そんな距離感を保っていた。

その距離が一気に縮まったのは、あの出来事があったのが大きい。

私は彼のお陰で救われた。

彼はそんなことしてないと言うだろうが、私にとっては彼の言葉は……存在は大きかった。

最近、俺は気になつてることがある。

「……………紗夜さん」

「何でしょう?」

場所はファーストフード店。まあ、この前、テスト勉強見てもらう代わりに奢るつて言つちやつたし。よく考えたら週明け英語の単元テストだったから、奢るついでに勉強を見てもらおうつてなつたわけです。担任の科目だし真面目にやらんと呼び出し喰らうからなあ…………。

「質問いいですか?」

「どうぞ」

「ジャンクフードばつか食つて太らないんですか?」

「……………っ!」

一瞬で空気が凍り付いた。…………ん?誰か何かマズいこと言つたのか?

「あ、…………この問題教えてほしいんですけど…………紗夜さん?」

すると、俺のノートにフライドポテトの絵とハンバーガーの絵を書き始めて……はい？

「いいですか？このフライドポテトは100gあたり約250kcal、糖質は約30g。私はLサイズ、約170gを頼んでいますので、カロリーと糖質は？」

「……え？あ、問題ですか？」

「遅いです。カロリーは約425kcal、糖質は約51gです」

すると無駄に綺麗な絵に、その情報を書き込んでいく……待つて。それ俺が今度出すノート……まあいいか。それぐらいなら可愛いものだ。

「そしてこの一般的なハンバーガーについて。こちらは約100gでカロリーは約250kcal、糖質は約30gです。はい、このセットのカロリーと糖質は？」

「え、あー675kcalに81gです」

「及第点をあげましょう」

……え？結構早かったと思うのだけ……と、さらさらときれいな字で埋めていく。ああ……どんどん情報が……俺それ提出したら絶対に怒られる……。

「……聞いていますか？」

「す、すいません……」

「続けますよ」

いや、まだ続け……あ、すんません。何でもないっす。

「高校生女子の一日の摂取カロリーの目安を知ってますか？」

「知りません」

「個人差はありますが約2000kcalから2300kcal。私の場合はバンドで消費していますので平均よりは多めです。その分消費するので」

「は、はあ……」

「ちなみに高校生男子は約2300kcalから2700kcal。慧人さんは運動部ですので平均より多くて大丈夫です」

「あ、ありがとうございます……？」

よく分からんが何か詳しいなこの人。

「話を戻しましょう。私の摂取カロリーの目安が2400kcalだとします」

………ん？さっきあげたやつより多くね？え？平均どころか一般論超えたぞおい。

「このハンバーガーとポテトLサイズが占める割合はどれだけでしょう」

「ん？えーっと、確か二つが……」

「遅いです。約28%です」

そして何かまた書いてる……もういいや。このまま提出しよう。消すのもつたいないし。

「ここで視点を変えてみましょう。エネルギーという観点から糖質という観点へ。糖質はまず身体に摂取すると何に変わりますか？」

「糖質？えーつと、ブドウ糖か？」

「正解です。体内では消化、吸収され多くがブドウ糖という形で存在しています。ブドウ糖は血液に吸収、全身に運ばれてエネルギーとして活用されます」

何か……ついに人の絵まで書き始めた……紗夜さん。どこまで話すつもりなんですかあ……。

「いいですか？このブドウ糖というのは人間にとつとでも重要な働きをしているんです。ブドウ糖が不足していた場合、体内のエネルギーが不足して疲れやすさにつながります。さらに、糖質の不足分を補うため、タンパク質がエネルギー源として使われることにより、筋肉量が減少、基礎代謝を低下させる原因にもなります。また、ブドウ糖は脳にとつて唯一のエネルギー源というのはよく知っていると思います。もしも、糖質が不足してブドウ糖が十分に届けられなくなると、集中力の低下など脳の働きを妨げてしまい、結果私たちにとつてマイナスなのです」

「へえーブドウ糖つて大事なんですねー」

「その通りです。そして、そのブドウ糖を摂取するための糖質も大切なんです」

わあーノートにさらに言葉が加わっていくなあ……どうしょ。これ担任の英語の先



生に提出するやつなだけで……ね？英語要素が一つもねえ……。

「ここで糖質の摂取量の目安は知っていますか？」

「逆に聞きますけど知ってると思いますか？」

「デスクワークメインの成人女性が約270g、成人男性が約330gと言われてます。ポイントはデスクワークメイン。つまりほとんど運動しないと仮定した場合の数値です」

「……つまり？」

「私の場合の目安は300gなはずですよ」

何故だろう。さっきから彼女の都合のいい数字に置き換わってる気がする。

「では300gと仮定した上で、このハンバーガーとフライドポテトの持つ糖質の占める割合はどれだけですか？」

そいつらの糖質何グラムか忘れたんですけど……！！

「約27%です。しっかりとここに書いてありますよ」

「わぁー本当だぁー」

本当に……何でこんなにガチなの……

「いいですか？糖質の取り過ぎは太ります。何故なら余分なブドウ糖が脂肪に変換され、体脂肪として蓄えられてしまいますからね。エネルギーも同様です。消費カロリー

以上にカロリーを摂取してしまえば余剰分は脂肪として蓄えられてしまいます。ですが今、計算してみて分かったと思いますが、実は取り過ぎということではなく、調整しているのです」

「……はあ」

「つまり、太らないです。OK?」

……ああ、そういやそこからだったなあ……。

「オーケー?」

「……質問いいっすか?」

「どうぞ」

「……俺の分のフライドポテトも食べてましたよね?」

「それはノーカウントです」

「この前なんかおかわりしてましたよね?」

「あれは一個目と打ち消しあって実質ゼロです」

「後、食べてるハンバーガー……ただのハンバーガーじゃなくて豪華なんでもっとカロリーとかありますよね」

「それは誤差です」

「……………」

「……………」

「………実はあの計算穴だらけだったのでは？」

「……………紗夜さん……………太ったんですか？……………あの、ダイエットなら協力するんで」

「ふ、太っていません！さっきまでの説明を聞いていなかったのですか!？」

「いえ。聞いてましたが……………今、それが穴だらけの都合のいいものと分かったので」

「よろしい！ならば徹底的に話し合いましたよう！」

「あの……………俺の勉強……………」

「慧人さん。あなたがおっしゃりたいのは私が都合のいい数字ばかり……………言わば理想の値で話していて実数値で話してないってことですね」

「……………俺の……………テスト……………」

「ではここから正確に行きましょう。ここでの摂取カロリー以外にも朝食などを踏まえた摂取カロリー。それに加え普段の消費カロリーなどを詳細かつ綿密に計算して……………聞いてますか？」

「……………あい……………」

「この後、氷川紗夜先生による『私は太ってないことを理論的に証明してみる』の授業は、数時間に渡って続いた。」

単元テスト返却の日の放課後。俺は担任に呼び出された。

「冬木。この前提出してきたノートだが……」

「はい。何でしょうか」

「お前……この見開き数ページ渡るこれはなんだ？」

「……………神様の努力の結晶です」

「……まあ……何だ。俺も鬼じゃないから怒る気もないが……」

「先生……！」

「……全部英訳してもう一回提出な」

「ちくしよおおおおおおおおおおおおおおおおおつ！」

ちなみに単元テストの結果はそこそこ良かったです。

# それは捕まったら終わりの鬼ごっこ

それは何の変哲もない日常に訪れた最悪だった。

「花音っ！振り落とされんじゃねえぞ！」

「ふええ！な、なんでこんなことに……」

「……………俺と出会ったからだな」

「ふええ！」

なんてことのないはずの平日の放課後。俺は花音を背負って走っていた。

『待てやコラアッ！』

『テメエ許さねえぞ！』

『そこに首を置いていけ冬木いつ！』

迫り来る狂気から逃げる為に。

何故こんなことになってしまったのか……それは少し時間を戻す必要がある。

「相変わらず……ウチの部活の走る量えげつねえよな……他から見れば」

虎南こなん高校。

俺、冬木慧人が在籍している高校である。

うちの高校は普通科しかないが、男女比脅威の9：1。推測の域を出ないが、大抵の女子は近くにある花咲川女子学園と羽丘女子学園とかに通うため、まず女子が少ない。そして割と近場に女子校がある影響か、よく分からん阿呆な男子が多くなる。きつと女子校の近くだから、女子校の生徒とお近づきになれるとでも思ったのだろう。後は元は男子校説もあるが……少なくともここが男子校だった話を聞いたことがない。

色々合わさった結果、この奇跡的な比率が生まれることになったのだろう。

俺が所属するのはこのサッカー部。ウチは強豪校ではない。強さで言うなら中の下と言ったところだ。まあ、『目指せ全国!』というより『楽しんでやろう!』って感じだから部活の空気は軽め。……そうでなければ俺も入ってないし部活なんてとてもサボれないだろう。というか、バイトしている暇があるとは思えない。

長い歴史を見ても我がサッカー部は他の部活に比べて、阿呆であった。先代部長が『ランニングコースに花咲川と羽丘の近場を取り入れれば合法的に女子たちを見られるんじゃない?』という阿呆な発想がなんと代々受け継がれているのだ。当然、俺たちの世代も例外ではない。

では、そのランニングコースを軽く紹介するが、まずは虎南から花咲川付近まで全力ダッシュ。花咲川が近づいてきた辺りから少しペースダウンしつつ羽丘まで。そして羽丘付近から虎南までダッシュする。トータル10km以上の道のりを走るコースである。

走るタイミングは大きく4回ある。まず、放課後部活開始直後。ここで走る理由は単純である。帰宅部の下校時刻と被らせるためである。次は、他の部活が終わる頃を見計らって行う。何故か?部活終わりの女子を見るためである。そして夜、部活終わりにも行。そのときは、<sup>パトロール</sup>巡回って名目だ。曰く、夜に困ってる女の子が居たらラノベ展開が



待つてるとのこと。……まあ、時間を一歩間違えると補導されかねないからこは注意が必要だ。後は、朝練の途中にもこのランニングコースを走るため、朝練と放課後の練習が両方ある日は一日トータル40km以上は走る計算だ。

しかも最近は何森女子学園の近くにも寄っていくルートにしよう!と言い始め今検討中。もしそれが実現すればさらに走る道のりは長くなる。我らが部長の決断が未来永劫残ると思うと重要な気もしなくもない。

と、現時点でもはつきり言つて鬼畜だろう。しかし、こんな鬼畜の所業にウチの部活のメンバーは誰も弱音を吐くことはない。何故か?

『やっぱり女子たちは癒しを与えてくれるな……!』

『へばつてる所は見せられないぜ!』

『行くぞお前ら!』

『おうー!』

阿呆だからである。阿呆の集まりだからである。

普段女子との接点が皆無な彼らにとつては、このランニング中に見る女子が癒しと言つても過言ではないのだ。

ちなみに『虎南高校サッカー部のランニング』は、この地域では有名なものである。一部の物好きな女子なんかはこれを見ることが楽しみだそう(CIRCLEに来てい

ンドメンバー情報より)。だからかは分からないが、時々、声援を送ってくる女子たちも居るのだ。決して勘違いしてはいけないのが、俺たちがイケメンの集団とかモテてる組の集団だからではない、と言ったところか。歴代の部員の中には、応援されてる〓自分のことが好きだ、と勘違いし玉砕した者も少なくない。

後はC i R C L Eに来る奴らから俺の目撃情報を得ることがある。やめてくれ。わざわざ報告しなくていいから。君たちの言い方は傷つくことが多いから。

でもまあ我が部員を阿呆だ阿呆だ言っているが、俺自身彼らの気持ちも分からないわけではない。エンカウント率はかなり低いが、紗夜さんをこのランニング中に見た時なんか、疲れなんか全部吹っ飛ぶからな。……あれ？実は俺も阿呆の仲間入り？

とそんなハードなランニングも1周をもうすぐ終え、花のない虎南高校へとたどり着くと言ったところで、

「ふええ……」

何か見覚えのある、青髪が見えた。

「(トト)は……(トト)は……」

またか。またなのか。……仕方ない。声でもかけるか。そう思い一人減速して最後尾へ。そして……

「……お……」

「ふええー！」

少女——ハロー、ハッピーワールド！に所属する松原花音へと声をかける。

松原花音。上記のバンドでドラムを担当する。方向音痴である。で、彼女のバンドのリーダーがちよつとアレなやつのためよく巻き込まれているのを見かける。

ちなみに彼女は紗夜さんと同じ高校で学年も一緒。つまり俺とも同じ学年である。

「あ、ふ、冬木さん……」

「そうだけど……何だ？また迷ったのか？」

「そうなんです……」

「今日の予定は？」

「こころちやんたちとバンドの練習を……」

なるほどな……。そう思い俺は電話をかける。その相手は数コールしないうちに出た。

『慧人？あなたからかけてくるなんて珍しいわね！』

「だろ。うな。で、こころ。花音を保護……というか見つけたんだが」

『おおっ！あたしたちは丁度花音を探しに行こうとしていたのよ！』

「そうかよ……で、どこに連れて行けばいい」

『CiRCLE！』

簡単に言いやがった……地味にここから遠いんだけど……はあ。どうせ花音一人じゃ迷うのがオチか。

「りよーかい。なるべく早く届ける」

『待つてるわよ!』

切れる電話。………と、ふと思ったがこの場所伝えるからお前の黒服さんたち使えよ。疲れるから。いや、もう疲れているから。………ただ、今届ける宣言して直後に頼るのは違うだろうな………。

「よし、行くぞ花音」

「あ、ありがとうございます………」

ということとで目的地をC i R C L Eに変更したその時だった。何やら視線を感じたので振り返って見ると、ウチのサッカー部の集団がこっちを見ていた。その目はどこか嫉妬とか羨望を含んだ感じで………なるほど。

「悪い花音………乗れ」

俺は彼女の前でしゃがみ込み背中に乗るようにさせる。

「え?え?」

「いいから。早くしてくれ」

「………は、はい!」

乗ってくる……ははっ。花音は軽い部類だと思うが……それでも流石にさつきまで走っていた身体にはこたえるなあ……！だが弱音吐いてる場合じゃねえ……！

「逃げるぞ！しっかり掴まれよ！」

乗ったのを確認したのと同時に全力ダツシユ。

『『待てやコラアアアッ！』』』

背後のサッカー部阿呆連中も全力ダツシユ。

そして場面は冒頭に戻るのだった。

何故追いかけてられているか？ 悲しいことに、現サツカー部を構成している9割くらいの人間は俗に言う『リア充爆発しろ勢』なのだ。つまり、一人部活をサボり美少女を助けようなんて許すわけないって話だ。………心の狭い奴らめ。何も言わずに立ち去れば格好いい（多分）のに。

「クソツタレ！ 何で振り切れねえんだよ！」

『クソが！ 何で追いつけねえんだよ！』

俺と追いかけてる奴らがほぼ同時に同じ意味のことを言う。

いやいや、それはこっちの台詞だわ。お前らさつきまでクソほど走ってただろうが！ 何でそんな体力あるんだよ！ ぶぎけんなよおい！ さつきから距離が全然開かねえからこう見えて焦ってんだよ！

「な、何で背負いながらそんな速く走れるんですかあ……」

「そんなことより花音……お前こころの無茶ぶりに慣れてるよな？」

「ふえ？ な、なれてるといふか……」

「ちよつとアイツら振り切るために本気出すわ」

「ふえ？」

更にギアを上げていく。心なしか掴まれる力が強くなるがまあいい。もう後先考えてる場合じゃねえ。今はひたすらC i R C L Eに向かいながら逃げるだけだ。

花咲川の近くまで行くとまばらではあるが下校中の生徒たちがいる。何人かの生徒がこちらを見ているが周りの目なんて気にしてられねえ。そいつらを全員避けながらそのまま商店街のほうまで駆けていく。

『キャプテン！冬木先輩商店街に向かってます！』

『構わん！あの野郎を引つ捕らえるぞ！』

いや構え？構えよおい。

と後ろから阿呆な事を言ってるのも、さつき知ってる顔を見た気もしなくないがそんなことはどうでもいい。商店街まで入ればこっちのもんだ。人混みを利用して俺の居場所を特定させない。そして奴らがその人ごみで俺を見失ったところで、C i R C L E に向け全力ダッシュ。単純だがアイツらは俺の目的地を知らない以上効果はある。

「……………はあ……………はあ……………着いた……………」

「ふええ……………」

「わりい……………降ろすわ」

追っ手を振り切り何とかゴールイン。花音を無事届けることに成功した。

ヤバイ花音を降ろしたと同時に物凄く疲れが押し寄せてきて……………。

「おお……思ったより早かったわね！」

「……………」

「……冬木先輩……生きてる？」

「……………」

「夢いね」

「……………」

「体力ないねーけーくん」

「……………」

「……花音さん。冬木先輩何があつたの？」

「えっと、冬木さんに背負われながら追い掛けられて……」

「何それ面白そう！」

「この格好……冬木先輩。まさか部活中だったんじゃ……」

美咲。それ正解。そして……。俺は面白くない。

「……………」わりい。奥で休む」

部活？なんだそれ？俺知らねえわ。

「あ、え、えっと……ありがとうございました！」

「おう……気にすんな……」



その笑顔が見れただけよしとしよう……疲れた。そして決めた。もっと体力をつけよう……と。

「……今井さん。一つ聞いてもいいですか？」

「ん？何かあったの？」

「いえ。先ほど松原さんを背負った慧人さんが全力疾走し、その後ろを男性の集団が追

い掛ける姿を目撃したのですが」

(……え? どういう状況なのかすごい気になるんだけど)

「何故かそれを見てから心の中がモヤモヤするとか……」

「ははくん。それは嫉妬ってやつですよ」

「嫉妬……ですか?」

「そうそう☆」

「なるほど……では私も、乗せてもらえるよう頼んでみますね」

(あ、そっちなんだ。花音に対してじゃなくて、その乗せてもらう行為に対してなんだ)

## 腹黒そうな人と会うときは気を付けろ

それは花音をおんぶして爆走した翌日のことだった。

「残念だよ。冬木」

「何が残念だよ。キャプテン」

「どうやら俺たちは、お前を消さなければならぬらしい」

朝……朝は基本毎日朝練があるので参加している。

あの後には結局、学校に戻る気がなかったのも、黒服さんと部活の（数少ないまともな方の）友人たちに頼んで荷物は回収させてもらった。ありがとう。本当にありがとう。

で、朝練に行くとは何故か囲まれた。周りには同じ部活の仲間たちが目を光らせている。

「昨日の件……と言えば分かるか？」

昨日はあの後、極一部のまともなメンバーは予定通りここに戻ってきたが、花音を乗せて逃走した俺、並びに俺を追いかけてきたキャプテンたち大勢は部活時間中は帰ってこなかったという。……え？お前ら、あの後結局何時まで探してたの？まさか昨日は帰ってないとか言わないよな？

顧問には、今日は走り込みの日ですと言ったらオツケーだったらしい。まあ、うちの顧問甘いし掛け持ちだししょうがないね。だって、今もいねえし。

「まあ待て。話せばわかる。俺は決して疾しい気持ちがあつたわけじゃないんだ」

「疾しい気持ちがないなら逃げる必要はなかっただろう」

……確かに正論だ。正論ではあるがそれは違うだろう。

「……どうすれば解放される?」

「話が早いじゃないか。身の潔白を示してみせろ」

「……身の潔白……だと?」

「ああ。お前がお礼と称してあの女子から何か誘われていないか、何も無いことを示してみせろ」

……なるほどな。ふっ。甘いなキャプテン。お前の考えなど手に取るように分かっていた。故に、花音には、そういうのはやらないでとお願いし、その場で完結させておいた。しかも彼女は俺の頼んだ通りLONEでもそう言うのは送ってこなかった。ありがとう花音。恩に着る。

俺は勝利を確信した。

「生憎示せるのはLONEぐらいしかねえが……それでもいいか?」

「構わん。見せろ」

「ほらよ」

こいつらにスマホを渡す。万が一こいつらが変なものを送っても、問題ないようにはしているが……

「ふむ。分かった。今回は潔白だと信じよう」

……なるほど。そこは義理堅いようだ。

「ありがとな」

キャプテンから俺にスマホが渡るその時だった。

ピロリン♪

誰かのスマホが鳴った。誰のだろう？俺のである。

「……おい冬木。千聖って人からLONEが来てるぞ………女か？」

こいつらの残念なところ。女からのLONEに敏感なのである。

ま、まあ？あの千聖さんだし？そんなね？こいつらの導火線に触れるようなLONEは送ってこないだろう。

『本日17時。CIRCLEのカフェで話があるわ』

「……………」

「……………」

千聖……！送るタイミグ最悪……！

「……………サヨナラー」

「「逃がすなああつ！」」

畜生！話って何だよ！というか何で今のタイミグで送ってくるんだよお  
おおおおつ！

とりあえず今日の部活は急用が出来たから欠席だな。うん。

「あら？待たせたかしら」

時間は16時55分。約束の時間の五分前に来るとはさすがというか何というか。

「いいや。俺もさつき来たところですよ」

「そう？」

と、向かい側の席に腰掛ける。

白鷺千聖。アイドルバンド、Pastel\*Palettesでベースを担当する少女。また幼い頃から子役として活躍してきた女優でもある。言ってしまうと芸能人であり有名人であるのだ。

で、そんな彼女の印象だが……腹黒か？だから普通の人なら女子から……しかもアイドルから話があると言われたらウキウキで来るだろうが、俺は最初から警戒しかしていない。……なら拒否しろよって話だが、拒否できる気がしない。

とりあえず、やって来た千聖が荷物を置いて、注文を済ませる。

「で？話って何ですか？」

「……聞くけど慧人。あなた昨日何したの？」

「……………プライバシー保護のため黙秘権を行使します」

「そう」

すると何やら文章を打つ千聖。何だろう。とても嫌な予感がする。

「もし、真実を話さないのであればこの文章を送ります」

「えーっと？」

相手は……紗夜さんだな。で？

『今、慧人に言い寄られています』

「……すみません。それ送られると誤解が誤解を生むのでやめてください」

「紗夜ちゃん怒るでしょうね……何故とは言わないけど」

「……話しますから……話させて頂きますから……！」

畜生……この人やっぱ敵に回したくねえ……！

「と言っても、昨日は花音をおんぶしてC i R C L Eに連れてっただけですよ？」

「ええ。でも不思議なことに『花音を背負った人とそれを追い掛ける虎南高校サッカー部の大軍』ってことから、花音が誘拐されたとかそのままホテルにとか色んな話が飛び交ってたわよ」

「……………」

涙が止まらねえ……俺は善意でやっただけなのに。後俺もサッカー部の一員です……。

「まあ、あなたが花音に手を出した、とは思わないけど」

「ははっ。手を出したって言ったらどうします？」



「ふふっ。そんなの決まってるじゃない」

すると笑顔でフォークを手に取り、注文して届いたパンケーキにぐさり……お、おう。なるほど。

「……すみません。冗談です」

「ええ。気をつけてくださいね。ただ、私もあなたの紗夜ちゃんに対する姿勢は知っています。だから、もしそのようなことがあれば……私一人ではすまなかったでしょうね？」

「……重々承知しております……」

……威圧感がね？ここうね？あるね？……俺、この人は多分一番怒らせちゃいけないと思う。

「……まさかそれを確認するために呼び出したと？」

「まあ、それもあるわね」

「……呼び出すタイミングを考えてください……！」

「あら？マズかったかしら」

「マズかったですよ!?!そのせいで朝っぱらからまた逃走劇を繰り広げてたんですからね！」

「それはそれは。お疲れ様」

「あ、どうもです……じゃねえ！誰のせいだと?！」

「そうね。昨日の件を大事にしたあなたにも非がある」

「ぐぬぬ……!」

優雅に紅茶を飲む彼女。学生服なはずなのに絵になるのはさすがというか何というか。

こ、この女……!……!……!はあ。まあいいか。過ぎたことはしょうがない。コイツのおかげで走る長さ、時間は倍以上になったが遅刻はしなかった。それは感謝だな。ん?感謝なのか?!

「いいや。そんな細かいこと……?他には?」

「あなた先日、紗夜ちゃんに太ったと言ったそうね」

「……どこからそれを……!」

「お忘れ?あなたがよく利用するファストフード店……そこに誰がいるか?そこに誰がいるかだと?確かバイトで……」

「花音と彩じゃねえか……!」

「正解よ」

「そういやあの日注文するときに居たわ話したわ。」

「あなたが私をどう思っているかは分かりませ——」

「腹黒魔王」

「——分かりましたが、私の情報収集力を舐めないでくださいね」

俺はこの人を一番怒らせてはいけなと思うてる。だから怒らせよう。

……いやね？あるじゃん。押すな！と言われると押したくなるあれ。あれと一緒に。

「……いい？紗夜ちゃんだから長々と自分が太つてないことの証明ですんだのよ？普通の女性はああは行かないわ。肝に銘じておきなさい」

「へえー千聖の場合は？」

「ふふつ。そんなの笑顔で否定して受け流すだけよ」

「へえー俺相手でも？」

「そんなわけないじゃない。あなた相手ならそんな世迷い言を言う愚かさを身体に刻み込んであげるわよ。それも徹底的に」

「もしかして、特別扱いですか？」

「ええ。もちろんよ」

笑顔で話す俺たち。お互いに目の奥は笑っていないかった。

やっぱりこの人、絶対俺のこと嫌いだ。

「ここからはちよつとした雑談なんだけど。付き合って」

「構わないですよ。どーせ、そのつもりですし」

よく見ると周りにはほとんど人がいない。なるほど。丁寧な話し方をしていたのはそれで、か。

とまあ、1, 2時間程、彼女の雑談という名の愚痴に付き合う。まあ、呼び出し喰らったときはいつもこんな感じだから今更だけど。

「じゃあ、この辺で」

「ええ。では」

会計を済ませてさつきと別れる。ドライと言われるかもしれないが、別に普通だと思ってる。

別れるときには既に暗くなっていた。夏も終わり段々と日の入りが早くなるのか……。

「……つと」

そういや一つだけ言うの忘れてた。まあ、言わなくてもいいんだが………はあ。

「まだその辺にいるだろ」

進む向きを変え、彼女の進んだ方へと走って行く。

『なあなあ。オレらと遊ばねえか?』

『いえ。結構です』

『そんな連れねえこと言わずにさあ』

『すみません。急いでますので』

すると走ってつた方向から二人分の男の声と、さつきまでいた千聖の会話が聞こえる。日も落ちて暗くなった道。ここは繁華街みたいなどころではなく、人通りはない。よく見ると千聖が大学生くらいの二人に絡まれている。

あーあれか。これが歴代のサッカー部の勇者阿呆が言ってた、『夜に困ってる女子が居たらラノベ展開』つてやつか。……まあ、アイツならそれくらい一人で対処できそうだが……

『ちよつとくらいいいじゃねえ……』

「おい」

千聖の肩を掴もうとした男の手首を掴む。さすがに千聖と言えども手を出されたら敵うとは思えん。それに、そんな様子をただ見ているほどの無能に成り果てたつもりはねえ。

『ああ？何だテメエ』

その男の吐息からは……うつわ酒臭っ！な、なるほど。酔ってんのかこいつら……心なしか顔も赤いし。そりゃ酔ってなきや制服を着た学生に声をかけるとも思えんか。

「わりいな兄ちゃんたち。……生憎コイツは俺の彼女レなんでね……今なら酔い醒ましに一撃喰らわせることで許してやるが？」

『デメエ……調子に乗ってんじゃねえぞ!』

振り下ろされる拳。どうやら思考回路が正常に働いてないらしいな。

「決裂……か」

拳に蹴りを合わせて弾き飛ばす。たく、話が通じねえか。めんどくせえ。

「悪い千聖」

「え?ちよつ……きやつ!」

「しつかり捕まってるよ!」

そして、素早く彼女の膝裏に腕を回しそのまま背中をもう片方の腕で支える。咄嗟のことではあったが、彼女は素早く首のところに手を回してくれる。そういう役でも演じたことがあるのか?いや、違うな。落ちないように首にしがみつこうとしただけだ。

捕まってることを確認して逃げ出す。はあ?戦わないのかって?いや、酔っ払いども相手だぜ?逃げる方が楽に決まってるんだろ。サッカー部連中に比べりゃあんなの雑魚と変わらん。

「そ、そろそろ下ろしてくれるかしら？」

「ん？このまま家まで送ってつても……つて、分かった分かった。分かったからカバンを肩に当ててくるな」

要望通り降ろすが……だがまあ簡単に撒けたな。現役運動部舐めんじゃねえぞ。酔っ払いに負けるほど柔な鍛え方されてねえんだぞ。

「助かったわ。ありがとう」

「……素直に礼を言われると調子狂うな」

「こういうときは素直に受け取りなさい」

「はいはい」

だつて……あなたが素直にお礼を言った記憶が意外と少なく……いやそれでもねえか。ツンデレじゃあるまいし。

「……でも慧人。あなた何故？まさかストーカー？ごめんなさい。あなたがストーカーなら通報しなくては」

「思えば上がりも大概にしておけ。誰が好き好んでお前をストッキングするんだ」

「嫌よ嫌よも好きのうち」

「ふざけるな」

「……で？本当に何故あの場所に？あなたの帰る方向とは違うわよ」

「ああ……お前に言い忘れてたことがあつてな」

「言い忘れてたこと？」

……はあ。多分バカなんだろうな……俺つて。

「無理すんなよ。愚痴ぐらいならいくらでも付き合つてやるからな」

だつて、自分で自分の首を絞めに行つてゐるのだから。

「……………ふふつ。やっぱり、あなた面白いわ」

「うるせえ。紗夜さんと同じで平然と無理しそうだからな」



「……そうね。心配してくれてありがとう」

「じゃあな。後は一人で大丈夫だろ」

「ええ。もう目と鼻の先よ」

俺は踵を返して歩み出す。

「気をつけて帰りなさいよ」

「へいへい」

片手を挙げてさっさと帰る。

「……………はあ。彼は優しすぎるのよ……………アレさえなければモテたでしょうに……………だから」

——だから紗夜ちゃんは好きになったのね。彼のことを。早く告白しなさいよバカ。

帰り道。千聖からのLONEで『ちなみにあなたの彼女になった覚えはありません』と来たので俺も『お前を彼女にした覚えはない』と返しておいた。

後日、虎南高校のサッカー部の生徒がナンパから女子生徒を救った、とウチの高校や近所で有名になり、サッカー部が見回りという名目で夜のランニング距離が長くなったことを記す。

ぼて?ポテポテ!

それはある日のことだった。

「皆さん……」

練習終わりの Rose lia と清掃に来た俺の前で、紗夜さんが何かを決心したような顔をしていた。

「……私、氷川紗夜は本日よりフライドポテトを食すことを禁止したいと思います」  
「な、何だつてええっ!?!」

その発言はこの部屋を震撼させるものだった。

「つて驚きすぎです!今井さんに慧人さん!」

「い、いやいやいや!あの紗夜がポテトを禁止するんだよ!?!」

「そ、そうですよ!驚くに決まってんじゃないですか!?!」

「友希那も驚いたよね!?!」

「………あまりの衝撃に言葉が出なかった」

「りんさんにあこちゃんも!」

「えと………な、何か悪いものでも食べましたか?」

「ど、どうしたの……?」

友希那さんはわずかではあるが動揺して震えているし、目に見えてりんさんとあこちゃんも心配している。

「リサ姐……ど、どうする?ここは110番した方がいいか?」

「そ、それを言うなら119番だよ慧人くん!」

ちなみに俺とリサ姐もガチで動揺している。スマホの操作が覚束ない。だ、ダメだ……!電話番号が……たった三桁が押せない……!

「皆さん。動揺しすぎです。私を何だと思っているんですか?」

「ポテ狂」

「ポテトがないと死んじゃう」

「………ポテト」

「ポテトがないと禁断症状が……」

「ほ、ポテト?」

「待つてください。何で湊さんと宇田川さんはポテトそのもの何ですか?今井さんと白金さんは何でポテトがないと生きていけないみたいに言うんですか?そして慧人さん。いつものあなたならここで女神と即答すると思うのですが……」

「いや、それもどうかと思うんですけど……」

「……ポテトの女神?略してポテ神?」

「いい加減ポテトから離れてください!」

床を足でどーん!……どうやらかなり怒ってるようだ。

いやいやいや。でも、あの紗夜さんだよ?あの紗夜さんがポテトを禁止するんだよ?

「……日菜なら原因知ってるか?」

「……原因もだけど直さないことには……」

「もういいです。私は確かに宣言しましたからね」

そうして出て行く紗夜さん。その様子はどこか怒ったように見える。

「……ねえ。誰か怒らせた?」

「ううん。思い当たる節がないよ」

「…………演奏もいつも通りだった」

「が、学校でも変わった様子はなかったです……」

「えと、えーつと……」

五人で考え込む。しかし、誰にも思い当たる節がない。

「とりあえず慧人くんのせいで」

「分かった。俺のせいということ違って違う!今回は俺は思い当たる節がねえぞ!」

「…………大丈夫。分かってる」

「いいや。友希那さんのそれは分かってないやつだ」

「け、けいさん！ 私たちも力を貸しますから……ね？」

「え？ もう俺が悪い流れなの？ 酷くない？ 早くない？」

「けー兄！ とにかく紗夜さんに謝って！」

「あこちゃんもかあ……！」

結局、原因は分からずじまいだった。

こうして紗夜さんのポテト禁止生活が幕を開けるのだった。

ポテト禁止生活一日目。

「お疲れ様です」

特に異常なし。

ポテト禁止生活三日目。

「ほ……お疲れ様です」

特に異常なし。

ポテト禁止生活六日目。

「ほて……お疲れ様」

少しやつれてきているように見えるが特に異常なし。

ポテト禁止生活七日目。

「ほてと……お疲れ様」

ほてとが出てきたけど特に異常なし。

ポテト禁止生活十日目。

「ぼて……ぼてぼて」

人語が、消えた。



ポテト禁止生活十一日目。

「はい。Roseliaマイナス紗夜プラス慧人くん。しゅーごー」

リサ姐の号令の下、俺たちは囲うようにして立って話し込む。

「ライトOFFにしよう」

そして何故か電気を切り、照らす光は丁度足下の位置にあるスマホからの光のみ。

よく分からんスタイルだが突っ込んでる場合じゃない。というか目が悪くなりそうだなあ……。

「もう末期よ。あれは……」

「辛辣ですね。……俺もそう思います」

先ほどまでの彼女は酷かった。その目はどこか虚空を見つめ、何もないところに向かってポテトと言っていた。ポテトと言いながら微笑む彼女はともではないが見ていられなかった。

「もう限界ですよ……。氷川さん、学校でも唐突にポテトって単語が飛び出るように……」

それはガチで終わってる。もう末期だろう。

「このままじゃ紗夜さんが闇の世界の下僕になっちゃう」

「闇の世界というかポテトの世界だよね……」

「……………ポテトワールドの番人？」

「どちらかというとき長では…………？」

「いいえ。女神です（キリッ）」

「あーうん。そだねー」

「ゴッド・ポテト？」

「それだあこちゃん！」

「……………おいしそうな響き」

「あの……………多分本筋からズレてます…………」

おっとそうだった。戻らないといけないな。

「ぼて？ぼてぼて？」

「……………ごめん紗夜。出来ればアタシたちにも分かるような言語で話してくれるかな？」

「『皆さん？何を話してるの？』と言ってますりサ姐」

「ぼてー！」

「『その通りよ！』だって」

「分かるの!？」

「ええ。まあ」

だからぶつちやけるなら俺自身。このままの状態でもこの人との意思疎通は問題な

い。ただ……まあ、このままじゃダメだろう。それくらいは分かる。それくらいは分かるんだが……!

「……………で?結局どうするの?」

「何か今の紗夜さんって可愛いですよね(諦め)」

「……………冬木。静かに」

「……………はい」

くつ、さつきから脳内先輩がこつちにおいてくつってポンコツキュート教に鞍替えさせようとしている。…………た、確かに今の紗夜さんはキュートではある。あるんだが…………ダメだ…………俺が求めているのはクールビューティーな紗夜さんなんだ。ええい!邪念め!俺の中から消え去れえつ!

「そういえばこのポテト病の原因は分かったの?」

最早不治の病みたいだな。ポテト病。だって人語がしゃべれなくなるんだろ?やばいなあーうん。

「あー…………ヒナに聞いたらね。何でも体重計に乗ったことでポテト禁止を言い始めたらしいよ」

「「……………っ!」」

「……………?」

体重計、この言葉に反応を見せる女性陣。だが、俺にはイマイチピンとこなかった。「で、ここだけの話なんだけど……」

そう言つて声を落とすリサ姐。その言葉を聞くために自然と俺たちも静かにリサ姐を注目する。

「紗夜……前に誰かさんに太つたと言われたらしいの」

「へえ、そんな失礼なこと言うやつもいるんですね……」

……ん？あれ？ちよつと待て。………あ。

「……じゃあ、俺はこれで。（心の中では）バイト中ですので——」

「待つて慧人くん」

とてもではないがリサ姐が出したとは思えない低い声。

「正座☆」

「——は、」

逆らえずに正座する俺。心なしか女性陣の俺を見る目がいつもより冷たい。後ライトが下から照らされて怖い。

「ヒナから聞いたけど……慧人くん。心当たりはありますか？」

「心当たりしかありません……せ！」

畜生……誰だ日菜に教えたやつ……。知られなかつたらよかつたものを……。

「最低ね」

「あ、あの音楽と猫以外は無頓着な友希那さんに言われるとは……!」

「は、反省してくださいっ!」

「ごめんなさい。心の底からごめんなさい」

「紗夜さんを返して!あこたちの紗夜さんを返してよ!」

「いや……その……はい。頑張ります……!」

「……(ジー)」

やべえ……女子四人からジト目で見られている……。

ふう……落ち着け。こうなつては仕方ない。この手は使いたくなかったが……。

「紗夜さん」

「ぼて?」

「俺の家に行きましょう。今から」

## ぼてぼて降臨

C i R C L EでのR o s e l i a式(？)会議も終えて、現在。

「わーここが慧人くんの部屋かぁー」

「……………思ってたより綺麗ね」

「ぼてぼて」

「えと、おじやまします……………」

「初めて入ったよ！」

R o s e l i aの女子五人が俺の家にやって来て、今俺の部屋に勢揃いしている。

おかしい。俺が招いたのは紗夜さんだけのはず……………なのに何で、皆で行こーっ！的な感じになったのだろうか？

「慧人くんの部屋だから壁一面にクールビューティーな人の写真が貼ってあるかと思っ  
た」

「ぼてぼて」

「……………紗夜もそれは分かるって」

「私も今のは分かりました……………」

「段々と通じるようになってきた！」

それは偏見が過ぎるけど……もういいや。日頃の行いってやつだな！

「とりあえず皆さん。ここに居てください。トイレの位置は先ほどお伝えした通りです」

「「はい」」

「ぼてー」

……はあ。まあいいか。

「さてと……作るか」

じやがいもは既にも買ってあるし家にもストックがあつた分も使っていく。

「……………フライドポテトを」

取りあえず色々な種類作ろうとは思うが……心配だ。女子が自分の部屋に五人……何もなかったらいいけど。

で、そんなこんなで一時間ほど何種類かのフライドポテトが完成した。え？料理工程は？いや、男が一人で淡々と作ってるところとか需要ねえだろ。

「うーっす。出来たぞ……何してたの？君たち」

二階にある自分の部屋に入ると、何だかものの配置が少し変わっていた。

「……………エロ本を探していた」

「あーそういうこと」

よくもまあ包み隠さず言ったなこの人。普通ごまかすかはぐらかすだろうに。

「生憎、探してもないですよ」

「ええっ!? 慧人くんって本当に健全な男子高校生!？」

「待て待て。それは健全な男子高校生を誤解している」

「ほてほてほて……ほてほて?」

「『もしかしなくとも……頭おかしい?』だって? オイコラ表出る」

「だ、ダメだとは思ったんですけど……」

「興味には逆らえなかったと」

「あ、でも代わりにこれ見つけたよー!」

「えーつとそのノートは……あ」

そ、それは……!

「な、中身は……?」

「難しくてよくわかんなかった!」

「………一体何なの? あれは」

「………秘密です」

そっほを向く俺。するとりんさんが肩に手を置いてくる。



「やつぱり仲間ですわね！ 私たち！」

振り向くとそこには今まで以上に目を輝かせた彼女が……あ、はい。そうっすね。

いやね？ 一時期ゲームをガチでやっていたわけですよ。で、ゲームのイベントとか、どんなに頑張っても実装されてすぐには攻略情報があがらない訳ですよ。だからどういのが最適か、全部ノートに書いて実践して修正して……って繰り返ししてたわけなんです。多分だけど、ある種の黒歴史です。いやもう……ほんと……仲間が居るとは思わなかったのが正直なところですよ。ちなみに俺のやるゲームはオンラインゲームだけにとどまってるから全体的に見るとりんさんには勝てそうにないのが本音です。

最近はやるとしてもルーズリーフとかそういう系にやってるけど、昔はノートにまとめてたんですよ……だから。

「そんな同志を見る目で見ないで……」

「いいえ。もう知ってしまった以上、赤の他人とは思えません！」

よく分からない間にりんさんとの距離が今まで以上にぐつと縮まった気がする。チヨロいのか？ 実はチヨロいのか？

ちなみにリサ姐と紗夜さんもよく分からないって顔をしていた。やめて。寧ろ何でこの人読めたの？ 他人から見たら暗号とかにしか見えないはずなんだけど？

「それよりいい匂いがするね☆」

「気付きましたか。では降りてきてください」

俺が先導して、リビングへ。その机の上には……

「ぼ、ぼてぼて……!」

ポテト、ポテト、ポテトである。

「え? 誰が作ったの?」

「俺ですよ。こう見えて料理するのは好きなんです」

得意……と言えるかは分からないが好きではある。

「……………意外ね」

「よく言われます。さ、手を洗って召し上がれ」

「わーい!」

手を洗ってくる五人。そして各々が低いテーブルの近くに腰掛ける。

「じゃ、いただきます」

「「いただきます」」

四人が一斉に食べ始める。

「……………おいしい」

「うん」

「我が舌を……………!」

「唸らせる」

「唸らせるとはなかなかなもの……おいしいねこれ！」

「すごいです……」

評価は上々つてどこか。さて、

「紗夜さん。食べないんですか？」

「わ、私は……遠慮するわ……」

ポテトを前に人語に戻ったが……まあいいか。

「そうですか。あ、飲み物はあるんで言ってくください」

「ご、ごめんなさい……」

ポテトを眺め、とても物欲しそうにする紗夜さん。そのせいか残りの四人も段々と遠慮がちになる。

俺はキッチンのところへ向かう。仕方ない。最終手段発動だ。

『さよちゃんさよちゃん』

「………つ!!」

『わたし、ぼてどのようせいなの。さよちゃんはぼてとたべないの?おいしいよ』

「ぐっ………!だ、ダメなの……!わ、私は………!私はっ………!」

『うわあ………闇堕ちしまいと耐えてる主人公みてえな反応だな………じゃなかった。コホ

ン。さよちゃんさよちゃん。たべないの？さめちゃうよ？ぼてとがかわいそうだよ？」  
「あああああつ！語りかけないで！私に語りかけてこないで！」

両手を頭につけて、ヒステリックに叫ぶ紗夜さん。嘘だろ……苦肉の策にもほどがあると思つたのに効果覷面かよ。

「……………私たちは何を見せられてるの？」

「んー何だろうね？」

「凄いなー！ぼてとの妖精って本当にいるんだね！」

「あーちゃん……あれはね」

そりゃあ正気な四人からすれば珍妙な光景だよな。

『さよちゃん！わたしはね。とつてもおいしそうにポテトをたべるさよちゃんがだいすきなわ！』

「やめてっ！もうこれ以上はやめてっ!!」

『……………どうして？』

「……………私は……………ポテトが好きなの」

おっと、何か語り始めてないか？まあ、どうせ太ったって話だから軽く流して、適当に何か言つとけばいいだろ。

「でも、この前体重計乗ったら1kg増えてたの！」

……え？

「恐る恐るウエストを測ったら0.5cm増えてたのよ！」

……え？

「ぼてとの妖精さんには分からないのよ！ポテトを……ポテトを食べ過ぎたあまりに太ってしまった私の気持ちが！」

……え？

「ごめん。マジで分かんない。増えた単位がおかしいって言うか……それこそ俗に言う誤差では？」

「私はバンドをやってるの！体型維持は基本中の基本！私の不摂生な食生活で太ってしまっただけであってはならないのよ！」

悲痛な叫びをあげるが……え？チラツとリビングの方を見ると、何か皆頷いている。

……嘘だろ？俺だけ共感できてないの？いやいや、まあ体型維持とかはそうだけど……何？え？何でコンマ何センチの話してるの？

俺、理解、出来ない。

「……それに」

……え？まだ何かあるの？ただえさえ理解追いついてないのに？

「……それに、太ってしまったら……きつと今みたいに慧人さんは関わってくれなくな

る。太ってる人はクールビューティーなわけがないと言って見捨てられてしまう……」

……いやまあ、確かに太ってる時点でビューティーじゃない気が……

「だから私は！好きな人の為にも体型を維持しなければならぬの！好きな人と居られるためならポテトだって我慢して見せる！好きな人と居るためなら何だってするわ！好きな人……慧人さんを誰にも奪われたくない！だから……だから！私はポテトを食べられないのよ!!」

「……………」

「……………」

沈黙がリビングを支配した。

「……………大丈夫？慧人くん」

すっかり黙ってしまったぼてとの妖精こと俺を心配して見に来るリサ姐。

「……………すみません……何か……心に來るものがありました……」

いやまあ、何を聞いても流す自信はあった。何を聞いても平然で居られるつもりだった。

でも……………さすがにその言葉を軽く流すことは出来なかつた。

彼女の心の叫び。それを流すなんて……俺にはできやしない。流す資格なんてない。

だからどう答えるべきなのが分からなくなってしまった。

『それはちがうよ。さよちゃん』

「……………っ！」

すると隣から高い音が聞こえてくる。

「り、リサ姐……………」

「……………後はアタシに任せて」

り、リサ姐……………あなたって人は……………！

『けいとくんはね。ぼてとをしあわせそうにたべるさよちゃんがだいすきな。くちではなんだかんだいいながら、ぼてとをしあわせそうにたべるきみがだいすきな。』

「よ、妖精さん……………」

『このぼてとはね？ただのふらいどぼてとじゃないんだよ？』

「……………え？」

『きみにたべてもらうために、けいとくんがあげずにつくつたの。かろりーをすこしでもおさえるためにね。ほらひとくちたべてよ』

「……………お、おいしいです」

『さよちゃんはぼてとをがまんしなくていいんだよ……………さあどんどんたべてよ！しあわせそうなきみのかおをたくさんみせてよ！』

「は、はい……………」

陰から除くと紗夜さんが凄い勢いで食べている。

「……………気付いてたんですか？」

「まあねー。食べて察して、調理台を見て確信かな？」

「結構騙す気で行ったんですけどね……………」

「ふふん。アタシを騙すには100年早いよ☆」

リサ姐……………もう流石の一言しか出ないな。

「さてと、紗夜が禁止した原因は分かった。じゃあ君はどうする？」

「……………簡単ですよ」

俺は立ち上がり彼女の下へと向かっていく。

「彼女がポテトを食べ続けられるよう。俺が手綱を握るだけです」

「うんうん。その意気だよ☆」



「紗夜さん。これ以上はNGです」

「ぐぬぬっ……あと一本。あと一本だけ……！」

「そう言つて止まらないからダメなんです。ほら、後は俺が食うので」

「……これも明日のポテトの為、これも明日のポテトの為」

こうして、俺がポテトの摂取量を管理コントロールするようになった……まあやるからにはやつてやるよ。そりゃそうだ。彼女の中身をクールに戻す前に外見がビューティーじゃなくなつたらダメだもんな。

ちなみにぼてとの妖精は千聖の耳に入り、珍しく大爆笑してたそうな。あの女……！  
というか録音していたやつ誰だよ！え？現在進行形でどんどん拡散中？こころが商品化希望？やめてくれ（懇願）

## 天才の考えてゐることは分からない

冬木慧人。おねーちゃんの事が好きで、おねーちゃんが好きな人。

最初に彼を見たとき、私は怖かった。

彼の見た目がとか以上に、おねーちゃんを取られてしまうのではないかという恐怖だった。

彼とおねーちゃんが話している姿、おねーちゃんは無愛想だった。

でもあたしには分かる。決しておねーちゃんは興味がなくて無愛想だったわけじゃないことを。表情には出していないけどおねーちゃんから発していた雰囲気はトゲトゲしいものじゃなかった。

うらやましかつた。おねーちゃんはあたしと話す時、いつもトゲトゲした感じがあつた。でも、今のおねーちゃんはそんな感じがしない。呆れてはいるけど、トゲトゲした空気を出していない。

だから、あたしは、彼に会うことを決めた。勿論、ただ彼に会いに行くわけではない。彼を試すのだ。

彼がおねーちゃんに何の目的で近づいているのか。知りたいという気持ちと取られ

たかないという思いで、あたしは、おねーちゃんのスマホをちよつと借りて彼に今から会う約束を取り付ける。

そして、あたしはおねーちゃんと同じ髪型にするためウィッグを付ける。こつちは双子なんだ。あたしがその気になればおねーちゃんに成りきることくらい造作でもない。鏡を見るとそこにはおねーちゃんが居ると錯覚されるレベル。あとは演技さえすれば誰もがあたしを『氷川日菜』ではなく、『氷川紗夜』だと思つたろう。

そして、約束をした彼に会いに行く。急な約束にも関わらず、彼は律儀なのか時間前には来ていた。

「ごめんなさい。待たせてしま——」

「あなたは誰ですか？」

心臓が飛び跳ねるかと思った。

会つて、あたしが言い切る前に彼がそんなことを言うのだから。

でもそんな態度を出すわけにはいかない。だから、

「何を言つてるの？ 私は氷川紗夜よ？」

如何にも彼がおかしいように、余裕を持つて応える。だが、

「あなたこそ何を言つているのですか？ あなたは氷川紗夜さんじゃないでしょう？」

彼は笑顔でそう答えた。

今日は休日。紗夜さんからショッピングに行こうと誘われたので、集合場所に向かう。時間も早めだし、問題ないはずだよな。

そう思って集合場所に行くと、既に彼女はいた。いたのだが……。

「なんだ日菜の方か……」

「ええっ！もうバレたの？！」

氷川日菜。Pastel\*Palettesのギター担当で、彼女を一言で言うなら「天才」だ。何事も感覚とかでできてしまい、出来ない人の……というか他人の心の機敏とかに疎い。

紗夜さんの双子の妹で、紗夜さんは「秀才」一時……というかオレが出会った頃は紗夜さんが日菜にコンプレックスを感じたりで、ギクシヤク険悪な感じだったが、現在はだいぶそういうのもなくなってきた。曰く前みたいに仲が良くなってきたとのこと。

そんな彼女だが、俺と会うときの大半は紗夜さん経由で約束を取り付け、紗夜さんになりすまして来る。絶対に騙してみせるとのこと。

「今日はおねーちゃんも自信を持って騙せると言ってくれたのになあ〜」

しかも、最近は紗夜さんも協力的らしい。双子で俺を騙そうとしているって……まあいいか。

「ははっ。はつきり言っておきますよ。俺を騙すのは無理です」

「ええ〜」

「いいですか？紗夜さんからは神々しいオーラが出ているのですよ。心の底から……そう。クールビューティーの神とも呼べるオーラがもう全身から漏れ出ているんです」

「あたしはあたしは？」

「もどきですね。それがパチモンです」

「その答えはるんつとしないなあ……」

「それは知りません。でも、これでまた俺の勝ちですね」

「むう……どうすればおねーちゃんと同じ……そのクールビューティーなオーラ？が出るの？」

「無理ですよ？いいですか？紗夜さんは唯一無二の存在です。唯一神になろうとどんなに努力しようと唯一神になれないのと同じです。紗夜様と血を分けた日菜であつてもそんなことできるわけがないのです」

「次こそは絶対におねーちゃんと同じオーラを出して騙してみせるね！」

「あれえ？話聞いてた？」

「ま、まあ、100%同じは無理でも、限りなく近づくことはできる。」

現に、最初に会った彼女はただのそっくりさんの感じだったが、今では90%くらい？だから、紗夜さんのファンや、一介のクールビューティー教なら騙せるだろう。

ただ、俺くらいのクールビューティー教になれば、まだまだ甘いと言わざるを得ないが。いや、ここまでの領域に達していることを褒めるべきか？

「先に言つとくけど、俺を騙すのは絶対に無理だよ」

「どうしてー？」

「好きな人を間違えるわけないじゃないか」

仮に彼女がどんなに近づいても、俺が日菜と紗夜さんを間違へることは決してない。いくら双子といえども好きな人ぐらい見分けられる。

「でもでも！おねーちゃんのこととはあたしの方が知つてるもん！」

「そりやそうだろ。年季が違うから……で？シヨツピングだろ？かつら外して行くぞ」「かつらじゃなくてウィツグだよ！」

あと、何故かつらと言うと怒られる。かつらとウィツグは何か違うのだろうか？

「で？今日は何処に？」

「特に決めてない！」

「あ、いつも通りか」

彼女と出かけるときの大半はこれだ。曰く、るんっ♪つてした方へ行くらしい。

ちなみにだが俺は彼女のるんっ♪は分かつてない。しかもるんっ♪にもバリエーションがあつて、るるるんっ♪とか言われてもやつぱり分かんない。

「あ！あそこ行こう慧人！何かるんっ♪つて来た！」

「はーい」

な？言つただろ。彼女のるんっ♪に付き合うのが大半だ。

ちなみに、彼女とも紆余曲折を得て何かこんな感じになつてゐるが、最初は警戒心むき出しだっただろう。実の姉を取られるのではないか？という不安然り恐怖然り。

まあ、最近は「おねーちゃんとか慧人がくつつけばるるん♪つてする気がする！」とか言い始めた。もう何でもいいや。

俺は思考を放棄した。

そんな感じで数時間。俺は彼女に連れ回された……が、いつも通りなので特に何も思わない。



「でさあ、何かるんつってすることが最近少なくてさあー」

ファストフード店で日菜が話しかけているのは俺ではない。

「ひ、日菜ちゃん……今、私バイト中なんだけど……」

丸山彩。千聖や日菜と同じ *P a s t e l \* P a l e t t e s* のボーカル担当。花音と同じファストフード店でバイトする彼女。……ちなみに彼女の言うように、彩はバイト中で、俺たちは思い切り注文するレジの前を陣取って話し込んでいたため、後ろの客は全て花音の方に流れる。すまん花音。マジでごめん。客の皆さんもごめんなさい。

「日菜？そろそろ注文して席行こう……な？」

「ちえー……あ、ポテトのL二つ。ドリンクは……」

と、手早く注文を済ませる。さすが氷川双子。ポテト好きなところはそっくりだ。

ちなみに彼女はポテトよりガムとかキャンデーの方が好きである。故に紗夜さん程ポテト狂ではない。

で、席に着かせる俺。日菜は目を離すと何処かに消えるので警戒が必要だ。つて言つたそばからどこに行くんだお前？

「うーん。あ、そう言えばポテト禁止する宣言撤回してたよー」

「……あはは」

「でも、ぽてぽて言ってるおねーちゃんも可愛かったなあーねえね。もつかいやろうよ

！」

「やらねえよ」

「じゃあさ！あのぼてとの妖精やってよ！」

「やりたくねえよ」

「ええ……あれ千聖ちゃんが『ふふつ……ごめなさ……ツボにはいつ……ふふつ』ってずっと笑ってたよー？あんなに壊れた千聖ちゃん初めて見た！」

声真似が地味に上手いなこの人。……マジである人大爆笑してたのか。ツチ。こっちは大真面目だったのによお……

「でも、リサチーの妖精の方は凄く可愛かったよ！もうるんっ♪って来ちゃった！」

「あんまり聞きたくないが俺の方は？」

「うーん。る、るんっ？って感じだねー」

おい、新たなレパートリーを増やすな。

「でも不思議なんだよね、あたしがね。昨日、ぼてとの妖精の真似したらおねーちゃん『ぼてとの妖精さんはそんなじゃありません』って言われちゃったんだよねーあ、でもね。そのおかげで『ぼてとの妖精講座』が始まっておねーちゃんと一杯おしゃべりできたよー！」

………待つて？いや、声真似の上手さとか諸々言いたいことはあるけど……まさか

紗夜さん、ぼてとの妖精が実在するって思ってる？やめて。普通に考えたら居ないことくらい誰でも分かるよ？講座開いちやったの？ガチ勢じゃんアウトじゃん。

「ねえね、どうしたらぼてとの妖精になれるの？」

「……リサ姐に聞いてください」

「分かった！そうするね！」

「ごめんリサ姐。俺じゃ無理だわこれ。」

「で？この後はどうすんの？」

「んー何か今動きたい気分！」

「ええ……面倒」

「よし行くよおー！」

「つて人の話を聞けよ！」

そう言って走り出した彼女を追い掛ける。振り回されてしかないがこういうのも悪くないと思える自分がある。

「ただいまー！」

「おかえりなさい。日菜」

「おねーちゃん！」

「今日はどうだった？」

「全然ダメく慧人より早く行ったのに会ってすぐバレたく」

「ふふっ」

「何だか嬉しそうだね？」

「そうね」

「でも今日も一日たくさんるんっ♪ってしたよ！」

## とある普通の一曰

今日は俺、冬木慧人の一日を紹介しよう。え？興味ない？まあまあそう言わずに。

午前5時。起床。

「今日もいい朝だ」

両親は共働きで割と忙しいって言うやつなので、朝は自分で昼の弁当と朝食を作る。起き損ねたら昼は購買だ。

午前6時。出発。

「行つてきまーす」

1時間で弁当、朝食作り、朝食食べる、着替えなどの支度を済ませて出て行く。まあ、雨や雪が降ったら朝練なしだからここまで急ぐ必要ないんだけど今日は晴。さつさと行こう。

ちなみに学校へはジョギングで行く。まあ、言うて5, 6 kmだし。自転車はガチでギリギリの時しか使わない。

午前7時。朝練開始。

「お願いしまーす」

ストレッチをして朝練開始。最初はボールを使った練習をメインに行っている。

「じゃあ、そろそろ行くぞ」

『『おおーっ』』

午前7時40分くらい。大体いつもこの時間から俺たちのランニングがスタートする。1周(?)約10kmくらい。ガチで走れば30分くらいで帰ってこれるようになった。朝のSHRが8時45分から始まるので1時間かけたら遅刻まで一直線という鬼仕様である。

と言っても新入生が多い4月とかなれない間は走り出す時間を早めるから、このランニングで遅刻者が出たケースはほとんどない。

そして花咲川女子学園付近まで全力ダッシュ。この時点で足の速いやつと遅いやつとかで分かれがちになるがまあ、あれだ。なんとかなるってやつだ。全力ダッシュと言いつつある程度は統率がとれるよう、先頭である俺とキャプテンが調節してる。

と、そんなこんなしている間に花咲川女子学園が見えてくるので少しペースダウンをする。

「あ、慧人さんだ！おーい！」

すると前方の方で手を振ってくる女の子……頭にある二つの山というかあれから……

「香澄。多分冬木先輩ランニング中だぞ」

「そうなの有咲？」

戸山香澄。ガールズバンド Poppin, Party のリーダーでボーカル兼ギター。行動的でポジティブなのはいいが……多分アホの子だ。少なくとも俺はそう思ってる。髪の毛二つの山はネコ耳ではなく星をイメージしたらしい。

「じゃあ頑張ってるねー！ 慧人さん！」

「頑張れよー」

もう一人は市ヶ谷有咲。香澄と同じくガールズバンド Poppin, Party に所属し、キーボード担当。一言で言うならツンデレインドア派お嬢様ってところだ。

二人に軽く手を振っておく。全く、朝から香澄と有咲の二人の後輩に応援されるなんて……

『テメエばかり……！』

『羨ましい……！』

「じゃあな！」

嫉妬の炎に焼かれそうになるので走るスピードを上げて逃げることにする。

「おおっ！相変わらず私たちと会うと、走るの速くなるよね！」

「そうだな……………お疲れ様です」

そんな感じで、何人かの女子たちとすれ違いながら羽丘の方へと走って行く。まあ、彼らの嫉妬も何人かの女子を見ると収まったよう……………ふう。まだマシだったか。

「あ、けーとさんだ〜お〜い」

そう思うと次のこのゆつたりとした声……………あ、

「……………慧人さん」

そしてこのぶつきらぼうな感じ。

「モカと蘭か」

青葉モカ。ガールズバンドAfterglowのギター担当。興味あることはとことん、興味ないことは一切のマイペース。ちなみに俺より大食いなのでコイツにはご飯をこちそうしたくない。

美竹蘭。同じくガールズバンドAfterglowのギターとボーカル担当。黒髪に赤メツシユを入れており、ぶつきらぼうな話し方からヤバい人かと思ったがそんなことない。ちなみにツンデレ。

後方との距離が少し空いたのでその場で足踏みして二人と話す。

「よく走っていますなく今度ひーちゃんも誘ってあげてよ〜」



「ひまりを? どうして?」

「最近太つたらしいよ」

「……………しばらくそういう話は遠慮したかったなあ……………もうね、ダイエットとかね? ね?」

「……………それは言い過ぎ。それと慧人さん」

「何?」

「……………後ろ」

後ろ? そう言われて振り返ると……………

『冬木いいいいいいっ!』

『何話してんじやこのやろおおっ!』

「うわっ! もうすぐそこかよ! じゃあな! お前ら!」

「ばいばーい」

「……………また」

大体朝のランニング。知り合いと会うといつもこれである。会わなければもつと平和に終わる。まあでも。こちらから話さない以上、向こうから何もなければスルーなのであれだが……………とりあえず今は逃げろ。

午前8時30分。

学校に何とか戻り、荷物を持ってそのまま教室へと飛び込む。

大体のサッカー部は朝のSHR中は上のカッターシャツなり制服を着ていない。汗をかいてるのでタオルで拭いたり、うちわなどを扇いで乾かしている。その姿は夏だろうが冬だろうが変わらない。まあ、半男子校になっており、担任も甘いのでその辺は許されている。よかったよかった。

そして授業。授業中は真面目に受けるか寝るかどちらかである。

昼休み。

「でさあ……」

「はいはい」

「……………」

サッカー部のうち二人。しかも、『女子と話しても嫉妬しない』系の貴重な二人とクラスが同じなのでそいつらと飯を食う。こいつらだけは、前の花音や千聖のLONE然り、今朝のアレ然りで追いかけてくるような事はせず、淡々と自分のペースで走っている。

「そーいや文化祭もそろそろだな」

「……………」

「あーあれな。今年もどうせやるんだろ？」

虎南高校文化祭。まあ、いい思い出があるわけでもないが……全部平日にやらず土曜日もやるって選択をした学校側を褒めたい。何故か？いや、文化祭なのに男ばつかとか絵的に嫌じゃん。

「……………」それが終われば大会」

「だなくやつべ、シフト調整しねえと」

「まだ言ってなかったのかよ……………」

俺はこの前、言っておいた。

まあ、まだ少し先ではあるが早めに言っておくに超したことはないからな。うちは割と忙しいし……………まりなさん。すみません。多分この穴埋めはいつかきつとします。

「……………」それにテストもある」

「行事が重なりすぎだろ……………」

「テストは行事じゃねえだろ」

とこんな感じで話しているうちに昼は終わっていく。

午後。お腹も膨れ、心地よい気分です。居眠りをする。紗夜さんに頼ればテストは安心……ぐう。

放課後。今日はバイトであるので一直線にC i R C L Eを目指す。

「お疲れ様でーす」

「お疲れ様冬木くん。今日もよろしくね」

「はーい」

「そう言えば明日の放課後なんだけど空いてたりしないかな?」

「明日ですか?」

明日……あ、部活か。まあいいや。

「空いてますよ」

「良かったあ」

「でも何ですか?」

「ほら、前から言ってたじゃない。『さーくる合同ライブ』の件。あれの第一回の打ち合わせをするからC i R C L E代表として私たちが参加するんだよ」

「……え?俺も代表なんですか?」

「冬木くんは合同ライブをする五バンド、P o p p i n , P a r t y , A f t e r g l

ow, Pastel\*Palette, Roselia、ハロー、ハッピーワールド！  
の全メンバーと顔見知りだし、ある程度の仲だからね。納得の抜擢だと思うよ」

「そうですか……」

何だろう。頭の中で何人かまともそうなヤツをピックアップしたけど……あの人次割と流されやすいからな……いやほんとマジで。流す……というか、面子が濃すぎるんだよ……ええ？アイツらが一同に会すると？それは地獄ですか？

「司会は誰がやるんですか？」

「言い出しつぺの香澄ちゃんたちじゃないかな」

あ、終わったな。

「機材運んできます」

とりあえず、機材を運んでセッティング。結構こういうことは強くなった。

このCIRCLEでやっていて得られたものは、女神を見つけたことを除けばこの音楽機材に強くなったことだろう（ただし、誰も弾けるとは言っていない）。

後は客をさばき、トラブルをさばき、面倒な客をさばき……何だか忙しいな！うん。

バイト終わり。

「お疲れ様」

「さ、紗夜さん……!!」

今日は紗夜さんが待っていてくれました。やはり神ですかあなたは？

「明日の会議は参加しますか？」

「させられますよ」

「それはよかったです」

とりとめもない話をしながら彼女を家に送る。

いやあ、今日は有意義な一日だったな！

有意義かどうかを決める要素は神に会えるか会えないかだよな！うん！

# 会議って何だっけ？

今日はC i R C L E 合同対策会議。俺は……

「何で会場準備しねえといけねえんだ……」

他の皆がわいわい集まる中、机の設置、資料の配布などを一人で行っていた……マジかよ。

というかあれ？男俺だけじゃん……うわあ……超帰りたいたい。というか俺の生活極端なんだよ。周りに男しかいないか、女しかいないか、誰もいないか。もつとこう……いい感じのバランスで混ぜるときはないのか？ないな。ないから悲しいな。

「これより第1回打ち合わせを始めたいと思います」

牛込りみの発言によつて会議はスタートする。司会は香澄以下P o p p i n , P a r t y の皆様。議事録(つぼいもの)担当、俺。見守り担当、まりなさん。そのため、俺はまりなさんの隣でパソコンと睨めっこしている。

そしてP o p p i n , P a r t y 以外の皆さんは純粋な会議参加者。……大丈夫かこれ。お前から頼むから俺の身を考えて発言しろよ？

「趣旨の説明」

有咲によつて呼ばれた香澄が趣旨の説明を始める。俺も、趣旨と打つが、

「はいっ！みんなでキラキラドキドキな楽しいライブが出来ればいいなって思います  
！」

空気が一瞬にして死んだ。俺も思わず手が止まった。

「……悪い。もう一回言つてくれないか？このライブの趣旨」

「だから、みんなでキラキラドキドキな楽しいライブが出来ればいいなって感じですよ」

ダメだ。どうやら聞き間違いじゃないらしい。

「具体的には？」

さすが紗夜さん！やつぱりここはあなた様の出番ですよね！

……はっ！気付いてしまった。これもしや、紗夜さんの周りにポンコツを並べれば、紗夜さんのポンコツが打ち消され、常識のあり、さらにクールな一面しかなくなるのでは？そ、そうか！ポンコツというデメリットを、ポンコツを周りにおいて、ポンコツっぷりを見せないで居ればクールビューティーな一面が残るのでは？マイナスをマイナスの中に隠せば目立たずプラスが残るってわけか！こ、これは新理論として提唱、実証しなければ……！

「あー冬木くん」

「……………」



「おーい」

「何ですかまりなさん。俺は今忙しいんですよ。素晴らしい新理論を見つけたのでゆくゆくは論文として纏め、クールビューティー集会にて発表しようと思います。そのため今、その理論に関し、使えそうな資料や実験データをまとめ……」

「あーうん。君、議事録担当だからその……ものすごいスピードで、そんな長文を打たないで？ね？その論文？も書くのは家に帰ってから……」

「……ん？よく見てくださいよまりなさん。しっかりメモも打っています」

「あれ？……ま、まさか、パソコン二台同時に操ってたの……？」

「はあ。常識ですよ？クールビューティーの為なら人は限界を超えられるんです。義務教育で習ってませんか？」

「「……………」」

するとまりなさんと多くの会議参加者が頭を抱えていた。何故だろう。よく分かんないや。

「で？香澄。具体的に言われてキラキラとか星の鼓動とか……何も決まってないだろ」

「書記がしっかり仕事してた……じゃなかった、具体的なことは次回までに提出しますので……」

そう言うのは山吹沙綾。まあ、次回までに……え？次回も俺参加するのか？

「じゃあ、順番を。先に順番を決めましょう」

「私達は自分の演奏が出来れば順番なんて」

Afterglow、希望、どこでも。

「最後は私たちに決まってるわ」

Rosealia、希望、最後。

「すみません……その日は仕事が入ってるの最後にしてもらえると……」

Pastel\*Palettes、希望、最後。

「最後に私たちでドーン！ってリボンのシャワーを打ったらみんな笑顔になれると思うのー」

ハロー、ハッピーワールド！、希望、最後にリボンのシャワー。

「最後に25人全員できらきら星歌いたい！」

Poppin', Party、希望、全員で最後きらきら星。

「……やっぱりあたしたちも最後がいいかな」

Afterglow、希望、どこでも↓最後。

「……………」

結論。全員の希望が重なった。

「た、タイトル！タイトル決めましょう！」

結果、諦めた。諦めてタイトルに走るが……

「好き放題言ってくれるなあ……！」

最初は香澄がキラキラパーティー！って言って、あこちゃんが中二臭いのを出して、そしたらはぐみがミッシェルと愉快的仲間たちと路線変更。更に千聖が商店街の皆様から希望を取るって言い始め、もうまとまりが見えなくなったところでリサ姐が好きなフレーズを言い合ってそこから作ればと提案。

そしたら何と皆がマジで好き放題言ってくれる結果に。そのせいで論文まで手が回らず両手でPCの処理速度の限界にチャレンジすることに。

おい日菜、お前おねーちゃん言い過ぎだろ。他の奴らも何でミッシェルとかコロツケとかああ打つ側の気持ちを考えてくれ……！

と、皆が好き放題言う中、香澄が両手で机をばーん！

「「……………」」

お、皆が静かになった……え？でも、香澄……お前何を言うつもり……

「私、おなかすいたかも！」

……ああーそう来たか。そしてそのまま日菜の提案でファミレスに行くことに。リサ姐も賛同し、皆で移動して……やっぱり、真面目な常識人たちが流されていく……

いや、あの中にそもそも常識人いたっけ（疑問）？いないな（確信）。

全く……俺くらいじゃないか、常識人なの。はあ、これ本当に決まるのか？

「今日の会議意味あつたのかな！」

俺は本日の議事録の最後にこう書いた。第1回合同会議、何も決まらず終了と。

「じゃあ、俺は今からちよつとクールビューティー協会に提出する論文を作成するんで失礼しまーす」

「あ、うん。お疲れーじゃないです。片付けまでしつかりと……」

「これより、定例部会を開催する」

翌日、放課後、雨。今日は外で部活ができないので、空き教室を借りて会議を行う。ちなみに定例と付いているがほとんどやってない……不定期の間違いだろ？

と、ツツコミを入れたいがキャプテンが神妙な面持ちをしていたので黙る。

「議題はこれだ」

そして、議題を書く。えーつと？

『部員のLONE事情く女子編く』おい、俺たちサッカー部。何阿呆なことで会議開いてんだ」

昨日の会議といい、どうやら俺の周りには残念なことにまともな会議が出来る環境は存在しないようだ。

「阿呆なことだど？とても重要なことだ。いいか？俺がキャプテンになってから、何処かの誰かはサッカーより女を優先している節がある。これは我らサッカー部にとって由々しき問題。故にここで我らサッカー部は何をするべきかを示す。いい機会じゃないか。なあ冬木？」

「本音は？」

「女子とイチヤコラしている奴は羨ましいんじやボケエ！」

黒板を拳でドーン！

ダメだ。私怨であふれてやがる。

「だが、冬木だけでも限らん。他の部員も時折サボっているからな。ここはキャプテン自らが道を正そうというわけだ。文化祭も近いし、結束を高めておくに超したことない」

他の部員たちもバツの悪そうな顔をするものも何人か。

「ちなみに、俺よりもL○N Eで女子の友達が多いやつは全員有罪だ」

「「……………」」

マジで言ってるの？

「そういうキャプテンは何人ですか？」

お、後輩ナイス。そうだよな。そこ知らないと話進まないよな。

「俺か？……………フツ……………」

そう言うのと軽く笑って、

「ゼロだあつー！」

叫んだ。

「おいキャプテン。俺たちはお前のバレンタインに親以外から貰ったチョコの数を聞い

てるんじゃねえんだぞ？」

「ふんっ」

そう言うのとスマホを投げ渡してくる。

「なら見てみろ」

ということと俺が操作、後ろから他の部員がのぞき込む形で見ると……えーつと。

「……………」

「……………」

「……………」

お、男しかいねえ……………！

「あ、先輩！この人女の人じゃ……………」

「いや違う！これあの人の母親だ！」

「え？じゃあ本当に母親以外に女の人の人LINEが……………」

いたたまれない空気になった。ま、まさか……………本当にゼロとは思わなかった。

「……………すまん」

俺はそつと返す。そして、

「さあ、皆帰るぞー」

「「おー」」

そのまま帰ろうとする……だが。

「おいおい逃がすわけがないだろう？」

キャプテンが帰り道を塞いだ。

「……………面倒だ。僕から進言しよう」

「ほう、千石か」

千石。クラスメートでもある。あの嫉妬しない組の片方である。

「お前はさつき女子の友達って行った。兄弟姉妹は当然除くよな？」

「ああ」

「除くと何人か居るが……奴らは友達ではない」

……………は？

「証拠に会話も事務的な事ばかり。俗に言う、連絡用に追加しただけだ」

「ならば無罪」

……………ええ……おい、千石の口角が少し上がってるぞ？こいつ、絶対お前のこと騙すのチョロいって思ってるぞ。

「じゃあ次俺行くわー」

軽い口調で言ったのは森下である。

「カノジョは友達じゃない。だから俺もゼロー」



ちなみにちよつとチャライ系のクラスメートである。こいつが嫉妬しない組のもう片方である。

「……の割には何人か居るようだが？」

「あー元カノ元カノー」

「……………」

黙り込むキャプテン。ちなみに、森下はあからさまな棒読みであることから、さつきのは嘘だろう。

「……お前がトツプだったら有罪。それ以外は無罪」

「あいよー」

……なるほど……………このキャプテン。さてはチョロいな？

「というわけでだ、冬木ーゴー」

「……………どうせお前がトツプだ」

すると既にキャプテンから判決を受けた二人が俺を差し出す。なるほど……………これが狙いか。

「ふつ……………細かくは数えていないが俺は30を超えている」

「よし、死刑」

「待て待て」

「何がおかしい?」

「もう有罪通り越してる」

「そうだったな。極刑に処す」

「落ち着けての。いいか? 超えているように見えるだけだ……まずキャプテン。この学校の女子のは連絡用だ。後、年増は女子じゃないよな?」

「そうだな」

よし、まりなさん除外。この学校のやつも減ったから一気に25まで減った。

「女神様はそもそも人じゃないよな」

「はあ?」

「おいテメエ、まさか女神様を人間と一緒にしてんじゃねえよな? あ、あ、? 神聖で高潔な存在だぞ? おいこらテメエ舐めたこと言ってるどぶつとば」

「分かった分かった。お前の面倒なスイッチが入ることは分かったから次行け」

「あと、魔王も人じゃないよな?」

「お、おう……」

これで二人つと。

「姉妹は入らないから姐さんって慕っている人も違うし、あ、ゲーム仲間も友達というには少し違うよな。それにネコと音楽ガチ勢も違うな」

「お、おう………？」

これで四人。

さて、後19つと。このペースなら行けるな。たたみかけよう。

「ゆるふわ、るんつ、フヘへ、ブシドー、キラキラ、ウサギ、チョココロネ、パン屋娘、インドア派、ダイエツト、赤メツシユ、ソイヤ、大食い、珈琲店娘、黒服付き、儂い、ふええ、コロッケ、ミツシエルも違うよな」

「待て待て。お前今のは無理が……」

「……何が違うのかが分からん」

「よし、許そう」

森下と千石は無視するものとする。そうすると、なんと残念なことに、

「じゃあゼロだ」

「それはおかしい」

「………？」

おかしい。キャプテンは何を言ってるのだろう。

「今の超絶理論により、ゼロとなったはずだが？何か不満でもあるか？」

「いや、お前がゼロなのはおかしい。よって嘘をついてるものとみなし有罪」

「な、暴論だろお前！」

「いやー今のは冬木が悪い」

「……処される。僕たちの分まで」

旗色が悪いか……よし。

俺は鞆とスマホを持って逃走した。

「逃がすなあっ！」

「「おう！」」

どうやら今日の鬼ごっここの舞台は学校らしい。

「さて、じゃあ帰るかー」

「……………眠い」

ちなみに二人は助けてくれないらしい。悲しい。

後日、何故か千聖とまりなさんから聞かれた。何か余分なこと言ったかっつと。特に覚

えていないので無視した。

## 校長の思いつきほど怖いものはない

部活動代表会議。

虎南高校に大体月一で行われる会議のこと。全部活の代表たちが集う会議で、我らがサッカー部は俺が出ている。何故か？ウチのキャプテンが俺に託したからである。既に名簿には代表者は俺で登録されているので……畜生。サボりてえ。

ちなみに合同ライブの会議、サッカー部会議、これと地味に三日連続で会議に出席している。まあ、昨日と一昨日のあれはきつと会議ではなかったな。うん。会議という名の何かだ。

で、その会議での事だった。

「……と、文化祭に関しては以上です」

生徒会長が説明してくる。まあ、文化祭の出し物やるなら期日までにさつさと書類一式提出しろって話だ。我らがサッカー部は一応屋台を出す……というのも、我らがサッカー部はあのランニングのおかげで割と地域の皆様には有名なのだ。……………良くも悪くも。

だから出すとそれだけで一般客は興味本位で覗いてくれる。ありがたやありがたや。

後、いつもすみません。

「二つ良いかね」

すると、普段は参加しないはずの校長が何かいる。どうしたのだろうか？

「君たち。部費はもつとほしくないかね？」

その言葉に頷く一同。当たり前だ。金を貰えるなら欲しいのが人間の性だ。

「そこでだ。文化祭で大規模なイベントを行う。題して……『各部対抗！バンド対決

！』」

「『……………はい？』」

各部対抗……………バンド対決？

で、ルールはこうだ。各部活、1バンドマックス5人の2バンドまでが参加出来る。その2バンド合わせて4曲までで1バンドにつき最低1曲は演奏。最後は観客の投票により優勝バンドを決める。優勝バンドを出した部活は部費アップ！ちなみに1位が総取りらしいので優勝以外はゼロ。本来なら他の部にまで分けられるはずだったものがもらえるので相当な金額となる。

……………なるほど。はつきり言つて博打だ。だが、ノーリスクでハイリターン……………か。

「最低条件を言つておく。ここにいる代表者は強制参加。もし、出る場合は君たちはバンドのメンバーとしてやつてもらおう。代わりにメンバーに関しては部活の者でなくて

もそこは不問とさせてもらう」

後日詳細を纏めた紙を配布するとのことだが……おう。そう来たか。部長、もとい代表者は強制参加。すなわちサッカー部なら俺は絶対参加と……知ってる？俺、リズム感ゼロだし音痴だぜ？絶望的に向いてないんだぜ？歌っただけで地獄を見せられるんだぜ？

「校長先生……なぜこのような事を」

「最近学生バンドにはまってな！大々的にやってみよう」と！

なるほど……！校長め……！テメエの思いつきかあ！

「というわけで、どうするよお前ら」

部長会議も終わり部活へ。そこでさっきのことをそのまま伝える。

「参加するに決まってるだろ」

……お、おう。マジか。

「冬木は確定として、他にはいないか？」

キャプテンが纏め始めたが……いやいや。アンタねえ……！アンタが行っていれば俺が強制参加にならなかつたんですけど？

「……問題は2週間ちよつとしかないってこと。初心者じゃ流石に厳しい」

そう言ったのはチームの司令塔……まあ千石のことだが。

「ちなみに僕はベースなら少々かじったことがある」

え？マジで言ってるのお前？嘘だろ？

「よし、二人目千石な。他は？」

「あ、俺ドラムスなら少しやったことあるぞ？」

チーム二軽いエースストライカー……森下だけど、が手を上げる。

「三人目は森下つと。ここはキャプテンとして俺が行こう……ギターならやれそうか」

「四人目はキャプテン……他は？」

他には手が上がらなかった……うーん。これじゃ足りない……

「ん？何言ってるんだ冬木。四人で十分だろ？」

「え？そうなのか？」

あれ？普段見ているアイツら五人組ばかりだから五人いるかと……

「お前……本当にライブハウスでバイトしてんのか……？」

「あ、あはは……」

バイトに必要な知識以外からつきしだぜ！

「で？お前がボーカルになるわけだが……確かお前。クソほど音痴だったよな」

「……マジでごめん」

「それにリズム感もないよな」



「……………本当にごめん」

そこに関しては全力で謝罪します。マジでごめんなさい……………!

「取りあえず曲だけ決めて、お前はひたすら歌えるようにしろ」

「ぜ、善処する……………」

「で? どうする? 正直僕らじゃ1曲が限界だよ?」

「だなー何曲もやるのは無理無理ー」

「だが他の部活も条件は一緒だ。1曲だけにするか」

「この時は誰も予想していなかった。まさかあんなことになるなんて……………」

何となくいつも通りにしつつ、やる曲だけ決まったのが部長会議の次の週の月曜日だった。

あれからルールを決めた紙は配布され、校長先生の急な思いつきをガチでやるんだなと思いはじめた今日この頃。まあ、楽器は貸し出してくれるとのことなので心配はないぞう。

珍しくゆったりとした時間が流れるサッカー部。しかし、休日の間にも他の部活は動きを見せていたのだ。

「た、大変だあつ！」

やる曲名を先ほど決めた俺たちの元に、慌てた様子で部室に入ってきた部員たち。どうしたのだろうか？

「軽音楽部とテニス部が手を組んだらしいぞ！」

「「はい？」」

「は？何それ？」

「それだけじゃねえ！野球部は生徒の買収行為をしてるってよ！」

「陸上部なんかは帰宅部全員を調査して精鋭部隊を作ってるって話だ！」

「しかも今あげた部以外は一つの大連合を作った噂だぞ！」

「……………は？理解が追いつかねえ……………が、ま、まさか……………」

「他の部活の奴ら正々堂々戦う気がねえのか!？」

「汚ねえ！最低かよ!？」

文化祭は二日間。来週の金曜日と土曜日に行われ、土曜日のビックイベントとしてこれは行われるらしい。何でも土曜日に来場した人に投票用紙を配布（もちろん、うちの生徒にも配布）し、そこで投票を行うそうだが……………。

まず、元々優勝候補（サッカー部予想）の軽音楽部がテニス部と手を組む。ちなみにテニス部にはイケメンが多いためそこに一般客の女性の票が入ると俺は予想している。

次に野球部がうちの学校の生徒の票を操作しようとする。これにより多くの帰宅部は音楽を聴く前から流れてしまう。しかも、各部にも買収による裏切り者が出てもおかしくない。

陸上部は俺たちみたいな素人でなく学校内からある程度有能な人を集めようと奔走。こちらは実力の底上げを行ってるようだ。

残った他の部活は一つの大連合を組むことにより、そいつらの票は一気に持つてかれる。

結果残ったのは何もしない我らサッカー部のみ……。

「……………きたねえ……………」

「こつちなんてまだやる曲決めたばっかだつてのによお……………」

「どうするキャプテン！」

「……………俺たちの目的は金にあらず」

目を閉じ、静かに告げる部長。その言葉には重みがあった。

「……………俺たちがそこで活躍をし、評価を上げること。そして——」

ゴクリ

「——俺が彼女を手にするのだ！」

「テメエ自分のことしか考えてないのか！」

なるほど。コイツがメンバーに入った理由はそれか。

ちなみにこの男がギターを少し弾ける理由は、ギター弾けたらモテるんじゃないか？という動機で一時期やっていたらしい。動機からして阿呆である。だが、その動機でも弾けるのは……………ぐぬぬ。負けた気分だ。

「ウチにいる女子生徒は皆野球部と陸上部に買収されたそうです」

「殴り込みじゃああああああああっつ！」

そう言う部長は飛び出していった。後に続いてく部員たち。結局残ったのは三人

のみ。

「あははー……でもどうするよ？」

「全員条件は同じと想っていたが……」

「……………他の部活は勝利の一点に賭けてきたようだね」

「まあ、部長の目的あんなんだし」

「そうだな。楽しむことをモットーに行こうぜ」

「……………さてと、サッカーするか」

「「おおー」」

よく考えたら部費を沢山貰っても使い道ねえわ。とりあえずサッカーしようぜ。

尚、部長たちはこの日帰ってこなかった。何でもそのまま柔道部に乗り込んで、揉めて、全員仲良く吹っ飛ばされたとか何とか……お前ら……挑む相手ぐらいは考えろよ。

## イヌ派？ネコ派？

湊友希那。

彼女は出会い方さえ違えば崇拜していた可能性があると言った。

彼女との出会いはそう、あの公園だった。

バイトが夕方から入っていたある休日。

公園のベンチで横になり軽く昼寝をしていた俺。

起きると空が茜色に染まっていた。

そろそろバイトに行かないといけないと思い、身体を起こすと……

「にゃーん……ふふっ」

集まっている猫たち。そこにいる一人の少女……とても幸せそうな顔で猫たちを撫でて。時々、猫の鳴き真似とか……あーうん。何か見なかった方がよかったかも。多分、あれは誰も居ないと思ってやってることだ。

よし、バレる前に逃げよう。そう思い立ち上がった瞬間。

「……………」

「……………」

目が、合った。

流れる沈黙。俺はそれを打開すべく問いかけた。

「……………猫好きなんですか?」

「……………っ!」

すると頬が紅く染まっていく。そしてそのまま逃げるように去って行った。

「……………いやいや、逃げなくても……」

どうせ関わることのない赤の他人なんだし……まあいいや。バイト行こバイト。

そしてバイト。受付でお客さんをさばってる!……と言いたいがまあ、そんなわけもなく。待ちの時間が生まれ、現在暇の大バーゲンセール中だったりする。

「……………すいません」

そんな暇を持って余していた俺に声かけられる。

「あ、はい何で……あ」

「あ……………」

早かった。再会が実に早かった。

もうこの時点で俺の彼女に対する印象は猫好き。

これが湊友希那とのファーストコンタクトだったりする。

あの後、C i R C L E 裏に呼び出された俺は彼女が、自分は断じて猫に対して特別な感情を抱いていない、音楽一筋だと長々と説明を受ける羽目に。もうそのせいでこの人は残念な猫好きって印象で固定されてしまった。

「いいえ。ネコの方がいいわ」

「甘いですね。イヌの方がいいに決まっています」

そして現在。彼女——友希那さんは俺とか R o s e l i a と言った一部の面々には、



既に開き直って猫好きであることをそこまで隠そうとしない。まあ……もう……なんだ。うん。開き直った方が楽だね!ちなみに紗夜さんは犬好きである。

紗夜さんより前に出会ってはいるが、公園での出会いがなければきつと、クールビューティー教の血が騒いでいただろう。無論、今となつては後の祭りであるが。

「慧人さん。あなたはどちらですか?ネコ派ですか?イヌ派ですか?」

「ん?それはネコ……」

ネコ派と言おうとすると、心底失望したような目を向けてくる。表情もどこか冷たい。

「ではなくイヌ……」

イヌ派と言おうとすると、心底喜んでいような目を向けてくる。表情もどこか嬉しそう。

「ネコ……イヌ……ネコ……イヌ……」

コロコロと変わる表情……うわあ、絶対ババ抜きとか弱そうだあ……。

「もちろん、クールビューティーが一番ですよ」

「いえ。戯れ言はいいので早く選んでください」

「アツ、ハイ」

俺は目を閉じて思案する。そして、結論に至った。

「……………ハリネズミって可愛くない？」

「はあ？」

おっと、友希那さんまでもが何言ってるんだコイツって感じを向けてくる。

「おう、分かった。……………戦争だな？」

いや、実際のところ、ハリネズミが一番好きである。イヌ？ネコ？いやいや、ハリネズミとかまあ、後はハムスターとか。そういう手のひらサイズの小動物（勿論その中でも好みはあるが）こそ至高だろう。

まあやり合ってもいいんだが……………この人たちがどうせ譲らないので、目を閉じる。

全く、イヌ派？ネコ派？ってその二大勢力で、他のものを無視するのは好まないわ……………きっとたえや花音なら分かってくれる。たえは迷わずウサギ派だろうし、花音はクラゲ派とかだろう。……………クラゲ派って何？誰か教えて。

「待たせたね☆」

「絶対ネコよ」

「いいえイヌです」

「……………どういう状況？」

「ネコ派とイヌ派に分かれて争ってます。個人的にはどっちもいいと思いますが……………」

「あ、何だ。確かに二人の好み違うもんね」

と、興味を失せた感じを出すリサ姐。……どうしたのだろう？

「リサ姐……思い切り関係なさそうにしてますけど、あなたが一番関係ありますよ」

「……………へ？何で？」

「あーいえ。この二人、『リサ姐にはイヌ耳が似合うかネコ耳が似合うか』が元になって言い争ってるんですよ？」

「……………な、何でそんな話に……………」

「で、この後『イヌ耳を付けるさせるかネコ耳を付けさせるか』で議論中です」

ん？俺はその大前提を無視して話をしていたからね。関係ない。

というかこの人たちも結局は自分たちの好みの話しかしてないので、結果変わるな  
い。似合うかどうかより、自分の好きな方を猛ブッシュって感じた。

「……………ごめん。両方ともないって選択は……………」

「あり得ないわ」

「……………！」

「いえ、救いを俺に求められなくても……………あと、二人とも。そろそろ行きましよう？  
とい  
うか、両方試してから議論をすればいいと思いますよ」

「そうね。分かったわ」

「ごめん。アタシが一番分かってない。後一番良くない」

「諦めてください。何処かの誰かさんがリサ姐が来るまでの時間を潰すために『遅れてくるリサ姐に後でイヌ耳かネコ耳のどちらかつけさせたいけど、どっちがいいと思う?』って、イヌ過激派とネコ過激派の二人の間に爆弾落としたんですから」

「慧人くんが原因だったかあ……!」

救いを求める目から一転、まるで仇を見るような目をしてくる。ん? あれ? 俺が悪いのか?

とまあ、お陰で暇な時間は潰せたが……何だろう。代わりに何か大切なものを失った気がする。

そんなこんなシヨツピングに向かうが……今気付いた。友希那さん、紗夜さん、リサ姐。美少女三人と一緒にシヨツピング。……これ、俗に言う両手に花と言うやつではないか? いや、両手だけでは飽き足らず頭にまで咲かせていそうだが……

「とか言いつつ実際はただの荷物持ちだからなあ……」

彼女たち曰く、荷物持ち兼男避けだそうだ。俺が居れば大抵のトラブルは回避できるらしい。いや、俺そんなすごい存在じゃないけど? え? 大抵のトラブルを力業でねじ伏せてる? 何そいつ怖い。

「まあ、シヨツピングは早めに終わらせて早くカラオケに行きましょう」

「そうですね。今日のメインはそっちですから」

「……………うぐっ」

本来、俺はこの後に合流すればよかったが……………まあ、前述の通りである。

何故、カラオケか？

「来週なんでしょ？ほらほら、頑張らないと……………死者が出るよ」

リサ姐が真面目な顔で脅してくる。

俺、冬木慧人はちよつと歌うことが下手なのだ。で、ウチの文化祭で歌わされる……………つてボソツと言ったら友希那さんが「なら鍛えないとね」とボーカルの魂に熱が入ったよう。そこに紗夜さんのスイツチも入り……………結果これである。

よかつたのはボーカル陣でも友希那さんという点だろうか。俺の知っているボーカル陣の中ではマシな部類だ。こころや香澄相手は考えたくないし、彩は……………その後ろのやつが怖いし、蘭……………もなんとなくやめた方がいいと思う。

ただ、友希那さんのことだから厳しいんだろうけど。

シヨッピングは終わりカラオケルーム。シヨッピング中は案の定荷物持ちにされま  
した。悲しい。

「ということ、まずは本日のメイン！リサ姐にはイヌ耳とネコ耳どちらが似合う  
かあつ！」

「待ってました！」

シャツシャツ、シャロシャロ

マイクを片手に話す俺。近くに置いてあるマラカスやタンバリンを鳴らして盛り上  
げる二人。

「待って待って。今日のメインは君の歌だよ？ねえ、メインが違うよね？大体、イヌ耳も  
ネコ耳もシヨッピングの最中に誰も見ていなかっ——」

「何を言ってるんですか?友希那さんと紗夜さんにリサ姐の相手を任せて、裏で調達しておきましたよ。ちなみに耳だけに飽き足らず、犬や猫の手みたいなああいうのも買っておきました」

グツとサムズアップする俺。

「……流石ね。冬木」

「ええ。流石です」

すると二人もグツと応えてくれた。

「ふっ。褒めないでくださいよ」

「——行動力!行動力が高過ぎる!全然気付かなかったよ!」

俺たち三人の連携を舐めないで頂きたい。

「ということ、リサ姐よろしく」

袋ごと渡す俺。

何だかんだ言いながらもつけてくれるリサ姐はすごいと思う。

「にゃ、にゃーん……」

「……………っ!!」

「……………っ!」

最初は猫耳に猫の手を付け、カラオケのソファの上で四つん這いになって頬をかく動

作をする。

無論、そこまで頼んでいないのだが、その光景の破壊力は拔群だった。

特に友希那さんが胸の辺りを抑え、顔を真っ赤にしている。紗夜さんもこの破壊力にはやられはじめ、かく言う俺も無茶苦茶可愛いと思っっている。もうね。ヤバイ。

「いやーん……」

すると友希那さんがリサ姐……いや、リサ猫の顎の下を撫でている。リサ猫も気持ちよさそうにし、友希那さんも幸せそうだ。

ああ、何だろうねこの空間。俺いたらダメなやつだ。ちなみに紗夜さんはスマホを構えて撮っていた。え？後でしっかりグループの方に貼っておきます？マジで？流石です！

しばらくお待ちください。

「……………♪」

リサ猫にかなり癒やされ、ご満悦の友希那さん。そして、次は犬の番……

「わんわん！」

「……………つ!!」

紗夜さんの目が見開いた。もう、リサ姐……いや、リサ犬もノリノリである。

紗夜さんの頬が緩んでいき、友希那さんもこれはこれだと言いだ始めながら、しっかりと



手にはスマホが握られていた。俺もうんうんって感じこの空間を眺めている。

「お、お手……」

「わんっ!」

「はううう……!」

ああ、癒やされるなあ……え?友希那さん?すっかりグループの方に貼っておく?もう分かっているじゃないですか!ありがとうございます!

俺、来世は犬になろうかな。

しばらくお待ちください。

「……………」

「……………」

たっぷりリサ犬に癒された紗夜さん。もう、犬がいい猫がいいなんていう争いはしなくていいんだ。どっちも素晴らしいんだ。ああ、平和な世界。

「……………」

すると、リサ姐は悪戯ツ子的な笑みを浮かべる。そしてイヌ耳とネコ耳を持って二人

の下へ……え?待って。それ以上は……

「……………」

ああ……何だろこの空間。

控えめに言つて最高。

## ゲームで有名になっているギルド

冬木慧人さん。彼の最初の印象は怖くて優しいだろうか。

彼は見た目が少し怖い。だから彼を初めて見たときは怖かった。でも、同時に優しくかった。

初めて関わったのは、NFOとのコラボ企画。ゲーム内ではなくリアルでのイベントだった。私は人混みとかは避けたい人間だが、ゲームのためとなれば飛び込むことも辞さない。あこちゃんを誘い二人で、そのイベントに向かった。

今回のイベントではまずは三人一組になる必要があった。私とあこちゃん二人。だから一人足りなくて、誰かに頼む必要があった……が。

『僕が入りましょうか？』

『いやいや、俺こそ』

『オレに決まってるだろ』

男の人たちがワラワラとこつちに集まってきてしまった。この場に女性は少なく、しかも一人足りない状況。こつちから探すより、我こそはという人が多かった。

その光景はあまりにも怖かった。年上の……大人やおじさんたちが皆こちらを

求める。その目は私たちを見ていて、大多数の人の目には下心……というか胸に視線が行っていた。怖いけどあこちゃんを守るために、あこちゃんの前に立って彼女にそんな目が向かないようにした。でも、それが精一杯で拒否する意思を示すまでは出来なかった。

そして、遂に強引そうな男性が私たちに向けて手を伸ばそうとしてくる。きつと掴まれたら私たちの力では太刀打ち出来ない。そう思つて目を閉じ……

「……………うるせえよ。テメエら」

その声は静かであつたが聞こえてきた。

「嫌がつてんのが見えねえのかよおい。その目は節穴か？テメエら、ここに女漁りに来たんならとつとと帰れよ。迷惑なんだわ」

私に手を伸ばそうとした人の手は払われる。

『プレイヤー名「Kei」だと……？』

『ま、まさかあのギルドのサブリーダー？』

ちなみに、今回のイベントではプレイヤー名が分かるように、プレイヤー名の書かれたカードを首から下げている。

「で？お前……RinRinか」

「は、はい……」

振り返ってこちらを見るKei。その目は私の目を見ていたが……何しろ怖かった。というのも、目つきが少し悪く、怖く見えてしまう。しかも、どうしても見下ろされているという状況が恐怖を加速させる。

「答える。この中に組みたい奴は？」

「い、いません……」

「だ、そうだ。ほら散った散った」

他の人たちも彼の見た目が不良っぽいせいとか、その威圧感に負け人が散っていく。

「じゃあな」

そう言っただけでそのまま去って行くとする。でも、私たちは一人足りない状況は変わらない。見た目や雰囲気は怖そうだけど、でもこの人なら大丈夫。そんな気がした。

だから、

「ま、待ってください！」

「どうした？」

「わ、私たちと組んでくれませんか……？」

Neo Fantasy Online——通称NFO。先輩に教えてもらいは  
まったオンラインゲームである。

このゲームは自由度の高いRPGで、長いことお世話になっている。

最強のNFOプレイヤーは？と聞かれたらランキング上位に食い込む何人かのプレイヤーがあげられるだろう。

また、このゲームの中には数多くのギルドが存在し、ギルド戦ではしのぎを削っている。

ギルドに関しても最強は？と聞かれれば幾つか候補はある。その内の一角を握るのが……

『先輩……』

『ここでは、ぼんちゃんだよ』

いや、リアルのアンタを知ってる身としてはキツイんだよ……！アンタネカマ。俺それ知ってる。ドゥーユーアンダスター？

ちなみに何故ぼんちゃんか。単純である。ポンコツキユート神、略してぼんちゃんである。俺がゲーム始めた時はクールビューティー最高、略してくーちゃんだった。

『……ギルド名変えませんか？ギルドマスター』

『ええ？嫌だよ、サブギルドマスター』

ちなみにぼんちゃんは俺の所属するギルドのマスター、トップである。あ、俺NO.2ね。

『いいじゃん♪「クールビューティーは嗜好、ポンコツキユートは神」で』

『よくねえよ！』

ダンッ！とキーボードを叩く。

『「クールビューティーは神」でいいだろうが!』

『ああつ!? ポンコツキュート舐めるんじやねえぞコラー!』

『ぎげんなカスリーダー! 前まではそうだっただろうが! 戻せよ!』

『ふっ。戻れないんだよ……もうあの頃にはね』

ウチのギルドは有名だ。何故か? こんな堂々と自分たちの趣味嗜好を暴露したようなギルド名。そして(自称)傘下のギルドが数多く存在している。(自称)傘下のギルド名も俺らのギルド名を略した『Ccool Bbeauty Pponkotsu Ccute』を先頭に、その後ろに傘下と書いて名前。例えば『C B P C、傘下、銀髪尊い』とか『C B P C、傘下、ロリハアハア』とか……割とやべえギルドが多い。そしてやべえ奴らを率いてるため……ぶっっちゃけ先輩と俺は割とこのゲーム内で有名となってしまうている。勿論悪い意味でだ。哀しい。しかもリアルイベントでも有名に……涙が止まらない。

ちなみに傘下のギルドリーダーや、新規の奴から『すみません! ギルド名に使用できない言葉が含まれますってです! どうすればいいですか?』と聞かれることが多いが……よしテメエら一回処される。

『ほら! 行くよ K e i ! 今日日は日付変わるまでだからね♪』

『分かったよポンコツ。行くぞ』

『……おい。ぼんちゃんだって言ってるだろうが』



『うつせえ。行くんだろうが』

ちなみに先輩のジョブはルーンナイト……まあ魔剣士つてやつだ。魔法と剣を両立させてる。で、俺はバーサークヒーラー……狂信者だな。回復と体術で押し切る。二人で四人分の動きができる。後は長年の連携で、普通は多人数で行くところも俺たち二人で割といけるときの多い。まあ、ギルドメンバーなり傘下が勝手に着いてくるけど。初心者でも俺らに付いてきてドロップアイテムや経験値を狙うことはざらだが無視している。ギルドのレベルアップはいいことだからな。

そして言うておくと、俺らのジョブ名はあくまで自称しているだけで実装されてないってことくらいか。先輩は黒魔術師、俺はヒーラーだが、先輩は杖ではなく剣を握り、俺は籠手を身に付けた。すなわち本来は後衛や支援職なのに前衛で戦う姿から、周りからはそう言われるようになった。結論。頭がおかしいことで有名。

「……で、このイベントのボスなんですけど、どうにもここからが鬼門なんですよね。どうしても倒すためには火力が足りなくなってる……やっぱり、ボスに対して魔法が無効になっっているのが痛手ですね。こちらが物理攻撃しか手段がないのに、ボスは物理方面に強くなる。どうしても、火力が足りずジリ貧になってしまいます」

放課後。場所、ファミレス。メンバー、俺、りんさん、あこちゃん。現在、りんさん語る。以上状況説明終了。

「だからあと一歩足りないんだよね……けー兄はどうしたの？」

「あのボスか？ 最初は優秀な爆撃機……もとい、ギルメンに神風特攻させたな。数で押し切るって感じか？」

「それじゃ参考にならないよ……それだけの人数が集まらないから困ってるのに」

「そうだな。真面目な方で行くならあのボス、この魔法が有効だ」

「え？これ白魔法ですよ？回復するだけじゃ……」

「いやあ、俺もそれ思っただけどね。実は……」

ウチのギルド（傘下も含める）は一言で言うなら変態が多い。ギルド名からも察してくれて感じだし、その上リーダーは普通は遠距離から魔法打ってる職業なのに剣片手に突撃してるし、俺は回復とかもするけど専らボスに対して肉弾戦を仕掛けてる。

言ってしまうえばうまい人がやるようなプレーじゃなく、縛りプレイのようなエンジョイプレイが多いのだ。リーダーとサブリーダーがこれだから、他のメンバーも相当自由にやっているし、突拍子もない作戦に乗ってくれるし、突拍子もないことを平然と行う。

だから、今回のボスに可愛さを見いだしたバカが、何とボスが傷つけられるのが耐えられなく、回復魔法をかけたのだ。マジでやりやがった。だが、何故かその魔法で回復することはなかった。

「今回のボスは黒魔法とかあらゆる魔法が無効になってるように見えます。だから他の人たちはヒーラーと近接戦闘系で固めています。が、実際は違っただけですよ。ボスは言ってしまうえば効果が反転されてるんですよ。攻撃魔法を喰らえばダメージを受けるのではなく回復するみたいな感じで。これが俺たちのギルドの見解です」

「ふっ……闇に生きる我らに取って光は天敵……」

「そうそう。そんな感じ」

「な、なるほど……確かに筋は通ってますね。でしたら相手にバフをかける魔法をボスに使えば」

「デバフがつかますよ。間違いないです」

「さすがけいさん！よくそんな情報を集めてくれますね！」

「まあ、ウチは常識外れ集団ですから。運営側が用意した裏ルートを見つけるのは得意ですよ」

「正攻法なんて使わない。テンプレなんて存在しない。あるのは自由だけだ。」

「でもさー、それ仕様なの？」

「ううん。仕様だよ。魔法が無効になるとなればパーティーは自然と支援役と前衛が多くなる。支援役がこのルートで鍵になることは少しやれば誰もがつかめる。だけど、真の価値は、回復することじゃなくて、ボスに対しての有効打を与えることだったんだよ。しかも、このイベントのボス行くまでに、NPCが『支援役は連れて行った方がいい』と言ってくれている」

「そっか！伏線ってやつだね！」

「相変わらずゲームに関してをよく話すなあ……ちなみに俺のあの黒歴史ノートを見られてからはさらに饒舌に喋るように。なるほど、こんなにあつ込んでおいてもついてこれると。認められたと。……まあ、いいけどさ。」

「話は変わりますが、今度 Roselia の三人も今度 NFO を一緒にやろうって話をしています」

「ふっふっふ。我らの真の姿を見せるときが」

「待て、我らって俺も含まれてるのか？」

「もちろんだよ！」

「やる日は連絡しますのでイン出来たら来てください」

まあ、面白そうだからなあ……紗夜さんとかはまつたらガチでやりそう。

この時はまだ知らなかった。まさか、あんな事件の日に彼女たちがログインするなんて……

# 文化祭！って言いたいけどなあ

そして金曜日。文化祭1日目である。この日は一般公開はなく、内輪で盛り上がりうぜーって感じ。まあ、いいや。

で、クラスの出し物は喫茶店。サッカー部の出し物は焼きそば店。両方のシフトを淡々とこなして、

「ではスケジュールの確認を行います」

明日のビッグイベント、各部対抗バンド対決の最終打ち合わせをしていた。

「まず、代表者は各チームここに居るメンバーで問題ないですね」

そこに居るのは軽音楽部代表、野球部代表、陸上部代表、柔道部代表に後サッカー部代表の俺の計五名。

結果的にこうなったが……まあ、色んな部活が手を組んだり競合したり買収したりなので……もう何も言うまい。

「明日の演奏順ですが、軽音楽部↓野球部↓陸上部↓柔道部↓サッカー部ですね」

ちなみに俺たちはトリである。まあ、この順番にも各部の作為が見え隠れするが……いや、ほんと、どうなってるだろう。

「で、サッカー部まで演奏終了後、観客による投票並びに生徒会、教員による開票作業を持って、最後に優勝チームの発表。優勝部活に後日賞金を与えます。また、裏事情は不問とします」

そうですね。裏で凄いやりとりしてますからね。俺たち以外。

「アンコールは禁止。ただし、最後、優勝が決まった後に優勝部活のみ許可。これはいいですか」

頷く代表たち。まあ、うん。俺たちは一曲しか練習してないので……俺たちがアンコールを言われることはないと言われても困る。

「では会場準備に行きましょうか。準備は皆さんで。片付けは今回のバンド対決での最下位の部活が行う……これもよろしいですね?」

片付けは生徒会も大変だし、負けた奴らに任せようとなった。当然他の部活は快く条件を飲んだ。曰く、最下位は決まってるとのこと。

「準備が終わり次第希望されたバンドの皆さんが最終練習でよろしいですね」

うちの高校の体育館は少し広い。まあ、運動部が盛んだしなあ……で、会場準備とはいえ観客の椅子を並べるとかはしないので楽なものだが。

「まあ、優勝は俺たちが頂くよ」

「いやいや、俺たちだな」

さつそくバチバチにやっている。

「さつさと終わらせてえ……」

「ははつ。サッカー部は確か何もしてないんだろ？」

「敵にあらず。片付けは任せた」

「へいへい。うちは自由にやりますよ」

他の部活が動いていることくらい知られている。そしてサッカー部はそういう活動をしていなかったことも知られている。スパイ活動も盛んに行われていたので……いや、買収の次はスパイ？お前ら本当に阿呆なのか？

ただ、サッカー部にもスパイを送り込まれたが……うん。気付いたら居なくなつてたな。こいつら曰く本当に眼中にないらしい。

じゃあ、何でそんな俺たちにトリを譲ってくれたのか？単純である。俺が都合で最後がいいって頼んだら、快く譲ってくれた。それくらい譲つても変わらんとのこと。まあいいけど。

だから構図としては他の部活がここ二週間バチバチに戦っている中、我らサッカー部は蚊帳の外だった。いつも通りお外に走りに行つて、機材を借りて夜とか体育館で練習してつて感じた。他の部活に一切の干渉をせず（部長たちが殴り込み一回行ったことは除く）自分たちの演奏を上達させようとしてきた。



準備も終わり、サッカー部の練習の番になる。一通り通して……

「……………うし。まあ上出来じゃないか?」

「……………だね。冬木のボーカルも問題ない」

「そうだよなー相当練習した?」

「あはは……………まあな」

先週はスパルタ指導を喰らったからな……………あはは。この一曲だけを仕上げるために友希那さんの眼はガチに、紗夜さんの指導は厳しくて大変だった。

え?あの後をやったのだった?やったよ。ひたすら歌わされたよ。リサ姐がストツパーの役割を果たしてくれなかった。悲しかったです。

ただ流石ボーカル、友希那さんが喉のケアとかそういうことをしろと叩き込まれて……………あの時の眼は怖かった。紗夜さんに泣きつこうとしたら紗夜さんの目も怖かった。

「……………で、だ。真面目な話。他の部活はどうなんだよ」

「ん?あー技術は知らんけど、まあ優勝するためにあの手この手。奮闘しているな」

「……………優勝は諦め。一曲だけやって潔く去ろう」

「サッカー部の部員だけでも入れてくれるだけ感謝かな」

俺たちはこんな感じで最初から優勝なんて考えていない。いつも通りやっていつも通り去るだけだ。

「囁むなよ？MC」

「うっせえ。そこまでダサイことしねえよ……多分」

ちなみにこのキャプテン。マジで全部丸投げしてきやがった。オイコラ俺の仕事量が……まあいいけど。

「じゃあ、片付けも頑張ろうぜ！」

「「おー！」」

そして既に最下位を取る自信もある。悲しきかな俺たち。

次の日、店の手伝いもしたが本日のメイン、バンド対決が体育館で行われていた。

その舞台裏、今は柔道部を筆頭とした連合たちが演奏している。実は、体育館だけでなく校舎内外にある放送設備を通して流れている。だからサッカー部の客が少なくてもこの学校の敷地内にいる限りこちらの音は聞こえている。

「そろそろ終わりだな」

「ああ。そうだお前ら。俺たちの演奏が終わったら機材の撤収とか運ぶのやつといて」「お前は……ああ、ボーカルだからないか」

「……それくらいならいい」

お互い緊張した様子はない。まあ、俺たちはもう順位度外視で、楽しく行こうぜって感じだからな。だから観客がサッカー部だけって状況でも全然オツケーって感じだ。

『ありがとうございました!』

すると柔道部代表が挨拶を終えて戻ってくる。まあ、彼らも俺らも借り物を使うから機材は一緒だ。

「行くか」

「だな」

「……行こう」

「よし」

俺が先頭に立ち舞台上へ。客は……まあ、サツカー部プラスアルファだな。何人かは知っているが……まあさすがにプロじゃなくて素人集団って分かってる、しかもここに居なくていいしほとんどのやつは投票先をもう決めてる。

まあ、こつちの方がやりやすいか。

『では次はサツカー部です。どうぞー』

生徒会がマイクを渡してくる。さあ、始めようか。

『サツカー部です。お願いします。さっそくやっていきますね』

サイノウサンプラー。この文化祭でやるようなものは分からないけど、テンポも比較的ゆっくりだから、やりやすいのでは？という意見のもと採用された。

はつきり言おう。割とまともな理由で選ばれたと。後そんなに長くはないからつても理由だ。

この曲、何度も歌つてると、時折昔の紗夜さんと日菜がちらついたんだよな……誰か理由分らない？何というかこうなっていたかもしれないと思うと……いや、やめよ。これ以上は踏み込んじやいけない領域な気がする。

つと、そんな感じで1曲が終わっていく。まばらな拍手……まあいいかな。俺として

……いや、俺たちはやりきった。それだけで充分だ。

『俺がこの曲を歌い上げるために、ある人たちが協力してくれました。だから俺としてはその人たちに送ったつもりです。まあ、曲の選択はどうかと思いますが……』

と、静かに話を締める……ように見せかけて、笑顔で続きを語る。

『さてと、じゃあ、始めようか……俺たちの逆襲を』

「「はあ？」」

後ろにいる三人が驚いた声を上げる。舞台袖にはローブを来た五人組が。

「キャプテンたち。あの人たちの準備を手伝って」

「え？ あれって……」

「俺が頼んだ、ウチの部活のもう一つの代表チームですよ」

困惑するキャプテンたちを動かしてセッティングしてもらおう。その間に俺は、

『さあさお前ら！ 各部対抗バンド対決と言って今まで男のやつしか聞いてねえからそろそろうんざりしてきただろう！ そろそろ心から熱く燃え上がれるような演奏を聞きてえころだろ！ そんなお前ら今すぐ体育館に來い！ ここからの三曲は俺の知る最高のガールズバンドを用意した！ この音をマイク越しに聞くなんて惜しいことをするつもりかあ！ 何部も買収もスパイも裏切りも関係ない！ さあここに集え！ 全ての思惑を無に帰すような圧倒的な力を見せてやるよ！』

マイクパフォーマンス……とまで行かないがこの会場を少しでも盛り上げるために動く。

俺のこの言い方に少しずつだが体育館に人が戻る。と言つてもまあ、まだそこまでか……くつ。もう少し行けそうだったのに。

「悪いな。流石に一杯に出来なかつたわ」

「……………後は私たちの演奏で引きつけるから」

「流石だな」

俺はマイクを渡し、そのまま舞台袖に向かう。

「かっこよかつたですよ」

「ありがとう」

「後は見ていてください」

そして彼女たちは一斉にまとつていたローブを脱ぎ捨てた。

『Roseliaよ。ここからの三曲は私たちが演奏するわ』

「「うおおおおおおおつ！」」

今まで男しか立っていなかった為、まずここに美少女が五人立っただけで湧き上がる。

だが、俺は彼女たちをそんな癒しとか劣情を求めて呼んだわけじゃない。

俺たちみたいなエンジヨイ勢でも、他の奴らのような金のためじゃない。ガチ勢のバンドの演奏を披露させてもらおう。

『まずは一曲目』

そして彼女たちの演奏がスタートした。

一番盛り上がるのは最後だったりする

「あ、悪魔の賛歌が……滅びの歌が……！」

目を回しながらソファアに倒れ込むあこちゃん。

「うう……闇の呪文……」

耳を押さえ、ソファの陰にうずくまるりんさん。

「……………」

目を開け、口を少し開き魂が抜けた感じの友希那さん。

「い、いめん……」

笑顔を作ろうとしながらも明らかに無理してるリサ姐。

「ぼてぼてぼてぼてぼて」

ポテトをがむしやりに食べることで耳からの情報を遮断しようとする紗夜さん。

カオスである。まさにカオスである。

ただこのカオスこそが俺が初めてRoseliaの前で歌った、カラオケ内の光景である。



何故 Roselia が俺たちの高校で演奏していたか？それはこの前、カラオケに連れて行かれた時だった。

「……はあ……つ、疲れた……」

「……………だいぶマシになったわ」

「そうですね。最初の地獄を見せていたときに比べれば普通になりました」

俺の歌唱力はドラ○もんのジャ○アン並って自他共に認めている。そのため、そもそも歌うこと自体そんなに好きじゃない。……まあ、今は聞くことは好きである。

「でも自分でも音が合って来ていることは分かりますよ」

「絶対音感持ってたんだけ？」

「……俺なんかに要らないものですよ」

絶対音感。これを持っていることを自覚したのは中学だが……まあ、あんまり公言してない。

だって、絶対音感持ち⇨歌が上手いとか思われるからね。ふざけるな。絶対音感持っても音痴な奴もリズム感がないやつも居るんだよ。しかも自分で歌ってて音外してると分かってしまうのが悲しみを加速させていくって言うね。

「でもさあ。文化祭でバンドやるんでしょ？」

「やるというか……やらされるといふか……」

「そう言えば、そもそも何でそんなことになったのですか？」

「ああ、説明してなかつたですね。えーっと……」

ということでもやる羽目になった経緯を説明する。そういやこの人たち、何でそう言った事情を聞かないで快く引き受けてくれたのだろう？すごい不思議だ。

「大変だねー」

「ホントですよ……しかも他の部活は優勝するためにあの手この手を使っていますしね。生徒の買収にスパイ活動。ははは、笑えてきますよ」

ダンツ！ダンツ！ダンツ！

軽く笑つてると机を叩く音が3回分聞こえた。見ると静かにだが怒りを感じる三人がいた。

「ゆ、友希那さん？紗夜さん？リサ姐？え、えつと……」

「……………許せないわ」

「ええ。ムカつきますね」

「アタシもこれはねえ」

三人が言うに、勝ちたい、優勝したいという強い思いを抱くまではいい。でもそのために、バンドの演奏技術を磨くのではなく、自分たちが勝つためだけに買収したり、他

者を蹴落とすような真似は絶対に許せないとのこと。

「……………ああそうだった。この人たちはそういや、バンドをガチでやって、頂点を本気で目指している人たちだった」

何が言いたいかと言われるとどうやら俺は、彼女たちのスイッチを入れてしまったよ  
うだ。

「……………慧人。確かまだ杵はあるのよね」

「ええまあ。ウチの部活の杵が一つ空いてますが…………」

空いているというか、埋まる予定がないというか…………

「アタシたちにその杵をくれないかな？」

「それは別に構いませんが…………」

むしろこの空気でNOと言えるほど俺強くない。彼女たち。怖い。

「腐ってるその人たちにホンモノのバンドを見せつけてやりましょう」

三人の目には炎が灯っていた。

「……………分かりました。手はずは整えておきますよ」

あいにく俺はその炎を消す方法を知らない。

「よし、こうなったら慧人くんにはもっとうまくなってもらわないとね☆」

「……………え？」

「……………私たちの前にやるのだから」

「いやちよつと？」

「もう一回行きますよ。慧人さん」

嘘だろ？と言おうとした頃には既にメロデーが流れ始めていた。

この後更に厳しかったです。

Rosealiaが三曲歌い終える頃には、会場であった体育館は満員。それどころか体育館から外も入れなかった人たちが一杯になっていた。鳴り止まないアンコール。沸騰してしまうのではと錯覚させられるほどの熱気。俺たちの……いや、今までの全てと段違い。付け焼き刃の俺たちでは同じ次元に立てない、いや、立たせないような圧倒的な力を肌で感じた。

今回の経験を通してRosealiaの……いや、彼女たちの凄さを改めて知ることができた。Rosealia格好いいなあ……後、演奏している紗夜さんやっぱ神だわ。うん。最高。

「……………で。何の御用ですか。校長先生」

文化祭も終わりがけ、何故か放送により俺は校長室に呼び出された。全校放送である。

「……………素晴らしい演奏だった」

「は、い？」

「短い期間で頑張った君たちもだが、彼女たちの演奏は実に素晴らしいものだった」

「…………そりやそうですよ。アイツらの凄さは俺もよく知っています」

あの演奏をするのにどれだけ努力しているか。個々人の長年の努力までは分からな  
いにしても、Rosealiaが結成されてからなら俺はよく知っている。

「でも、アイツらは今のレベルで満足はしてないですよ。絶対に」

「……そのハングリー精神は私たちも見習うべき姿、君たちに学んでほしい姿だね」  
「そうですね」

「そろそろ本題に入ろう。集計の結果、君たちの部活が……まあ、正確には彼女たちだが、断トツトップだったよ」

「おお……」

全投票者のおよそ98%くらいがRoseliaに票を入れたらしい。本当にやりやがったよアイツら。さすがすぎるわ。本当に全部活の思惑をぶち壊したよ。

「で、これはお願いなんだが……彼女たちにもう一回演奏を頼めないだろうか」

「と言いますと?」

「このイベントは予想以上の盛り上がりを見せた。なら、最後の最後まで盛り上げてもらいたいのだよ。一曲で全然かまわない。だから……」

「分かりました。聞いてみますね」

とりあえず、スマホを取り出して、

「もしもし、紗夜さん?」

『や、やっぱり何かやらかしたのですか! 慧人さん!』

「待って。第一声から俺への印象が酷い」

『校長先生からの放送による呼び出しなんて普通はないですからね。何をやらかしたか皆と話していたんです』

「……おう………そこに俺の味方はいないんだな」

悲しい。マジで悲しい。

『ところで何故電話を？ま、まさか今生の別れを……』

「ないですよ。そろそろボケるのやめましょう？」

『ボケてません。本気です』

「……………」

どうしよう。この人無自覚だった。よし。秘技『スルー』発動。

「紗夜さんたちにお願ひなんです……この後、一曲だけでもいいんで、弾いてもらうことって出来ます？」

『ふふつ、慧人さんからの願ひですか……それくらい構いませんよ。寧ろアンコールに、ルールとは言えお答えできなかつたのが悔やんでいたくらいですから』

「流石です。ありがとうございます」

『ええっ?!おねーちゃんたちもう一回演奏するの!?!あたしもやりたいやりたい!』

『ひ、日菜!電話中は静かにして……』

あーそーいや日菜も俺たちの演奏見に来てたな。何でも、紗夜さんが出るついでにつ

て。いやお前の目当て紗夜さんだろ。

「分かった。ちよつと聞いてみますね」

『すみません……』

ということ、

「校長先生。彼女たちからはオツケーで、他にも演奏したいという奴がいるのですが……」

奴つて言うか日菜というか。あれ？パスパレとしてじゃないよな？だって、今日は千聖が仕事入ってるって言つてたよな？そのせいで俺の醜態を生で見れないって悔やんでいたよな……？いや、醜態確定は酷……待てよ？そう言えば花音がスマホをずつと構えていたよな……後彩も。あれ？もしやあの二人つて刺客的な何かだったりします？はははつ。あの二人に限ってそんなわけ……あるなあ。

「勿論、大歓迎だよ」

「ありがとうございます」

よかつた。何か乗り気だ。そういやアンタがこれ言い出したんだもんな。

「オツケーだつてよ。日菜」

『やったー！』

『なら皆でやりましょうよ！そうすればきつと楽しいわ！』



「その声はこころか？」

弦巻こころ。ハロー、ハッピーワールド！のボーカルでリーダー。無茶苦茶金持ち。やりたいとか願いは望めば叶う破天荒お嬢様である。

……：そういうやコイツも見に来てたな……：理由は、りんさんのキーボードとかあこちゃんのだラムを運ぶために黒服さんたちをお借りしたら、そのまま着いてきたって感じだ。マジでありがとう。黒服さんたちマジで感謝してます。

後来ていた面子を挙げるとすれば、あこちゃんの姉の巴とか、巴と来ていた蘭やモカ、そーういや香澄にたえも来ていたつけ？理由？そんなの知るわけがない。

「おいおい皆ってまさか……！」

『任せて！ここに居る皆の楽器と衣装はすぐに持つてこさせるわ！』

……：電話越しで話が思ったより壮大になってるが……：黒服さんたちごめんさい。これは俺の予想外です。

『スケジュールを教えて頂戴！』

「え？あー大体三十分後にやるんで……：最初はRoselia。後は順番も何もないです」

『つまり自由ね！』

そうだな……：自由と書いて無法地帯ってやつだ。

『色々確認したいのですぐに戻ってきて下さい』

「あ、はい。すぐ行きます」

というわけで電話を切って……

「校長先生。後のことは全部俺にやらせてください」

「分かった。告知なら任せてくれ」

アンタ乗り気だな？ まあいいけど。

で、体育館のステージ裏に戻ってくると……まあ何だ。凄いやる気だなあ……。

「どうします？」

「とりあえず校長から俺の好きにしていって言われた」

「さっすがー」

「こうなったらトコトンやるわよ！」

「「おおー！」」

あはは……何でこうなったか聞かれたら、まあ皆のノリの良さのおかげだな。

黒服さんたちが大出動。デカイトラック的なのもやって来てここで着替えてとのことだったり、着々と準備が進められる。俺もこの後どうするかに対して、意見ってほどではないが出したりしたが……皆それぞれ言ってくるので俺はまとめることを放棄した。ええいお前らもう自由にやれ！

そんな中時間になったので俺は壇上に赴き、校長から優勝の祝福を受けておく。すごい観客の数だがお前らの居る理由なんて分かってる。

そして、マイクを片手に……

「お前らあ！もう一回Roseliaの演奏が聞きたいかあ！」

『『『おおおっ！』』』』

「声が小せえぞおっ！」

『『『おおおおおっ！』』』』

「よっしゃあ！じゃあ、ここからは彼女たちの時間だ！最後の最後まで盛り上げていくぞ！テメエら準備はいいなあ！」

『『『おおおおおおおっ！！』』』』

「始めるぞ！さあライブだあっ！」

ドオンッ！

そう言った瞬間、背後から爆発音が聞こえて、スモークが立ちこめた。え？ちよつと待て俺その演出聞いてない。

「お疲れー」

「「お疲れー」」

場所はファミレス。打ち上げをしていた。メンバーは俺と彼女たちである。

「何かとんでもないことになってたわね……」

「いいじゃん☆何にも縛られずに自由にやれてさ☆」

「あたしはおねーちゃんと弾けて楽しかったよ!」

「あこもおねーちゃんと叩けて楽しかった!」

R o s e l i a が演奏した後は本当に自由だった。そもそも R o s e l i a 以外が

五人全員そろっていないため、バンドのメンバー関係なし、割とごちゃ混ぜでやっていた。

日菜も紗夜さんと並んでギターを弾いてて……何だかそれだけでも感動しそうななったの俺だけ？あ、リサ姐や友希那さんも共感してくれる？だよ。夏前とかだと絶対考えられなかったもんね。

後はあこちゃんも巴と一緒に……二人ドラムってすごい迫力だと思いました。りんさんもキーボードが足りてなかったからか色んな人たちと合わせてたし。ここに乘せられる花音と、悪乗りしたモカに付き合わされる蘭とか……あ、そういう彩と日菜が最初に出たときには凄い盛り上がり過ぎていたよな。何でもあれってアイドルの……！とか何とか。そのことに彩は地味にガッツポーズしていた。……そんなにアイドルの認識が嬉しかったのか？

まあ、そんな中たえは歯ギターやりたいとかウサギ呼びたいとか言い出したので流石に止めたり、香澄がボーカルが五人そろってるから何か一緒に歌おう！って言い出してきらきら星とか歌ってたんだっけ？後は……Roseliaの無茶ぶりで俺もまた歌わされたり……うん。ごめんね。一曲しかまともに歌えなくて。ごめんね。実力が段違いで。友希那さんすげえ……。

ああそうだ。そういうや、今日他の部活が演奏していたやつも弾いたっけ。これは俺の

いたずら心つてやつだ。要するに格の違いを見せつけてやろうと……まあ、俺もやられたんでお相子で。大丈夫。弾けるメンバーで即興バンド作つてやったから。……何でそれで出来たのだろう。皆すごいなあ。

もし今回の件で責任問題が起きても責任は全部俺が取るから。……嘘です校長が取ります。

「でも、打ち上げはいいのですか？ 私たちの方に参加して」

「いいですよ。ウチの学校は打ち上げ禁止なので普通は縮こまつたつてやっています」

「じゃあ見つかつたら慧人くんだけ怒られるんだ」

「頑張つてね」

「生きて帰ってきてね」

「今まで楽しかったよ」

「また会おうね」

「おい、もう怒られる前提かよ。いいかお前ら。バレなきやいいんだよ。バレなきや」

「言つてることが悪人……」

「犯罪者のそれだね……」

「ふはは〜じゃあモカちゃんがしつかり密告しておくね〜」

「……………宣言したら密告じゃないよね」

こんな感じで騒いで終わりました。

余談だが、本当に学校側に密告された。

週明けのHRで担任に『打ち上げはするならばレるなよ？特にファミレスで他校のラ  
イブしてくれた女子たちと一緒に居たサッカー部のく』と言われ、その後サッカー部や  
彼女たちの演奏の虜になった奴ら……つまり、全校生徒のほとんどと鬼ごっこが始まる  
のはいつもより規模が大きくて大変でした。

増えた部費は何に使おう？そんなことを考えながら市街を爆走しています。

# 開戦の鐘はもうすぐ鳴る

それは金曜日の夜だった。

「りんさんが言うには、明日Roseliaのメンバーとログインするって話だったわけ？」

午前中に部活があつたため最初からの参加は無理と伝えたところ、途中からで全然OKですらしい。Roseliaのメンバーか……リサ姐は性格上何となくヒーラーやリそうで、友希那さんは……何か普通じゃないの選びそう。紗夜さんは……女神かな。ジヨブ名ゴッド。……何でこのゲーム女神って職業ないんだろう。作ってほしい。てか運営作れ。紗夜さんの為に作れ。

「よし、先輩にちよつと掛け合おう」

そう思いログインする。先輩は……よし、インしてるな。

『チーッス。ぼんちゃん』

『Keiか……』

話し掛けると何処か神妙な面持ちをする先輩（女アバター）。

『ちよつと来て』



ということではギルドホームの一面に移動する。一体何なんだろう？ギルドマスターの称号をくれるって話しか？なら大歓迎だ。さっさとギルド名を「クールビューティーは神」に変えるんだ。

『……………お前のところに何か届いていないのか？』

『ちよつと確認するわ』

メッセージボックスを開ける。まあ、相変わらず変態どもからの相談は来ているが……………ん？なんだコレ。一個だけ明らかにおかしなやつが混ざっている。

「えーつと？」

要件が……………愚民どもへ？愚民？まあ開いてみるか。内容が……………

「蒙昧な愚民どもへ。

汝らの蛮行は許容できないと言わざるを得ない。

汝らのような者たちを我らは肅清する。

我らは正しきNFOの世界を取り戻すため、汝らを潰すことにする。

潰されたくなければこの世界から尻尾を巻いて逃げるがよい。」

……………何これ？

俺らが蛮行？いつそんなことした？

『確認しましたよ。悪戯ですか？新イベですか？』

『最近、(自称)傘下のギルドがいくつかやられたそうだな。こいつらによつて』

ギルド名「正義の執行人」……やべえ。なんて言うか……笑えるギルド名だな。だつせえ。自分たちが正義だと思つてるイタイ奴らじゃん。

『で?どう返したんですか先輩』

『今お前にも送る』

すると通知が。えーつと?

「よろしい。ならば決闘だ。」

へえー。

『ちなみに明日だ』

『じゃ、頑張つてくださいね。俺、明日はフレンズとここで楽しむんで』

『果たしてお前はコレを見てもフレンズと遊べるかな?』

『え?』

え?そう思うと、また通知が。えーつと?さっきのに対する返信か。

「どうやらクールビューティー、ポンコツキュートとそんなくだらないことをほざいてる汝らには我らの崇高さが分からないようだな。」

いいだろう。ならば明日の13時より、我ら「正義の執行人」と汝らのギルドによる対抗戦を執り行う。

汝らが何人で来ようと、傘下を引き連れようと我らにかなうことはない。

明日が汝らの命日。クールビューティー、ポンコツキュートと二度と騒げないようにしてやる。」

……………ほう。

『先輩。……………ぶつ潰すぞ』

『ああ。ポンコツキュートをバカにされて黙って居られるか』

『ポンコツキュートはどうでもいい。クールビューティーを無下にした罪を償わせてやる』

『……………おい。ポンコツキュートはどうでもいいだと？クールビューティーの方がどうでもいいんだよ』

『……………口を慎めよ？ああ？』

『やんのかこの野郎？』

『テメエ、明日の決闘では背中に気をつけろよ』

『テメエこそ。手が滑って首を切り裂いても文句言うなよ』

今日は白金さんと宇田川さんの提案により、彼女たちがプレイしているNFOというゲームをすることになりました。本当は慧人さんも途中合流のはずだったので、どうやら急用が出来たようでキャンセルとのこと。……………せっかく慧人さんと遊べると思っただのに…………。

『あれ?』

一つクエストをこなして、Roseliaのメンバーが集まったとき、宇田川さんが疑問を出します。

『Keiがログインしてる』

『あ、本当ですね。彼がログインしています。でも、おかしいですね（・―・？） 急用で言っていたんですが、それはゲーム内のイベントだったのでしょうか？ わざわざ私たちの方を断つてまで一体何の用事があるのでしょうか？』

ちなみに白金さんはチャットでは物凄く喋ってくれます。普段からこれくらい話してくれば良いのですが……いえ、普段と足して二で割ればちょうどいいですね。

『何か情報によるとギルド対抗戦やるらしいよ』

『ギルド対抗戦？』

『えーっと、最近実装されたモードで、ギルド対抗戦。二つのギルドが争うもので、両ギルドマスターの承認の元で行われます（^▽^）／ 作られた経緯については省略しますが、こうしてギルド対抗戦が行われるときは全プレイヤーに通知が行きます。争うのは……え？』

私たちも見られるようで、その通知を見てみる。えーっと……

『ギルド、クールビューティーは嗜好、ポンコツキュートは神とギルド、正義の執行人………』

『どっちも面白い名前ね』

なぜかは……分かりますね。クールビューティーって入ってる時点で慧人さんの顔が浮かびます。

『前者のギルドはK e iがサブギルドマスターを務めているところです。後者はN F Oの治安維持を掲げ、ふさわしくないギルドを潰していると有名なところですよ』

『つまり？』

『わかりやすく言うなら自称風紀委員が風紀を乱す人たちを粛正しようとしています』

『なるほど』

『分かりやすい』

『ふむふむ』

なるほど。それなら凄く共感できる。

『ただ、正義の執行人と言うギルド……独裁に近いです。自分たちの価値観で決めたいと言われています』

でも、慧人さんの所属するギルド名……初心者私たちでも頭がおかしいと思える。まあ、慧人さんが所属するなら納得ですが。

彼が今更このギルドのトップの方と言われても……何というか普通だ。寧ろこのギルドに入っていないなかったら彼の正気を疑っていた。

『ちなみに観戦が出来ますが。行きますか？』

『面白そうだしいいってみよー』

『いいわよ』

『さんせー』

『もちろん行きますよ』

ということでは白金さんの案内の下、対抗戦が行われる場所まで移動していく。そこは異様な盛り上がりを見せていた。

『さあ！我らが長、ギルド「クールビューティー」は嗜好、ポンコツキュートは神」とギルド潰しの異名を持つギルド「正義の執行人」！さあどちらが勝つか！今のところ双方に多くの賭け金が賭けられているぞ！さあ君たちも賭けてみないか！』

『こちら出張、武器の修理屋です。皆様からの修理絶賛受付中です』

『へいへい！こつちのアイテムは安売り中だ！よつてみないかい？』

『君たち！銀髪に興味はないか！我らと少し話をしないか！』

『いやいや！ロリこそ魅力的だとは思わないか！』

……本当に、異様な盛り上がりを見せている。

『……………何です？あれ』

『えーつと、「クールビューティー」は嗜好、ポンコツキュートは神』は傘下を多く持っている有名な大手ギルドであり、こういうお祭りごとには率先して参加、盛り上げるという習性があります（△▽△）／』

『と（い）う（は）と（は）』

『自分たちのトップのギルドのピンチすらお祭りごととして盛り上げています』  
『ふっ。狂乱の宴の開催……』

『阿呆なの？』

『阿呆です』

『阿呆だったか……』

『阿呆なのね……』

何故だろう。無性に頭を抱えてしまいたくなる。……慧人さん……何やってるの……。

『さあ皆様お待たせしました！これよりギルド対抗戦を開催したいと思います！』

すると実況者が……ん？実況者？

『ちなみに普通のギルド対抗戦には実況者は居ません』

………ですよね。

『実況は私！ギルド名「CBPC、傘下、声フェチ」のギルドマスターが務めさせていただきます！』

『『『おとおおおつ！』』』

『まずはこちら！ギルド名「正義の執行人」！数多の我らが同士のギルドを肅正してきた彼ら！遂に本陣を落とさんと名乗りを上げたぞおつ！』



何故だろう。あんなギルド全て滅んでいいと思う。

『こちらのエントリー数は100人！さすが全員が正義を心に秘めたものたちだ！誰一人欠けることなく全員参加です！』

『やっちなまえ！』

『そうだ！あいつらを潰すんだ！』

『俺の友人はアイツらに洗脳されたんだ！』

『息子を！息子を正気に戻して！』

『最近アイツらのせいで夜な夜なシヨタが夢に現れるんだ！俺ロリコンなのに！』

100人つてすごい人数……ギルドの最大人数らしいが……それだけの人が同時にログインするなんて……。

『さぁ続いて現れたのはこの男！ギルド名「クールビューティー」は嗜好、ポンコツキュートは神」のサブギルドマスターKeiだあつ！』

『『『おとおおおつ！』』』

すると黒いローブを着た一人の男性が100人の前に現れる。拳を空高く掲げているその姿……

『あれが……』

『ええ。あれです』

『……………私たちと同じ感じなのね』

『リアルとほとんど一緒だね』

『頑張れー！Kei！』

リアルでもよく見る姿。それと殆ど変わらない……………さすがのクオリティだ。このゲーム。

『『Kei！Kei！kei！』』』

『流石はKei！その人望の厚さは折り紙付きだあつ！』

何というか……………有名人なのね。彼って。

『そして続いて現れたのは我らがトップ！ギルドマスターのぼんちゃんだあつ！』

『『Fooooooooo！』』』

そして現れたのは同じく黒いローブを着た一人の女性……………え？女性？

『美しすぎるぜぼんちゃん！』

『最高！結婚してくれえ！』

『皆〜！頑張っちゃうからね♪』

『『マスター！マスター！マスター！』』』

ぼんちゃんが観客に手を振るだけで沸き立つ。

『ぼんちゃんはKeiと共にあのギルドを立ち上げた創始者と言われています。そして

ぼんちゃんはりアルが一切謎に包まれた存在。噂ではK e iとリアル繋がりがあると言われていますがそれ以上は何もないです』

……………その言葉を聞いて何故か胸がチクリとする。

『何と！こちらは以上2名のみが参加する模様だ！これは面白いことになってきたぞ！』

『さすがマスターたちだ！やることこのスケールがちげえ！』

『ふっ。あれは我らがボスたちによる情けなのだよ』

……………え？

『それって大丈夫なの？』

『圧倒的に人数に差があるわよ』

『これには驚きが隠せない…………』

『格好いい！ジャイアントキリングって感じかな！』

『多分少し違うかな』

そんなこちらの驚きをよそにフィールドでは2人と100人が向き合った。

『汝らがそこまで愚かとは。たった二人で勝てるなんて思い上がった真似を』

『知るかよ。ただなあ…………クールビューティーを馬鹿にされて黙って居られるか』

『そうだよ♪ポンコツキュートをこけにされて黙って居られないんだから♪』

『絶対に後悔させてやるから覚悟しろよ？』

『馬鹿にした相手が悪かったって教えてあげるからね♪』

何だろう。慧人さんがクールビューティーに関する事で人間を超えることはよくあるけど……大丈夫か心配になってくる。

そんな中、戦いの火蓋は切られようとしていた。

勘違いって起きてるの知らないと困るよね？

『さあ。では、ギルド対抗戦……スタート！』

カウントダウンが0になり、開始のゴングが鳴ると同時に二人が敵陣に突っ込んだ。

『おおっと！開戦と同時にK e iとぼんちゃんは敵陣へ！K e iの支援術により二人の全ステータス上昇のバフと状態異常耐性、自動回復が付与された！いや、バフの速度なら負けてない！「正義の執行人」側のヒーラー組も一斉にバフをかけた！』

『タンク！支援組を守れ！魔法部隊！詠唱開始！』

大きな盾を持った20人くらいが、後ろに控えているヒーラー10人を守ろうと肉壁となる。さらに魔術師が一斉に魔法の詠唱を始め、背後からは前衛職が逃げ道を塞ぐようにじわりじわりと迫る。何という圧倒的数の暴力。

『テメエらが数の暴力ならこっちは力でねじ伏せるだけだあつ！』

『そういうこと♪』

すると、ぼんちゃんさんを遙か上空に蹴り飛ばした慧人さん。そのまま、ぼんちゃんさんは魔法を唱えると……

『ねえ、あれって……』

『隕石だね☆』

いくつもの隕石が空から降り注ぐ。……………え？

『あれは魔法の中でもトップの威力と範囲を誇る魔法ですね。術者が指定した範囲に無差別に隕石を落とします。デメリットとして、味方を巻き込むなどがあげられますが……………』

味方がKeiしかいないので問題ないです。と補足する。

『出たあつ！ぽんちゃんによる強襲！その攻撃に今まで何人の味方が沈んだか分からな  
いー』

いや、味方。沈めたの味方はダメでしょう。

『対して「正義の執行人」の魔術師たちは魔法で隕石を破壊しようと試みている！既に幾つかの隕石が粉碎しているが……………！』

『じゃあ、重力を強めちゃうね♪』

『何と！粉碎した岩が物凄いスピードで降り注ぐ！空から岩の雨だあ！これでは、盾を上  
にやって防ぐしかない！そもそもKeiは無事なのか!?!』

『ついでに雷追加♪』

『ほ、ぽんちゃん！容赦ない追撃だあ！』

『流星だぜリーダー！』

『やっちまえー！』

……目の前には凄まじい惨状が。空から隕石。それを壊せば無数の岩の雨。さらに雷が幾つも落ちてきている。もうあの人がラスボスではないだろうか。

『おおっと！徐々に「正義の執行人」の生存者が減っていく！』

目の前にある大きな表示。そこには双方の現生存者の数が出ている。「正義の執行人」側は最初は100だったのが段々と減っている。それでもまだ差は凄いが……あれ？もう片方が2つてことは慧人さん生きてる？

『な、何とK e i！盾で雨や雷を塞いでいる彼らの空いたボディを殴りつけていく！』  
『なるほど。ぽんちゃんさんの魔法を防ぐために盾を上に向ければ、K e iさんが空いた胴を狙い沈める。K e iを防ごうとすれば上からの魔法を防げない。見事な連携です』

そんな惨劇も一旦キリがつく。フィールドを見ると既に酷い有様に。

『んーまだ半分残っちゃったか』

『そうだな。後20くらいやれると思ったが』

『でも、目標のヒーラー全潰しは完了したね♪』

『まあ、ヒーラーが居なくなりや楽だな』

何事もなかったかのように話す二人。周りが回復アイテムを使用していることをあ

えて無視して居るみたいだ。

このギルド対抗戦はアイテムは有り（ただし当然所持数に限度アリ）。ヒーラーが居なくなつたということは……もう相手に回復手段がアイテムしかないということだろうか。

『さあさフィールドは既に酷い有様！人数的には圧倒的不利な二人。だが流れは彼らに來ているぞ！』

『だが、これくらいで負けはしない！』

すると土の中から……何でしょう？

『おおっと！ここで死霊術が発動したぞ！』

『死霊術？』

『何度やられようと、我が下僕は黄泉の世界より復活する。終わりなき地獄を見せようぞ』

『つまり？』

『死霊術は戦闘不能になつた味方を全スキル並びにバフを無効、魔法やアイテムなどの使用禁止にして復活できます。ただし、術者がやられたら復活した人たちも皆やられませんが……それでも術者を倒さない限り彼らは何度も復活します。また復活した人たちは区別しやすいよう紫のオーラをまっています』



立っている人数だけを見ると最初と変わっていない。

『何か、正義とか言ってるけど鬱陶しいストーカーみたいだね』

『何度も何度もしつこい』

『正義ではなさそうですね』

私たちの印象はこんな感じだ。何か、正義の執行人が正義ではない気がする。

白金さんもうまい人が使ったり拮抗しているといいけど、これだけ見ると何度も湧く雑魚敵って評価している。中々に辛辣だ。

『やっぱいるよね〜死霊術師』

『じゃあ、次はそいつだな』

ただ、そんな状況になっても特に焦った様子もなく、二人は狙いを何人かに絞り、それぞれ突撃していく。

『総員！守りの陣だ！』

すると復活した人たちが狙われている人たちの周りを囲うようにして壁となる。肉壁というやつだ。

『何と！迫り来る大軍を剣一本で切り裂いていくぼんちゃん！そして体術で押し進めていくKei！本来は後衛職の二人だが近接戦闘でも他を寄せ付けないのか！』

生存者の減る速度は減少したものの着実に減っていく……なんて強さなんだろうか。

『な、何なんだアイツら……！取り押さえる！』

『む、無理です！間合いに入った瞬間に攻撃されます！』

『じゃあ、魔法だ！』

『それじゃあ味方も巻き添えに……！』

『構わん！やれ！』

正義の執行人つていいながら味方を犠牲に倒そうとしているのはいいのだろうか？  
そんな疑問をよそに、戦っている二人の元に炎の球やら氷塊、雷や岩などあらゆる魔法が飛んでいく。

『やっぱりそう来るよね〜♪』

『待ってました』

ぼんちゃんさんに当たりそうになった魔法は跳ね返って敵のいる方に飛んでいく。  
慧人さんに来た方は……その魔法に向かって敵を投げつけたり蹴りつけたりして防ぎながらダメージを与えている。

『ああと！味方を巻き添え覚悟の決死の作戦！だが味方を巻き添えではなく味方にしか当たってない！おっと！そしてこの攻撃の中、死霊術師が全滅したあ！一気に数が減ったように見えるぞ！』

さつきまで復活した人でいっばいだったが、一瞬で消え失せた。残りは……20を

切ったようだ。

『じゃあ、これで締めよっか♪』

すると、空から巨大な隕石が……それに向かって跳躍する慧人さん。

『ぼんちゃんが生み出した巨大な隕石に向かって跳躍するK e i！一体何をするつもりだあつー！』

『ぶっ壊す！』

慧人さんの拳が隕石と衝突。隕石が砕けた……え？

『な、なんと!?隕石を自分たちで砕いた!?』

『終わりだ』

『ついでに重力も追加ね♪』

そして空中でそのまま砕けた隕石を蹴り落とす。墮ちる隕石は先ほど以上の威力とスピードでプレイヤーの頭を捉えた。

なるほど。自由落下ではなく、初速を与えることによって威力とスピードが増加。さらに軌道を推測して打ち出すことによつて命中率も増加。しかも頭を防ごうとしたら今度は首とか心臓とかを狙う……何て一方的なんだろうか。

『じゃあ、後はお前だけだな』

『だね。どう？敗北した感想は?』

最後の一人ギルドマスターに肉薄する二人。既に首元に剣が添えられ拳も構えられている。

『く、クソ……!』

『また話そうぜ。今度はクールビューティーに染めてやるよ』

『いやいや、ポンコツキュートに染めてあげるよ』

そして剣が首を切り裂く。

『決まったああああっ!勝者!ギルド「クールビューティー」は嗜好、ポンコツキュートは神!たった二人で敵を殲滅したあ!』

『ふう。終わったな』

『やったね♪K e i!』

『つて抱きつくなテメエ!』

『いいじゃん♪今回くらい♪』

フィールドでは慧人さんに抱きつくぽんちゃんさんが……

『やっぱ、あの二人つて付き合ってるのか?』

『そうだろ。そうじゃなきゃあんな連携無理だろ』

『熟年の夫婦じゃないか?』

『いや、K e iは高校生だぜ?』

『じゃあぼんちゃんもそれくらいか』

『くうくはぜればいいのに』

……その言葉を見たとき、私の心に虚しさが訪れる。

もしかしたら慧人さんは……ぼんちやんとリアルでも……。

『サヨさん？』

『……ごめんなさい』

何だろこの苦しさは。ゲームの世界の話……でも、もしもリアルでもそうだったら？ そう思うと……何でこんなに苦しくなるの？ 何でこんなに胸が締め付けられるような苦しさが……。

「ふうー」

何とかギルド対抗戦に勝利できた……が。流石に疲れたな。……ん？RinRinからメッセージ？あーRoseliaのメンバーと見ていたのか……あれ。……え？嘘だろ？

『じゃあKeei！お疲れー！』

『あーうん』

まさか……俺がこんな頭おかしいギルドの頭を、この頭のおかしい先輩とやっているなんて知られてしまったら……！

「……リアルで合わせる顔がない……！！」

そ、そんな！彼女たちからはまだ俺がこんなことしているなんて知られていなかったのに……！知られたら俺の印象が……印象が悪くなってしまうではないか！（いえ、変わりません）

く、クソ！な、何て時にログインしていたんだ……！

その後ゲーム内で会うことになり、会いに行つたが……

『おつかれ』

『上手いね〜』

友希那さんとリサ姐はチャットでも普通だ。問題は……

『サヨ………さん？』

明らかに紗夜さんの挙動がおかしい。りんさんによれば対抗戦が終わつてからコレらしい。

ま、まさか……！俺がこんな頭のおかしなギルドに入っていることによつて幻滅されたのか!?そ、そんな……！ま、まじか……

『とりあえずフレンド登録を済ませましようか』

りんさんが取りまとめているという凄いレアな光景が広がる中、紗夜さんが一向に何も喋らない。……え？……ええ？や、やっぱり幻滅されたのか？流石にひかれたのか？

この日はこの後、少しの間だが一緒にゲームをしても、またLONEで話していても、いつもよりも淡々としていた。……やっべ。俺やらかした？

# 急にリアルファイトが起こると困る

「……………はい。OKです！」

「「お疲れ様です」」

今日はパステル\*散歩の生放送の日。ちょうど今、本日の生放送を終えた私たち。

「もうお腹いっぱいッス」

麻弥ちゃんがそう言う。

今日の収録は商店街でやまぶきベーカリー、羽沢珈琲店、北沢精肉店を紹介し、三回実食があった。特に最後のはぐみちゃんのコロツケ猛プッシュが凄かった……………もうしばらくコロツケは見たくない。

「これからどうする〜?」

彩ちゃんがこれからの予定を確認する。今日はこれで解散だから……………

「何かあっちの方が騒がしい気がする！」

唐突に日菜ちゃんが叫ぶ。あっちの方?

「こっちの方に来てます！」

イヴちゃんの言うとおりの何かこっちに来ている。



『何だよアイツら！しつこすぎだろ！』

『ツチ！いい加減逃げるのも面倒だ！』

段々とはつきり見えるようになってきた。それは自転車に二人乗りしている男性が二人。

『俺がヤツらをぶつ潰す！』

『お、おい！』

後ろに乗っていた人が自転車から飛び降りる。見た目からして荒そうな感じの人だ。

……でも奴らって？

『野郎！待ちやがれ！』

すると男の人たちの来た方から三つの影が見える……？ん？あれって……

『キャプテン！森下！チャリの方を追え！』

『お前は！』

『んなの決まってるだろ！』

そして三人の影が徐々に分かるようになってきたとき、その内の一人が飛び出して

……

『ここは通さねえぞ！』

『いいや！通してもらおう！』

待ち構えていた人が飛び出した人に向け殴りかかる。それを避けて、相手に向かつて跳び蹴りを食らわせる。残った腕でガードする男の人……ちよつと待つて？

『行けっ！』

『任せたぞ！冬木！』

『後、荷物頼んだ！』

跳び蹴りを放った冬木と呼ばれた男の人の脇を二人の男の人が通り抜け、カバンを投げ捨てる。そしてそのまま自転車を追い掛けるが……

「……何がどうしてこうなってるのよ……」

距離が少し離れる二人。待ち構えていた方はともかく、跳び蹴りを放った方は間違いなく私たちの知り合いの冬木慧人である。

『散々追い回しやがってよお……いい加減ストレス溜まってんだわ』

『ああ？ テメエらこそ、大人しく捕まっていれば良かったものをよお……』

そして激突する二人。

いや、本当に……何してるの慧人？

「「ありがとうございます」」

日曜日。昨日はNFOで大暴れし、来週には部活の大会が迫る今日この頃。ついさつき部活は終わった……いやあ、休日の練習は疲れるねえ。

「お前らこれからどうする？」

「いや帰るだけだが？」

「……………疲れた」

「帰りたいねー」

キャプテンからの質問に俺、千石、森下が答える。途中までは方向が一緒だし、なん

だかんだでこのメンバーでいることが多い。

「なあ、コンビニ寄らね？」

「一人で行けよ」

「……………面倒」

「どっちでも」

サッカー部用のジャージ四人組。先頭がキャプテンだが…………ええ？コンビニ？一人で行けよ。

「まあまあ。いいじゃねえか。友人たちと駄弁りながら道草を食って帰るのも」

「道草食う暇あるなら勉強しやがれ」

「……………そうだそうだ」

「こん中でキャプテンだけだよね〜赤点追試補習組」

「う、うるせえ！お、俺以外にも居るし！」

「いや、お前だから問題なんだよ」

「……………キャプテンの自覚が足りない」

「いい加減阿呆なキャプテンを卒業しよう？な？」

はあ…………やれやれだ。こんなキャプテンで大丈夫かね…………。ちなみに大会終わって火曜日からテスト期間。ヤバいなあ…………もうダメだなあ…………。部活動禁止期間？何そ

れ知らない人？

「行くぞー！」

って本当にコンビニ寄りやがったよクソが。

「無視かよアイツ」

「……………しようがない」

「諦めるぞー」

と、俺たちも続いて入る。…………たく。

「いらっしやいませー！」

「さまーせーる」

……………？何だろう。とても聞き覚えがある…………

「つて、慧人くんじゃん。やつほー☆」

「けーとさん。ちわーっす」

「うーっす、リサ姐にモカ…………バイトか？」

「そうそうく知らなかった？」

「初めて知った。モカもバイトしてんだな」

「モカちゃんも働けるんだよ」

見るとレジで対応しているのは二人だけらしい。ぐるりと見渡してもTHE・店員つ

て人はこの二人以外にいなかった。それにしても、

「客少ない？」

「そうだね〜でもこんなもんだよ」

「この方が楽でいいじゃん〜」

「いや、客少ないのは問題じゃないか？」

「そうだな。問題だな」

ガシツ！つと後ろから肩を組んできたのは……

「何だよキャプテン。暑苦しい息苦しい見苦しい」

「おお……これぞ苦しい三段活用……！」

「うーん、見苦しいっていうのはアタシたちが言う台詞じゃないかな？」

「なるほど……リサ姐の言うとおりでな」

「冬木。俺、悲しいわ」

「そうか。そこで勝手に泣いとけ」

「まさか、お前がコンビニ店員をナンパするとはな」

「いやいや。こいつら。知り合い。フレンズ。トモダチ。オーケー？」

「いえす〜けーとさんとはともだーち」

「そうだね……確かに友だちだね」

全く……まさか女子と仲良く話しているから嫉妬したってか？俺には他意はないのに。

ああ、仲良く話すと言えば紗夜さんは昨日は本当にどうしたんだろう？うーん……気になるけど……あんまり邪魔したくないし……正直、幻滅されたとかだつたらなあ……

「ん？よく見たら文化祭の時にいた……」

「お前面白い物は？早くしろよ」

「分かつてる。さっさとするか——」

ドンッ！

するとキャプテンが押されて少しよろける。押したやつとその後ろのやつはそのまま店の外へ……全く、急いでいるからつてぶつかるのはさすがに……

「キャプテン！冬木！アイツら万引しやがった！」

「はあ?!」

「ポケットとかに入れてた。間違いない」

「えええっ!?!」

な、なるほど……客は少ないし、レジの店員は二人で女子だし……その二人の店員は誰かと話してたし……昼間に犯行を……っておい！

「行くぞテメエら！黙って見過ごせねえ！」

「「おう！」」

「いってら〜」

そして俺たちも慌てて外へ。標的は……見えたな。

「待てやコラア！とりあえず、止まりやがれえ！」

そのまま全速力で走って行く。

すると、大声を出したせいかこつちに気付き……

『そのチャリ寄越せ！』

『えっ？うわあっ！』

『逃げるぞ！』

『ああっ！』

近くに居た少年から無理やりチャリを強奪する。

「……………追いかける。俺は残って対応する」

「千石……………分かった。……………って相手チャリだぞ?!」

「にけつしてんだ！まだ追いつける範囲だろ！」

「日頃の成果を見せるときだよ！」

暴論だなおい！ええい！どうにでもなりやがれ！



「……………え?ええっ!」

「てんちよー万引が起きましたー」

「いやいや、早く通報しないでだよ!」

「追いかけてったねえ……」

「大丈夫かな……慧人くんたち……ってそうじゃなくてまず通報!」

「てんちよーとりあえずサツ呼んでサツ」

そして慧人が男目がけ蹴りかかる。それに蹴りを合わせられ……って、  
「な、なんでこんなところで喧嘩が……?」

商店街のど真ん中でぶつかる二人。

「空気がピリピリしているね……」

何かの企画やドッキリ……ではないようね。近くに居るスタッフたちも目に見えて  
困惑している。

『と、止めるべきなのか?』

『いい、いや……俺らで止められるのか?あれを』

慧人は確か176とか言ってた。で、対する相手は慧人より一回り大きい。……見た  
感じあの喧嘩を止めようとするれば、こっちが痛い目を見る気がする。

「どどどうしよう千聖ちゃん!あ、あれは止めるべきなの!」

「む、無理ツスよ!ジブンたちじゃ絶対無理ツス!」

「け、剣があつても……!」

どちらの攻撃も未だ一発も入らないような、有効打と言えるものが未だないような、  
そんな互角の攻防が繰り返られている。何というか……両方ともが荒事に慣れてい  
るといふか喧嘩慣れしているように思える。

『この野郎……淡々としやがって!』

『……………』

『シカトしてんじゃねえぞ!』

『……………』

それにしても慧人の様子がおかしい。

あの人と対峙し始めてから一切感情を感じられない。相手を攻撃しているときも、何かを言われているときも、そこに何も感じていないように、彼からは無しか感じない。心がないように思える、普段と違いすぎるその姿が私には……

「とても怖い……」

「うーん。慧人って怒ると感情がなくなるタイプなのかな?」

「いや、あれだと怒ってるかも分からないツスよ」

待つて日菜ちゃんに麻弥ちゃん。多分そういう問題じゃないと思う。

「か、かくなる上は……このマイクで……!」

「だ、ダメだよイヴちゃん!危ないよ!」

一方イヴちゃんはカメラマンからガンマイクを受け取り、ブームを持つて殴り込みに行こうとしていた。それを彩ちゃんが後ろから頑張つて抑えている。ごめんイヴちゃん。それだけはやめて。

ただただ状況が飲み込めずに困惑している中、時間だけが過ぎていく。スタツフたちは通報しようかどうか迷ってる様子……確かに一方的ではないし……最初の自転車からというのからワケありな気がするし……。というか彼、強いわね……何であの体格差で負けてないの？

『冬木・サツサと片付けろ！』

すると、自転車を追いかけていった二人が帰ってきた。一人は男の人を担ぎ、一人は自転車を引いている……って、ま、まさかあの二人。先に行つた自転車に追いついたの？ 相手自転車よ？

『なっ……！』

『分かつた』

慧人と相對していた男の注意がやって来た彼らの方を向く。

注意が逸れたその瞬間を狙って、慧人が腹部に肘を入れて……

『少し寝てろ』

前屈みになっている男の股間に向けて蹴りを加えた、そのまま悶絶しながら倒れ込む男。……倒しちゃってるんだけど……それも呆気なく。

『うわあ……容赦ねえな……お前。見てるこつちが痛々しい』

『うへえ……相変わらずこの気持ち悪い感覚。……まあ潰れてないだろ。加減した

し』

『時間かけすぎ。ほら行くよー』

『ごめんごめん。キャプテン。コイツの方が重そうだし抵抗されると面倒だから代わって』

『じゃあねえな。千石には連絡入れた。警察も来てるそうだ。ほらさっさと戻るぞ』

『へーい』

嵐のようにやって来て嵐のように去って行く三人プラス二人。……慧人とかの荷物を置いて。

「追いかけるわよ」

「そうツスね。何が起きたか気になるツス」

「よし、いってみよ〜!」

彼らの投げ捨てられた荷物を持って、私たち五人も彼らを追いかけることにした。

「にしても時間かかってたな。お前」

「うるせえ。モノ壊さないように意識してたからだわ……知らんけど」

「うーん、本当に意識してたかはともかく、万が一壊れてもコイツらのせいによればよかったですじゃない？キヤプテンなんて遠慮なく自転車の正面に立ってぶつかりに行つてたし」

「まあ、ブレーキかけてくれたお陰で衝撃は少なかったけどな！」

「キヤプテン……阿呆。来週大会だよ？」

「あれはバカだったと思う」

万引犯の軽い方を肩に担ぎながら、二人と話す。……そう言えば商店街のど真ん中でやり合ったけど誰にも見られてないよな？ははっ。まさかこんな時に都合良く誰か居

るわけでもあるまい。うんそうだ。きつと大丈夫だ。知り合いにあんなの見られたら明日から普通に聞かれる気がしない。

「あーあ、疲れた」

「だな……だがいい練習になったじゃないか」

「そうだね。チャリを見失わないよう追いかけて追いついて……キャプテン。それは練習と言わない」

「そうだそうだー」

ただえさえ、今日は午前中練習で走つてんに更に更にプラスで走るとか……いや、その上でバトつたな、軽く。あれ？いつからそんな喧嘩漫画の世界に？

「というか俺ら、怒られるんじゃないか？」

「何故だ？普通に考えたらヒーローじゃないのか？」

「いや……そんな単純な話か？」

どうだろ。アニメや漫画だところいう時は褒められ称えられて、ヒロインの好感度が上昇して終わるけど……リアルは甘くない気がする。

警察に任せず追いかけてつたし、というか俺に至つては暴力沙汰になったしな、軽く。通報されてたら終わるんじゃないか？

「どうするー？千石だけ置いて逃げる？」

「バカ。万引犯捕まえて、何で万引犯と一緒に逃げてるんだよ」

「じゃあ、万引犯を誘拐？」

「するな」

あーそんな阿呆な話してると、コンビニが……パトカーが……よし。

「よし、森下」

「ああ、冬木」

「コイツが犯人です！」

「うんうん……っておい待て！何で俺を差し出した!？」

「……………三人とも。バカなことやってないで行くよ」

「はーい」

「いや、俺は普通だろ!？」

その後、警察の方々の所へ連れてかれ、ありがたいお話を聞くことに。救いだつたのは彼らが今回の犯行に加え、この前他の店舗でも被害を出していた万引犯らしく、その犯人が捕まつたのは良かったとのこと。……まあ、そんな常習犯で危険なやつと拳を交えた俺とかチャリの前に飛び出したキャプテンは更にありがたいお話を聞くことになつただけだね。わ、笑えねえ……。



「あ、ヒナ。それに他の皆も」

「どうしたの？皆でお出かけ？」

「お出掛けというか撮影帰りツスね」

「慧人が警察に連れて行かれたようだけど……」

「あー万引犯捕まえたから諸々の事情を聞きたいんだって」

「てんちよーも警察行つたよー」

「ええっ!?!そういうことだったの!?!」

「どうしたんですか？アヤさん。そんなに慌てて」

「い、いやー慧人くんが警察に捕まった！どうしよう！って他のバンドの子たちにも

送っちゃった……」

「……………」

「あ、紗夜からだ。えーつと？『日菜から慧人さんが警察に捕まったって聞いたのですが。それに慧人さんにも繋がらずで……』…………ヒナ？」

「だ、だって慧人の一大事だよ！おねーちゃんに報告しないとって思ってた……つい」

「あ、モカたちのグループでもけーとさん逮捕について来てるくええーい」

「も、モカさん!?ここは正しい情報を流さないとマズいんじや……」

「…………こりやあ、大変なことになってるツスね……」

「だね…………強く生きてね。慧人くん」

「とりあえず彩ちゃんに日菜ちゃん。反省しなさい」

「ご、ごめんなさい……」

「今回は反省…………でもどうするの？」

「な、なんとかするしかないわ……」

尚、警察署から出た俺のスマホの通知がヤバいことになっていた。え？紗夜さんからのLONEが30件近く？え？他の人たちからも50件近く？しかも電話が10回くらい？

一体どうし……な、何で俺が警察に捕まったことになってんだあ!?

遂に出会ってしまったか……

あの頃の私にはギターしかなかった。

「またですか？ 紗夜さん」

「何がでしょうか？」

CIRCLEから出て行こうとしたときに声を掛けられる。こうやって声をかけてくる相手は、バンド勧誘以外には一人しか居なかった。

「また衝突したんですか？」

「衝突ではありません。意見の相違です」

この頃……まだ湊さんと出会う前の1年生の時、私は別のバンドに所属していた。だが、バンドメンバーと意見が合わず、何度も脱退を繰り返していた。

「私はギターを本気で、バンドを本気でやっています。私にとってのすべてであり、決して遊びではありません」

「だから、一切の妥協を許さない。現状に甘え向上心がなく、努力をしないなど言語道断。無駄にする時間は存在しない。ですよね？」

クスツと笑う彼。でもその笑みは決して侮辱とかそういうものではないと感覚的に

分かった。

「ええ。よくお分かりで」

「まあ、かれこれ半年以上の付き合いですからね」

「付き合いというには語弊があるように思えますが？」

この時の私は、バイトとしての彼に必要なことでしか自分から関わろうとしなかった。

「そりゃそうだ。俺から一方的に崇拜して、自己満足で支えようとしているだけなんですから」

彼は不思議な人間だった。まあ、最初から何か女神だのクールビューティーだの言っているが、それを隠そうとしない。

「支える？でしたら話しかけないでほしいものです。こうしてあなたと話す時間は私にとって無駄。あなたも言ったように私には無駄にする時間はありませんので」

「そうですか。じゃ、また今度ということぞ」

「またも今度もないですよ」

そのまま立ち去っていく。彼は追いかけてくるなんて真似はしなかった。

この時の私は気付いていなかった。別のライブハウスもあるのに、何故C i R C L Eによく行くようになっていたか。無駄と言いながら何度も彼と話していたか。

彼のおかげで独りになることはなかった。

それがどれだけ救われることだったか。そのありがたさに当時の私は気付かなかった。

月曜日。放課後。

「昨日は（い）めんなさい（い）」

目の前で紗夜さんが頭を下げている。

「いや、気にしなくていいですよ」

「いえ……その……心配し過ぎて……」

昨日出所した(?)俺は紗夜さんと直接会うことに。第一声が「よかった……」と泣かれたことには驚いたが、泣くほど心配してくれたんだと思うと俺も涙が出そうだった。多分そのことについてだろう。

「俺は嬉しかったんですから」

「慧人さん……」

学校側にも当然連絡は行っていた。俺たちはあくまで捕まえた側であることから、学校が怒ることはなかった。寧ろ今日は校長室に呼ばれ、「さすが我が校の自慢の〜」とクソ長い話を聞かされた。そして緊急全校集会を開いて、また同じような自慢を聞かされた。クソツタレ。そんなんだったら生徒指導室で説教の方がマシだわ。……いや、それはねえか。知っていますか? 来週テストですよ? いいのかそれで。

「はいはい。二人の空間に入るのはあとあと〜」

ちなみにだが Roselia のメンバーと一緒に居たりする。悲しい。二人きりの空間にさせてくれない。

「……………でも昨日は驚いたわ。冬木が逮捕されたって聞いたから」

「そうだよ。おねーちゃんと一緒に驚いたよ。身近なところから逮捕者が！って」  
「私も……いきなりだったからビックリして……」

リサ姐から聞いたけど、実は俺と万引き犯が交戦していたタイミングで、商店街にはパスパレの五人がいたらしい。つまり見られていたわけだ。で、五人が俺たちが投げ捨て忘れ去っていった鞆などを届けについて行ったら、パトカーに乗る姿を目撃された。で、早とちりした彩や日菜が皆にLONEで俺が逮捕された！的なことを流したらしい。

鞆は物凄いい助かった。ただ、そのせいで誤解が……でもいつか。そのおかげで紗夜さんに心配されたし……いや、心配させたのはダメか。逮捕の誤報は……放置しよう。

「あははくあの場はカオスだったよ。それに店長が連れて行かれたからバイト時間延びたし」

「俺は悪くないです」

「いいえ。商店街のド真ん中でやり合ったそうですね。全く。見ていたのが日菜たちでなければどうしたんですか？」

「いいですか紗夜さん。流れに身を任せればなるようになるんです」

「……………その結果が逮捕」

「そして牢屋の中へ……」



「それは誤解だって……」

でも紗夜さんじゃなくてよかった。真面目で正義感の強い彼女ならあの喧嘩？を仲裁しようとして入っていたかもしれない。その点は本当に良かった。

もしあの男が紗夜さんを傷つけようものならどうなっていたか……まあありもしない仮定は考えるだけ無駄だよな。

「そういや、今は普通に話せますね。土曜日は様子が何かおかしかったのに」

「……………」

すると空気が固まった。あ、やっぱ。地雷だったか。……あ、そう言えばあつちの戦いは見られていたんだっけ？いや、そもそも……

「ご、誤解なんです皆さん！俺があんな頭のおかしなギルドのNo.2なのは誤解なんです！」

「いや、そつちは誰も誤解してないと思うよ？」

「……………冬木らしいと思った」

「ええ。ギルド名を聞いた瞬間に慧人さんと結び付きました」

「え？幻滅されたから何かよそよそしくなっただんじやないんですか？」

「幻滅ですか？むしろあのギルドに慧人さんが所属していなかったら幻滅していたと思います」

「なんだ……よかったあ」

（（今のつていい話……？））

よかった。幻滅されてなかったのか……あれ？じゃあ、何で……？

「おつ。慧人じゃねえか」

すると男の人の声が聞こえてくる。そちらを振り返ると……

「先輩じゃないですか。リアルではおひさです」

先輩だ。NFOの沼に引きずり込み、クールビューティー教に目覚めさせてくれた頭

のおかし……こほん。尊敬できる人だ。

「でも珍しいですね。どうしましたか？」

「いや？昨日、風の噂でお前が問題起こしたって聞いてな。野次ろうかと」

「だーかーら。問題は起こしてないですよ。昔じゃないんですから」

「ははっ。そうかそうか。にしてもお前も成長したな。女子を五人も侍らせて、ハーレ

ムか？」

「先輩の目は節穴ですか？女子は四人。このお方は女神です。一括りにしないでください

い。失礼ですよ？」

「……………ふむ。確かにクールビューティーなオーラが感じられるな」

「でしよう？！」

まあ、元クールビューティー教の先輩でも。紗夜さんのクールビューティーなオーラを感じ取ることが出来たらしい。よかったよかった。

「ねえこの人。慧人くんと同族かな？」

「近づいてはいけない系の匂いがするわ」

「……何でしょう。あんなにスムーズに会話が進むのは初めて見ました」

「そ、それは分かります……」

「つまりけー兄と同レベル？」

何か女性陣が話している気がするがスルーしておく。

「だが惜しい。あと一步でポンコツキュートになれるだろうに。今の彼女はクールビューティーとポンコツキュートの境に立っている」

「あはは……口を慎めよ先輩。彼女がポンコツキュートとかあり得ないですよ」

「そういうお前も段々とポンコツキュートに毒されてきていないか？ほらほら、こっちに來たら楽になれるぜ？」

「ふざけないでくださいよ？」

くつ。流石は先輩だ。一目見ただけでそこまで見抜かれるだなんて……！いやそれだけ紗夜さんのオーラがすごいんだな。すなわち紗夜さんは神。

「おいおい。忘れたか？お前をクールビューティーの道に目覚めさせたのは誰かっての

を」

「それについては感謝していますよ？先輩のおかげでこんな素晴らしい存在に気づけたのですから」

（（え？この人がまさか元凶？））

「だから、今度はお前をポンコツキュートに目覚めさせてやるよ」

「寝言は寝てから言うものですよ？先輩。本当に寝せてあげましょうか？」

「いやいや慧人。お前もそろそろ次の段階に進もうぜ？」

「はっ。ポンコツキュートがクールビューティーの上位互換だとしても？冗談にしては笑えないですよ？」

「上位互換？何言ってるんだ。上位に決まってるだろうが」

「ああ？」

「はあ？」

「何か凄まじい戦いだね……」

女性陣の目の前ではクールビューティーについて熱く語る慧人と、ポンコツキュートについて熱く語る先輩がいた。

「……………」

「隣子？何か気になるの？」

「いえ、その……先ほどからあの人……ポンコツキュートポンコツキュートとずっと言っていて……」

「慧人さんがクールビューティー教なら、あの方はポンコツキュート教と言ったところでしょう」

「それがどうしたの？りんりん」

「い、いえ……けいさんのNFOでの所属ギルドが『クールビューティーは嗜好、ポンコツキュートは神』……そしてギルドマスターはポンコツキュート推し……もしかしてあの人は……ギルドマスターのぼんちゃんではないでしょうか？」

「え？」

「おおっ！確かにあるかも！だってけー兄の上に立つてる人だもん！けー兄くらい頭のネジが飛んでないと無理だよね！」

あこによる裏表のない純粹無垢な言いよう。彼女は知らない。この言葉は人を傷つける武器になることに。

「ま、待つてください。ぼんちゃんさんは女性ですよ？あの人は紛れもない男性。あり得ないですよ」

「えーつと、勘違いされているかもしれないですが……NFOは男性でも女性アバターでゲームできますよ？」

「ほら、最初に容姿とか名前決める欄に性別つてあつたじゃん」

その言葉を受けて紗夜はキャラメイクの時の画面を思い出す。

「……確かに……いやでも……」

しかし、紗夜は困惑していた。目の前で慧人とどうしようもない争いを繰り広げている男を見て。この男があのかキャラを操作していたのかと。

「なら聞いてみればいいじゃない」

「そうだよね！」

友希那は淡々と答え、あこが早速聞きに行く。慧人の顔見知りだという安心感からか元々の性格からか、彼女に躊躇はなかった。

「すみませーん！えーっと、けー兄の先輩さん！」

「あこちゃん。この人に聞きたいことでもあるのか？」

「うん！」

「おーどうした？」

あこが入ると二人は争うのを止める。他人（美少女）の言葉を見無視する気はないようだ。

「えーっと、けー兄の先輩さんは、NFOってゲームはやってるんですか？」

「はははっ。やってるぞ」

「おっ！」

「それに加え、NFOにコイツを引きずり込んだのはこの俺だからな」

「本当ですか!？」

「ああ。先輩に誘われてな」

「もしかして、けー兄のギルドのギルドマスターですか？」

「ふっ。遂に知られてしまったか……」

「何もつたいぶってるんだポンコツ野郎が」

「ゲーム内ではぼんちゃんって言ってるだろうが」

「るっせえ」

特に隠す気のない先輩。そして、先輩は察しがよかったようで……

「なるほどな。彼女たちがお前のフレンズってわけか」

「まあな。正確にはこの内二人が前からやっていて、三人が初心者だ」

「そうかそうか。なんだよ先に言えよ。慧人の友人なら大歓迎だ。是非俺ともフレンズ登録してくれ」

「アンタがフレンド登録とか珍しいな……アンタのフレンド片手で数えるほどしか居ないだろう?」

「ふっ。ぼんちゃんは謎多き存在。故に正体を知るものしかフレンドは受け付けていないのだよ」

「おおっ! けー兄の先輩さん! 凄い格好いいです!」

「だろう!」

「あこもそんな台詞を言ってみたいです!」

「おおっ! 話分かるじゃねえか!」



先輩とあこ。厨二病卒業者と格好いいことに憧れるこの二人は何処か波長が合っていた。

そんな二人を見ている四人プラス慧人。

「悪い人ではなさそうね」

「慧人くんの先輩さんも残念系なだけなんだね」

「ひでえ言われよう」

「あの有名なぽんちゃんと同じ合いに……嬉しいような残念なような……」

「まあ、いいんじゃないですか？あの人も俺とスタイルは似てますし、本職はりんさんと同じですよ」

バトルスタイルは全く違うけど、と心の中で補足しておく慧人。

「あれ？どうしたんですか紗夜さん。何かほっとしてますよ？」

「そうですか？」

「ええ。さつきまでより穏やかな表情を浮かべていますよ」

「ふふっ」

安堵した表情を浮かべた紗夜は、そのまま慧人の腕に抱き着く。慧人は彼女の心境の変化は分からないがそんな彼女を受け入れていた。

「ねえ。私たちは帰っていいかしら」

「んー慧人くと紗夜は二人きりの空間に入っちゃったから放っておくのはいいけど……あつちはどうしようね……」

「ど、どうしましょう……あこちゃんが厨二病に……」

この日を境にあこの厨二病発言が増えたとか増えていないとか。

確実に先輩の影響だな、そう慧人は思うのだった。

## ストレスは人を壊す

彼の印象は理解が出来ない人だった。

最初の出会い……というか、最初は私の一方的な勘違いから始まった。

「花音から離れなさいっ！」

店と店の間にある、人目に付かないような狭い路地。そこには泣いている花音と、目付きの悪そうな彼——慧人がいた。

「ふえ？千聖ちゃん……？」

「来て花音。……あなた、花音に何したの？」

「何したの？って言われてもなあ……」

「あなたが花音を泣かせたのでしょ？」

この時は私の数少ない友人が泣かされたと思い、そのまま詰め寄っていった。余りにも短絡的過ぎたことに今は反省しているが……ただ状況が余りにもできすぎていたため致し方ない面もあるだろう。

「あ、あの……冬木さんは……迷った私を案内しようと……」

「いいのよ花音。脅されてるいるのでしょ？」

「ち、ちが……」

「あーそういうことか」

すると目の前の彼は何かを察したらしく……そのまま。

「なあ？もし脅しているって言ったらどうする？」

笑いかけながら彼はそう聞いてきた。

この後、怒る私を花音抑え、それが誤解だと。泣いていた……つてのは単純に目にゴミが入ったというありきたりなものだったと。後、彼のもしもの話は単純に反応が気になったとのこと。あの状況でそんなことを言える意味が分からない。

「ごめんなさい。先ほどは失礼しました」

私は、頭を下げて謝る。先に誤解で彼に非礼を行ったのは私だ。だからまずは謝ることにする。

「……………」

しかし、彼は疑問に浮かべるだけで何も言っていない。

「なあ、花音。何でコイツ謝ってるの？」

そして花音にそうやって聞いている。……何でつて？

「それは不快な思いをさせたのだから謝るのが当然でしょう？」

「そういうもんなのか？お前は花音を助けようとした。そこに謝る要素なんてなくてね

？」

「いや、あなたが不快な思いを……」

「別に何もねえけど……」

演技している様子はなかった。ただ純粹に気になって、ただ純粹に疑問に思っていた。

「じゃ、花音はお前に任せるわ。俺、これからバイト行ってくるんで」

そしてそのまま去って行く。

彼に対して二つある。一つは、理解ができなかったこと。彼の価値観が。もう一つは、彼は私を白鷺千聖ではなく花音の友人としてしか見ていなかった。

これが数少ない、私を一人の少女として見ている存在との出会いだった。

万引犯を捕まえてから数日後。俺は、

「そーいや千聖。何でお前が居ながらああなったの?」

「私だつて万能じゃないのよ!まさか彩ちゃんと日菜ちゃんが、何も聞かずに拡散するとは思わないじゃない!」

荒れ狂う千聖の相手をしていた。

髪は何処かボサボサで、化粧でごまかしているが目の下に隈がうつすらと見えた。

「あの子たちに悪意がないのは分かつてるわよ!でも何で確認もしないで、曖昧なまま流しちゃうの!?!自分たちが一番そう言うことをやられやすいって自覚していないの!?!」

平日の午後のことである。

学校?あー何か今日は体調が悪いような気がし……はい。コイツに呼び出されました。早退つてやつですね。呼び出されたときはサボれてラッキーって思いましたね。ん?今は?……俺、真面目な善良生徒だから学校をサボった罪悪感にさいなまれ……嘘です。こっちの方が面倒だと思つてます。ちなみに、コイツは元々仕事のために欠席

で、午前中に仕事を全部終わらせたらしい。

あの後、『冬木慧人。逮捕』の誤報を何とか修正した。千聖の働きが大きかったです。で、その働きのストレスが現在、俺の前で爆発中である。ちなみに場所はカフェ……と言いたかったが、俺の家である。カフェだと平日の午後はマズいし、何でも、今日は遠慮なくストレスをぶちまけたいそうだ。で、今の彼女は、アイドルとしても女優としても見せてはいけないことになっている。

ちなみに、あのことで何か俺たちに感謝状？ ってもものが出るらしい。何か捕まった奴らが更に実は他にも云々って、細かいことは覚えてないけどまあ、もらえるものももらっておこう。ところで貰っていいことってあるのかな？ まあ、いいや。

「大体何よ！ ネットの人たちはこそぞって枕してそう？ お偉い人たちに身体を預けてそう？ ふざけんじやないわよ！ 私は清い身体のままよ！ 誰があんな人たちに身体を許すもんですか！」

「お、落ち着け千聖。ステイスティ。ほら深呼吸……」

おい。この前の愚痴からお前への評価に対する愚痴に変わったぞ。

まあ、コイツが枕営業とかねえわな。それは分かるが……

「大体、普段のあの鉄仮面などが原因だろ？ もう少し感情を出せばいいのに」

「はあ!?! 私がどれだけ頑張ってると思ってるの!?!」

「あーうん。そうだな。よしよし。いつも頑張ってるな」

暴れ狂う彼女の頭に手を置いて撫でる……が、何だろう。今日の彼女は……うん。もう考えるのを放棄しよう。

「だいたい慧人！あなた対応を私にほぼ丸投げしたわよね！」

うわあ……こいつ、めんどくせえ。でも、こつちはこつちで先輩とのリアル遭遇イベントや紗夜さんと話するってこともあったし。まあ、千聖ならなんとかするって思ってたからいいかなって。

「千聖……俺、嬉しかったんですよ」

「捕まったことが？今度は本当にぶち込んでやりましょうか？ええ？」

「違いますよ。紗夜さんからあんなに心配され……ああ、女神様はいるんだなあって。聞いてくださいよ。あの後直接会ったときなんかは『良かった……！』って泣いていたんですよ？そんなに心配されるなんて……」

「のろけ！何度もLONEで聞いたわよ！」

「そうですね！何度も話したいんですよ！」

「相手を選びなさいよ！何で私なのよ！そして早くくつきなさい！」

「うーん……？」

いやまあ、このよく分からん距離感がちょうどいいなあって。紗夜さんも。後、千聖



も。

「何でそういうところだけチキってるのよ！普段から好意全開で行ってるのに！何でそこはダメなのよ！」

「あれは好意じゃありません。崇拜しているだけです」

「やかましい！」

「とりあえず落ち着け……な？」

……ヤバイ。悲報、千聖、壊れた。誰か助けて。

「どうしましょう。今井さん」

「紗夜からの相談かあ……慧人くん関連？この前誤解は解けたんだよね？」

「ええ。それとは違つて最近気付いてしまったことがあるんです」

「何をかな？」

「慧人さんの周りつて女性多すぎないですか？」

「……むむ？Rosellia、Pastel\*Palettes、ハロー、ハッピーワ  
ルドー、Afterglow、Poppin' Party。加えてまりなさんとか、後  
あのランニングを応援する女子たち」

「ええ。最後の二つを除いても25人は居ます」

「いやまあいるにはいるけどね？でも慧人くんと近いって絞れるから……」

「それでもかなりの数です」

「あーそうだね。確かに多いわ」

「だから最近少し不安になつてくる自分がいるんです」

「んーでも慧人くんは一途だと思っただけだなあ……」

「ちなみに今日は学校を早退して白鷺さんと居るそうです」

「……えーっと、どこからツツコめばいいんだろう。まず紗夜。何でそれを知っているの？ま、まさかとは思うけど盗聴とかしちやった？」

「そんなことするわけないじゃないですか。白鷺さんに『今日の午後、慧人を借りますね』と来て、慧人さんから『今日の午後、千聖に借りられますね』と来ました」

「律儀……なのかな？というか最早慧人くんが紗夜のモノ扱い……」

「この何というか……モヤモヤがするんです。前のぼんちゃんさんの時と近いような……」

「おお……それは嫉妬というやつでは？」

「だから、今日はポテト一杯食べます」

「おお？ちよ、また前みたいに大変なことになるからそれだけは勘弁して……あ、そう  
だ」

「どうしました？ファストフード店に行きますよ？ポテトが待っています」

「……………ふああ」

「起きたか？」

あれから日頃のストレスやら不満やらを全て吐き出しまくった彼女。言い終えると静かに俺の膝の上に乗ってきて、腕を俺の背中の方に回し、頭を俺の肩とかその辺において、そのまま眠っていた。言っとくが俺は抱き枕じゃないぞ？

そして2時間ぐらいして起きた。現在午後四時過ぎである。

流石に体制は変えさせた。抱きつかれた状態で寝られたら俺が動けなかったからな。一方寝起きの彼女は少し寝ぼけてるのか目の辺りを手の甲でこすっている。この姿だけ見れば十分可愛いのに。

「……………めんなさい……………すっかり寝てしまったわ」

「まあ、そういうこともあるわな」

「……あと、ありがとう。わざわざ薄手の掛け布団を掛けてくれるなんて」

「別に。気にしなくていい」

「……………」

布団を返してくる千聖。だが何故か疑問を浮かべている。

「どうした？」

「まさかとは思うけど慧人。あなた、夜にこの掛け布団の匂いを嗅ぎながら……」

「これ以上口開くとぶちのめすぞコラ」

「犯す？ごめんなさい。今すぐ通報させてもらおうわ」

「ふざけんな」

「……………はあ……何か疲れたわ」

「いや、今の今まで寝てただろ。後、俺の太ももの上でゴロゴロしながら言うな」

「いいじゃない。減るものじゃあるまいし」

「俺の太ももの耐久値が減る」

「……そんなに重いつて言いたいのか？」

「いや、千聖は小さいし小さいし軽いからな」

「……今何で小さいって二回言った？」

そんなの身長が小さいってのと胸が小さいって言う意味ですが何か。

「……まあいいわ」

ゴロゴロをやめて俺の膝の上に乗ってくる。

「……………そういえば、変なことはしてないでしょうね」

「変なこと？」

「……………無防備な私に……………いやらしいこととか」

絶対寝起きの布団のあの話より前に出ることだと思う。順番が完全に逆だというのは内緒だ。

「したって言ったらどうします？」

「この世から存在を消すわ」

「おーおー怖い怖い」

「冗談よ。…………でもまあ、その反応で分かったわ。あなたが何もしなかったことくらい」

「もう少し信用してくれてもいいと思うんですけどね…………」

「してるわよ。してなかったら異性の家、しかも部屋で二人きりの状況で寝るわけないじゃない」

「そりや光栄な話で。よつと…………」

「きやつ…………ちよつと。まさかこのまま…………」

「しねえよ。階段降りるからしっかり捕まってるよ」

そう言うのと渋々ながら力を込めてくる。まあ、事実しか言っていないしな。

そんな感じでリビング。

「じゃ、ここにおろすんで」

「……あなたって普通に女性を抱えるわよね」

「……………?別に重くないんで」

「そういう問題じゃないわよ……」

「あ、千聖の胸は小さくて当たってないから安心して。うん。全然当たってないよ」

「そういう問題でもないわよ!」

「紅茶でいいよな」

「……………ええ」

湯を沸かしつつ、彼女の前にクッキーの入った皿を置く。

「どうぞ」

「これは……手作り?」

「ええ。千聖が寝ている間暇でしたので」

「サクサクしてて、おいしいわね」

「よかった。もうすぐ紅茶を入れますので」

クッキーを食べる千聖。何というか……仕込まれているのかね。ほんと。彼女の食

べる姿はいつも気品に溢れている。

「この敗北感は何かしら……あなた料理は得意なのね」

「んーこういう系はリサ姐あたりに負けますよ」

「それでも充分よ」

紅茶を差し出し、軽いティータイムに入る。

「……ごめんなさいね。もうすぐ大会というのに……」

「気にすんなよ。お前らのアレももうすぐだろ？適度に抜いておかねえと溜まるだろうし、それで壊れてもらっても困る」

「……………性欲のこと？最低ね」

「ちよつと待て。何で今、そういう系の話に変わったと思った？」

「ちなみに私は溜まってたわよ」

「……………性欲が？」

「ストレスよ。ほら、貴方もそういう解釈をするじゃない。おあいこよ」

「へいへい」

コイツってそう言う系の話の耐性すごいよな。寝起き然り、今の然り。まあ、その手の話を一切知らない女子は稀って言ってたしな。自分で……………あなたの周りに居る花音とか彩とかって、そんなに耐性あるように見えないんだけど？そう見えるのは俺



だけ？

……………ん？そう言えばコイツに大会のこと伝えてたっけ？んん？まあいつか。コイツの情報網は広いし。

ピンポン

「ん？客か？はいはい」

こんな時間に客とは珍しい……………何だろう。早退したこと心配してサッカー部の連中が……………つてのはないな。あり得ない。じゃあ、宅配便でも頼んでいたのか？

ガチャ

「やつほー☆」

「様子を見に来ました」

「あ、リサ姐に紗夜さん」

そこにはリサ姐と紗夜さんが。……………何故に？

「風紀委員の見回りです」

「お疲れ様です。どうぞお上がりがりください」

「失礼します」

「……………え？ええ？いや、それで上げるの？色々……………まあいつか。お邪魔しまーす」  
なるほど。ならば納得だ。

紗夜さん。そこにお宅の高校の不良生徒が居るので取り締まってください。

「こんにちは白鷺さん」

「こんにちは。紗夜ちゃんも食べる？」

「食べます」

……風紀委員。モノで釣られた。早かった。

いや、きつとりサ姐ならこの状況で……

「慧人くん。アタシにも紅茶おねがい」

乗るよね。知ってた。

俺は再び湯を沸かすべくキッチンに立つのだった。

## 修羅場ってどうして起こるのか？

「前回までのあらすじ（つばい何か）」

慧人が問題を起こして警察のお世話になったと思つた日菜と彩。五バンドの皆に慧人が警察に捕まったと流して、さあ大変。それをその手腕で丸く収めた千聖。だが、代償に彼女の心は荒んでしまう。そんな彼女の荒れた心を正常にすべく慧人は彼女を家に招き入れる。女子と二人きりの中、何とりサ姐と慧人が崇拜している紗夜さんが乗り込んで来て……。

「あれ？そう言えば千聖も手伝つたの？」

「というこゝとで始まつたお茶会つばいもの。修羅場？何のことです？平和ですよこゝは。」

「いいえ。私が寝ている間に慧人が全部やったそうよ」

「……え？」

「なるほど………クッキーも作れるのですね」

「別にクッキー以外も作れますよ」

まあ、ちよつと多く作っておいたからよかつたよかつた。余つた分は明日、今日の授業のノートを送つてくれる奴らに渡そうとか考えていたが……この分なら余らないな。うん。ごめんな。今度覚えていたらきつと精神的にお返しをしようから期待しないで待つていてくれ。

「そう言えばさ。慧人くんつて千聖とも仲いいよね」

「はあ？」

「クッキー……美味しいです」

「いやいやリサ姐。俺と千聖が仲いいわけじゃないじゃないですか」

「そうよ。今のは侮辱と受け取つてもよろしくて？」

「息びつたりじゃん」

「……………（もぐもぐ）」

「そもその話。私たちは友だちじゃありません」

「どちらかと言うと悪友です」

「そうね。その言葉が一番しつくり来るわ」

「やっぱり？俺もそう思つたんです」

「悪友も友だちじゃ……んー紗夜からも何か言つてあげて」

「そうですね……」

静かな雰囲気で紅茶を一口。そして、

「あ、このクツキーによく合いますね」

「……………」

「で、何の話でしたっけ？」

「……………」

「も、もちろん覚えてますよ！えつとえつと……白鷺さんと慧人さんが一緒に寝た話ですよね！」

「寝てません」「寝てないわ」

「二人して否定ですか……怪しいです。風紀の乱れた匂いがします」

風紀の乱れて匂いで分かるんですか？って、そうじゃない。正しく弁明しないと。

「千聖が寝ただけで一緒には寝てないです」

「そうよ。一緒にしないでちょうだい」

「なるほど。それならよかったです」

「でも、それだけ千聖は慧人くんのこと信用してるんだね」

「……………まあ、そうですね」

リサ姐がさつきから笑いを堪えてるようにみえるけど……まあいいか。

「で、この後どうするの？三人とも」

「んー何か押しかけた感じだし……どうしようね？」

「いや、夕食を一緒にするのだったら四人分作るので」

「四人分？ご両親は？」

「あの人たち今日も遅いので……まあ、夕食要るって言って来ないので俺は知らないです」

そう言いながら立ち上がってキッチンの方へ。そして米を4合分炊く為に米研ぎをする。

「いつも一人なの？」

「まあ、基本的にはそうですね。あの人たちが休みとかだと別ですが」

あの人たちが休みでも基本的にここに立ってるの俺なんだけどね。まあ何でもいけど。

でも俺自身もバイトとかあったりすると家で食べないこともあるからなあ……。

「ちなみに今日のメニューは何にする予定ですか？」

「んーじゃがいもがあるのでフライドポテトと――」

「慧人さん。是非同伴させてください」

「簡単に釣られたねーアタシは……」

「——筑前煮とか面白そうだと——」

「よし慧人くん。アタシも残るよ♪」

「そう言うりサちゃんも簡単に釣られたわね」

「——後は納豆も出しといていいか」

「慧人。納豆出したら（ピー）わよ」

ん？今ピー音が入らなかつたか？あれか？千聖レベルの女優とかアイドルになると、飯面を付けければ私生活でもそういう発言は規制されるのか？まじか。何だよその能力。ちよつと凄い。

「納豆は冗談ですよ。流石に合わない。だから後は鶏肉をオイルで焼いてみて、もやし  
のナムル的な添えて、かきたま汁と米ですかね。まあ、今ざつと適当に考えたんで作  
るときにもう少し再考しますが」

何となく思いついたのはこんなもんか？でも、何がとは言わないが頭の中で並べると  
場違いが居るんだよな……ま、いつか。

「……………」

「どうかしました？あ、すみません。もう少しヘルシーな方がいいですよね。でしたら、  
肉ではなく魚を蒸すか焼くかしましょう。あと、もやしではなく豆腐サラダとかで……  
あ、かきたま汁よりお吸い物の方がいいかもしれないですね」

「……………」

何かフライドポテトのせいできつきのだとカロリーって言葉がちらつくから、こつちなら抑えられるか？まあ、これなら紗夜さんのあの講義も行われなだろう。

「そうなるхмаあ、後で魚は買ってくるので……………どうしました？固まっていますよ？」

「……………慧人くんって、絶対いいお嫁さんになれるのに残念だよね」

「あの……………俺そもそも男なんですけど」

米をセットして……………タイマーはまあ、これくらいで。

「普段頭おかしいのに……………」

「おいこら千聖。納豆食わせるぞ」

「……………(ふるふる)」

無言で涙目で袖をつかんで震えるな。くっ……………コイツ、中身はともかく見た目は可愛  
いからやりづらい……………！

「えっと、何かお返ししないといけませんね」

「気にしなくていいですよ。好きでやってることなので」

「そういうわけにはいきません。あ、そうだ慧人さん。来週テストですよね」

「……………紗夜さん。知っていますか？ウチの高校の中間テストとかって幻の存在です

よ？ツチノコとかそういうレベルでレアなそんざ——」



「勉強会しましょう。今から」

「——い。あ、ちよつと目眩が……」

いや……ね。何か急に疲れが……

「ちなみに拒否権はないです」

「いいねえ。やろうやろう☆」

「賛成よ」

……うわあ……めんどくせえ。

「じゃあ、始めよー」

勉強会って一人くらいバカが欲しいよね？いや、なんでそんなこと言っているかという、紗夜さんは真面目じゃん？リサ姐は勉強とかやるときはやるじゃん？千聖も普通に勉強できるじゃん？いやね？俺だけ出来ないというか、サボりたい系じゃん？めんどくせえと声に出すタイプじゃん？でもこの人たち誰も乗ってくれない悲しみね。それどころか、そんな戯れ言はいいからって流される悲しみね。あー……友希那さん召喚したかった。それか彩。

そんな勉強会も途中だがそろそろ夕飯を作る時間なので、サクッと買い出しに行つて、準備を済ませる。いやあ、こういうときにバイクとか車って憧れるよね。だつてチャリしか使えないもん。

「じゃあ、作るんで三人とも。リビングでくつろいでいてください」

「いえ。私も手伝います」

「紗夜さん……！」

「エプロンなどを貸してください」

「今持つてきますね」

エプロンを着け、髪をまとめる紗夜さん。……何だろう。

「リサ姐。千聖。何あの髪をまとめた紗夜さん超可愛いんだけど。え？やっぱり彼女こそこの世を救済するために舞い降りた女神だった？何か近くに居るだけで浄化されそうなんだけど」

「……え？まさかそれを言うためだけに君はキッチンから出て来たの？」

「早く戻りなさい」

髪型一つでこんなに印象が変わるもんなんだ……。

「変……ですか？」

「そんなわけではないです。無茶苦茶似合ってます。マジで可愛いです」

「あ、ありがとうございます。では始めますよ。レシピは何処に？」

「ん？ここにです」

そう言うって頭を指で軽く叩く。まあ、頭の中に入っているメニューをあげたんだから入っているのは頭の中だよな。

「開いて見せてください」

「無理ですよ？」

今のは紗夜さんなりのジョークだと信じたい。目がガチだったけどきつと冗談だからお願いです冗談と言ってください……！

「分かりました。すべて慧人さんに従いますね」

「では今回のメニューではフライドポテトの下準備と筑前煮が一番時間がかかりますので、その料理スピードを中心にやっていきましよう」

「……中心に？」

「ああ、えっと、なるべく完成するタイミングを近くしたいので」

「なるほど。出来たてを食べたいですからね」

「まずはジャガイモを切りましようか。皮はどうしますか？」

「残してもらって大丈夫ですよ」

「そうですね。まあ、半分むいておきますよ。そっちの方が好きって人もいるかもしれないですし。じゃあ、皮付きの方を切っておいてください」

包丁を取り出して、紗夜さんの前において、洗ったジャガイモも置いておく。芽は……まあ後で取ればいいか。その間に俺は隣で包丁を使ってじゃがいもの皮をむいていく。

「……どうしました？」

「こつちがむいていく中、手が止まってる。」

「ああ、まずはジャガイモを半分に切ってください」

「こつちですか？」

「そうそう。そしたらくし切りにしていきましよう」

「どれくらいの高さに……」

「少し細めですかね」

「??」

あ、ダメだ。伝わってないって顔してる。

「こんな感じですよ」

というところで、皮むきが終わったやつを半分に切ってくし切りにしていく。この大きさなら……6等分だな。

「なるほど……」

すると、そのじやがいもの厚さと見比べながらゆっくり切っていく。

「こ、ことうですか……?」

「ええ。まあ、少し太くなってしまうても、食感が変わると思ってください。じゃあ、こちらの皮むき全部終わったので、こちらもお願ひします。くし切りしたやつは芽の処理だけ確認してボウルにいれておきますね」

「わ、分かりました」

何だろう。この頑張る紗夜さんマジで尊い。今すぐ彼女たちの下へ行つてその尊さを伝えたいが……流石に包丁を持ったまま行ったらきつと警察を召喚されるからやめ

ておとう。

「お、終わりました……」

「では水に晒して置きましょう」

「どのくらいなんですか？」

「んー一時間くらいですかね。まあ、一時間を目安にこちらの進行状況を見て多少変えていくって方針で行きます」

「分かりました」

「なら今度は筑前煮ですね。こちら時間もかかるものから処理をしていきます。椎茸は水につけておいてますので、次はサトイモとこんにやくですね。こちらは下ゆでなり下ごしらえするんで先にやっていきましょう」

「私は何を……」

「ならこんにやくの方をお願いしましょう。今回は包丁は使わずスプーンで行きます」  
「す、スプーンですか？」

「ええ。手でもいいですが……まあ今回はこちらで。こんな感じで」

とスプーンを使って一口大の大きさのこんにやくをちぎる。

「はい。どうぞ。大きさはこいつを目安に」

「わ、分かりました」

その間に隣でサトイモを切っていく。ウチのキッチンが若干広めなので助かってる。「で、出来ました。どうでしょう？」

「オツケーです。では塩もみですね。といつても、簡単ですよ。まずこの器にこんにやくを移してください。……………うん。じゃあ、ここにこれくらいの塩をまぶして……………5分くらい放置します。その間にサトイモを3, 4分茹でて……………じゃあ、この間にゴボウとレンコンを乱切りしていきましようか」

「わ、分かりました」

「いや、手際いいねえ。慣れてるって感じ」

「そうね。料理する姿を初めて見たけど……これは負けるわ」

「うんうん。こういう姿を見るとポイント高いよね☆」

「でも、普段の頭のおかしな言動と行動でマイナスよ。残念すぎるわ」

「それに慧人くん。凄い紗夜のことを見ている……あ、変な意味じゃないよ」

「フォローや声かけのタイミングとかも完璧ね」

「あ、紗夜さん。ここはこんな感じで……」

「ここ、こうですか？」

「そうそう。いい感じですよ」

「勉強会だと紗夜の教え方が凄く適切だけど、こつちだと慧人くんのフォローが凄い」

「何でこの二人って付き合ってるのかしら」

「うーん。普段からお互いに好意全開なのにね。かといってヘタレって訳でもないし

……」

「難しいわね……背中を押せばくつつく、なんて簡単な話かしら？」

「んーもつとこう大掛かりにしないとダメかもね」



「……なぜかしら。無性に珈琲が飲みたくなるわ」

「その気持ち凄いい分かる。何というか……見せつけられている感じがするよね」

「そうそうそれよ。甘すぎるのよあの空間が」

「なお、本人たちは無自覚な模様」

「一番タチが悪いわね」

「だね」

『ぼ、ぼてぼてが揚がっていく……!』

『ここで取り出して……つまみ食いはさせませんよ』

『……!』

『そんな目を輝かせてもダメです。油の温度を上げてから、もう一回揚げますので』

『も、もう一回……! (ごくり)』

『ちよつ、言ったそばから手が出そうになってますよ!?!しまった!揚げないフライドポテトを選択すべきだったか!抑えて!紗夜さん抑えて!』

『ぼ、ぼてぼてえ……!』

『……ねえ。アレはいちやついてるのかしら?』

「暴走しようとしている紗夜を慧人くんが後ろから抱きかかえて押さえているね。」

まあ、包丁とか片付けていたみたいだから油以外に危険はなさそうだけど……」

「……………紗夜ちゃんもあんな風になるのね……………」

「ポテトが関わると……………ね」

『よし、温度はこれくらいでいいからポテト投入……………だから抑えて！味見くらいはしていいですからー！』

『あ、味見はいつですか!?今ですか!?』

『なわけないでしょう!?だからまだダメですってば!』

「千聖が壊れる様子は想像できないよね〜」

「そういうリサちゃんもよ」

「やっぱりあの二人はお似合いだよね」

「間違いないわ。さつきから慧人がまともに見えて仕方ないもの」

「それね」

『よし……………ほら揚げたてで熱いから気をつけてください』

『あー』

『いや、やれと?あーんしろと?』

『いいんですか?やらないと——』

『おう。やらないと何ですか?』

『——味見でこのポテトは全て消えますよ（どやあ）』

『や、やべえ……冗談に聞こえねえ……』

『だから、あー』

『分かったよ。ほら、あーん』

『………んんっ！外は軽くカリッとして中はほくほく……おいひいれす……！』

『そりやよかつた………つて手！味見って言ったんで続きは実食の時です！』

『………だめ？（うるうる）』

『そんな目してもダメなものはダメです。くつ、クールから遠ざかっていく………！』

『「本当に何故あの二人は付き合っていないの？」』

『ほら後は盛り付けて配膳です』

『なら私がポテトの配膳を………』

『やらせねえよさせねえよ』

『………いじわる』

『あなたはそういうキャラじゃないでしょおおっ！』

『ついに叫んだわね。耐えきれなくて』

『アタシたちも行こうよ。いい匂いがしているしさ☆』

『そうね。それくらいなら手伝えるわ』

「「いただきます」」

ようやく食に……まあ、時間がかかるのはしょうがないが……何だろう。最後のポテトでどつと疲れが……

「どうです？リサ姐」

「合格☆このアタシをうならせるとはね〜」

「ありがとうございます。紗夜さん。ポテトばかり食べないで他のものも食べましよう」

「わ、分かってます……」

「千聖は……いっぱい食べないと大きくなれないよ」

「どういう意味で？」

「色んな意味で」

何だろう……この食事の風景。和むなあ……

「でもさー慧人くんの料理スキル高いね〜」

「ええ。味もよし、フオローもよし……ほんと、一周回って清々しいわ」

「これなら毎日作ってほしいですよ。ポテ……夕食を」

（（絶対ポテトだよね……））

「頼まれればいつでも作りますよ」

「本当ですか！またポテ……こうやって食べられるんですね！」

「だからまた手伝って下さいね。紗夜さん」

「勿論ですよ。次はもつと上達して見せます」

まあ、紗夜さんは生粋の努力家だし、いつか抜かれるかもなあ……。

「ねえね。今のは遠回しの告白かな？」

『毎日夕食を作ってほしい』って、普通ならそれに近いんでしょうね」

「だよねくしかも、それに対して『また手伝って』とか」

「慧人にしては素晴らしい返しだと」

「普通ならあのまま同棲もしくは通う流れだよ」

「ええ。何で普通でいられるのか不思議だけど」

席は俺の隣に紗夜さん。正面にリサ姐。対角線上に千聖だが……何を話しているんだろう？

「でも、このポテトはいつもより美味しく感じます」

「そうですか？」

「ええ。慧人さんが作ってくれたからでしょうか？」

「違いますよ。それは、紗夜さんも頑張ったからです」

「慧人さん……！いえ、きつと私たち二人が共同で作ったからよ」

「紗夜さん……！そうですね。きつとそうですよ」

お互いに手を取り合う俺と紗夜さん。

何だろう。とても前に座っている二人が笑顔だ……ちよつと引きつってる気がしなくもない。

(何でこれで付き合っていないの……！じれったい……！)

そんな感じで食事は進んでいく。

「ダメですよ。にんじんだけ俺の方に避けないでください」

「慧人さん。にんじんとは何で存在するんでしょうね」

「知らないです」

「なくてもいいとは思いませんか？」

「はいはい。思わないから食べましょうね」

「……………(さつ)」

はあ。まあ、日菜から紗夜さんが何でにんじんが嫌いなのかは聞いたけど………思いの外理由がまともで聞いたとき感動したけど。全く………そういや、千聖は納豆だし、リサ姐はグリーンスムージーだっけ？二人も何かあるのか？まあいいや。今は目の前の彼女だ。

「しょうがないです。一個だけでいいんで食べてください。後は俺が食べます」

「………無理な相談ね」

「ポテト禁止しますよ？」

「……………っ！ひと思いにやってください……………！」

「分かりました」

目を閉じて震える彼女の口元にそつと（なるべく小さい）にんじんを持って行く。そ

して舌の上にちよこんと乗せると……

「……………っ！」

声にならない悲鳴をあげる。だが、何とか飲み込んだようで……

「や、やりましたよ……………」

「よしよし」

涙目でこつちを見てくる。可愛い。超可愛い。思わず撫でたくなる可愛さだ。

(はやく付き合えこのバカップルが……………！)

なお、千聖とリサ姐が急に苦いものを食べたいと言い出したがスルーした。え？このままだと甘過ぎて死ぬ？どうしたんだろう？そんなに甘い味付けにしてないんだけどなあ……………

この後、食事を終え、片付けをした段階で三人を送って帰るのだった。ちなみに、

「慧人さん。一つお願いが……………」

「何でしょう？」

「おんぶしてくれませんか？」

「喜んで」

紗夜さんをおんぶすると背中に女性特有の感触が襲ってきてちよつとやばかったです。紗夜さんもあるんだなあ……………って考えていたら千聖に腕をつねられました。何で



289 修羅場ってどうして起こるのか？

で  
し  
よ  
う  
ね  
？

## その再会は新たな火種を生む

そして土曜日になった。

『善灯高校対虎南高校。1対2で虎南高校の勝ちです』

「「ありがとうございます」

午前9時30分。第一試合終了。

本日は何ともハードな日程を組まれた。この後、次のチームが試合し、11時から12時まで昼休憩。その後12時から俺たちの第二試合……さらに15時頃から俺たちの第三試合。今日は三試合……死ぬよ？マジで。

そして何と、今回の試合……リーグ戦なんだが、四チーム中上位二チームになると決勝リーグへ。決勝リーグは明日なので……つまりヤバイ。

「ふうーお疲れだ。皆、しっかり休みつつ次に備えるぞ」

「だな。たく、何というハードスケジュール」

「……仕方ない。こういうこともある」

「いやレアケース。絶対レアケース」

レギュラー陣を温存……なんて芸当、俺たちには出来ず。いや、やろうとしたよ？善

灯高校はこの地区ではそこまで強くない。だからキャプテン、俺、森下、千石は前半はベンチに居たが……まあ、0対1で負けてたな。で、流星にマズかったので四人交代。流星にフィールドにまとめる役というかチームの支柱が誰もいないのはマズかったなと反省しています。

………どれもこれも監督がないせいだ。顧問は……来てはいるけどベンチで座ってるだけ。まあ、あの人サッカーについてよく分かかってないししょうがない。

「……後の二試合は桃山浦高校、赤巻高校の二つ。どちらも強敵」

「だなー。どっちも最初からフルメンバーで行かないと勝ち目はないよなー」  
「体力なら二試合分くらいフルで走れるだけあるだろ？お前ら」

「多分な。主にあの鬼畜ランニングのせいだな」

ただ、試合で走るとランニングは違う。そのためバカみたいに体力はあるけど、流石に二試合持つかは知らん。連続ではないからまだマシだけど。

「キャプテン。先輩」

「おおうどうした？」

「桃山浦と赤巻ですが、5対0で桃山浦が勝ちました」

………何だと？二つとも強豪……そんなに実力は離れていないはず。

「………やったな」

「何をだ？」

「……捨てた。赤巻は桃山浦との試合を捨てた」

「なるほどねー。上がるために」

「戦略の一つとしてはありだが……」

温存するために捨てに来たか。話によれば主戦力はベンチにずっと居たらしい。点差が離れていこうとベンチでは最初から善灯と虎南に向けて対策しているらしい。

「……………僕らも対策会議を始めようか」

「だなー」

ボードを取り出して、そこに駒とかを置いて話を進めていく。

11時。試合終了……とほぼ同時に何かコンテナ部分がでかいトラックが突っ込んできた。……いや、事故とかそういうわけじゃなくて何かトラックがフィールドギリギリのスペースに鎮座した。そこから出て来た見覚えのある黒服さんたち（いつもより多く見える気がする）が素早く柵みたいな、バリケードのようなものをトラックのコンテナの前に置く。そして、コンテナ部分が上がってそこからは何かステージのようなものが出て来た。

「は？」

すると何か見覚えのある女子たちがステージの上にあがって立つ。

『ただいまより。ガールズバンドによる演奏を始めます』

すると大会本部が何か言い出した。おいこらまさか……

「……なあ。先週、急遽大会の開始が1時間早まった理由って……」

「……これだな」

「あははー粋なことするねー見ろよ。もうキャプテンなんて皆引き連れて前の方に走っ

てたつぞ」

「はやっ?! アイツ早くねえか!」

「……いや、他校や観客も同じようにやってる」

「告知でもあつたのかねーまあ、ウチの顧問アレだし」

「……………何がどうしてこうなっているんだらう。」

『皆さん! 今日時間は時間を頂きありがとうございます! す! 短い時間ですが私たちのバンドで盛り上げていきましよう!』

「……………何故だろう。あの司会……香澄だな。うん。何故アイツに任せたのかは知らんがそのサイドには……蘭、友希那さん、こころ、彩とボーカル陣。その後ろには他のメンバーが……何で勢揃いしてるの? ねえなんで君たち勢揃いしてるの?」

「「うおおおおおおおおっ!」」

「凄いなあ……まあ、ウチのキャプテンたちが筆頭に盛り上がってるが……ん? 黒服さんが呼んでる?」

「何でしょう?」

「すみません。このようなことに」

「……いや、謝ることはないんですけど……」

「実は、冬木様がこちらの大会に出場すると聞いたこころ様が」

待って。千聖もだけど俺それまちなさんにしか言っていない。

「『そこで演奏したらきつと盛り上がるわ!』とおっしゃって」  
ですよねー。

「さらに他の皆様も次週にある『さくくる合同ライブ』の前舞台としてちょうどいいと  
あー流されたんですねー。

「後は権力でこれです」

流石弦巻家だあー。ほんと、ヤバい権力の持ち主だ。そりや大会運営側も逆らえない  
わなあ……

「バンド、メンバー紹介も終わったようです」

ホントだ。紹介が終わって一組目のポピパが演奏を始める。……なるほどな。先週  
もたえと香澄は聞いたがやつぱりポピパで五人揃うと違うな……後 *R o s e l i a* と  
も雰囲気が違う。

次はアフグロ……彼女たちの曲が始まる。ポピパのポップな曲からアフグロのロツ  
クへと移り変わる。会場の熱も段々と上がっていく。

そしてパスパレ。アイドルバンドだからか知名度が高いのか出ただけで盛り上がる。  
だが、曲もその盛り上がりや冷めないぐらい凄かった。

四番目はハロハピ……やつぱ改めてみるとミッシェルの存在感……!ミッシェル

……！ダメだ。ミッシェルだけ見てたらよく考えなくても……あーなんだこの心配感……。別の意味でドキドキだわ……。

最後は Roselia。彼女たちはウチの高校で見たからね。ウチのサッカー部が一番盛り上がりつつある。まあ、先週はウチの学校、ガールズバンドの話題で持ちきりだったからなあ。紗夜さんに劣情を抱いたやつは片っ端からぶちのめしたけど。いいか？ 紗夜さんは神だから崇めるものだ。そんな対象で見るやつは全員（ピーー）。

『ありがとうございます』

『短い時間でしたが楽しかったです！』

『この後も頑張ってください！』

……どのバンドもやつばすげえな。って気付いたらもうこんな時間かよ。

「試合開始まで残り20分を切ったか」

「よし、アップするぞ！」

「「おう！」」

彼女たちの演奏で何だか力をもらった気がする。そうだな……やってやろうか。

そして試合開始5分前。俺らにとって二試合目。アップをしていた桃山浦高校、虎南



高校がベンチに一旦下がる。

「よお。テメエが相手かクールビューティー狂」

「ああ？ 久しぶりだなあ。クソ金髪ロリコン」

そこには俺と決して浅くない因縁の相手がいた。

「相変わらずクールビューティークールビューティー騒いでんのか？」

「テメエこそ、ロリコンこじらせてんじゃねえのか？」

「「ああっ!」」

メンチを切る俺たち。

この男、東雲とは中学が一緒だった。その頃からよくお互いの信念が相反するものだったため、ぶつかり合ってる。

ロリコン……ロリータコンプレックス。この男は幼女や少女——特に金髪の——をこよなく愛している。無論、見た目さえそうであればいいので合法ロリも行けるらしい。

ちなみに本人は金髪ロリータ教なるよく分からんものを掲げている。え？ お前十二それ？

「ははっ！ テメエには、金髪ロリの良さが分からねえとか、生まれ変わってやり直した方がいいんじゃないのか？」

「そつちこそ、クールビューティーの良さが分からねえとか、一度頭を開いて医者に診てもらった方がいいだろ？」

バチバチと火花が飛び交う俺たち。

『キャプテン。冬木先輩が向こうの選手と……』

『ほつとけ。アイツのクールビューティーのスウィッチが入ると手に負えん』

『キャプテン。あのバカ、向こうの選手と……』

『無視しろ。東雲が金髪ロリについて語り出したら止まらん』

ちなみに誰も止めようとしなない。

「相変わらずテメエとは話が合わねえなあ……！」

「合うわけねえだろこの人間の恥が……！」

「ああ？ロリコンのどこか恥だこの野郎！」

「ロリコンは皆恥だろうが！」

「んなこと言ったらクールビューティー好きは変態だろうが！」

「ああっ!?変人とはよく言われるが変態は聞き捨てならねえぞコラア！」

「はん！ロリのその愛おしさが分からんようなバカにつける薬はねえんだよ！」

「クールビューティーのその神々しさに気づけぬ阿呆ほど哀れなものねえんだよ！」

「「ああ!?やんのかこの野郎！」」

「何やら騒がしいと思ったら……」

「慧人くんだったね☆」

演奏を終えたRoselia。着替えなどを済ませた彼女たちは、紗夜の意向によりそのまま慧人の試合を見るべく残っていた。

「……………あれでいいの？」

「何やら面白そうなことになってるわね！」

「あこ。あれは見ちゃダメだ」

「わわっ。おねーちゃん……」

ちなみに他の四バンドもついで感覚で慧人たちの応援をするために残っていた。彼女たちはこころの黒服さんたちが全員送迎するので、後ろには護衛も兼ねて黒服さんたちが並んでいる。並んでいる黒服さんたちの威圧感が凄いため、誰も近寄ろうとはしない。

「いいかこのバカが！金髪ロリはこの世の神秘だぞ！」

「ざけんな阿呆が！クールビューティーこそ全人類の宝だろうが！」

当然であるがああ二人の言い争いは彼女たちにも聞こえている。

「まあ、冬木先輩だし」

「そうだね。冬木さんだし」

「ケイトさんですからね」

が、普通なら引いてもおかしくない発言も、常日頃からその片鱗を見せていた為彼女たちは一切動じてなかった。

「……ふっ。だが慧人よ。ついにオレは天使を見つけたんだよ」

「……………お前。天使を見つけたとか頭わいてんじゃねえのか？」

「あああつ!? テメエ自分は女神を見つけたとか言ってただろうが!」

「ああつ!? 女神と天使を一緒にしてんじやねえぞカスが!」

慧人は残念であった。自分が今までどれだけ頭のおかしな発言をしていたか分かってないようだ。

「だつてさ! おねーちゃん!」

「さすが紗夜さんです!」

勿論彼女たちは慧人の言う女神が紗夜であることは知っている。

「で? その天使は誰なんだよ」

「ふっ。教えてやろう……白鷺千聖様。それが天使の名だ」

「……………え? ごめん。それつてさつき演奏していた……」

「いかにも」

「……………まあ、あの人小さいし。胸も小さいし。金髪だし……お前の感性ドストライクだよな」

「??珍しくお前にしては話分かるじゃないか? どうしたんだ?」

まさかここで知り合いの名前が出て来るとは思わなかった慧人。そして……

「……………ねえ紗夜ちゃん」

「どうしましたか?」

「あなたの信者。消していいかしら」  
「どうぞ」

静かに微笑む千聖。そこには静かな怒りが感じられた。

「ただやめといた方がいいぞ。あれは天使というより墮天使だからな」

「ああ？ テメエの腐りきった心には正しい現実が見られないのか？」

「はあ？ テメエこそその朽ち果てた脳で正しく判断できてないんじゃないのか？」

言い争いがヒートアップしていくが試合の時間は迫っていく。

「この続きは試合で証明してやる。覚悟しろよクソ信者」

「上等だロリコン終末期」

二人は各々のベンチへと帰って行く。

「いや〜バチバチだったね〜」

「どつちもおもしろ〜い〜」

「慧人さん以外にもああいう人って居るんだね！」

「いいなあ。私のこともこうキラキラ！ って感じて見てくれる人いないかな？」

「いやあれは異常だろ」

観客席で盛り上がっている彼女たち。ただここで残念なことに気付いてしまう。

「……………ねえ。彼らの応援は居ないのかしら」

「そう言えば……」

「向こうの高校はあんなに観客がいますよ」

指さす方には制服を着た女子たちだったり、横断幕を持った男子生徒だったり、カメラを構えている人だったり、桃山浦高校を応援している人たちの集団が居る。

だが、虎南高校には居なかった。そう。彼女たち以外誰も居ないのだ。

「多分、触れちゃいけないことだと思っようよ……」

「あはは……そういうことだよね」

「ああ、何と儂いこと何だろうか」

「そんなの私たちが負けなくらい応援すればいいのよ！」

「だよねーけーくん！頑張れー！」

「フアイト〜」

「声出したらカロリー使うから痩せるよね！」

「え？あ、そ、そうだね……」

「そうなのか……？」

「あれ？ミツシエルは？」

「ミツシエルはお手伝いがあるってさ」

……何かウチを応援する観客がいる。わあー珍しいって思ったらアイツらだった。

「ようやくウチにも応援団が……」

「キャプテン。冬木先輩の応援がほとんどです」

「何だ?!? くっ……お前ら! やってやるぞ!」

「やれやれ。応援一つで熱くなるなんて……」

本当にこいつら単純だな。



「ねえ、紗夜。紗夜も声出してみたら？」

「ブシドーです！サヨさん！」

「声出すとスカツとするツスよ」

「そうね。頑張ってください。慧人さん」

……………。

「お前からあ！気合い入れてけ！」

（（うわあ……単純））

この瞬間、大勢の心が一つになったことを俺は知らない。

そんな感じで整列し、挨拶を済ませた俺たちはポジションに着く前に円陣を組む。

「ふうーいいかお前ら」

キャプテンが静かに目を閉じる。そして、目を開くと共に声を上げる。

「勝つぞ！」

「「しゃああつ！」」

こうして試合の幕が開けたのだった。

## ライバルとの対決って燃えるよね

「お前とやれんのはいつぶりだ？」

「去年の冬以来だな」

「約一年か……おもしれえ。久し振りにボコボコにしてやるよ」

「はっ。お前にボコボコにされた記憶はねえけどな」

「言ってる。今回で勝ち越した」

「それはこっちの台詞だ」

前半の40分間が終了した。

スコアは7―7の同点である。

「凄いね……」

「東雲さんと互角にやり合ってるあの人は何者？」

桃山浦の観客から出てきた言葉。それもそうだ。ここまで異常なまでに、ハイペースに点を取り合う展開は誰が想像できたか。

「サッカーってこんなに点が取れるスポーツなの？」

「多分、この試合が凄いだけですよ」

「けいさんも凄かったですけど……」

「あの、東雲って人も凄かったね」

「何か二人だけ住む世界が違う？ 感じだったよね！」

前半だけで、桃山浦高校の東雲は5ゴール2アシスト、対する虎南高校の慧人は1ゴール6アシスト。試合前から争っていた二人が全得点に絡む活躍を見せていた。

しかも、それだけに留まらない。二人は何度も1対1でぶつかる場面があつたが互いに一歩も引かない。東雲が抜き去れば、次は慧人がやり返す。他の選手が彼らを止めようとすると、二人は持ち前の技術力でディフェンダーを抜き去り、東雲は自身でそのまま、慧人はパスを繋げることで点へと繋げていく。双方の攻撃陣が強すぎて、守備陣が歯が立ってない。その結果が両チーム合わせて40分で14点という結果だ。

「これがケイトさんのブシドーなんですね！」

「そうだよね！ なんかるんつってきた！」

「お二人の言いたいことはよく分らないですがなんか凄かったツス！」

「凄い技術力ね……どれだけ練習していたのかしら」

「普段から想像付かないよね……」

深い関心を見せる彼女たち。サッカーのことを詳しく知らない彼女たちでも、彼らの凄さが伝わっていた。

一方、ハーftime中のベンチ。

『東雲。お前飛ばしすぎじゃないのか？後半バテるぞ』

『ははっ。大丈夫ですよ。それに久し振りにアイツとやれてますから、楽しくてしょうがない』

『中学時代からの因縁……だったか？』

『ああ。あの男には負けられないからな』

『それを踏まえてもいつもより絶好調じゃないか。ダブルハットトリック目前だろ』

『何か今日はいつもより調子がいいんですよ。後半もガンガン回してくれ』

『まあ、お前がウチのエースだからな。ディフェンス！押さえていかねえと突き放せねえぞー！』

『やるねー冬木。いつもあんなに積極的に攻めないじゃん』

『別にそうでもねえよ。ちよっとしか変わってねえつての』

『……………いや、いつもはパス主体だけど、今はドリブル主体。プレイスタイルが違うよ』

『……………まあ、アイツには負けて居られないからな』

『お前らの激闘はいいが……冬木。お前の体力は持つのか?』

『持つか?持たせてやるよ。不思議と今は疲れを感じてねえ。後半もバテる気がしねえな』

『あの男はお前に任せる。いいか?俺たちDFは何としてもこれ以上失点させないようにするぞ』

双方作戦を練りながら休憩を取る。そして後半戦が幕を開ける。

「来いよ冬木!」

「行くぞ東雲!」

ボールを持った慧人。一旦東雲を引きつけて、ボールを上から通してかわして行く。

「あれはシャペウ!」

「上手い!これなら……!」

「いや!」

普通ならこれでディフェンダーを抜ける……だが。

「お前のその技は何度も見てきてるんだよ!」

東雲を抜くことはまだできていなかった。

「だろうな!」

しかし、対して驚く様子もなく、ボールを確保する。そして……

「なんつーフェイント合戦だよ！」

「前半以上とか衰えを知らねえのかよ！」

フェイント、相手を騙して抜き去るものだが、この二人は過去の数え切れないほどの対決のせいでお互いの癖などを把握している。そのためお互いがお互いを突破することは容易ではなくなってしまった。

だが、それは1対1の話。試合においては別である。

「冬木！こつちだ！」

「キャプテン！」

重心を右足に乗せて、右から抜いていく、或いは右サイドを駆け上がるキャプテンにパスを出すと思わせ、左足でバックパスを出す。

「流石だね！」

ボールを受け取った千石は右サイドを駆け上がったっているキャプテンにパスを出す。

二人は1対1ではよく対決を繰り返していたが、試合となれば別。パスという選択肢が加わった上でどう動くかまでは読み切ることは難しくなっていた。

「キャプテン！こつちだ！」

「分かってる！」

ボールを託されたキャプテンは、サイドからゴール前に向かってクロスを上げる。

桃山浦のディフェンスと虎南のフォワード陣がゴール前に密集する中、そのボールに向かつて、走り込んでくる慧人と併走している東雲の二人がいた。

「構えろ！キーパー！」

慧人がボールに向かつて跳躍すると同時に、東雲は慧人の前に出る。そしてワントンポ遅れて東雲も跳び上がり……

「なっ……！」

慧人はそのボールをスルーする。そのままボールは二人の間を通過してゆき……

「ナイススルー！」

森下がそのボールに合わせてシュートを放つ。キーパーは冬木が打つものだと思っていたために、反応が一瞬遅れる。その一瞬が命取りとなり……

「よしっ！」

「追加点だ！」

キャプテンと森下がハイタッチを交わす。

「よく後ろにいてくれたな」

「司令塔だよ？舐めないでほしいね」

続いて千石と慧人もハイタッチを交わす。

そのままお互いポジションに着く。

「これだからおもしろえ……」

「やり返すぞ。東雲」

「ああ！」

桃山浦のキックオフで試合再開。ボールは東雲が持ち、あつという間にマークに来たフォワード二人を抜き去る。

「気を引き締めろ！止めていくぞ！」

「突破していくだけだ」

フエイントにはフエイント。

東雲がフエイントを重ねていくが抜かれないように慧人はそれに着いていく。

「やっぱ抜けねえよな！」

すると、東雲は右足のアウトサイドで軽く蹴った後、素早くインサイドでボールを左足の後ろ側を通し、左足のアウトサイドで軽く蹴る。

「こっちはマクギーディターンか！」

「マズい！あの二人の間に距離が！」

空いた距離を詰めようと慧人が前に出る。前に出たタイミングで東雲は味方にボールを託し、自身はゴールに向かって走って行く。

「ディフェンス！」



慧人のマークを振り切った東雲。対して慧人は東雲に追いつくより、ボールを持っているやつから奪う方が良いと判断して走って行くが……

「東雲！」

慧人がやってくる前にボールは大きく上がる。

「いけっ！」

少しゴールから離れた位置でのボレーシュート。そのボールはゴールの左上の隅に吸い寄せられるように飛んでいき、ゴールに刺さった。

「よっしゃあ！」

「ナイスボレー！東雲！」

「おうよ！まだまだ取っていくぞ！」

後半戦も一進一退の攻防を繰り返す両チーム。

「すごい戦いね！特にあの二人！何だかバーンって感じがする！」

「あの二人の決闘……実に怖いね」

「ふええ……目が回りそうだよ……」

「それにしてもよく走ってますね……冬木先輩」

「けーくんもあんなに走れるんだね」

特に東雲と慧人は衰えを一切感じさせない。前半以上に双方が走ってぶつかって

る。

「ひーちゃんもけーとさんくらい走れば痩せれるよ〜」

「うっ……いや、声出すだけでもきつと行けるはず！頑張つてー！慧人先輩！」

「あはは……あんなに走れないよね。普通」

「でも、アタシはあれくらい体力付けたいな」

「……………いや、あそこまではいらないでしょ。絶対」

無尽蔵と言つても差し支えないそのスタミナ。

後半残り5分になつても彼らの走るスピードや量は全く落ちていなかった。

「何だか凄いキラキラしているね！慧人さん楽しそう！」

「あ、何か分かる気がする。あの二人楽しそうだよね」

「うんうん。楽しいのが一番だよね」

「いや、納得していいのか!?何であの人たちはあんな動きが出来るの!?!」

「まあまあ。落ち着いてよ。そこはほら。慧人さんじゃん」

慧人⇨超人という方程式が成り立っている以上、大抵のことは慧人だからですんでしまふようになっている現状。

もはやサッカー（？）になりつつある二つの高校の戦いも終わりを迎えようとしていた。得点は12対12と同点。次の一点を取った方が勝者となる。

「ふう……」

「はあ……はあ……」

息が軽く上がり始めた二人が向き合う。ボールは東雲が持っていた。

「そろそろラストプレーだ……」

「そうだな……」

東雲はボールを足裏で転がしながら徐々に後退していく。それに対し、慧人が距離を詰めようと前に出た瞬間、ボールを右足の裏で転がしてそれを軽くジャンプして跨ぐ。そして左足の裏で右足の方に転がし、右のインサイドでボールを蹴って加速する。

「あれはファルカンフェイントか！」

「今更だが何でお前はすぐに名前が出てくるんだ!？」

一歩出遅れた慧人も着いていくが、東雲は急停止する。そして、慧人が追いついて自身の前に立ったタイミングで、ボールを縦に蹴り出し自身は慧人を避けるようにして前へと走る。

「今度は裏街道! よし! これで抜けたはずだ!」

「行けっ! 東雲!」

そして東雲がシュート体勢に入り、シュートを放つ。

「これで終わり……っ!」

そこで東雲は目を見開く、抜き去ったはずの慧人がシュートを胸で受けていたからだ。

「威力高いなあ……おい」

「化け物かよ……完全に置いてきたと思つたのに追いつきやがつて」

そのまま慧人は千石にパスを出し、相手ゴール目がけて走る。東雲もほぼ同時に走り出して……二人が並ぶ。

「へい！」

「取らせるか！」

ボールは彼らの前へと送られる。

「冬木！」「東雲！」

ボールを取つたのは……慧人だった。

「決めてやるっ！」

「決めさせねえっ！」

すかさずシュートの体勢に入る慧人。そしてシュートは放たれる。足を延ばしてシュートを止めようとする東雲。ボールはそこでは止まらずゴールへと向かう……

「……………っ！」

ゴールキーパーが手を伸ばすもギリギリ届かない。

そしてボールはそのまま……

そのまま……

ガンッ！

ボールはゴールバーに直撃し、ゴールの後ろへと飛んでいく。

ピ、ピー！

その時、試合終了のホイッスルが響き渡る。

「終わったか……」

「だな。はぁー疲れた」

倒れそうになる東雲の腕を取り、肩で支える慧人。

「わりい。一気に疲れが出たわ」

「そりや、あんだけ走りやそうなるだろ」

「そういうお前はまだまだ平気そうじゃねえか」

「普段クソほど走らされてるからな。それより最後。お前の足を掠めただろ」

「ははっ。そのおかげでコースが僅かに上に逸れたな。ラッキーってとこだ」

「……今回は引き分けた。次は俺が勝つ」

「こつちこそ。それでこそライバルだ」

クールビューティーや金髪ロリータが絡んでいなければこの二人はまともに見える。

「……………」

だが、二人は知らない。限界以上に動けた陰には彼らが女神だ天使だと崇めていた二人が見ていたことが大きいと言うことに。

試合終了後。

『よし、引き上げるぞお前らー』

『『おおー』』

ベンチを空け、撤収している両校。

「いやあ。凄い試合だったね〜」

「そうね」

「確か、もう一試合するんでしょ？どうするの？見ていく？」

「私は見ていこうと思います。スポーツをする慧人さんというのが新鮮ですの」

「とか言いつつ、本当はスポーツをしている慧人くんを見たいだけでしょ？」

「勿論です。その何が問題ですか？」

「紗夜さんが素直に答えた……」

「開き直りましたね……」

「清々しいほどに開き直ったわね」

「あ、そうです。慧人さん！」

紗夜が、慧人を呼ぶためにそこそこ大きな声を出す。

「呼びました？紗夜さん」

すると、ヒョコヒョコと歩いて来る慧人。

「手をあげてください」

「??? とうですか?」

頭にクエツションマークを浮かべながら、手を軽く顔の高さくらいに挙げる慧人。

「ええ」

そんな慧人のあげられた手をペチン、つて感じで紗夜が叩く。

「かつこよかつたですよ」

「……え?」

すると、手を見て現状を整理し始める慧人。

(い、今のはハイタツチ? え? 今、特に何も考えていなかった……つてそうじゃない!)

「紗夜さん! もう一回! もう一回やつ——」

ガシツと、慧人の両肩が掴まれる。

「はいはい。次の試合のミーティングするからお前はこつちなー」

「はいはい。こつちこようねー」

「は、放せテメエらあつ! おい! 今すぐ俺を放せえつ!」

「「テメエばつかイチャつきやがってこの野郎!」」

「うるせえ! 俺は……俺は! あつち側にいきたいんだああああつ!」

「「行かせるかよクソ野郎が!」」

「……………阿呆だね」



「阿呆だよ。コイツは」

ジタバタするが、抵抗も虚しくサッカー部の面々によって連行されていく慧人。その様子を眺めている25人プラス黒服さん。

さつきまでかっこよく見えていた彼の姿は、いつもの残念な感じに戻っていた。

## 最強の化け物は女神によって目覚める

気付けば次の試合が始まる時間だった。やっぱ一試合しか空いてないってキツイと思う今日この頃。皆様いかがお過ごしでしょうか？

「とりあえず、この試合は引き分け以上なら上位リーグに行けるな」

赤巻と善灯の試合は赤巻の勝利で幕を閉じる。だが、やっぱりレギュラー………というか主力陣は前半だけ出て点差を付けて後半は引っ込んでいた。どんだけ体力温存してるのやら。

「まず、警戒すべきは向こうのキャプテンだな。さっきの東雲みたいな技術はないが、フィジカルと言っても勝つためにラフプレーも厭わない精神が厄介ってところだ。おかげで相手チームはあのキャプテンによる統率でウチ以上に一体感がある。後は向こうの全体的な感じとしてフィジカルが強く、体力もそこそこ。まあ、体力面はウチには負けるけどね」

「……確かに。あつちのキャプテンってヤンキーみたいだな。にしても千石。お前、よく相手の情報仕入れているな……」

「……………本当は監督かマネージャーに任せたいよう？でもいないじゃん」

「……そうだなあ」

今にして思えば、監督がいればもう少しまともだったかも。ウチのサッカー部。

ただフィジカルにヤンキーによる統率か……確かに向こうはギスギスではないけどそんな感じするな。攻撃的っていうか……。

「まあ、相手が何であれ俺たちは勝つだけだ！引き分け？違う！俺たちが目指すのは勝利だ！」

「お、流石キャプテン。いいこというじゃん」

「ああ。そして……彼女たちを惚れさせるんだ」

そう言うって指さす方には……あれ？まだ残ってくれていたんだ。二試合目と同様に25人プラス黒服さんたちが。さつきまでそこには……ああ、トラックの中にいたのか。それなら納得。

「いや、キャプテンじゃ無理無理ー」

「……現実みたら？鏡いる？持つてこようか？」

「んなことどうでもいいからさつきと整列するぞ」

「つておいお前らあ!!少しは肯定してくれてもいいじゃないか!?!」

「「あーうん。はいはい」」

キャプテンの戯れ言を無視して並ぶ。たく。万年カノジョ募集中はどうでもいいか



前半戦が終了した。スコアは3-0で赤巻が勝っていた。

「慧人さんが何も出来ていないね……」

「しょうがないツスよ。試合始まってからずっと3人くらいに囲まれているんですから」

「もうなんかドカーンって感じで倒せないのかな?」

「暴力はダメですよ。ヒナさん」

あの東雲と言われた人たちとの試合と違って、慧人はボールにほとんど触れていない。ずっと、2人か3人がついている。

サッカーのことを詳しくは知らないのだけど、どうしてもこの試合は嫌な感じがする。向こうの人たちの空気が悪い。

「でも、何かさ。危ない感じがするよねー」

「確かに。何か肘とか腕とか当たってましたもんね」

「何回かふぁーる?で試合が止まってたよね?」

そう。しかもこの試合はやたらとラフプレーと呼ばれるものが多い。さっきから虎南の人たちが何度も倒されたりしているのがその証拠だ。

「チサトさん？何か考え事ですか？」

「ええ。ちよつと心配つて感じかしら」

何か悪いことが起きなければいいのだけど。

そしてその予想は悪い意味で当たってしまうのだった。

それは後半が始まって15分くらい経った時だった。赤巻のコーナーキック？と呼ばれるもので、ゴール前に人がたくさん集まっていたときに起きた。

あげられたボールはその密集地帯へ飛んでいき、ここからじゃよく分からなかったが誰かがシュートして決めた。これで4-0となり、フィールドにいる人たちが自分の最初のポジションに着こうと人が動き始めた。

そこで、人が1人倒れていることが分かった。倒れて動けなくなっているのが見えた。

『千石！大丈夫か！』

『テメエ！今のはわざとだろ！無視すんなよおい！』

『落ち着けキャプテン。突っかかる前に今は千石だ』

千石と呼ばれている人が倒れている様子。虎南高校の人たちが心配して駆け寄つ

たりしているのは普通だと思う。しかし、赤巻の人たちは誰一人として心配する様子もなく、自分たちのポジションに着いて待っていた。

「え？どうなっているの？」

「誰か倒れているみたい」

「大丈夫かな？」

他の見ている人たちは、ベンチからタンカーを持って運ばれている人を見ているが、私は相手の方が気になった。普通なら、相手とは言え急に倒れた人のことを少しは心配する素振りを見せるだろう。だが、そんな素振りも、空気も一切なかった。

ワザとやった。

恐らくだが、その人を退場させるためにワザとやった。経験がなくとも雰囲気で見分ける。あの人たちに罪悪感はない。確実に勝つためにやった。勝つために相手を潰した。

「これで終わればいいのだけど……」

「何か言った？」

「何でもないわ」

運ばれた人の代わりに別の人が入って試合が再開される。ボールは慧人に渡って、相手の一人を突破する。

『……………っ！』

すると、突破された人が慧人の後頭部目がけて肘を振った。慧人はそれに気付いたのか避けることが出来ていたが……間違いない。今のは狙ってやっている。

審判は………ああ、そういうことなのね。他の赤巻の人たちが丁度見えないようにしている。多分、さっきの千石つて人のも見えないようにやったのだろう。

『ツチ。勘のいいやつが』

『……今のはワザとだろ』

『勝つために邪魔な相手を潰す。まずは一人だな』

『クソが』

慧人が彼の目の前に居る向こうの選手と話しているようだが、流石に聞き取れない。

そして慧人が目の前の人を突破すると、今度は手を伸ばして何かをつかもうとする。それをうまいこと躲してはいるが……明らかに慧人は狙われている。

『こつちー！』

『森下ー！』

そのまま森下と呼ばれた人にボールが渡る。その人は前の方でボールを受け取ると右の方から弧を描くようにゴールへと向かう。向こうの人たちは足がボールを持っている人より遅いのか追いつけていない。

『これー！』



森下という人がシュート体勢に入る。すると、その瞬間、横から相手選手のスライディング(?)が。ボールが弾かれると共に、その足が軸としていた足に当たり、その衝撃で森下と呼ばれた人は倒れ込んでしまう。

ピー!

審判の笛の音とともに試合が中断される。森下と呼ばれた人は足首を押さえたまま動かない。こっちでも心配する声や動揺が見られるが、やっぱり、相手側は一切動揺をしない。

『森下!大丈夫か!』

『おい!今の狙ってやっただろ!』

『ボールを取ろうとしただけだ』

『落ち着いてよ冬木、キャプテン……っ!』

立ち上がった瞬間に、足首の痛みからか倒れそうになっている。

『悪い……ちよつと続けられそうにない……!』

『いや、よく頑張った』

『後は俺たちに任せろ』

『ごめん』

慧人とキャプテンという人に支えられながらベンチへ下がる。代わりに出てきた人

共に、フィールドへ走って行くと……

『ああつ?』

相手側のキャプテンとすれ違った瞬間。慧人とキャプテンって呼ばれた人は怒りの声を上げた。

何を言われたかは分からない。ただ、何を言われたか……想像はできてしまう。

試合再開。直接フリーキック?とかで、慧人が直接シュートを放ってゴールを決めた。これで4―1。

ボールは赤巻高校から始まり、ボールは慧人が奪った。そのまま相手選手の肘とか腕とかの襲撃を躲していく。

「あからさまね……」

「で、でもあんなに囲まれているのにボールを取られないのは凄いいね」

「それは……ね」

彼は何なのかしら。死角からの攻撃も躲せるって……超人?

『キャプテン!』

『ああつ!』

すると、キャプテンと呼ばれた人がゴール前へと突進していく。そして、囲まれた状態からゴール前にボールをあげる慧人。

誰もがボールの行方を目で追う中、私は見てしまった。ボールを蹴った後の隙を突かれてしまった彼の姿を。

慧人さんが蹴ったボールはそのままキャプテンと呼ばれている人の元へ。頭にボールを当ててそのままゴールに入った。

「よっしやあ！追加点だ！」

「ナイスクロス冬木！」

盛り上がりを見せるフィールド。そのまま慧人さんの方を見ると……

「慧人さん……?」

彼は倒れたまま起き上がろうとしていなかった。

「冬木!」

「アイツ! クロスをあげたときに吹っ飛ばされたぞ!」

「クロスをあげた瞬間を狙ったのかよ!」

「あんなの避けられるわけがない……!」

ザワつく虎南高校の人たち。当然この光景は私たちにも衝撃を与えた。

「……酷すぎる」

「冬木先輩!」

サッカーをほとんど知らない私たちでもこの光景は……いや、この試合はおかしい。

前の試合と違って荒っぽい……。

「イエローカードは出ているが……」

「テメエ! ワザとだろ!」

「たまたま勢い余ってぶつかっただけ……」

「ごげんなよテメエら! 千石も森下も冬木も! テメエら勝つためなら何でもすんのか!

ああっ!」

「落ち着いて下さいキャプテン！」

「今キャプテンまで居なくなったらどうするんですか！」

相手選手に詰め寄るキャプテンさんを他の人たちが抑えている。

「……………落ち着けよ。キャプテン」

「冬木！大丈夫か！」

「君！大丈夫なのか！」

「……………問題ねえよ」

「いや血！血が出てます！」

「ベンチ！救急セット！」

「一旦ベンチ行ってこい！」

「……………分かった。キャプテン……………耐えろよ」

「誰に言ってるやがる」

立ち上がった慧人さん。そのままベンチに向かうが、ふらふらになっているようで。

とてもまっすぐ歩いているようには見えなかった。

「紗夜ちゃん。行ってきたら？」

「え、ええ。そうね」

白鷺さんに言われてそのまま彼の居るベンチに。試合の方は再開したようで……

「お前ら！アイツが帰ってくるまで耐えるぞ！」

「「おう！」」

人数が10人でやっている。だが、そんなことより慧人さんだ。

「先輩！無茶ですよ！」

「あそこに戻るなんて……！」

「血が出てるだけだ。早くしてくれ」

「……諦めろ。どうせ止めたって止まらん」

「お、起きた？千石」

「……まあね。痛いけど」

「でも、そうだよなーこいつが止まるわけがないよねー」

「……慧人さん」

騒がしい……って言うとなあれだが騒がしくなっているベンチへ。黒服さんが1人ボデイガード的な感じで付いてきてくれている。

「……紗夜さん。すみません。見苦しいところを見せてますね」

「……………何でそこまでして……そんなにまでなつて」

なぜかは分からない。彼の傷ついた姿を見て心が痛い。とても痛くなつて息苦しさを覚える。そして、もう一度そんなに傷付くかもしれないと思うと、やめてと言いたく

なる。そんな姿を見たくない。そんな傷ついたあなたの姿を見たくない。だから……！

「……………許せないんですよ。勝つために相手を潰せばいいって言うクソみてえな野郎どもが。……そいつらは絶対に倒す。そんな奴らに負けたくはねえ」

でも、慧人さんのその目を見て、そんな言葉は言えなかつた。

いつになく本気で、多分私が何を言っても止まらない。そう思えた。

ああ、そうか。私がギターに……音楽に本気になつている時と同じ目だ。同じ空気だ。

「……………分かりました。すみません。救急セットを貸してください」

「……………あ、はい！」

「紗夜さん？」

「じつとしてください」

「……………分かりました」

「……………いつもあなたには支えてもらっています。あなたが居てくれたから今の私はあります。いつもあなたは私のやりたいことを後押しして、支えてくれています。だから、これが今の慧人さんのやりたいことなら……私はそれを応援します。そして、これが今の私が出ることです」

素早く丁寧にやっていく。授業で習った程度の処置だが、それでもこれが私の出来ることの全てだから。砂とか入らないよう水だけがの部分を流し、ガーゼを当てて包帯などを巻いていく。動かしやすいように、かと言ってほどけないように。

「……………どうですか?」

「……………問題ないです。ありがとうございます」

頭や腕、足に包帯が巻かれた彼が答える。こんな痛々しい姿の彼をあの場合に戻したくはない。でも、私には彼を送り出すことしかできないのが少しだけ悔しい。

「頑張つて」

「ええ」

そして試合に戻っていく彼の後ろ姿を見る。その姿は初めて遠くにあると思えた。きつとこの後ろ姿に追いつくことはない。でも、その後ろ姿を見守ることは出来る。

「だから……………勝つて下さい」



「よお。潰されに戻ってきたか？」

相手のクソが小声で話し掛けてくる。

「なあ……女神って信じているか？」

「ああ？ 頭打っておかしくなったのか？」

「女神を心配させるような信者ってバカだよな。女神に悲しい瞳を向けさせてしまうような信者って阿呆だよな。俺はさ。女神には笑っていてほしいんだわ。だって笑っている彼女が一番だから。……決して俺の姿を見て悲しんでほしくないんだわ」

だから……

「もう二度と倒れないし、傷つけられない。女神の加護を得た俺の本気を味合わせてやるよ」

## 女神の加護の下で

慧人が試合に戻ったものの状況は厳しかった。虎南高校は、選手層が厚くない。そのため、本日、二試合目、三試合目となる選手も少なくはなく、集中力や体力は落ちかけている。さらに前半からの度重なるラフプレーがその現状を加速させていた。

一方の赤巻は一試合目、二試合目にレギュラー陣がそこまで出ておらず、体力だけなら余裕が持っていた。

後半残り10分。スコアは4―2。赤巻高校の選手の猛攻が続き、ボールも彼らが保持していた。

(残り時間を考えても3点放せばチェックメイト……！)

赤巻高校は、虎南高校を潰すためにラフプレーをしていた。目的はこの試合の勝利のみ。初めから、彼らは上位リーグに上がるべく、先の二試合を調整して戦っていた。

(予想外なのは桃山浦と虎南が引き分けた事だが……んなの今更って話だ)

彼らの考えとしては、もう一点取って後は守備を固めておく。そうすれば、追いつかれずに時間切れ。無事に勝利というプランだった。

「これでトドメだ！」

虎南高校のディフェンスが弾いたボール。そのセカンドボールを、赤巻高校のキャプテンがダイレクトでシュートを放つ。放たれたシュートは……

「なっ……!」

「トドメ? 刺させるかよ」

ゴールへ届くことなく、目の前の慧人の足に収まっていた。

(今のシュートを何事もなかったように受け止めたのだと!? ふざけんじゃねえぞおい!)  
一瞬の動揺。その動揺は慧人が彼を抜き去るには十分な時間だった。

「……っ! デイフェンス!」

慧人の前には二人が立ちはだかる。更に、一人の選手が隣から迫ってくる。

「けが人は引っ込んでろ!」

「知らねえよ」

ドンッ

相手選手が慧人にシオルダーチャージをする。ベンチにいったん下がる時にふらふらだったことから、負けることを一切考えていなかった相手選手。倒してもう一度ベンチに下がらせる。他の赤巻高校の選手も同じように考えていた。そう考えていた故に驚いた。

「はっ!」

倒されたのは慧人ではなく、相手自身だったということに。

そのままデイフェンスの合間を強引に突き進む慧人。

「そいつを止めろお！」

抜かれたデイフェンダーの一人がファール覚悟で後ろからスライディングを仕掛ける。

「嘘だろ……!?!」

慧人にとって見えていなかったはずの行動。だが、彼はそれをボールと共に跳び上がることで躲す。

そして空中で若干体勢を崩しながら放たれたシュート。赤巻高校にとって予想外の光景。そのシュートはキーパーが反応したところにはゴールに刺さっていた。

「ダメエ……何処にそんな力が!」

「言ったろ?女神の加護を受けた俺の本気を見せてやるって……来いよクソ野郎ども。全力で叩き潰してやるからよ」

その目には、声には怒気が含まれていた。味方が何度も倒され、やられた光景を見て、何も思わないほど心がないわけでも、笑って許せるほど心が広いわけでもない。だから、全力を持って潰す。それが彼の思いだった。

「……………一人最後まで行ったね」

「一人カウンターとか凄いよな」

「……………流石。身体能力とか本当に化け物だよ」

「だよなーでも、あそこまでキレさせた向こうが悪い」

（まあ、アイツのリミッター解除させたの多分その人だろうけど）

一方のベンチ、千石や森下は慧人の処置を行った彼女を見る。慧人の中にある枷が吹っ飛んだのは多分この人のせいだろうなーと、そう思いながら今もフィールドで走り続けている慧人に視線を戻す。

「……………赤巻は時間消費に作戦を切り替えた」

「そりゃあ、今の冬木に取られたら失点まで一直線だよなー」

赤巻は先の失点から自陣深くでボール回しを始める。観客からすればつまらないだけの逃げだの言われるだろうが、戦略上は何も間違っていない。

「……………ただ、怒りに燃えるもう一人のバカを忘れているね」

「そうそう。噂をすればなんとやら」

赤巻の警戒は慧人に向いていた。故に、その男にそんなに注意が行っていなかった。

「なっ!？」

「冬木だけじゃねえんだよお!」

自陣ゴール付近から勢いよく上がってきたキャプテンがボールを奪い去って上がる。

そしてそれを見て慧人もゴールめがけて走ってゆき……

「オラアツ！」

キャプテンのシュートが放たれる。コースはゴールの左端を狙ったもの。

(このコースは……外れる！)

キーパーはシュートを見て外れると判断する。しかし、そこに走り込んでくる男が一人居た。

「ナイスパス」

慧人はそのシュートにバイシクルキックを合わせる。

ボールはコースを変えて、そのままゴールへと刺さった。

「おっしやあああああつ！」

「ナイスパス。キャプテン」

「おうつ！……つてちげえよ！あれ普通にシュートだわ！」

「……え？思い切りコース外れてたぞ」

「……え？じゃあ、あのまま行つてたら？」

「ゴールから左の方へと逸れてどっか行つてたんじゃない？」

「マジで？」

「マジで」

まさかのバイシクルシユートに大勢の観客が沸き立つ中、何故かシユートを決めた二人は微妙な空気になっていた。

「すげえ！キャプテンの鮮やかなパスに冬木さんのバイシクル！」

「あんなの練習でもやったことなかっただろ!？」

「なんなんだよあの人たち！やべえ！やべえよ！」

ちなみに虎南高校の他の選手も二人を除いて盛り上がっていた。

「……………あれ。絶対バイシクルの意味なかったよね？」

「んー多分頭の包帯を汚したくなかったからじゃない？」

「……………あと、絶対キャプテンのやつ、冬木見てなかったよね」

「それねー。いやあよく合わせたよなー絶対無理だわ」

何はともあれ4ー4の同点。試合はアディショナルタイムに突入していた。

「もう一点取っていくぞー！」

「「おっしやあ！」」

先のプレーで勢い付く虎南高校。

「きや、キャプテン……………あの灰色の髪の奴。まさか……………！」

「マズいですよ……………あの男は……………！」

「う、うるせえ！まだ同点だ！ここで一点取ってオレたちの勝ちだ！」

対して後半に入ってから4失点を重ねいよいよ動揺を隠しきれなくなった赤巻高校。両者のメンタル面でも差が付き始め、それはプレーにも直結する。

「もう1点取ってこい！冬木！」

点を取るために攻め上がってきた赤巻高校。しかし、焦りからかプレーが乱れる。

そこをつくキャプテン。そして大きくボールを前線へと蹴り上げる。

「ちよつと雑だろ」

パスは正確ではなかったものの無事にそれを拾う慧人。そのままディフェンスを抜き去ってキーパーと1対1の状況に。

（打たない!? 舐めやがって……!）

キーパーは慧人が打たないのを見て前に出る。前のめりになったその瞬間、さつきまでのような荒々しいシュートではなく、ふわつとした山なりのループボールがあげられる。

重心が前ある状態で、キーパーの上を通過していくボール。誰にも止められることなく、ゴールに入った。

「別にシュートは強くかつこよく打てばいいわけじゃないし」

バイシクルでシュートを打ったりしていた彼が言ったとは思えない台詞。

そして、



ピ、ピー

試合終了の笛が鳴り響いた。4―5。怒濤の大逆転劇により、虎南高校は勝利を収めた。

「……………地味にハットトリック決めてね？」

「だねー4ゴール1アシスト。間違いなく、前の試合に続いてMVPだねー」

選手たちが挨拶をする中、二人はその光景をのんびりと眺めていた。

そして、挨拶が終わったと同時に、虎南高校の選手は冬木の下へと走り出し、

「冬木先輩を胴上げだあ！」

「「おうっ！」」

「ちよっ。おま、やめ…………」

「「わーっしよい。わーっしよい！」」

この試合で大活躍をした慧人の胴上げ。それを微笑ましく見るガールズバンドのメンバーたち。これだけ見ればハッピーエンドだろう。

だが、虎南高校のサッカー部は阿呆の集まりだった。だから、そんなハッピーエンドで終わらせる気はなかった。

「「わーっしよい！わーっしよい！」」

「な、なんか高くない!?ねえ高くない!？」

「わーっしょい！わーっしょい！横わっしょい！！」

「え？横つてふべっ!?」

「……………」

上ではなく横へと押し出された慧人。まさかの横わっしょいの衝撃で地面に伏すこと。

「デメエら……やりやがったな……（かくっ）」

その光景を唾然と見ていた彼女たち。

「さあ、帰りましょうか」

「そうだねー」

「いやあ、凄かった凄かった」

そして何も見なかったと言わんばかりに足早に去って行った。

「よし、次はキャプテンの番だ！」

「「おおっ！」」

「ん?!い、いや俺はそんなの……や、やめろお！」

「「わーっしょい！わーっしょい！」」

その光景を見て、千石と森下は思った。

（締まらないなあ……うちのサッカー部）

そして、慧人の隣にキャプテンが並ぶことになったそうなの。

※横わっしょいは非常に危険です。高度な訓練を受けた彼らだから行っております。絶対に真似をしないでください。

月曜日。心なしか包帯やガーゼが増えていた慧人はテスト前日にも関わらず、C i R

CLEでバイトをしていた。

「あれー慧人くん。何か怪我増えてない?」

「本当ね。どうしたの?」

「どうしたの?じゃないですよ!?!土曜日の横わっしよいでこれですよ!たくこっちは何が人だつて言うのに……」

日曜日の決勝リーグ。土曜日に足をやられた森下と、怪我していた慧人はベンチに。そのせいで攻撃陣の層が薄くなり、試合は普通に負けたそうなの。

「というか皆さん無視して帰りましたよね!?!酷くないですか!?!」

「あれは……関わっちゃいけない雰囲気だったので……」

「そうそう。アレは関わっちゃダメっておねーちゃんが言ってた」

「酷い……あ、でも紗夜さんはきつと見捨てないでくれ……」

「いいですか?怪我してまで試合に出て本当に悪化したらどうするつもりだったんですか?」

「……相変わらず俺の味方がいねえ……!」

涙を流しそうになる慧人。だが、そこに追い討ちがかかる。

「そーいや慧人くん。明日からテストじゃないの?」

「……………リサ姐。テストとバイト、どっちが大切だと思いますか?」

「え？昨日確か一緒にNFOをしたような……」

「……………りんさん。ゲームとテスト。どっちが大切だと思いますか？」

「あれ？けー兄勉強はいいの？」

「そうね。勉強していいんじゃないかしら？」

「ちよつ、やめつ、紗夜さんの前でそんなこと言ったら今から勉強漬けにされちゃ……」

「慧人さん」

優しく、聖母のような笑みを浮かべて慧人の肩に手を置く紗夜さん。

いつもならこの時点で二人の甘い空気に入るのだが、慧人は冷や汗が止まらない。

それもそのはず。まさか、彼女の前でテスト前に勉強を一切していかないなんて知られ

ようものなら……

「今からミツチリしごいてあげますから……………覚悟してくださいね」

「……………ひゃい」

その日、慧人は地獄を見た。

## 徹夜で会議するのはやめた方がいい

テスト週間も終わった金曜日の夜。

テスト初日前日は……うん。女神様が怖いと思ったの初めてですはい。

俺個人としては学校では『テスト終わったー!』みたいな開放感を味わうことが叶わなかったので、夜くらいはその開放感に浸りたかった今日この頃。俺は今……

「これより『さくくる合同ライブが二日後に迫っているけど色々決まってるけど作ってないからやばくね?』というか、明日リハーサルだけどこのままだけど何もできないから急いでやっていこう』会議を始めます。C i R C L Eより司会進行兼書記兼雑用担当の冬木慧人です」

本当はまりなさんの予定だったが何故か俺に変わった。ちなみに着ている服は、今回の催しに合わせて作ったC i R C L EのTシャツである。女子たち25人プラスまりなさんと俺が着ていたりする。まあ、そんなことは今はいいか。

「ということで各バンドより一名ずつ。比較的まともそうな代表者にお越し頂き感謝です」

「そこを強調していくのね……」

「そりゃああそうでしょ。先週も何か会議やったらしいんですけど何も決まらなかつたって話じゃないですか？」

「冬木先輩の試合の合間にやってみました……」

「何か気付いてたら終わってたツス」

「で、原因はアレな人たちが多いせいで話が進まない。だから、こうしてまともそうな人たちに集まってもらっているのです」

「そういう司会が一番まともじゃない件について」

「あはは……それは触れちゃダメだよ」

ということでもメンバー紹介をしていこう。

まずは Rose lia より紗夜さん。まあ、あそこって何気にまともな人少ないよなあ。やつぱり、こういう時は紗夜さんの出番ですよ。友希那さんは……うん。やめよう。他もあこちゃんも脱線させ、りんさんは多分そこまで発言できない。個人的に、リサ姐の方が適任だったのではないかというのは内緒だ。つまり紗夜さん最高（脈絡がなさ過ぎる）。

続いて Poppin, Party より牛込りみ。リーダーである香澄が会議を成立させなくした原因の一端であるとか言っではいけない。りみはチョココネが関わらなければ比較的まともだ。ちょままの有咲や、パン屋の沙綾でもよかつたが……

まあ、彼女ならば大丈夫だろう。たえや香澄じゃなくて本当に助かった。

そして *Pastel\*Palette* より大和麻弥。あそこは比較的まともな人が多い集団。まあ、イヴちゃんやブシドーとか、日菜がるんっ！とかおねーちゃんと言わなければならぬ。千聖は仕事だと言っていて、今日は参加できなかった。彩は名前挙がったけど………何か、ごめん。麻弥の方がいいわ。本当にゴメン。

ハロー、ハッピーワールド！よりミッシェルこと奥沢美咲。リーダーであるところが会議を成立させなくした原因の一端であるとか言っではいけない。さらに、薫さんやはぐみがちよつと暴走したのも原因とか言っではいけない。花音はふええと慌ててた気がする。………あれ？ハロハピって一番まともな人が少ない？まあ、美咲はミッシェルの中に入ってさえいなければ凄い常識人だったと思う。いや、ミッシェルの中にいても常識人であることには変わらないか？ん？常識人って何？

最後に *Afterglow* より羽沢つぐみ。個人的にこの子はまともの中のまとも。常識人の中の常識人。まあ、彼女たちはモカが時々おかしな事を言ったくらいで一番害がなかった気がする。巴や蘭でも多分大丈夫だったろうが一番はつぐみだろう。え？リーダーのひまり？ゴメン。何というか………うん。そういうことだ。

以上、まあ、爆弾が一人も居ないのできつと大丈夫だろう。………そう最初は思っていた。



俺はこの時忘れていた。よく思い返せば彼女たちは比較的まともなメンバーであつて、この五つのバンドのメンバーは全員が癖のあるメンバーだったと言うことに。

日付がもうすぐ変わる深夜の時間帯……それは起き始めていた。

「そろそろ夜食作るか……」

会議は進み何時間か。予定通りまともに会議は進んでいき、今はポスター作りをして

いた。まあ、タイトルが未定な時点でヤバいけど……うん。とりあえず、頑張ってるよ？で、こういう作業そのものには向いていても、色とかのセンスが絶望的なので俺はさっさと裏方に回ることにする。

「あ、私も皆の分のコーヒーを入れてくるね」

そういうことでつぐみと共にスタッフの給湯室のところへと向かう。

「まりなさん。お疲れ様です」

「お疲れ様です」

「お疲れ様。冬木くんにつぐみちゃん。どう？進んでいる？」

「ええ。予想以上に順調です」

「ごめんなさい。私たちのせいでまりなさんまで……」

「ううん。気にしないで。流石に未成年だけを残して帰れないよ」

そう。まりなさんは会議こそ参加はしていないものの、俺たちの為にここを開けていてくれている。……………何でこの人恋人できないんだらうか？

「じゃあ、コーヒー入れるね」

「了解。俺は隣でポテト揚げてるけど気にしないでくれ」

「ポテト……あ、紗夜さん？」

「そうそう」

集合時間より早く来て、ここで色々と準備をしていた。ポテトに関しては後は揚げるだけである。

「ああ、心配しなくてもいいぞ。コーヒーにポテトだけではミスマッチ。だから、冷蔵庫の中にパイとかムースケーキとか置いてあるからそれも後で持つて行くぞ」

「……え？ わざわざ買ってくれたんですか？」

「そんなめんどくせえことしねえよ。ここで作った」

テスト期間で学校は午前中に終わつてる。部活とか用事も少しあつたが基本暇だったし、早めに来てここで色々と作つていた。ちよつと楽しくて作りすぎて、集合場所（会議室）に着くのが集合時間に遅れそうになつたのは内緒だ。

（そつちの方が絶対に手間がかかっているよね……）

「あ、あの慧人先輩。うちの店のキッチンで働きますんか？」

「うーん。流石にこれ以上バイトは増やせないからなあ……まあ、一日だけとかならいいぞ。暇なら手伝うくらいできると思う。そこまで戦力になれるか分からないけど」

ポテトを揚げながら答える。

サツカーの方で少しありそうだし、CIRCLEでのバイトにNFO。ここに羽沢珈琲店での……とか加えたら多分疲れる。他にもいろいろと重なるし。

「まあ、そもそも俺の料理で金はまだ取れねえよ」

(この人って。そういうところ無自覚だなあ……)

流石に友人たちに出すものと、客に出すものでは求められる質が違う。流石に俺じゃまだまだ力不足だろ。

「さてと、第一弾ポテトも揚がったし……そっちは？」

「う、うん。大丈夫だよ」

「コレ使え。流石に7つ同時に持てないからな」

テーブルの足にタイヤが付いているような何か運ぶものの上に乗せる。流石に危ないからな。途中まりなさんにまりなさんの分を渡してから会議室のドアを開ける。

ここで俺は気付いてしまった。隣にいるつくみはツグってる以外は普通の少女。だが、今会議室に居る4人の少女たちは一癖あったことに……。

「ぼて？ぼてぼてー!!」

まず、ポテト狂の紗夜さんが、ポテトの香りに反応して目を輝かせて抱きついてきた。  
「コロネ……? チョココロネはどこ……?」

チョココロネ欠乏症に陥ったりみが虚ろな目でチョココロネを求めて部屋の中を彷徨っている。

「フへへ……この隙間……フへへ」

深夜テンションになった麻弥がテーブルの下に潜って何か笑っている……うん。怖

いよっ。

「あ、お帰りなさい。どうしました？何か顔に付いていますか？」

同じく深夜で頭がぶっ壊れ始めた美咲が紙袋を頭に被って語りかけてくる。

……あーうん。全員壊れてるなあこの空間……帰らせてえ。

「………何で少しこの場から居なくなっただけでこうなってるんだあ……」

「お、落ち着いてください慧人先輩」

「そうですよ。まずは紙袋を被って……」

「紙袋……隙間……フヘへ」

「コロネ……コロネ……！」

「ぼて？ぼてぼて」

どうやら、俺の周りはどうあがいてもまともな会議ができないらしい。

何コレ呪いなの？誰か助けて。

数分後。

「何かお茶会みたいだね」

「そうっすね！それに目が覚めるツス！」

「冬木先輩。さっき見たことは忘れてください」

「………（もぐもぐ）」

「チヨココロネ最高……」

俺が片手間にタイムスケジュールを作っている中、真夜中のお茶会が開催されていた。ちなみに日付は変わっている。

「これ全部冬木先輩が作ったんですよね？」

「一家に一人欲しいぐらいっすね」

「その代わりにクールビューティークールビューティーって……」

「それは大きな代償だよね……」

「おい、人をクールビューティーしか言えない機械みたいに言うんじゃないよ」

「……………ポテト、クッキー、家庭料理だけでなくケーキまで……むむむ」

別に勝ち負けじゃないと思うなあと、そんな事を考えながら、片手でパソコンを打ち片手で食べる。うーん。こういう片手間作業の時はクッキーのようなものの方がいいって思うんだよね。りんさんも前に話したら凄いい共感してくれたし。

というか何だろう。これは女子会？女子会なの？一人場違い居るから第二弾ポテト揚げに行こうかな？

「「終わったあ……」」

朝日が昇って少し経った頃。遂に全ての事が終わった。

女子五人は机に突っ伏し、もう顔を上げることもしなわないうちに。

あの後、再び各々の作業に没頭。第二弾コーヒーブレイクを挟んだときは既に朝の4時。俺以外全員徹夜明けのハイテンションというカオスな状況になったりしたが……うん。まあ、そういう日もあるよね。俺も色々と働き少し疲れたし。

「とりあえず後はあいつらが来るの待っただけだな。よつと」

持ってきていたサッカーボールでリフティングをする。第二弾コーヒーブレイクが

終わった辺りから足元が暇だなんてことで、ボールをコロコロしながら作業していた。

一日ボールを蹴らないと取り戻すのに三日かかるといふ先輩の言葉を受け、毎日のようにボールは蹴っている。部屋という狭いスペースでよく蹴ってはいるが、いつも以上にぶつけてはいけない存在の数々……うん。精密なコントロールを求められているな。だが、これはこれでいい練習になるからよしとしよう。

「な、何で冬木先輩……動けるんですか……」

「そうっすよ……ジブンたち以上に色々と働いていたはずッス」

「まあ、体力はあるからな。後、リハールとか寝る予定だったし」

「……ああ、ステージには立たないもんね……」

「それでも慧人先輩の体力……凄いです」

「……皆さん……少し仮眠を取りましょう……」

「「はーい……」」

うーん？まあ、日頃お疲れなんでしょう。さてと、そろそろボールをしまつて……と。

バーン！

扉が勢いよく開いた。

「おっはよー！」



香澄を先頭に皆が入ってきた。そのせいで折角仮眠を取ろうとした彼女たちは起こされる羽目に。残念。

え？俺それ聞いてない

あの後、リサ姐からクッキー、沙綾からパン、はぐみからコロツケの差し入れを貰った。徹夜明けの身体にあの量のコロツケは……地獄かな？とか言いながらおいしくいただけました。

とそんなこんなでリハーサル。一緒に夜を明かした（会議していた）五人は余りにも死にそうな顔をしていたのでリハーサルは休んで寝ている。流石に本番は明日で倒れてもらっては困るからね。

「さてと、じゃあ働きますか」

彼女らがない分、俺が今朝までの成果の報告と共に仕切っていくとするか。

というわけで、全体の指揮とか色々動いていく。

リハーサルって言ったが、何か各バンドの細かい出し物とかは当日のお楽しみにしたという理由で、大まかな動きや特別な機材の確認がメインだ。バンドの入れ替わるタイミングとか諸々動いて確認している。ただ、企画書は昨日出してもらってある程度把握しているが……ガチでやるの？アンタら。

「慧人。貴方だけ元気だけ働いたの？」

「いやいや千聖。無茶苦茶働いた気はあります」

「へえー例えば何したの?」

「リサ姐まで……いやあ、お茶会とコーヒープレイクの為にパイとかケーキとかを集める前に作って、そこから全体を取りまとめながら……」

(何か最初に聞き捨ててならないことをさらっと言っただけどスルーしよう)

とりあえず挙げたら切りがない事が分かった。あげてみて分かるんだねこういうの。

「あ、でも千聖。慧人くんの目の下とか……」

「そうね。よく見たら、振る舞いもだけどここの男。横になったら3秒で寝るわ」

「あはは。NFOでの徹夜ならもっと楽なんですけどね」

「あ、それは分かります……」

何かりんさんから同意が得られた。やったね。

「後は今、女神様からパワーを頂けていないので……」

(あ……色々と察した……)

「あ、あの。けいさんも休みます……?み、皆さんが作ってくれたこの企画書のお陰で……問題なくリハーサルは進んでいるので……」

「お気遣いありがとうございます。ただ、これはあくまで紙面上の話なんでね。不測の事態が起きないかチェックしておきたいので」

(やっぱりね。スペックだけならうちの事務所のスタッフ以上。今度試してみようかしら)

本当はリハーサルで寝る予定だったのは、彼女たち五人が起きていれば俺はいらなからだ。だが、あの五人が倒れて寝ている以上、俺が動くしかない。……………というか、さつきから千聖の目がどうにも査定している感じがするが……………どうでもいつか。

「こっちは問題なかったわよ!」

「あいよー。んじや最後 Rose lia だな。リサ姐、りんさんよろしく」

「はーい。行こう? 燐子」

「分かりました……………」

とりあえず順調順調。まあ、やっぱり紙の上だと出てこなかった小さな問題はあるので、微調整も同時に進めている。

「どう? いい感じ?」

「あ、まりなさん。ここまでは大きな問題はないですよ」

「それはよかった……………昨日から頑張ってたもんね」

「あはは……………あれ? まりなさんも徹夜じゃ……………」

「ううん。朝方に少し寝ていたよ。」

「なるほど。あ、大きな問題ありましたわ」

「どんな問題?」

「タイトルが未定という問題です」

「……………それってマズくない?」

「そうですね……………無茶苦茶マズいですよ」

ステージ自体は問題ないと思うが……………うん。タイトル未定なのだ。これじゃ宣伝も身が入らないだろう。

誤解しないで欲しいのはやったんだよ?タイトルに関する議論。……………朝の5時に。もうね?頭が回らなくて意見がおかしな事になって来て、俺たちのアイデアなんだっけな……………ああ。『ツグってるミッシェルによる隙間パーティー』とポテトとチョココロネを添えてく』だったか?もう頭がぶっ壊れ始めた俺たちでも没と分かるぐらい変なのが出来ていた。

ツグってるミッシェルって何?隙間パーティーって何?ポテトとコロネを添えるってどういうこと?とタイトルに一瞬で三つのツツコミが入り、細かくツツコミを入れると切りがないことを悟ってしまった。そしてそこから、もうタイトルを考えるだけ無駄と悟って、タイトル未定で行くことにした。まあ……………なんだ。全員限界だったんだよ。うん。

「そろそろ仮眠を取ったら?明日も働いてもらおうんだし」

「大丈夫ですよ。翼を生やしてくれる飲み物か紗夜さんが居てくれれば問題ないです」  
「……………多分それ精神論よね？」

「主は言いました。限界は己が決めると。つまり、限界を決めなければ限界は存在しないんです」

「うわあ…………冬木くんが言うのと本当に限界がなさそうに聞こえるからやめてほしい」

「その通りよ！出来るって思えば何でも出来るのよ！」

「おつ。珍しく意見が合うじゃないかこころ」

「凄いな。あのぶっ飛んでると思ってるこころと意見が一致した。あれ？それって俺もぶっ飛んでるってっことか？まつさかあー」

「こころちゃん…………最後の締めのところやるって…………」

「すぐに行くわ！」

リハーサルっぽい何か、空いている人は自由に、やっている人たちは真剣に。でも、全員が楽しそうに思えてくる。

「…………いいね。こころいうの」

「ですね」

リハーサルは大きな問題もなく無事に終わった。

「さてと、後はタイトルだが…………」

もうすぐ昼。さて、まだタイトルが未定という大きな壁にぶつかった。

「慧人さん。次は貴方が仮眠を取る番ですよ」

「紗夜さん。もう起きて大丈夫なんですか?」

「ええ。皆さんの好意とは言え、ずつと寝てもいけません。それにここで寝過ぎてしまふと夜に眠れなくなりそうですから」

「紗夜さんらしい回答ですね。でも心配しなくていいですよ。俺は平気なんで……?」

すると紗夜さんの奥に千聖がプラカードを持っているのが見える。何々? 『そこは言葉に甘えて寝るところよ!』……………いや、知らねえよ。

「……………?」

「どうしました?」

(今井さんが何か掲げてますね……えーっど?)

紗夜さんの動きが少し止まった。何だろう? そう思つて俺も紗夜さんの見ている方を見ようとすると、また千聖が何か掲げた。『まあいいわ。貴方は起きていられなくなるから』……………え? いや、怖つ……。何されるの? ちよつ、怖いんですけど?

「慧人さん。隣へ座ってください」

すると近くの長い椅子のところに腰掛ける紗夜さん。俺は千聖の不穏な言葉が怖かったがまあ、紗夜さんが何かするわけでもないと思ひ、そのまま隣に座る。

「私に背中を向けるようにして、足を椅子の上に乗せてください」  
「はあ」

言われるがまま紗夜さんに背中を向ける。

「そのまま倒れ込んでください」

そのまま倒れ込む……とここで俺は気付く。頭に当たっているのが椅子の硬い感触ではなく、ちよつと柔らかいような……

「え？」

「……今は休んでください」

そして目を優しく手で覆われる。視界が暗転するのと同時に意識も沈んでいくのを感じた。

「やつと寝たね、いやあ成功成功」

「ええ。ナイスアイデアよ。リサちゃん」

「いやいや。千聖も乗ってくれたからだよ」

「本当に秒で堕ちたわね。全く、無理すぎよ」

「えーつと、今井さん。白鷺さん。私はここからどうすれば……」



「んーとりあえず頭を軽く撫でてあげたら?」

「でも、ここだと私が会議に参加できないような……」

「紗夜ちゃん。今のあなたのやるべき事は会議じゃないの」

「……なるほど。分かりました」

(やらせたのはこっちだけど、他の皆が居る中でよくやるわ……)(

翌日。

昨日は起きたら日菜に「うらやましいいいい！ズルいいいつ！」つてずつと肩を揺らされ頭が揺れた。お、俺に言うんじやねえ……ね、寝起きだこつちは……さ、紗夜さんヘルプミー……。とこんな感じで軽く死にかけましたが無事です。

「……はーい。受付はこちらでーす」

現在受付を一人でこなしています。うん。沢山の人が来てくれているのはとてもいいことだけど、圧倒的に人手が足りません。まりなさん？何か機材の最終調整を手伝っている。他のバイト？存在していない。すなわち、ここは俺一人である。

ただまあ、別に誘導兼受付係が一人であることに問題はない。……問題があるとすれば、タイトルが『キラキラ愉快な商店街 狂乱のブシドーパーティー』になつてることくらいか。……昨日、俺が寝ている間……つまり、昼に決めたんだよな？深夜テンションのノリで決めたわけじゃないんだよな？どうしよう。ここまでお関わり合いになりたくないようなタイトルになるとは思わなかった。いやまさかね？まさかこれが採用されるとか……畜生。会議の最初に比較的まともな面子で決めておくべきだった。

「はーい。押さないでくださいーい。順番にー」

ちなみに棒読みなのは諦めてくれ。彼女たちにも言われたが、慣れている人たちからしたらそうでもないが初対面だと怖いと。特に子どもとか泣き出しかねないと。だから感情の一切を込めない事により、何かあっても威圧しないようにとのこと。

あなたたち普通に酷いですね?見ただけで子どもが泣き出しかねないだど?そんなわけないじゃないか。……多分。今、目が合った五歳ぐらいの子が涙目になったのは目の錯覚だと信じたい。

そんなこんなで客をさばき開演時間。俺はまりなさんと共に、客席後方から彼女たちを眺めることにする。

「お疲れ様。ゴメンね、全部任せちゃって」

「気にしないでくださいよ。さあて、ここからは彼女たちの時間ですね」

幸いめんどくせえ客はいなさそうだし、平和に見ることにする。

というわけで最初は P o p p i n , P a r t y ……うん。企画書読んだけどアイツらマジでやってるよ……。

香澄が星の着ぐるみを着て、たえがウサ耳にウサギのマスク……まではガチでやると思つた。りみがチョコココロネをステージの上から客席に投げ、沙綾が両手にドラムのスティックはいいけど何故か口に三本目のスティックを咥えている。ある意味凄いなこの二人は。よく演奏しながらチョコココロネ配布や、口に咥えたスティックを使えるわ。

……それとりみと沙綾つてそっち側の人間なのね。やつぱり。……とりあえず有咲お疲れ様。

続いてAfterglow。……まさかあのつぐみが、何かアイドルみたいな衣装でセンターを飾るなんて……企画書読んだ時から疑ってたけど……うん。まあ、つぐみもそういうの憧れていたんだらうなーうんうん。

「……ねえ冬木くん。蘭ちゃんの後ろ……」

「……言わないでください。あれは俺が疲れて見えてるだけなんです。ただの幻覚なんです」

蘭の後ろにモアイっぽい何かが見えるなんてそんなはずはない。そして、そんなモアイ頬紅く染めている気がするのは気のせいだ。やめてくれ。お前が照れても需要ねえんだよ。

そしてPastel\*Palettes……彼女たちはある意味尊敬するよ。いやね？誰も楽器を持ってないんだよ。もうこの時点で俺の知るライブから離れた。そして、全員空中ブランコ？何か棒に捕まって浮いてるんだよ……麻弥に聞いたらアレ、少し前にやった番組の企画だったらしい。いや、ここでやる意味。誰だと思ってるんだアレを夜中の2時とかにセットしたの（俺です）。

まあ、楽しそうにやってるからいいか……たった一人、千聖を除いて。とりあえず千

聖? 周り楽しそうだからお前も笑顔を……ああーすげえ今睨まれた。すげえー睨まれた気がする。何思考読めるの? マジで?

四番手、ハロー、ハッピーワールド! うん。さすが有言実行のこころ。本当にリボンのシャワーを打っているよ。とりあえず、こころ、はぐみ、薫さんの通称三バカは楽しそうだなによりです。だけど、ミッシェルの中の美咲は「うわあー本当にやっちゃったよ」って感じがするし、というかその巨大な筒状のクラッカーを打った音で花音が怖がつて縮こまつてる。いいのかそれで? 打った側が笑顔になつてないぞ?

……まあ、あれでもまだマシな方だったりする。今の彼女たちは二本しかその巨大クラッカーをやつてないけど、当初の予定ではその十倍だったとかなんとか。……さすが美咲。お前こそあのバンド唯一の常識人だ。

そして最後の *R o s e l i a*。

「……………」

「……………」

「……………」

会場が静まり返った。というか引いてる。

「……………冬木くん」

「……………どこで道を間違えたんでしょうね」

かく言う俺も引いてる。企画書もらった段階で紗夜さんに「これマジでやるんですか？」と三回くらい聞いた。三回とも「やりますよ」と真顔で答えられて頭を抱えた。

いやね？五人が一つの巨大な衣装（のように見える何か）の中に入ってるんだよね。演奏しているのはいいんだけどさ……うん。

「……俺、間違つてました」

「……何かな？」

「……Roseliaが一番やべえ集団だったわ」

Roseliaというバンドはあの五バンドの中で唯一、結成の……始まりの時から見ている。友希那さんや紗夜さんの本気や技術の高さ。それに付いていくりんさんやあこちゃん、リサ姐。あの五人の凄さは知ってるが……何だろう？どうにも彼女たちは音楽関係に疎い俺でも分かるぐらい……何か大切なものを失っている気がする。

ああ、勘違いじゃなかったのかな？Roseliaにまともなメンバーがないのって……何がヤバいって、リサ姐はちよつと苦笑しているけど他四人ガチなんだよ。いや、それでやる？普通。

でも唯一アレだ。こんなとてもじゃないが引いてしまうような彼女たちの演出だが、唯一最高の点を上げるとすれば……！

「紗夜さんマジで尊い……！」

「冬木くん帰ってきてきてー」

ああ、あのよく分からん巨大な衣装の中、真面目にギターを弾く彼女の姿。そして、その頭にはちよこんと獣耳が。凄い、二重でギャップがある……あれ?まさかこれが伝説のギャップ萌えか?

「すみません……感動で涙が……!」

「いや絶対違うよ? やっぱ、君も色々と間違っているよ?」

そんなこんなで Rosealia が一旦下がりがり、少し経つと五バンド全員が登場してキラ星を歌い出す。うん、香澄が星のかぶり物しているのはもういいんだけど……何で有咲がカスタネットなの?

無事にライブは成功し、観客も盛り上がり上がっていた。現在打ち上げということできさやかなパーティーを開いている。

「お疲れ様です。慧人さん」

「あ、お疲れ様。紗夜さん」

「どうでした？」

「可愛かったですよ」

「違います。演奏に關してです」

「あはは」

「言えないよな？あの巨大な衣装で引いて、ギャップ萌えというものを垣間見ている人が、演奏を集中して聞いているわけがない。でもまあ……」



「最高でしたよ」

「それはよかったです」

集中してはいなかった。それでも、彼女たちの（演出は置いて）音楽に賭ける思いの強さは伝わってくるような演奏だったことは分かる。

「ちよつといいかな」

「みんなくまりなさんに注目〜」

ん? まりなさんから? 締め挨拶でもする気か? まあ、オーナーが普段から居ない以上、もう実質まりなさんがオーナーだよ。

「みんな今日はお疲れ様。本当にC i R C L Eの最後にふさわしい、素敵なライブだったよ? 特にアンコールの皆できらきら星歌うところなんか……」

……ん?

「「最後!?」」

「つまり今回が最終回?」

「いや、もう1クールあるから」

「なるほど……あと12話くらいで終わりか」

「しれつと第二期に突入するから関係ないわよ」

「まじか!?! 完結が遠くないか!?!」



## ○○○しないと出られない部屋

それはある日のことだった。部活も終わり帰宅しようとした俺。気が付くと……

「どこだよ……」

「知らないわよ」

気が付くと、見知らぬ部屋の中に閉じ込められていた。………千聖と一緒に。

「とりあえず出るぞ」

ガチャガチャ、とドアノブを回そうとするが開かない。

スライド式の可能性があるのではと思い、横に引いてみるが動かない。

こうなりや蹴り壊すかと思つて蹴つてみるが何故か壊れない。というか痛い。

「閉じ込められたな。しかも……丁寧にこの扉金属製だ」

「そのようね。ほらあそこ見なさい」

千聖が指すのは部屋の天井の隅……

「四隅に監視カメラがあるわ」

なるほど。

「おい千聖。お前、何かの番組の収録か？ 脱出ゲーム的な何かか？ 謎解きなら面白そう

だからやらせてほしいんだけど……」

「生憎、私の仕事ではないわ。そんな予定入れていないもの」

近くにあるベッドに腰掛ける。この部屋にあるのは大きなベッド。その横にテーブルに引き出しがいくつもある棚。後はドアやカーペット。そして四隅に監視カメラか……。

「問題は拉致されたことか？」

「そうね」

コンコンコン

ノック音がしたと思うとドアの下から何か紙がやって来た。

「おい千聖。紙がやって来たぞ」

「なんて書いてあるの？」

「えーつと、『ここはよくある○○○しないと出られない部屋です』……だとよ」

「……なるほど（ピーー）しないと出られないのね」

「いや、そうと決まったわけじゃないだろ」

ピー音が重なったが、大体言わんとすることは分かるのでスルーする。

「でもこの部屋にこのベッドは露骨すぎるわ。もう（ピーー）するしかないのよ」

「いや諦めが早くないか？」

おかしい。この女の諦めが早すぎる。いや、ほんと早い。普通躊躇するだろおい。

「というか、そんなこと言われてないだろ。もつと別の条件かもしれねえぞ」

「いいえ。あり得ないわ」

いや、何を根拠に……

コンコンコン

するとまた紙がやって来た。

「えーつと? 『ちなみにやってもらうのは絵しりとりです。紙とペンは棚にあります』」

「……………」

「……………」

無言で棚を確認するとそこには鉛筆と白紙の紙が何枚かあった。

「な、なんだそんなことだったのね……」

「千聖つてもしかしなくても変態のビツ——」

「慧人。これ以上喋ったら(ピー)わよ」

あーうん。はいはいって感じた。

コンコンコン

さらに紙がやって来た。

「はいはい? 『言い忘れていました。こころ様の提案でこのようにことに冬木様と白鷺

様を巻き込んでしまい申し訳ありません』……あー犯人はこころか」

何故俺たちを拉致したかは知らんが……まあ、相手が安全なやつって分かった。

「ねえ、慧人。参考までに聞くけどあなた絵は書けるの？」（↑画伯）

「ちよつと苦手です」（↑絵が絶望的に下手）

ベッドに並んで腰掛ける。机には白い紙と鉛筆が置いてある。準備は万端だ。

「な、なるほど……なら、私からいくわね」

そう言つてさらさらと書いていく。まあ、しりとりから始まるのだろう。

「はい」

そして受け取つてみる……

「…………ど、どうしたのよ。頭を抱えて……」

な、なんだこの怪物……！

「すみません。りから始めたんですよね？」

「そ、そうよ……」

やつは何だよこの怪物……！ええい。こうなりや答えを――

コンコンコン

するとまた紙がやつて来た。

「『もちろん。絵しりとりなので相手にこれが何の絵を聞くかは反則です』って……」

あ、詰んだ。早かった。一手目で詰んだ。

「は、早く次に進めてほしいのだけど……」

……………いや、誰かさんの絵の下手くそきで困ってる。人のこと言えないけど。

まあ、落ち着け。きつと動物だ。うん。そして何か持つてる。これが何か分かればいいんだけど……………！

「あ、そういうことか」

一つの答えにたどり着き、俺は次の絵を描く。

「どうやら伝わったみたいね……………良かった」

「あ、俺の絵も伝わってます？」

「ええ。これは分かるわ」

そう言つて次の絵を描いている千聖。そして俺の番だが……

「ど、どうしたの!?!また頭を抱えて……」

な、なんだこれ……………いや、魚だ。多分魚。……………いや何の魚!?!普通の魚書いたよこの人!?!マジで!?!何か特徴は……………何かないのか!?!

「……………」

「そ、そんな目で見ないで……」

推理ゲームだ。まず、俺のが伝わっていると仮定したら『メ』から始まる。そして魚。

後はお互いに蹴落とし合うような、所謂勝負をしている訳ではない。つまり世間一般によく知られている。この三つから推測されるのは……

「じゃあ、これでいいな」

俺は次の絵を描いて渡す。

「可愛い絵を描くわね」

「うるせえ。でも伝わるだろ」

「そうね。なら……」

そう言つて帰つてきた絵。あ、よかった。クソほど分かりやすい。なら、

「……ねえ。これは絵と呼んでいいのかしら」

「反則ギリギリでしょうが伝わればいいかなって」

「そう。じゃあ……」

「あ、これもわかりやすいですね」

「ま、まあ。いくら私でもこれくらい描けるわ」

「ちなみに時間が三時なのはお腹が空いたからですか？」

「特に深い意味はないわよ」

「じゃあ、次はこれです」

俺は絵を描いて返す。いやあ、さつきがふざけすぎたからちよつと本気出してみた。



まあ、多分伝わるでしょ。

「どうしたの千聖。頭抱えて」

(な、何なのこれ!? ええ? ええつ!? ちよつと、全然分らないんだけど……!)

初めてだ。千聖が頭抱えているなんて。

「体調でも悪くなつた? 横になる?」

「違うわよ! あなたの絵が分からないのよ!」

「ええつ!? 結構分かりやすく描いたつもりなんだけどなあ……」

「どこが!？」

お、おかしい。もう間違いなくこれしかないはずなのに……!

(あ、諦めてはダメ……きつと、どこか。よく見たら何かが……あ、口元が嘴っぽくなつてゐるわ。ということとは……これは羽かしら? なるほど……『イ』から始まる鳥……きつとこれね。じゃあ……)

するとたつぷり考えた結果、ようやく手が動き始める。

「ふう。何とか分かつたわ」

「全く、何でそんな時間が……!」

俺は帰ってきた紙を見て戦慄する。次の絵が何かマジで分かんない。

「千聖……」

「な、何よ……」

「人のこと言えねえんだよ!?意味分かんねえよ本当に!?何だよこいつ!」

「……私としては結構分かりやすく描いたつもりなんだけど……ダメ?」

「はつきり言つてやる。俺よりひでえ」

「……ちよつといじけるわ」

そう言うのとベッドの隅の方に移動している。何だろう。その背中はいつてもより小さく見えた。

……さて、どうするこれ?いや、マジで分からん。俺の絵が『コ』で終わってるから……コ?コ……コ……あれ、もしやこれ魚か?じゃあ、この口元の三本線は……ひげ?なら……コイツしかいねえか。

「おい。次お前の番だ」

「……はーい……何これ?」

「え?」

「え?」

あれ?伝わってない?

「……た、多分伝わったわ」

目頭を押さえる。必死に絞り出した千聖。そして描かれた絵は……

「何これ？」

もう、何これ？ん？多分鳥だ……いや、鳥はいいんだ。『カ』から始まる鳥って……カッコウ、カモメ、カモ、カラス……ぱっと思いついただけで割と居る。……カモはいいな。カモならもつとカモらしく書くはず。カッコウもちよつとマイナーだから絵しりとりで選ぶとは思えない。だから……

「……………」

(……………これは……………ボール？)

あれ？何か伝わってない顔してる。割と分かりやすく描いたはずだが……

(いえ、ボールはないわ。何か付いてるし……この線は揺れてることを表しているのかしら？揺らす……揺らす……)

ぼんつと手を打って、頭を抱えた。

「ど、どうした？」

「い、いえ……多分伝わったわ。ええ。でもあなた……この状況でその文字で回す？普通」

「いやいや分かりやすく誘導してんだ。誘導に乗ってくればいいんだ」

「そ、そうね。分かったわ」

俺が取えて『ズ』で終わらせたのは理由がある。ズから始まって、絵で表現できるも

のなんて少ないはず。だからきつと頭蓋骨を描いてくれるはずだ。

そう。だから千聖から帰ってきた紙にはきつと頭蓋骨が……

「……………」

ナニ…………コレ。

「ど、どう？誘導に乗れたかしら？」

「乗れてねえよ!?一回ハツ倒してやろうか temeエ!」

「あなたがそんな難しい字で回すのが悪いんでしょ!」

「だからもう一択しかねえはずだろ!」

「ええそうよ!これしか思いつかなかったわ!」

……………残念ながら俺たちはズレてるらしい。……………待て待て。ズから始まって?何これ?  
?え?マジで分かんない。過去最高に分かんない。捻り出せ……………ズから始まるもの  
……………ズだろ?ズ……………ズ……………!

たっぷり五分。考えに考えようやく答えにたどり着く。クソ野菜の方がよ……………そして、次の絵を描く。

「……………純粹にヘタね」

「うっせえ。お前に言われたくねえ」

そして次は……………ああ、これか。



## 〇〇〇しないと出られない部屋 その2

気付いたらまた部屋に閉じ込められていた。

「あーうん。またなのね」

前は千聖と閉じ込められ、絵しりとりをして最後は一緒に寝た。さて、今回は……

「ここはどこですか？」

「紗夜さん……！」

我らが女神様、紗夜さんである。

「どうやら閉じ込められたみたいですよ」

部屋の内装は前と変わり、大きなベッド、そして台に壁にはモニターテレビ。四隅にカメラは相変わらずだが……まあ、いつか。

「随分と落ち着いていますね」

「ええ。つい先日、千聖と閉じ込められたばかりですから」

「へえー……」

何かジト目で見てくる。可愛い。

「でも、紗夜さんとならいつまでもここに居たいです」

「そうですね。では、一緒にずっと居ましようか」

こうして俺たちは脱出を諦め、そのまま一生ここで暮らしましたとき。

『クールビューティーな紗夜さんを返して(涙)』めでたく完結。

「……………じゃないよね？」

「すみません。少し乗りました」

コンコンコン

すると紙がドアの下から。はいはい。分かっています。

『ここは○○○しないと出られない部屋です』やっぱりね」

「ちなみに白鷺さんと何を？」

「絵しりとりです」

「…………風紀の乱れた匂いがします。男女が密室で二人きり。何も起きなかったはずがあ

りません」

「俺ですよ？」

「あ、慧人さんなら大丈夫ですね。私以外に手を出すはずがありません」

「そのとおりです」

さすがが分かつていらつしやる。俺は紗夜さん一筋なんですから。

コンコンコン

「はいはい？『イチチャイチャしているところすみません。今回もこころ様の思いつきでお二人を閉じ込めました。今回はホラー映画を視聴しないと出られない部屋です。柵の上にもリモコンがありますので、それを操作すれば見られるようになっていきます。では』だそうです。アレですね」

とりあえずリモコンを取ってきてベッドに腰掛ける。俺にとっては二度目だから落ち着いている。人間って凄いなあ。拉致監禁にあつても、相手が見知った相手だとすぐに適応できる。……………普通アウトだよなあ……………。流石弦巻家。

「ちなみに紗夜さんってホラー系大丈夫ですか？」

「もちろんですよ」

「そう」

ピッ



というわけでテレビの電源を点ける。そして、右側……紗夜さんとの中間地点にリモコンを置く。すると、もう再生されるみたいで……

ピッ

一時停止された。

「紗夜さん？」

「いえ。いきなりスタートというのは心臓に悪いですからね。プールと同じですよ。まずは準備をしっかりとしなくては」

「はあ……もういいですか？」

「ええ」

ピッ

再生ボタンを押す。まあ、最初の重々しい雰囲気から何かが起こりそうな……

ピッ

画面が停止した。

「紗夜さん？」

「いいですか慧人さん。ホラー映画が始まる前に一つ。ホラー映画に出てくるようなお化けとかゾンビとかは実在しないんですよ？そんな非科学的なことを信じていてはまだまだです。まあ、私は信じていないんですけどね」

「……はあ」

ピッ

映画のタイトルは知らないけど、幽霊とか心霊現象とかそういう系か？それともゾンビとかそういう系だろうか。後はサイコ系なんかもありそ……

ピッ

画面が停止した。

「…………」

「そうですね、幽霊。まあ、西洋ではゴーストと呼ばれる存在について。こちらは人間の肉体が死んでしまったとしても魂は死なずに現世をさまよい続けると言われています。まあ、幽霊の多くは悲運な死を遂げてしまったような存在も多いとされ、現世への未練がなくれば成仏、消えるともされています。また、動物や他人に霊が乗り移ることもあるとされていますがはっきり言いましょう。この話自体が非科学的なものなんです。分かりますか？科学的根拠がないんです。だから存在しないと私は思っているんですけどね」

「…………」

ピッ

そうそう。こう言う重苦しい雰囲気での始まりが……



「な、なんででしょう?」

右隣の彼女を見る。もう涙目であつた。……………早くね?まだ開始何分とかそういう次元だよ?

「本当はホラーとかそういうの……………苦手なんでしょ?」

「に、苦手じゃないです」

「そう」

ピッ

じゃあ、続き続きつと。

ピッ

「ごめんなさい凄いい苦手です。苦手だからあ……………」

ど、どうしよう……………!何というかガチで泣きかけている紗夜さん……………可愛い。超可愛い。い。

「……………俺の前でくらい強がらないでくださいよ。ほら腕掴んでいていいですから」  
「……………(くくくくくくくくくく)」

凄いい領いたかと思うと右腕に力強く抱きついてくる。……………なるほど。これはマズい。何がとは言われないが非常にマズい。よし、全力で右腕から意識を逸らそう。

そして2時間くらいが経過した。当然映画は終わっている。

映画？一言で言うなら、内容が一切頭に入ってこなかったせいではほとんど覚えていない。何か包丁が宙を舞っていたような……まあいつか。このレベルで本当に覚えていない。

で、何故覚えてないか問われたら、間違いなくこの部屋に一緒に閉じ込められた彼女が原因だろう。

「紗夜さん？」

「……怖くない怖くない怖くない怖くない」

耳元で呪詛を唱える彼女の背中を軽く叩く。

腕に抱きつくことを許可した後、ストーリーが進むにつれ途中から正面から抱きつかれた。まあ、画面は見えたけどそれにしてもだ。もうその辺りから全然映画が頭に入っていない。

「もう映画終わって30分くらい経つと——」

「怖くない怖くない怖くない怖くない」

「——よしよし」

諦めて彼女の後頭部あたりをなでることにする。

途中から恐怖などではなく理性との戦いだっただけ。ここは密室で二人きり。俺が腰掛けているのは大きなベッド。正面から襲いかかってくるのは彼女の胸部の感触とほのかに香る髪。そして極めつけに定期的に来る激しい抱擁。

辛うじて理性が保っていたのは、画面のキャスト<sup>役者</sup>が叫ぶのと同時に紗夜さんも耳元で叫んだことだろうか。その声で壊れかけていた理性を何とかつなぎ止めてくれていた。

もうずっと別の意味でドキドキが止まらない。何というか……

「これが吊り橋効果？」

何か違う気がするけどこれが吊り橋効果ってやつなのか？なるほど。このドキドキを恋のドキドキと勘違いさせるってやつか。ん？ちよつと待って。俺今何にドキドキしているんだ？あ、やっべ。そこが分からない以上吊り橋効果云々も分からないんじゃない？……

いや、待てよ？結局ドキドキしている以上変わらないのか？というかこれ以上は理性が持たない……！

「堕ちるか」

俺は意識を飛ばすことにする。すなわち寝る。おやすみなさい。

……………目が覚めると見慣れない天井があった。そして何かに抱きしめられる感覚が…………。

「ああ…………」

そう言えばこころの黒服さんたちに閉じ込められて、ホラー映画見て、意識を飛ばしたんだっけ？

「……………すう」

穏やかな寝息を立てている紗夜さん。可愛い。彼女も多分疲れたんだろう。可愛い。まあ、あれだけホラー映画で叫んだりすれば当然か。可愛い。それに普段も頑張っているだろうし。可愛い。それにしてもあそこまでホラーが苦手とは。可愛い。これは遊園地とかでお化け屋敷に連れて行ったらどうなるか。可愛い。想像するだけで…………。可愛い。

「……………ヤバイ」

さつきから思考の合間に可愛いって言葉が入ってくる。もう末期かな？末期だな。まあ、皆からも末期って言われているし、これぞ自他共に認めている末期。



結論。紗夜さん可愛い。

「……………いや待て」

ホラー映画が大丈夫と強がって、実は全然ダメ。そんな姿……クールビューティーというよりポンコツキュートではないか。これでは紗夜さんがポンコツキュートの道にまた一歩近づいてしまう。それはよろしくない。本当によろしくない。クールビューティーにすべく、ホラーを克服するか、もしくは冷静に受け流してもらわないと困る。よく考えたら彼女は可愛いというより美しくあるべきなんだ。そうだ間違いない。美しくあるべき。いや、美しいけど。十分美しいけど。

むむ。これでは紗夜さんがクールビューティーに戻れない。ポンコツキュートに近づいてしまう……ダメだ。彼女をクールビューティーに戻すのは俺の使命なんだ。そのためには……

「まあ、明日からでいっか」

こんな幸せそうに寝ている彼女を起こすのは忍びない。まあ、明日から頑張ろう。おー。

……ちなみに抱きつかれて動けないからどうしようかと考えているのは内緒だ。

## Roselia VS 慧人

それは異様な光景だった。

地に伏すのは四人の少女たち。

「さあ、湊友希那よ。覚悟は決まったか？」

「ぐっ……………」

その言葉に湊友希那は唇を噛み締めんとする。

ステージにて足組をしつつ湊友希那を見下ろすのは、我らが主人公、冬木慧人。

その姿は完全に魔王である。

「に、逃げて……………友希那……………」

「私たちのことは……………気にしないでください……………」

「リサ、紗夜……………」

「今の私たちが勝てない……………です……………」

「お願い友希那さん……………生きて……………！生きて延びて……………」

「隣子、あこ……………」

死にそうになりながら地に伏す四人の少女たちは、自分たちのリーダーに声をかけ

る。

「ははははっ！ さあどうする？ 彼女たちを見捨てて逃げる事が出来るか？ 答えろ。湊友希那」

迷う彼女に高らかに笑いながら声をかける魔王、慧人。

「私は……！ 私……！ 私……！」

「だ、ダメだよ友希那！ 逃げて！ アタシたちを置いて逃げて！」

「友希那さんがやられたら、誰が Roselia を引つ張っていくんですか！」

「は、早まつてはダメです！ だからどうか……！」

「友希那さん！ 友希那さん！」

「大丈夫よ皆。……私は必ず勝つわ」

友希那は地に伏す四人の少女たちに微笑みかける。そして……そして……

「冬木。何かいい案はないかしら」

「ええー急に言われても困るんですけど？」

Roseliaの練習終わり。一人練習をすると言うことで残った友希那さん。いろいろあつて何か彼女と二人きりで話すことになってしまった。

「最近、Roseliaの練習に緊張感が足りないと思うの」

「ああ……いやそれ絶対アンタらがネタに走り始めたからでしょ」

思い出されるはこの前のC i R C L Eでの合同ライブ。誰が予想できただろうか。あのRoseliaが頭のおかしな衣装を着て演奏することに。おかげで俺の中の

頭のおかしいバンドランキング、堂々の1位になっている。

「ネタ？ 私たちはいつでも本気よ」

「へいへい。紗夜さんが言ってますもんね。練習は本番のように、本番は練習のよう  
にっ」

「その通りよ。ただ、本番のような緊張感を練習ではどうしても持ちにくいのよ」

音楽そのもののレベルは高い彼女たち。だが、何かを見失っている気がする。

「緊張感ねえ……ああ、罰ゲームとかどうですか？」

「罰ゲーム？」

「そう。例えば練習でミスしたら誰かが罰ゲーム！みたいな。それだったら緊張感があるんじゃないですか？」

「いいわね。採用。でも罰ゲームって何するの？」

「ええ？……うーん。顔にラクガキ？」

「……多分、リサやあこはノードメージよ」

ああ……確かに。途中から変な方向に走りそうだなあ……

「え？ じゃあ恥ずかしいコスプレ的なのも……」

「リサとあこはノリノリでやるわ」

「うーん……黒歴史とか恥ずかしいことの暴露」

「既に私のそういう話はリサが知っているわ」

「何かのモノマネとか？ここで黒歴史を作る」

「多分、あこが楽しんでやるわ」

「語尾に何かをつけて会話縛り」

「リサが面白がつてやりそうね」

「……………え？あの人たち、強くな？」

つ、強すぎるぞあの二人。罰ゲームが罰ゲームにならないだと？

「冬木の歌を聴かせるといっはどうかしら？」

「すみません。人の歌を罰ゲームにしないでください」

「……………そうね。それに、あなたの歌だとC i R C L Eが崩壊するかもしれないわね」

「ひでえ!？それはひでえ!？いくら何でも俺の歌は建物を壊すレベルにないですよ!」

というかいよいよネタが尽きた。いや……………思いつく限り出したんだけどなあ…………

「ええ……………後は食関係ですか？」

「食? ああ、何か食べさせる系ね」

「そうそう。でも下手なものやって、喉やられたり体調悪くされるとダメージでかいで

すよね」

「当然よ。今後に支障をきたしてしまえば、意味がないわ」

「うーん……そう考えると難しいよな………あ」

「何を思いついたの？」

「ええ。罰ゲームとしてダメージがでかく、リサ姐やあこちゃんでも絶対拒否したくない、そして後に響かなそうなものを思いつきました」

そして次の練習の時、

「最近の私たちは何処か甘えがあったのよ」

急に友希那さんが真面目な事を言い出していった。

「だから、今回は罰ゲームを用意したわ」

「罰ゲーム？」

「ええ。緊張感を味わうために、ミスした場合、罰ゲームを受けてもらう。冬木。例のモノを」

「へーい」

俺はワゴンにシートをかけたものを押して転がす。全く、俺バイト中なのになあ……

まあ、本当はよくないんだけど。

「えーつとこれは何かな？」

「冬木」

「へいへい」

俺はシートを外す。中から現れたのは謎の液体Xが入ったクールポット。

「な、何ですかその液体……」

「ふっ。あれは我らが魔界に生きる者が……えつと」



「嗜む」

「……嗜むものよ」

「俺お手製ドリンク、通称『対Roselia決戦兵器』です」

「『対Roselia決戦兵器!?!』」

「ええ。Roseliaを倒すために用意した最終兵器です」

「……ぐ、具体的には何が入ってるの?」

「こちら、ゴーヤ、にんじん、ピーマン、セロリのグリーンスムージーとなっております。

他には一切入っておりません」

「『……………』」

皆の顔が固まった。だって、あなたたちの嫌いを合わせたらこうなったもんだもん。仕方ないよね。

「ちなみに調理は友希那さんとまりなさんの監視下で行われていたため、怪しいなにかが入ってる可能性はゼロです」

「『……………』」

「さあ、練習を始めましょうか。皆さん」

「ま、待って慧人くん。味見は?」

「してないです」

「では、私たちは頂けませんね。万が一奇跡的な調査で、問題が起きては困りますし」  
「そ、そうですね。もしものことを考えると……」

「それは地獄へ誘う悪魔の飲み物……」

うわあ………すげえ抵抗してくるなあ………仕方ない。

「毒味すりゃいいいでしょ。はいはい」

というわけで持ってきたグラスの一つに注いでいく。良かった。その返しが想像で  
きていたからグラスを六つ持ってきておいて。

「え？味見でいいのにそんな沢山……」

「け、慧人さん。もつと少なくていいんですよ？味見ですからもつと少なくて……」

「何を言っているんですか紗夜さん。これぐらい飲んでも皆さんの分はしつかりとあり  
ますから。何なら追加で作りますよ」

流石紗夜さん。いち早く俺の狙いに気付いたようだが時すでに遅し。

「いただきますつと」

ということとでコップに入った分を飲み干す。

「うん。おいしくねえ」

やっぱ、具材そのままやったのはまずつたな。次は改良を重ねて一部の人以上はおい  
しく飲めるようにしたいな。次回作に期待だな。

「まあまあ、皆さん。ミスさえしなければ飲まなくていいんですよ。それに頂点に立つんでしょ？これくらいは試練を乗り越えてもらわないと。……さあ練習を始めましょう？」

「「……………」」

すげえ。あそこまで固まるのは初めて見た。……まあ、俺聞いただけなんだけど。だって、楽器弾けないし。歌えないし。というかバイト中……まあいつか。バンドの練習のフオローということで。

「……………」どうだった？」

一曲終わって反省会。

「何か途中で音が半音ズレませんでした？確か……あ、ここのフレーズです」  
「ぐっ……流石慧人さん……耳だけはいい……！」

「こういう時だけ……何で慧人くんは絶対音感持つてるの……！」

「……………」（ふるふる）」

「け、けー兄のバカ……！」

「ば、罰ゲームね……！」

何故か指摘した俺が責められる展開に。ただ、本人たちが否定しないあたり、少なくとも間違ったことは言っていないのだろう。というか……え？あのワンフリーズのズレだけで？す、すげえ……ハードモード。

「でも、誰が受けるんですか？」

「あ、アタシが行くよ……！」

「リサ姐ですか」

ということとでコップの一つに注いでいく。

「ちよ、ちよつと多くないかなー」

「え？俺はこれぐらい飲みましたよ」

「やっぱりこれが狙いでしたか……！」

そう。味見で飲んだ人……すなわち最初の犠牲者が普通に一杯分飲んだ以上、注ぐ担当がそれと同じ量入れても責められる筋合いはない。

それを見越していたが……さすが紗夜さん。気付いていたようで。まあ、気付いても止められなかった以上アレだけど。

「はいリサ姐」

「あ、ありがとね……！」

「安心してください。拒否しても、残したとしても、しっかりと飲み干させてあげますか

ら」

「あ、あはは……が、ガチだねー殺す気だねー」

目が泳いで動揺を隠しきれない。初めてかも。ここまで動揺を隠しきれないリサ姐は。

そして、日頃の俺を見ているせいとか、やらなきややられるということ、意を決して飲み始める。

「……つつつつ!!?」

目を見開き、涙目になりかけている。

「どうしました？手が止まりましたよ」

笑顔で問いかけると目がこれ以上やめると訴えかけている。ええーだって、やろうって言ったの友希那さんだし。やる以上本気じゃないとね。

(……鬼が居る。ここに最悪の鬼が居る( ))

そして遂に飲み干すリサ姐。

「……あれ？何で気絶しているんだろう」

倒れそうになった彼女を支える。おかしい。気絶させるような代物は入れてないのに。

「み、湊さん……」

「……続けましょう。練習を」

こつちで、リサ姐の介抱をしている中、四人で練習再開。さすが対Roselia決戦兵器って言ったところか。効果覲面、効果抜群だった。

そして、次の曲が終わった。

「言わないでください……！分かってます……私が罰ゲームを受けます……！」

「ひ、氷川さん……！」

「さ、紗夜さん……あこたちの為にそんな……！」

「……分かったわ」

早かった。あーなるほど。彼女たちの妥協しない、完璧を求めるせいで、無茶苦茶ハードルが高いんだ。音ゲーで例えるなら、オールパーフェクトじゃないと納得しないんだ。……うわあ、これがガチ勢か。そのせいですぐに罰ゲーム行き……ヤバイこの人たちのハードルの高さ。俺の想定の数段上なんだけど。いや、煽った俺が言えることでもないけど。

そう考えながら、罰ゲーム用のアレをグラスに注いでいく。相手が紗夜さんでも容赦できないのが悲しいところだけど……まあいいか。ポテト好きな彼女の栄養が偏らな

いようにする為の措置だと思えば。

「さあ、どうぞ。紗夜さん」

「……………慧人さん」

「何でしょう」

「私が死んだら後のことを頼みます」

いや、大袈裟では？と、思ったらすぐそこに倒れている人居たわ。

「私は……………私は！決して屈さない！屈するわけにはいかない！」

そして、一気に飲み干す紗夜さん。

「す、凄いです……………！立ったまま気絶してます……………！」

「アレが紗夜さんの意地……………！絶対に倒れない強い意志……………！」

「くっ……………紗夜まで失うなんて……………！」

す、すげえ……………！何か紗夜さんの背後に、白い衣を纏った神々しい紗夜さんが見える……………！やはりあなたは女神様でしたか……………！

とりあえず、グラスを回収して立ったままなのはアレなので横にする。というか、今更だがベースとギターが消えて大丈夫なのか？

「続けるわよ……………！二人の分まで……………！」

二人の介抱をしていると、次の曲が終わった。

「……………くっ。ダメだったわ……………」

「ど、どうしようりんりん！」

「わ、私が行きます……………」

「そんな……………」

「い、嫌だよりりんりん！りんりんまで失いたくない！」

「大丈夫だよ……………必ず帰ってくるから」

……………おかしい。さっきからおかしい。何がおかしいって、何か俺だけが悪役ヒーローになってる気がする。言っとくけど俺に相談してきたのアンタらのリーダーで、承諾したのもアンタらのリーダーだよ？元凶はそこ友希那の人だよ。

「け、けいさん……………」

「何でしょう」

ヤバイ。最初から凄いい震えているから……………うん。とてもじゃないが罪悪感がヤバイ。おかしい。友希那さんはグルだったはずなのに。

「ひ、一思いにやってください！」

「……………え？あ、はい」



え？俺がやるの？マジで？……いや、目を閉じて手をギュツと握りしめている……マジかあ。

「分かりました。口を開けてください」

「は、はい……」

「行きますよ」

そして、片手は彼女の背中に回して倒れ込まないように。もう片方の手はグラスを傾け彼女の口の中に少しずつ流し込んでいく。

彼女の手は気付けば俺の服を掴み、時折悲鳴にならない声を上げようとしたり、目を見開いたりしていたが何とか飲み干すことに成功する。

そのままゆつくりとりんさんを横にする。グラスを戻しに行くと、あこちゃんがりんさんに駆け寄った。

「りんりん！」

「あこちゃん……約束……守れなかつ……」

「そんな……りんりん……りんりんっ！」

「ダメよあこ。私たちは……三人の犠牲を無駄にするわけにはいかないの……」

「うう……分かりました。あこ、頑張ります」

……もういいや。俺、悪役で。

そして、次の曲が終わった。

「……あこが行きます……！」

「そんな……！」

「友希那さんを失うわけにはいけません……！……ここはあこが……！」

すげえ友情だ。ウチのサッカー部でコレやらせたら絶対蹴落とし合いが始まるのに。彼女たちは自己犠牲で行くなんて……凄いい友情、結束の固さ。

「どうぞ！」

そしてあこちゃんの前にグラスを差し出す。

「ふっふっふっ。我が名は聖墮天使あこ姫！我の前に立ち塞がるものならば！我が……えっと、バーンとなるアレで打ち砕いてくれようぞ！」

や、やべえ……フォロー役のりんさんが倒れているせいで、誰もフォローできねえ……！

「いざ参らん！」

飲み始めるあこちゃん。途中、何度も涙を流しそうになるも、最後の一口を飲みきる。すると、目を見開きそして……

「私の勝利なり……ふにゆく」

目を回して倒れそうになったので、咄嗟に抱きかかえる。流石に倒れて床に激突は洒落にならん。

「……どうすんの友希那さん。アンタ以外全員倒れたのだけど……」

「リサ、紗夜、燐子、あこ……よくも……よくも皆を！」

「……え？ちよつ、ま？」

「私は……私は諦めない！たとえ最後の一人になつたとしても！歌いきつて見せるわ！」

ええ……何かスイッチ入つちやつたよこの人。マジか。アンタが言い出したことなんだけど？……もういいや。それなら最後まで付き合つてやるか。

「はっ。その覚悟がいつまで持つか。楽しみだな」

湊友希那は格好良く散った。

飲み干すと同時に格好良く散っていった。

………いや、ほんと何してんだろうね。やっぱりRoseliaの方向性、何か間違っていない？

((いつか、この仕返しをしてやる……))

俺は知らなかった。この時、彼女たちの思いが一つになったことに。

## リサ姐の誕生日

8月24日の夕方。Roseliaの一人を除く全員が俺の家に集まっていた。

「……急に押しかけて何用でしょう?」

昼間。友希那さんから、『今日、冬木の家に集まるわ』とLONEが来た。『部活があるんだけど?』と返したら未読スルーされたので部活をサボることにした。べ、別にすまないとは思わないぞ?……でも、集まるって……いや、CIRCLEとかでいいじゃん。何で俺の家なんだよ。

「冬木。明日が何の日か分かるかしら」

で、集まったのは友希那さん、紗夜さん、りんさん、あこちゃん四人。リサ姐が居ないのを不思議に思いつつも、きっとバイトとか用事なんだろうということでした。スルーしておく。

「明日ですか?」

明日だと?別に祝祭日じゃないし……あ。

「分かりました。即席ラーメン記念日ですね」

「「え?」」

「あ、おねーちゃんが言ってたよ！明日はラーメンの日だからラーメン食べるんだあ！って」

さすが巴だ。ラーメン好きだから知っていたのか。

「つて、違うわよ」

「いや、8月25日は即席ラーメン記念日のはずですよ」

「いえ、私たちが求めていた答えと違うって話です」

「ええ……じゃあ、あれですよ。東京国際空港開港記念日です」

「「違う」」

「むむ……？」

おかしい……えつと他には確か……。

「ウルグアイの独立記念日ですか？」

「「記念日から離れて」」

と女子四人から総ツツコミを喰らった。……いやね？だって、これくらいしか思いつかなかったし……

「なるほど。そういうことでしたか」

「ええ。ようやく分かった？」

「もちろん。かの有名なドイツの哲学者、フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェさんが

亡くなられた日ですね」

「「……………誰？」」

「そう言われてはいますけど、求めている答えと違います」

ふむ……………

「ギブアップです」

「……………逆に、よくそんなに知ってますね……………」

「あこ、全然分かんなかった……………」

「私もよ。一個も知らなかったわ」

「……………慧人さん。さてはわざとやっていますか？」

「わざと？」

「ええ。答えを知っていて、こうやってわざと遠回りしていると」

「いや、誰がそんなめんどくせえことするんですか？」

「誕生日よ」

「誕生日？誰のですか？」

「リサの誕生日よ」

「へえ……………ええっ!?マジで？」

「「……………」」

うわあーすげえ冷たい目……そっかあ……明日はリサ姐の誕生日だったかあ……

「最低ね。あなた、それでも Roselia に最初から関わってきたの?」

「全くです。慧人さんには失望を隠せません」

「いやあ……その……」

「……酷いです……今井さん可哀想……」

「そうだよ! リサ姉に謝ってよ!」

「……ごめんなさい……心の底からごめんなさい……」

心の中でも謝っておく……謝っておくが言い訳を一つ。いや、聞いたことないんだもん知ってるわけじゃないじゃん。後、リサ姐つて実は君たち四人より遙かに付き合い短いんだよ? Roselia つて一括りにしているけどさ、半年以上付き合った長さが違うから……あ、ダメみたいですね。すみません。反省してます。

「で?それを俺に伝えてどうしろ……あ、はい。すみません。今察しましたごめんなさい」

色々と察しました。はい。そうだね。何でリサ姐がここにいないかよく分かりました。

後、四人からの株が下がったことも察しました。……元からそんな下がるような株あつたっけ?



「……はい。とりあえず、色々と察しましたが、具体的に何をするのか教えていただけるとマジであります」

「そうね。ならプランを説明しましょうか……」

で、翌日。8月25日夜。俺の家にRoselia大集合である。何故俺の家なのか聞かれたら……まあ、俺の家が一番都合がよかったからだ。理由は後で分かる。

「お邪魔しまーす」

「リサ姐。こんばんは」

「あれ？アタシが最後？ごめんね。待たせちゃった？」

「いいですよ。まだ時間前ですし、さあ、上がってください」

「分かった☆」

リサ姐は、彼女に送った集合時間の5分前に到着する。見た目に反して律儀な彼女であれば時間前には来ると思っていたが……さすが友希那さんの読みだな。

そしてリサ姐がリビングへと続く扉を開けると、

パァン！パァン！

「「誕生日おめでとう！（おめでどうございます）」」

鳴り響くクラッカーの音。それを受けたリサ姐は、

「ありがと〜！皆〜！」

予想通りの返しかな。この感じだと乗ってくれた感じはするけど……本番はここからだからな。

「誕生日おめでとうございませう、リサ姐。さあ、どうぞ。こちらにお座りください」

リサ姐を席に誘導する。すると、出来たての料理たちが並んでいる。まあ、並べたの俺たちだけだ。

「では、先にご飯にしましょうか」

「そうですね……出来たてですし……」

「筑前煮に酔いの物……アタシの好きな物がメインなんだね！」

「だってリサが今日の主役なのよ。当然じゃない」

「じゃあ、せーの！」

「二、いただきます！」

ということと俺たち五人も各々の席について食べる。

「リサ姐。まずは筑前煮から食べてください」

「おっと？ 慧人くんがそこまで言うって事は……？」

「さあ？ どうでしょうね？」

「じゃあ、お言葉に甘えて、いただきます」

さてさて、リサ姐は気付くかな？

（ん？ 何だろう？ このサトイモとか他の具材も……大きさがバラバラ？）

一口食べるリサ姐。

「ん〜美味しいね……でも。これ、慧人くんが作ったわけじゃないよね？」

「やっぱり、バレますよね……では問題。俺は最低限しか手を出していません。じゃあ、誰がこれを作ったんでしようか？」

そう言つてリサ姐は他の四人を見渡すと……明らかに一人、ほつとして、嬉しそうにしている人物がいた。

「う、嘘……まさか友希那が……？」

「……ええ、そうよ」

するとリサ姐が感動し始めた……え？ちよつ、早くない？最初のサプライズから感動つて……いやまあ、一番驚くとは思つたけどさ？スタートからクライマックスなんだからどうしょ。

「ご、ごめんね……だつて友希那がアタシのために作つてくれたなんて……」

「……ふふつ。喜んでくれてよかつたわ」

昨日のプランで言われて、全部やってみて一番大変だったこと。それは『湊友希那が筑前煮を作ること』である。湊友希那の料理のレベルはヤバイ。ゲテモノを生み出すとかそういう意味のヤバイじゃなくて、単純に下手くそなのだ。包丁すらまともに握れないレベルである。そのレベルの人間に教えながら料理をすることは生憎、リサ姐を除く残りの三人には出来なかつた。……まあ、あのレベルは俺でもキツかつたし、リサ姐で

もキツイと思うけど。だからこそ、俺に白羽の矢が立てられた。……他にも、俺が抜擢された理由はあったのだがそれは置いておこう。

で、これはリサ姐の予想を越え感動させる一番の方法だと友希那さんが自信を持って言っていた……結果はこの現状である。

「うう〜……友希那あっ……!」

「もう……早すぎるわよ」

とりあえずマジで感動して友希那さんに抱きついているリサ姐を見ながら、俺たち残りの四人は……

「……どうしましょう。アレが最初って……」

「で、ですよね……絶対に超えられないです……」

「ど、どうしょ……だ、大丈夫かな?」

「まあ、これは最初にやる必要があった以上しようがないですよ……もうどうにでもなれですね」

だって、サプライズにするために友希那さんが作ってることを見つかってはならない。かといって、遅くすれば他の料理が冷めたりする。結果、最初にやるしかなかったのだ。

とりあえず、この後に自分たちのプレゼントを渡すのがあるんですけど?と思う中、

微笑ましくその光景を見ていた。まあ、あのリサ姐が弱いところを見せるのは珍しいかなあ……。

そんな食事も終わっていく。……何だろうね。友希那さんに甘えるリサ姐っていう物凄いレアな光景が見れて良かった良かった。……いや、トップバッターハードルあげすぎ。勝てる気は最初からなかったけどさ。

「先にプレゼントを渡しておきましょうか」

「そ、そうですね……」

「へーい……」

「いやテンション上げていこうよ皆！」

「順番は予定通りに。ということ今井さん。私から」

「えーつとこれは……クツキーだね！」

「ええ。いつももらっていましたし、頑張って作ってみました」

「ありがとう！紗夜〜！」

「これは私とあちゃんから……」

「二人で選んだんだよ！」

「ぬいぐるみだね〜ん〜！大切にするよ！二人とも！」

紗夜さんとりんさん、あちゃんから渡し終える。……はあ、最後が絶対ハードルが

高いって理由で俺になってる。なるほど。俺なら失敗してもいいと……そうですね。はい。

「さてさて〜トリの慧人くんは何をくれるのかな〜?」

「……はあ。はい。コレです」

ということ。小さな紙袋を渡す。

「中身はなにかな〜」

「期待しないでください」

「もう〜そんなこと言つて〜……おお……!猫だね。羊毛フェルトつてやつかな?」

「その通りです」

「す、凄い完成度……もしかして慧人くんつて手芸も?」

「まあ、裁縫とかその辺も得意分野ですからね」

「……可愛らしいにやーちゃんね」

「ええ……本当に可愛らしい」

「え?けー兄つてこういうのも作れたの?」

「なわけ。昨日初めて挑戦したわ」

「……じゃあ、これは……」

「お前らが帰った後、ダツシユでセットを買いに行つて、美咲に電話越しに教えてもらい

ながら作った」

おかげで納得いくものが出来たのは今朝だった。コイツの前の残骸が数体、俺の部屋に転がっていたりする。

……ツチ。一週間早けりや、もう少しサイズもでかくできただろうがあの小さなやつで限界だわ。

「つまり……?」

「初心者が作ったもんだから、期待しないでくれってことだよ」

「い、いやいや。これ、絶対上手いって!」

まあ、美咲に一応送ったらオツケーもらってたしいいかなって……というか、そのせいで割と寝不足である。

「ありがとね!大切にするよ!」

「ん」

とりあえずプレゼントを渡すのは終了。後は……

「ケーキか」

「おおっ!ケーキまで!」

「どうぞ。こちらです」

「凄いねくもしかして、コレも手作り?」



「ええ。基本的には俺が、デコレーションは四人に任せました」

「……頑張ったわ」

「皆さんと楽しく作れたかと」

「うう……面白そうだからアタシも混ぜてほしかったあ……」

「今井さんへのサプライズなんですから……」

「食べようよりサ姉！」

「だね！あ、その前に写真撮っていい？」

写真も撮り、食べ始める……まあ、何だろう？盛り上がったからよかったってことで。

この後は片付けを軽くしてから、帰宅。彼女たちを家に送り届けるのであった。

リサ姐も満足してくれて良かったが……さすがに前日に言われてここまで疲れた。

いやね？アレだよ。もう少し早く言ってくれ……。

キッチンには女の戦場だって誰が決めた？

ある日の放課後。俺の姿は……

「ああ………何でここに居るんだろう」

花咲川女学園にあった。

勘違いしないで欲しいのは俺は決して不法侵入をしたとかそういう訳ではない。そして、拉致されたとかそういうわけでもない。しつかりとした理由があつて来ている。まあ………

『これより。三校合同の料理対決、三日目をはじめさせていただきます。では大将の方々、前へどうぞ』

そんな宣告と共に前に出る。……ほんと、何でこんなことになったんだろかなあ………。

担任から帰りのHRで、お前後で校長室行け、と宣告を受けたのがテスト最終日のことだった。つまり、あの徹夜で会議した日の日中の出来事である。

担任が言うに、詳しいことは分からんと言われた。用件が不明＝面倒ごとだと思い、頭を抱えなくなったが、拒否するわけには行かず渋々校長室へやって来た。決して、サボろうとしたら放送で呼び出すと言われたわけではない。文化祭の時みたく呼び出されるのはゴメンである。

そして入室するとそこには校長先生、家庭基礎の先生、そして女生徒二名がいた。ちなみに生徒の方は顔を見たことがある程度で名前すら知らない。

「揃ったようだね」

重苦しい雰囲気を出す校長。俺としてはテストからの開放感を味わいたいのだが……。

「これに名前を書いてくれ。まずは君から」

そう言つて家庭基礎の先生が一人一人名前を書かせる。何故か書く場所を指定されたが……どうでもいいか。

「君たちに協力してもらいたいことがある」

協力……ああ。めんどくさそう。

「めんどくせえ感じがするので断つていいですか？」

「君たちには今度。花咲川で料理対決に参加してもらいたい」

……は？

「……………待つてください校長先生。何故そんなことを？」

女生徒の片方が質問を投げかける。当然と言えば当然か。

「うむ。話せば長くなるのだが……」

そう言つて語り始めたので、簡単に説明していこう。

羽丘と花咲川に調理部とか料理部的なのがあるらしく、冬休み明けにある何か料理の大会？に参加するそう。で、空気を味わうじゃないけど、交流戦をする話になつてウチの虎南にも何故かお声が掛かったそう。曰く、よくあなた方の生徒は見ているから是非

と。……誰だろうなあーそんなに目撃情報を集めている奴ら。

で、ウチには調理部とかそういうのはないが、近隣高校との付き合いを悪くするのは、よろしくないと判断し快く承諾した校長。ただまあ、適当に料理好きな人たちを送り込もうとしたが……何をとち狂ったのか勝負に発展してしまい、結果……

「我が虎南高校が下に見られるわけにはいかない。というわけで、精鋭部隊、君たちを招集したわけだよ」

はつきり言おう。ウチの高校は多分馬鹿って思われているぞ？だって二つとも進学校だし？普通科しかない普通の高校のくせに半分男子校状態だし？それに何部とは言わないが問題を起こしていたりするし？

「1年生時の家庭基礎……特に食分野の成績や調理実習時の振る舞いから選出しました」

ウチの高校は家庭基礎の先生は一人しか居ない。まあ、一年生の時しか授業がないし、数が多くても意味がないな。

「紙面にまとめて渡すので各自読むように。何か質問は？」

「はい。いつやるんですか？」

「平日の放課後。三日間に分けて行われる」

「すみません。バイトと部活が忙しいんですけど……」

「全日参加はしなくいいい」

どういうこと?と思ひ聞いてみると、各校は三人の代表者を、そしてその中でも先鋒、中堅、大将を決めてもらう。本当の大会のルールは色々であるらしいが、交流戦だし何度も何度も集めてもあれという理由で、一日目は先鋒、二日目は中堅、三日目は大将が料理を振る舞い戦っていくらしい。

で、勝敗?だが、これは大会に乗っ取り審査員による点数勝負。実際が何人かは知らないが今回は各校の料理部の顧問だったり審査員を務めるらしい。まあ、課題点を見つけてそこをどうするかというものだったり、他人の料理のふるまいからも学んでほしいという勉強会に近い側面があるのでこの形式とか……うん。俺関係ないわ。

だからぶっちゃけ、俺たちは順番だけ決めて、その日だけ参加すればいいらしいが……はつきり言おう。やつぱりめんどうくせえと。

「というわけで、もう先鋒、中堅、大将は決まっている」

は?って思うと最初に自分で書いた紙を見せられる。……あーわざわざ書く場所を指定してきたのはそういう狙いかあ……詐欺だろ。いや、詐欺の常套手段じゃないのかこれ?いいのかこういうの?ねえいいのか?

「私は大丈夫です」

「私も」

「え？異論あるの俺だけ？いや、ぶっちゃけ面倒くさいから降りたいんですけど？」

「大丈夫。大将は冬木慧人くん。君に任せたまよ」

「いやいや。全然大丈夫じゃないですよ？」

何故だろう。文化祭といい、万引きといい。二年生になって校長先生とお話する機会が立て続いたせいで名前と顔を覚えられてしまった。悲しい。

とりあえず花咲川まで歩いて行く。今日、校長から呼び出され聞いた話によれば先鋒は羽丘の、中堅は花咲川の人がトップで、ウチは先鋒、中堅共に3位。ただまあ、即興のチームで、しかもそういうの目指してなくて、普段から練習している彼女らにそこまでするのは大健闘とのこと。そりやそうだ。相手ガチ勢だろ。

何で毎回俺はそういうのに巻き込まれるんだよ。サボっていいで……え？ファストフード店のクーポン100円分？いやいや、もう一声。もう一声……何？なら、ファストフードで使えるカード500円分だど？順位に応じて、倍にしていく？契約書に書いてもいい？……乗った。3位で500円、2位で1000円、1位で2000円？オーケーオーケー交渉成立だ。やってやろうじゃねえか。決して金で釣られたわけじゃないぞ。

「ここが花咲川……」

って言ってはみたものの見ることは初めてじゃない。何ならここはランニングでよく通ってる。ただまあ、入るのは初めてだな。

さてと、確か校門で迎えというか案内役の人が待ってるとか何とか。

「お待ちしておりました。虎南高校代表の冬木慧人さん」

背後から声が掛けられる。振り向かなくても声だけで……いや、気配だけで分かる。

「紗夜さん？」

「そうですよ。慧人さんの案内役です」

「え？何で？」

「風紀委員ですから」

「あ、なるほど」

風紀委員……確かにそうだ。ここは女子校。そんなところに男子生徒を、交流試合とは言え招くのだ。学校からの信頼が高く、厳格な人たちが案内するのは不思議じゃない。

それに騒動を起こさせない為にも風紀委員という立場の人間は必要だろう。

「では行きましようか」

すると俺の半歩前を歩いていく。時折後ろを振り返り着いて来ていることを確認し



ている。

「まさか、慧人さんがこのような形で私たちの学校を訪れることになろうとは……思ってもみませんでしたよ」

「俺もまさかです。文句は校長に言ってやりたいです」

「なるほど。何で釣られたのですか？」

「おっと、そこまでお見通しでしたか」

「ええ。あの慧人さんだから、めんどくせえ、と断っていると思いますからね。一体何で釣られたのかと」

紗夜さん。正解。

「まあ、色々。それより紗夜さん。いつものファストフード店で使えるカードがもらえそうなんですけど今度一緒に行きますか？」

「是非お願いします」

微笑んで答える紗夜さん。

それにしても凄いなあ……学校の外だったら目を輝かせて、ワクワクとした気持ちを抑えきれずに応えていただろうに……。今の彼女は何か……そう。俺が求めている受け答えをしてくれる。そうか。学校内だと風紀委員という厳格な立場や本人の性格の関係でこんな感じなのか。

こんな紗夜さんを毎日見られるなんて羨ましい……………!

「こちらが会場です」

そうして開けられた扉。そこを通ると……

「うわぁ……………帰りてえ」

一斉にこちらを見てくる多数の目。羽丘と花咲川のそれぞれのチームと考える人たちが固まっております。観客っぽい感じの人たちも何人か。確か観戦自由とか何とか。

対して、虎南高校のスペースは誰も居ない。まあ、キャプテンたちには今日はこれのせいで休むと言ってあるが、観戦出来るとは言っていない。言ったら絶対にこっちに來るからだ。応援? 違うな。合法的に女子校に入れるーとか言ってるだろ。後はなんちゃってチームメイトは当然いない。あの呼び出された日以来会ってないし当然か。

圧倒的アウェイ。そして圧倒的場違い。俺の心は早くも帰りたくなっていった。……………ちなみに紗夜さんがこの場にいなかったら、今すぐ棄権↓脱走しようと考えているのは内緒だ。だって、棄権しても金は貰えるし(ゲスい)。

ということを思い返ししながら俺は一步踏み出す。更に場違いを加速させたのは熱の

入りようだろうか。

俺は淡々とし、どこかめんどくさそうに前に出たのに対し、花咲川も羽丘も「部長！頑張ってください！」とか「決めてください！リーダー！」とかなんとかで……はあ。よく見なくとも花咲川と羽川の大將の二人はやる気満々だ。しかも、部員と思われる人たちが少しでも技を盗もうとメモ帳を手に目を輝かせている。マジか。温度差がヤバイ。助けて。冬に向かっているのにここ暑い。

「指定食材は先日お伝えしたとおりです」

指定食材。どうやら、各対決で指定された食材は料理の中にどんな形でもいいから使えとのこと。メインでもサブでも……ただ、一つだけ問題がある。

「すみません。今回の指定食材って何ですか？」

俺は指定食材の説明は聞いたが、今回の指定食材を聞いた記憶はない。

「……え？この前、呼び出して伝えたよね？」

審査員のうちの一人である我が家庭科の先生が声をかけるが………？

「………あー………聞いてなかったです」

そういうや、数日前くらいに呼び出されたなあ………全く聞いてなかったけど。

「ふ、冬木くん？伝えてなかったっけ？事前に作る料理は決めておかないと当日困るって……」

「……………？」

え？当日その場で考えるんじゃない？…あー指定食材が事前に教えられる時点で察しか。

「……………」

何か花咲川と羽川の代表者の人たちが、本当にコイツは大丈夫なのか？って目で見てくる。失敬な。大丈夫じゃねえよ帰らせてえ。紗夜さんが居なかつたら今すぐ脱走ものだ。

「……………ええ。改めて、今回の指定食材は卵。制限時間は60分です。食材など、リストは先日お渡しした通りで、前に置いてありますのでご自由に」

リスト……………リスト……………ああ、あれか。何かもらったなあ。

「それでは、大将戦スタート！」

二人の動きは早かった。既に作業工程を頭に入れていたせいか、食材を取る段階から迷わず自分たちの調理スペースに持って行った。

対して慧人さんは、自分の調理スペースで目を閉じて腕を組んだ状態から動かなかつた。

「どうしたのかな？慧人。動かないと時間なくなっちゃうんじゃないの？」

「だよーいやあ、何を考えてるんだろ？うね」

「開始から五分……動きなしですか………って日菜に今井さん!?! どうしてここに!?!」

「あたしはるんっ♪ってしたからやって来た！」

「アタシはヒナに連れられてだね！」

「ちなみに彩ちゃんたちはなんで居るの?！」

「それは日菜ちゃんに言われたくないな……」

「私たちは慧人が紗夜ちゃんに連れられて来たから来てみただけよ。ついに女子校に不法侵入して捕まったかと心配になってね」

「あれ？千聖ちゃん……何か面白そうな香りがするって言って付いてきただけだよ  
？」

「彩ちゃん。静かに」

「あはは……でも本当に慧人くん動かないね。他の人たちは既に張り切っているのに」

他の調理部？の部員も邪魔にならないところから観察し、時折メモを取る。その姿は真剣そのものだ。対して私たちのようなただの観客は雑談をしている。そもそも私たちがぐらいいしかただの観客がいないのはアレだが。

「ねえねえ。あれって何を考えていると思うー？」

「え？料理の工程とかを頭の中でイメージしているんじゃないの……？」

「甘いわね。アレは今日の夜ご飯を考えている顔だわ」

「いやいやー学校内での紗夜が格好良くて感傷に浸ってるんだよ☆」

「おねーちゃんはどう思う？」

「はあ……丸山さんも白鷺さんも今井さんも……分かっていますね。あの慧人さんですよ？一つしかないじゃないですか」

三人とも、まだまだと言わざるを得ない。特に丸山さん。テストで出たら0点の回答だ。白鷺さんと今井さんはまだ点数が貰えるだろうが……やれやれだ。

「ファストフード店で今度、期間限定の二種類のポテトが発売しますが、どちらを注文しようか迷っているんですよ」

「……え？」

「な、なるほど……！それは盲点だったわ……！」

「た、確かに……！慧人くんならあり得る……！」

「さすが紗夜ちゃん……！」

「アタシたちでは分からなかったよ☆」

「……それって……おねーちゃんが考えていることだよね……？」

「いいえ。私は二つとも頼むつもりですから迷っていません」

当たり前じゃないですか。一体何を言っているのやら。

と、遂に長く閉じられていた目が開かれ、行動を開始する慧人さん。その目には迷いがなかった。

「遂にどちらのポテトにするか決めたのね……」

「きつとそうだよ……あの目は間違いない」

「さあ……抹茶フレーバーか紅茶フレーバーか」

「ど、どうしよう……比較的まともなはずの三人が全速力でネタに走り始めた」

「〔ネタとは失礼ね（失礼な）（失礼ですね）〕」

「日菜ちゃん……」

「あはは〜大丈夫だよ。彩ちゃんに比べたらマシだよ!」

「日菜ちゃん……!」

丸山さんは失礼ですね。こっちは真面目に話をしていると言うのに。

「……? 何だか騒がしいですね」

慧人さんが動き出してからどうにも、周りが騒がしい気がする。何があったのでしようか?

『な、何なのあの包丁捌き……!』

『は、早い。いや、早いだけじゃなくて凄い正確……!』

『あんなの一朝一夕で出来るものじゃない……!』

『一体、どれだけの研鑽を積んでいるというの……?』

ああ、なるほど。そういうことでしたか。

「さすが紗夜ちゃんの旦那さんね」

「ええ、本当にさす……って白鷺さん!旦那さんじゃなくて信徒の間違いですよ!」

「いやー個人的には信徒はアウトじゃないかと……」



「ごめんなさい。気が早かったわね」

「全くです。旦那さんというのはまだ早すぎです」

「あははく否定しないね」

「えつと……どうしようね日菜ちゃん」

「んーあたしは面白そうだから慧人を見て来るね！あの三人は任せたよ！（スタスタ）」

「任されても困るよお……」

そんな感じで時間が経っていく……凄いなあ……とところで、何を作るつもりなんだろう？切った野菜がかなりの量があることに驚いている。あんなに大量の野菜とかを使う料理って一体……？

「残り五分です」

「気付けば時間がかかり経っていた。どれもこれも白鷺さんと今井さんがからかうせいだ。」

この勝負は盛り付けまで時間内に終わらせないといけないらしく、見栄えを良くするためにいろいろと思考を張り巡らせている女子の二人。対して、まだ皿の上に何も載っていない慧人さん。

「残り三分です」

女子の二人が審査員席に料理を持って行く中、ようやく皿の上に料理が載る……なるほど。チキンライスでしたか。それなら、見栄えがあまり関係ない……？」

「残り一分です」

あれ？ 今回の指定食材って卵……？ 卵は？ え？ 慧人さんがまさかそんな初歩的なミスをするなんて……

ヒュッ！

その時何かが飛んだ。いや、飛んだと言うほどではないかもしれないが、何か黄色い物体が宙を舞った。それは、慧人さんの持っていた皿の上に綺麗に着地した。

そして、その黄色いものを切ると……

『な、何だって……！』

『あんなに卵をふわふわさせるなんて……！』

『嘘でしょ……？ 見栄えまで美しいなんて……』

「完成です」

審査員席に皿を出しタイミングでタイマーが鳴る。

『た、タイミングまで完璧なんて……！』

『まさか最初のアレは時間調整のため……？』

『ま、まだよ……！味では勝っているかもしれないわ……！』

そんな声を受けながら自分の調理スペースに戻ってきた慧人さん。すると、

ヒュッ！

また何かが飛んだ。そしてそれを皿で受け止める。

空いたフライパンに卵を流し入れ……ちよつと待つて？一体何をしているの？

「あ、あの冬木くん？もう必要ないんだよ？」

「あ、いえ。これ全部俺の夕飯の分ですのでお気になさらず」

「……え？ま、まさか自分の分までちやつかり確保？多いなあとは思っていたけど……」

「だって腹減ったので」

「「……………」」

会場が静まり返った気がする。だって、今彼の目の前には普通に5皿、五人前くらい

あるんだから。

ヒュッ！

卵が飛んだ。そして卵が入る。

ヒュッ！

審査員が実食している中、また卵が飛んだ。そして卵を流し入れる……

「ねえねえー慧人ー見てておなか空いたからー皿もらっていい〜？」

「いいけど、そんなに食えるのか？」

「だいじょーぶ！皆で食べるから！」

「言っとくけど4皿は俺が食うからな、後さつき出来たやつ持って行け」

「わあーい！ありがとー！おねーちゃんたち！一緒に食べよー！」

「じゃあ、お言葉に甘えてーいただきます☆」

「私も食べるわ」

「ありがとうございます。慧人さん」

「えと、先に食べちゃうね……」

……  
ということで卵が飛ぶのを尻目に見ながら勝手に実食タイム。卵を切つてみると

「おおっ！こつちもふわふわしている〜」

「やるねえ〜」

「手を抜いていないのね」

「自分の分もしっかりとやっているのですね」

「これはすごいおいしそう……」

食べ始めると……うん。見栄えの良さもそうだが、その下にあるチキンライスも具材の大きさ、火の通りなど……凄い。食べる手が止まらないかもしれない。

「いただきますっ」と

慧人さんも食べ始める。何というか……ものすごい勢いで彼の中に消えていくあたり相当お腹がすいていたのだろうか？それとも、普段はセーブしているだけで、あれがデフォルトなのだろうか？

「え、えーつと、冬木くん。結果発表だけど……」

「(ごくん) ……あー聞けばいい感じですか？」

「そうだね……じゃあ、食べながらでいいよ」

「あざーす」

凄く軽い感じだ。他の二人は緊張している様子が見られるのに対して慧人さんは緊張よりご飯って感じがする。それだけ、興味がないのだろう。

「えー先日までと同様、一人最大20点。三人なので60点満点での採点です」

ということ、点数をつけているが……慧人さんの目はご飯にしか向いていない。そして食べる手も止まっていない。

「出揃いました。1位、虎南高校59点。2位、花咲川女子学園、55点。3位、羽丘女子学園、54点」

「……くっ……!」

「そんな……!」

「……（もぐもぐ）」

点数発表を受け、他の二人が悔しきを見せる中、やはり一人だけ食べ続けている慧人さん。……彼つて時々マイペースなどころがある気がするわ。

「三人ともレベルは高いけど冬木くんが頭一つ抜けていましたね」

「でも、そういう虎南高校さんが19点なのは何故？」

「まあ、彼にはここで満足してもらいたくないって言う私情ですかね……後、話聞いてないとか、今も食べ続けているとかそういう諸々を引いた感じですね」

「でも料理中の動きには無駄がなかったですよ。無駄があればあの量をあの時間で作るの不可能ですし」

と、講評つぼいのが始まったが……

「ねえー慧人ーもう半皿！半皿でいいからちようだい！」

「……（ふるふる）」

「ケチー！こうなつたら意地でも食べてやる……！おりやー！」

「……（もぐもぐ）」

日菜と争奪戦をされていてどうやら聞いてない様子だ。何故日菜はわざわざ慧人さんの目の前にある皿を奪おうしているのだろう？そこに二皿、手の付いていないものがあるのに。後……そんなに食べたなら夜ご飯が入らなくなるわよ？

「今度からオムライス食べたくなったら慧人に頼もうかしら」

「いいねーそれ。あ、ケチャップで文字とか絵とか書く練習していい？」

「……（こくこく）」

「ありがとー千聖もやる？」

「わ、私は遠慮しておくわ。彩ちゃんやってみたら？」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

多分ここに居る私たちは先生の話を誰も聞いてないけど……いいかな。私も混ぜろ  
う。

こうして、よく分からないうちに料理対決は終わっていた。ちなみに、日菜がお腹  
いっぱいでご飯どうしようと言い出したが、予想通りだった。

# 我らゴーストバスターズ！

「あつちから面白そうな匂いがするわ！」

「あ！今るんっ！つて来た！」

「モカちゃんはパンを食べます〜」

「めんどくせえから帰っていいか？」

上からこころ、日菜、モカ、俺というよく分からない四人組。その本当によく分からない四人組は今、深夜の羽丘女子学園に居た。

どうしてこうなったのか？順を追って簡単に説明していこう。まず、発端はこころである。こころが『学校の怪談に出て来る幽霊さんに会いたいわ！』と言い出した。それを隣で聞いていた日菜が『面白そう！今度、ウチの学校に忍び込んで調査しよう！』と答えた。そしてこころは『皆で行けばきつと楽しいわ！』と言い出し、いつものバンドメンバーなどに声をかけたが、まあ、ホラー系が苦手な人は当然断るし、そうでなくても、深夜の学校に忍び込むという背徳感がある人とか面倒って思う人とかは断る。結果、多くの人が断った。しかしそんな中、モカだけは『面白そ〜ですわね』と答え参戦。

しかし、問題が発生した。こころ、日菜、モカ。果たしてこの三人が深夜の学校に忍



び込むとなったらどうなるのか?……下手したら学校が崩壊しかねないとのこと。そこで、何故か俺まで召喚される事になるのだが……『学校は壊さないでください……!』とつぐみ以下Afterglowのメンバーや、リサ姐などにはつきり言われた。どうやら、俺も危険人物らしい。悲しい。

で、結局色んな意味でヤバイ奴らが集まってしまった結果、出来上がったのがこのヤバイ四人パーティー。残念なことにとまりもなければ制御する人間もない。これは幽霊側も絶対に出て来たくないだろう。

「というか、お前ら何を持ってきただ?」

「あたしはこの虫取り網よ!これで幽霊さんを捕まえるの!」

やめろ。それで捕まるのは虫だけだ。

「あたしはね!この縄だよ!これで捕獲だね!」

やめろ。多分、窓ガラスが割れる。

「モカちゃんはパンです!あ、あげませんよ!」

お前はピクニックに来たのか?

「そういう慧人は何を持ってきたの?」

「ああ?サッカーボールだな」

「あはは!そんなものじゃ幽霊は捕まえられないよ!」

「けーとさんの持ち物が一番不思議だね〜」

全く、お前ら三人よりはマシだろ。こっちは練習しながらだったり、後は何かあったときの武器として持ってきてきているんだから。

「で？まずはどこ行くんだよ」

「そうね！音楽室はどうかしら！」

「美術室に行こうよ〜」

「モカちゃんは調理室がいいですよ〜」

「はあ？体育館じゃねえのか？」

全員の意見が一致しない。残念すぎるだろ。

「意見が割れたわね……あ、じゃあ花子さんに会いに行きましよう！」

「なるほど、3階のトイレに行くんだね！よし行こう！」

「いいねえ〜行こう行こう〜」

「へいへい。入り口で待っているから行ってこい」

とりあえず、決まった……過程は凄い謎だが。とりあえず、ここは女子校なので、女子トイレしかない。よって俺は入り口で待つことにする。誰も使っていないとはいえない女子トイレには入りたくない。おい、女子校に侵入していることは仕方ないからな？入りたくて入ったわけじゃないんだ。

「というか、居るわけねえだろ……」

そう思いながら紗夜さんに報告を入れる。というのも、日菜が何かやらかさないか心配だけでも自分では行けないから報告してほしいと。同様に Afterglowのメンバーや美咲とかにもモカやこころが問題を起こしていかを報告する。美咲に関しては……まあ、報告するならこの人だろってことだが、全く……心配なら着いてこりゃいいのに。何も起きるわけがねえのにな。

「で?どうだったんだ?」

「特に何もなかったわ!」

「そうそう。何かあると思っただのにね」

「徒労ってやつですな」

「そうですね……」

出て来た女子四人がそう答える。……………ん?女子四人?

「いや、最後の奴誰だよ」

「この子はね!花子っていうらしいのよ!」

「何か、三番目の個室にいたよね、こんな時間までダメじゃん!」

「まあまあ、そう堅いこと言わないであげましょうよ」

「あ、そう」

どうやらトイレで花子さんって言う人を見つけたらしい。スマホのライトを当てると、若干透けて見えるのは気のせいだろう。影が薄いついていうのを極めるところなるのか？

「というか、トイレに居たのに引つ張り出してきたのかよ。いいのか？」

「何かね！面白そうだから仲間に引き入れたの！」

「そうそう！るんっ♪って来たからね！」

「同じ一年生同士仲良くしましょ〜」

「そ、そうですよね……」

「……まあいいか。まともな面子を引き込んだようだし次行くか」

凄く苦笑いというか、こんなはずじゃない感を出しているのは気のせいだろう。引きずり込むつもりが逆に引つ張り出されたとか？

とりあえず、新しい仲間を加えたと言うことを報告しておく。つぐみが『あれ？花子って名前の一年生なんて居たっけ？』とか言い出しているけど知るか。

「あ、理科室の骸骨見に行こうよ！」

「いいわね！賛成よ！」

「おっけ〜」

「へいへい」

そして最初にあげた候補に無かったが、次は理科室というか骸骨を見に行くようだ。もう完全に楽しんでるだろうな。俺たちって。

「知ってるわ!ここの人体模型も動くのよね!」

「そうそう!骨の模型だけじゃなくて人体模型も動くらしいんだよ!」

「おもしろそう!行こう行こう!」

「つて鍵どうするんだよ」

「鍵つてコレの事かしら?」

「何かね、さつき拾ったの」

「運が良かったよね」

……鍵を拾った?……ああ、黒服さんたちか。大変だな……あの人たちも。

「あ、あのー……あなたも驚かないんですか?」

「驚く?何に?」

「い、いえ……何でもないです……」

何というかこの子……普通に肌白くね?まるで生きてないみたい……まあ、そんなわけねえか。生物の気配がしないのは不思議だけど。

「行くわよ!」

「突撃ー!」

「おお〜！」

「はいはい。静かに行こうな？」

というところで理科室をバーンって開けるが……まあ、何もねえよな。というか月明かりだけだが……意外と明るく感じるな。あ、人体模型に隣には骸骨……まあ動くわけねえか。

ドンツ

すると背後の扉が閉まる音がする。

「慧人？もう少し静かに閉めてちょうだい」

「俺じゃねえよ。モカだろどうせ」

「モカちゃんじゃないです〜日菜先輩では？」

「ええ〜あたしじゃないよ〜こころちゃんじゃなかったの？」

「……………」

どうやら違うらしい。そうなると残りは……

「「あ、花子（ちゃん）か」」

「……………え？違うんですけど……………」

「あらそうなの？まあ、何でもいいわ」

「ね〜扉を閉めてくれて感謝感謝〜」

「とりあえず探索しよー! おー!」

「はいはい。夜遅いし静かにな」

何だよここの理科室。自分で扉が閉まるとかセルフサービスか……ちよつと羨ましいな。

「……………ん? そこ!」

何か気配を感じたので腕を振るう。すると、何かに当たった感触がし、その何かは倒れてしまう。

「あゝけーとさんが人体模型を倒した〜」

「慧人! 人体模型さんがかわいそうじゃない」

「やつちやつたね〜内臓が飛び出ちやつてるよ」

「悪い悪い。何か気配を感じたからさ」

「あれ〜? さつきまでそこにありましたよね〜?」

「きつと誰かが動かしたのよ。それよりも早く戻してあげましょう」

「いいねえ〜立体パズルの時間だね!」

「うわあ……それにしても結構散らばったな……」

「まずは皆で拾いましょう」

「「おお〜」」

全く、誰だよ動かしたやつ……はあ。そのせいで拾う羽目に……あ、心臓発見。  
「……………」

「あ、これは目か。悪い悪い。そっちまで飛んでいったか」

何か心優しいやつが目の部分を渡してきた……ういや、お前も拾ったなら人体模型の方に持って行けよ。何で俺に渡してんだよ。

「ふっふくん。パズルは得意なのだよ」

「あたしにかかれば簡単に終わるね！」

「これで全部かしら？」

「だろうな。あ、これ心臓と目の部分だ。後は任せた」

「……あ、はい」

何か女子たちが楽しんでやっているの、俺は少し離れたところで見守る。

ついでに現状報告つと……

ツンツン

「なんか用か？……ん？」

すぐ右隣に骸骨が居たが……まあ、いつか。コイツが動いたわけでもねえし。

とりあえず、四人の様子を写真で撮るが……う？

「花子の奴だけ何か綺麗にうつらねえな……まあいつか」



どうにもぶれるような……というか、そもそも居ないような……まあ、どうでもいいか。他三人は綺麗に写ってるし。

ツツツ

「ん?……あれ? お前動いたのか?」

すると今度は左隣に骸骨が居たが……まあ、動けるわけねえか。

「かんせ〜」

「いやあー面白かった!」

「そうね! 今度、ウチの学校の人体模型でもやってみようかしら」

「いやいや、やるなつての。ほら行くぞ」

ということ、人体模型とついでに骸骨を元の位置に戻して、鍵を閉めてから理科室を出る。

「んー幽霊さんは恥ずかしがり屋かしら? 一向に会えないわね」

「だよね〜あーあ、これじゃあ、おねーちゃんに土産話ができないよ〜」

「モカちゃん、パンが尽きておなか空いてきました〜ぐー」

「時間もいい頃合いだし、そろそろ帰ろうぜ。親も心配するだろ」

コツコツコツ

すると、前の方から足音が聞こえてくる。それと共に懐中電灯の光が……

「マズいね〜アレ、警備員さんの巡回だよ。見つかると面倒なことになるね……」  
「どうします〜？逃げますか〜？」

「慧人。何とか出来るかしら〜？」

「へいへい。任せとけ」

恐らくあの曲がり角の先……階段付近に居るな。ここは二階……

「お前ら。この高さならいけるよな〜？」

「問題ないわ」

「おっけー」

「無理です〜」

「よし。ならいい」

「……え〜？」

窓のカギを開けておく。すると、音が徐々に近づき、光が大きくなってきた。そして、懐中電灯らしきものが見え、警備員さんの帽子が見え始めた瞬間。

「行けっ」

ボールを軽くあげてボレーシュートを放つ。ボールは綺麗に直撃した。

「へふっ!!」

小さな悲鳴が聞こえたが、気にすることなく、跳ね返ってきたボールを回収し、モカ

を抱えて窓枠へダツシユ。窓を開けて飛び降りる。こころ、日菜も無事飛び降り、靴を履き替え……

「「お待ちしてりました」」

校門付近に待機していた黒服さんたちの下へ。夜も遅いので俺たちも送ってくれるようだ。

「あら？花子はどこかしら？」

「そー言えば居ないね」

「あちゃー逃げ遅れたかー」

「まあ、普通の女子に二階の窓枠から飛び降りる発想はねえよな」

というか、いつまで居たつけ？理科室から一緒に出た……よな？まあいいや。

「でも楽しかったわ！幽霊さんに会えなかったのが残念ね」

「だよねーあー会いたかったな」

「そうですねー」

「まあ、簡単に会えたら苦労しねえだろ」

とそんな感じで俺たちは家に帰るのだった。

後日談をすると、俺が気絶させた警備員が言うには、突如飛来してきた物体に当たって意識を失い、意識が戻ると、動く人体模型や骸骨に会ったとか何とか。あー……：気絶したショックで幻覚かな？可哀想に。

後、黒服さんたちによれば今回、一切付いてきていないし、手も出していないそう。全く、鍵を落とすとは警備がザルじゃないか？

また、つぐみが花子って名前の一年生は居ないと言ってきた……じゃあ、アイツは一体誰なんだろう？

まあ、何でもいいが、とりあえずあのメンバーで行くとまとまりがないということが分かったので、第二弾以降は遠慮願いたいな。うん。

## 面倒な客は本当に面倒

人と関わるアルバイト。俺はC i R C L Eで働いているが、当然客の対応をすることがある。

関わる客の1000人が1000人、皆いい人かと言われたらそうではない。まあ、悪い人と言うよりも、ぶつちやけるなら相手するのが面倒な客も中にはいるのだ。

ウチのバイトでの話をするなら……

「ああっ？わざわざ来てやってんのに空いていないとかどういふことだよ」

基本C i R C L Eは予約制である。勿論、飛び込みで来てもらってもいいのだが空いている保障は出来ない。で、今日は予約で一杯。だから急なキャンセルがない限り、空くわけがない。

まあ、いつもの彼女たちも当日に急に来ることもあるが、空いていなくて無理そうなら諦めて帰る。当然と言えば当然だ。あくまでこのバイトとしては、特定の客を鼻屑にするわけにはいかないのだ。私情を仕事に持ち込んではいけないのだ。うんうん。

……で、面倒な客というのは、

「ですからお客様……」

こっちは空いてないって言ってるのに、さっさと空けるだの何で空いていないんだと文句言ってくる輩。うん。実に面倒である。

あーあ、新人スタツフくんお疲れ様だ。彼は一度、俺がクールビューティー教に落とそうとしたがまりなさんに止められた(『C i R C L Eに居るヤバイバイト』参照)。まあ、確かに。彼なら押ししたらそのままいけそうな感じがするよね。しょうがないね。

「あちゃあ……ちよつとガラの悪い面倒そうな客だね……」

「ですね。彼の運が悪かったって事で」

ちなみに俺がカウンターに立つと、こういうオラオラ系は居ないが、俺が何か言うたびビクツとする系や、何もしてないのに謝られる系、後は中々カウンターに來ない系がある。だから俺はカウンターでの接客が一番向いていない。別に取って食おうって訳じゃないのにな。……言つてて悲しくなった。

「だから、空けろつて言つてんだよこっちは！」

「そのですね……」

しかしまあ、埒があかないな。かれこれ5分? 10分? よく覚えていないけど、いやーよくやるよ。

「しょうがない。こっちは」

おつ、遂にまりなさんが動くのか。いやあ、こういう荒事は……

「冬木くん。ゴー」

「いや、アンタの出番でしょ。俺を何だと思ってます?」

「我がC i R C L E きての荒事担当。ゴー」

「ツチ。行ってきますよ。行ってこりゃいいんでしょ?」

舌打ちを敢えて聞こえるようにして面倒な客の下へと向かう。

とりあえず、新人スタッフくん（名前忘れた）を下がらせ俺が前に立つ。

「お客様?ここは基本予約制。予約者優先ですのでそのようなご要望にはお応えできません」

「ああ?そんなこと知らねえって言ってん……っ!?」

「他のお客様の迷惑です。さっさと失せないと強制退出させますが……覚悟はおありですか?」

何故か少し睨んで、言葉に圧を乗せただけで、目の前の荒そうな男はおとなしくなる。

「灰色の髪に……そのやる気のなさそうなめんどくさそうな目つき……!」

オイコラ確かにめんどくさいしやる気もねえけどどういう意味だコラ。

「テメエ……まさか……」

「強制退出までのカウントダウン入りまーす。3……2……」

「お、お前ら引くぞ!」

「本日はご来店ありがとうございます。またのお越しを心よりお待ちしております」  
逃げるように帰って行く。……全く、やれやれだ。まあ、ゴミ掃除が減るからいいんだけど。

「いやあくいつ見ても圧巻だね。私じゃあんな芸当無理だよ」

「別にちよつと威圧してるだけなんですけどね。あ、後任せたわ」

「は、はい！」

「さすがクレーマー担当！黙らせるのに一役買ってくれているね！」

「そのせいでこっちは普通の客を相手できねえんですよ？酷くないですか？」

「うーん。……そこはまあ、面倒な客と君に慣れているあの子たちの担当ってことで」

「へいへい」

CIRCLEの面倒な客。大体俺に投げられる説。ひでえ。マジでひでえ。



「……って。こんなことがあったんだよ」

「はははっ！そりやお前、今までのこと思い出してみろよ」

ある日の夜。東雲のヤツが暇だとか言ったので、久し振りに対決することになった。  
場所は公園である。

「るっせえ。今はそんなにねえから」

「いいじゃねえか。人避けになるんだろ？」

「人避けというか、面倒な客担当になってんだよ！」

奴に向かつてボレーを放つ。だが、ボールをワントラップで威力を殺し、浮いたボー

ルをボレーで返してくる。

「オレも同じ感じだから気にすんな！」

「慰めになつてねえんだよ！」

「慰めるつもりはねえよ！」

今やっているのはサッカーバレーのちよつと変則版。まず場所が公園なのでネットはない。

そして、俺たちのルールとしては2タッチ以内で相手にボールを蹴り込む。ボールを落とす、ハンド、半径1m以上離れた位置をボールが通過などすると得点が入る。

現在三最先取のデユースなしのルールで、お互いに二点ずつ。ちなみにここまでで30分かかっている。負けた方が勝った方にコンビニでスイーツを奢るって話でまとまった。

先輩に教えてもらったあたりからやっているが、中三とか高校だと、全然点が入らない。大体点が入るパターンは相手に無回転シュートをぶつけて落とさせるとか、体制を崩したところを付け狙うとかそんな感じである。ちなみに、話をしているのは相手を油断させるためだったりする。

「そーいや、そろそろ会いたがつてたぞ？」

「アイツか？」

「ああ」

「……確かに久しく会ってないからな」

「俺はよく会うけどな」

「そりやあ同じ学校だからだろ」

アイツか……分かってることは絶対に彼女たちに会わせるわけにはいかない。先輩、東雲と何故か会わせてしまっている以上、アイツだけは会わせるわけにはいかない。

「隙アリ！」

「あめえよ！」

東雲がシユート並みの威力で俺の顔を狙ったところをボレーで返す。だが、滑り込むようにして取られてしまった。……ほんと、俺たちは滅多な事じゃ点が入らない。だから……

「あ、お化けが」

「誰がそんなことに引つかかるかよ！」

「ツチ！」

「あ、UFO」

「誰が引つかかるんだこの阿呆！」

「クソツ！」

「あ、そこにロリが」「クールビューティーな女性が」

「何だど!?」

思わず東雲の指さした方を向く。しかし、そこには誰も居なかった。やっば、条件反射で……!」

「喰らえ!」

「させるか!」

「この卑怯者!」

「テメエこそ!」

と、この不意打ちも成功率は落ちている。理由は単純。そこにロリが居ないからだ。いや、居たときはあの男が見惚れてそこに一発ぶちかませるのだが……

「そういや、お前。今日、天使様がテレビ出るんじゃないの?」

「はあ? そんなはずが……」

「いや、サプライズゲストで」

「何だど!? 今から見に帰らねえ……ああつ!?」

ボールが東雲に当たって落ちる。

「ちなみに今の嘘な」

「テメエやりやがったな!」

「ああっ!? さっきテメエもスマホが鳴ってるのにぶっ放してきただろ!? 一緒だこの野郎」

「そんなのスマホに気を取られる方が悪いんだよ!」

「お前もテレビに気を取られているから悪いんだよ!」

「……ツチ。負けは負けだ。行くぞ」

渋々ながら向かっていく東雲。まあ、負けは負け、勝ちも勝ちって言うのが俺らの共通認識なので、ありがたく頂く。ちなみに前回は俺が負けている。

「お前、あの話はいいのか?」

「………まだ考え中」

「そうかよ。……早く決めろよ。催促されてんだろ?」

「へいへい」

と男二人で歩いて行く。夜つて言ってもまだ日が沈んで少し経ってから始めたからそんなに遅くない。

「ここにするか」

「だな………つてここか」

やつて来たコンビニ………ああ、ここか。

「もしかして、ここが例の万引き犯を捕まえたつてやつか?」

「そうだな。あの時は……別のことが面倒だった」

「お前何だかんだ持つてるからなく今回も万引き犯がいたり？」

「嫌だわ。今度は夜にお前と万引き犯とチエイスカよ」

さすがに嫌だから、今回はシユートをぶつけて相手を昏倒させるしかねえな。蹴るものはボールじゃなくてカンとかでもいいけど。

「申し訳ありません……！」

来店すると同時に何か謝っている声が聞こえる。

「ツチー！そんなことも分からねえのかよー！」

店員に向かって怒鳴る客……あー面倒な客だよな。こういうの。で？その客に当たった可哀想な店員は……

「以後、気をつけますので……！」

リサ姐が見えた。……知り合いつて……マジで言つてる？

「ここの教育はどうなつてんだよ！ああつ！」

威圧しているやつはともかく、リサ姐がそんなに言われるほど初歩的な、致命的なミスをしたとは思えない。何処か震えているようだし……こりや、適当ないちやもんつけられてるパターンか？まあ、そうでなくてもうるせえし。……というか、見過ごせるわけねえか。

「わりい」

一言東雲に謝り、その男のもとへ向かう。そして、

「耳障りだから黙れよ」

その男に向けて声をかける。振り返って来るが……わあー睨まれたー。

「ああつ？こっちは取り込み中なのが見て分かん——」

うるせえつて言つてんだよ。他の客に迷惑なのがわかんねえのか？」

「——テメエ、ヒーロー気取り……!?!」

こっちまでズカズカと歩いてきて、何かに気付いたように動きが止まる。

「ヒーロー？んなもん興味ねえんだよ。邪魔だから邪魔つて言つてんだよ」

「お、お前……!?!」

「冬木ースイーツどれにするよ」

「いや東雲？今、いいとこだからちよつと黙れ？」

「ふ、冬木に東雲だと……!?!」

「あ、あ？」

「その髪……その声……やっぱり……!ウチのリーダーをやった……!」

リーダーをやった？……ああ……

「東雲。お前覚えているか？」

「いや、一々覚えてねえーよ」

とりあえず俺らは左右からその男の肩を掴む。酷いなあ……さつきまでの威勢はどこに行つたのやら。というか顔色悪くなつてね？大丈夫？救急車呼ぼうか？

「み、見逃してくれ……！お前らのシマだとは知らなかつたんだ……！」

いや、俺らにシマとかなないんだけど？ヤンキーじゃあるまいし。

「なら、さつさと店員に謝れ。……そして失せる。今すぐに」

「そうすりや見逃してやるよ。……次はねえぞ。いいな？」

「ひ、ひい……もも、もうやらねえから……！ご、ごめんなさい！」

すると走つて逃げ去つた……一回自動ドアに思い切り身体をぶつけてよろけていたが。というか、何かすげえ怯えられたんだけど？足とか生まれたての子鹿を連想させたんだけど？

「にしても、お前が面倒ごとに自分から首突つ込むようになるとは」

「うるせえ。目障り耳障りだからそのことを言っただけだ」

「へいへい。……たく。そういうことから足を洗つたのになー」

「まあ、過去のオイタはついて回るんだろ。それより大丈夫か？リサ姐」

「……あ、あーうん。平気だよ。そ、それより商品とお金置いてっただけ……」

「どうする？届けるか？面倒だけど」



「いや、逃げられるのがオチだぜ？」

全く。よくあることだけど人の顔を見ただけで逃げるのはどうかと思う。やれやれ。助かったのは客が少ない時間帯だったってことか。またおかしな噂が広まる。……いやもう遅いかもしれないけど。

「面倒な客つてほんとめんどくせえよな」

「いやーほんとそーですよ」

「つて、モカ。いつの間に」

「さっすがけーとさんです。あの追い払い方はけーとさんしかできませんよ〜ね〜？」

「う、うん。そうだよね」

「ひでえ」

「え？冬木。お前、いつからコンビニ店員をナンパするように……」

「待て東雲。このくだりは前にやってんだ。二度目はやりたくねえ」

「……………？」

すると二人の顔を見て、ポンつと手を打つ。そして、

「あ、オレ帰るわ」

「ちよつ、え？はあ!？」

「ほらよ。これで足りるだろ。じゃあな」

そう言つて立ち去つていく……いや、100円じゃ足りねえんだけど……。

「あの野郎……はあ。なにがしてえんだか」

「そーだけーとさん。もうバイトあがるんでモカちゃんたちに何かおごつてくださいよ」

「はあ？え？何でそうな……」

「行きましょーリサさんーじゃ、けーとさんはモカちゃんたちが着替え終わるまでには選んでいてくださいね」

そのままリサ姐と裏に消えていく……そして、入れ替わるようにして別のスタッフが入った。いや、何で奢るハメになるんだよ……

そんな感じで荷物を纏めて来た二人に対して適当に選んで買ったシュークリームを渡す。投げて渡した方が見栄えがいいかもしれないが、何を隠そう俺はノーコンなので投げ渡せない。蹴つていいなら話は別だが、食べ物蹴るほど非常識ではない。

「しやーす」

「何か悪いね……」

「おおーしかもただのシュークリームじゃなくてちよつとお高い方々分かつてる」

「はいはい」

「いやあー嫌なことは甘いものを食べて忘れましょー」

「なら、俺も嫌なことあったんだけど？奢られに行ったら自分が奢っていたんだけど？」  
「それは大変ですね〜」

「いや、お前だけど？元凶お前だけど？」

「じゃあ、あたしの食べかけですけどいります〜？」

「いらねえ。それぐらいだったら自分で作る」

「わあーい。ゴチになりま〜す」

「いやいや、モカに作るって言ってないんだけど？」

「ええ〜？」

「何でそんな反応が出来るの？」

「けーとさんはモカちゃんのことを嫌いなんですか〜？」

「嫌いでも好きでもねえーよ」

「あたしのことは嫌いになっても〜シュークリームのごときは嫌いにならないでください  
〜」

「いやお前、そんなにシュークリームに思い入れないだろ」

「ですね〜モカちゃんはパンの方がいいです〜」

「だろうな」

「……ふふっ」

「あ、リサさん笑ってる〜」

「どつか笑うとこあったか？」

「けーとさんが面白いからですよ〜」

「いや、俺の何処が面白いんだよ」

「ん〜頭のとっぺんから前髪くらいまでですかね〜」

「おう、髪色か？髪型か？」

「色？」

「お前も同じような髪色だろ」

「じゃあ、きゅーていくるですね〜」

「待て。きゅーていくるって何だよ」

「きゅーていくるはきゅーていくるですよ〜」

「だからそのきゅーていくるが分かんないんだよ」

「あつ。あたしこつちなので〜お二人ともまた〜」

「ちよつ、おい。……………結局きゅーていくるって何だよ」

モカは立ち去っていった……俺の疑問を残して。きゅーていくるだと？一体何なんだそれは？

「面白いね、モカと慧人くんの会話。噛み合ってるのか噛み合っていないのか」

「……? 髪色は合ってるかもしれないですけど、髪型は合っていないですよ」

「……あはははっ!」

すると、リサ姐が何か爆笑し始めた……どういうこと?

「いや、そんな真顔でボケなくても……あはははははっ!」

「??」

何かよく分からんけど……お腹を抱えて笑ってる……ど、どうしよ。と、とりあえず友希那さんにリサ姐が壊れたって報告しないと……。

「ありがとね……今度モカにもお礼言わないと」

「いや、何でモカにも?」

「元氣づけようとしてくれたんでしょ?」

「そうなのか?」

笑い始めて1, 2分後。笑いすぎたせいか目尻に涙を浮かべているリサ姐にお礼を言われた。

よく分かんねえけど、まあ、戻ったならいつか。

「ありがとね……助けてくれて」

「別に。知り合いが困ってるんだったら助けるだろ」

「知り合いじゃなくて友達だよ☆」

「はいはい。だからまあ、困ってたら頼れよ」

「おおー頼もしいね☆……じゃあさ」

すると、彼女の額が俺の胸に当たる。そして、俺の右手を軽く掴むとそのまま自身の頭を持って行った。

「……怖かった。凄い見た目から怖そうな人でさ……いきなり大声で怒鳴られて……怖かった。何で怒られるか分からなかった。だけど接客しなきゃって思って……それを隠して……でも行動の一つ一つを怒ってきて……」

「……………」

「……だから耐えるしかないって。耐えればいつか終わるって……そしたらね。慧人くんが守ってくれたの。……本当に嬉しかったの」

「……………」

俺は無言で彼女の頭をなでることにする。

きつと、普通感覚なんだろうな。これが。理不尽に怒られ、その目で、声で威圧されて。それに恐怖し萎縮してしまう。

今井リサという少女は優しい。優しすぎるぐらいだ。常に周りに気を配ったりして、自分のことだけじゃなく、他を思いやれる。そんな優しい人だ。だからその優しさで他者を心配させまいと振る舞おうとする。……自分がつらい状況にあっても。

そしてしばらくした後、もう大丈夫ってことで手を放す。

「……そうそう慧人くん。ダメだよ？ そうやって色んな女の子に優しくしたら」

「はあ？ どういうことですか？」

「勘違いする女子が現れるかもってこと」

「別に。色んなヤツに優しくするつもりは更々ないですけどね」

「あはは、まあ、慧人くんの優しさは紗夜に向けるべきだよ」

「当たり前じゃないですか」

「おっと。清々しい返しだね。流石の一言に尽きるよ。じゃ、ここまで来れば大丈夫だから」

「じゃあ、また今度」

「慧人くんも気を付けてね」

手を振ってそのまま帰って行ったので、俺も自分の家の方に方向転換。まあ、結果オーライかな？ ……ん？ 何か忘れてるような……まあ、いつか。

「いやあ……慧人くんは危険だわ。自然にそういうことをやるし言うし……うん。やっぱり紗夜と早くくつつつけてあげないと……」

「お帰り。リサ」

「うん。ただいま……つて友希那!?! どうしてアタシの家の前で!?!」

「冬木からリサが壊れたって言われて……」

「こ、壊れたって……」

「何かあった? 目元が……」

「大丈夫だよ。無事に解決したから」

「そう?」

「それより友希那。確かこの後、猫特集のテレビがやるんでしょ?一緒に見ない?」

「ふふつ。なら一緒に見ましようか」



## 冬木慧人の秘密?

それは日菜との買い物中のことだった。

「ふっふふくん♪」

「上機嫌ね」

「えへへくだつておねーちゃんから誘ってくれたんだよう?」

「別に、お互いの暇な日が合ったから誘っただけよ」

今日は休日。Roseliaの練習もなく、日菜も仕事や練習は休みとのこと。丁度ギターに関して見ておきたかったので、リビングで暇そうにしていた日菜と一緒に出掛ける?と誘ったところ二つ返事で帰ってきた。あまりの返答の早さに驚きはしたが……まあ、これも日菜らしいかと思うことにした。

楽器店でギターを見ていく。日菜と並んでこうやってギターを見る。しかも偶然、ここで会ったわけじゃなく、私から誘って一緒に……なんて。一年……いや、半年前の私では思いもしなかっただろう。

「次はどこ行く?」

当初の目的は達成された。後は帰つてもいいのだが……せつかくの機会なので今日

は日菜に付き合おうかと思う。

「そうね……」

そうやって考えて何となくで歩いている。すると……

「……………? ねえね、おねーちゃん。あれって慧人じゃない?」

「そうね。相手は……………」

見知らぬ男性と共に歩いている慧人さん。ただ友達とかそういう雰囲気じゃない。一体何だろう? するとそのまま如何にも豪華なホテルへと……

「このホテルは……………」

確か、湊さんが事務所のスカウトを受け、それを白金さんや宇田川さんが聞いていたって言ったホテル……………だったかしら。Roseliaがあと一歩で解散するのは? と問題が発生した……………何だろう。そう思うと凄く嫌な場所に聞こえてしまう。まあ、あの時は……………思い出すのはよそう。結果として、あの出来事のおかげでRoseliaの結末が固まったのだから。

「よし! 入ってみようよ!」

「ひ、日菜?! 流石にダメよ。そもそも人の話を盗み聞くななんて真似をしたら……………」

「じゃあおねーちゃんは気にならないの?」

気にならない、というのは嘘だ。でもだからといって盗み聞きするのは……………うん。

「……………遠くて聞こえないわね」

中にあつさり入れたのはいいが、問題はここからだ。近づきすぎればバレる。でも遠すぎては聞こえない。

「…………おねーちゃんって、慧人のことになるとチョロいよね」

「何か言つたかしら？」

「なーんにも。何だかさ！これって探偵みたいだよね！」

「そうね」

どっちかというストーリーカーな気がするのはいきつと気のせいだろう。そんな中、会話が小声ではあるが拾える距離へと近づぐことに成功する。

『……………今日はこのくらいにしておこう』

しかし、色んな葛藤があつたせいで遅かつたようで、もう話は終盤も終盤らしい。

『…………最後に一つだけ。冬木慧人くん。君に残された時間は、君が思っているより少ない。では失礼するよ』

慧人さんと話していた男性はそのまま立ち上がり、ホテルの外へと出て行く。

ガンッ

一人残された慧人さんが机に拳を打ち付ける。そして、

『……………んなこと分かつてるつての』

そう呟くと立ち上がってそのまま出て行った……。

「……………おねーちゃん。今のつてどういふことかな?」

「分からないわ……………」

話を全部聞いていたら変わっていたかもしれない。でも、聞こえてきたあの言葉……残された時間が少ない? それにあの慧人さんの悲痛そうな、深刻そうな顔……………。一体何でそんな顔を……………?

「あの慧人が、おねーちゃん存在に気付かずスルーしたただなんて……………明日は嵐?」

「確かに……………それは不可解ね」

それに、あの慧人さんが私の存在に気付かなかったのも不思議だ。彼は私のことをいつもすぐに見つけて声をかけてくれる。彼曰く『雰囲気です。紗夜さんの存在感ですよ? 気付かないわけじゃないじゃないですか』と、彼が言うに、見えてなくても雰囲気で分かるとのこと。でも、そんな彼が一切気付かなくて、スルーしたただなんて……………

「よし! おねーちゃん! 調査だよ!」

「調査?」

「うん! 慧人に何があつたか突き止めよう! なんかるんつとききた!」

日菜の目が凄く輝いている。これは興味に溢れているって目だ。

しかし、私には戸惑いがあった。果たして、他人の問題に部外者が足を突っ込んでいいのだろうか？プライベートな問題に私は土足で踏み入ってもいいのか？五秒ぐらい悩みに悩んだ末……

「分かったわ」

日菜と共に調査することにした。

慧人さんが何か悩んでいるんだったら力になりたい。慧人さんが苦しんでいるんだったら助けになりたい。彼は前に私を支えてくれた。私の力になってくれた。今度は私が彼を支えたい。

だから何を思っているか知りたい。そのために私は動くことにする。

ピロリン♪

LONEの通知音が鳴った。

「日菜ちゃんから?」

「どうしたの? 千聖ちゃん」

今日はお仕事もお休みで丁度暇と言った花音と二人でカフェに来ていた。

二人で他愛もない雑談に花を咲かせ、一息ついた時に日菜ちゃんから珍しくLONEが。一体何の用だろう?

『ねえね! 最近慧人に変わった様子はなかった?』

.....。

「言っちゃ悪いとは思うけど、慧人が変わっているのっていつものことじゃない」

「千聖ちゃん声、声。全部漏れてるよ……でも、それは納得できる……かな」

花音が声に出ていると言ってきたのと、地味に花音も同意しちゃってるのをやんわりとスルーして、今言ったことと全く同じ事を白菜ちゃんに送る。

『いやそうなんだけどさ！そうじゃないんだよ！』  
どういうことよ。

『あの慧人がおねーちゃんをスルーしたんだよ！』

「「え？」」

LONEと一緒に見ていた花音と声が重なる。

「ど、どうしよう千聖ちゃん。冬木さんが……冬木さんが……」

「お、落ち着いて花音。一旦落ち着きましょう」

目の前でアタフタし始めた花音を落ち着けようとするが、私自身も心の底から驚いている。

ほ、本当に何があったのだろうか？あの男は紗夜ちゃんから神のオーラが云々で、気配を感じ取れるなんていう気持ち悪いことを言っていて、実際に何度もそのヤバい現場を目の当たりにした。

そんな慧人がスルーした？しかも、今の話から紗夜ちゃんが忙しかったから気を使つてとかはなさそうだし……え？どういうことなの？

『そっちじゃないでしょ日菜』

『あ、ごめん。そっちじゃなかったや』

何でわざわざ紗夜ちゃんが日菜ちゃんのLONEでツツコミを入れて、日菜ちゃんが訂正しているのだろう？仲のいい双子ね。どうして、慧人とい人のLONEをネタか何かだと思ってるのかしら？でも、何だろう？この二人って、最初は空気が悪いというか……うん。まあ、仲のいいってことはいいことよね。

「いや、今のことも充分衝撃を与えたのだけでも？」

「だ、だよね？あの冬木さんだよね？」

花音の言葉が地味に彼を傷付けるようなものになってるのはスルーしておく。

『慧人の残り時間が少ないって言われたの！』

「どういうこと？」

いや……え？いや、何の残り時間？

『多分それじゃ伝わらないでしょ……』

『あれ？もしかして伝わってない？』

いや、紗夜ちゃん？だから何で日菜ちゃんのLONEでツツコミを入れているの？それは裏でやってくれればいい会話で、私のLONEではやらなくていいことよ？どうしよう。紗夜ちゃんが最近慧人のせいでポケに走りがちな気がする。しかも本人は真面



目だからタチが悪い。

『とりあえず状況を教えてくれるかしら?』

『おねーちゃんと探偵の真似をしていたんだよ!』

……………日菜ちゃん? 会話って知ってる?

「どうしましょう花音。何が起きているのか分からなさ過ぎて、逆に興味出てきてしまったのだけど」

「うん……………何だか私もそんな気がしてきた。一体何があつたんだろうね?」

最初はたいして興味なかったけど、何だろう。つかめなさすぎて興味がわくというか……………そう。目の前に箱があつて、その箱の中身に関する情報を絶妙な感じに教えられたせいで興味がわくというかそんな感じだ。つまり、興味津々である。

『LONEだと罅が明かないからこっちに來て一緒に話さない?』

『おお! 千聖ちゃんからのお誘いだ! どうする? おねーちゃん!』

今更ですが、これは私、白鷺千聖と日菜ちゃん、氷川日菜の個別のチャットです。三人目は居ません。

『そうですね。行ってみましょう』

紗夜ちゃん? お願いだから日菜ちゃんの暴走を止めて頂戴? あなたがそつち側に行ったら終わりよ? え? まさか二人で無言縛りとかしてる? 人のLONEで遊ばない

でほしいのだけど。

『やったー!』

『それで白鷺さん。私たちはどこへ向かえばいいのでしょうか?』

……紗夜ちゃん? あなたとも交換したはずなのだけど……ね? 何で日菜ちゃんのやつで打っているのかしら?'

……もういいわ。考えるだけムダね。

『カフェね。地図を送るわ』

『ねえね、リサちーも連れてきていい? リサちーにも話したら状況が読めないって言うててさ』

でしようね。こんな会話で状況を正しくつかめる方が凄い。

花音の方を見ると頷いてくれている。

『もちろん』

『やったー! 皆でお茶会だあ!』

『違うでしょ日菜。慧人さんに関わる重要な会議よ』

『ええー? それはさ、ほら話の肴というか、ネタというかで……』

『いいえ。慧人さんの話をその程度に扱うなんて私が許しません』

『ぶーぶー。あ、でもその話が終わればお茶会だあ!』

『そうね。それは認めましょう』

『わーい！ありがとうおねーちゃん！』

『だ、抱きつかないでよ白菜』

「……………彼女たちっていつから阿呆になったのかしら？」

「千聖ちゃん……………本音。本音が漏れちゃってるよ」

電話なら分かる。近くにいる紗夜ちゃんの声が聞こえるところか。いや、これ文章。え？なにあの双子。わざわざ、スマホを渡しあつてこんなやりとりしているの？阿呆なの？ねえ阿呆なの？というか、わざわざなんで私とのLONEでやっているの？これ、日菜ちゃん側しか発言していないから相当シニールよ？

これも全部慧人のせいかしら。(責任丸投げ)

「どうやら、面白そうなお茶会になりそうね」

「……………うーん。でも、本当に何があつたんだろうね……………」

こうして私たちは彼女たちが合流するまで待つことにしたのであった。

## 冬木慧人調査隊結成

「なるほどー……そんなことが」

白鷺さんと松原さんがお茶をしていたカフェに、私、日菜、今井さんの三人が合流した。

そして、私が慧人さんに関して見たことを説明する。日菜に任せたら……うん。正しく伝わらなかったから仕方ない。

「想像以上に深刻そうな話ね……」

「何かもつと軽い感じだと思っていたよ……」

それは確かにある。あんなに悲痛そうな顔をして一体何があったのか。

「そもそも本人に聞けばいいんじゃないの?」

「慧人さんですよ?絶対にはぐらかします」

あの人はそうするだろう。他人の弱いところを見て、支えていくような優しさはあるが、自分の弱味を他人に見せることはしない。心配をかけまいと動くに決まってる。

「確かに。あの男は、絶対にそういうの誤魔化すわね」

「心配させたくないからですよね……」

「うーん。話してくれないと協力できないのー!」

「だから、まずはここ最近で慧人さんに関して変わったことがないか?というのを知りたいんです。どんな些細なことでもいいのでまずは情報を集めていかないといけないと思います」

「地道な証拠集めが真相へと近づくことになる……うん!きつとそうだね!」

というところで、最近の彼の行動を思い出してみるが……うん。昨日まで私が近くに居れば必ず話かけてくれましたし……何も異変はなかったです。

「いつも通り迷った私を連れて行ってくれたし……何もおかしいことはなかったよ?」  
「そうね。私の話にも付き合ってくれたわ」

「アタシも特にないかなー……一応他のメンバーにも聞いてみるね」

「じゃあ、ハロハピの皆には私が聞くね」

「彩ちゃんたちには私が」

というところで、情報を集めるべくここに居ない知り合いたちに今井さん、松原さん、白鷺さんが聞いてみる……が、多くの人はいつも通り(奇行に)走っていたとか特に変わった様子はなかったみたい。まあ、あの人は変わっていることがデフォルトだから……。

「んーやっぱりほとんど収穫なしかー……ん?燐子のコレは気になるんじゃない?」

「どれどれー?」

そう言つて見せてくる画面。えーつと？

『特に思い当たる節はないですね。あ、でもNFOでのKeiの最終ログインが1週間以上前というのは気になります。今まで三日以上開けたことがなかったので……』

「NFO?」

「Kei?」

「えーつと、NFOというのは慧人さんや白金さんがやっているゲームのことです。で、Keiというのは慧人さんのプレイヤーネームですね」

「あ、おねーちゃんがやつてるゲームのことだ！なるほどー慧人とやりたいから続けているんだね！」

「へえー、そういうやあこが紗夜も結構ログインしているって言つてたなあ。なるほど。はまつたんだね☆」

「い、今はそれは関係ないでしょう！重要なのは慧人さんがゲームをログインしていない現状です」

ゲームができないほど忙しいのか、精神的な余裕がないのか。いずれにしても重要な足掛かりにはなるんじゃないだろうか？

「あ、美咲ちゃんのコレも気になるかも……」

次は松原さん。見せてくれた画面には、

『あ、一つ思い出したんですけれど。先週なんですけど冬木先輩。商店街を大人の男の人と歩きながら話してましたよ。会話の内容はすみません。分からないです』

ふむふむ。大人と話していた……

『もしかしたらあたしたちが見たの人じゃない？ほら、今日はって言ってたし何度も会っているかも』

『その線は充分にありそうね』

『で、でも別の人も……』

『今は情報が欲しい状況。奥沢さんが言っている大人が、私たちが見た人でなくとも、大人の人と歩きながら話していたというのは貴重な情報よ』

『確かにね。慧人に知り合いの男性の大人……あんまりイメージが結びつかないわね』

先週大人の人と話していた。ゲームのログインが滞っている。……もう少し。もう少し情報が欲しいところだ。

『あ、彩ちゃんから来ているわ………へえ。これは中々面白い情報ね』

段々と白鷺さんが乗り気になっっているなど思いながら、画面を見せてもらう。

『そう言えばこの前ね。何かまりなさんと真剣な顔で話し合ってたよ』

まりなさん？まりなさんということは……

「「バイト？」」

全員の意見が一致する。まあ、慧人さんの音楽が壊滅的で絶望的……コホン。ちよつとアレなため彼が音楽に関するあれこれできまりなさんを頼つたとは思えない。つまり、バイトに関するこの可能性が一番高いです。

「これはこれは。まりなさんに事情を聞く必要がありそうだねー」

「おお！遂に関係者への聞き込みだね！るんってしてきたあ！」

「その言い方だと刑事ドラマを連想させるわよ……」

「で、でも。あながち間違つてないと思うよ……？」

「そうと決まれば行くわよ」

「あ、その前にあたしたちの名前決めておかない？」

「名前？」

「ほら、この五人を纏めた名前だよ！名乗るタイミングがあつたら使いたいじゃん！」

日菜の突拍子もない発言。でもまあ、確かに。そういうグループ名を作っておいてもいいかもしれない。

「どうしようね？」

すると今井さんがこつちを見てくる。名前を決めると目が訴えかけているようだ。

「そうですね……『冬木慧人調査隊』はどうでしょう？」

「そのまんまね……」



「そのまんまです……」

「でもまあいいんじゃない？ほら、目的とかも分かりやすいし」

「じゃあ、おねーちゃんは隊長ね。あたしは副隊長がいい！」

「なら私は参謀と言ったところかしら」

「んー……じゃあアタシは交渉担当！」

「えと、えと……私はどうしよう……」

「花音ちゃんは癒し担当で！」

「ふええ……」

瞬く間に各々の役割が決まった。……松原さんの癒し担当はよく分からないがまあいいでしょう。

「では、C i R C L E へ向かうわよ」

「隊長先頭よろしく」

「わーい」

「花音。あなたは私の隣ね」

「た、多分C i R C L E には辿り着くよお……」

松原さんがどこかに行きかけて、白鷺さんが止めてとということもあったが、無事にC i R C L E にたどり着いた。……行き慣れている場所なのに何故かいつもより緊

張する。何故だろう。

「まりなさん！」

「リサちゃん、千聖ちゃん、花音ちゃんに日菜ちゃんと紗夜ちゃん？何だか珍しい組み合わせ

わせだね」

「あたしたちは今『冬木慧人調査隊』を結成したんだよ！」

(わあ……冬木くんお疲れ様)

何だろう。一瞬にしてまりなさんの見る目が優しくなった気がする。気のせいだろうか。

「単刀直入に聞きます。慧人と真剣な顔して話していたそうですが……」

「ああ……そのことね」

「な、何かあつたんですか……？」

「あの慧人くんが真剣な表情……バイトを辞めるとかですか？」

「そこまでは行かないかな。……まあ今年で閉店する予定だし12月の終わりには自然と辞めることになるけど」

どこか遠い目をするまりなさん。ああ、CIRCLEが今年で閉店と言うのを完全に忘れていた。いや、今はそっちよりも……

「何かね。今後、もしかしたら今みたいに来ることが出来なくなる……って言ってたの。まあ、冬木くんって暇人って自称していて、急な欠員が出たときも凄いい助かってたんだけどね」

とは言えここでのバイトも終わる日は近いんだけどね、と補足したが……

「理由は？理由は何か聞いてないんですか？」

「それがね、『ちよつとありまして……』としか言わないの。凄い暗いというかそんな感じはしてたけど……全部聞き出すような真似は出来なかったかな」

「暗い……？」

「まあ、高校生だしね。こつちとしても『理由を明確にしないと受け付けない』なんてブラッくなこと言わないし」

「妙ね。あの男はそういうところはしっかりしていたはず」

「言えないことか言いにくいこと……なのかな？」

「でも、不思議だねく何かモヤモヤしているよ」

「だよね。もしかしたらとか、理由に関しても曖昧にし過ぎかな」

「何だろう？そこまで言いにくいことなのだろうか？うーん……もしかして、私たちが見たことと関係している？」

「そもそも、あの男は自分について多く語らないわね」

「ねー。不思議がいっぱいって感じがする」

「そうかな？紗夜には話しているんじゃないの？」

「いいえ。ただ、テストの点数とか成績は報告してくれますよ」

「……えつと、保護者に見せる感じかな？」

そう言われると確かに気になる。私たち側が自分たちの事情を話しすぎな気もするけど、慧人さんから高校での話はほとんどしてくれないし、中学以前なんて未知としか言い様がない。

そもそも彼がサッカーやっていたことは、本人が言ってたわけではなく、走っているのを見かけたから知った。料理の腕があとまであるのは実を言うと最近まで知らなかった。NFOも白金さんたちとやるって話が上がるまで知らなかったし……何だろう。自分のことを自慢し過ぎるのはどうかと思うけど、謎にし過ぎるのもどうかと思う。

「そういうえば、何で冬木くんを調査しようとしているの？」

「どうやら、見知らぬ男と意味深な会話をしていたのを紗夜とヒナの双子が目撃したらいいんですよ」

「そこから、何か問題に巻き込まれていないか調査すべく私たちが動いているというわけですよ」

「問題を抱えているなら力になりたいもんね……！」

「ああーそういうことなんだ。てつきり浮気調査とかそつちかと……」

「そつちの方が楽しそうだよね！」

「全然楽しくないわよ」

「浮気ってそもそも結婚していないでしょうに……。それにあの慧人さんが浮気するとは思えないけど……。」

「ん？」

「どうしたの？ 日菜」

「いやさーふと思っただけけど、何で慧人ってここでバイトしてるの？ 慧人って、超絶音痴で、楽器も一切弾けないじゃん」

「うわあー……。全部事実だけど可哀想な言われよう」

「それにさー音楽もあんまり興味なさそうだよ。あたしたちがやっていることは興味あっても、それ以外のバンドとか全然知らないじゃん。機材も構造とか直し方を知っていても、名前とかさー言うのはからつきしだしさ。じゃあ、何でここなんだろう？ バイト先なら他にもあるのに」

「言われてみれば不思議だよね……」

「そうね。何でここでバイトしているのか……」

「ああ、それなら知ってるよ」

と、まりなさんが答えてくれる。

「えっと、先輩からの紹介って感じなの。夏には自分が受験で抜けるから、自分の後釜ですって、去年の春に連れてこられてたのが冬木くん。何だっけな……。ああ、冬木くんが

クールビューティー教に染まった元凶って言われてた人だよ」

「「え？その人すごい気になる」」

「……………」

……………ああ、あの人のことか……。先輩さんでゲームではぼんちやんさん……。どうやら今井さんにも思い当たる節があつたようで……。絶対その人だ。

「まあ、その彼は『コイツは目つきが悪く、歌えない、踊れない、弾けないの三拍子揃ってますが頭はいいです』って、まあ面接したけど特に問題なかったから採用したんだよ。いやあー仕事覚えはいいわ、機材調整できるわ、絶対音感持つてるわで色々と助かった」

先輩さんってプレゼン能力はあるのだろうか？接客業で目つきが悪いとか絶対マイナスになってしまうと思うのだけど……。いや、それだけじゃなくて、音楽関係のバイトでその三拍子を推すのもアウトだと……。

「あははく確かに慧人はダンスとか向いてなさそうだよね」

「音に合わせるのがまず無理でしょうね」

「で、でも……。ちよつと前にね。ミッシェルの隣で着ぐるみ着た状態でバク宙とかしてたよ」

「うわあ……。流石、身体能力高いなあ。リズム感さえあれば誘つたのになあ……」

「松原さん。それってライブで、ですか？」

「ううん。美咲ちゃんに頼まれた、風船とかピラ配りのバイトの助っ人で。木に引つかつた風船もピョンピョンって跳んで取っていたよ……」

「……何やってんのよあの男は……」

「慧人さんらしいと言えづらいですよ……」

「こころちゃんに見つかつてなくてよかつたって言つてた」

「だよね、絶対に強制勧誘されてたよ」

と、何か脱線した気がするも、とりあえずここでの情報を手に入れることは出来た。……うーん。でも、もう少し彼の話を聞きたい気がします。

「あはは……まあ、後は面倒な客がやってきたときにはとりあえず彼を出せば丸く収まるから物凄く助かつてるよ」

「それって……？」

「いちやもんついたり、強く言ってくる人も冬木くんが怖いみたいでね……ぶっちゃけ、恐れられているって噂もあるくらい」

「確かにね、この前、アタシも面倒な客に絡まれたとき助けてもらっちゃった」

「今井さん。それは本当ですか？」

「う、うん……でもどうしたの？」



「いえ……絡まれて大丈夫だったんですか？」

「相手の特徴思い出せる？消しましょうか？」

「ち、千聖ちゃん……さすがにそれは……」

「こころちゃんに言えば解決だよ！黒服さんがシユパーンってやつつけてくれるよ！」

「「確かに」」

なるほど。確かにあの方たちなら抹殺とかしてくれそうですね。

「あははく大丈夫だよ。慧人くんと東雲くん……えつと、千聖を天使様って言ってた」

「ああ……あの人ね」

「そうそう。二人と話したら謝ってから逃げるように帰って行つたよ」

「話って……？」

「えーつと『お、お前ら……！ウチのリーダーをやった……！』とか『お前らが居るなんて知らなかったんだ……！』だったっけ？詳しいことは覚えてないけど、何か二人の手が肩に置かれただけで震えていたよ」

（それ……絶対に昔に何かあったやつよね）

「まあ、慧人って威圧感あるよねく何かピリピリするくっていう感じ？」

「あははく確かにね。あれはヒーローが助けた！っていうより魔王が排除したって感じ

だったし」

「慧人さんに正義とか似合わないですからね」

「でも、助けた側の方なのに悪になってるんだね……」

残念な話になりつつあるけど、何とつかあの人らしいと言えづらい感じだ。そう思うと何だか不思議な人だ。悪い人じゃないのに、悪という言葉の方が似合ってる。

それにしても、理由をはぐらかす……そして、バイトに行けない……NFOといい、何かに追われているのだろうか？ただ、課題とか宿題で……というのはなさそうだし……「あ、モカからだ。……おっと、こりや雲行きが怪しくなる情報かも」

そう言いつつ、見せてくれた画面。そこに書かれていたのは……

『そーいえば、けーとさんこの前びよーいんに居ましたよー。何でも手術したところかー』

病院……手術した？

言えない理由……残された時間が少ない……病院……手術……まさか……いや、ないと信じたのが……全て繋がってしまう。

「……………何か命に関わる病気とか」

「……………っ！」

最悪の可能性に至ってしまう私たち。  
そして、次の日。私たちはある行動を起こすことになるのだった。

## 調査隊、ミッション開始

20XX年。○月×日晴れ。

私たち『冬木慧人調査隊』は今。今世紀最大級のミッションを遂行しようとしていた。

『隊長！慧人くんを見失いました！』

『ふええ……ここどこ？』

『はあ……待ってて花音。今迎えに行くから』

『あ、あっちにるんっ！つてするものが……』

……この隊。大丈夫かしら？

調査隊結成翌日の午後3時過ぎ。それは松原さんからの情報提供がもとだった。

「……………なるほどね」

昨日の今日で集まった五人。

何でも一人で買い物に出た松原さんは案の定と言うべきか道に迷って帰れなくなつたそう。そこをたまたま慧人さんが通りかかつて、道案内をしてもらつたそう。まあ、このこと自体はよくあることだから特別つて訳ではない。一週間に一度は絶対に起きるイベントだから問題はないのだが………凄い松原さんが心配になる。

ただ、慧人さんに関する問題はそこからだ。何でも、彼が急に脇腹あたりを抑えて痛そうにしていたとか。本人は平気つて言っていたらしいけど心配になり、こうやって情報伝達から集合の流れになった。

「うーん……あ、たまにだけど抑えていなかった？」

「……でも、普段は特に何も反応ないわよ」

「だよなーつつついたこともあるけど別に痛そうにしていなかったよ」

「えつと……でね。この後、駅に用事があるって言ってる……」

「用事……ねえ」

「もしかしたら、関係あることじゃない？」

「よし！じゃあ、尾行しよう！」

「『尾行!』」

「うん！もしかしたら、昨日の人と会うかもしれないし！というか一層のこと本人に直撃しようよ！こうやってチマチマやっても真実は分からないしきさ！」

日菜がそう言うが……確かにそうかもしれない。こうやって調査しても真実にたどり着くとは限らない。それに、時が一刻を争うのであれば……うん。いいかもしれない。

「そうだね。よし、じゃあ行ってみようか」

「駅前にいるんだつたら手分けして探せば見つかるかも」

「そうね。幸いこっちは五人居るわ。それに紗夜ちゃんに反応して簡単に釣れるかもしれないし」

「なるほど……それはありますね」  
「じゃあ行ってみよー！」

というところで、慧人さんを探索しているが先ほど今井さんが見失ったらしい。でも、

見失つたとしてもまだすぐ近くに居るはず……ところで松原さんは何処に迷つたのだろうか？

慧人さんを搜索して時間だけが経つていく……ここまで見つからないともう駅前には居ないのではと思えてしまう。

『切符売り場と改札を見張つてるけど誰も来ておりません！』

『うむ。そのまま見張つていてくれたまえ』

『了解であります！ヒナ副隊長』

『とりあえず花音を保護したわ。ここからは一緒に行動するわね』

『ふええ……ごめんね……』

『こちららも慧人さんらしき人物は見当たらないですね』

電車は使つてないそうだが……うーむ。どこに居るのだろうか……？五人で探しているのに見つからないなんて……

「紗夜さんじゃないですか。どうしたんですか？」

「……あ、慧人さん。いえ、人を探して……!？」

気付くと慧人さんが隣にいた。あまりのことに驚きを隠せない、ま、まさか向こうからやつてくるなんて……

「リサ姐のことですか？それならさつき、改札の方で見かけましたよ」



「そ、そうなんですネ……」

「それにしても偶然ですね。日葉に千聖に花音……まさか、五人もこの駅前で見かけるとは」

「へ、へえ。そうなんですネ……」

全員バレているんですけど？嘘でしょう？今井さん以外は発見の報告がなかったと思うのだけど。

「け、慧人さんは何故こちらに？」

「ちよつと人を待つ？って感じですね……ん？ごめんなさい」

スマホを見る慧人さん。すると苦い顔をして……

「すみません。用事できたんでこれで失礼します」

そう言つて、歩き出してしまふ……駅とはまた別の場所に。

「……つて報告しないと」

すぐさま冬木慧人調査隊というグループで発言する。

『慧人さんと接触しました。駅前から移動するみたいですよ』

『ええ!?!おねーちゃん会つたの!?!』

『でも、肝心なことを聞く前に別れてしまいました』

『行く先は?』

『分からないです』

『一旦紗夜と合流だね。慧人くんは見失っていない？』

『そこは心配ありません。ただ、私だと尾行に気付かれるかと』

『大丈夫よ。見失ったときは花音投入よ』

『さ、流石に無理だよ……』

白鷺さんは松原さんには甘いのか辛辣なのかどちらなのだろうか。

そんな疑問を持っていると、最初に日菜がやって来た。

「慧人は？」

「今はまっすぐ歩いているようね」

「あれだねーよし、少し近づいていくね」

「ええ。お願い」

「任せて！」

日菜が移動を開始する。すると、今井さんもやって来る。無言で指さすとOKとやってから、そのまま日菜の方へと走って行った。

そして、白鷺さんと松原さんがやって来る。距離的に大分離れたはずなので、私も二人と共に尾行を開始する。

「日菜ちゃんとリサちゃんの二人が見失うことはないと思うけど……」

「で、でも何処に向かったんだろう……？」

「何かがおかしいですよね……駅前で人を待つって言ってそこから移動するなんて……」

しかも、この五人の存在には気付いてたし……まさか、尾行に気付かれた？ いや、あくまで偶然を装っていたはずだし……

「ただの偶然……って信じたいわね」

「う、うん。例えば入れ違いになつたとか……」

「ええ。……でも相手があの慧人さんですから」

「……………」

常識が通用しない相手……いや、でもさすがにそんな、たまたま知り合いの女子五人が駅前に居たということだけで尾行を警戒はしないでだろう。

すると、慧人さんが曲がったようで少しだけ時間を空けて日菜と今井さんも右に曲がる。そして十数秒後、

『緊急事態発生！慧人くんを見失った！』

今井さんからの連絡。私たちは急いで二人のもとに駆けつけた。

「……本当に消えたみたいね」

細い道。両側には建物が並んでいるが、どうやらここで見失つたらしい。しかし、不

思議なのは見失うようなものはないはず。

「撒かれた？」

「その可能性は高いよね……」

「こんな何もないところでアタシたちが見失うとはね」

「完全にやられたね〜どうする？おねーちゃん」

「……一旦、落ち着いて話せる場所に移動しましょう。もし彼が本気で逃げているのであれば私たちでは見つけることは不可能です」

本当は今すぐ探しに行きたい。でも、その行為そのものが無駄なものだと分かりきっている。駅前ですらこちらには五人居て、発見出来たのは二回。しかも向こうにはこちらの顔が全員割れている。それに慧人さんの身体能力は化け物並。取り押さえることも、捕まえることも出来ないだろう。齒がゆいが探して走り回ることには得策ではない。

そういうわけで近くの公園に移動する。既に日は沈んでおり、改めて日が沈むのが早くなっただと思うこの頃。時計を確認するともうすぐ午後5時。集まってから約2時間。私たちの空気は少し重くなっていた。

「そこまでして隠したいことなのかな……?」

「そうとしか考えられないでしょうね」

「あはは……ここまで来るとね」

人には抱えている秘密があるだろう。多い人も居れば少ない人も、それが知られても支障ない秘密もあれば、知られてしまえば……という秘密もある。

じゃあ、今回彼が抱えている秘密はどうだろう。知られても支障ないならここまで徹底的に隠すだろうか？私と日菜が昨日、あの場所での会話を聞いていなければ私たちはそもそも、何かを抱えていることに気づけただろうか？ここまで調査し、疑問点をあげることが出来ただろうか？

「……………」

「おねーちゃん……………」

手を握り締める力が強くなる。

好きな人の全てを知りたい、好きな人には隠し事をして欲しくない。でも、それは傲慢な考えだ。それは分かっている。じゃあ、私は一体彼の何を知っているのだろうか。分からない。そもそも私は彼を見ていたのだろうか。しっかりと見ているのだろうか。駅前で話をしたときに、私は何か違和感を感じただろうか？分からない。何も分からない。

じゃあ、今の私にできることは何なんだろう。彼の秘密が大したものではないことを祈ることだろうか？でも、私たちが調べたこと、発覚したこと、全てに理に適うようなものが果たしてたいしたことがないものなのだろうか？

無力。何もできない苦しみで息が詰まりそうになつてしまう。時間は残つてないかもしれない。それなのに、私は……………何も打つ手がない。

「……っ！皆。こっち」

すると白鷺さんが何かに気付いたようで、公園の周りがある、木や草の塊？みたいなところに隠れ始める。慌てて私たちも彼女の近くに行つて身を潜めるが一体……？

『この前のリベンジだ』

『いや、早くねえか？いつもよりも早くねえか？』

『暇だったからな』

やつて来たのは男性二人。……つてこの声は……慧人さん？それに多分アレは……

「あれは、東雲くんだね」

「あのバチバチやつてた人でしょ？」

するとサツカボールを蹴り始めた。お互いにパスをしているようだけど……

「どうする？今なら捕まえることできそうじゃない？」

「で、でも逃げられたらその……」

「チャンスが来るまで様子見……かな？」

何だろう。最初は慧人さんを尾行し、直撃して情報を得ようとしていたのに、だんだん慧人さんを捕獲して吐かせようとしている。確かに、ここまで来てしまった以上、もう手段は選んでいられないような……

『それにそろそろ決めたんだろ？』

『……まあな。さすがに決めねえとマズかったし、決心した』

チャンスを伺うこと数分。なにやら重要な会話をしている。もしかして、昨日のことを言っているのだろうか？

『というか、昨日も直接来たんだろ？』

『だからさっさと決めたんだよ』

やっぱり。昨日のことって言うアレしかない。他の四人も察したようであらう。てくれる。方針としては一旦見ていることにするようだ。

『で？答えは？』

『ああ、向こうには伝えたけど……受けることにするわ』

『まあ、そうするだろうな』

『ただ、もしかしたらこれが最後かもしれないけど……』

『そんなわけあるかよ。オレたちの勝負は終わらねえ。逃げるなんて許さねえぞ』

『……それもそうか。というか、よく考えたら最後にならねえわ』

『おい』

笑い合う二人。でも、最後って一体何のことなの……？

『……本当はもう少し粘りたかったけど……さすがに限界だったわ』

『……そりゃそうだろ。むしろここまでよく耐えたなって思ってるぞ』



『そうか?』

『そうだわ』

『よく耐えた方か……』

『ああ……つてお前、そのこと他の奴らに言ったのか?』

『……言つてないな』

『……はあ、どうするんだよ。急に消えたりしたら——』

次の瞬間、私の身体は動いていた。そして、彼に聞こえるような声で問いかけた。

「慧人さん! 一体どういうことですか!」

何から聞けばいいか分からなかった。

最後とか限界とか消えるとか、そういう言葉が全て嫌な響きに聞こえてしまう。最悪の想定と、それを否定する気持ち。全てが頭の中でぐちゃぐちゃになってまとまらない。

「紗夜さん……? それに日菜、リサ姐、千聖に花音も……?」

私に続いて出て来た四人を見て驚愕をあらわにする。それと同時に、今の会話が聞かれてしまったということに気付いたのか、ちよつと苦い顔をする。

「……答えてください。慧人さん……あなたは一体何を隠しているんですか……?」

そして、彼は深くため息を付くと、あまり話したくはなかったと言う前置きと共に、彼

は……彼は。

## 真実とは時に思いがけないものである

「実は……サッカーの日本代表候補に選ばれていて……」

その言葉は私たちの予想を色んな意味で超えるもので……

「……はい？」

「Uー18だった気がするけど、まあまだ候補だから、あんまり知られなくなかったんだけど……」

私たちの頭には大量の疑問符が浮かんでいる。だって、その答えでは今まで私たちが集めてきた情報と一致しない点が多すぎるからだ。

「……ちよつと待ちなさい慧人。こつちで、情報を整理するわ」

ということ、白鷺さんの周りに集まって情報を整理し始める。

「え？え？何々想定外もいところの返しが来たんだけど？」

「でも、嘘を言ってるようには思えないよ……？」

「じゃあ、どうしてこんなことが起きているんだらうねー？」

「分からないですね。何か余計に混乱したというか……」

「とにかく、この際だから一個一個問い詰めていきましよう？」

何というか……え？どうなっているのだろうか？

『なあ、冬木……まさかあのお方は天使様じゃ……』

『……そうだな』

(しまった……千聖の奴。何でこんなところにいるんだよ……！)

『で、お前何やらかしたんだ？』

『何にもやってねえよ』

向こうでも何か話をしているようですが、今は関係ありません。

「どうする？とりあえず、ここで問い詰める？」

「暗くなっちゃったし……ここでもいいのかな？」

「店の中に入りましょう。そうすれば逃げられないわ」

「あ、おなか空いてきたしご飯食べようよ！」

「いいですね。それで行きましょう」

とりあえず、逃げられない場所に連れて行くことが決定した。

「えーつと、東雲さんでしたよね」

「……っ！その通りです天使様」

「で、天使様……コホン。その慧人をお借りしたいのだけど、よろしくて？」

「どうぞ。煮るなり焼くなり好きにしてください」

「ちよっ!? お前、マジで何を言っているの!？」

「ありがとうございます」

「いえいえ。天使様のお役に立てて何よりです」

「そうですね。あなたも来てください。慧人が口を割らなかつたときの要員として」

「御意」

((い、一瞬で手懐けた……!))

((……なるほど。モノは使いようね))

一瞬だった。その姿は従者と姫……いえ、従順なペットと飼い主。あまりの光景に二人以外全員固まってしまう。白鷺さんが恐ろしく見える……!なんて人なんでしょうか。

「では、いきましよう? 慧人」

「そうですね。慧人さん」

逃がさないように腕に抱きつく。決して、彼と触れ合いたいからではなく、あくまでこの方が合理的だからだ。そうだ間違いない。

「……はあ」

何だか慧人さんが疲れて見える。どうしたのだろうか?

コンコン

「これより冬木慧人の尋問を始める」

場所はファミレス。7人居るのでリサ姐、日菜、花音、千聖の4人と、東雲、俺、紗夜さんの3人でテーブルが隣同士ではあるが分かれている。席としては、俺の隣に紗夜

さん、通路を挟んで千聖に花音。机を挟んで向かいに東雲で、通路を挟んでリサ姐に日菜である。本当は日菜が紗夜さんの隣で、俺が東雲の隣という予定だった。しかし、紗夜さんが離れるって言ったならシユンとしていて、あまりの可愛さに俺と日菜がやられてこの形である。

「罪人、冬木慧人」

「ちよつ、俺が何の罪を犯したって言うんだよ」

「紗夜ちゃんを心配させた罪」

「くっ……殺せ」

「潔いね」

「はいはい。じゃあ、慧人くんから今回のこととの状況説明。さっきの代表候補に選ばれた云々に至るまでの過程を説明してほしいかな」

「はあ……了解です。事の発端？と言うのは、皆も見に来たあの時の試合、東雲とやりあつた試合です」

「あの凄かつたやつだね……」

「そうそう。実はあの大会では、ここにいる東雲の実力を見るためにスカウトマンなり、まあ、そういう系の人たちが何人かいたらしいんですよ」

さらに辿ると東雲は前に大きな大会で活躍（尚ウチの高校は予選敗退である）してい

たらしい。東雲はトレセンとか行っていないし、名前が知られていない。無名のエースと言うことで実力を測りに来たそうである。当然ながら、俺はそれを後に聞いていたため、そんな人たちがいるなんて一切知らなかったが。

「東雲たちとの試合と次の試合を見て、俺にも声がかかったわけですね。……まあ、俺は次の日はさっさと帰ったために後日、直接来られる形でしたが」

「ちなみに東雲さんは？」

「次の日の決勝リーグの後、呼ばれて二つ返事でオッケーしました。まだオレも代表候補に選ばれただけです」

「なるほどね。じゃあ、昨日だったり、先週の人は……」

「ええ。そういう方たちとお話してましたね……はい」

「じゃあ、何であんなに渋っていたの？」

「そうだよね……日本代表なんて凄いの……」

「うんうん☆せつかくのチャンスじゃないの？」

タンッ！

俺は軽くテーブルを打ち付ける。

「あなたたちは何も分かってない……!」

「ええ、分からないわ。だから渋っていた理由を教えてください」



「いいですか？日本代表候補ということで、少し先ですが選考会を兼ねた強化合宿が行われるんです。平日貫通の4泊5日です」

「それがどうかしたのですか？」

「その期間紗夜さんと会えないんですよ！俺にとつては死活問題です！」

「（うわあ……想像以上にくだらない理由だった……）」

「さらに、もし選ばれた場合、海外遠征などで会えなくなってしまう日が生まれてしまうんです！」

「（ここまで来るといつそ清々しいなあ……流石過ぎる……）」

「つて言う阿呆な理由でずーっと渋ったんですよこのアホは！」

「ええ……これは控えめに言つてド阿呆ね」

「ホントだよ！いやあくバカだね！慧人！」

「日菜。もし、日菜が約1週間、紗夜さんに会えないと言われたら？」

「……皆！慧人を責めるのはよくないよ！仕方ないことだよ！」

「凄い掌返しだね！ヒナ」

「リサ姐も、友希那さんと会えなくなると言われたらどうします？」

「……なるほど。慧人くんの気持ちは分からなくはない」

「ど、どうしよう……妙に説得力のある言葉のせいで冬木さんを擁護する人が増えてい

く……」

「こういう時でも慧人って厄介よね……ホント」

日菜トリサ姐が味方に付けばこっちのものだ。……そう。1泊2日程度なら問題ないが1週間となるとちよつと長い。しかも不定期とか……サヨニウムの摂取が不足してしまう。それだけは避けられないといけないのだ。

「……もしかして、慧人。CIRCLEのバイトがいけなくなるのはサッカーの方が忙しくなるから。悲痛な表情を浮かべていたのは……」

「紗夜さんに会えるタイムミスを失うからですかね」

「……………何とかというかごめんなさい。平常運転ね、あなたは」

「??」

俺はいつでも平常運転だが？

「慧人さん……」

すると、静かに話を聞いていた紗夜さんが口を開く。そして、俺の膝の上を通り、通路へ。そのままドリンクバーの方に向かった。

ちなみにだが、全員注文は終わらせ、飲み物も取ってきている。別に紗夜さんのが空になったわけでもないし……一体何故？

「どうどう」

するとシユワシユワいつている炭酸の何かを運んできた。コーラ……にしては色が薄いような。

とりあえず、俺の膝の上を通って席に着くが……

「飲んでください。怪しいものは入れていません」

「いえ、色が怪しいんですが。後、そういう前置きがあると余計に不安になると——」

「私のついでものは飲めませんか？」

「——いえ、飲みます」

何故か、怒りを感じるが……まあいいや。死ぬわけでもあるまいし。そう言つて飲み始め、

「……っ!?!」

あまりのマズさに吐きそうになる。この不味さは対Roselia決戦兵器の比じゃない……!—

「紗夜さん……コレ」

「全部飲んでください」

「……」

「それとも飲ませてほしいですか？」

目のハイライトが消えている。ヤバい。本気で殺す気だ……ええい。クソマズくて

吐きそうだが、飲めないわけじゃない！

そして全部飲みきる。

「……………紗夜さん……………何を混ぜたんですか……………！」

「えーつと、アイスコーヒーとカルピスソーダとコーラと烏龍茶と……………何か適当に押し  
ました」

「……………どうしてそんな頭の悪い小学生みたいな真似を……………！」

「バツです」

「はい？」

「慧人さんに与えるバツです」

言っている意味がよく分からない。

「いいですか？寂しいのは私も同じですよ。一日とかじゃなくて一週間とかの長期間会  
えなくなるのは、あなただけの死活問題じゃありません。私にとつても死活問題です。  
分かっていますか？私だって慧人さんと会えないと、通称ケイトニウムが摂取できない状  
態にあり、不足し、欠乏状態に陥ってしまうのです。ケイトニウム欠乏状態がどれだけ  
危険かお分かりで？」

「……………なあ、あの二人って付き合ってるのか？」

『ううん。付き合っていないよ』

『そもそもケイトニウムって何よ』

『あはは……触れないであげよ?』

『うーん? おねーちゃんって絶妙に壊れてるよね』

「ですが私が。慧人さんが自分の可能性を狭めてしまうことを、許すと思えますか? 確かに会えなくなるかもしれない。ただ、一生ってわけじゃないですし、LONEなどを使えば、会話することや電話も出来ます。でも、あなたに巡ってきたチャンスはもうないかもしれないですよ? そんな千載一遇のチャンスをドブに捨てようとするなんて……はつきり言いますか。見損ないました」

「紗夜さん……俺がバカでした……すみません。この眠っている頭を叩き起こすために一発叩いてください」

「分かりました」

パシンッ!

紗夜さんの振るった手が俺の頬を直撃する。だが、これでようやく目が覚めた。

「目が覚めましたよ……ありがとうございませす」

「本当にバカです。大馬鹿ですよ……でも、それだけ私のことを考えてくれたのは嬉しかったです」

「紗夜さん……!」

「慧人さん……!」

『あちやー入っちゃったね。二人きりの空間』

『あはは〜いつものことだね☆』

『全くね。というか、注文したメニュー届いたけど気付いたかしら?』

『先に食べちゃおう?』

『そうですね』

………はっ。いけない。気付いたら何か注文したメニューが届いていた。そして他の皆が食べ始めているし……。

「………ん?じゃあさ、慧人〜昨日あたしとおねーちゃんが居たことは気付いてた〜?」

「もちろん。ただ、あなたたち二人が仲良くしていたのでスルーした方がいいかと思つて」

(………判断は正しかったけどタイミングがなあ……)

「そもそも今日は何で駅前に?」

「コイツと合流するはずだったのに、このバカ。予定より早い電車でやって来て、先に行つてたらしいんです」

「仕方ねえだろ。待つの面倒だったし、暇だったし」

コイツは今日は先輩の家で泊まって、明日の学校は先輩に送迎してもらおう予定らし

い。しかし、夜ご飯は勝手に済ませろと言われたらしいので……まあいいか。何でも。でも消えたんだよね……?」

「消えた? 何のことです?」

「ほら! 大通りから細い道に曲がったところで消えたじゃん!」

「……ああ、あそこか。面倒だったのでショートカットしました」

「ショートカット?」

「はい。実は建物を登った後そこから跳んでいくと近いので」

(なるほどーだから消えたように見えたわけね)

「ちなみに後ろから誰かつけてたりしていた?」

「進行方向が同じ人居るなーとは思いましたね。でも、俺を尾行する物好きなんていませんよ。そんな面白い人いたら見てみたいですよ」

「そうなんだね〜」

「あはははは」

軽く2人で笑い合うと今度はリサ姐が席を立つ。トイレかな? と思っていると割と早く戻ってきた。……片手に奇妙な色をしたシユワシユワしているドリンクを持って。

……あれ? これが俗に言うデジャヴ?

「はい。飲んで」

「何故に!？」

「いいから☆」

な、何故か味方がいない……え?ど、どうしてこうなってるんだ?

仕方ないから飲み始めるが……つつ!!?

「……………おえ……………マズっ……………何混ぜたんですか……………」

「メロンソーダとイチゴオレだね☆この組み合わせはね、びつくりするぐらいマズいつて書いてあったんだよ☆」

「わざわざ調べたのか……………」

「ほらほら〜全部飲まないと、紗夜に飲ませるぞ〜?」

「ぐっ。こんなクソマズいもの飲ませるわけにはいかない……………」

決死の思いで空にする。……………マジでマズい。

「理不尽かよ……………」

「いえ、妥当な判断ね」

「そ、そうだよね……………」

「うんうん〜」

「異議なしです」

「よく分かんねえけど、お前がまたやらかしたんだろ?」



ほ、本当に味方がいねえ……!」

「そう言えば慧人さん。NFOのログインが滞っているようですが……」

「ん? そんなはず……あ。ヤバっ。忘れてた」

「お前、サブ垢作ってやるのはいいが、本垢のログイン忘れてたんじゃねえのか?」

「そうだったわ。サブの方で縛りプレイしていたのはいいが、本垢の方忘れていたわ」

スツと紗夜さんが静かに動こうとしたので止める。待つて。今回は何が悪いのかマジで分からない。さっきのは、危険な真似していたからって理由だと推測される。しかし、今回はマジで分からない。

「あ、今度はあたしが行ってくるね〜ふふん。るるるんつとしてるんつ♪となるようなドリンクを作ってくるよー!」

「ダメだ! そのヤバい奴を止めろ!」

「失礼ですね。人の妹をヤバい奴呼ばわりとは」

「大丈夫だよ☆ヤバさは慧人くんも負けてないからさ☆」

「え? マジで?」

「マジよ」

「あはは……」

何故か否定されない……え? 嘘でしょ? そう思っていたら何か……うん。日菜楽し

そうだなー如何にも楽しいですって空気が出ているなー（現実逃避）

「お待たせしましたーさ、これでシユワシユワ〜でるんっ♪ってなつてドキューンでバーンってなるはずだよ！」

ダメだ。いつもの数倍伝わってない。いやいや、え？結局どうなるんだ？

「さあ、飲まないと……」

「卑怯だぞ!?紗夜さんを盾にするなんて！お前らそれでも人間かあ！」

「人間だよ？それ以外に何に見える？」

「畜生っ！」

ということとで、飲み始めるが……マズい。マジでマズい。なんだよこれ……！

「日菜……！なんだこのマズいの……！」

「こちら、コーヒーをコーラとメロンソーダで割ったものになります！（どやああああー！）」

ドヤ顔してくる。マジかあ……！ああああ……！口の中がカオス。

「……も、もうないですよね……？これ以上あつたら死ぬ」

「あら？まだ私が作ってないわよ（にっこり）」

「やめろバカ。それはバカ。マジでバカ」

「オイコラテメエ、天使様に向かってバカを連呼するとはいい度胸じゃねえか」

ダメだ。今ここでこの男とやり合うのは正直言つてめんどくせえ。というか味方がいねえのか(´▽｀)には。

「じゃあ、花音ね。いつてらっしやい」

「いや、癒し枠の花音がそんなことするわけねえだろ。お前じゃあるまいし」

「よし。あの男は今油断しているわ。花音。殺人級のドリンクを作るのよ」

「そんな、悪魔の囁きに乗るんじゃない。お前まで畜生の道を進むことはないんだ」

「行くのよ。私は信じているわ」

「お前ならそんなことしない。俺は信じているぞ」

「ふええ……ど、どうすればいいのお」

あたふたし始めた花音。しかし、千聖は口でなんだかんだ言いつつ行かせる気はない様子だ。まあ、あの状態で行かせると何が起こるか分からないし……

「冗談よ。あなたはここに居ていいわ」

「そ、そうなの？よかつたあ」

(そもそも、ドリンクバーからこの席に一人で戻つてこれるか分からないし)

何だか千聖とシンクロした気がする……が、そんな魔王様と思考が一致するわけないのでスルーしておこう。

「あ、あれ？二人とも、失礼なこと考えなかつた？」

「と言つても後はあなたが手術したとか、たまに脇腹を押さえているとかそんなことしかないわね」

「あー……ちよつとな。まあ、脇腹付近に手術の痕というか傷跡があつて、時々古傷が疼くとかだから……気にしないでくれ」

「そうなの？」

「そうそう。見ても面白くねえし……ああ、でも特に今は命に関わるとかそういうわけじゃねえから心配しなくていいぞ」

「東雲くんは知っているの？」

「あーまあ、知っていると云えば知っているな……」

（ここに来て曖昧な反応ね。手術の跡を傷跡と表現したあたり何かの怪我？でも、普通に過ごしていてそんな位置を、手術が必要なレベルの怪我をする？しかも今は命に関わらないと言っていたし、慧人だけでなく東雲さんまではぐらかしたくなること……なるほど。この場ではこれ以上踏み込むのは危険ね）

存在を知られるのはまだいい。だが、こうなつた過程を知られるわけにはいかない……東雲も同感のようだからいいか。流石に、あんなことを気安く話せるわけでもねえし。

すると、女性陣——特に千聖——も踏み込まない方がいいと思つたのか、話を変えて

くれる。というか……え？俺の最近の行動を皆に聞くなんてそんな大胆なことを裏で  
していただなんて……。

「じゃあ、そろそろお開きにしましょうか」

そして、雑談を少ししてお開きという流れに。でも、まさか今回のことで、調査され  
ているとは思わなかった……。今度からは日菜と居ても紗夜さんには声をかけるか（違  
うそうじゃない）

## 惚気回（紗夜ver）

平日の放課後。とあるカフェにその二人の少女は居た。

一人は氷川紗夜。とある男から女神様と崇拝されている少女である。

Rosealiaのギター担当で『サッドネスメトロノーム』という二つ名を持つ。花咲川女子学園に通い高等部2年B組に在籍。また、風紀委員を務めている。

もう一人は白鷺千聖。とある男から天使様と崇められている少女である。

Pastel\*Palettesのベース担当で『微笑みの鉄仮面』という二つ名を持つ。花咲川女子学園に通い高等部2年A組に在籍。また、女帝とも言われている。

「……………」

「……………」

紅茶を一口啜る彼女たち。その姿だけで絵になること間違いないのである。

「紗夜ちゃんとかうしてカフェでお茶するなんて、少し前だったら想像も出来なかったわね」

「ええ。本当にそうですよ」

「ダメ元であっても頼んでみるものね」

「今日はバンドでの練習も、部活もありませんでしたから」

白鷺千聖は放課後、予定が空いていた。そのため当初は、松原花音を誘いお茶をしようかと考えていた。しかし、弦巻こころによる急な思いつきに松原花音は巻き込まれ、その考えを諦めることになる。冬木慧人を誘い愚痴でも話そうか考えていたところに、氷川紗夜が通りかかり、ダメ元で頼んでみたところ彼女は快くオツケーしたのだ。

少し前までの氷川紗夜であれば、このようなお茶会にかける時間を無駄と切り捨て、ギターの練習に時間を費やしていただろう。しかし、今の彼女は友人との時間も大切にしようになってきた。だからこそ、予定がなく、断る理由もなかったので快く引き受けていた。尚、彼女は彼女で冬木慧人とファストフード店にでも行こうかと考えていたというのは内緒だ。

「さてと、何を話そうかしらね」

「そうですね……」

ということとで、二人の共通点となっている音楽……バンドの話であったり、学校の話や彼女たちの共通の友人や知人、関係者の話をしていった。

話も一段落付いた頃。白鷺千聖はあることを聞くことにした。

「そういえば、紗夜ちゃん。紗夜ちゃんって慧人のこと好きよね」

「……何故それを」

「見ていたら分かるわよ」

「……なるほど。白鷺さんには隠していても誤魔化せないようですね」

（あれで隠しているつもりだったのかしら）

笑顔のまま、内心では少し驚いている。それもそうだろう。まさか、あんなに露骨がわかりやすいのに、それを隠し通せていたと氷川紗夜は本気で思っていたからだ。

「そういえば、紗夜ちゃんからは聞いたことないわね。慧人をどうして好きになったのかとか、最初の印象とか」

「そうですね……最初の印象は変人です。初めて会話した時に女神って言われましたからね。正直頭おかしいと思いましたが。でも、今にして思えば、その残念さも慧人さんらしいと言えますしね」

「ああ……」

千聖にも思い当たる節ではないが、共感できることはある。冬木慧人の頭のネジがぶつ飛んでるのはもはや周知の事実。だから、彼が残念なところをいくら見せようともしる慧人だからの一言に尽きてしまうのだ。悲しいことに。

「でも *Rosealia* が動き始めるまで……だから去年ははつきり言つて必要最低限しか関わろうとしなかったと思います」

「いや。よくそのスタートがあつて関わろうとしたわね……」



「そこが不思議なんですよね……私の利害と合ったというか……慧人さんが私の性格とかを考えて動いていたような。あ、去年の秋くらいからはテスト勉強を一緒にやることもありましたね。最初は『人に教えることって勉強になるんじゃないですか？』って言われて、確かにと。慧人さんにしてはまともなことを言っていて、少し驚きました。でも納得するのが癪だったので『そこまで言うなら仕方ないです』と言って、しようがない感じを出していましたね」

「へえ。でも今は違うでしょう？聞いたわよ。テスト前日までゲームしてバイトしていたあのバカにミツチリ勉強を叩き込んだって」

「そうですね。慧人さんには言っていないんですけど、私にとって最初の頃は自分の為だけでしたよ。慧人さんに教えるというを通して、自身の勉強をする。それ以上でもそれ以下でもないです。でも、今では全然違いますね。慧人さんと共に何かする。もうこれだけで十分なんです。あ、勿論勉強していますよ？ただ、教えるときに肩が触れ合ったりとか、手と手が重なったりとか……勉強会っていいですよ。教えるという大義名分の下に彼とその触れ合っても仕方ないと自分に言い訳できるんですから」

（……多分勉強会関係なしにあなたたちはイチャついていいると思うわ）

軽くドヤ顔している氷川紗夜。彼女にとって、最初こそ『自分の勉強の為』だったが、今ではもう『イチャつく機会の一つ』となってしまうた。

ただ残念なのか本来の性格なのか。彼女は勉強会となればもちろん勉強をし、勉強がメインと言っているので脱線してイチャついて終わっていくことはほとんどない。

「それに学校側もいいことをしますよね」

「いいこと? どういうことかしら?」

「いえ。テスト勉強会と銘打っている以上、テストがなければ勉強会は生まれません。中間テストと期末テストだけだったら年四回しかそのチャンスがないところを単元テストという素晴らしい存在のおかげで、一週間……いえ、直近の二週間以内に何かしらのテストが彼を待っています。そのテストに向けて勉強会というものを開くことができます」

「……つまり?」

「いつ誘ってもテストに向けての勉強会と言えるから誘いやすいです」

(テストをイチャつくための口実に来ると考えているのね……昔の貴女なら絶対にあり得なかったわ。……これは悪い意味での成長じゃないかしら?)

「でも夏休みとか、長期休みはそれだと厳しいんじゃないかしら」

「そうなんですよね……そこはどうしたらよいのでしょうか……」

少し落ち込んでいる様子を見せる。そこを不憫に思ったのか白鷺千聖は助け船を出すことにした。

「彼の宿題を見るという名目はどうかしら？終わっていなければ勿論。終わっていれば『本当に身についているか確かめる』とでも言っただけ」

「なっ……！」

氷川紗夜に電撃が走る。そして、白鷺千聖の手を取り……

「な、なんて素晴らしい発想！流石白鷺さん！その発想はなかったわ！」

「そ、そう？」

「ええ。これで普段からもつと誘いやすくなりました。なるほど……宿題のためと言えば……ふむふむ。アリですね。これなら行けます」

（どうしましょう。『宿題と一緒にやる』とか『宿題を見てあげる』とかって、テストの次か下手したらテストよりも前に思い付くと思うのだけど……え？嘘でしょこの子？……あーそういうことかしら。紗夜ちゃんって、そもそも宿題を誰かとやるといふことを考えていない人なのかしら）

氷川紗夜に一切の演技を感じない。本気で考えもしなかったのだろうと白鷺千聖は考える。

「ところで、何で紗夜ちゃんは慧人のことを好きになったのかしら」

「そうですね……気付いたら、というのは答えになりますか？」

「うーん……個人的にはもう一步踏み込んでいきたいのだけど……」

「意識したのは今年の夏休みくらいです。それまでギターのことを考え……後は日菜と問題があったので、慧人さんのことは見ているようで見ていない感じだったと」

「日菜ちゃん？」

「ええ。あの子と少し……」

（確かに。日菜ちゃんの性格と紗夜ちゃんの性格を考えると……なるほどね。なんとなくだけど分かる気がするわ）

「慧人さんには余裕のなかった私を何度も見せました。Roselliaのこと、Roselliaより前のバンドでのこと、日菜のこと。何度も強く当たったんです。でも、彼は全てを受け入れてくれました……甘えていたんでしょね」

（……人のことは言えないわね。私も白鷺千聖が壊れないように、彼を使っている。一緒……いえ、きっと私の方が醜いわね）

「でも一回だけ。その時だけは慧人さんは私のことを怒っていましたね。怒ると言うとき少し語弊があると思いますが……」

「その時？」

「ええ。私が少しスランプに陥っていたといいますが……自分の音に自信を持ってない時がありました。その悩みのせいで色々と……」

（……紗夜ちゃんにもそんな時期があったのね）

「彼は私の話を聞いて、私に同情したり、同調したりすることなく自分の意志を私にぶつけてきました。……まあ、立場的には日菜側によっていましたけど」

「へえ。あの慧人が紗夜ちゃんと対立する……ねえ」

「彼は私を女神だ何だ言いますが、イエスマンにはなっていないですね。自分の意思と違えばハッキリとノーを突きつけられる人間ですし、自分が正しいと思ったことはしっかりと言ってくれますよ」

「確かにね。そういうところは羨ましいわ。ほんと」

誰に対してでも自分の意志を告げ、面倒なことは面倒とはつきり言うが、最終的には流されやすい。物で釣られたり、氷川紗夜のお願いだったりで。そこも彼らしいと一言で表せてしまうのはいいことなのだろうか？

「その後ですかね。私の心に少しゆとりが生まれたので、慧人さんについて考えたんです。そして、彼のことが気になっていて自分に気付きました。料理が出来るとか裁縫が上手という女子力の高いところ。身体能力が高く、サッカーで活躍する格好いい姿。頭もそこそこ良く、何でもできるように見せて、絵や音楽が壊滅的というギャップがあった。色んな姿を見ている中ではつきりとしたんです。この人のことが好きなんだって。この人の隣に立ちたいって。それにですね。彼に抱きしめられた時、心の中に温かいものが生まれるんですよ。満たされると言うのですね。きつと」

(普段からは想像できないくらい穏やかな表情……恋つて凄いわね)

「……でも、少しだけ不満があるんですよ。彼は他の女子とも距離が近い気がするんです。い、いえ、仲が悪いよりは全然いいことなので否定したり咎めたりはしないんですけど……その、多くの人は呼び捨てなのに、私にはさん付けや様付けで何だか距離を感じますし……」

(距離というより、崇拜の対象だから呼び捨てとか鳥澁がましい……的な感じではないかしら。それに、様を付けて呼んでいるのはあなただけよ)

「白鷺さん……どうすればもつと距離を縮めることができるんですか？ こういうことは白鷺さんや今井さんが詳しいかと」

「……なるほどね。どういうイメージを持たれているかはなんとなく分かったわ。分かった上で申し訳ないのだけど、私自身にそういう経験はないわよ。それに、仕事上の付き合いで何人かの男性とはお話しても、プライベートでは慧人以外の男性とはほとんど関わっていないわ」

「そうなんですか……でも、いいですよね白鷺さんって。お互いに呼び捨てで、距離も近くて仲がよく……羨ましいです。しかも悪友という彼の中で特別な枠組みに入ってますし……」

(……どうしましょう。何かを間違えたのかしら？ 紗夜ちゃんに羨ましいって言われる

筋合いはないのだと思うけど……本当にどうしましょう。何処に地雷が埋まっているか分からないわ）

「それに何だかモヤモヤするんですよ。慧人さんが他の女性と仲よさそうにしているのを見てしまうと。傲慢だと分かってはいますが、私だけを見てほしいとか……この前の調査隊の時もそうでした。彼の全部を知りたいって、隠し事をしないでほしいって……変ですよ」

「そのこと自体は変じゃないと思うわ。それだけ彼のことが好きなのよ」

「……なるほど」

（嫉妬……で確定ね。もしも、彼女の理性がなくなれば慧人は……いえ、私の身も危なそうね。頼むから慧人。くれぐれも紗夜ちゃんを病ませないようにね）

「……そう言えば紗夜ちゃん。日菜ちゃんが言っていたのだけど、お菓子作りを始めたとか何とか」

「はい。少し前のことです。羽沢珈琲店で、お菓子作り教室がありましたので参加を。そこから本格的にと言いますか、今はまだクッキーだけです……」

「理由は？何かあるのかしら？」

「二つは、バンドのためですね。今井さんがよく手作りクッキーを差し入れて持ってきてくれますが、それがあつたのないのでは練習の質などが大きく違うのです。慧人さん

は頼めば色々と作ってくれますが……」

「あくまで慧人は *Rosealia* のメンバーではない以上、毎回作ってもらうのは遠慮してしまおうのね」

「……それもありますし、何より見た目に反した、その丁寧さや可愛さなどから、今井さん以外の私たち4人の心に来るものがありました……クッキーも差し入れの時は丁寧にラッピングまでされて……」

「乙女なの？あの男は」

「何というか……負けた気分になりますので。今井さんはそこから慧人さんと話しているんですが、どうにも私たちは途中から打ちひしがれる気持ちになってしまおうか……」

「……なんとなく分かるわ。その気持ち」

見た目は不良、中身はマイペース問題児。そんな男が可愛らしいラッピング付きで差し入れをして、しかもおいしいとなると、敗北感が襲って来ても仕方がないのだろう。「もう一つは……やっぱり慧人さんですね。前も一緒に料理して楽しかったです……その、彼ばかりに作って貰っていて……自分のも食べてもらいたいというか。今はまだ自分一人では自信のあるものが作れないですけど……いつか食べてもらえたらなあって。そうでなくても一緒に料理する。前みたいに教えてもらいながらもいいんですが



もっとうこう……肩を並べる？とまでは行きませんがそのような形で一緒にできたらなって……」

（紗夜ちゃん……なんて乙女なの？可愛いという言葉がすごく似合うわ）

「羽沢さんから教えてもらったんですけど、前回のお菓子教室が好評だったようで、第二回をやるそうなんですよ」

「そうなの？」

「詳細はまだ決まっていないのですが、クッキー以外のものをやってみたいとおっしゃっていたので」

「なるほどね……」

「と、ごめんなさい。途中から私ばかり話していますね」

「いいのよ。気にしないで」

「もうこんな時間ですか……」

「本当ね。会計を済ませてお開きにしましょうか」

席を立つ二人。会計を済ませて店の外に出た。

「紗夜ちゃんって変わったのね」

「そうですか？少しだけしか変わってないかと」

「いいえ。かなり変わったと思うわ」

「ふふっ。でもそう言う白鷺さんも変わられたかと」

「そうかしら？」

「ええ。そうですよ……あ、そうでした」

「何かしら？」

「えつと……さっきの話は慧人さんには内緒にしていただけと……」

「ふふっ。勿論よ。私たちの秘密ね」

一方その頃……

「いやあ、こころの発想は相変わらずヤバかったな」

「ごめんね……巻き込んだじゃって……」

「なんだかんだ楽しかったから気にしてないぞ」

「あはは……私はちよつと疲れちゃったかな」

## スカイダイビング With ハロハピ

皆様は平日の放課後。部活動で走っている最中に見知った黒服さんたちに囲まれドナドナされて。気が付けば空を飛んでいることはありますか？

「……………いや何処だよ（こー）！」

「空よー！」

「……………」

「わあーいー！」

「ふええ……………」

「あははー……………」

俺はあります。しかもご丁寧に何か装備がつけられているが……………なるほど。これはスカイダイビングと呼ばれるやつでは？

後、空は知ってたけどさ。高度とか場所とか知りたかった。ここ日本上空だよね？地面に着いたら海外とか未開の地とか言わないよね？

「それにしても楽しいわねー！」

「あーよく見ると結構高い……………」

「誰か現状の説明を求む」

「ライブやるって聞いてたのに、どうして私たちスカイダイビングしてるのお……?」  
なるほど。そういうことか。

「ハロハピスカイライブよ!」

「ハロハピスカイライブ?」

「……………」

「私、空を飛びながら演奏できたら楽しいかなーって思ったの」

……………思うことと次元も違えばそれを実行できる行動力の次元も違う。流石弦巻家。

「そういうことは飛び降りる前に教えてほしかったな」

「ライブするんだろ? 何で俺巻き込まれてるんだ?」

「お客さん兼カメラマンよ!」

「カメラねえけど!」

カメラがないカメラマンって、ギターを持ってないギタリストみたいじゃないか。

「ねえこころん。はぐみたち楽器持ってこなかったよ?」

「はぐみちゃん!? もう順応している!」

「諦めろ花音。いつものことじゃないか」

「冬木さん!? それはただの諦めですよ!」

諦め上等。もうあれだ。うん。諦めた方が楽。

「ミツシエルー！リュックの紐を引いてみて」

「え？これかなーえい」

するとミツシエル（美咲）の背負っていた大きなリュックから楽器と後カメラが出てきた。

「わわっ!? 私たちの楽器とカメラが!？」

「いや、花音の場合、ステイックしかないだろ」

「そうなのよ。でも、ドラムセットはそのリュックに入らなかったわ」

（もしかして、入るんだったら持ってきたの?）

「ふええええええええ!？」

「空を飛びながら演奏だなんて。こころんはいつも凄いことを考えるよね」

「ほんと、いつも凄い（ぶっ飛んだ）ことを考えているな」

「うーん。はぐみ、この状態でも上手く弾けるかな? ねえー薫くん」

と、こころで気付いた。そう言えば薫さんの声を俺は未だに聞いていないと。

「薫くん? ねえ! 薫くんが笑顔のまま気絶してる!」

「えええつ!？」

「寝たら死ぬぞー」

「いや、雪山じゃないんだから」

「でもここで寝たら死ぬんじゃないか？」

「……確かに」

「薫くん！目を覚ましてよ薫くん！」

と、はぐみの必死な声が届いたのか薫さんは目を覚ました。

「あ、ああおはようはぐみ。今日も弾けるような笑顔だね。お、おやここは？あ、ああ。私たちは天使になってしまったのかい？」

……この人あれか。高所恐怖症か。……南無三。

「しっかし、こころの考えることはいつも無茶苦茶だね。これじゃ身体が足りな……つとと」

「ホントだよ。ツツコミに疲れるんだよ」

（いや、あなたはどちらかと言うとボケなだけど……）

「じゃあ、準備はいいかしら？行くわよ。笑顔のオーケストラ！」

ということでは何か本場に演奏が始まった。まあ、楽器までこんな大空に持ち込んだ張本人が今更冗談ですなんて言うわけないか……。

「~~~~♪」

最初はパシヤパシヤ撮ろうかと考えたが、めんどくさ——面倒だったので動画に変え

た。まあ、後で黒服さんたちがそれっぽくしてくれるだろう。俺は知らね。

そんなこんなで気付けば終わった。

「いえーい！思った通り最高にハッピーだわ」

「こういうのもたまにはいいね！」

「あは、あはは、あははは」

テンションのあがっているところとはぐみに対して、薫さんは苦笑いしている。とうか、この人顔色無茶苦茶悪いな。

「まあ、確かに楽しいと言われりや楽しいな。うん」

「ふええ……楽しいの難易度が高いよお……」

「あの〜このころ？そろそろ地上なんだけど……」

あー確かに。だんだん地面が近づいている感じがするな。うん。これで遠ざかってるって言われたら困っていたけど。

「あら？もうなの？楽しい時間はあつという間に過ぎるのね。皆。リュックの紐を引いて。パラシュートでファイナルよ！セーのー！」

このころ、はぐみ、薫さん、花音の四人は一齐にリュックの紐を引いてパラシュートを展開。そのままお空へ。一方……

「おーい、ミッシェルー遊んでないで早くリュックの紐を引かねえと墮ちるぞ？」



「引いてますよ!? ほら何回も引いてるのが見えないんですか!？」

未だリュックの紐を引いていない俺と、さつきからリュックの紐を引きまくってるミッシェルこと美咲の姿があった。

「あーお前、その紐って楽器とか取り出すときに引いてたじゃん。パラシュートの紐とは別なんじゃないのか?」

「あ、確かに……って紐コレしかありませんよ!? パラシュートは!? あたしのパラシュートは!？」

「ないんじゃないのか? ほら、ミッシェルだし」

「ないのおっ!? マジで言ってます!? ねえマジで言ってます!？」

「んードンマイ」

「ドンマイじゃないですよ!? このままじゃあたし死にますよ!？」

「ミッシェルは不滅です」

「ミッシェルの中身のあたしがダメなの!」

「ミッシェルに中身の人なんて居ません!」

「居ますよ!?! 中の人居ますよ!?!」

「うーん……あ、おなかすいたな。今日の夜ご飯何にする?」

「じゃないですよ!?! この状況で夜ご飯を考えますか普通!?!」

「個人的にはビツタラウエンジンヤナがいいかなって」

「びつた……え？なんて？」

「凄い簡単に言うどゆで卵が入ったカレー」

「へえーそんな難しそうな名前をよく知って……って、本当に夜ご飯のメニュー考えてたよこの人！そもそも何で先輩は落ち着いていられるんですか!?!」

「え？だって、俺はリュックの紐を引けばパラシュートが出るはずだし」

だから特に焦っていない。それにまあ、

「万が一、パラシュートが出なくても助かる方法がある」

「え!?!何ですか!?!それって何ですか!?!」

「着地する地面を破壊する。落下の衝撃や諸々を全て地面にぶつけて破壊する。そうすればこっちは助かる」

「いやあああああ!この人の発想が一番バケモノだあああああ!」

「ふむ……避難命令が必要か？」

「必要なのはパラシュートですよ!」

「あ、これ下に巨大トランポリンがあればいけんじゃね？」

「そんなのどこにあるんですかああああああつ!」

と、そんなことやってると流星にマズそう。美咲の方は何度も紐を引いてついに……

「あ……終わった」

「ああ、そうだな」

ついに、紐が取れた。しかし、パラシュートの気配なし。

「しやあねえ。動くなよ」

ミッシェルの後ろから抱きついて……あ、

「ふかふか……」

「ふざけないで早くしてもらえますか!?!」

「いや、思ったんだけどこの体制じゃ、紐ひけなくね?」

紐を引く。片手になる。バランス崩す。ミッシェル落下。今頭の中で四コマ漫画が

思い浮かんだ。

「くう……画力があれば……!」

コミカルな四コマ漫画としてこころたちに見せたのに……とりあえず、腕だけだと

不安だし、足も絡めとくか。

「何の話ですか!?!……えと、コレですな!えいっ!」

するとリュックからパラシュートが。とりあえず、ミッシェルを落とさないように抱

えていたが……あ。

「み、ミッシェルが落下した!?!」

「落下したの頭だけですよ！」

「お、俺がミツシエルを……殺したのか……！」

「何で先輩ここで焦っているんですか!?! あなたさつきまで微塵も焦っていませんでしたよね!?!」

「ミツシエル……すまない……!?! すまない……!!」

「あーもう! 遊んでないで手と足放さないでくださいね! 絶対ですよ!?!」

「え? それって……フリ?」

「誰が命懸けのフリをするかあ!」

「やっぱり美咲ってツツコミ役だな。こんな時にもツツコミを入れるなんて」

「アンタがボケるからでしょうが!」

「え? 俺は至って真面目だぞ」

「たちが悪過ぎる!」

なんだかんだありながらも無事に地上に降り立った美咲と俺。その後、遅れて四人が降り立った。

「楽しかったわね!……ってあれ?美咲?どうしてここに?それに、ミツシエルは?」

「う、うん。ミツシエルは用事があつて帰つたつてさ」

「そうなの?」

美咲はミツシエルを脱ぎ捨て私服に着替えた。堕ちていった頭に関しては……まあ、気にしない方針で。

「というか、ミツシエルはどこだ?」

「こころんの私有地だつてさ」

「へえー」

まあ、私有地ならいつか。

「か、薫さん!? もう地上だから大丈夫ですよ!」

「あ、ああ花音……なぜだがさつきから身体がふわふわして」

「薫さん!」

ちなみに薫さんはフラフラだった。この人……本当にお疲れ様。

「お迎えにあがりました」

「じゃあ、皆! 帰るわよ!」

「「「おおー」」」

ということで車に乗り込む。こころとはぐみははしやぎすぎたのかすぐに寝て、薫さんも夢の世界へ。

「花音さん……よく冬木先輩と二人でいられますね」

「えと、それはどういう意味かな?」

「迷子の花音さんをよく連れてきていますけど……この人と二人だとしても心臓に悪いので」

「あはは……案外そうでもないよ? ほら、こころちゃんたちを相手すると思えば……」

「酷い言われようだな。まるでアイツらと同列じゃないか」

(うーん。下手したらそれ以上だと思っけどなあ……)

「あ、でもおんぶされた状態で山を駆け下りたときは……」

「え？花音さん迷って山に？というか冬木先輩も山へ行っただけですか？」

「いや、夜の山は危険だから、暗くなる前に山を下りようとダツシュしただけだが？」

「でも……崖を駆け下りていたときはもうダメかと思っただよ……うん」

「うわあ……いいですか冬木先輩。あたしたちは普通の人間なんです」

「いや、俺も普通の人間」

「だから、そんな恐ろしいことはやめてください。いいですね？」

「んーまあ、善処する」

こうしてこのころの家へと送り届けられたので後はそれぞれ帰宅した。

ちなみに鞆を一式学校に置いてきていることに気付いて学校に戻ることになるのだった。

## 刀と戦いとブシドーと

「やあー！」

かわいらしい声と共に刀を振り下ろしてくる少女。名を若宮イヴと言う。

「甘いー！」

その刀に合わせてこちらも右手に持っていた刀を振るう。……ナニしてんだろう本当に。

ガンッ

刀と刀がぶつかる音が響く。勿論本物ではない。レプリカである。……流石に真剣での斬り合いとか嫌だ。

ただし、地味に重さがあるのは内緒だ。何でも重さが1kgあるレプリカらしい。そりゃあ重々しい音も出るわ。

「くう……やりますね。流石ケイトさんです！」

「生憎、動体視力と反射神経だけはいいでね」

イヴちゃんが振るうのを全て持っている刀でさばっていく。

「いやあ……いつ見ても凄い戦いッスね」



「そうね……どっちも人間離れしれているわね」

「いつけえーイヴちゃん！ 慧人を倒すんだあ！」

「やっっちゃえーイヴちゃん！」

「はいです！」

周りに観客として居るパスパレの応援もあり、ドンドン刀を振るってくる。

まあ、見て分かる通り一種のゲーム感覚でやっている。

ルールは簡単。イヴちゃんが俺に一撃を与えたらイヴちゃんの勝ち。彼女が降参したら俺の勝ちである。……いや、俺から攻撃できるわけじゃないじゃん。万が一当たったりしようものならアレだし。面倒だし。

「はあ……はあ……」

「そろそろ諦めたらどうだ？」

「いえ、諦めるのはブシドーに反します！ やあ！」

「マジかよ……」

何分経っただろうか。とりあえず思うことは、イヴちゃんって体力あるなあ……ほんど。こんな刀を振り続けるなんて。こっちも息が少しずつ上がり始めているというのに……

「そろそろ終わらせよ」

少しずつではあるが彼女の力が刀を振った勢いに負け始めている。精神的にはまだいけるだろうが身体がついて行けてない。

「わわっ……!」

大ぶりになった刀にこちらが少し力を込めて押し当てる。そのまま刀の重さに負けてバランスを崩したところをすかさず、彼女の背後に回り左手で彼女を抑え、右手に持つ刀を置いて手刀を彼女の首元に持つて行く。

「くう……殺せ」

「いや違う。そこは降参するところだ」

「武士は降参するぐらいなら自決を選ぶと聞きました!」

「やめてくれ?頼むから、普通に降参を選んでくれ?」

「ぐぬぬ……そこまで言うなら仕方ありません」

ということ、本日 の 対 決 は 無 事 勝 利 で あ っ た 。

「お疲れ〜二人とも〜」

「凄いねイヴちゃん!こんなに重いものをあんなに振っていて」

「武士は刀が命です!でも、さすがに疲れました……」

「それに比べ、慧人は余裕そうね」

「なわけ。やる度に強くなっていくから正直大変だわ」

「それを身体能力でカバーしているのが慧人さんですね」

と、会話しつつ手首と足首に付けてるアングルウエイトを外していく。後は上に着ているウエイトベストを脱いでと、

「ふうー身体が軽いわ」

「今って何キロだったっけ？」

「アングルウエイト一つ2.5kgだから四つ合わせて10kg。そこにウエイトベストが10kg」

「合計20kgのおもりつけてあの動きは……うん。化け物だよね」

「だけど、そろそろ限界だわ。おもりの重さをまた減らそうかと考え中」

「確か、一番最初は40kgだったツスね。ベストが20kgで、アングルウエイトが5kgだったツス」

「ああ。さすがに最初は俺がほぼ動けなかったから直ぐに30kgに落としたけど。それでも段々と追いつかなくて最後は二、三発喰らったし。今のイヴちゃんなら多分一方的にやられる。普通に瞬殺で終わるな」

何故こんな阿呆なことが始まったか。

体力作りと筋力トレーニングで何か楽しみながら出来ないかと考えた末、こうして剣を交えて練習したらいいんじゃないかと誰かが言い出したそうだ。無論、イヴちゃんし

か出来ないし、やりたくない方法だがその案には一つ、重大な欠点があった。即ち、誰も相手がいないという点である。そこを、身体能力が化け物級だしまあなんとかなるでしょ、という適当な理由で選ばれたのが俺である。だが、それでも剣を本物に近い重さにした以上当たると怪我する可能性があるし、そうなればイヴちゃんも遠慮する。そこで思い切り振るうためにベストやアングルウエイトなどで当てても支障がない場所を作った。まあ、俺の練習にもなるからいいんだけど。

「ケイトさんは剣道はやらないのですか？」

「やらねえし、やったとしたらイヴちゃんには負ける」

「どうしてですか？あんなに強いのに……」

「防具が邪魔だし、視界が悪いし、蒸し暑いし、竹刀が直ぐに折れるし、というか打つときの姿勢とか知るか」

「よく一瞬でそれだけ出て来るわ……剣道をやりたくない理由」

「え？竹刀って折れるの？」

「知らないですけど、本気で振ると、竹刀が折れるんですよ。だから体育の授業とか面倒でした。すぐ折れてしまったので」

「ケイトさん……それはバカ力ってやつですね」

明らかにひかれているが仕方ない。俺は剣道が出来ないからな。中学時代、一回の授

業中に竹刀を三本へし折ったときには先生も明らかに動揺していたな。それ以来剣道の授業は見学かサボっていた気がする。

だから、剣道では修行しないし、剣道では修行相手になれない。代わりにこうやって戦っている。勿論、さつきも言ったように一種のゲーム的なもの。勝利条件以外にもルールは存在する。例えば俺は防御するときは刀が基本で、蹴りとか拳はNGとかな。とりあえず思うのは、コレの結果かは分からないが彼女の体力や筋力が付いてきている。本人は修行です！って楽しそうにやっているからいいんだが……

「皆さんもどうですか？いい運動になりますよ！」

「あはは、流石のあたしでも遠慮しておくよ」

「一度振っただけで筋肉痛になりそう……」

「ジブンにはこれは合わないと思うツス」

「私も遠慮するわ」

恐らく他の子たちに聞いてもさすがにやりたくねえだろう。それに俺の立ち位置も代わりたくはないだろう。いくら相手がモデルとアイドルを兼ねた美少女だからと言つて、自らを危険に晒す真似はしないでだろうな。うんうん。……そういや、モデルにアイドルに茶道部、華道部、剣道部、そして喫茶店でバイト……恐ろしい子だなあ……イヴちゃん。

「うーん。イヴちゃんが主役で慧人が悪役の時代劇でもやったら面白いんじゃない？」

「おおっ！悪を討つんですね！」

「待て。何で毎回俺が悪役なんだ？」

「いやいや、慧人には正義やヒーローって言葉は似合わないよ〜」

「そうツスよ。自分でもそう思ってるんじゃないんですか？」

「まあな。そういう系より悪の方が似合ってると思う」

「あはは……認めちゃったよ」

確かに。ヒーローか悪かを選べと言われたら、悪の方が似合ってるとは思うけどさ？  
それでも悪になりたいわけじゃないんだよ？

ちなみに今更ですがここは事務所です。何処かの金髪さんに連行されました。いや、大抵はC i R C L Eでやってるよ？C i R C L Eにある休憩室的な場所。ただ、たまに事務所のレッスンスタジオ的などころでもやらされる……まあ、いいんですけどね、はい。さすがに公園とか公共の場で刀（レプリカ）を振り回すわけにはいかないので。

そして、どうしてこうなったのだろうか。

「アナタの悪事もここまでです！悪はこの私が成敗してみせます！」

慧人の前には剣士の羽織を着たイヴが居る。だが、今のイヴはいつものイヴではない。  
い。

「ハッ！悪事がコレまでだあ？随分と生意気なこと言ってくれんじゃねえか」

羽織を着た慧人自身も近くに置いてある刀を取り、彼女と正面から向き合う。今の慧人もいつもの慧人ではない。

「下らねえことをぬかしてんじやねえよ小娘が。キサマごとき、斬り捨ててくれるわ！」

慧人は刀を鞘から抜き、刀の先を彼女に向ける。

「そうですか……」

それに合わせて彼女も刀を抜く。そして……

「はああっ！」

キンツッ！

刀と刀がぶつかり合う音が響き渡る。すると、そのまま鏢迫り合いになり、イヴと慧人が互いに刀をぶつけ、押し合うが……

「弱いな」

「なっ……！」

慧人が鏢迫り合いを制し、バランスが崩れてしまったイヴの空いた胴に向けて蹴りを入れる。それを諸に喰らったイヴは転がるようにして飛ばされてしまった。

「おいおい、この程度で成敗するとか、笑わせてくれんなよ！」

「まだです！やあっ！」

「はっ！」

すぐさま立ち上がり、慧人の方に突撃するイヴ。そんな彼女の刀をすべて見切り、自



身の持つつ刀で容易く捌く慧人。立ち向かうイヴにそれをあしらう慧人。力の差は歴然だった。

「次はこつちから行くぞ」

「くう……！」

イヴの攻撃を流し、彼女の体勢を崩したところに、刀を構え追撃する慧人。

キンツッ！キンツッ！キンツッ！

幾度となく振るわれる刀。すぐさま刀を構え直し、辛うじて防いでいるイヴ。激しい刀の応酬が続いている。

少しづつイヴ側に浅い傷がつき始めたそんな中、イヴが後ろに跳ぶことで二人の距離が少しだけ開く。

「その程度で俺を倒そうとか百年はええんだよ。尻尾巻いて逃げ出したらどうだ？」

「武士は……敵を前にして、背を向けて逃げ出すことなどしません！」

傷を負い、血が流れているイヴ。羽織も血と砂で汚れてしまっている。

対して慧人は傷もほとんどなく、綺麗な状態だった。

誰が見ても明らかにイヴの勝ち目はない。しかし、彼女の目は決して諦めていなかった。

「気に喰わねえなその瞳。………ならば、この場で死ぬ」

容赦なく刀を振り下ろす慧人。それに対して、イヴは下から刀を振り上げ、刀同士がぶつかる。

刀と刀がぶつかり合い、少しずつイヴは押されてしまう。

「私は……負けるわけにはいきません！アナタによつて幸せを奪われた人々の為にも！  
私は……私は……っ!!」

「なっ……!!」

次の瞬間、慧人の振り下ろした刀が弾かれ宙を舞う。生まれた一瞬の間隙。それを見逃す程イヴは甘くはなく、空いた胴を斬りつけ、その勢いで慧人の後ろに。

「俺がこんな所で……」

バタツ

倒れる慧人。倒れた彼の周りには血の海が……。

「悪は必ず滅びます」

刀を鞘に収めるイヴ。しかし、彼女もこの戦いで傷から膝をついてしまう。  
そして……

『はい。カットオ!』

声が響き渡った。

「凄かったよねえ、あんな動きよく出来るよね」

「イヴさんも慧人さんも、いつも以上のキレでしたね」

「あ、お疲れ様イヴちゃん。すごかったね！」

「ありがとうございます！」

「アレって、最低限しか台本なかったんだよね」

「ほとんどアドリブだったんですか!？」

「はい！入れてほしい場面のイメージを図と一緒に伝えられただけです！後はノリです！」

「途中とか目が追いつかなかったのに……あれを即興でやっていたんだなんて……」

カメラマンをはじめとしたスタッフが映像の確認をしている中、見ていたパスパレの三人とイヴが今の感想を言っている。そんな中、血の海に沈んでいた慧人が額に青筋を浮かべながら、サングラスをかけて座っている少女の元に詰め寄っていた。

「おいこら千聖……!」

「千聖？今の私は監督よ（キリッ）」

「なら監督さんよ……最後の場面。俺は寸止めで後ろに抜けていくって聞いてたんですけど?」

「そうね。慧人にはそう伝えたわ」

「おいコラじゃあ、イヴちゃんには」

「本気でやって構わないと伝えたわ」

「ぎけんなよ!?! 本当に当てられて驚いたんだけど! え? 当てられたんだけどって思ったわ!」

「その分、リアリティーが凄いでいたわ。素晴らしい演技よ」

「演技じゃねえよ! 斬られたのがリアルなんだよ! このバカントク!」

「バカントクとは失礼ね。あなたの腹筋は何のためにあるの?」

「少なくとも盾じゃねえよ!?!」

監督千聖に詰め寄る役者慧人。

「そんなことはどうでもいいわ」

「オイコラテメエふざけんなよ」

「ところで慧人。イヴちゃんを蹴った場面。アレは寸止めしたんでしょね。こっちからは完全に当たったように見えたのだけど」

「当たり前だろ。さすがに蹴らねえよ」

「あたしからも、うわあー慧人やっちゃったよーって見えたけどね」

「いやいや、慧人さんが蹴ったらやっちゃったよーではすまないと思いますよ」

「そうだよね……下手したら色々折れるかも」

「さすがケイトさんでした！すべての攻撃に殺気というか本気が感じられました！」

「確かにね。見ていて冷や冷やしたわ」

「んなこと言ったらイヴちゃんも最初からスイッチ入っていただろ。本気で斬ってきただろうが」

「当然です！ケイトさんには全力で当たらないと押し切られると思ったので！」

わいわい言っているが、慧人はここで一つの疑問を持つ。

「所で、何で千聖が監督なんだよ」

「……えっ？」

「慧人って千聖ちゃんから説明なかったの？」

「いやや？普通に呼び出され連れて来られた」

「いや、衣装とか着てたよね？何も思わなかったの？」

「急に着替えろと言われたし……何か血糊とか用意されていたし……で、結局何だよ」

「番組の企画よ。『映画監督に挑戦してみた』って感じのね……」

サンングラス越しに遠い目をする千聖。そして、なんとなく察した慧人。だが附に落ちない点がある。

「で、何で俺なんだよ。お前の人脈なら俳優とかも普通に呼べただろ」

「そうね。でも、彼らを呼ぶのつてぶつちやけ金とか事務所とか番組とか色々面倒なのよ」

「おい。それはぶつちやけすぎだ」

「だから、私の悪友を頼ることにしたわ。あなたなら何の見返りも求めずやってくれるだろうし」

「せめて、先に全部言え。まあ、言われてたら多分、断つただろうけど」

「何も聞かずにやってくれたじゃない。まあ、言つてたらあなたが断ることは分かっていたわ」

仲がいいのか悪いのか。

「まあ、映像確認とかするけど、ここまで早く撮り終わるのは想定外よ」

「やりました！褒められましたよケイトさん！」

「あーそうだなー……というか着替えていいか？」

「せつかくですし写真を撮りましょう！ハグです！」

「はあ？ちよ、帰りに……やめ、イヴちゃん！抱きつくなあ！」

「はいはい。写真撮りますよー」

血糊とか付いて、傷だらけのボロボロ（に見える）二人。

「そう言えばずっとカメラ構えていたよねー麻弥ちゃん」

「なかなかこういう機会がないので……あ、千聖さんの監督っぽい写真も撮りましたよ」  
「よく撮れてるねっ！千聖ちゃん名監督みたい！」

「しつかりと後で皆さんに送っておくッス！」

この後、慧人に送られてきた写真の数々。しつかりと、パソコンに転送しておいた慧人であった。

## りんさんの誕生日

10月16日の夕方。Roseliaの一名を除く全員が俺の家に集合していた。

前回、リサ姐の誕生日の時と違った点は、全員で一斉に押しかけられた訳ではなく、一人一人やって来てここに揃った感じだ。

「冬木。明日は何の日か分かるかしら」

「りんさんの誕生日ですね」

「今回は覚えていましたね」

「ん？今回は？」

「けー兄酷いんだよ？リサ姉の誕生日知らなかったんだよ！」

「わあーこれは泣いちゃうな。シクシク」

「いや、伝えられたことないんですけど？」

お察しの通り、友希那さん、紗夜さん、リサ姐、あこちゃんの四人が俺の部屋に集まっている。

ちなみに……

『私が後方から攻撃を行いますのでKeiさんは前線をお願いします。(。)>人<。』



『了解です。間違つて当てても気にしないので自由にやつてください』

りんさんとNFOで二人パーティーを組んでクエストを攻略中である。

最初はボイスチャットでやろうと言ってきたが、こちらの会話が聞かれるとまずいので声が枯れてると言つて、一回繋いで声が枯れてる演技をして、普通のタイピングの方のチャットにしてもらつている。

「聞いているのー?」

「聞いてますよ。ただ、NFOやりながらそつちの会議に混ざるのつて割と大変なんですよ?」

並行して行うつて意外に難しいなあーと思ひながら……

『本当はあこちゃんや紗夜さんも加わるはずだったんですけど都合が合わなかったようで……なので二人でやっちゃいましょう!』

『適正人数より結構少ないんですが……?』

『Keiさんなら問題ないですよ!』

ちなみに都合が合わないと断つた二人は俺の後ろにいますけどね。はい。

「予め燐子の予定は空けてもらつているわ」

「じゃあ、明日の放課後は軽いセッティングですね」

「でも、誰が時間稼ぐの? 明日はバンド練習休みつて言つてあるし……」

「うーん。同じ学校って意味じゃ紗夜が無難？」

「前回みたいに集合時間ズラすのはダメなんですか？」

「ダメではないわ。ただ……」

「ただ？」

「燐子が男の人の家に一人で入れるかしら」

……あー。あの人、人見知りというか内気というか……

「でも俺の家ですよ？」

「それでも少しハードルがあるんじゃないかなー？」

「じゃあ、誰が時間稼ぎ役を？」

「私……でもいいんですが自信はないですよ」

紗夜さんか……確かに。途中からおかしな話になりそう。

「友希那は置いといて、やっぱりアタシか慧人くんじゃない？」

「……俺がしますよ。時間稼ぎ役」

「おおう！でも何で？」

「こつちで準備する組で確定しているのが友希那さん、紗夜さん、あこちゃん。で、俺カリサ姐のどつちかが時間稼ぎを……って考えたら」

「あ……アタシも準備に回らないといけないのか」

そうなのだ。前回のリサ姐の誕生日で指揮してくれたのは友希那さん。でも今回は、

「あこちゃん。ある程度なら好きにやっつけていいから」

「わぁーい！」

指揮役はあこちゃんが適任というのは皆の共通認識だった。前回のフォローはりんさんがやってくれたけど、今回のフォロー役にはリサ姐が一番だろう。

「それに、少し前ですが、ゲームのグッズを見に行きたいと誘われていたのでちょうどいいです」

「決まりね。鍵はどうするの？」

「紗夜さんに預けますよ。俺が花咲川行けばいいんで」

「でも、それ怪しまれない？」

「俺が紗夜さんに話しかけるんですよ？」

「普通ね」

「怪しい要素がなかったね」

「話しかけない方が怪しまれますね」

「じゃあ、その時コソツと渡すんだね！」

そして、彼女に約束を取り付け、合流するのも花咲川となり、作戦はうまくいきそう  
だ。

「あ、そう言えば慧人くん」

「何でしょう」

「家に連れてくるの頑張ってるね。何も伝えていないから！」

「……ん？それって……」

「自然にりんりんをここに誘導してきてね！」

それは相当ハードルが高いのでは？いや、自然に家につて……え？マジで？

次の日の放課後。俺の姿は花咲川にあった。……と言っても校門の前で敷地内にギリギリ入っていないのでセーフだ（何が？）

「お、お待たせしました……」

「いえ、待っていないですよ」

「白金さんが来たようなので、私は帰りますね」

「あ、け、けいさんはしっかりと無事にお返ししますので……」

紗夜さんはりんさんが来るまで一緒に居たが、俺が紗夜さんと居ることを怪しむことはないの、スルーされる。ちなみにりんさんだけでなく、その前に通ったポピパの奴らとか、彩とかにも特に疑問を持たれずに挨拶され終わった。紗夜さん最強説？

まあ、しっかりと鍵は渡した。だから、後は電話が来るまで、りんさんを出歩かせればいい。

「氷川さんとは相変わらずですね……」

「そうですね。だって、そこに紗夜さんが居るので」

「でも、自分の好きなものに突き進む気持ちは分かります……!」

「りんさんも好きなものには一直線ですからね」

「はい……ただ、どうしても一人で行くには心細くて……」

「そういうものなのか?」

「そういうものです」

並んで歩く……と今更ながら気付く。俺ってりんさんと二人でリアルで会うこと少なかったわ。大抵あこちゃんが一緒だったし。ゲーム? あつちは別だ。

「けいさんが居れば安心です。色んな人が避けてくれるので」

「……………」

それは喜んでいいのか、悲しむべきなのか。どっちか分からないなあ……。

そんな感じで雑談を交えながらついに目的地に。

「着きましたね……!」

「じゃあ、入りますか」

「けいさん。傍を離れないでくださいね」

「分かっていますよ」

ということでお店の中……うん。何というか……

「普通だ」

まあ、ゲーム系の店と違って必ずしもヤバイオタクが居るわけじゃないよね。別に入るのは初めてでもないし、いかがわしいわけでもないから緊張も背徳感もない。

ただ、俺の場合は一人で来ることはなく、大抵アイツらと一緒に来るから、そういう意味では女子と二人で来るのは新鮮か。

「けいさんけいさん」

「はいはい？」

「コレ見てください。可愛くないですか？」

「なるほど、前のイベントの……」

「はい！衣装も可愛らしくてこの時は少し頑張りましたからね」

「俺はこのキャラの使い魔も可愛いかと」

「確かに。何だか小動物みたいで愛らしい姿でしたよね」

「本当ですよ。何で現実にはいないんだろうって本気で思いましたね」

「そうですね！このイベントの時はストーリーも普段より熱かったですよね。サポートキャラとしてイベント限定で追加された彼女とその使い魔の種族を超えた友情。途中、使い魔が自身の力を抑えきれずに暴走した時なんかは、倒すべきか倒さないべきかを迫られ、倒さないで助けるルートを何度も試した記憶があります。そして……」

十数分後。

「……で、あ……もしかして、話過ぎてますか？」

「いいえ、大丈夫ですよ」

「凄いな相変わらず。好きなことになると止まらないというか、何というか……」

「羨ましいですよ。好きなことに突き進んでいく姿」

「あ、ありがとうございます。でもけいさんこそ、周りの目を気にしないあたり凄いかと」

「そうですか？」

「こう見えて気になっているような……？ん？やっぱり気にしていないかも。」

「そう言えば。この前なんですけど、この使い魔を再現で作ったんですよ。後で見に来ます？」

「い、いいんですか？是非お願いします！」

「ええ」

「よかつたあ……あ、でも湊さんから夜は予定空けとくようにって」

「へえ。でも、何ででしょう？」

「さあ……ちよつと分からないですが」

「うーん。まあ、時間もそんなに取らないですし、いいんじゃないですか？」

「なるほど。それもそうですね」



……本当に何も伝えていないのかよ。予定空けとくように頼むだけとか無茶苦茶怪しまれてるじゃねえか。もう半分バレてるんじゃないのか？

そんな感じで商品を見て会話をする。

一時間ぐらいたったころだろうか。

「ではそろそろ行きましょうか」

「ん？もう少し見ていかなくていいんですか？」

「はい。満足しました」

「なるほど。じゃあ、行きますか」

電話は来てないが、ここで嫌もう少し……とか粘ると絶対にバレるのでそんなことはしない。だが……ふむ。一体どうしたものか。まあ、いつか。そのまま家に向かう。家にたどり着いて電話が来てなかったら考えよう。

「いろいろなものがありましたね。つつい見入ってしまいました」

「そうですね。あまりフィギュアとかキーホルダーとか興味がないですが、意外と楽しめるものでしたね」

「確かに。けいさんのお部屋にはそういうグッズはなかったですね。しかも鞆にも付いてなくて……」

「まあ、気を遣わないようにしてますね。ほら、つけると鞆を丁重に扱わないといけなく

なるじゃないですか」

「……普段でも丁寧に扱わないといけないと思うのですが……」

壊れてないからいいかなって。……あれ？ダメだったかな？

「そう言えば、けいさん。一つ気になったんですが」

「何でしょう？」

「けいさんがよく組んでいる四人パーティー。あれって全員リアルでも繋がっているのですか？」

「あーぼんちゃんを含んでるアレね」

「そうです」

「まあ、そうだな。リアルでの繋がりがNFOに反映されたというか……」

「じゃあ、身近な人たちなんですか？」

「そうとも言え……ん？ちよつと待ってください」

ポケットに入れたスマホが震えている感じがする。ということを取り出してみると……

「すみません。電話が来たので少し出ますね」

「あ、はい」

相手は紗夜さんか。なるほど。

「もしもし」

『慧人さん？こちらの準備は完了です。あとどのくらいで来ることが出来ますか？』  
「そうだな……20で」

『20分ですね。了解です。家に着く五分くらい前にメッセージを送ってください』  
「了解。じゃ」

と、いうことで電話を切る。

「誰だったんですか？」

「先輩ですよ。今度NFOいつやるかって話です」

「あ、そうだったんですね」

勿論、嘘である。これは紗夜さんにも伝えたが、俺が敬語を外し、簡潔に言うことで、電話の相手がRoseliaの面々ではないことを暗に伝える事ができる。

「電話……恐ろしく短かったですね」

「まあ、りんさんと居るっていうのもありますし、何より……」

「何より？」

「電話ってなんか面倒なんですよ。メッセージや直接話す方が楽です」

勿論、本当である。こんなところで嘘をつくメリットはない。

「そうですね……確かに。メッセージの方が楽ですよね」

「ですです」

「でも、紗夜さんとは電話で長話とかするんじゃない……」

「あまりいいですね。長話するんだったら直接会って話しますし、短いなら大抵メッセージで終わりです。緊急を要したり、或いは会えない状況に限りは電話の出番はないですね。それに電話だと紗夜さんの声ではないのであまり好きではないです」

「そうなんですか？」

「ええ。電話で聞こえてくる声と言うのは本人の声ではなく、本人に限りなく近い声です。膨大な音の波形データから本人の声に限りなく近い音を探し、生み出しこちらに送られている」

「あ、聞いたことはありません……」

「だから、あまり好きじゃないんです。耳がいいせいとか、それとも普通のことなのかは分からないですが、違う声にしか聞こえないので」

「絶対音感ってそんなに凄いですか？」

「さあ。ただ、人より耳は少しいいんで分かんないです」

（耳だけじゃないと思うけどなあ……）

「慧人さんって博識ですよね……？」

「そうでもないですよ。知らないことは知らないです」

「そうなんですか？」

「ええ。案外分らないことだらけですよ」

「そうには見えませんが……」

分らないことの方が多い。でも、知る気があるかと言われたら、興味次第としか言  
い様がない。

とそんな感じで20分ほど。我が家に到着する。

「さ、あがつてください」

「おじやましまーす」

玄関に靴がないことから隠しているのだと察することができる。

「じゃあ、俺は二階に上がるんで、りんさんはリビングに行ってください」

「は、はい………」

二階に上がるフリをしながら、りんさんがリビングのドアを開けたのを確認し、彼女  
の後ろから様子を見る。リビングに誘導してと指示は来ていたが一体何が……

「え？え？」

………何だろう。よくダンジョンとかにある宝箱が見える。それも割と大きめな  
………。

ぱかっとなげるりんさん。すると、

「りんりんは

ゆきなのかぶと

リサのよろい

さよのくびかざり

あこのつばさ

けいとのかいまま

を てにいれた」

何処からかナレーション……いや、どう考えてもあこちゃんの声だな。うん。

「りんりん！お誕生日おめでとうー！」

そのまま抱きつきに行くあこちゃん。

「ありがとう……凄い演出だね……！」

「本当は謎解きやダンジョンみたいにしたかったんだけど止められちゃったんだ」

「……………え？マジで？」

「ちなみに本当ですよ」

りんさんの後ろから中に入ったが……あつぶねえ……まともな人たち残しておいて助かった。あと少して人の家が魔改造されるところだった。

「いやあ、燐子ってセンスいいからプレゼント迷ったけど……」

「どうやらよかったみたいね」

「俺なんてあこちゃんのものに合わせるために頑張ったんですよ？お陰で昨日徹夜です」

「それは大変でしたね。でも流石というべきでしょうか。手作りであそこまで可愛らしく表現するとは。あれ？それだけ拘ったのでしたらお疲れでは？」

「ええ。まあ、授業中にしつかりと睡眠時間を確保したので大丈夫かと……………あ」

「……慧人さん。私は授業中に寝るなどは言いません。ただ、寝るなら死を覚悟しなさいと言うだけです」

「あ、そうだった！欲しがっていた頭装備が二個出たから一個あげるね！」

一瞬冷たさがこの空間を支配した。

そんな中、あこちゃんの明るい言葉が響く。その言葉を聞いた瞬間、りんさんの目が物凄い輝きだした。その眩しさは俺には直視できないものがあり……

「あこにプロデュースを任せて正解だったね」

「燐子のあんな顔初めて見たわ」

「紗夜さん。今はりんさんを祝いましょう。ね？」

「そうですね。分かりました」

「さぁりんりん！宴の始まりだよ！」

「うん！」

こうしてりんさんの誕生日会が始まった。



## 付き合っているようにしか見えない二人

一つ質問をしたい。見知らぬ二人の男女が居たとする。尚、体型は両方とも普通、或いは細身とする。

二人の男女、女性が大量のポテトを自身の持つトレイに乗せ、男性側のトレイにはハンバーガー二つとドリンクが二つ。

これだけなら見たらどんなことを想像するだろうか。多くの人は、まず、ポテトの量に目が行きびつくりするだろう。そして、そんなにたくさんものを男性が食べるんだと思うのだろう。

「紗夜さん……そんなに食べられますか？」

「何を当たり前のことを」

だから、俺は思う。軽い風評被害なのでは、と。

だって、そうだろう。山盛りポテトの九割は彼女の胃の中に消えていくのだ。対応した店員も、紗夜さんがあり得ない量のポテトを頼んで若干引いてたが、隣に立つ俺を見た瞬間、「あ、この人が食べるのか」みたいな感じで笑顔を向けて来た。……違うんだなあ。そう思いながら苦笑いを返すことにはもう慣れた。

「抹茶フレーバー、紅茶フレーバーに普通のも……あ、少しもらいますね」  
「……………(こくこく)」

ちなみに紗夜さん。断りを入れずにポテトを取ると結構ふてくされる。後でご機嫌取りのためにポテトを頼まないといけなくなる。あれ？もしかしてループ世界突入？

「……………うんうん。これもおいしいですね」

「……………(ふふん)」

何かどや顔しているけど……………ふむ。

「もう少し……………こう、ポテトとマツチさせるには……………」

「……………(もぐもぐ)」

「……………あーん」

「……………(もぐもぐ)」

……………おおっ？

「あーん」

「……………(もぐもぐ)」

今気付いた。ポテトを差し出すと、まるでハムスターのように食べていく。何というか……………小動物を見ているようで……………

「癒されるなあ……………」

やっぱり小動物って可愛いよね……そう。癒しつて必要だなんて改めて実感させる。そんな実感を余所に目の前のポテトの山が消えていく……何というか……流石だなあ。

「ところで、そんな勢いで食べてまたポテト禁止にしないといけない事態になるんじゃないかな……」

「その点はご心配なく。今日のために、この一週間ほど。ポテトの摂取を普段の半分以下に抑えていました。理論上、今日はポテトの摂取をどれだけ行っただとしても、前日までのマイナスを埋めるだけで過剰摂取にはならないのです」

「いや、マイナスって……絶対マイナスはあり得ないと思うのは俺だけですか?」

「はい。慧人さんだけです」

「すげえ……断言された。え?マジで?」

「……………」

「どうしましたか?」

今気付いた。紗夜さんはフライドポテトが好きだ。……もしかして、フライドポテト、にんじん風とか言つて、スティック状にしたにんじんを揚げたら騙して食べさせることが可能なのでは?」

「……………いける」

「ちなみに慧人さん。もし私の前にフライドポテトと偽ってスティックニンジンを揚げたものを出したら……」

「出したら?」

「……………キレますからね?」

心なしか背後に阿修羅が見える。……なるほど全てを理解した。この人ポテトガチ勢だ。

そもそも凄いんだよなあ……少し前に諸事情で校長から頂いた2,000円分のカード。予想はしていたけど今さつき全てポテトに消えた。このポテトのLサイズは一つ約170gで300円ちよつと。それを7つ買っているのだ。で、目測だが彼女が6個半、俺が半分食べたって感じた。ちなみにハンバーガーはお互いに一つずつ買っている。察しのいい人は気付いているかもしれないがこの人はポテトだけで1kg以上食している計算になるのだ。ポテト限定で大食いである。

「というこどで」

「どういふことだ?」

「おかわり行ってきますね」

「……………」

二つの意味で驚愕を隠せない。ポテトの山だけでなく、ハンバーガーも消えていたこ

とと、それだけ食べてまだ足りないのかと。

しかし、流石にこれ以上は見過ごせない。だから、注文しに行こうとした彼女の手を取る。

「どうしました？」

「いや、どうしました？ じゃないです。これ以上はダメです」  
「??？」

「どうしよう。何でこの人は止められたことに疑問を持っているのだろうか。」

「ご心配なさらぬよう。ポテトは別腹ですのでまだ入りますよ」

そうじゃないんだよ。その心配はしてねえよ。

「どうかポテトは別腹……？ 普通はスイーツが別腹じゃないのか？ ……いや、そんなのどっちでもいっか。」

「お忘れですか？ 貴女のポテトの摂取量は俺が管理していると」

「ですが管理官。先ほどお話ししたとおり、私のこの一週間のポテト摂取は通常時の半分……いや、それ以下です」

「そこは知っています……が、それとこれとは話が別です」

「異議あります。話はしつかりと繋がっていますよ。いいですか？ 今の私は過去に生み出した貯金を使っている状態なのです」

「異議ありだ。見るからに過去の貯金どころか未来の分まで食している。というか、いつもより食べる量を減らしたから貯金が出来るとかあり得ないですよ」

「知らないのですか？ フライドポテトは一日の摂取量の上限が存在し、前日分の不足分は次の日に持ち越せるのですよ？ つまり、今の私は上限まで達していない。前日分までの足りなかつた分を補っているだけです。ドゥーユーアンダスタン？」

「……どうしよう。この人、ポテトをまだ食べたいだけに恐ろしいこと言い始めた。え？ ポテトの一日の摂取量の上限って何？ しかも次回以降に持ち越し？ なにそのとんでも理論。」

「すみません。その理論だと多くの人はポテトを無限に食べられることになるのでは？」

「羨ましいです……！」

そりやそうだ。俺も含め、多くの人はポテトを毎日食べない。もし、今言ったことが事実なら、ほとんどの奴がポテトの摂取量の上限がないに等しくなっているだろう。

「……………いや、待ってください」

羨ましいと言っていた彼女の目は、何か閃いたと言わんばかりに怪しい光がともっていた。……………すげえ嫌な予感。

「そもそもの話です。ポテトの摂取量に上限はあるのでしょうか？」

「……は？」

いや、そこは最初から疑問だったけど？あなたがそんなに言っていたからスルーしていたらただけ？

「いえ。もちろん上限はあるでしょう。しかし、先ほどお話ししたとおり、過去の余りが貯金として貯まっています」

「はあ……でも紗夜さんって毎日のように食べてますから貯金とかないですよね」

この話を例えるならアレだ。毎日一定額のお金をもらえたとする。使わなかった分は当然貯金という形で翌日以降に持ち越せるが、目の前の人は毎日もらった分を使っている。そして、先ほども食べたから残高はゼロのはず。で、お金だったら他人から貰えば貯金は貯まるが生憎、ポテトはそうは行かない。

……だから、この人には貯金……いや。貯ポテなんて存在しないはずなのだが……「分かりませんか？すごく当たり前の発想です。乳幼児はフライドポテトを食べません。つまり、乳幼児期に莫大な貯ポテが」

「はいはい。戯言はいいので行くぞ」  
なるほど。聞くだけ損したってこういうことを言うんだな。一つ賢くなった気分だ。

あの後、何とか俺を言いくるめておかわりに行こうとする彼女を、強引に連れ出した。ぶつちやけ、あれ以上おかしな理論を聞きたくないのが本音だ。

「……………」

「紗夜さん？」

「何ですか？今勉強中なので話しかけないでください」



そして、当初の予定通り彼女の部屋で勉強をする。宿題ってなんであるんだろうと思いつつ彼女に教えを乞うのだが……うん。ちよつとだけ機嫌が悪いみたいだ。

いや、正直そこはいいんだよ。問題は……

「そろそろ離れてくれませんか？今の状態だと字が書きにくいので」  
「いいじゃないですか。そこは勉強法を工夫するんですよ」

問題は彼女が正面から抱きついた状態で勉強をしていると言うことだろうか。座っている俺の上に乗っている。どういうことか分からない？いや、俺も分からない。彼女は参考書を読んでいるようだけど……うん。どうしようか。

とりあえず、あれだ。彼女には一回離れてもらわないと、勉強にならない気がしてきた。だって、いつも以上に集中ができていない。だが、引き剥がすのは忍びないので、動揺させて離れるように促すか。

「すみません。胸が当たっているんですけど」

「何を言っているのですか？当てているのですよ」

「それっていいんですか？風紀が乱れていますよ」

「知りませんよ。そんな些細なこと」

「いや、風紀委員。風紀委員が風紀を乱れますよ」

「それは学校の私です。今の私ではないです」

「おっとマジかこの人」

「ええ。それに、そもそもここは私の部屋です」

「とうとう？」

「だから、この部屋のルールは私が決めます。よって風紀は乱れていません」

「いいのかそれで!？」

「いいんです」

「……………いけない。動揺させるつもりがこつちが動揺したわ。まさか、彼女からそんな暴論が出るとは思いもしなかった。」

そして、離れることなく更に勉強を続けること十数分……………。

「ちよつと休憩しますね」

どうやら参考書を置いたようで、かわりに空いた手を背中に回してくる。

「じゃあ俺も休憩するか」

持っていた参考書を置く。すると、

「ごめんなさい」

謝つて来た。

「何をですか？」

「少し不機嫌になっていました。それでも、慧人さんの勉強の邪魔をしてはいけません」

ね。すぐにどきますので……」

「まあ、確かに阻害はされましたが……」

彼女は手を放し、立ち上がろうとする。俺はそんな彼女の背中に手を回し、彼女が退こうとするのを邪魔する。

「今は休憩中。だから、そのままでもいいですよ」

「……それではお言葉に甘えて」

彼女自身も再び手を背中に回してくる。

「……………」

「……………」

流れる静かな時間。何処か安心感を覚えるような温もり。もし、ここに子守歌があったら寝そうな感じがする。……まあ、俺の子守歌とか永遠に寝せてしまっただけだ(笑)。……言ってて悲しくなった。誰か否定して……

「……………」

「……………(ふー)」

「ひゃう!? け、慧人さん!」

「あ、すみません。ワザとじゃないんです」

「その返しをするってことはワザとですよね!」

「……そこに耳があつたからつい……」

「どんな言い訳ですか」

「言い訳じゃありません。事実です」

「……まさか他の子にも……」

「さあ? どうでしょうね」

「今すぐやめてください。いいですか? 私以外の人にはやらないでください」

「じゃあ、紗夜さんにはやっていいんですね(ふー)」

「ひゃう!? や、やっていいですけどやったらダメです!」

反応が可愛いので続けていたら休憩終わり宣言が出されました。

そして、休憩後の勉強会は、いつになく厳しかったです。

## 友希那さんの誕生日

10月25日の夜。

『とうわけでKeiくん。準備はやってくれた?』

『最低限の手回しだけです。後は明日やります』

『NFOで会議とは何だか新鮮ですね』

『そーしゃるでいすたんすつてやつだよ!』

『本当のところはリサさんが集まりに行くとかバレル可能性があるって事なんですけどね』

俺とRoseliaの一名を除く全員でNFOをやっていた。

友希那さんとリサ姐の家の位置関係的に、俺の家で集まってくと言うのはバレルからである。あれ?じゃあ、リサ姐の誕生日の時は……まあいつか。過ぎたことだし。

と言うのとは後には明日のそのパーティーというかその開催場所がCIRCLEなので、俺の家で集まる必要がない。

開催場所がCIRCLEの理由は明日が休日、俺がバイトに入っていて、Roseliaも予約を取っていたからだ。ここまで都合良く条件が揃っていたとは……。

『まりなさんに言ったら協力してくれたのでOKです。後片付けはいつも通りしつかりやってくれればいいって』

『そこら辺は心配しなくていいよ☆』

『そうですね。使わせていただくのですから片付けもしつかりとやりますよ』

『後は給湯室のところで軽く作れるので、そこで諸々作る予定です』

『あれ？夕食はどうするの？』

『今回は友希那さん次第ですね』

まあ、NFOで会議にも限界があることは百も承知。既に彼女たちの中で大まかに決めて、俺はそこに手伝ったり自分の役割を遂行するだけだ。

実を言うと毎回そんな立場だけど。ほとんど彼女たちが決めて、俺はフォローというか、与えられた役割をこなすというか。

『というか、明日は何やるんですか？俺は特に何も聞かされていないですよ』

『Keiの仕事は料理とかの裏方担当ですね。バイトと並行してなので、役割をたくさん与えるわけにはいかなかったです』

『バイトがなかったらどうなってたんだ俺は……』

『多分、断っていたと思いますよ……私も少し断りたい気持ちが……』

『ダメですよ！皆でやろうって言ったじゃないですか！』

『でも、一回やったことあるじゃん』

『あの時は別と言いますか……でも、分かっていますよ。やると決まった以上本気でやりますから』

『うんうん。そのいきだよ☆』

ふむ……俺がバイトに入っていなかったら何をさせられていたのだろうか。すげえ気になるが……

『まあ、明日はお任せを。Roseliaの担当は俺がやるので途中で第三者が介入はしないかと』

『さっすが〜そういう時にバイトの友人って便利だね!』

『お願いしますね。私もあまりRoseliaとKei以外には見られたくないので……』

本当に何をやるんだこの人たち。

リサ姐とあこちゃんかノリノリ。紗夜さんとりんさんは消極的。本当に何をやらかすんだこの人たちは。

10月26日。そんな不安？を余所に俺は裏で料理をしつつ、いつも通り業務を行っていた。

「やつほー」

すると鞆を持ったりサ姐を筆頭にRoseliaの友希那さんを除く面々が揃っていた。

「とりあえず、ここの掃除、最低限のセッティング、料理など、与えられた任務は完遂し



ましたよ」

「うんうん。すっかりやってくれたね」

「ふっふっふっ。流石は、魔王けー兄。完璧ではないか」

「お褒めに預かり光栄です。あこ姫？」

「うむ。くるしゆうない」

言葉だけ聞けば従者と主人のやりとり。だが、実際は俺があこちゃんの頭をぼんぼんと軽く叩いている(?)状態でのやりとりなのでまあ、ちよつと不思議な状態。どつちが上なのやら。

「では、私たちが準備しますので湊さんが来たらお願いします」

「それまでの間は誰も入らせないようにしてください……!」

「あ、慧人くん。友希那が来たら連絡して。早すぎたら足止め頼むからよろしく」

「へーい」

ということ、部屋から出て行く。足止め……しなくていいことを祈るか。

こう考えると真っ先に思い浮かぶのはパンドラの箱だろうか。他には、豎琴の名手オルペウスと冥王ハーデースのやり取りだったり、プシユューケーとペルセポネーだったり。

何が言いたいかという古来より神や人と言うのは、開けてはならない箱を開けた

り、振り返ってはならないのに振り返ったり、中を見るなど言われているのに見たりと、禁止される行動をしたくなるものである。だから、今あの部屋に入りたくなる気持ちが少ないのは普通のことなんだ。

「まあ、入らないけど」

もし、部屋で彼女たちが着替えていたらアレだし、入るなって言われて入ってしまったと彼女たちからの信用が失われる可能性がある。一時の興味に流され、彼女たちからの信用を失うのはあまりに痛い。

まりなさんには話を通っている。まりなさんが「あの部屋に近づくと冬木君に殺されるからダメだよ」と言ったらしい。いや、そうだけだよ。それで、さつきから同僚たちに恐れられているんだけど？ 軽い風評被害だよ？

そんな感じで通常業務をすること三十分。

「友希那さん。待っていましたよ」

「ええ。他の皆は？」

友希那さんが現れる。見えたと同時にメッセージを送信。

何というか……普通はこっちで予約の確認！とかしないといけないだろうけど、よく利用してくれるいつもの五バンド、25人に至っては、俺とまりなさんは少なからず全員把握しているから軽い顔パス状態。他？ 他の客は俺が怖いとかで近づいただけでお

びえられるから嫌だ。

メッセージの返答としては準備OK!だそうだ。よかった。普通に案内できるな。

「つい先ほどですね。さあ、行きましようか」

「分かったわ」

嘘はついていない。30分前だろうが、俺にとつてはついさつきということにしておけばいいからな。

「……ですね」

「ありがとう」

そう言つて友希那さんが扉を開ける。すると、

「友希那さん……」「友希那さん」「友希那」「湊さん」

「「誕生日おめでとうニャー!!」」

(なんなのかしら……)

なんなのだろうか……。

友希那さんの後ろから見えた光景としては、猫耳、猫の手、猫の尻尾を付けた、りんさん、あこちゃん、リサ姐、紗夜さんの四人がいた。

……一体、何なのだろうか？

「ちよつとあなたたち。最近私のことを誤解……」

「フシャー！」

パフツ

「いたっ」

紗夜猫に伸ばされた友希那さんの手。それが可愛らしい……間違えた。威嚇する猫の鳴き声と共に払われた。

すると、リサ姐……いや、リサ猫と目が合う。……ああ、了解です。

「まあまあ友希那さん。ほら、誕生日だからこんな可愛らしい四匹の猫が祝ってくれるじゃないですか」

「にやっ！にやっ！」

しゃがみ込んで脇に置いてあった猫じやらし（のおもちや）を片手にリサ猫の前でゆるらさせる。それをリサ猫は捉えようと遊んでいる。

「そういうこと……」

すると、友希那さんのスイッチが入る。なるほど。ここからは本気で見ていくようだ。半端な演技では通用しないと……まあ、俺関係ないけど。

他の四人も空気が変わったのには気付いた様子。各々が猫っぽい行動を取り始めた。

「……………（スツ）」

「チチチ……………」

手を差し出すも、りん猫はカーテンの隅から顔をのぞかせるだけで懐こうとしない。

一方あの猫は駆け回って、そのまま

ズシヤアアアアアアツ!

近くに置いてあった紙袋に突撃していった。そのまま紙袋を貫通し……なるほど。それっばいな。

「はい。どうぞで」

「ありがとう」

猫じやらしを友希那さんに渡す。そして揺れる猫じやらしに喜々として飛びかかるリサ猫。うんうん。……そう思っていると紗夜猫と目が合う。………なるほど。

「はい」

「にゃ〜」

煮干しを取ってきてそれをあげる。すると、口に咥えてそのままゆっくりと食べる……改めてみても破壊力がやばい。カラオケで一度見たことあるけどあの時以上に拘って……ああ、尊い。なんて可愛らしいんだろう……特に紗夜猫。このまま持ち帰りしたい。Take out OK?

そんなことを考えているとリサ猫と一瞬目が合う。あ、了解です。

「じゃあ、友希那さん。俺はいつたん戻りますのでごゆっくり」

業務に戻るふりをして、ケーキとか諸々を運ぶ準備に取りかかる。

あの素晴らしい空間に居た余韻に浸りながらふと思う。なるほど……

「俺、バイトで助かった」

あんなの俺はやりたくない。心の底からそう思った。

「お疲れ様」

「あ、お疲れ様ですまりなさん」

「どうどう？ 様子は」

「まあ、友希那さんのサプライズパーティーってことで大成功かと」

「そっかあ。他のバンドの子たちもいろいろやっているみたいだからね」

「あはは、まあ、ここ使いやすいですし」

「じゃ、この後もよろしくね」

「了解です。あ、賄賂……間違えた。まりなさんたち用のケーキ作って置いておいたの  
で後で、皆さんと食べてください」

「ありがとー！ 後の仕事は私たちがやるから冬木君はRoseliaに専念してて

！」

「あざまーす」

ここうやって手回しも万全だ。向こうは甘いものが食べられる。俺は仕事が減る。W

in—Winってやつだ。

そしてケーキのトッピングを済ませて、カートに乗せて運んでいく。

「如何でした？友希那さん」

「みんな完璧に猫になりきっているわ。それでこそRoseliaよ」

「やったニヤー！」

「では、ここからはパーティーですかね。ケーキもご用意しましたのでどうぞ」

ケーキも毎度の如くお手製である。友希那さんが主役なので、猫型ケーキに猫型クツ

キーなど猫づくしである。更に、

「こちら、ラテアートの猫でございます」

「か、可愛い……！」

「おお……っ！これは素直に凄い……！」

「け、けー兄！絵も確か絶望的に下手くそだったんじゃない……！」

「ペンで書く絵はダメでも、ラテアートは行けました」

紙とかに猫を描かせるのと何処かの金髪のアイドルバンド兼女優並みに悲惨だが、ラテアートならいけた。自分でも不思議である。ちなみに昨日あれからこのためだけに徹夜したのは内緒だ。

「でも、今は何を……？」

「現在3Dに挑戦中です。先に食べていてください」

「平面から立体に行くのですか……?」

「ね、猫づくし……!」

「凄い……ここまで慧人くんがするとは想像もしていなかったよ……!」

「任せてください。料理と手芸とサッカーは本気なんで」

「あれ?勉強は……?」

「……………」

「慧人さん?返事は……」

ふう。ここからは神経を使わなければいけない。手早くかつ丁寧……!

「完成です」

「「おおー!」」

「じゃ、写真撮っていい?」

「あこも撮るー!」

「す、凄いです……!」

「完成度が高い……!」

「か、可愛らしいにゃーちゃんが……!」

何だろう。今更だが彼女たちの誕生日を迎えることにできることが増えている自分



がいる。前は羊毛フェルトだし、今回はラテアート。俺は何を目指しているのだろうか。

とそんな感じで盛り上がり、終わりを迎えたころ。一つ忘れていたことがあった。

「そう言えば、友希那さん。誕生日プレゼントです。どうぞ」

「ありがとう。中を見ても」

「ええ」

そして中から出てきたのは、羊毛フェルトで作られた猫。

「本当は大きめのを作ろうか迷いましたが、このような形で」

「あれ？これって……」

「お察しの通り、リサ姐に渡したのとお揃いです」

いやあ、写真撮っておいてよかった。記憶だけでの再現は無理だ。もともと、二ヶ月で成長しているはずだが。

「皆、ありがとうね。最高の誕生日よ」

友希那さんの言葉と締め言葉。うんうん。

「じゃあ、次の予約を取ってくるわ」

そして、友希那さんは予約を取りに行く。

「やるじゃん慧人くん。アレはアタシたちでも予想外だったよ」

「本当に何でもできるんだね！凄いやい！」

「尊敬します……！」

「流石です」

「ありがとうございます」

「こんな感じで無事にサプライズは成功。良かった良かった。」

## お菓子作り教室に向けて

ある日の午後。

「そ、それではお菓子作り教室の予行練習を始めます！」

「分かりました」

場所は羽沢珈琲店。そこにはつぐみ、紗夜さん、俺の三人がいた。

「……………？ どういうことですか？」

ちなみに、俺は紗夜さんに何の説明も受けずに連れてこられたため何も理解していない。お菓子作り教室の予行練習？ ナニそれ？

「……………あれ？ 紗夜さん。説明しなかったのですか？」

「……………いえ。決して忘れていたわけではありませんよ。決して」

（言えない。慧人さんと一緒にお菓子作りができると舞い上がって、忘れただなんて言えない）

（あはは……………忘れていたのかな……………？）

「……………つぐみ。企画説明よろしく」

「あ、はい。えつと、前回、……羽沢珈琲店でお菓子作り教室があつたんです。……羽沢

珈琲店の認知度アップとお客さんとの交流を深めるという目的で。結果としては大成功だったんです！」

「へえー。そんな面白そうなことやっていたんだ」

「そして、お母さんがこれなら第二回もやりたいねって言うてですね。近々やることになりましたって……あ、宣伝はこれからしていきますので」

「なるほどな」

「ちなみに前回はアイシングクッキーに挑戦しましたよ。私もお菓子作り教室に参加させていただきました」

「紗夜さんがお菓子作りを？」

「はい。羽沢さんに凄く助けてもらいながらですが」

「い、いえ。私は当然のことをしただけです」

何だろう。出会った頃の彼女からは想像がつかないな。お菓子作りって。

「最近はずいぶん上手く作れるようになってきました。これも羽沢さんが丁寧に教えてくれたおかげですね」

「そんなことないですよ。紗夜さんの練習の賜物です！」

「……それで、何で呼ばれたんですか。結局」

「あ、えつとですね。その前回もすっかりと準備したんですけど、いざ当日となるとやっ

ぱり、説明で焦っちゃったり、言葉足らずなところが出て来たりして……だから、第二回では前回よりもっと上手く教えられるよう練習したいんです」

すげえ……モカとかからは聞いていたが改めて見るとすげえな。やつぱり。このつぐみの真面目さというか何というか……。

「なるほど。ツグってるなつぐみ」

これは普通で収まるレベルじゃないだろうと心底思う。

ちなみに、モカっているって言葉もあるらしいがあつちの方は使いどころがまだ分かっていない。

「やりたいことは大体理解した。なるほどな。つまり、事前に初心者と一緒に作ってみることで、初心者の挙動や反応を把握。更にもう答えればいいのかを練習するって訳だな」

「本番に近い形で練習してみる訳ですね。とてもいいことだと思いますよ」

「あ、あれ？紗夜さん、怒らないんですか……？」

「怒る？なぜでしょうか？」

「え、えつと、改めて考えると、紗夜さんには私の練習に付き合わせてしまっているというか……その」

「実験台にしているって感じか？」

「け、慧人先輩！」

「そうですね。だとしても、私としてはとてもありがたいですよ」

「ありがたい……ですか？」

「はい。前回を見て分かる通り、私は不器用なところや融通が利かないところもあります。更に周りの方が居る状況で、私一人ばかりに時間を割いて頂いたり、私一人の遅れで全体のスケジュールがズレてしまうのは申し訳なさもあります」

「そ、そんなことは……」

「ですが、今日なら別です。羽沢さんの練習と私の練習が同時に行えますし、マンツーマン。いえ、2対1で教えを乞うことが出来るのですからこれ程ありがたいことはありません」

「凄……この人もこの人で誠実さを体現した人だなあ……最近、ポンコツな面が多く出ていたけどやっぱり、こういう紗夜さんも格好いいな……」

「で、結局俺は何をすればいいんだ？ 試食？ 実食？」

「ち、違いますよーえつと、レシピ通りできているかとか、ポイントが間違っていないかとかを見てもらいたいです。もちろん、一緒に作りながらですけど……」

「了解。そのレシピは？」

「あ、これです」

「ふむふむ。今回はパウンドケーキ。なるほど、ノーマルなものをここでやって、なんとか入りみたいなのは各自で挑戦してくれて感じかな」

「はい。前回はクッキーでしたから今回は違うものが良いかと」

「覚えた。レシピ返すわ」

「はい……え？もうですか？」

「パウンドケーキは何度も作ったことあるし、レシピは頭の中に入ってるからな。まあ、安心しろ。そこに書いてあるとおり忠実にやるから」

「心配しなくていいですよ羽沢さん。慧人さんは料理に関してしつかりと信用がかけますので」

「心配はしていませんよ。慧人先輩の料理の腕はこの目で見ていますからー」

「何というか……過大評価な気もするけどな。まあいい。頼られた以上しつかりと応えるのが道理ってやつだ。」

「じゃあ、そろそろ始めて行くか。ということのでつぐみ。よろしく」

「あ、はい！じゃあ、始めて行きますね。まずは砂糖120g、薄力粉120g、ベーキングパウダー小さじ2/3をとっていきましょう」

「大体こういうところから性格というのは現れるんだろうなと思う。まあ、目分量でやる人は置いといて、紗夜さんみたいにこの位？いやもう少しいいながら慎重に秤で

量っていく人もいるし、俺みたいにさっさと済ませていく人も居る。まあ、慣れとか感覚もあるからなあ、こういうのも。

「中々、小さじ2／3は難しいですね……!」

「120gよりも大変ですよね」

「これくらいでどうでしょうか」

「OKです!じゃあ、今量った薄力粉とベーキングパウダーを混ぜ合わせて、ふるいにかけてみましょう。あ、砂糖は一旦放置でお願いします」

ということ、さっさとふるいにかける……

「……ふむ」

「どうかしましたか?」

「いえ。前から疑問だったのですが、何故ふるいにかけるのでしょうか。何となくこの塊?みたいなのを取り除くのは分かるんですが……」

「そうですね。この塊……ダマがあると完成したときにもダマになってしまったり、後はふるいにかけると少し湿っぽい粉に空気が入って粉がさらさらになって膨らみやすくなるんですよ」

「なるほど。そういう事だったんですね」

「はい……で、大丈夫ですよね?」



「ああ。問題ないな……つと、こんなものか」

「あの……そう言えば何回やればいいんでしょうか」

「あ、すみません。えっと、この目が細かい方で二回。そして荒い方の一回でボウルに入れてあげてください」

「なるほど」

「ちなみにふるいがなくとも代用品はいくつかあります。ザルや茶こしは思いつくでしょうが、実は泡立て器も粉ふるいの代用に使えるんですよ」

「そうなんですね」

「ええ」

「慧人先輩、流石ですねー」

「そうでもないぞ」

とまあ、紗夜さんの方がつぐみが言った手順まで終えたようなので次の工程へ。

「では、こちら、ボールの方に常温で柔らかくしたバターがありますので、こちらを白っぽくなるまで泡立て器で混ぜましょうか」

まあ、こういう操作は手慣れたものなので混ぜ合わせ始める。

「羽沢さん。ここで言う白っぽくは前に教えてもらった時の白と同じで考えればよろしいですか？」

「はい！大丈夫です！」

「分かりました」

なるほど。この感じだったら紗夜さんに伝わってるな。

「出来たつと」

「そうですよね。この感じですね」

「紗夜さんの方はどうです？」

「私の方はもう少しですかね」

「ですね。もう少し白くなるとちょうどいいかと」

そんな感じで混ぜていくといい感じの色になったようだ。

「では、砂糖を3回に分けて入れて、すり混ぜていきましようか」

ということ、第一弾を投入して混ぜていく。

「ここは40gずつ量った方がよいのでしょうか？」

「あ、ここはだいたい大丈夫です。一回じゃなくて、何回かに分けて混ぜるだけで、最終的には全部入れますので」

「なるほど。じゃあ……」

慎重に入れていく紗夜さんとそれを見守っているつぐみを尻目に自身の工程をテキパキと終わらせていく。

「ちなみにですが、ここでバナラエツセンスなどを入れることもありますね。まあ、今回のレシピでは使わないのでスルーしますが」

「そうですね。今回は本当にベーシックな、基本的なものをやるので……」

「何事も基礎が大切ですからね。と、こんな感じでよろしいでしょうか」

「はい！大丈夫です。じゃあ次ですね、今度は卵を割って入れていきましよう。今度も一個入れて、混ぜ合わせて、もう一個入れて混ぜ合わせると、交互にやっていきましよう」

「分かりました」

卵って、両手でパカツてもいいんだけど、片手で割った方がと効率いいよな……つて理由だけで、前に練習したっけ。そのおかげでわからないけど……

「羽沢さん。私も慧人さんを真似して片手で割った方がよいのでしょうか？」

「や、やめておきましょう！片手で割るのはハードルが高いです！」

「……確かにそうですね。失敗して殻が入ったりしたら大変です。ここは普通にいきましよう」

「な、なるほど……流石に当日は片手で割る人は居ないよね？もし居たら小さい子が真似しそう……」

「ん？片手で割っても問題ないんじゃないのか？」

「いいですか慧人先輩。これが炒り卵とか、スクランブルエッグならまだしも、ここで殻が入ると中々厄介なんですよ。できる人はともかく、このパウンドケーキで挑戦するのははつきり言つて無謀です」

「いいかつぐみ。絶対に失敗できないというプレッシャーに打ち勝つてこそ、真の成長が見込めるというものだ」

「うう……さ、紗夜さん……！慧人先輩をなんとかしてください……」

「そうですね。確かに、時にはそういう緊張や刺激が更なる高みへと至るのに必要な時もあるでしょう」

「あ、あれ？さ、紗夜さん？」

「しかし、今はその時ではありません」

「そ、そうですね。よかつたあ……流されないでいてくれて」  
と、そんな感じでよく混せて……と。

「あ、この辺りで大丈夫ですよ」

「そうですか」

「じゃあ、次はさつきふるいにかけていた粉たちの出番です。粉を入れてもらつて今度はこのゴムべらで切るように混ぜてください」

「切りますか……？こうグサツとやればいいんですか？」

「えっと、切るように混ぜると言うのはえっと……紗夜さんの利き手が右手だから……」

「紗夜さん。左手でボールを持ってください」

「そうですか？」

「そうですね。じゃあ、右手で持っているゴムべらで『て』や『の』の字を描くようにゴムべらを回してください。それと並行して左手は手前に回し、回ったら左手を離してまたボールを持ってを繰り返すんです。まあ、口で言っても伝わりにくいので見て真似してください」

「ということを実践する。なるほど。切るように混ぜるでは伝わらないのか？」

「こ、こうですか？」

「そ、そうですね！上手です！それに慧人先輩のフォローも流石です！」

「ありがと。まあ、表現すると難しいから実演しながらの方が教えやすいだろうし。ちよつと来てくれるか？」

「あ、はい」

呼ぶとつぐみが来る。来てもらったので、

「じゃあ、左手でボール。右手でゴムべらを持ってくれるか」

「は、はい。こうですか？」

「そうそう。で、教えるときなんだが、相手が友人だったりするときは一緒にやった方が

早いかな。こうやって」

つぐみの背後に立ち、彼女の右手の上に軽く右手を添え、左手は彼女より少し奥の方を掴む。

「あ、確かにそうですね。身体で教える……みたいな感じですね」

「まあな。初対面の相手とかにはやるのは厳しいだろうし、やらなくてもいいだろうけど。ただ、小さい子ども相手とかならこっちの方が分かりやすいかもな」

……まあ、つぐみなら出来るだろうが、俺がやった日なんかは相手が固まるか怯えるかで進まないだろうけど。

と、そう言いながらゆつくりと動かしていく。お互いできるからそこまで問題は無い。

「そうですね。見本を見せるのもいいんですが、一緒にやった方が分かりやす……っ！」  
（ど、どうしよう……紗夜さんがジト目でこっちを見てきている……あ、あれ？私何かやったかな？）

「どうした？何か問題あったか？」

「い、いえ。何も……あつ」

「ん？」

（こ、これだあ……！私が慧人先輩と密着して作業しているからだ！ご、ごめんなさい紗

夜さん！そういうつもりじゃなかったんです！決してそんなつもりじゃ……！」

「慧人さん。こんな感じで混ざりましたがいかがでしょうか」

「そうですね。オツケーだと思えますよ。あれ？紗夜さんどうしたんですか？目が少し怖いですよ？」

「いえ、何でもありません」

「あ、こつちも出来ましたよ！じゃあ、次の工程ですね。型を取ってきます！」

「おう。焦らなくていいぞ」

「わ、分かりました！」

ということ、少しすると目の前に型が。

「ではここに流してください」

「分かりました」

慎重に流していく紗夜さん。そして流し終わったようなので……

「じゃあ、次は真ん中をくぼませましょうか」

「どのくらいくぼませればよいのでしょうか」

「え、えーっと、人差し指の第一関節から第二関節くらい……ですかね」

「なるほど。分かりました」

くぼみも作っていく。

「そーいやつぐみ。ここのオーブンの設定はどうなっている?」

「設定ですか?」

「予熱とかの設定。予熱は必要だが、ここのオーブンの設定がどうなってるか分からなくてな」

「あ、ご、ごめんなさい。今すぐ予熱しますので……」

というこゝとで予熱してくるつぐみ。

「予熱……予め温めておくということでしょうか」

「正解ですよ」

「でも、何故それを?」

「当たり前なんです。オーブンは普段から中が高温って訳じゃないです。常温からスタートしますし、一瞬で高温にもなりませんよね?」

「はい。それは当然です。徐々に温度が上がっていきまゝし、形状から全体が高温に達するには時間が必要です」

「その通りです。そしてレシピにある時間。今回ですと180℃で40分やるんです。これをもし予熱をなしで始めるとどうなるか」

「予熱なし。つまり、常温からスタートしていますので……180℃で焼いている時間は40分より短くなりますね」



「ええ。そうになると、特にこういうスポンジケーキとかは膨らみが足りなくなってしまうたりするんですよ。高温で正確な時間温めようと思ったら予熱は必要不可欠です。ちなみにですがパウンドケーキ以外にも、オーブンを扱うときは注意してください。予熱が必要なのかそうでないのかは」

「はい。勉強になります」

「まあ、実際は予熱の時間を逆算して、タイミング良くオーブンを使えるようにするんだが……」

「ごめんなさい……忘れていました」

「気にすんなよ。今回は言ったらアレだが失敗してもいいんだ。本番でその失敗をしなければいいんだから」

「そうですねー」

お菓子作り教室の参加者に予熱の時間待たせるのは時間の無駄だろうが、今回は別。俺らの前でいくら失敗しようとフォローできる範囲ならフォローする。それだけだからな。

「それに今回のことで興味を持ったところから他のレシピで試したり、アレンジを加えたりするだろうな。お菓子作りの楽しいところは、よりよいものを求めていろいろ試して、自分の納得がいくようなものが作れたり、近づいていくこと。このパウンドケーキ

だってそうだ。加熱時間などはオーブンによっても変わってくるし、材料の分量も他の具材との兼ね合いも考えていく。時には失敗もするけど、その分成功したときが楽しくよりよいものに感じる。だから探求することをやめられないんだよ」

「それが慧人先輩の料理に対する考え方なんですネ……凄いです！そこまで考えているなんて……」

「まあ、お菓子作りだけじゃなく、普通の料理全般そうだけだ」

「バンドも同じかもしれないですね。同じ曲のアレンジでも、他のバンドと自分たちのバンドでは違ってくる。でも、それはそのバンドに合ったものを見つけていこうと試行錯誤を繰り返した結果。それぞれのバンドの中で噛み合うものがあってとても素晴らしい音となり、届いてくる」

「そうかもしれないですね。さてと、このオーブンの予熱ってどれくらいかかる？」

「えーっと、そうですね。もう少しかと」

「オツケー。で、オーブンで40分やってる間は どうする？」

「えっと、当日ですが、洗い物と片付けをしてもらって、残った時間は自由ですかね」  
「了解」

と、そんな感じで時間を見計らい、オーブンの中にパウンドケーキを入れていく。

「ぶっちゃけ、洗い物って一番面倒なんですけど……はい、紗夜さん」

「使ったものを綺麗に洗って片付ける。大切なことですよ。はい、羽沢さん」

「でも、洗い物って一人でやると大変ですよね……」

「そうそう。複数人居ればこうやって分担できていいんですけどね。はい、紗夜さん」

「慧人さんがスポンジで綺麗にし、私が洗剤を洗って落ととして、羽沢さんが拭きあげる。なるほど、確かに効率的ですね。はい、羽沢さん」

「刃物とかだと危ないですけど幸い、今日は安全なものばかりですね」

「でも、後で切り分けるのに包丁とか使うんじゃないのか？はい、紗夜さん」

「そう言えばそうですね。それに、食べるのでしたら食器も使いますよ。はい、羽沢さん」

「当日は、そのまま……でするので焼き上がった長い状態でお持ち帰りいただくことも可能です。もちろん、ここで切り分けてというのも全然いいんですけどね」

「まあ、各自でいいだろ。使ったとしてもその分はきれいにしてもらえばいいし。はい、紗夜さん」

「そうですね。自分が使ったものは自分できれいにする。とても大切なことです。はい、羽沢さん」

「コレで最後ですかね。やっぱり、分担してやると効率がいいですね」

いやあ、冬だからか手が少し冷たい気がする。そりゃ、水でやっていたら冷たいか。

「お疲れ様です。で、どうだった？ つぐみ」

「そうですね……やつぱり、一緒に通してやってよかったなあつて。まだ少し心配だけど、頑張つてやってみます！」

「まあ、伝えるところで失敗しても、それで何か言いがかりつけるような面倒なヤツは参加しねえだろ」

「そうですね。前回もそう言った方は見受けられませんでしたし」

「あはは……で、でもどうしよう……前回以上の反響でもし、そんな怖そうな人が参加したら……」

「大丈夫ですよ羽沢さん。慧人さんより怖そうな人はきつと参加しませんよ」

「さ、紗夜さん!？」

「あはは。確かにな。まあ、もしそういう面倒ごとがあつたり、面倒なヤツがいたら教えてくれ……締めておくから」

「あは、あはは……」

（ど、どうしよう……慧人先輩なりの冗談か本気か分からない……）

「ええ。お願いしますね」

（あ、本気だ……この人たち本気だった……!）

「後は蘭とかひまりからよく聞かすが、つぐみはツグリ過ぎるから手伝えることがあつた

「ら言えよ」

「ええ。手が空いていたら手伝えますので」

「あはは……ありがたいんですけど……慧人先輩」

「ん？」

「ツグるって誰から聞いたんですかあ……！」

「え？アフグ口の四人。だから巴やモカからも聞いたぞ」

「皆……！」

「それにモカから、今度広辞苑が改訂されたときに載るって聞いたんだけど？」

「モカちゃん!? な、何言ってるの!？」

「なるほど。それは覚えておかないといけませんね」

「紗夜さんまで!？」

「でも中々ツグるって難しいんですよ」

「それは用法がですか？」

「いえ。俺が高校で言っても中々伝わらないので……用途が違うのかなって思い始めて」

「それはそうですよ……！」

「慧人さん。それは広めていけばいいんですよ」

「あ、なるほど」

「なるほどじゃないですよ！」

「え？」

「え？」

「だって、広めれば解決では？」

「そうですよ。伝わらないなら、伝わるように全員に周知させればいいんですよ」

「あ、紗夜さん流石です。まずはウチの虎南高校全生徒に広めてみますね」

「なら、私は花咲川の方を」

「や、やめてください……！！流石に恥ずかしいです……！！」

すると頬を赤くし、頭から湯気が出ているつぐみが。

「どうしたつぐみ！ツグリ過ぎて熱が出てきたか!？」

「それは大変です！ツグリ過ぎによる体調不良だなんて！」

「お二人ともくっ！」

何故か半泣きになりながらやめてくださいと言われたので、ツグるとい言葉はつぐみに対してだけ使おうという結論になった。まあ、それも大分妥協した末の結論なんだが……まあいつか。

「あーで、落ち着いたか？ つぐみ」

「な、なんとか……」

「そろそろ焼き上がる時間ですね」

「あ、お二人ともここで食べていきますか？」

「俺はそうする。まあ、本当は時間を空けて食った方がいいんですけど……」

「いいんですけど?」

「……ウチに持って帰ると明日の朝、勝手に両親が食べるからなあ……」

「……………」

「まあ、出来たてが食つてみたいってのもあるけどな。いつも時間おいているし、どれだけ変わるのかってね」

「あはは……紗夜さんはどうします?」

「私は家に持って帰ろうかと。ところで、何日くらいおいた方が良いでしょうか?」

「プレーンなんで48時間から72時間。なので二日三日くらいですかね。まあ、時間を空けすぎるとアレですが、別に明日食べても全然いいと思いますよ」

「へえ、何か理由があるんでしょうか」

「あ、私が説明します! えっと、焼き立てというのは実はふわふわしていて生地がなじんでいないんです。熱を取つてあげて、冷ましてあげると、だんだんと生地がなじんで、パウンドケーキならではのしっとりとした食感に変わるんです」

「なるほど。つまり、時間はかかるが、時間をかけた方がなじんでおいしくなると」

「はい。あ、ちょうど焼き上がったみたいです。出していきましょうか」

「というこで出していく。すると……」



「おいしそうに焼けたな」

「香りもいい感じですよ」

「そうですね。いい感じだと思います」

「ということでも冷ますことにする。保存するにしても、ここで食べるにしても、粗熱を取ってある程度冷ましていかないとな。」

「やはり、こうやって待つ時間が必要なんですね」

「いいじゃないですか。焦ったら負けですよ」

「確かに。でも、こうやって待つ時間もいいものだと思いますよ」

「そうですね。こうやって、雑談しながら待つ時間は好きです」

「一人よりは楽しいな」

「そうですね」

「ゆったりとした時間が流れる。こういう時間を紗夜さんやつぐみと共有できるっていいものだなあと思うこの頃。」

「あ、そうだ。何か飲みますか？」

「そうだな。コーヒー、ブラックで」

「では私はカフェラテを。あ、慧人さん」

「何でしょう」

「ラテアートをお願いできますか？」

「いいですよ。何をご希望で」

「では、犬の方を」

「分かりました。つぐみ。貸してくれるか」

「は、はい！」

まあ、友希那さんの誕生日のあれ以来。何かとカフェラテを作るときはラテアートをしている気がする。3Dは時間がかかるから自分用ではやらないけど、2Dならよくやっている。こういうのって練習が大切だからな。

ということ、ラテアートで犬。可愛らしく、そして犬っぽさを出して……

「頼んでおいて何ですが、飲むのがためられます……」

「す、凄いです……絵が壊滅的って聞いていたのに……」

「……………俺の絵が壊滅的って誰から聞いた……………」

「千聖さんです。えっと、前に『慧人にだけは絵のうまさで負けていないはずよ……』

！』っておっしゃっていたので」

「いいや、俺の方がうまいはずだ」

「五十歩百歩。いえ、どんぐりの背比べ……」

あの女……自分がどれだけヤバい絵を描くか自覚がないのか……。

「でも、慧人さん。ラテアートで描けるのでしたら、紙にも描けるのでは？」

「と思いますよね？それがダメなんですよ……悲しいことに」

「……………」

「で、でも、ラテアートが上手いじゃないですか！わ、私はこんなに綺麗に描ける自信がないですよ」

「ちなみに3Dの方も描けるみたいですよ」

「本当ですか!?!いいなあ……珈琲店がラテアートを提供できたら、今よりお客様が満足できるかも……」

「羽沢さんらしい意見ですね。でも、出来ないよりは出来る方がいいかもしれませんね」  
「ただ、ここつて、珈琲店だろう？珈琲がメインなのにラテアートがメインに変わるんじゃないか？」

「ううっ……あ、限定とかどうでしょう。この日限定！的な感じで……」  
「それならいいかもしれないですね」

「かもな。それに可愛い看板娘が目の前でラテアートをしてくれる……っただけで客が釣れるんじゃないかねえのか？」

「か、可愛い……っつて、慧人先輩！お客様をそんな魚みたいに……」

「入れ食い状態っつてやつでしょうか？羽沢さん、可愛らしいですから」

「さ、紗夜さんまで……!」

「さて、そろそろいつか。つぐみ。紗夜さんの方の持ち帰る用意よろしく。俺はその間に切って分けておくわ」

「わ、分かりました!」

時間をおいたおかげで粗熱はしつかりとれた様子だ。よし、これなら大丈夫だな。皿の準備もしたし……よし。

「では、食べましようか」

「そうですね。いただきます」

「いただきます」

ということまで一口……ふむふむ。

「出来たてでも普通にいけるな」

「ですね。でも、これが時間をおくともっとおいしくなるんですよ」

「なるほど……これを我慢するんですね。おいしくするために。……日菜が我慢できるかしら」

「だ、大丈夫ですよ……日菜先輩でもしつかり言っておけば……」

「……そうだといいんですけどね……」

日菜か……まあ、無理だろうな。

「紗夜さん。はい、あーん」

「あーん……うん。おいしいです。慧人さん。はい、あーん」

「……おいしいですね」

「……あれ？お二人つて付き合っていたんですっけ？」

「いいや、違うぞ」「いいえ。違いますよ」

「……え？そういうのつて……その……付き合っている人たちがやっているイメージが

……」

「いえ、紗夜さんがやってほしそうな空気を出していたので」

「そ、そんな空気出してません！」

「仲がいいんですね……見ていて和みます」

「つぐみもやるか？はい、口開けて」

「……え？ええっ？」

「いいですね。つぐみさん。口を開けてください」

（わ、私はどうすればいいの……!?!）

「はい、あーん」

「うっ……あ、あーん……」

この後、本日何度目かの顔を真っ赤にするつぐみが見られた。

なお、お茶会は無事に終わりこのお菓子作り教室に向けた練習は幕を閉じることに。ちなみに、紗夜さんが、日菜からパウンドケーキを二日守るのはとても大変だったと漏らすことになるのだが、ある意味予想通りだった。

## 看病しよう ☆

朝……今日は天気がよいにも関わらず朝練はない。朝練はないが普段の習慣で割と早めに来てしまった。なのでちよつとボールを蹴つて早めに教室に入ることにする。

で、朝練なしの理由は……まあ、何というか。

「まさか……ウチのキャプテンが朝補習を組まれるとは」

ウチの阿呆が日頃の追試や放課後の補習だけじゃ足りなくなつて、朝も使わせてくれるとのこと。それで休みだ。……あほくせえ。とまあ、うちの阿呆は置いといて、

「どうした冬木？何か考えごとかい？」

「……………キャプテンのこと？」

「違うな。いやちよつと気になることがあつてな……」

昨日バイト中に *Rosealia* が入店した（まあ予約入っていたの知つてたけど）。だが、そこに紗夜さんの姿はなかった。彼女たち曰く、明らかに無理してそうだったから帰らせたそう。本人は隠して誤魔化そうとしていたらしいが、その程度見抜けないはずがないと一蹴したらしい。

だから、心配で連絡も取ろうとしたが結局取つてないしで、現在。気になりすぎてい

る節がある。

ピロリン♪

L O N E……電話？日菜から？

「もしも——」

『おねーちゃんが熱出した！』

あーやつぱりか。なるほど、昨日の R o s e l i a の皆の目と判断は正しかったと。

「分かった。家に人は？」

『えっと、お父さんとお母さんは仕事で、あたしはまだ居るけど学校で外せない用事が

……』

あの日菜が紗夜さんより優先しなければならいなんて、いやそれもだが……

『それにおねーちゃんに言ったら、「私のことはいいからあなたは行きなさい」って……』

あの紗夜さんが、自分のために妹が学校を休むことをよしとしないか。

「なら、俺が看病しにいく」

『学校は？』

「サボる」

『分かった！待ってるね！』



切れる電話。スマホをしまい、俺は鞆の中に荷物を戻していく。

「悪い。森下に千石。授業ノート任せた」

「ちよつ、お前。何処に」

「俺には行かなければならない場所がある」

「……………分かった。行つてこい」

そして鞆を背負つて、そのまま窓に向かつてジャンプ。

「……………アイツここ何階か分かつてるのか？」

「……………分かつてないでしょ」

着地を綺麗に決めてそのまま下駄箱で靴を履き替え、氷川家に向かう。

「お前ら全員居るなー……………ん？冬木はどうした？朝一番に来ていただろ？」

「……………女のもとへ向かいました」

「果たさなければいけない使命があるらしいですよ」

「そ、そうか……………そう言えば朝、窓から飛び降りる生徒がいたらしいが誰か知ってるか？」

「あ、慧人！」

「日菜！」

そして紗夜さんと日菜の双子が住んでいるマンションへとたどり着く。

「鍵はこれ！何かあつたら連絡して！じゃ、後任せたよ！」

「ああ。託された」

日菜はダツシユで学校の方へと向かう。あれは遅刻ギリギリつてところか。

「お邪魔します」

俺は彼女たちが住んでいる家に。

中に入ると誰も居ないように感じる静けさ……まあ、そりやそうか。

そして紗夜さんの部屋の前、

コンコンコン

すると、扉が静かに開かれる。

「ひ、日菜……？あなた、学校に……」

「俺ですよ」

「慧人さん……どうして」

どうして、と聞かれても答えは一つしかない。

「勿論、あなたの看病をするためですよ」

彼女をベッドまで運んで横にさせる。

「さ、寝ていてください」

彼女は布団の中に入り、顔だけ布団から出す。

「学校は？」

「自主休校です」

「さぼったのね」

「バックレただけです」

「すっぱかしたのね」

「そうとも言います」

「行きなさい」

「嫌です」

「行って」

「お断りです」

「……怒るわよ」

「どうぞ」

目だけは何処か不機嫌そうな、そんな感じを見せるが……

「すみませんね。たとえ、怒られようと蔑まれようと。紗夜さんの事を放っておくなんて、俺の心が許さないですよ。まして、弱ったあなたがここに独りになるというのにな。」

「……………だから絶対に譲りませんよ」

俺は彼女の瞳を見て答える。多くの人は俺のことを馬鹿と言うだろう。だが、それがどうした？

「学校をサボって女子の下へ行くやつなんて馬鹿という言葉がお似合いだろう。」

周りからなんと言われようと、どう思われようとそんなことどうでもいい。俺の中で

彼女が大切なことに変わりはないのだ。

「……………っ！」

すると、顔が更に紅くなっていく。まさか、熱が上がったのか？

「さあ、寝ていてください。早く風邪を治したいんでしょ？」

「……………」

そして、布団を顔の上まで被る紗夜さん。

数分した後、俺は行動を起こす。彼女が寝たかどうかは分からないが、流石に何も持ってきていない以上、このまま一緒に居るだけでは意味がない。

『日菜。冷蔵庫の中は勝手に使っていないのか？』

『いいと思うよ！でも、何入ってんだらう？』

いや、把握しておけよ……と思ったが、料理をしない人間は冷蔵庫の中とかどうでもいいのか？

とりあえず、冷蔵庫の中を見ておこう。……………ふむ。

『ちよつと買い出しに行ってくるわ』

『おっけー！カギだけよろしく！』

頭の中でリストを作る。そして、

「…………ちよつと行ってきます。すぐ戻りますので」

紗夜さんが眠ったことを確認してから買い出しに行く……まあ、制服でも問題ないだろ。知らんけど。

我ながら情けないと思っていた。

体調管理は基本中の基本。それなのに、ほんの少しのミスからこの様である。

ギターの練習に没頭し過ぎて、気付けばいつもの寝る時間を超していたのが一昨日。朝から寝不足のせいかな、少し身体にダルさを感じていたが、それをごまかして振る舞っていたのが昨日。ただ、Roseliaのメンバーにはバレたように練習に参加する前に帰らされ、そこから家で少し自主練するつもりが思うように弾けずに……とやっているうちに再び、寝る予定の時間を過ぎてしまった。

そして今朝。起きようにも身体に力があまり入らなく、どこか熱っぽさがあった。体温を測ってみると38℃近く出ており、風邪を引いてしまう。

「……慧人さん」

「あ、起きましたか」

そこから両親は休めないことを悔やみながらも仕事に行き、日菜は学校に行つてこの家に一人きりになったと思った。しかし、慧人さんが自分が学校あるというのにサボつて駆けつけ、現在二人きり。

「……ごめんなさい。迷惑をかけてしまって……」

「迷惑だなんて思つてないですよ。俺が好きでやっていることなんで」

風邪の時は寂しい気持ちが強くなるのだろうか？彼の声を聞くといつも以上に安心できる。

「それにどうせなら頼るとか言ってほしいですね。迷惑をかけるより断然響きがいいです」

私の頭を静かに撫でながらそう言ってくれる。何だろう。慧人さんの手って、私より大きいんだなあ。それに、私の額の方が熱いはずだから、本当は冷たく感じているはずなのに何処か温かい。不思議な気持ちだ。

「……そうだ。食欲はありますか？」

「……少しだけ……」

「でしたらこちらを……」

そう言っただけで差し出したお盆。その上には器があつて……中を開けると、そこには……

「おいしそうですね……」

しらすとネギ。そして卵が入ったお粥……それを一口分すくって、息を軽く吹きかけ

冷まそうとする慧人さん。

「紗夜さん。口を開けてください」

「あー……」

そつと口に運ばれる。今の私でも食べやすいもので、とても優しい味が口の中に広がっていく。

「おいしいです……」



「それはよかった。もう一口いらいます?」

「お願いします……」

いつもよりゆっくりと食べる私のペースに合わせてくれる。慌てさせたり、急かしてきたりすることなく……私に合わせてくれる。

ゆったりとした時間が流れる。そして気付けば彼の持っていた器は空に。

「なるほど。そこまで食欲は落ちていかなかったようですよ。おかわりはいらいますか?」

「大丈夫です……」

「あ、飲み物いらいます?」

「いただきます」

そして、差し出されたコップ。

「まだ熱いので少し気をつけてください」

「はい……」

少し息を吹きかけ、冷ましてから飲む。……レモネード……あれ?この風味は……

「生姜……?」

「よく気付きましたね。正解です。レモネードはビタミンCがとれますし、生姜も身体にいいですからね」

「温かくて……おいしいです」

「ありがとうございます。配分などを調整したかいはありました」

身体の内側からポカポカと温かくなっていく感覚……。

「空になりましたね。じゃあ、片付けてきますね」

そう言っつて立ち上がろうとする慧人さん。その背中を見ると……

「……行かないで……」

「ん？」

「……あ、ごめんなさい……何でもないです」

行かないで。一人にしないで。

普段はあまり感じない寂しさを感じてしまう。でも、これ以上甘えるわけには……

「何でもないわけではないですよ？」

すると、手に温もりが……

「こうすれば寂しくないですか？」

「……はい」

「じゃあ、こうしていますね」

「……ごめんなさい……」

「紗夜さんはもっと甘えてもいいんですよ？少なくともこういう時ぐらいは」

「……………でしたら……………そのまま、頭を撫でて下さい……………」  
「ええ。分かりました」

彼の温もり……………この胸に広がる温かさはきつと……………ああ……………私ってやっぱり彼のこ  
とが……………

紗夜さんは美しい人だ。クールな振る舞いはその美しさを際立たせる。

でも、それは彼女の一部に過ぎない。時折見せるポンコツな所もかわいらしい一面も、どれも彼女だ。

そして、今のように弱っている彼女も、きつと彼女の見せる一面なのだろう。

「分からないなあ……」

分からない。

俺は一体、どうすればいいのだろうか。

この気持ちは一体何なんだろうか。思慕する心か……それとも別の心か。分からない。

「……………」

自分の掌を見る。

俺のこんな穢れた手で貴女に……いえ、貴女たちに触れるべきではないんじゃないか？ 本当は俺のような人の心がないバケモノが……

「ただいまー！ 慧人慧人！ おねーちゃんは!？」

「寝ているぞ」

気付けば夕暮れ。学校が終わっていても不思議ではない時間だった。

「じゃあ、静かにだねー」

すると、日菜の後ろから現れたのは、

「リサ姐。それに友希那さん、りんさん、あこちゃん……あ、お見舞いですか？」

「そうよ」

「顔色が昨日より良さそうですね……」

「ふっふっふっ。これなら復活も目前であろう」

「……んっ……あれ……皆さん？」

目を覚ました様子の紗夜さん。身体を軽く起こして、周りの様子を窺う。

「起きましたか？お見舞いに来てくれたそうですね」

「そうですね……すみません。今回はご迷惑をおかけいたしました」

「気にすることないわ。無理する前にしっかりと休んでちょうだい」

「だよねー。紗夜って倒れるまでやりそうだからね」

「そうですねよ！でも、倒れる前でよかったです！」

「そうですね。後、けいさん……ちよつとこちらに」

「何でしょう？」

「えつと……その」

「じゃあ、おねーちゃん！ちよつと汗拭くから上を脱いで！」

「なるほど。じゃあ、出て行きますね紗夜さ……」

視線を彼女に移すと俺は見てしまった……

「どうしましたか？ 慧人さ……」

咄嗟に胸のあたりを隠す紗夜さん。

汗ばんだシャツが彼女に張り付き下着が透けて見えて……

「……見ましたね」

「完全に見たよね」

「……ミテナイデス」

「色は？」

「水い……あ」

「冬木。来なさい」

「……はい」

友希那さんに連れられ部屋の外に。そして扉は閉められる。……いや、閉め出されたのは分かるが、何故この人と二人きりという状況に？

しかも相手が友希那さんって微妙に会話のネタに困るんだよね……あ。

「そう言えば友希那さん。誰が最初に気付いたんですか？」

「何を？」

「紗夜さんの体調ですよ」

「そうね。皆ほぼ同時に……かしら。まあ、燐子は学校で見かけたときから少し違和感を覚えていたらしいけど」

「流石りんさん。でも、友希那さんも気付いたんですね」

「当たり前じゃない。バンドメンバーの体調の変化に気付けないなんてリーダー失格よ」

「なるほど……」

「……と言っても、少し前の私ではきつと気付けなかったんでしようけど」

そう言った友希那さんはどこか遠い目をしていた。

「Rosealiaの皆……いえ、あなたも含めた周りのお陰で今の私があるのよ」

「……ははっ」

「……ちよつと？今の所に笑う要素はなかったと思うのだけど？」

「……いいや。そう思うと俺も同じだなって」

「同じ？どういうことなの？」

「今の俺があるのは、きつと皆が居てくれたから何だろうなって」

「そう。でも、私から見たら出会った頃とそんなに変わってないわよ？」

「ひでえ言われよう。これでも成長したと思いますよ」

「ふふっ。あなたがそう思うなら、きつとそうなのね」

「……………なあ、友希那さん」

「何かしら？」

「俺って人間に見えるか？」

「……質問の意味がよく分からないのだけど……？」

「いいから。答えてくださいよ」

「そうね。人間に見えるわよ。少なくとも猫には見えないわ」

「比較対象が猫って……」

「ニャーちゃんを馬鹿にしないで貰える？」

「いいや、友希那さんらしいなって」

と、そんな感じで友希那さんと話していると……

「おーい、入っていいよー慧人くん」

「分かりました」

「じゃあ、アタシたちは軽く作るから紗夜をみていてね」

リサ姐たちと入れ違いになるようにして入る俺。

「友希那さんは？」

「リサたちの方に行ってくるわ」



「そうですか」

ということで一人で入っていく。すると、布団を深く被った紗夜さんが。

「……さつきはその……お見苦しいものを……」

「別に謝ることじゃないですよ。寧ろ謝るのは俺の方です」

「……日菜に比べたら小さいんですけどね」

「何故それを言ったんですか!？」

「いえ、慧人さんなら知ってると思いましたが……」

「いや、知ってはいますけど……」

どうしよう。何というか……開幕からおかしな方向へ話が進もうとしてしまった。

「……………ありがとうございます」

「急にどうしたんですか?」

「本当は慧人さんが来てくれて嬉しかったんです……私のことをそんなに心配してくれていることに。そして、慧人さんが居てくれたから一人じゃなかった。……一人きりって凄く寂しいから」

「……………そう」

「思えば、出会ったときからですね。きつとあなたが居なかつたらずっと孤独だった。Roseliaに出会うまで独りだった。……だから、感謝しているんですよ。あなた

のお陰で独りじゃなかった。傍に居てくれてありがとうございます」  
「……………」

「無理しないでください。日菜が居ますので、慧人さんも休んでくださいね」  
そのまま布団の中に入っていく紗夜さん。

「そうだ。下の様子を見てきてください。日菜が迷惑をかけているかもしれないですし……………」

「分かりました」

そう言って部屋を出て行く。

やっぱり、分からないなあ。ああ言ってくれた紗夜さん。でも、俺には——  
(危なかった……。あと少しで言いそうだった。私は慧人さんに——)

「傍に居る資格なんて本当にあるのか?」「これからもずっと傍に居てほしいだなんて」

後日。

「先日はありがとうございました」

「いえ、紗夜さんが元気になってよかったですよ」

「それでその……何かお礼をしたいのですが……」

「お礼なんていいですよ」

「そういうわけにはいきません」

「そうですか」

「ですので、何かその……慧人さん。私にしてほしいことかありませんか？」

「してほしいことですか？」

「い、いえ。お礼にお金とか物とかは違うと思ひまして……その、私に出来ることがあれば何か……と思ひまして」

「そうですね……あ、一つ思ひつきました」

「何でしょう？」

「まあ、お願いですね。その——」

## 惚気回? (慧人ver)

皆様は昼寝から目が覚めると、お腹の上に女の子が乗っていたことはありますか？

「……千聖の……幽霊か」

俺はあります。

「勝手に殺さないで頂戴」

「病んだ紗夜さんの手によって天に召されたかと……」

「本当に起きそうだから。頼むから病せないで頂戴」

「………何で千聖がここに？」

「気付くのが遅いわよ。昨日LONEしたわよね？」

………ああ。

「俺、昼寝するって言ったはずだけど」

「つまり、暇なのよね」

「………おやすみ」

「寝せないわよ」

「ぐー」

「寝かせないわよ。きゅっ」

「……っ!!」

「あら、どうしたのかしら?」

「何、可愛らしい効果音を口で言っつて首絞めてんだよ! 殺す気か!」

「なるほど。じゃあ、口と鼻を塞げば良かったのね」

「窒息させる気満々じゃねえかこの野郎」

「あ、もちろん私の口で塞いでもいいのよ?」

「キスで殺しにかかるとかお前も死ぬぞ」

「お前を殺して私も死ぬ……!!」

「いやふざけんなよおい」

「でも、本気で抵抗しようとするれば抵抗できたでしょう?」

「はあ……そうだけどさ……」

「ふふっ。それに私が貴方を殺るわけじゃないでしょう?」

それはどうだろうか? この女なら本気で俺を殺りにくる可能性はある。

「ちよつと、そこは黙らないでもらえる?」

「………で、何の用だよ」

「そうね。脱ぎなさい」

皆様は何の用? つて聞いて脱ぎなさいと返ってきたことはありますか?

俺はそつとスマホに手を伸ばし、電話を掛ける。数コールの後に出了た相手は……

「——もしもし、警察ですか? 不法侵入してきた少女に急に脱ぎなさいと言われました。セクハラではないでしょ……」

「洒落にならない冗談はやめて!」

スマホを取り上げられて画面を見る千聖。そこには、

『はいはい。警察だよ☆んーその声は千聖かな? もーそんな強引なことしちやダメだよ?』

「本当に電話を掛けてたの!?! そしてリサちゃん誤解だからね!」

『ふむふむ。それが言い分かあ……じゃあ、見逃そう! それとダメだよ? 慧人くん。……浮気は』

「してねえです。コイツに言ってください」

『そう? じゃあ、仲良くね二人とも。これから練習あるからくまたね』

切れる電話。すると、千聖がとても安堵した表情と疲れた表情の混ざったよく分からない顔を見せる。

「どうした? お疲れか?」

「ええ……誰かさんのせいだね」

「それは大変だー今すぐ家に帰って休むべきだー」

「却下よ」

「はいはい。で？脱げって言ったけど、上？下？それとも全部？」

「上よ」

「じゃあ、お前も上を脱げよ」

「はあ？」

何で怒っているのだろうか？

「主は言いました。『右の頬を殴られたら右の頬を殴れ』と」

「それ、『右の頬を殴られたら左の頬を差し出せ』でしょ？」

「おっと、この人元ネタが分かるタイプの人だった」

ちなみにこれはかの有名なイエスの言葉である。

「いや、『汝の敵を愛せ』とか意味が分かんないんで」

「そうね。でも、それくらいの愛情を持ってということなのよ」

「敵に向ける愛情とか生憎持ち合わせてねえよ」

「あら奇遇ね。私も持ち合わせていないわ」

「敵は潰すか染める。そっちの方が楽」

「敵は排除して進むか服従させた方が楽に進めるわ」



お互いに無言で頷く。どうやら俺たちは似たもの同士らしい。

「つて、何で寝起きからこんな話してんだよ」

「あら? 違う話がよかった?」

「というか、さっきの話だ。そもそも俺が寝てる間に脱がせりや良かっただろ」

「……………!」

「今、その発想はなかったわって顔しただろ。何で乗ってんだよ」

「だって……………そこに慧人が横になっていたから……………」

「オイコラ。それってどういう意味だ」

「だって……………慧人を見下せるから」

「うわぁ……………流石女王様」

「あら? それとも、この体制だと貴方の剣が私の鞘に入っているように見えるから、の方が良かったかしら」

「うわぁーそれっぽい言葉で隠しているけど全然隠せてねえ……………というか本当にやってやろうかおい」

「……………遠慮しておくわ。貴方なら本気でやりかねないもの」

失敬な。やるわけねえつての。

「で、ドーせ、アレだろ。脇腹の傷跡が見たいとかそんなんだろ」

「あら？よく分かったわね」

「服に隠されている部分で、お前がそういうのに目覚めてないと考えると、一つしかないからな」

「そうね。なら……」

すると、自身の服の裾の部分を持つ千聖。そのままゆつくりとあげていき目に映るのは彼女の綺麗なお腹部分。

「腹が黒くない……だと？」

「あら？腹黒と言いたいのかしら。見ての通り黒くはないわよ」

「あ、中が黒いのか」

「さあ、どうかしらね」

「それにしても綺麗なお腹で。スタイル維持とかも頑張っているんだろうな」

「ええ、水着撮影もあるから常に気にしているわ」

「もう冬だぞ」

「冬でもよ。いい？その油断が命取りになるの」

「それを誰かさんにも言っただけよ……で、いつまであげてるんだよ」

「あなたが下ろす許可をするまでよ。この部屋は暖房がついていて温かいから」

「ならさっさとおろせ」

「あら? もういいのかしら? もっといいのよ?」

「そうかよ……なら」

「ひゃっ! ちよっ、触るなら触るって先に……」

「なるほどな。もう少し柔らかいかと思っただがアイドルとかバンドで体力とか筋力使うお陰か、しつかり筋肉もあるんだな。それでいて硬過ぎず……」

「け、慧人……? そういうのは少し恥ずかしいというか……」

「何だ? 語ろうと思えばそうだな。後五分は語れるぞ?」

「え……?」

「ざっき、お前は俺が許可するまであげ続けるって宣言してたし……まさか下ろさないよな?」

「………ううっ」

宣言通り五分間。白鷺千聖の腹部について語った。当の本人は途中から『これが羞恥プレイ……』だの『もうやめて……』だの赤面し、涙目ながらに呟いていたが全て無視した。

そして五分後、下ろす許可をすると、下ろして、俺の上からどいて、近くにあった掛け布団を取り上げ、そこにくるまっていた。何だ? 寒かったのか?

「………鬼畜」

ぼそつと言われたがイマイチ理解ができなかった。

「……けがされてしまったのね。きつとそうね……」

「いや、お前はもともと汚れてるだろ」

「慧人？私の何処が汚れているって？」

「心」

「……はあ。怒つても無駄そうだからいいわ」

「そうだな。理不尽な罵倒ほども力つくものはない」

「……この話はもういいわ。約束通り見せなさい」

「へいへい。ほらよ」

適当に服をあげお腹を見せる。

「……凄いわ……引き締まっている……ってそうじゃないわ」

掛け布団ごと動きながらマジマジと眺めている。

「触っていいかしら」

「どうぞで」

（筋肉が凄……ってそうじゃない。この傷。思ったよりも大きい……自然に付いたものじゃない。何か……そう）

「確か手術したって言ったわね。いつの話？」

「さあ、どうでしょうね」

(おそらく高校に上がる前ね。まりなさんから今まで慧人が手術、入院したとか話は聞かなかつたし。中学時代についてののだとしたら跡として残っているレベル……深い傷なら命に関わるレベルね。自殺? いや、自殺なら他にも自傷の跡があつても不思議じゃないしこんな脇腹を刺すなんて方法を選ばない……だから、他者によつてつけられたもの)

「何やらかしたの?」

「ちよつとミスただけですよ」

「……はあ。ちよつとのミスで命が関わるつて……」

「まあ、気にしないでくださいよ」

「そう」

……この目は諦めていなさそうだな……やれやれ。

「調査するなら勝手にどうぞ。ヒントをあげておくと知っているのは俺を除いて三人だけですよ」

正確には違うが、三人と言つて問題はないはずだ。

「内二名はあなたたちの誰かと面識がある。これは絶対ですよ」

「そう」

「ただ、それを知ってしまったえば、関わりを断ちたくなりますよ」

「分かった。……でも、その上で宣言するわ。あなたの過去には興味がある。ただ、それを知って今のあなたを否定するつもりはない。例えばどんな過去を持っていようと、今の慧人との関係を変えるつもりはないわ」

「……はあ、波風立てずに行きましようよ。というか俺なんかの過去どうでもいいでしょうに……」

「ふふっ。そうではないかもしれないわよ?」

「なあ、千聖。俺、凄い悩みがあるんだけどいいか?」

「ええ。いいわよ」

場所はリビング。ソファに並んで座り、ミニテーブルにはクッキーと紅茶が入ったティーカップがある。

いつも通りの千聖の愚痴も一段落した頃。俺はある悩みを口にする。

「俺ってさ。クールビューティー教にいる資格があるのかな」

「……………は?」

その悩みには思わず千聖の手も止まって、固まってしまうほど衝撃的なもののようにだ。

「いやいや何を言っているのこの男は。え?本編外で?あんなにも私にクールビューティーとは何か語ってくるくせに何言い出したの?は?意味分からないんだけど、え?どうしましょう。これは精神科に連れて行くべきなの?それとも脳外科?いや、一層の

こと教会に行ってお祓いを……」

そして、思案顔で本音というか考えていることがダダ漏れである。あまりの衝撃でポーカーフェイスが崩れたようだ。

「……いやさ、最近思うんだよ。俺らの周りの女子って喋らなければクールビューティーって人は紗夜さん以外にも居るじゃん」

「そうね。友希那ちゃんもだし、たえちゃんも見た感じそうじゃないかしら？後はモデル仕事中のイヴちゃんとか……後、その条件だと薰も」

「流石我が同士よ」

「誰が同士よ」

「でも、彼女たちに対して信仰することはないんだよな……」

「そうね。でも、中身がクールではないからじゃないの？」

「そんなこと言ったら今の紗夜さんにクールさがあるか？」

「……皆無ね」

「……でも最初に会った時以上に慕っている。不思議じゃないか？クールさがほとんど見られないのに……」

クソ。だが、このままでは先輩の言うようにポンコツキュート教に……！違う。そうじゃないんだ。そうじゃないはずなんだ。



「ポテトを食べ足りなくて駄々をこねていた彼女の姿を見ても、お菓子作りを一緒にして頑張っている姿を見ても、病に伏して弱っている姿を見ても。どれもクールな振る舞いとは違うもので、クールビューティーを信仰する者にとってはマイナスにしかうつらないはずなんだ。だが、俺の中にはマイナスなんて欠片も思っていない。そんなありのままの彼女を慕いたいという気持ちがあるんだ」

(……私は悩みと言う名の惚気を聞かされているのかしら)

「なあ、千聖。俺はどうすればいいんだ?」

「……………」

無言で紅茶を一杯啜る彼女。そしてその後は、笑顔を向けてきた。

(何でこの二人は付き合っていないのかしら。紗夜ちゃん惚気もそうだけどこの男も深掘りすれば相当よ)

「そうね。昔の、あなたが出会った頃の紗夜ちゃんの方が、きっと今よりもクールビューティーという言葉にふさわしいんでしょうね」

「そうだな」

「じゃあ、慧人。聞くけど今と昔の紗夜ちゃん。あなたはどちらが好き? どちらと一緒に居たい?」

「……………どちらが……………」

クールビューティーに相応しいのはきつと出会った頃の紗夜さんだろう。振る舞い、空気などポンコツさが垣間見えている今よりも断然前の方が相応しい。

「きつと私と出会った頃の貴方ならこの問いは即答できていたはずよ」

前の方がいい。確かに昔の……前の俺は即答できただろう。

でも、今の俺にはそんなこと言えない……一体何故だ。

「じゃあ、質問を変えろわね。あなたは昔の紗夜ちゃんに戻ってほしい？昔の冷たく誰も寄せ付けない空気、行うこと全てが理知的だった彼女に。きつと、あなたが頼めば戻ってくれるわよ」

（だって、紗夜ちゃんは、あなたに好かれるためならそうするだろうから）

「そんなことない」

「へえ。どうして？」

「確かに、昔の方がクールビューティーに相応しい。でも、そうじゃないんだよ。ポテトが狂いそうなほど好きなポテ狂で。にんじんアンチ過激派で。ギターに没頭して、ギターを弾く姿がすげえ格好良くて。何だかんだで優しいのに、不器用なところがあったりして。努力家で、何事に対しても手を抜かず、徹底的にやっつけていて。少し抜けていて、時々見せる笑顔が可愛くて……それが俺から見えている今の紗夜さんなんだよ」

「……………」

「それに前まで、精神的に追い詰められて、ずっと苦しんでいたから。もう二度と、爆発して、自己嫌悪に陥ってほしくないから。もう二度と、彼女の涙を見たくないから。何かに追い込まれている彼女より、今の自由になっている彼女の方がいいから……だから前を向いている彼女に昔に戻ってほしいなんて、そんなこと思うわけがない。そんなこと思えるわけがない」

「ふふっ……全部答えを言ったじゃない」

「はあ……?」

「後は自分で見つけなさい。いくらでも相談には乗ってあげる。でも、答えを出すのはあなたの役目よ」

「俺の役目……か」

「一つアドバイスをするなら……あなたにとってクールビューティー教と紗夜ちゃん。どちらが大切かしら。後は、クールビューティー教に居る資格って本当にあるのかしらね?」

「資格があるか……だと?」

「ええ。クールビューティー教って、要はそういう人が性癖ドストライクの変態集団でしよう?」

「この女……今、一瞬で俺らに喧嘩を売らなかつたか?」

「おい、千聖。夜道には気をつけるよ」

「ふふっ。背後から襲って強姦でもする気かしら?」

「いや、そこまでは誰も言っていないぞ?」

「襲うなら慧人一人にしてちょうだい。それで避妊はしてほしいわね。後、場所は慧人の部屋かホテルか……あ、私の部屋の何処かでお願ひね。嫌よ?初めてが路地裏とか公園とかトイレとか」

「すみません千聖さん。何かがおかしいことに気付いてください」

「そうね……背後からなんて言わず、正面から襲ってほしいわ。それに、襲うというより優しくと言うのかしら?そんな性欲の捌け口みたいな使われ方されたくないわ。もちろん、貴方以外にはお引き取り願うけど」

「……………話を戻してください。逸らしてすみませんでした……」

「そうね。戻しましょうか」

すると一呼吸置いて真面目な空気を出す。ただ、もう修正不可能な気がするのは内緒だ。

「でも、『Like』の好きと『Love』の好きは別だと思うの。クールビューティー教はクールビューティーな人たちが好きであって、そうじゃない人を好きになっても問題ない。違うかしら?」

「なるほどな……」

「だから後は考えなさい。……まあ、あなたが本当に知りたいことはもう一つの方でしようけど」

「はあ? もう一つも何もねえんだけど?」

「いえ、正確には悩んでいることかしら?」

「どういう意味だよ」

「紗夜ちゃんの隣に立つ資格はあるのか? 傍に居る資格があるのか? ってところだと思  
うけど」

「………エスパークだよ。お前」

「ふふつ。エスパークよ」

「………」

俺はそつと手をスマホに伸ばす。そして……

「もしもし救急車ですか? すぐ近くにエスパークを自称する頭のネジが吹っ飛んだ奴が  
………ええ、今すぐ病院に運んで……」

「誰が頭のネジが吹っ飛んだ奴よ」

スマホが取り上げられる。

「流石に今回は何処にも掛けていなかったようね」

「いや、こんなことで電話かけられる方が可哀想だなんて思って。今回は遠慮しました」  
「今回はつて……まあいいわ」

「へいへい。でも、よく分かったな？」

「貴方を見ていたら分かるわよ」

（紗夜ちゃんに対しても、Roseliaの他の子たちに対しても……それから、私に対しても。この男は距離が近いようで何処か遠い。こちらから踏み込ませないようなラインを引いて、あちらから一步を踏み込まないように枷を敷いている。一体、何があなたを縛り付けているのか。答えはきつと、あなたが隠そうとしていることの中にあるはず）

「まあ、人の隣に立つ資格。人の傍に居る資格。果たしてそんなものが本当に必要なのか？その答えを出すのはあなたたちよ」

「……………」

（この問題の答えは何処にあるのか。答えは何なのか。第三者ではきつとその答えを出すことが出来ない。だからその問いに彼女はどうか答えるか、あなたはどうか答えるか。二人で出すしかないのよ）

「難しいな……………」

「そうよ。テストみたいに答えがあるとは限らないもの」

「そういうものか……なあ、ついでにもう一ついいか?」

「あら? 私のスリーサイズについてかしら?」

おかしい。この女の返答がマジでおかしい。……待てよ? こうやって、表面上では頭のおかしなことを言いながら、裏では何か深く考えているのか? まさか、この発言は何か考えていることを悟らせないようにしているためのブラフか? ……いや、今はなんでもいいのか。

「……お前つて男女経験が豊富なタイプ?」

「生憎プライベートではゼロよ。貴方以外の異性とまず関わつてない。だから恋人は勿論、男友達は悪友含めて一人しか居ないし、セフレもないわ」

「おい」

「それに、キスもしたことなければ、私は処女よ」

「いや最後まで。絶対いらぬ情報が混ざっているだろ」

「だから人に恋するとか、付き合いたいという気持ちはまだ分からないわ」

「でも、お前の場合アイドルだから恋愛は禁止じゃ……」

「あら? 私たちのグループよ?」

「……あ」

なるほど。この女が事務所に圧をかけると。マジで女王様じゃないかこの野郎。

「……でもお前レベルになると大変そうだな」

「何がかしら？」

「いいや。今話題のアイドルバンドの一員兼女優。更にはおなか真っ黒の女帝様と来た」

「ねえ、最後おかしなのが混ざらなかつたかしら」

「だからお前のファンでも、付き合いたいと声を大にして言うやつなんていないだろ」

「そうね。まあ、まだ高校生と言うのもあるんでしょうね」

「だから大変そうだなって」

「確かにね。メディアとかいろいろ気にしないといけないとか」

「あまりの毒舌に心が折れないかとか新たな扉を開かないかとか」

「……デート一つとってもお忍びだし」

「尻に敷かれなにかとか」

「……ねえ、慧人。私とあなたで心配する点がズレていると思うのは気のせいかしら」

「は？だって、お前って手に入れたいものはどんな手段を使つても、手に入れるタイプだろ？」

「そうね。否定はしないわ」

「だから、そんな女王様に気に入られた人は大変だなーって」



「……ふふっ。ねえ、慧人。私、あなたのことが気に入っているから私のために働いてくれるかしら?」

「はっはっはっ。その程度の圧で俺が屈するとても?」

しばしの間、笑顔の千聖と対峙する。その目は笑っていなかった。

「はあ。まあいいわ。そう言えば慧人。明日はC i R C L Eで会議があるのだけど来るのかしら」

「あー明日は無理だな。明日からなんだよ。アレ」

「なるほど。とうとうアレなのね」

「ええ」

「……頑張りなさいよ。応援しているわ」

「そりやどうも。……応援しているなら、前日くらい休ませろよ」

「それは断らなかつた貴方にも非はあるわよ」

「ひでえ。でもまあ、こうして誰かと話してた方が意識しなくていいんだけど」

そう言いながら俺は千聖の頭の上に手を置く。

「ふふっ。すやすやと気持ちよさそうに昼寝していてよく言うわね」

(寝顔の写真撮ってたし、紗夜ちゃんに送っておこっと)

一方その頃。

「今井さん」

「何？紗夜」

「少しお話ししたいのですが、お時間は大丈夫ですか」

「平気だよー」

## 紗夜の悩みと悪い（という名の惚気？）

「それで、紗夜？今日は慧人くんに関してどんな話かな？」

「ええ……って、何で慧人さんの話だと分かったんですか!？」

CIRCLE前のカフェにて、Roseliaでの練習を終えた今井リサと氷川紗夜の二人が話し合っていた。

「ふっふっふ。乙女の勘☆」

「……なるほど。流石は今井さんですね……」

（あはは……紗夜がこうやって話す時の九割ぐらいが慧人くん関連だつて気付いていないのかな？）

心の中ではそんなことを考えつつも、紗夜には悟らせないように笑顔を向けるリサ。

「それで？慧人くんがどうしたの？」

「その……ですね。もう一步距離を縮められたらな〜って思っています……」

「……………」

紅茶を一口。そして、

「ごめん。もう一回言つて？」

「あ、その……付き合うとかは差し置いて……何でしょう。もう少し、もう一步距離を近づけたいと思ひまして……」

「……………」

（どうしよう。ここから更に一步距離を縮めるって、もう付き合うと同義じゃないかな?）

「そうだねーまずは、どうしてそう思ったの?」

「少し前に白鷺さんとお茶会しまして、そこで、色々アドバイスを貰ったりしたんです」

「おお、千聖が」

「実際にやってみて、感触は悪くなかったんですが……」

「ですが?」

「……何でしょう。上手く言えないんですがもう一步詰めたいんです。この勢い……っつと言うとアレですが、今の流れを意識して……」

「ほほーう。つまり、押せる流れが来ているからそのまま押していこうと」

「……そうですね」

少し自信がなさげな顔を見せる紗夜。

「……………?でも、何でそんな不安げな顔なの?」

「……いえ、どこまでならいいのかとか、どこまでなら慧人さんの負担にならないのかとか、いろいろ考え出してしまつて……」

「あー……」

「この前もつい大量のポテトを前に自分を抑えられなくなつてしまい、慧人さんに止められました。その後も勉強会と称しているのに、彼にずっと抱きついて勉強の邪魔をしてしまつたり……」

「……んん？」

「彼に何も告げずに一緒に羽沢珈琲店であつた料理教室の予行練習に付き合わせてしまつたり……。剩え羽沢さんと距離が近いって事で少し妬いてしまつたり……」

「……んん？」

「看病しにきてくれたときも、最初は邪険にするような態度を見せてしまつたり……。自分が弱っていることで、心配させたり……。いつもより甘えたり……」

「……」

「そして、先ほど。白鷺さんから慧人さんの寝顔の写真が送られてきて即保存したり……」

（どうしよう。アタシは一体何を聞かされているのかな？）

「……だけど、慧人さんがどこまで許容してくれるのが分からなくて……」

「あー……」

「その……恋愛経験というものが私にはないので……」

「うーん。そーだね……相手がどう感じるか、なんて最後には相手しか分からないからね」

「そうですよね……」

「でもさ？確か、去年だったっけ？いや、Roseliaが出来た頃もかな。紗夜がずーっとつんけんな態度を取っていたの」

「……………うぐっ」

「紗夜が何でそんな態度を取っていたかは知ってるよ。勿論、慧人くんもね。それに比べたら、嫌な気はしないですよ」

「……………そうかもしれないですが……」

「それに紗夜は難しく考えすぎだよ。アタシらの見えている慧人くんって——」

「クールビューティー教で、マイペースで、賢くて、運動神経が高くて、人の心に疎くて、女子力が意外と高くて、ゲームもうまくて、抱きしめられると心が暖かくなって、見た目は怖そうでも優しく、可愛らしいものが意外と好きで、心配させまいと動いたりして……」

「——わ、分かったから。もう大丈夫だよ？」

「そうですか？後は、歌が絶望的に下手なのを実は気にしていたり、楽器も一切弾けなくて、四苦八苦している姿が可愛くて、絵が壊滅的で独創的なセンスをしていて、常人では計り知れないほどぶっ飛んだ思考をしていて……」

「もう充分！これ以上はおなかがいっぱいだから！」

「お腹が……？それでは夕食が入らないのでは？」

「そうじゃない……！」

「そうではない……？？？どういうことでしょうか？」

首をかしげ、リサが何を言っているのか本気で分かってない紗夜。一方、机に両手を打ち付けているリサは……

（紗夜の慧人くんに対する想いだけでお腹が一杯なの……！しかも何でそこでポンコツさを発揮してるの……！）

口の中が段々甘くなり、お腹は膨れ、それでいて目の前の人は無自覚と来た。これには、ある程度想定はできても慣れるものではなかったと思うのだった。

「ねえ、紗夜。慧人くんとは付き合っていないだよね」

「ええ。でも、絶対に付き合いたいとは思っていません」

「ええっ!？」

「確かに付き合いたいとは思いますが、絶対にとまでは思っていない」



「ちよ、ちよつと待って！ええっ!? だって慧人くんのこと好きなんだよね!? それも相当！」

「勿論。大好きですよ。看病してもらったことも通して更に好きになりましたね」

「さつき、一步距離を縮めたいって」

「ええ。言いましたよ」

「じゃ、じゃあ……」

「でも……そうじゃないんですよ、今井さん。私はただ、彼に傍に居てほしいんです。私が欲しいのは『冬木慧人の彼女』とか『冬木慧人の恋人』という、肩書とか立場じゃないんです。ただ、彼の傍に居たい。傍に居てほしい。これからずっと……それだけなんですよ」

「……………」

「……今井さん？」

「……………ううっ」

「今井さん!?! どうして泣いているんですか!?!」

「だつて、だつてええ」

（こんなにも純粋で、しかもずっと傍に居たいだけとか……アタシらがくつつけようと画策しているのが申し訳ないというか……背中を押そうとしているのが段々恥ずかし

く感じて……」

数分後。

「落ち着きましたか？」

「ごめんね、紗夜があまりに眩しくて」

「はあ。……まあ、さつきはああやって言いました。でも、きつとあれは理想。都合のいいものなんですよ」

「ん？ どういうこと？」

「傍に居たいという真っ直ぐな思い。他の人に奪われたくないという焦燥。誰にも譲りたくないという独占欲。理想は綺麗の一つでまとまっているのに、いろいろな気持ちがグチャグチャに混ざっているのが現状なんですよ」

「うーん……でも、それでいいんじゃないかな？」

「……え？」

「いやさ。確かにアタシも好きな人が出来たとしたら、ずっと傍に居たいっていう凄く真っ直ぐな気持ちはあると思う。でも、その裏では紗夜が言っていた、色んな感情が取り巻いていると思う。だけど、それでいいと思うよ」

「何故……ですか？ そのような不純な気持ちがあつては真摯に向き合えないのでは？」

「色んな人がいるけどさ、そんな純粋な気持ちだけで、ずっと居られる人なんて実は少な

いんじゃない？人それぞれ、様々な葛藤を経て今の思いがあるし、これからもその思いが少しずつ変わっていくんじゃないかな？」

「なるほど……」

「だから今はそれでいいと思う。今は纏まりがなくても、この先それが変わっていくか  
いかないかなんて分からないからさ。それにアタシは紗夜のこと、羨ましいと思ってい  
るよ」

「羨ましい……ですか？」

「アタシはそんな、他の誰かに奪われたくない！なんて思える程の異性にまだ出会えて  
ないからさ〜そんなに強く想える人が居て羨ましいよ☆ひゅーひゅー」

「か、からかわないでくださいー！」

「ま、要は難しく考えすぎってこと。きっと、もつと単純でいいんだよ」

「なるほど……分かりました」

（でも、そうやって何事にも真っ直ぐ向き合う姿勢は、紗夜らしくていいんだけどね♪）

「それで、本題なんですが」

「ん？本題？」

「最初に言いましたよ」

何だったっけ？と頑張って思いだそうとするリサ。対して、紗夜は目の前の人が本題

を忘れたことに気付き、もう一度言うことにする。

「だから……その、慧人さんとの距離を詰めたって話です……」

「告白して付き合う」

「そ、それは……その……えっと、出来ればもう少し簡単なのを……」

「キスをする」

「それもハードルが……もう少し、もう少し易しめなのを……」

「……………」

（いや、今以上についてもうこの二つくらいしか思い付かないんだけど……）

「だってさ、二人って普通に手を繋いでいるし、抱き締め合ってるし、膝枕もしていたし、食事であーんとかもやってるしさ……ねえ。もう、それ以上って……」

「ま、まだ何かあるはずですよ……」

「うーん、でも今更、間接キス……を狙ってやるのも変だし、そもそも普通にしてそうだし……あ、じゃあ、あれは？唇同士を重ね合わせるキスがダメならさ、頬とか額とかにキスするとか？」

「……そ、それならまだ何とか」

「うんうん。少しハードルは低くなっただんじやないかな？」

「そうですね。あ、首筋にキスマークを付けるとか甘噛みするというのもどうでしょう

か?」

（そこまで行くと、もう付き合ってるかその先だと思うけど……）

「紗夜の基準がよく分からない……」

「何かおっしゃいました?」

「ううん。あ、でも甘噛みはともかく、キスマークは流石に慧人くんの許可を貰ってからの方がいいと思うよ?」

「なるほど……確かにそうですね。首筋ですと外から見える部分ですから、許可は必要ですね」

「そうそう……ん?」

「どうしました?」

（その解釈だと見えない部分ならいいと思っっているように聞こえるような……気のせいかな?）

「ううん、何でも。いやーそれにしても、二人つてき。改めて思うけど、仲いいよね」

「そうでしょうか?」

「いや、絶対そうだって。だって、喧嘩とかそんなにしないんじゃないの?」

「そうですね……確かに喧嘩はあまりしませんが、でも、言い争い……までは行きませんが意見をぶつけ合うことはありますよ」

「おおつ、それは意外。例えば、どんなことで？」

「私がフライドポテトをもつと食べたいつて言うのと、これ以上はダメだとか。何で今日の夕食にフライドポテトがないの？とか、フライドポテトに塩を振るか、ケチャップなどを付けるかとか」

「……うん？」

「それに、この前もフライドポテトのLサイズを三つ頼もうとしたのを止められて、二つに減らされたりとか」

「待つて待つて。え？フライドポテトでそんなに言い争っているの？」

「ええ。全く、慧人さんももう少し譲歩してほしいですよね」

フライドポテトガチ勢である紗夜。対して、慧人は過去の惨劇を繰り返さないように動いているのだが、ポテトを前にした紗夜は、その真意を頭では分かっても心では受け付けていなかった。故に、かなりの頻度でポテトに関する言い争いが起きるのである。

(あー本当に管理しているんだ……頑張ってるなあ、慧人くん)

対してリサも慧人の真意を分かっているため、目の前にいるポテト狂な彼女を止めるのは、苦勞するんだろうなあと密かに思った。

「あはは……あ、そう言えばさ。アレは渡したの？」

「ああ、アレですね。ええ、バッチリです」

「まさか、慧人くんがそんなものを頼むなんてね〜出会った頃じゃ想像付かなかつたよ☆」

「確かに、意外でしたね。……もう少し別のものでも良かったんですけどね」

「まあ、紗夜に対するお願いというより、Roseliaへのお願いだったからね〜。本当は、紗夜個人にお願いしてほしいかつたんでしようけど」

「……その気持ちも確かにあります。……でも、それ以上に嬉しかったです」

「ほう」

「慧人さん。本当に少しずつですが、私たちの音楽にも興味を抱いてくれて……ふふつ。だから、もっと好きになってもらえるように頑張りたいですね」

「そうだね〜。それにまあ、慧人くんにはお世話になっているところもあるから、あれくらいならお安い御用だよ☆」

「それならよかったです」

「でも、何でそんなことをわざわざ頼んだんだろうね。アタシたちの練習とか時間が空いてれば聞いてたのに」

「ああ、それなら聞きましたよ。明日からの合宿のためだそうです」

「合宿?……あーあの、紗夜が慧人くんに平手打ちしたときのやつだね」

「まあ、その時のですね……」

残念な覚え方ではあるが、否定できないのは事実である。

「覚え方はともかく、慧人さんが言うには『集中したい時とか音楽を聴けたらいいな』と  
のことですね。一種のルーティーンかと」

「ルーティーン？あー、スポーツ選手が何かやるやつだっけ？」

「スポーツ選手だけではないですが、そうですね。彼は音楽を聴くと何か集中できるつ  
て言っていましたね。後は赤の他人……って言い方も変ですけど、そういう人たちが演奏  
したり歌っている曲より、Roseliaとか知っているバンドが演奏している曲の方  
が集中出来るそうです」

「なるほど……あ、でもそっか」

「どうかしました？」

「いいや？慧人くんが『紗夜と会えないのは死活問題だあ！』って叫んでいたから、そう  
いう意味で頼んだんだと思っただけど、それだったらRoseliaじゃなくて、紗夜個  
人的に頼んでるなーって」

「……あつ」

「……もしかして紗夜。明日からしばらく慧人くんと会えないの忘れてない？」

「そそ、そんなことあるわけじゃないじゃないですか。え、ええ、もちろん覚えていましたよ」  
頑張って取り繕うとしているが、バレバレである。



「まあ、会えないって言っても、電話とかするんじゃないの?」

「……………しないです」

「……………え?」

「お互いにしないって、約束しました」

「ど、どうして?」

「……………やつぱり、今回の合宿は慧人さんの人生にとって大きなものになると思います。向こうでのスケジュールを考えると、十分な休息がとれないかもしれません。それは時間って意味もですし、環境って意味もです。慣れない環境、きつと周りにいる方も、今まで感じたことない緊張感なりを持つているはず。そんな中で私と電話している時間は……………きつと、無駄になってしまう。慧人さんが笑って大丈夫って言っても、それは重荷になってしまいます。私は彼の邪魔をしたくない……………だから決めたんです。連絡を取り合わないって」

「な、なるほど……………」

「まあ、慧人さんも、向こうではスマホの電源を切るって言ってましたしね。でも、こうすれば、お互いに無駄な時間を過ごさないんです。無駄な思考を割かなくていいんですよ」

「確かにそっか。連絡する! って言うとお互いにその連絡を待つちやう時間とか、いつ

連絡しようとか、いつなら迷惑にならないとか色々と考えちやうもんね」

「ええ。だから、連絡しないんです」

「ふふっ」

「どうしました?」

「うん。紗夜って、さつきは傍に居たいって言ってたけど、それでも慧人くんの迷惑になるくらいなら、距離を取ることも考えられているんだあつて思ったの」

「そうでしたか……」

お互いのことを想う故の決断。そのことに深い感心を見せるリサであった。

「話変わるけど、紗夜ってこの後の予定は?」

「え?普通に帰りますが……」

「慧人くんに会いに行ってきたら?」

「い、今からですか?」

「うん。だって、明日から会えないし連絡も取らないんですよ?」

「そ、そうですか……でも、迷惑にならないでしょうか……」

「大丈夫だよ。誰かさんが既に乗りに乗らんだ後だし、紗夜が行っても迷惑とは思わないでしょ。それに……」

「それに?」

「やっぱり、直接会って、言葉で伝えた方がいいことって絶対にあると思う。別に長々と  
言わなくても、それこそ『頑張って』の一言でもいいからさ。直接会って伝えてあげて  
よ。今、紗夜が伝えたいことを。そうすれば、慧人くんは……うん。紗夜も慧人くん  
も、お互いが近くに居なくても、絶対にこの一週間頑張れると思うからさ」

その言葉を聞いて紗夜は無言で立ち上がる。そして、

「すみません、今井さん。ちよつと、急いで行きたい場所が出来たので」

「いつてらつしゃい。気を付けてね」

「はい」

駆けていく紗夜。そんな後ろ姿を見て、リサは、

「いいなあ、青春って感じで」

そう言いながら、ある人物にメッセージを送るのだった。

「帰るわ」

俺の悩みを告げた後も、何だかんだでだらだらと話していた俺たち。

スマホを見た千聖が、急に帰ると言い出した。いやまあ、コイツの場合、大体帰るタイミングは決まってるからいつも通りだが、それにしても急だったな。

「急用か？」

「まあ、そんなところかしら」

「送っていいこうか」

「いいえ。あなたは絶対にここにいなさい？いいわね？」

「はあ……」

わざわざ言わなくても、外に出る気はないんだが……

「絶対にここに居ること。破ったら末代まで呪うわ」

「いや、そんなことで呪われる子孫が可哀想だろ」

「安心してちょうだい。強力な呪いをかけてあげるわ」

「何も安心できねえ……が、分かったよ。……じゃ、気を付けてな」

「じゃあ、またね。慧人」

そう言つて、家から出て行く千聖。念押しまでして……そこまで出掛けるなど言わなくても出掛けないつての。……というかあの女の人脈なら本気でそういう系の人を呼んできて呪いそうで怖い。

と、そんな感じで千聖が去つて少し時間が経つた頃。明日以降の合宿の準備を進めていく中……

ピンポーン

「来客か? はーい」

インターフォンが鳴つた。ドアを開けるとそこには……

「紗夜さん?」

「はあ……はあ……」

「息を切らして一体どうしたんですか？まさか、誰かに追われているとか？えっと、とりあえず、上がっていきま——」

「慧人さん！」

紗夜さんの大きな声に思わず驚いてしまう。

「私、応援していますから！慧人さんのこと！だから、頑張ってください！」

少し頬が紅く染まった彼女。

「……………ありがとうございます……………紗夜さん。すげえ嬉しいですよ」

「そ、それならよかった……………」

そのまま倒れ込んでくる彼女を優しく受け止める。

「ごめんなさい……………CIRCLEから……………走ってきたので」

「もしかして、今のことを伝えるためだけに……………ですか？」

「はい……………早く伝えようって……………それで」

「……………」

きつと、俺が好きなクールビューティーな人ならば、そんなことはしないだろう。これが出発まで残り数分ならともかく、出発は明日の朝。時間的な余裕は充分にある。それなのに、その言葉を伝えるためだけに、息を切らして走ってくるなんて……………やっぱ、今の紗夜さんにはクールビューティーって言葉は似合わないかもしれない。

「え……………」

同じ状況でも、きっと昔の貴女ならそんな行動をしなかつただろう。でも、そんな行動を今の貴女はした。…………不思議だな。たったそれだけの行動、たったそれだけの言葉なのに…………

「な、泣いてる……………?ど、どうしたんですか!？」

「泣いてないですよ」

「え?で、でも……………」

「目にゴミが入っただけですよ、きっと」

「そ、そうですか……………」

おかしいな。本当に少しとは言え涙が出て来るとは。こんなことで泣きかけるなんて思いもしなかつた。…………いいや、そもそも俺に涙というものが存在したことに少しだけ驚いた。

「ごめん。紗夜さん」

俺は彼女を抱き寄せる。

「少しだけ……………少しだけ。このままで居させて」

「…………ええ。私もこのままで居させて下さい……………」

彼女も俺の背中に腕を回してくる。

だって、その一言の為だけに、たった一言を伝えるためだけに。彼女はここに来てくれた。こんな俺なんかのために来てくれた。

俺にはそんな彼女の優しさを、受け取る資格なんてない……。だって、その優しさを受け取る心がないんだから。受け取る器がないんだ。だから、俺なんかを受け取っていないものじゃない……。分かってる。それは分かってる……。のに、じゃあ、この胸に広がる温かいものは何だろうか。何かをゆっくりと溶かしていくようなこの感覚は何だろうか。

どれだけ時間が経ったかは分からない。それは長かったかもしれないし、短かったかもしれない。ただ、離れたとき、少しだけ名残惜しいと思ってしまう自分がそこには居た。

「紗夜さん……」

「慧人さん……」

紗夜さんが首の後ろ辺りに手を伸ばしてくる。そして、軽く背伸びしてそのまま……



「…………ダメですよ」

気付けば俺の右手の人差し指は、彼女の唇を軽く押さえていた。

最後に残っていた理性と言うべきものか何なのか。その何かがこれ以上進んではいけないと訴えかけている。

「…………あつ………………！」

紗夜さんの頬が真っ赤になっていく。

「ご、ごめんなさい！そ、その……えっと、えっと……！」

（あ、あれ？今、私って……そ、その口づけをしようと……）

「大丈夫ですよ。だから一旦落ち着きましょう」

「そ、そうですね……」

何度か深呼吸をする紗夜さん。

「落ち着きました？」

「え、ええ……少しだけですが」

「そうですか」

……何だろうか。さっきまでの空気が空気だっただけに何というか……気まずい。

「か、帰ります……ね」

足早に去ろうとする彼女。そんな彼女の手を反射的に掴んでいた。

「け、慧人さん？」

「送っていきます……よ」

「は、はい……」

そのまま並んで歩き始める……が、何というか……何だコレは。この……なんとも言えない空気……早急に変えないといけない気がする。いつもと違いすぎる空気に……

流石に困惑してしまっている。

「……ははっ」「……ふふっ」

と、そう思っていると思わず笑ってしまう。見ると、ほぼ同時に紗夜さんも軽く笑っていた。

「……何だか、空気がアレでしたね。気まずいというか何というか」

「ええ。あまりない感じでしたので、思わず笑ってしまいました」

「何か早急にこの空気を変えたいとは思うけど」

「どうやって変えればいいのか分かんないですよ」

「そうですよ。分からなさ過ぎて、一周回って笑いが出てきましたよ」

「でも、そのおかげでさっきまでの空気は消えましたね」

空気が緩和されて良かったと思う反面、少しだけ心残りがあるような感覚。ただまあ、

「アレですね。あのまま流されて行きそうでしたからね」

まさか、空気ってここまで大事とは……すげえなあ。

「そうですね……あれ？」

「どうしましたか？」

（もしかして……流されていればそのまま付き合えたのでは？）

何かを考えている紗夜さん。そして、頭を抱え始めた。  
「え？どうしたんですか？」

急に彼女が頭を抱えるほどに何か考えている。え？ど、どうしたんだ？

（私はなんて惜しいことを……！いえ、考え直しましょう。あのまま流されて付き合っても気ままずくなつてただけだと。付き合うなら、もつと、空気に頼らず行くべきだと。そうですね。きつと、そっちの方がいいはずです）

そして、何か吹っ切れたような笑みを向けてくる。どうしよう。紗夜さんの考えていることが分からない。

「……………どうしました？」

「いいえ。大丈夫ですよ」

何処が？と聞きたくなる衝動を抑えながら、彼女を見てふと思う。そう、何か違和感を感じるのだ。

「……………（ジー）」

「え、ど、どうしたんですか……？その、さっきのこともあって……見つめられると恥ずかしいと言いますか……」

何だろうか。この微かに感じる違和感は……あ。

「……………分かった」

俺は一つの答えに辿り着いた。

「紗夜さん——」

彼女から手を離し、代わりに両肩に手を置く。彼女と向き合い、彼女の目を見る。

（え?……ええ!?!ま、まさか……ね。いや、でもさつきまでの空気がアレだったしもしかして……ううん、で、でもまだ心の準備が……!）

「——ギター、忘れてません?」

「はい……つてあれ?」

彼女は自分の肩あたりを触る。首をかしげた後、背中あたりを触る。そして、首を左右に動かして背中の中の辺りを見ようとす。最後に、軽くジャンプしてみても……

「……慧人さん。私ってギター持っていましたよね?」

「今日に関して言うなら、俺は見えてませんよ」

「あれ?今日ってRoseliaの皆と練習してましたよね?」

「リサ姐の話と、紗夜さんがCIRCLEから来たことを考えたら、多分そうだと」

「なるほどこれがイリュージョンですね?それか、ギター消失マジックですか?」

「このタイミングでボケなくていいんですよ?」

「というわけで奇術師の慧人さん。私のギターを出してくださいな」

「あのー紗夜さん?まさかの現実逃避ですか?」

「ほら、1、2の3で私のギターが出てくるはずなんですよ?」

「いや、無理ですけど? 何をおっしゃっているんでしょうか?」

「いやいや、慧人さん。よく考えてくださいよ。私に限って、CIRCLEにギターを置いてきたってことはないですよ。だって、この私ですよ」

「そうですよね。いやー半年くらい前まで、私にはギターしかないの! って言ってたあの紗夜さんがギターを置いてくるわけじゃないですよね」

「あははははははははは」

ひとしきり笑った後、我に返って思う。そう、

「CIRCLEにギター忘れて来てしまいました!?!」

「何やっているんですかあなたはあ!?!」

この後、リサ姐が紗夜さんのギターをまりなさんに預けていたらしいので、二人、仲良く取りに行ったのだった。

## 全人類皆ロリコン説

「おー凄い惨状だな。これ、お前らがやったのか?」

夜の路地裏。薄暗い電灯からの光しかない暗がりの中、二人の少年の前に一人の男が現れた。

「あーなるほどな。お前らがあの有名なやんちゃな新入生たちか」

辺りには倒れ込む十人ほどの男たち。所々に血が付いており、衣服が切れている者や、バットなどの武器を持ったまま倒れ込む男もいる。

「こいつらは冬木との決闘を邪魔した。だから先に潰したただけだ」

「決闘とか面倒。これは一方的な殲滅」

「なるほどなるほど。そっちが東雲夏樹、こっちがああの有名な破壊兵器と呼ばれる冬木慧人か。まあ、男同士ならぶつかり合うこともあるよな、うんうん」

「……!」

「何だ?今のに驚く要素でもあったのか?」

「お前の下の名前……夏樹だったんだ」

「そこかよ! テメエ、出会ってからそこそこ経つのに知らなかったのかよ!」

「興味なかったから」

「テメエ……はあ、で？アンタはアンタで何だよ。邪魔する気がないならさっさと帰れよ」

「俺も帰りたいたい。だからさっさと終わらす」

「うるせえ！今回こそテメエに勝つんだからな！」

「なあ、お前ら。そんなに力が有り余っているならボールを蹴らないか？」

「はあ？」

「……？」

二人の少年にサッカーボールを差し出しながら笑顔を向ける男。その男に対して二人の少年は片方は困惑し、片方は意味が分からないような顔をする。

「ほら、行くぞ」

すると、男は軽くボールを蹴る。そのボールは東雲の下にいき、

「意味が分かんねえよ！」

そう言いながら蹴りつけられる。だが、彼は今までほとんどボールを蹴ったことがない。だから、

「とつと、狙うのはここだここ。それにこの距離で力一杯蹴る必要はないぞ」

当然、威力やコントロールは出鱈目であった。しかし、その男はボールの行き先を讀



んでしつかりトラップする。

「ほら、次はお前だ」

「……………」

もう冬木の胸元にボールが行く。東雲と違い、力がまるで入っていない蹴りで返してくる。

「はははつ、そこら辺の男を倒す力はあるのに、ボールを蹴る力はないってか？」

「力を出すのは面倒。それだけ」

「ほら、もう一回行くぞ？次はもつと狙って蹴れよ？」

「うるせえ！」

ボールが少年の下に行く。それをダイレクトで蹴り返そうとするが、空振ってしま  
う。

「しつかりとボールを止めてから蹴った方がいいぞ？」

「……………っ！あんなのは無視だ無視！お前を今日こそ倒す！」

「そうかそうか。いやあ、でも今の感じだと東雲より冬木の方がうまそうだな」

「ああつ！？さつきはたまたまだ！こうすりゃいいんだろ！」

上手いように乗せられて、ボールの下に行つて、ボールを力一杯蹴る東雲。

「だから、力入れすぎなんだつてお前は。ほら次だ次」

「……はあ」

「冬木は力入れなさすぎだ。もう少し力を入れろって、じゃあ次な」

そのままだかんだで何周かした三人。そして、

「うっし、時間もこれぐらいでいいだろ？」

「眠い。帰って寝る」

「はあ？俺との勝負はどうなるんだよ！」

「気が向いたら」

「お前絶対気が向かぬえだろ！」

「お？じゃあ、サッカーで勝負つてのはどうだ？それなら、お前もボロボロにならなくていいんだぞ？」

「何でオレが常に負けてるみたいな言い方なんだよ！」

「誰もそんなこと言っていないぞ？」

「う、うるせえ！」

「それに、サッカーならアイツを負かせるかもしれないぞ？」

「やらねえよ！というか、アンタ誰だよ！」

「興味ない」

「んーまあ、名乗っておくか。小鳥遊秋彦だ。お前らの先輩だ先輩。じゃ、また今度な」

そして、男は少年たちの下を去る。

「ああもう、今度もねえつての。まあいい！今から勝負だ……つてあの野郎いねえじやねえか！」

「……ん」

何だか懐かしい夢を見た気がした……って、そういや今何時だ？

「4時……ああ、ちょうどいい時間だ」

外はまだ暗く、窓を開けるとひんやりとした空気が流れ込む。

「さてと、支度するか」

今日から合宿。現地集合で、昼までに集まる必要がある。

本来なら東雲と仲良く(?) 電車とか使って行こうとしていたが、車の免許持ち先輩が運んでくれることになってる。朝の4時半頃に俺の家に迎えに来ることになってるため、起きた時間としてはまずまずだ。朝ご飯食べるわけじゃないし、準備も済ませている。30分あれば余裕で出かけられるだろう。

歯を磨き、着替えてから荷物の最終確認をする。LONEを見るともう間もなく到着するとのこと。

というわけで、静かに鞆を持って玄関から出て行こうとする。

「いつてらっしやーい」

「つて、母さん。起きてたのかよ」

「まあね、息子を送り出すのくらいはするわよ」

「あっそ」

「先輩さんや他の皆に迷惑をかけないようにね〜」

「しねえよ。……………多分」

そう言つて玄関を開ける。見ると目の前に1台の車が止まっていた。そして、運転席の窓が開いて……

「ジャストタイミングだな」

「そうかよ。今日は頼むわ、先輩」

「おう。任せておけ」

そう言つて親指で後ろを指す。ということで、後部座席を開けて、

「よお、冬木。今日はよく眠れたか？」

「ああ。お前こそ緊張して眠れないとかなかったか？」

「そんな小学生みたいな真似しねえよ」

東雲がいた。まあ、回収順的に俺が最後だったから居て当然なんだが。

ということ、東雲の隣に座つてシートベルトを着用する。すると、車は静かに動き出した。

「お前から静かにな。俺の隣に、何故か前日あまり眠れなかったのが寝ているから」

「いや何でそいつが眠れてねえんだよ。一番関係ねえだろ」

「関係ないって言うなよ。オレとお前はメイン。先輩は運転手。そして癒やし梓だろ？」

「ちなみにお前らを送った後に、コイツと近くを観光予定だ」

「……………くう……………」

「おい。コイツ完全に、遠足行く前日に眠れなかった子どもと同じじゃないか」

「まあ、何でもいいだろ。というか、お前らも寝ていけ。朝飯には起こすからよ」

「へーい。じゃあ、おやすみ」

「おやすみ」

ということとで、スマホを開き、あるメッセージを送った後に眠ることにする。

朝、いつも通りの時間に目を覚ます。

あの後、慧人さんとギターを取りに行つて、そのまま、慧人さんと一緒に帰ってきた。慧人さんをお見送りしたい……と思つてはいたものの、彼の出発があまりに早すぎるためなしになった。確かに朝の4時半頃……外は暗い状態ですし、そんな早くから出て行くなんて……

「……あ」

スマホを開き、LONEを見る。すると、慧人さんからメッセージが来ていた。

『いつてきます』

たった一言。でも、その一言を送つてくれただけで嬉しさを感じる。

「……うーん。どうやって返そうかしら」

これを返した後はしばらく、LONEのやり取りはなくなってしまう。だけど、ここは長文で送るべきか、どうするべきか。そもそも、何を言うべきか……

「いえ、きつとこれでいいですね」

少し考えた後、私は一つの結論に達する。

昨日、私の伝えたいことは伝えた。だからこれでいいはずだ。

コン

「おねーちゃん！起きてる？朝ご飯食べよ！」

「日菜、ノックの回数が多いわよ。後、返事を待つてから入るように」

「だって、おねーちゃんが珍しくあたしより遅かったもん！」

「あら？もうそんな時間だったかしら？」

「うん！一緒に朝ご飯食べよ？」

「いいわよ」

「おおー！今のおねーちゃん、何だかるるんっ♪って感じ！」

「いつも通りよ」

「慧人が居なくてズーンって、なっているかなって思ったけどよかったあ。むむ？何かいいことあった？」



「何でもないわよ」

「ええ、教えてよ」

『紗夜の机の上に置いてあるスマホ。画面は慧人とのLONEの画面になっていた。』

慧人からのLONEにはたった一言。そう返されていた。

「なあ、お前ら。オレ思うんだわ」

「何を思ったんだ？」

起きて朝ご飯を食べた後の車内。俺は左耳にイヤフォンをつけながら、右耳で話を聞き流していた。

「この世の中の全ての人はロリコンである……通称、全人類皆ロリコン説を」

「いや、ちげえだろ」

「……え？メイもロリコンですか？」

「まあ、待てお前ら。東雲はバカだがバカじゃない」

「おい先輩。そこまでバカじゃないぞオレは」

「きつと何か理由があるはずだ。聞いてやろうじゃないか」

心の広い先輩の発言に対し、俺はどうせ、この男はろくな事を言わないだろうと思っ  
て聞き流そうとしていた。

「オレは金髪ロリータ教、冬木はクールビューティー教、先輩はボンコツキュート教、メイは無宗派。皆、それぞれ違う信仰を信じている」

「一人無宗派居たぞ」

「メイはメイですからね！」

「まあ、お前らの影響を受けた結果だろ」

「『どういふことだ？』」

「反面教師。変なものを信仰した成れの果てを見たから、自分だけはまともでいようと……」

「アンタに言われたくねえよ。アンタ、元は俺と同族だろうが」

「そんな過去は捨てた」

「おい」

「メイはまだ真つ白なキャンパスなんだ。つまり、何色にも染まってない」

「そして、何色にも染まる可能性がある……」

「いや、メイは白いままでいい。おい、冬木。テメエ変なのに絶対染めんよ」

「るっせえ。今更染めるわけねえだろ」

「メイは何色にも染まらないです！」

ちなみに、今名前が拳がっているメイ。彼女が、この車に乗っている四人目で彼女は

……まあ、ちよつと阿呆の子である。ちなみに体型的にロリ枠なので……後は何も言うまい。

「で？結局、俺たちを勝手にロリコン扱いするようなその説はなんだ？」

「ふっふっふ。よく聞いてくれた。いいか？先輩も冬木も、推しキャラとか好きな人とか信仰対象って居るだろ？リアル然り、二次元然り」

「まあ、居るわな」

「否定はしない」

「いや、お前は明らかにあの入だろ？ほら、水色のロングヘアーの」

「あの子だろ？如何にも風紀委員やってそうな空気だったよな」

「あ、もしかして噂の女神様ですか？メイも実際に会ってみたいです！」

「……思い出した。そういや、先輩も東雲も紗夜さんと面識があったんだっ……。」

「まあ、そんな感じにいるわけだが、なあ、お前ら。推しの幼少期の姿も好きだろ？」

「……なるほど。そういうことか」

「はあ？いや、どういうことだよ」

「推しキャラの幼い頃の姿も好き……ならば、それは皆ロリコンと言っているのでは？」

「東雲……」

「先輩……」

「お前……それは賢いな」

「いや、バカだろ。絶対にただのバカだろ」

「はあ、お前も絶対にロリコンだと思っただがな」

「いいか？俺はクールビューティー教。美しいだぞ？分かるか？幼少期に美しさの欠片もないだろ」

「本当にそうか？」

「はっ、俺は紗夜さんの幼少期の姿を見ても何も思わない自信がある」

「あ、メイ知ってます！これをフラグって言うんですね！」

「そんなわけないだろ」

「この時の俺は知らなかった。まさか、本当にフラグ発言をしていただなんて……」

「冬木！お前それでも本当に人間か！推しの幼少期が気にならない人間なんていないんだよ！」

「とりあえず世の中の人全員に土下座してこい？特に俺にはな」

「落ち着け冬木。この説は意外にあるぞ？」

「いやねえよ。阿呆かオレたちは」

「アホだと思えます！」

「あーうん、確かにアホだな」

残念過ぎる。会話が余りにも残念過ぎる。

「おい、こうなったらトコトン話し合おうじゃないか」

「はあ？嫌だよめんどくせえ」

「ほう。それならお前は自分がロリコンということを確認するんだな？」

「そうだぞー反論がないならお前も晴れてロリコンだ」

「ちよつ、そのクソ先輩。アンタ、自分がロリコンって認めたのかよ」

「クソは余計だがそうだな……ロリコンではないと断言できないから、まあ、いつかなつて」

「マジかよ……」

「さあ、お前もこちら側に来るんだ……！」

「来るんだーです！」

「よし、分かった。話し合ってやろうじゃねえか。その説に終止符を打ってやるよ」

一方その頃……

「日菜？準備できた？」

「うんくさあ行こう！おねーちゃん！」

紗夜と日菜の二人はC i R C L Eで開かれる会議に出席すべく家を出ていた。

「うーんくでも会議かあ、今回は慧人が居ないからきつとまともだね！」

「……なるほど。慧人さんが交ざると会議がまとまらない……ってそんなわけないでしょ？」

「ええーでも、慧人が居た方が面白いじゃん」

「会議に面白いも面白くないもありません」

「ぶー……でもいつか♪皆がいればきつとるんっ♪ってする会議になりそうだし」

「はあ……」

日菜の様子から会議に対し、一抹の不安を覚えている紗夜。彼女はここ最近、ポンコツさとか残念さとかを発揮し過ぎている節があるが忘れてはいけない。彼女は真面目で冷静な性格であることを。すなわち、彼女は本来ならば常識人枠であることを。

「まあ、確かにさくCiRCLEがなくなっちゃう、って言うのはあたし的にも嫌だなー」

「ええ。通い慣れていて、そこそこ近い場所にある。値段も手頃で学生向けで、機材も整っている」

「そうそう、後は近くのカフェもメニュー豊富でおいしいし」

「それに、CiRCLEがなくなってしまうと慧人さんも困ってしまいます。彼自身がアルバイト先を探し直さなくてはならなくなってしまうから」

「あはは、確かにそーなるね」

「もし、彼が今よりも会いに行きにくい場所にバイトするようになってしまえば、会う時間が減ってしまう。それだけは避けるべきよ」

「うーん、そこはリサちゃんたちと同じコンビニか、彩ちゃんたちと同じファーストフード店でいいんじゃない？後はつぐちゃん家だね」

「彼は残念ながら接客に向いていないです。だから、羽沢さんの家でお世話になるのが



ベスト……む？ そうなれば、羽沢珈琲店に通えば慧人さんと会えるように……？」

「慧人は接客しないんじゃないの？ だって、無理でしょ」

「慧人さんだって、目つきが怖くて近寄りがたいことと、やる気のムラが激しいことを除けば大丈夫よ」

「それって、結局ダメじゃん」

「いいの。慧人さんは慧人さんだから。CiRCLEがなくなったら……あれ？ 慧人さん、バイトがなくなって一緒に居る時間が増えるのでは？……つまり、CiRCLEがなくなることと私にメリットが発生するのではないだろうか？」

「……おねーちゃん？ 今からCiRCLE存続に向けての会議するんだよ？ 分かっているの？」

「わ、分かっているわ。なくなることが一番。もし、なくなったら慧人さんはアルバイトをやめて私と過ごせばいい。これで解決よ」

何も解決していない紗夜。本当に今の彼女はCiRCLE存続のために会議を行うことはできるのだろうか？

俺たちの議論はヒートアップした。しかし、残念ながら俺がロリコンである、もしくはないことを証明できないためにこの議論は持ち越したとなった。喋りすぎて疲れた俺たちは各自、買っておいたドリンクで水分補給をする。

「ん？　そういや、冬木。お前片耳にイヤフォンしているけど、何か聞いているのか？」

「音楽」

「はあ!？」

「ええ!？」

一瞬、車内が揺れたような気がした。

「おいおいおい。あの音楽の成績底辺、興味ゼロだったお前が……?」

「歌を武器にして戦える實力を持つお前が……?」

「カスタネットも無理って言ってたのに……」

「全て事実だから否定しないが……」

「先輩!至急病院に連れて行くぞ!」

「ああつ!これはヤバい病気の一種かもしれねえ!」

「そ、そんなあ……死んでほしくないです……!」

皆さんは分かりますか?人が音楽を聞いていただけでこの反応をされるんですよ?意味が分からないよな?

「病気でも何でもねえよ。ちよつと興味が出てきただけだ」

「ちなみに、何を聞いているんだ?」

「Roseliaってバンドの曲」

「Roselia……ああ、あのRoseliaか」

「そうだが……知っているのか?」

「いや、オレでも知ってるぞ?アレだろ。コンビニでバイトしてた茶髪のギャルっぽい

子と、お前が慕っている風紀委員っぽい子が所属しているバンドだろ?」

「メイと同じくらい小さな、ドラムをやっている子も居ましたよね!」

「……あれ?意外と有名なのか?」

「お前が音楽以外でも関わりがあるのは知ってたけど……お前まさか、知らないのか?俺たちとかの若者の間だと結構知名度があるんだぞ?」

「最近、ガールズバンドで有名なところが増えてきたけど……間違いなくRoseliaは名前が挙がるぞ?」

「メイも聞いたことがあります!噂だと、もうすぐガールズバンドの時代が来るとか何とか……」

CIRCLEでバイトしてるが……え?そんなこと言われてたの?マジで?全然知らなかったんだけど。

ちなみにだが、今聞いてるやつは、紗夜さんに風邪の看病した後頼んで、貰ったものである。まあ、快く引き受けてくれたけど……あれ?もしかして、凄いこと頼んでいた?

「というか、有名になりつつあるバンドってRoselia以外何かある?」

「そうだな……まず、真っ先に思い付くのはPastel\*Paletteか?今も人気をどんどん集めているアイドルバンド」

「流石に知っている……というか普通に関わっているな」

「そうそう。言うまでもないが、その金髪ロリコンバカは白鷺千聖推しだ」

「天使様はオレに取つての信仰対象……ああ、もう一度会う機会はないだろうか」

「天使様ですね！」

どうしよう。俺はアイツの残念な……変態なところを多く知っているせいで、素直に共感できない。

「と、お前のように終わっている」

「オイコラコイツほど終わってねえわ」

「女神様も大概だろ……」

失礼な奴らだ。女神様と比べるなんて、万死に値するのではないだろうか。

「後は、AfterglowとかPoppin' Partyとかハロー、ハッピーワルドー！か？まあ、あげようと思えば他にもあがるんだが……」

「少なくとも、今あがった三つは知ってるな。うちの常連だし」

「とりあえず、冬木。いいか？お前がそう言ったバンドをやっている少女たちと関わりがあることを、他に知られない方がいい」

「おう……ん？知られない方がいいって？」

「それがファンに知られようものなら、過激なファンから命を狙われるかもしれない。

そうなれば、お前を襲ったファンに危害が及んでしまう」

「おい。俺じゃなくて襲ってくるやつへの心配かよ」

「いいか？お前が有名なガールズバンドと深い関わりがあることは、俺たちだけの秘密だぞ？決して誰にも言ってはならんぞ」

「ちよつと待て。聞いていればアンタ。絶対に名探偵コ〇ンの博士の台詞を意識しているだろ」

「ふっふっふ。実はメイが小さいのは……あぼ……なんちゃらという薬を飲まされたからですー」

「な、なんだって……！」

「いやそれはないからな？」

全く……何やってるんだか。

と、そんな慌ただしいようなよく分からない時間も、まもなく目的地に着くと言うことで終わりを迎えつつあった。

「さてと、着いたぞお前ら」

「じゃあ、降りるか」

「そうだな」

ということ、鞆を持って降りる。

「忘れ物はないな？」

「ああ」

「ないな」

「よし、頑張れよ。お前ら」

「フアイトです！」

「そうだな、先輩。この合宿が終わったら、久々にサッカーしようぜ」

「ああ。アンタにそろそろ勝ちてえからな」

「まあ、少しだけなら付き合ってやるよ」

「じゃあ、行ってくる」

「また、帰りな」

　　ということで助手席から手を振っているメイに、手を振りかえし、俺たちは目的地へ向かっていく。

「冬木。ここではライバルだ……負ける気はねえぞ」

「こつちの台詞だ東雲」

　　軽く拳を合わせる。

　　さあ、始めようか。

## 慧人の誕生日 ☆

1月22日。Roseliaの五人は集まっていた。

「これより、会議を始めます」

「議題はアレよね」

「ふっふっふ。遂にこの時が来たぞ……！」

「そうだね……！」

「日頃のお返しをしなくっちゃね♪」



1月23日。

「ふあああああああ」

慧人はあくびをこらえきれないままバイトに勤しんでいた。

「寝不足プラス学校プラスバイトは死ぬ……」

前日に夜遅くまでNFOをし、更に普通に学校だった慧人。ほとんど自業自得だがそんなこと彼は気にしない。

そんな状態の彼だが、今日は珍しくそこそこマジメに授業を受けていた。そのために、眠いというもの。

「はっ………もしいや、俺は授業を真面目に受けてはいけない体質なのでは？」

彼は少々バカであった。自身の寝不足に原因があると考えることなく、授業が自分と

あつていないと言い始めたのだ。余りにも残念過ぎるこの男。

「あ、紗夜さん。こんにちは」

と、眠そうにしていた感じから一転、紗夜さんが現れたことで復活する。実に単純である。

「こんにちは、まりなさん。予約していたRoseliaですが……」

「うん。もうスタジオは空いてるよ」

「そうですか。分かりました」

「相変わらず紗夜さんは早いですね」

「では」

「……………」

スタスタとスタジオに向かって歩いて行く紗夜。その後ろ姿を見ることが出来ない慧人。

（ば、バレていないわよね？顔には出ていないはず……う、うん。これで、大丈夫なはず……！ごめんなさい……後でネタばらしはしますので……！）

（あれ……？気付かれなかった……？）

疑問に思う慧人。いつもの彼女なら話しかければ返してくれるのは当然として、紗夜側からも何らかのアクションをするはずなのだ。

(うーん……考え事でもしていた……のか?)

彼女の場合、一つのことには没頭すると周りが見えないこともある。もしかしたら、頭の中で今日の練習のことで一杯になっていたから、気付かなかっただけ。

そう思うことにして、次の客に対応していこうとする慧人。すると、

「スタジオを思いに来ました」

「こんにちはーまりなさん」

友希那とリサの二人がやって来る。

「いらつしやい。友希那ちゃん、リサちゃん」

「もう誰か来ている?」

「紗夜ちゃんがさつき来てたよ」

「やっぱり紗夜は早いよね」

「二人とも、こんにちは。聞いてくださいよ、さつき紗夜さんに気付かなかったんです」

「」

「早く行きましょう。リサ」

「そーだねー練習練習」と

「——けど……?」

慧人が話し掛けていることをまるで知らないかのような二人。そのまま二人もスタ

ジオへと歩いて行く。

(あ、あれ……?)

「これで大丈夫よね？」

「う、うん……いやー……これはちよつと心が痛むかも」

「大丈夫よ。今は作戦通り行きましょう」

「そうだね」

(紗夜さんに続いて、友希那さんにリサ姐も……?)

この二人……特に、リサが人に気付かないなんて珍しい。

(ま、まさかな……?)

と、ここである一つの仮説にたどり着く。決めつけるのは早い……と葛藤しつつも、紗夜とリサに気付かれなかったという事実が、その仮説が真実であるのかと思わせる。

「まりなさん……俺のこと見えてますよね」

「あははく面白いこと言うね慧人くん」

「で、ですよね」

(やっぱり、見えてはいるし聞こえている……だとしたら)

と、頭の中で考えている慧人の前に二人の来客が。

「こんにちはー！」

「こんにちは……」

「こんにちは、あこちゃん。燐子ちゃん」

あここと燐子の二人である。

「スタジオ、空いてますかー？」

「うん。他の三人ももう到着しているよー」

「私たちが最後だね……」

「こんにちは。二人とも聞いてくだ——」

「じゃあ、早く行こうよ！りんりん！」

「ま、待ってよあこちゃん……」

「——さいよ……」

慧人の声はむなしくも届かず。あこは燐子の手を取って走って行ってしまふ。

（こ、この二人も……だと……？）

「あ、危なかった……いつもの感じで行っちゃうとこだったよ……」

「そうだね……バレてないかな？」

「だ、大丈夫だよ！」

「う、うん。早く皆のとこに行こう……」

（……………これはマズい。非常にマズい。仮説が……当たってるかもしれない）

椅子に座り、天井を見上げる慧人。そして、考える。

「ああ、神様。俺は一体何をしたのでしょうか」

（あはは………思った以上に慧人くんの効果覲面らしいね……大丈夫かな……Roseli  
iaの作戦）

Roseliiaの五人に無視をされている。そう考えて間違えはないだろう。

気付かれていない………そう考えるにはあまりにも都合が良すぎる。生憎、五人連続で  
気付かれなくてそれをたまたまと流せるほど、彼の頭の中はお花畑じゃない。

そう考えると自然と答えは一つ。無視をされている。

（なるほど。これは………ヤバいな。何がやばいつて……）

「あの人たち全員に無視されるって、相当やらかしたか……う。」

元々猫の方が興味ありそうな友希那や、人付き合いが得意ではない燐子は少しやらか  
せば無視とかの対象になるだろう。だが、人当たりのいい、誰に対しても接することが  
できるリサやあこに無視されると、普通に考えても相当なレベル。

更にポテトをキメていない紗夜に無視されるのは、過去記憶を掘り起こしても、去年  
のそこそこ不機嫌の日くらいいしかなないと慧人は考える。去年とかでさえ、機嫌が悪くな  
い時はツーンとしながら最低限返したり、超不機嫌な時は怒りと共に返して来たが……  
（いや、それも去年とか半年前の話。………最近でポテトが関わらずに無視されたことは

……ない)

この仮説が当たっているとすると大きな問題がある。そう、それは……  
(俺に心当たりがなさすぎる……！)

誰か一人から無視……ならともかく、Roseliaの五人から無視される。しかも、昨日まではこんなことはなかった……そう。そんな大事になっているにも関わらず不自然なぐらい、彼には心当たりがなさ過ぎるのだ。

(……つまり、俺の記憶ではどうでもいいものが、彼女たちにとってはとても大切なことだった……?)

そうなつてしまえば、いよいよ手はない。何故なら、彼のとつたどんな行動が彼女たちの中で引つかかったか分からないからだ。

「これは……謝罪案件か……」

「どうしたの?」

「いえ……ちよつと気が滅入るといふか……落ち込むといふか……はあ」

(何というか……これが心に來るってやつなんだろうか。流星に軽く落ち込む……)

その後、何度かRoseliaのメンバーがスタジオを出たり入ったりと行き来していた。……しかし、誰に声をかけてもスルーされる。

そんなことが起きて、軽く落ち込みながら仕事をしていると……

「慧人くん」

「何でしょうか」

「そろそろ時間だからさ。Roseliaの子たちが使ってるこのスタジオ、掃除に



行ってきた」

もうそんな時間だったか？ 思ったより短いような……いや、何でもいっか。

「すみません。俺、今行く気がないんですけど……」

「いいからいいから。ほらほら、行かないと給料カット、残業追加だよ？」

「……………始めてまりなさんをぶん殴りたいと思いました。分かりました。いつてきますよ」

これはパワハラではないだろうか。今は虫の居所が悪いから絶対に訴えてやるあの

人。  
……でも、まあいっか。ちょうどいい機会だし、そういうことなら行って謝ればいっか。

そうして、スタジオへと入る扉の前。

コンコンコン

いつものようにノックして入っていく……まあ、防音だしね。

「失礼しま——」

パァン！パァン！

入ると同時に何やら音がする。そして、舞い散る紙吹雪……

「誕生日おめでとう！（おめでどうございます）」

「——はい？」

五人が祝福をしてくる。

「ちよ、ちよつと待っててください？え？脳の処理が追いつかないんですけど……」

「サプライズよ」

「どうどう？驚いた？」

「いや、すげえ驚いたんですけど……え？よく俺の誕生日知っていましたね」

「私は宇田川さんから聞いたわ」

「あこはりんりんから聞いたよ」

「……私が教えました……」

「……え？どうやって知ったんです？教えた記憶はないんですけど……」

「えつと、NFOでプレイヤーは誕生日を入力出来るのでそれで確認して……ぼんちや

んにも裏取りを……」

流石というか何というか……裏取りまでするのは流石としか言い様がない。

「まあまあ、細かい話は後々。まずは座ってよ」

「はあ……」

されるがまま……というか、案内されるがままに座る。そうして皆も周りに座っているが……

「え？今日一日……というか、さっきまでずーっと無視されてたんですけど。それって……」

「ふっ……サプライズよ」

「友希那さん。それ説明になってないです」

「簡単な話ですよ。ワトソン君」

「すみません。ワトソンじゃないです」

「慧人さんのサプライズ誕生日パーティーをすることはRoseliaで決めていました。ですが、場所が問題だったのです。誰かの家に誘うでは簡単にはばれてしまいますので」

「まあ、そうですね」

「だから、CIRCLEでやることにしたんですけども、いつもの感じだとけー兄って、ふらふらって入ってくるじゃん？」

「入るか連行されるかですけどね」

「そうすると準備がバレてしまいますので……だから入りにくい空気を……その精神的にここに入れないように……」

「その通り過ぎて何も言えないですね」

「後は落としてからあげるためだね。まさか、無視されていた相手たちからこうやって

祝われると思わなかったでしょ？慧人くんのこの顔的にもドツキリ大成功♪」

と、リサ姐が見せてきたのはスマホ。そこには、完全に固まっている俺の表情が写っていた。……なるほど。何が起きたか分からない顔をしているなこれは。

「……………もしかして、無視されたのは……………」

「サプライズのためよ」

「友希那さんはもう少し語彙を増やしてください……………」

さつきから友希那さんがサプライズとしか言っていない……………この人、それで何でも解決すると思っていない？

「まあまあ、はい。慧人くん。アタシたちの手作りケーキだよ」

「ありがとうございます……………おいしそうですね」

そして、そのケーキを6等分するリサ姐。その内の一つを取り分け、皿の上に置いて、俺の前に差し出した。

「早く食べてよ！」

「分かったよ。いただきます……………ん？スプーンとかフォークは？」

と、ここで気付く。そういうものがないと……………まさかここに来て素手で食べると言うことなのか？これもサプライズの一環なのか？

そう思っていると紗夜さんが隣に座って……………

「はい。どうぞ」

彼女が持っていたフォークで一口分すくって差し出してくる。それを口の中に入れる……うん。

「おいしいですよ」

「よかったです……」

「この感じ……メインはリサ姐、紗夜さん。飾り付けに友希那さん、あこちゃん、りんさんでしょうか」

「あはは〜大正解。その通りだよ〜」

「よく分かったわね」

「ええ、何か分かりましたね」

そんな感じで食べ進める。と言ってもホールケーキなので、他の皆も食べ進めている。

自分の分を食べ終わると、紗夜さんからフォークをもらって、一口分すくって彼女に差し出す。

「じゃあ、そろそろプレゼントタイムと行きますか〜じゃあ、アタシからだね♪はい」

「これは……可愛いですね」

「でしょ〜? いやー慧人くんの部屋ってほら、癒やしがなさそうじゃん♪これで癒やし

れたらいいなーって」

「流石リサ姐……よく分かっていらっしやる」

「男子にこういうものを贈るのはどうかと思っただけど……まあ、慧人くんだしいつか  
なっ♪」

「ありがとうございます。ハリネズミは一番好きなんで……」

と、リサ姐からはハリネズミのぬいぐるみ。サイズも小柄で……うん。可愛らしい。

「私からはこれよ」

「おお……付箋ですか。……何というか……意外」

「失礼ね」

「いえ、まさか音楽も猫も関係していないとは……ん？でも何故？」

「あなた、紗夜に勉強でしごかれてるから必要かと思っただけ」

「何か思った以上に考えられていた……！でも、まあ、ありがとうございます」

な、なるほど……現実的な理由だ。でもまあ、使えるものだし感謝感謝つと。

「あことりんりんからはね〜これ！」

「これって……」

「タンブラーです……」

「ほお……これまた渋いような……ちなみにどういう理由でしょうか？」

「うんとね、ほら、ゲーム中って飲み物ほしいなーって時あるじゃん？そのときにさ、一タリビングまで行くのってめんどいよね？」

「そこで登場するのがこのタンブラーです。何と飲み物を入れられるだけでなく、保温保冷共に優れています」

「あなたたちは何処かの店からの回し者ですか？」

「これね、夏でも冬でも使えるんだよ！こういうものって便利だよね〜ってりんりんと話していたの」

「うん。それにこのタンブラー、ゲーマーに優しいんです。冷たい飲み物を入れても外側が結露しないんです」

「なるほど。水に弱いからな……ありがとうございます。大切に使いますね」

「これまた二人らしい理由だな。確かに、喉渴いたときには便利だな。」

「最後は私ですね。慧人さん。目を閉じて座っててください」

「こうですか……？」

「ええ。少し失礼します」

ガサゴソとする音。そして、首元に何か当たっているようなそんな感じ。

「目を開けてください」

目を開ける。すると、目の前には鏡があつて、自分がそこに映っている。

「これは……」

自分の首元にシンプルな感じの……そう、

「……首輪ですかね？」

「「……………」」

「ち、違います！チョコカーですよチョコカー！つて皆さんも何か言つて下さい！」

「ご、ごめん……………！笑いをこらえるのに必死で……………」

「笑つたらダメ……………！笑つたらダメ……………」

「首輪……………ふふつ……………首輪……………」

「け、けー兄……………流石に笑いが……………」

と、何故か *Roselia* の四人が笑いをこらえるのに必死そうだった。

大体数分後、ようやく落ち着いた様子の四人。それを見つつ紗夜さんは不服そうな顔でこちらを見ていた。ちなみに、この数分間にチョコカーとは何かを教えてもらいました。はい。

「でも、何故こちらを……………」

「ええ。慧人さんは見たところプラベートでも装飾品をつけているようには見えませんでした」

「まあ、つけてないですね」



「だから何か装飾品をと思ひまして……色々悩んだ末に」

「首輪に落ち着いたと」

「チョーカーです！（ぼこぼこ）」

軽く胸のあたりを叩いてくる紗夜さん。そのまま、彼女を抱きしめて……

「ありがとうございます。凄い嬉しいですよ」

「……………」

「でも、黒色でシンプルなんですわね」

「ええ、慧人さんは装飾に凝ったもの……というよりシンプルの方が良いかと思ひまして」

「そうでしたか……」

まあ、こういう落ち着いた感じの方が嬉しいからいつか。

「ねえ、隣子。確かさ、恋人にチョーカーを贈る意味って……」

「束縛の意味合いが強いつて聞いたことがあります……」

「じゃあ、冬木の言つていた首輪も間違つていないわね」

「本当だ！ けー兄凄いいね」

「なるほどね、紗夜の内なる独占欲の現れか……」

「恐らくそうだと……氷川さんはけいさんのことを誰よりも好きですから」

「紗夜の本気ね」

「けー兄もだし、相思相愛ってやつだね」

「よく似合ってますよ……よかった」

「紗夜さんの目に、間違いなかつたんですよ」

何やら他の四人が固まって話している気がするけど……まあいつか。

そんな感じでサプライズパーティーは無事に終わった。片付けを一緒に行い、紗夜さんを送っていくことに。

聞けばまりなさんも仕掛け人で、俺以外に入らせないようにしつつ、タイミングを合わせるとか諸々動いてくれていたらしい。仕方ないので訴える件は取り下げることしよう。

「いやーでも、あのサプライズは心に来ましたよ……その前の無視されたところが」「うっ……で、でも私だって心に来ましたよ。で、でもその後のことを考えると」

「もう気にしてないですよ」

まあ、本当にドツキリ大成功って感じで、それを読めずに掌の上で転がされたのは少し悔しさもあつたけど。

「ねえ、慧人さん……」

「何ですか。紗夜さん」

「好きですよ」

そして俺たちの影はそのまま……

一つに重なるのだった。

## 学校つて一週間休むと色々起きてるよね ☆

金曜日の朝。俺は……

「冬木慧人くん。君に重要な話があるんだ」

校長室に呼び出されていた。

昨日まで続いていた合宿。そこから帰ってきたのが日付が変わる変わらないかの深夜。まあ、本当はもつと早く帰れたのを先輩たちと寄り道していたらこうなった。自業自得とは決して言つてはいけない。

ちなみに、東雲とメイは今日、創立記念日とかで休み。先輩は授業が入っていないので休み。だから、俺だけだったのだ。今日、こうして何かしらあるのは。

「まあまあ、腰掛けてくれ。君も昨日までご苦労様だった」

「はあ……」

ぶつちやけて言うならすぐえ眠い。昨日までの疲れが押し寄せて……というより、普通に寝不足だ。マジで眠い。だから話もほとんどが右から入って左から抜けている。

さつきも二枚の紙にそれぞれ名前を書いた気がするが、何で名前を書いていたのかまるで理解していないという事態。これは1限おやすみなさいだな。うんうん。

「君がいない間に生徒会メンバーが一新されたんだよ」

「はあ……」

虎南高校生徒会。

ここは代々、先代の生徒会メンバーによる選定で生徒会長以下役職が割り当てられる任命式を取っている。だから、生徒会に入りたいたいという奇妙なヤツ……コホン。真面目な優等生は早い段階から生徒会メンバーに媚を売りに……アピールしている。テストでの順位とか学校行事とか部活での活躍度とか色んな方法で。勿論、生徒会メンバーだけでなく、教師陣も次期生徒会メンバーの選定会議に参加しているので、よほどおかしな生徒は選ばれない。

任期は約一年。生徒会に問題がなければ大体今ぐらいの12月から来年の同じくらいの時期まで。選定期間とかその年の生徒会メンバーによっては若干前後するがそんな感じである。

ちなみに今年の……というかこの前までの生徒会長はよくある優等生。テストなども成績トップで学級委員的な役職もこなしていたという、なるべくしてなった生徒会長。

虎南高校は生徒数だけで見れば男子が圧倒的に多い。しかし、生徒会の構成で見れば半々か、女子の方が多くなる傾向にあるらしい。その理由は男子の数が多くても、真面

目な男子ばかりではないということを示唆している……と俺は考えている。

「で、君に生徒会長を任せることが決定した」

「はあ……………ん？」

今……………なんて言った？

「Sorry, one more please?」

「君が新生徒会長だ」

「Oh… Really?」

「Really」

「OK, OK. I see. It's a surprise. It's D

okkiri. ちなみにドッキリは英語で『Hidden camera』って言います。by 紗夜」

「No, No. It's a real」

「……………はあ?!」

校長室が揺れた気がする。だが、そんなことはどうでもいい。はあ？俺が生徒会長だとか？ふざけるのも大概にしろよ!?!……………いや、待て。まだ状況は詰んでないはずだ。何処かに突破口があるはず……………思い出した。確か、アレがあるはずだ。

「校長先生。異議申し立てを行います」

異議申し立て。

新生徒会が決まってから一週間、異議申し立て期間というのがある。

前生徒会メンバー並びに教師に対し、新生徒会メンバーに不服がある場合は異議申し立てをする事ができるのだ。

新生徒会メンバーに選ばれた者が行う場合は単独で、他の人が行う場合は30人以上の署名を集めた上で可能となるもの。全校生徒に対し、対象となる新生徒会メンバーの信任投票を行い、過半数が不信任或いは無効票を出した場合、その者は除名され、前生徒会メンバーが新たなメンバーを補填するというもの。もちろん、一人に対し、この投票は一回しか行われない。当然だ。何度も何度も行われても意味がなく、不信任にしないと終わらないという事態を防ぐためだ。

「残念ながら、君に対し異議申し立てを行った者たちが居て、全校生徒に対し投票を行ったが、信任率90%越え。立派な新生徒会長だよ」

「マジかよ……」

「それに、すでに先ほど君も同意したよ。ほらサイン」

そう言つて見せられた紙には俺の名前が……つて、さつき適当にサインしたやつじゃねえか!?皆さん、サインをするときはしっかりと内容をよく読んでからサインをしましょう。by紗夜

「とういわけで、君には新生徒会長として頑張ってもらいたい」  
「めんどくせえ……」

畜生……誰だよ俺を生徒会長にしようなんて阿呆なこと言い出したやつ。

「で、用件は終わりですか？」

「そして、君には新生徒会長として（ではないが）初の仕事がある。それがこれだよ」

「料理……甲子園？何ですかそれ」

「少し前に3校合同で料理対決をしたのは覚えてるかい？」

「あーあれですね。覚えてますよ」

オムライスをたくさん食べて、日菜と取り合いをして、クーポンもらって、そのクーポンが全部紗夜さんのポテトに消えたアレだろ？覚えていない方は『キッチン』は女の戦場だつて誰が決めた？』を見に行きましよう。by 紗夜

「所謂本番だね」

「なるほど」

「そして、花咲川と羽丘の調理部の人たちが是非、虎南高校……特に、冬木くんに出場してほしいと熱烈なアプローチがあつてね」

「あはは〜お断りです」

「当然、我が校としてはそのようなアプローチを受けては」



「あははくお断りしましたよね？」

「次も勝たせて頂きますと」

「オイコラ、俺は参加しねえぞ」

すると、スツツと出されたのは一枚の紙。え？賄賂かな？賄賂だったらなびくなく

「既に君から、参加誓約書のサインをもらっているよ」

「つてまたかよ!?!」

何と、さつき適当にサインした二枚目はごちでした。おい、こらマジかよ。

「ちなみにこれが予選と地区予選のルールだそうだ」

そう言つて紙束を渡される。え？厚いんだけど？

「予選と地区予選？何が違うんですか？」

「この大会、この地区では地区予選にも関わらず余りに参加チームが多いため、最初に振るいにかける……言わば予選の予選があるそうだ」

「なるほど……地区予選の前の予選かよ……」

「その予選を通らないと地区予選には出られない。頑張つてくれ」

「はあ……つて、またチーム戦ですか？」

「安心してくれ。全国大会までルールに目を通したが……うむ。最悪一人でも戦えないことはいぞ」

「おい。まさか単独で出ろって言わないよな？」

「それはないから安心してくれ。前のチームで参加することにしてある」

「安心ねえ……」

「話は以上だ。質問はあるかい？」

「質問しかねえが、一つ宣言しておく。俺を生徒会長にしたことを後悔するなよ」

そう言っただけは校長室を出て行く。

キーンコーンコーンコーン

「って、朝のHRの開始のチャイムじゃねえか!？」

この後、教室までダッシュをしたのは言うまでもない。

「期待しているよ、冬木慧人君」

この後、校長は早々に頭を抱えることになるのだった。

放課後。今日一日授業に関する記憶はほとんどない。

「ほんと、今日一日何していたのだろうか？」

不思議だ。朝の衝撃的な事件から気付けば放課後。その間の記憶は昼休みを除いて、ほとんどない。……まさか、タイムスリップをしたとも言えるのか？

「……………寝てたでしょ」

「ほとんど爆睡だったじゃん」

なるほど。起きてないなら記憶がないのも納得できる。

ということでは現在、部活動中。恒例のサッカー部ランニング中である。

「なるほど。まあ、朝から衝撃だったからな……」

「よつ、新生徒会長」

「……………乙」

「うるせえ」

「でも、新生徒会メンバーは苦労しそうだね」

「……………頭がこんなんだから」

「どうか、他のメンバー誰か分らないんだけど」

「確か、生徒会副会長は一年の成績トップの女生徒、書記が書道部部长で」

「……………会計が一年の学級委員長をしているような女子。風紀委員長がうちの学年の成績トップ」

「……………なるほど。……………つまり？」

「冬木が仕事しないことを見越して、見事に優等生で固められているね」

「……………それに男子生徒だと一緒にサボりそうって理由で全員女子」

なんて生徒会だ。それでいいのか生徒会。

「でも、教師側も酷いよな。生徒会長って権力者なわけじゃん？偉いじゃん？生徒会長権限行使したら、昼休みにかなり怒られたんだけど」

「あれはお前が悪い」

「……………キャプテンも怒られていたけど、うん。あれは冬木が悪い」

「いやさ、急に焼き芋が食べたくなってきた。頑張つて落ち葉とか細かい木を拾って、たき火していたんだよな……何で怒られたんだらうな」

おかしい。生徒会長が許可したのに怒られた。学校清掃つて名目だったのに怒られた。ちなみに、近くに居たサッカー部連中も怒られた。実に残念な話だ。次回リベンジだな。うんうん。

「あ、お疲れ様です。先輩方!」

「ドリンクです!」

そのまま走り終わつて学校に帰つてくると、生徒が二人程近づいてきた。……………ん? 誰?

「もらうね」

「……………ありがとう」

「ありがとう…………?」

そのまま、俺たちは歩いて行く。一方女生徒たちは、他の奴らが帰ってくるのを待っているみたいだが…………

「誰?」

「お前がいない間に入部したマネージャーたち」

「へーマネージャー…………ん? 今、冬だよな? 何で今ごろ?」

「……………理由はこの二つのどちらか、或いは両方だと思う」  
「二つ?」

「二つは次期生徒会メンバーに入るためかな。ほら、うちの生徒会の人選のシステム的に会長に媚を売っておけば選ばれやすくなるし」

「……………もう一つはサッカー部の知名度が上がった影響。今年だけでサッカー部は色々と活躍しているからね……………良くも悪くも」

「なるほど……………道理でキャプテンがさつきから燃えているわけだ」

「安心してよ冬木。あの二人が入部してから、ずっとあんな感じだから」

「……………ちなみに、他の部員たちも」

そう言って指さした先には走り終わった部員たち。この前まではへばっていたり休んでいるはずなのに、もうボール蹴って自主練習をしている。…………なるほど。単純だな、こいつら。

「おい、冬木」

「何だよキャプテン」

「遂にお前にも、このサッカー部の新たな協定を教えなければならぬようだな」

「協定?」

「そう。協定だ……………いや、掟と言った方がいいか?」

嫌な予感がする。そう思っていると、気付けば（アホな）部員たちに囲まれて、森下と千石に逃げられた。

「いいか。これからお前に告げるのは、絶対にマネージャーに手を出さない。紳士の協定だ。破れば……」

「破れば？」

「……お前は畑の肥料になると思え」

「……………」

周りの部員の見る目が……何だろうね。うん……こいつら、ダメかも。知ってるかい？ サッカーってチーム競技だよ？ 俺たち仲間だよ？ よく、そんな目を向けられるね。ぶちのめすぞ？

「『その1。マネージャーと個人的な関係を持つてはならない！』」

「『その2。マネージャーと二人きりで登下校してはならない！』」

「『その3。マネージャーに過度な労働を強いてはならない！』」

「……………」

その4……その5……と何か全員で息を揃えて叫んでいる……どうしよう。とりあえず全然頭に入ってこないんだが……いつから、このサッカー部は阿呆の集まりになったんだ？……いや割と最初からか。

「以上が紳士の協定。掟だ……貴様はこのサッカー部の中で一番この掟を破る可能性があるからな……！」

「あーはいはい。まあ、なんでもいいわ」

とりあえず、ドリリンクをマネージャーに返して、練習開始。

「……人、多くね？」

パス練ということで、四人でパスを繋げているが……何か視線を感じる。

「あー知らないのか。お前の情報ダダ漏れだぞ」

「は？どういうこと？」

「………無名の高校から代表選手登場。他校の偵察、ウチの学校の観客……今、大注目だよ」

「お前のファンクラブは作らせねえ……男は許す。女子のファンクラブは許さん」

「……マジ？というか、校長にしか言っていないのに、何でもうバレてんの？」

「バレバレだったね。お疲れー」

「………名前だけ顧問が何か大変そうらしいよ」

「お前が有名になればその分、サッカー部が有名に……！ゆくゆくは女子たちがきつと……」

「おい。ファンクラブは作らせないんじゃないのか」



「お前個人のは許さん。サッカー部全体のは許す」  
……有名……ねえ。何も起きねえといいけど。

その後も部活動は、合宿前よりも良くも悪くも熱が入っていた感じがした。

『やつほー。遅かったね♪』

『部活だ部活』

夜になってNFOに久しぶりにログインをする。今日はバイトもなく帰ってきたため、速攻でNFOを開く。何か明日も部活やるぞー！ってキャプテンたちが張り切って言うてて……何だこの熱の入りよう……って感じた。一週間前とは大違いだ。

NFOでは俺の（アバターの）前に三人が座っていた。一人はほんちゃん、残りは……

『学校もあって、ご苦労様だな』

『……大変』

男のアバターであるトウウン、そして女のアバターの皐月である。まあ、中身はアイツらなんだけど……地味にこの4人がここで揃うのは久しぶりだったりする。全員がマイペースにログインするため中々4人で揃うことがないのだ。

『で？リーダー直々の招集って？』

『いやこのギルドもさー大勢力になってきたわけじゃん』

『確かに、傘下ギルドの数ならNFOトップだろうな』

『……ただし、ギルド名は見えないものとする』

……人の性癖の数だけギルドがある……なんて残念なんだウチのギルドの傘下。

『ここら辺でさくちよつと名をあげるために動いてもいいかもと思って♪』

『まず、アンタのその口調を俺たちの前でやめろ』

『右に同じ。中身を知っているオレたちからするとキツイ』

『……吐きそう。トウウン、エチケツト袋』

『今から渡しに行つて間に合わないだろ……』

『お前ら、揃いも揃つて……はあ』

いや、呆れたいのはこつちだつての。他のプレイヤーが見ているときにはごまかすが、今は4人だけ。やめてほしいにもほどがある。

『でも、何度か名前が乗つたりしてているだろ?』

『……頭のおかしいギルドランキングトップ。傘下のギルド数ランキングトップ』

『というか、俺のギルドは一応お前らの傘下なんだけどな』

そう、トウウンの言うとおり、俺、ぼんちゃん、皐月は同じギルド。トウウンはギルド「CBPC、傘下、金髪ロリータ教」のギルドリーダー。ちなみに、この男。傘下のギルドのリーダーの中でもトップに君臨していたりする。

『……後は時々イベントで上位層に顔出ししている』

『そう、そこだ。上位層にいるけどトップではない』

『間違いなく原因は俺たち含め全員がエンジョイ勢つてことだぞ』

ウチのような阿呆な名前のギルドのメンバーにガチ勢はいない。楽しく自由に各々が布教活動をし、時々性癖の違いからギルド対抗戦が行われる始末。残念極まりないのだ。

『そこです。各々、イベントで名をあげて欲しい』

名をあげるか……なるほど。要するに、布教活動頑張るってことか。

その後は何もなく流れ解散。

『じゃ、適当なイベントクエスト行ってくるわ』

『……お風呂』

『街角演説してくるね〜』

と、全員が消えていった。

「いや、間違いなく悪い意味で有名なんだけどな……」

特に街角演説に行ったあのバカリーダーのせいで。

そう思いながら俺は俺で、手元にある二つの資料を読むことにする。

一つは生徒会での資料。もう一つは、料理甲子園の資料。

「何というか……忙しくなってきたな」

そう思いながら、りんさんとあこちゃんから一緒にクエスト周回しないかと言うチャットが来たのでそれに乗ることにした。

# Roselia、襲来 ☆

土曜日のお昼頃。冬木慧人生徒会長正式就任の次の日のことである。

ピンポン

「いやあ〜一週間ぶりくらい?」

「そうですね。日曜日から木曜日まで合宿で、昨日は学校に行ったそうですがバイトがなかったので会えずじまいでしたから……本当に一週間ぶりです」

「嬉しそうですね。紗夜」

「勿論です。昨日はLONEでやりとりしていましたが……直接会うのは別です」

「あ、昨日はNFOにログインしてたよね!りんりん!」

「少しだけですけど一緒にクエスト周回していました……」

慧人の家の前には五人の少女が居た。彼女たちは午前中の練習が終わると、ファミレスで昼食を取り、その足でここまでやってきたのだ。

ガチャ

「はあーい……あら?慧人のお友達?」

「ええ。そうよ」

「おおっくあの子も隅に置けないね！こんなに連れてくるなんて♪」  
「はあ……」

慧人は基本的に愛想がないというか、纏う空気もそんなに明るいわけでもない。だから、目の前の女性の空気に少し戸惑っている。

「慧人さんのお母様……ですよね？」

「そうだよ♪」

「も、申し遅れました。私は氷川紗夜と申します」

「今井リサです」

「湊友希那よ」

「う、宇田川あこです！」

「白金燐子です……」

「うんうんく紗夜ちゃんにリサちゃんに友希那ちゃんにあこちゃんに燐子ちゃん。よろしくね」

そして、慧人の母は五人の少女を一人ずつ目を向けていって、ある一人の少女にもう一回目を向ける。

「あ、あの……どうかされました？」

「あ、ゴメンね！あなたが千聖ちゃんの言ってた紗夜ちゃんだよねっって確認していた

の

「え？白鷺さんと面識が……？」

「何度か会ったよ！そこで紗夜ちゃんも慧人がいい感じって話を聞いててね」

「そ、そんなことないですよ……」

（（いや、そんなことしかないでしょ……））

「とにかく直接会えてよかった♪これからもよろしくね！」

「はい……」

（流石千聖……まさか、もう慧人くんの母親を懐柔しようとしていたなんて……）

「さて、立ち話もなんだから家の中に……ってええ!?もうこんな時間!?!くう……!?!何でこんな日に仕事があるのよ……!?!私仕事行ってくるから!?!あ、慧人は部活から帰って、部屋で寝ていると思うから後よろしく!?!」

そして嵐のように去って行く慧人母。残された五人は……

「……入りましょうか」

「そうだね」

とりあえず家の中に入ることに。リビングのところのソファに腰掛け、各々荷物を置くことに。

「何か、慧人さんからは想像も付かない人が来ましたね……」

「確かに……あの明るさが少しでも慧人くんに引き継がれていればよかったのにね」

「それだと……もつと暴走していたような……」

「それは相手するのが大変だわ」

「やつぱり、今のままでいいんだよ！」

「でも、けいさんが寝ているらしいですね……」

「そうだねーけー兄もお疲れかな？」

「きつと大変だったんだろうねー」

「あら？それだと彼はお昼ご飯を食べていないのかしら？」

「それはいけませんね。食事はとても大切ですから」

「じゃあ、紗夜く様子を見てきて」

「分かりました」

紗夜が慧人を呼びに部屋に行く。そして、部屋をノックして呼ぼうとした時に気付いた。  
た。

(……ここで音を立てると起こしてしまうのでは？いや、起きてもらわないと話が進まない。でも、きつと疲れているでしょうから起こすのは忍びない……)

ということで、ノックをせず、静かにドアを開けて、そのまま中に。ドアを静かに閉めるとそこには……



「……………すう」

静かに寝ている慧人が。普段とは違いその無防備な姿には……

「……………よく寝ていますね」

思わず紗夜の頬も緩んで、優しい笑顔を向ける。そのまま音を立てずに、近くに寄っていき、身を屈め、慧人の頭のあたりに手を持って行く。

「お疲れ様です」

そして、何度かゆつくりと撫でながら考える。

(……………どうしましょう。……ここまで気持ちよさそうに寝ていると起こすのが忍びない……でも……起こさないといけないですし……いや、疲れているだろうし……うーん………一  
体どうしたらいいでしょうか……)

「……………ん」

目を覚ます。以上。

……いや、毎回何かを感じたから目を覚ますわけではないよね？ただ、何となく目を覚ます。

しかし、目を覚まして違和感を感じた。何かに、押さえつけられているというか、何かが俺を拘束している感じがしたのだ。

「……………これが金縛りというやつか？」

ただ、それにしても何かがおかしい。……そう。俺しかないはずなのに何故か……

「……………すう」

耳元で寝息が聞こえてくるのだから。そう思つて、寝息の聞こえる方へと顔を向けると……

「……………すう」

……女神がいた。目の前……かなり近い距離に目を閉じている紗夜さんがいた。

彼女は俺の隣で、俺に抱きつくような感じで寝ていた。……なるほどな。すべてを理解した。

「全く……………」

俺は自身の身体を横に向け、彼女の背に手を回して……

「……………すう」

二度寝を決め込んだ。

「……………遅いわ」

「そうですね……………40分くらい経ちました？」

「リサ姉ーそろそろ呼びに行こうよー」

「うーん……………そうだね。行こうか」

階段を登って扉を開けるそこには……

「……………すう」

「……………すう」

一瞬で扉を閉める四人。

「あの二人って付き合っているの？」

「いえ……さっきの氷川さんの反応的にまだかと……」

「もう付き合えばいいのにね」

「本当にね。そこまでいったら早くしてほしいね」

「とりあえず起こしましょう」

「そうですね……」

再びドアを開ける一同。

「起きてー！二人ともー！」

「ふむふむ。この体勢……なるほど。多分、慧人くん。紗夜が来てから一度起きてるね

☆

「そうなの？よく分かるわね」

「まあね♪慧人くんの腕が紗夜を抱き寄せるようにしている。これは寝相がどうでは説

明できないよ☆」

「慧人さんが自ら……なるほど。二度寝ですね……」

「そんなことより起きてよー！けー兄！紗夜さん！」

しかし、起きる気配がない。

「どうする？叩き起こす？」

「……それは……最後の手段にしましょう……」

「起きてー！朝だよー！今、昼だけどー！」

「これは厄介だね……あこ。ここはアタシに任せて☆」

自信満々に言うリサ。そして、

「クールビューティーなポテトの妖精がやって来たよ☆」

「「どんな妖精!?!」」

「クールビューティー?」

「ポテトの妖精?」

「「つて二人とも一瞬で起きた!?!」」

この後、クールビューティーなポテトの妖精を捜そうとする二人が居たとか居ないとか。

Roseliaがやって来て、大体一時間後……。

「……はあ。それにしても、二人とも?一緒に寝ていて、アタシらの存在を忘れていたのかな?」

「私は忘れていたわけではありません。ちよつと抜けていただけです」

「それを忘れていたって言うの!お陰で暖房つけていいかとか分からずに凍えていたん

だからね！」

「大変でしたね。あ、暖房はつけていいそうですよ」

「もうつけた後だよ！………それで？何で起こしに行つた紗夜が、一緒に布団に入つてお互いに抱きしめ合つて寝ている状況に？」

「これにはマリアナ海溝よりも深いわけがあるんです」

「ほう。そのわけとは？」

「慧人さんが気持ちよく寝ていたからです」

「そこらの水たまりより浅いわけだよ！」

「いいえ。これはとても深いと思いますか？私は例え日菜が寝ていようと、一緒に布団に入つて抱き合つて寝るような真似はしません。しかし、慧人さんには半ば無意識にその行いをしていた。そこで思ったんです。これは万有引力と同じだと。私と慧人さんの間には見えない何か働いていて、自然に引き合ふんですよ」

「え………そ、それって………恋の引力？」

「いえ。そんな曖昧なもの私は信じていません」

「いやいや、この流れは乗つてよ紗夜。そして……」

グイツと耳を引つ張られる感じがする。ちよつ、やめてリサ姐、集中が途切れる……

！

「今だよりんりん！友希那さん！けー兄を協力して倒すんだ！」

「そうだね。魔王慧人を討伐するチャンスです」

「もちろん。私も手を貸すわ」

「ちよつと待て。今チーム戦じゃねえだろうが」

俺と友希那さん、りんさん、あこちゃん、あこちゃんの四人は、リサ姐と紗夜さんが話す裏でゲームに勤しんでいた。四人で対戦することができると言うことで、スマ○ラをやっている。

操作キャラは俺が魔王、りんさんがその魔王と同じ作品の姫、あこちゃんが小さいお星様と戦う女性、友希那さんがピンクの歌うアイツ。

四人、個人個人で戦っているはずなんだが、何故か1vs3の状況に。いや、正確には……

「アタシは慧人くんにも言っているんだよ？聞いてる？」

「聞いてません」

1vs4かも。くう……この勝負は負けるわけにはいかないのに……！特に何もかかっていないけど！いや、ここは……！

「紗夜さん！」

唯一俺の敵に回っていない紗夜さんに頼ることにする。

「分かりました」

「どうやら紗夜さんも分かってくれたらしい。そう……」

「……さては、全然分かってないですね?」

「いえ。私だけが何故か攻められる空気はおかしいので、慧人さんも巻き込もうかと」  
後ろから抱きしめられている。思い切り阻害されていますね。はい。

ゲーム内では友希那さん、りんさん、あこちゃんの三人から、現実ではリサ姐と紗夜さんから攻撃を受けている。なるほど、つまり1v5ということか。

「クククツ。思い知らせてやるよ、お前らがどれだけ束になってかかってこようと俺には勝てないって事をなあつ!」

「そんなことないわ。皆の力を合わせればあなたを倒せるはずよ」

「ふははははつ! 今日こそ魔王の座を頂く! 覚悟!」

「私たちの最高の連携……見せてあげます……!」

「Roseliaを舐めないでよ☆相手が強くても勝つんだから」

「その通りです。ここで終止符を打たせてもらいますよ」



激しい攻防の末、勝利を収めた俺。あそこまで言っておいて簡単に負けた日にはちよつとダサ過ぎるので、何とか勝ちました。

とりあえずゲームをやめて六人で机を囲う。

「……で、結局何で俺じの家に集結したんですか？」

「そんなの決まっているじゃないですか」

そうすると、五人ともが鞆から何かを取り出そうとする。え？何だろう一体。

「……………俺、帰ります」

「……は君の家だよ☆」

「友希那さん！あこちゃん！今すぐ一緒に逃げるぞ！」

「……ダメよ。ここで逃げたら家に帰れなくなる」

「あ、あこも……NFOが出来なくなっちゃう」

「くう……ゲームしたいと思いませんか？りんさん」

「さつきまでやりましたので……」

「どうして……どうして……」

「慧人さん……」

肩に置かれた手。しかし、俺にそんな慰めはいらない。

「どうして……勉強会なんですかあああああつ！」

「やりますよ」

思わず叫んでしまう。しかし、その叫びは無情にも彼女に届かなかった。

「だって、慧人さん。あなたこの一週間、ほとんど勉強してないんでしょ？」

「やれやれ。甘く見ないでください紗夜さん。しっかり昨日、学校に行って真面目に授

業を——」

「受けずに寝ていたのでしょ？」

「——う、受けてましたよ……」

「私の目を見て。もう一度、宣言できますか？」

「……も、もちろんです……心の中では」

「……………(ジー)」

「……………(サツ)」

「……………(ガシツ、ジー)」

肩を掴まれて詰め寄られる。その勢いでそのまま押し倒され、逃げられない状況に陥る。彼女の目の奥は全く笑っていないかった。

「……………ごめんなさい」

「まあ、分かっていたことですからね」

流石にここまでされる程の迫力には負けるよね。うんうん。

「さ、紗夜さん怖……あ、あこは真面目に受けているよ！信じてりんりん！」

「う、うん……信じているよ。だから安心して、あこちゃん」

「冬木、完全に負けてたわね。……仕方ないとは思うけど」

「容赦ないなまあ、紗夜はスパルタだから仕方ないか」

「何か言いました？」

「「いえ、何も言っていないです」」

「「よろしい。では始めましょうか」」

「「はーい」」

「じゃあ、勉強道具持ってます……」

……ん？待てよ？勉強道具を取りに行く体でサボれるのでは？そのまま帰らなければ……

「……………えっと、何で付いてきているんでしょうかね？紗夜さん」

「いえ。慧人さんの事ですから、勉強道具を取りに行つてそのまま帰らないつもりかと思ひまして」

「やだなー紗夜さん。そんなわけないじゃないですか」

何故バレているのだろうか。さっきから色々バレすぎじゃね？

「そうですね。いくら慧人さんでもそんなバカなマネシナイですよネ？」

「も、もちろんです。どうせこの鞆から筆記用具とか出してないんで、戻りましょうか」

こ、こええ……………これ、ここで逃げたら即殺されるぞ……………畜生。この作戦は失敗かあ……………はあ。そんなこんなで、戻つて鞆から勉強道具を出して、広げる。

勉強か……………勉強……………ん？勉強？

「勉強つて……………何だっけ……………」

ああ、この一週間本当にやった記憶ねえや。だって、サッカー漬けで？昨日も色々あつて？まあ、無理だよな。

そう思いながら指先で何回か机を叩く。

「……」

「慧人さん」

ポンツと肩に手が置かれる。

「何でしょう?」

「無駄ですよ。モールス信号で逃げたいとおっしゃっても」

あ、やっべ。伝わっていた。一番伝わっていてほしくない人に伝わっていた。……こりやダメだ。

「……(了解)」

「そう。分かればいいんですよ」

(「いや、何も分からなかったんだけど?」)

おかしい。何でこの人モールス信号が分かったんだ? いや、授業中に俺のクラスで先生にバレないように会話用として使い出したのはいいんだけど……嘘だろ。日菜とかモカとかなら少し時間が経てば伝わりそうだけど、まさか紗夜さんに即バレとは思わなかった。

そんな感じで一時間が経過した。あの手この手で逃げようと画策したが全て防がれた。結果、逃げるための打つ手がなくなつたので、仕方なく勉強に集中することにした。「と、この言葉はこうやって覚えるんです。分かりました?」

「はい」

「よろしい。……ところで、この問題なんですがここから先が少し分からなくて……」  
「そうですね………ああ、ここから先は一つ前の小問で出てきたコイツとこの式を組み合わせさせて……」

「……なるほど。ありがとうございます」

「(こ)ち(ら)ん(そ)」

とここでだが、俺と紗夜さんというのはタイプ的に相性がいい。いや、勉強へのやる気皆無で脱走を試みる人と容赦ないスパルタ指導の監視人って意味じゃないから。半分くらい……いや、七、八割くらいそれもあるけど違うから。

紗夜さんは典型的な努力型、秀才タイプで、一つ一つをきっちり積み上げていく。だから基本事項の暗記が得意で、応用までなら今までの積み重ねで解ける。しかし、難問だったり異質な問題に対して初見で解くことがあまりできないタイプ。

一方の俺はどちらかと言うと感覚派。天才とまでは言えないが、初見であろうがお構いなしに難問とか感覚的に解けるし、難しい方がやっていて面白いし楽しい。しかし、残念ながら、暗記が苦手な単語、公式などが頭に入っていないタイプ。

つまり、俺たちはタイプのほぼ対極に位置していると言っている。だから、紗夜さんは俺に基本事項を教えることで、紗夜さんは知識の定着、俺は教わってそれを覚える。

俺は紗夜さんから聞かれる難題に答えることで、紗夜さんは解法の理解、俺は解いて面白さを感じる。双方が双方の苦手な分野を得意な分野で補う関係。相性がいいというのはそういうことだ。

さらに一時間後。

「友希那くあこく生きてる?」

机に突つ伏す二人がそこにはいた。

「勉強なんてなくなればいいのに……」

「あこは二次元に逃げます……」

「お疲れ様……」

「紗夜さん。俺も疲れたので休憩を……」

「まだできますよね?」

「……What?」

「一週間分の遅れを取り戻すには、まだまだ足りませんよ」

「………紗夜さん。休みは必要です」

「充分休んでいましたよね?」

「………」

無言で立って、無言で冷蔵庫からあるものを取り出す。

「これから休憩用のポテトを揚げようと思いますが、まあ、休憩なしならこれもなしですよね？」

「……慧人さん。やはり人間の集中力というのは長時間連続で持つものではありません。だからこそ、休憩が必要なんです」

「じゃあ？」

「これから休憩しましょう」

（チヨ口過ぎる……）

「ありがとうございます。ポテト揚げます」

「お願いします」

流石紗夜さん。ポテトに釣られるなあ……ちなみにこの家の冷蔵庫には、いつでもポテトを揚げられるようにポテトたちがスタンバイしている。でもまあ、

「……ポテトに釣られて誘拐されないか心配」

「いくら私でもそんな事態は起こりませんよ」

「紗夜さん。俺以外の人にはついて行かないでくださいね」

「もちろんです。慧人さん以外の人について行きませんよ」

そう言いながらポテトを揚げていく。

「……冬木」



「何でしょう。友希那さん」

「鞆から何枚か紙が出ているわよ」

「紙……？」

昨日……ああ、一週間分溜まった配布物ももらったんだっけ？だから、きつとそれだな。多分、親に渡す系のも含まれているだろうし……

「その辺に出しておいてください。多分、親に渡すやつなんで」

「そう。分かったわ」

そういうや、昨日は帰ってから鞆を開けてなかったなあーと思いながらポテトを器に乗せていく。まあ、見られてマズいものなんて入ってるわけないから何でもいっか。

「あ、これけー兄のテストだ」

「……………ん？テスト？」

「本当だ。英語の小テストだねー」

……確か、昨日の1限にテストをして、帰りのHRで返ってきたような……ん？ちよつと待てよ？

「……………あれ？ここに再試って文字が」

バンツ！

「……………」

りんさんが言うのと同時にテストを裏返す。紗夜さんの方を見ると……やべえ。すげえ笑顔だ。

「慧人さん？ どういうことか説明願いますか？」

そして、聖母を思わせるような笑みで優しく問い掛ける……ただ、それはあくまで表情だけあって、その空気は恐ろしく冷たかった。

「き、昨日の1限にあつて……俺にとつては抜き打ちだったんですよ。しかも前日の夜中に帰ってきたから寝不足で寝不足で……」

「端的に纏めなさい」

「イエスマム。抜き打ちの小テストより睡魔を優先させました。反省も後悔もしていませんー！」

「「な、なんて清々しい開き直り……！」」

周りの皆はしつかり事前に伝えられていたが俺には伝わっていない。実質抜き打ちだったし良かったかって思ってたけど……

「慧人さん。私はテスト中に寝るなどは思いません」

「じゃ、じゃあ……！」

「……が、寝た上で再試になるなど言語道断。……ねえ。慧人さん」

「な、何でしょうか……？」

「冬って寒いですよね」

「何を当たり前なことを」

「冬休みもありますが、寒いですよね」

「ははっ……嫌な予感」

「もし、再試で満点を取らなかつたら」

「取らなかつたら？」

「あなたに冬休みはないと思ってください」

「……そ、それはどういう意味で……」

「私が地獄の勉強合宿を予て」

恐怖か寒さかは分からないが、震えている手を押さえながら、右手でポテトの端を持って、もう片方の端を紗夜さんに差し出す。すると、

「……（モグモグ）」

静かに食べ始めた。先ほどまでの凍てつくような笑顔ではなく、後ろに花が咲いているような笑顔に変わった。

そしてポテトを食べ終わると、再び凍てつくような笑顔に代わり……

「いします。タイムスケジュールを全て私が管理し」

再びポテトを差し出すと、

「……………（モグモグ）」

静かに食べ始める。そして食べ終わると……

「て、徹底的に……………（モグモグ） ……勉強を……………（モグモグ） ……叩き……………（モグモグ）」

……………（モグモグ） …………………」

な、なるほど。紗夜さんを喋らせないように、ポテトを差し出し続けければ、紗夜さんが話せない！勝った！これは勝ったぞ！

俺は勝ちを確信した。

そんな感じで数分間、紗夜さんにポテトを供給し続けた。しかし、ある問題が発生する。

「なっ……………！ポテトの残りが少なくなっている！ポテト補給班リーダーリサ姐！ポテトの補給はどうなってる!？」

「残念ながらそれが最後のポテトです（シクシク）」

「泣き真似してる場合じゃないですよ!?!このままだと俺が死んじやいますよ!?!」

「うーん。ドンマイ♪」

「軽い!?!あまりに軽すぎませんか!?!じゃあ、ポテト補給班サブリーダーりんさん！ポテトの補給をー!」

「え、えっと……………そ、そんないきなり言われても……………」

「そうこう言ってる間にポテトがなくなってしまう……一体どうすれば……!」

紗夜さんにポテトをお供えしなければ……! 少なくとも俺が死んでしまう……!」

「……こうなったらRoseliaの全員を巻き込んで死ぬしか」

「それはダメ!」

「なっ……! 同士の友希那さんにあこちゃん! 我ら死ぬときは一緒のはずでは!」

「ふざけないでちょうだい! 私は勉強をする気は更々ないわ!」

「いや、それはそれで問題だよ? 友希那!」

「そうだよ! 勉強なんかよりバンドとNFOだよ!」

「でも、勉強も少しはしないといけないよ……?」

「俺も勉強なんてする気ないですよ! そんなやる気ゼロですよ!」

と、紗夜さんの方を見ると……あ、やっべ。ポテトが切れた。そのせいで、無茶苦茶お怒りだ。

「慧人さん。何も怖いことはないんですよ?」

「え? いきなり何が? 俺、今から殺されるの?」

「紙とペン貸そうか?」

「じゃあ、最後に書くか……」

「地獄の勉強合宿と言いましたが、実際は全然そんなことないですよ」

「…………え？そんなんですか？」

「はい。朝、起床と共に勉強。私が朝食を作っている間に勉強。朝食を食べている間も勉強。そこから午前中は勉強。私が昼食を作っている間にも勉強。昼食を食べている間も勉強。午後からも勉強。途中から、隣で私がギターの練習するので、音楽を聴きながら勉強。私が夜ご飯を作っている間も勉強。夜ご飯を食べている間も勉強。夜は私がNFOをしているのを尻目に勉強。お風呂に入っている間も勉強。電気を消しても私が寝る寸前まで耳元で暗記物を囁いてあげますので実質勉強と、素晴らしい合宿となっております」

（（うわー…………超スパルタ））

「あは、あはは…………そんな一泊二日は嫌だな…………」

「一泊二日？これは冬休みにやることですよ？」

「……………」

「一日16時間以上は勉強できますね」

「……………」

「大丈夫ですよ慧人さん。私があなただの身の回りのことはすべてやりますので、あなたは勉強のみを出来ますよ。…………もし、あれだったらお風呂も一緒に…………（ぼそぼそ）」  
ぜ、全然大丈夫じゃねえ……………！というか、それを地獄と言わず、何と言えと？

「さ、紗夜さん？運動しないと俺の身体が鈍ってしまいます」

「それでしたら起床してから朝食前に勉強しながらランニングを。午前中もボールを蹴りながら勉強すれば完璧かと」

「……………」

悪化した。事態が悪化した気がする。多分、ここで本当は夜遅くに運動しているなんて言おうものなら…………ガチで死ぬな。うん。いや、待てよ？冬休みは年末年始…………

「あーでもー家の大掃除しないといけないなー」

「私がやりますのでご心配なく。慧人さんは安心して勉強してください」

「…………あー大晦日は年越しそばを、こたつに入ってゆつたりと食べたいなー」

「では、大晦日の夜は年を越すギリギリまで勉強。年越しそばは私が準備をし、こたつに入って、暗記物を見ながらそばを食べれば完璧かと」

「……………あーやっぱり年越しは除夜の鐘の音を聞いてぼーっとしたいなー」

「ふむふむ。除夜の鐘の音が一回聞こえたと共に煩惱と一つの課題を終わらせると。そうすれば、理論上108つ課題が煩惱と共に消えるかと」

「……………あー初詣に行きたい気がするなー」

「なるほど。それなら、私が隣で一問一答の問題を出しながら神社に行きましょう。一問間違えるごとに、私にポテトを奢ると言うことで。一間違え一ポテト。素晴らしい制

度ですね」

((……………これが墓穴を掘るといふことか))

俺は勉強時間を減らそうと頑張った。そしたら、勉強時間が増えた。何を言っているのか分からない？俺も何が起きているか分からない。

というか、彼女の言っていることがよく分からない。え？日本語は分かるんだけど、何かとんでもない発言が出てこなかったか？気のせいかな？

「そ、そもそも。それだと、紗夜さんのとても貴重な冬休みが潰れてしまいますよ？それにほら。異性の家に連泊とか、何か間違いが起きてしまうと……………」

「ずっと、慧人さんの隣に居られるのでオツケーです。親も認めさせますよ。……………そ、それにその間違いなら……………起きてもいいかもって……………(ぼそぼそ)」

……………終わった。全てが終わった。……………いや、待てよ。まだワンチャンある。

「さ、再試で満点を取れば回避できるんですよね？」

「……………まあ、そうですね」

((……………ん？紗夜が残念そう？……………ま、まさか、紗夜……………さっきの合宿ですつと慧人くんの傍に居られるから……………って、いやいやいや！流石にそんな地獄みたいなスケジュール、誰でも嫌だよ！多分そのデレは殆どの人が受け取らないよ！)

「紗夜さん。俺、目が覚めました。今から死ぬ気で勉強します。冬休みに凍死しないた



めに」

「分かりました。その熱意にお応えして、私も本気で勉強を叩き込んであげます……あなたを殺す気で」

「……………」

英語のテキストを開き、勉強を再開する。満点を取らなかつたら死ぬ。これだけは避けなければ……あれ？そういや紗夜さん、最後になんて言った？まあいつか。

「アタシたちもそろそろ勉強を再開しようか」

「そうですね……やりましょうか」

「わ、私はもう少し休みたいわ」

「あこもです」

「いいのかな？ 慧人くんみたいにRoselia、地獄の勉強合宿を計画してもらおう？」

「今すぐやるわ」

「あこもあこも！」

「うんうん。よし、やろう☆」

「あはは……じゃあ、頑張りましょう……」

この後、休み明けに別の科目の単元テストがあることもバレた。そして、そちらも満点を取らないと地獄合宿コースになったため……あ、死んだな、これ。

## V S. 白鷺千聖

ドンツッ!

「慧人、貴方はSかしら? Mかしら?」

人が(珍しく)勉強をしていると、部屋の扉が勢いよく開け放たれる。そして、続げ様に質問が飛んできた。

「はあ? いや、いきなり何を……」

「いいから答えなさい」

SかMか? いや、どういう意味かわかんないんだけど……うーん。でも、あの千聖がいきなり質問するんだから……あ、なるほど。服のサイズの話か。確か……

「Lだな」

「なっ……!」

その答えに戦慄する千聖。……いや、何で戦慄しているんだこの女は……

「そんな答え想定……はっ! そういうことなのね。まさかSサディストでもMマソヒストでもなくLエロだったなんて……!」

「おい、この変態。人の部屋にあがって早々に何をほざいてやがる」

「あら？性癖を」と答えた変態に言われたくないわ

「部屋を開けて第一声が性癖の話だと思わねえだろ。自重しやがれ」

「ちなみに私はSよ」

「知ってた」

「それもドが付くほどのドSよ？」

「だろうな」

「……………何故だろう。俺の第六感がコイツをさつきと追い出せと言ってくる…………いや、もう手遅れかもしれない。」

「あなたもSよね？」

「生憎 Nノーマルだと思っっていますが？」

「なっ……………！」

その答えにまたもや戦慄する千聖。いや何でコイツは戦慄しているんだ…………？

「ま、まさか……………SとMを極めし者だったなんて……………！」

「オイコラお前の認識どうなっている」

「え？だって、NはSとMを両方極めた結果プライゼロになった人のことを言うのでしょっつー」

「どうやら、コイツは俺とは相容れない世界の住人らしい。」

「俺が言ってるのはSでもMでもないNだって言ってるんだよ」

「はあ……」

すると、静かにため息をついて首を横に振る千聖。そして、ゆっくりと俺のベッドに腰掛け足を組む。

「慧人。あなた、性善説と性悪説は知っているわよね？」

「ああ。性善説は孟子が唱えた『人は本来、善であり、努力により開花させ、立派な人になることができる』という、人の本質は善であると言っているもの」

「ええ。対して性悪説は荀子が唱えた『本来の人間の性質は悪である。それが善になるのは人間の意思で努力することの結果である』というもの」

「……で？それがどうしたんだよ」

「つまり、人は生まれながらにして善か悪である説はあるの。でも、そこに普通、ノーマルなんて選択肢はないわ」

「……なるほど」

何だろうか。深い話のように感じ、興味が少しわいてきた。

「だから、私はある一つの説を提唱できると思うの」

「どんな説だよ」

「性SM説よ」

「……………」

聞いた俺がバカだった。

『人は生まれながらにして、サディストまたはマゾヒストとしての素質を持つ。人が努力することで素質を開花させることが出来る』……そう、人の本質はSかMなの。そこにNは存在しないわ」

「……………」

「だから慧人。よく見てちょうだいこの状況を」

「……………よく見る……………だと?」

と言つても千聖が足を組んで人のベッドに座っているだけだが?

「いい。ここから二つの人間に分かれるの。一つは私の目の前で土下座し、踏んで下さいと懇願する人。もう一つは私を押し倒し、マウントを取ってくる人」

「すみません。どっちがSでどっちがMかは分かったんで、第三の選択はないんですか?」

「第三の選択? そうね、私のスカートの中を覗こうとして姿勢を低くしたら思い切り踏み踏みしてあげるわ」

「おいコラ。そもそも何もしいって選択だよ」

「……………え?」

「……………え？」

キョトンとする千聖。おっとマジかこの女。

「そんなのあり得ないわ。慧人、私が言うのも何だけど、私って美少女よ？」

「まあ、否定はしない」

「だから見ているだけなんてあり得ないわ。手を出すか、足を出されるか、どちらかを望んでいるはずよ」

「……………」

「あら？それとも放置プレイのつもりかしら。ふふつ、残念ね。その程度の責めじや、私は屈しないわ」

マジで誰かこの女を病院に連れて行ってくれ……………！

「はあ。勉強するから、そこでおとなしくしてろよ？」

ちなみに何故俺が勉強しているかと聞かれると……………まあ、アレだな。昨日、明日以降にあるテストや再試験で満点取らないと紗夜さんから殺される……………間違えた。地獄の合宿を送らされるため、何としても回避しないとイケないからである。

「ふふつ、あなたが堕ちるまで待つてあげるわ」

そしてコイツは無視しよう。そうしよう。

ツンツン

頬を指で突つつかれる気がする。

「……………」

「ねえ、慧人……………」



耳元で囁かれている感じがする。その言葉は何処か甘さを感じ、彼女の髪が耳元を撫でてくる。

「……………」

「無視しないでよ……………」

少しだけ抱きつかれる力が強くなる感じがする。心なしか千聖のささやかなアレが当たってる気がしなくもない。いや、当たってるのこれ椅子の背もたれか？だって、ちよつと硬い感じがするし。

「……………」

「ねえ、手を出したいんですけど？手を出してよ……………」

ちなみに十五分くらい前からこんな感じだ。

「……………はあ」

シャーペンを置いて、後ろを向く。

「やつと向いてくれたわね。もう、酷いじゃない。流石に一時間も放置されたら寂しくなるわよ」

「勝手に乗り込んでおいて……………はあ」

元から勉強に対しての集中力は長く持たない。千聖が来る前も勉強し、そのまま邪魔されたとなれば集中が切れるのは必然だろう。つまり、これは仕方のないことである。

「で？何すればいいんだ？」

「じゃあ、さっきの続きをしましょうか」

そう言つて俺から離れるとベッドに腰掛け、足を組む。

「さあ、どちらを選……」

「これで満足かよ」

俺が選ぶのは当然、押し倒すことである。

だつてSかMかで聞かれたら多分Sだし。というか、コイツに土下座したくねえし。パンツとかも興味ねえし。

「あつ……そ、そうよね。あなたはそうするわよね……」

「さっきまでの威勢はどうした？」

「……流石慧人ね。私を超えるS……」

「いや、お前ほどのSもそうはいないだろ」

「それはお世辞かしら？……その、早くどいてほしいのだけど」

「何でだ？別にこれくらいでもいいだろ？」

「ち、近いのよ……！」

「へいへい」

ということ千聖の上からどき、隣に腰掛けることにする。

「……でも、慧人がSなら安心ね」

「いや、どういう意味だよ」

「いい？MとMでは生産性がないの」

「……はあ？」

「お互いに攻められるのが好きだと、何も生まれないわ。SとMは言うまでもないわよね？片方が攻めて、片方が攻められる。お互いの利害と利害が一致しているの」

「……………」

「SとSはどうなんだって顔ね」

「いや、そんなこと微塵も思っていないんですけど？」

「お互いに攻めるのが好き。互いが互いを攻めようと動くから問題ないわ。それにSとSが交われれば新たな扉を開くことに繋がるかもしれないわ……今の私のようにね」

「なあ、千聖……一緒に病院に行かないか？」

「ごめんなさい慧人。私、まだ妊娠していいと思うの。だから、まだあなたとの子はここに居ないの（すりすり）」

お腹をさすりながら悲しげに呟く彼女。

「ちよつと待てこの野郎」

「私は野郎じゃないわ。乙女よ」

「知るかよ変態。お前に必要なのは精神科か脳外科だ。何故そこで妊娠とかって言葉が出てくるんだよ」

「だって、一緒に病院行かないか？つて、普通はそういうことだと思っじゃない」「お前、一回普通の人にしばかれろ」

「え？縛られる？ごめんさい。そういうのには目覚めていなくて……」

皆さん。何で会話が成り立たないか分かりますか？俺には分かりません。

「じゃあ、慧人が目覚めさせてくれる……？」

「勝手に目覚めてろ」

「……あなたのその冷たい態度。嫌いじゃないわ」

どうしよう。本当にこの女が目覚めそうで怖いんだけど。誰か助けて。

「まあ、そんな冗談は置いておいて」

冗談じゃないだろ……と思いつながら服の中からゴソゴソと何か取り出した千聖。

「何取り出し……：ロープ？」

「ええ、そうね」

「それで何かするつもりか？」

「まあ、まずはこのロープを持ってちようだい」

と、いうことを持ってみるが……

「なあ、一体どうするんだ？」

「そうね。まずは……」

と言われるがままにそのロープを使っていく……ん？ちよつと待て、まさかコレって

……

「出来たわね」

「いや、出来たわねじゃねえだろ。どう考えてもこれ……」

「亀甲縛りと言うものよ」

「それは分かっているわ阿呆。何でお前は自分を縛らせたんだよ」

「さっき言ったじゃない。目覚めさせてくれる？つて」

「おっと、その言葉の回収が早過ぎるぞ？」

フラグ回収が早すぎた件について。

「それに慧人。相手の心を知る一番の方法って何か分かるかしら？」

すると（縛られた状態の）千聖が真面目な表情で問いかけてくる。

「一番の方法……？」

「ええ、それは相手の立場に立つことよ。何かを演じることにしてもそう。実際に相手の立場に立つことによつて何を考えているか、どういう思いなのか鮮明に分かるのよ」

「な、なるほど……？いや、だからなんだよ」

「分からない？やれやれ、仕方ないわね……簡単な話よ」

一息入れ、彼女は言った。

「ドMの気持ちを知るために縛られたのよ」

「……………」

「いい？私たちドSは攻める側の気持ちはよく分かるわ。でもね。それだけじゃ足りないのよ。私たちが次の次元段階に進むためには、攻められる側の気持ちも知る必要があると思うの。……そう。攻められる側の気持ちは分かれば、私たちの攻めはもつとより洗練された素晴らしいものになるのよ。相手が求めている攻めをやるにも、相手の隠されたMとしての本質を開花させるにもね」

「……………」

「私の目指す最強のドSはね。全ての相手に攻められる快楽を与えるような存在なの。相手がMでもSでもそんなの関係ない。全ての相手を跪かせ、その快楽を下に従わせる」

「……………」

「これは、その高みに至るための一種の修行よ。お遊びでも好奇心でもない。大真面目なのよ」

「……あ、ラツキー。ガチャでピックアップキアラ出たわ」

「つて、ソシヤゲやってないで話を聞きなさい！」

「いや、お前……変態の戯れ言を聞いているこつちの身にもなれ？」

「何を言ってるの！ 私たちが更なる進化<sup>成長</sup>を遂げるには、これは必要なことよ！」  
儀式

「勝手に巻き込むな？ さつきから思っていたが勝手に巻き込むマジで」

「……？ あなたと私は同志よね？ 同族よね？」

「おい。お前のような変態と一緒にすんじゃねえ」

「なつ、私を変態呼ばわりとは失礼ね」

「ああ、そうだったな。すまなかった」

「そうね。分かればいいのよ」

「お前は変態を超えたド変態だったな」

「フンっ！」

縛られているせいで攻撃方法が頭突きしかない千聖。彼女の渾身の頭突きを軽く避ける。

「ふっ……やるわね」

「やるわねじゃねえんだよ」

「……ねえ、慧人。縛られてみて思った事があるの……」

「何だよ。さっさと外せとかか？」

「……ちよつと興奮してきた」

「……………」

どうしようかこのド変態。外に放り出してやろうか。

「……ちよつ……そ、そんなこと……今の私にはハードルが高いわ……」

「……まさかこの女、俺の思考を読んだのか？」

「……せめて、夜中にしましょう……ね？」

「ね？じゃねえよ。やらねえよ」

「……コートを……せめて、コートと首輪とリードを……！！」

「要求の難易度が高いんだけど？お前、もう目覚めているだろ実は」

「そんなことないわご主人さ……慧人」

「やめろ。お前のようなペット飼いたくない」

「ペット……いい響きね」

もうダメだこのド変態。どうやら、本当にMに目覚めつつあるらしい。

「……でも、慧人。私は思うの」

「おう、何をだ？」

「ペットは最後まで責任を持って飼わないといけないと思うの」



「まあ、その通りだな」

「だから、慧人。あなたには私を最後まで飼う責任があるの」  
「嫌だよ」

「三食寝床付きで、每晚ベッドの上でかわいがってほしいわ」

「いいのか？お前、本当にそれでいいのか？」

「……時々外にお散歩に行きたいわ」

「そういう問題じゃねえよ」

「そして、愛犬のレオンと並んで歩くの」

「それ、お前にも首輪とリード付いているよな？絶対」

「ダメだ。もう終わりだこりゃ」

「……なぜかしら。縛られてからそういう妄想が止まらないの」

「やべえ。何だコイツの幸せそうな顔。テレビで絶対に見せちゃいけない顔をしているよ。もうタダのド変態……いや、それ以上の何かだよ。」

「とりあえず、コイツはダメだと思って、放置。さつきからテレビでピー音を入れないといけない言葉の数々が聞こえてくるが無視して、ソシヤゲをすること十数分。勉強？そんなもの忘れた。」

「ね、ねえ……慧人……」

縛られた千聖がすり寄ってきた。

「どうした？」

「そ、その……非常に言いづらいのだけど……」

見ると身体を少しだけ震わせている。

「と……トイレに行きたいの」

「勝手に行つてこい。場所は知つてるだろ？」

「ち、違うの……よく見てこの状況」

そう言つて彼女の状態を見る……ああ。

「縛られていて手は動かせないし、そもそも服が脱げないつてことか」

「そうよ……だからその……ほどいてくれないかしら？」

「あっそ」

ということでもソシヤゲ再開。いやーさつき引いたキャラはいい性能をしているわ。

「本当にいいの!?! 高校生の女の子が漏らすのよ!?! しかも、その女の子アイドルなのよ!?!」

「自業自得だろ」

「こ、この鬼畜……! でもそういうところが好きよ」

「いやー周回が楽だな。うんうん」

「ごめん……色々と言つていられるほど余裕がないの。私の容量が限界なの」

「あっそ」

「ねえ、慧人。少年の前で涙を流しながら漏らした少女がいるとするじゃない？ そうなれば、その少女にはとても深い傷が残ると思うの。そしてお嫁に行けないと思うの。ねえ？ そうなったら誰がお嫁にもらうと思う？」

「さあな。興味ねえわ」

「げ、外道……！ 分かったわ。そこまで言うなら漏らしてやるわ。そして紗夜ちゃんに言いつけてやる」

「ああ分かった分かった！ ほどきやいいんだろ！」

「や、優しくね？ 今の私はちよつとの衝撃でダムが決壊する可能性がある爆弾よ」

「ということ、急いでほめて、トイレの前まで連れて来た。……いや、一人で行つてこいよ。」

「慧人？ 私はきつと慌ててトイレの鍵をし忘れるからって、入ってきちゃダメよ？」

「バカか。さつきと行つてこいよ」

「いい？ 入ってきて無防備な私を見るような視線プレイはやめて頂戴よ？」

「我慢しながら言ってる場合か」

「でも、あなたはきつと人の忠告を聞かずに入ってくるの。そして、私はそのまま慧人の（ピーー）として私は生きていくことになるの。あなたの（ピーー）を啜えながら私は

……」

「んな阿呆なこと言ってる場合かこの馬鹿」

「ふ、ふふふ、なぜかしらね。このまま耐えた先に新たな扉が待っていていそうなのよ」

「やめろ。その先の扉を絶対開くんじゃない」

「……………ごめん。これ以上は我慢できない」

「ガチトーンで言う前にさつきと行ってこい！」

トイレのドアを開けて、入る千聖。ちなみに、アイツはガチで鍵を閉めなかった。

そして、トイレから出てきた彼女は少しだけ不満そうな顔でこう叫んだ。

「何で入ってこなかったのよ！」

「何で入ると思ったんだよ！」

誰か…………腕のいいお医者さん教えてください。

数分後。

「何だか疲れたわ」

「そりゃ疲れるだろ」

「慧人。私は少し寝るわ」

「そうか」

「私は一度寝ると中々起きないタイプよ。だから、何をしても起きないわ」

「……………」

あれ？そうだったか？

「いい？絶対に寝ている最中に悪戯とか（ピーー）とか（ピーー）とかしちやダメよ？」

「しねえよ」

「絶対にダメよ？」

「しねえから安心しろって」

「と油断させて？」

「何もしねえよ」

「……………はあ。まあいいわ、慧人も横になって」

「はいはい」

するとまるで抱き枕のように抱きつきながら、

「……………おやすみ」

そう囁いて寝始めたようだ。

（ふっふっふ。いくら慧人でもここまでやれば何かしらのアクションがあるでしょう。さつきまでのことで絶対にムラムラしているはず……………！その要因となった私が無防備

なのよ？さあ、手や（ピーー）を出すなら今よ）

全くこいつは……はあ。内心ため息をつきながら、彼女に掛け布団をかけて……

「……いつもお疲れ様。よく分かんないけど、きつとストレスとか溜まるんだよな。お前がそれで発散できるなら、自然体でいられるならいくらでも付き合うから。……ただ、他のやつの前ではあんまりやらねえ方がいいぞ」

彼女の頭を優しく撫でながらそう呟く。コイツが起きているときには絶対に言えないわ。事実だとは思うけど、散々変態とか色々と言っていたし……まあ、寝ていて聞かれてないならいいか。

（……………これ……………どうすればいいのよ……………！これじゃあ起きれないじゃない……………！あ、でも慧人の鼓動……………ゆっくりでとても落ち着く……………すう）

ふと思ったが、コイツって俺の部屋に来ると絶対に寝るよな。そんなに疲れているならそもそも自分の家で休めばいいのに。

この後、慧人も寝た。

## 紗夜さんの誕生日

3月19日。その日、Roseliaの紗夜を除く4人が慧人の家にやって来た。

「でーここはそんな感じでもいいかなーって、けー兄！そのコンボはやめて！」

「いやいや、そこはこんな感じで……つと、油断しているところが悪い」

「そうですね……ここはもつと……横ががら空きですよ、今井さん」

「うんうん。さつきよりいい感じ……つてうわあ!? 撃墜された……」

「そうね。いいと思うわ。……最下位はリサかあこかしらね」

ちなみに大〇闘をしながらの会議である。最下位が交代ということになっているが……

「そもそも、紗夜さんの場合は特殊なんだよね……やったあ！リサ姉を撃墜して最下位を免れた！」

「そうそう。ヒナも居るから、絶対に夕食とかまでは出来ないもんね……うわあ〜やられちゃったかあ」

「そうね。双子だから、家族の方でも何かあるでしょう……次は私の番ね」

「それと千聖曰く、日菜の誕生会もやるそうですよ。場所は事務所で……つと、流石りんさん。簡単には倒させてくれませんか」

「場所が被っていなくて……よかったです。イレギュラーが起きなさそうで……ふつつ、けいさん。覚悟してください」

「どうかこの状況って、紗夜さんにバレたらマズくないですか?」

「彼氏の家に無断で集まってゲームしているってこと?」

「そうそう」

「大丈夫よ。よくあることだわ」

「まあ、紗夜さんは懐が広いんで問題ないですよ」

「万が一の時は……けいさんを差し出せば解決……」

「あ、それもそうだね!じゃあ、いつか!」

「待ってください。死なば諸共。あなたたちも同罪ということで一緒に死んでもらいます」

「大丈夫だつて!バレても、紗夜はきつと許してくれるよ。それかお説教で済むくらいだよ」

「それよりけいさん……これで撃墜です」

「やばっ、完全に意識が逸れていた……!」



「じゃあ、次の試合ね」

こうして、彼と彼女たちの戦い（会議）は夜まで続いた。

3月20日の昼頃。

「ふう……これなら紗夜さんも驚くよね！」

「そうだね。あれ？慧人くん、こっちに居ていいの？」

「まりなさんに接客などの仕事を丸投げしたんで問題ないです」

「それ、大丈夫？」

「大丈夫ですよ。少しお話ししたら快く受け入れてくれました」

「……慧人くん。上司を脅すのはダメだよ？」

「いやいや、話しただけで脅してないですよ？」

酷いなあ。本当にちよつと他愛もない話をしただけなのに。

「……………というか、紗夜じゃなくても驚くと思うのは私だけかしら？」

「多分……誰もが驚くと思います……」

「とりあえず、セツトは完了したんで……つと、まりなさんから紗夜さんが来たとの報告が。電気を消して、各自所定の位置にいきましょうか」

「そうだね」

というこで、電気を消して各々が予定通りの位置につく。

そして十数秒後、扉が開いた。

「まだ誰も居ませんね」

どうやら、俺たちが居るといふのは気付かれていないらしい。そして、部屋が真つ暗

ということ、電気を付ける紗夜さん。電気が付いて彼女の目の前に現れたのは……  
「なっ……………」

見えるのは、机の上に置かれた軽食の数々と、飾り付け。その中でも一際目立異彩を放ってっているのは……

「こ、これが……………！かの伝承に記されたときれる……………ポテ山……………なんですか……………」

ポテトの山である。ただ山積みになっているポテトではない。精巧に積み上げられた美しいポテトの山である。その美しさはポテト狂いの紗夜さんをうならせるものだった。

……………とここで、そんな伝承聞いたことないんだけど？

「な、なぜ、このような神秘的で、恐れ多いものが……………」

「紗夜さん。誕生日おめでとうございます」

「二誕生日おめでとう！（おめでとう）（おめでとう）（おめでとうございます）二」

そして、陰から現れた俺たち。サプライズは成功に思えた……………が、一つだけ誤算があった。

「……………皆さん……………！ありがとうございます」

「……………えーつと、紗夜？とりあえず、ポテトの山から視線を移してもらっていいかな？」

「はい。移しましたよ」

「いや、移ってないですよ！身体がこつち向いただけで、顔と目はまだポテトの方を向いていますー！」

「これで……！」

「視線がまだポテトの方に行ってますよ……！」

「くう……何という引力……！流石はポテ山……！目を放すことが出来ません……！」

「……どんな引力よ！」

「しかも……！慧<sup>魔</sup>人<sup>王</sup>さんの手によってポテ断生活を送っていたので余計に……！」

「ポテト断ちは一昨日からやった気がするんですけど？」

「酷いなあ。俺は、紗夜さんにここで食べるポテトをよりおいしく感じてもらいたいという純粋な思いで、ポテト断ちしてもらったというのに。」

「……でもまあ……うん。こんな風になってしまっただけで彼女を見て改めて思った。ここまでのレベル……彼女はポテト中毒かもしれない。そんな彼女のためを思うのなら、普段からポテトを断つことはやるべきかもしれないな、と。」

「……うーん、もう食べ始めていいんじゃないかな？」

立てていた進行プラン、誰かさんが思った以上にポテトに食いついたため、変更せざるを得ない状況に陥っている。今から変更か……

「あ、いいこと思いつきました。このまま紗夜さんの目の前でこのポテトの山を俺たち

「で食べ切るのはどうでしょう」

（（うわあ……とても彼氏がするとは思えない残酷な提案。しかも、その相手を祝うために作ったのにお預けとか……））

「そうすれば……って、紗夜さん。冗談です。冗談なので、そんな捨てられた子犬のような、情に訴えてくる哀しい目を向けないでください。俺の中のちよつと嗜虐的な心がすぐられるので」

（（それってただのドSじゃ……））

「紗夜？ 慧人くんを倒せばアレを食べられるよ」

「分かりました。3秒下さい。すぐに沈めます」

「分からないでください？ いや、マジで『コイツを殺れば……！』みたいな目を向けてジリジリと詰め寄らないでください？」

「あはは……もう……食べていいんじゃないでしょうか……」

「そうだよねー友希那さん！ お願い！」

「分かったわ。じゃあ、食べましょうか。せーの」

「「いただきます！」」

そう言うのと真つ先にポテトの山に向かう紗夜さん……つと。

「すみません！ 手を洗ってくるので少し待っていてください！」

荷物を置いて反転。ドアを開けて出て行った。

「理性が残っていた……」

「すげえ……もしかして、前より成長したんじゃない……」

「ですよね……」

「一応、アタシたちももう一回手洗ってくる？」

「そうだね！」

食事の前に手を洗う。確かに、当たり前のことだけど……まさか、それに気付くだけの理性があそこに残っているのは正直、予想外だった。

「あ、紗夜さん。その山は紗夜さんが全部食べていいですよ」

「えっ!? 本当にいいんですか!? ありがとうございます！」

「もう……他のも食べてよ？」

「紗夜の自由にさせてあげましょう」

「今日くらいは……いいと思います」

「でもどれも美味しいね〜流石けー兄にリサ姉！」

「リサ。あなた少し上達した？」

「今までより……磨きがかかっています」

「気付いてくれた？ 実はね——」

「というか、紗夜さん？ 話、聞いてます？」

「ポテトが美味しいってことですか？」

「聞いてねえわこの人」

一心不乱ではないが、もぐもぐとポテトを食べる彼女の姿。うん、とても可愛い。唯一残念なのは彼女がポテトしかまだ食していないということぐらいだ。

「ところで、紗夜さん。ポテト山って何の伝承に乗っているんですか？」

「……慧人さん。あなた知らないんですか？ もう、この界限では有名な伝承ですよ？」

「その界限、凄く狭そうですね」

「いいですか？ 昔々、とある地で飢饉に襲われたそうです。その地ではその年、作物の実りが不作で多くの人が食べるのができなかつたそうです。その地の人々は毎日のように働き、祈りました。しかし、一人、また一人と倒れていきます。そんな惨状を見かねた神様はその地にフライドポテトの山……ポテト山を生み出したとされます。天より与えられたポテト山は、その地に住む人々の飢えを解消。以来、その地では、毎年ポテトを神様にお供えするのが決まりになったとされます」

「……………」

なわけあるか。

「今、日本は関係ないって顔しましたね？」

「日本どころか、この世界に関係ないと思つてます」

「やれやれ、昔の有名な人々は、ポテトに関する和歌をいくつか残しています。当然、あなたも勉強しているはずですよ?」

「聞いたことないんですけど?」

「全く、しつかり授業を聞いていないからです。仕方ありません。ここは何首か詠んでみましょう……こほん。『君がため 春の野に出でて ポテト摘む わが衣手に 雪は降りつつ』意味としては、『貴方に差し上げる為に春の野に出てポテトを摘んでいると、わたしの袖に雪が降りかかっておりました』……いい話だと思いませんか?」

「待つてください。摘んだのポテトじゃなくて若菜です。詠まれた時代は、贈り物に和歌を添える風習があつたそうで、今で言う春の七草を贈る時に添えた和歌と言われていますが」

「ポテトに和歌を添えて贈る……いい話ですね」

「話聞いてました?それと、旧暦の春なので、今でいう冬に近いはずですよ」

「そこまでして、ポテトを取ってきて贈るなんて……余程相手のことを慕っているんですね」

「まあ、その贈った相手は不明なんですけどね。恋人だとか、その時の権力者と言われていきます……じゃなくて。誰もポテトは取ってきてませんし贈っていません」



「ふふつ、私にはそんな相手が居てくれるので……嬉しい限りです」

「ポテトを摘む気はねえですけど」

嫌だわ。雪で濡れたフライドポテトとか想像しただけで、ふにやふにやじゃねえか。

「……『人はいさ 心も知らず ふるさとは ポテぞ昔の 香に匂ひける』意味としては『人の心はわかりませんが、昔なじみの里のポテトの香りだけは変わっておりません』……ちなみに、ポテトだと字数がオーバーしてしまうため、ポテトをポテと称していますが、素晴らしい和歌だと思いませんか？」

「……それ、ポテトの香りじゃなくて花……正確には梅の花だったと思いますけど？ 確か、久しぶりに慣れ親しんだ土地をたずねたときに、よく宿泊していた宿に顔を出したけど、宿の主人に皮肉を言われた。そこで、近くの梅の花を手にとってこの歌を詠んだ……と記憶しています」

「近くのフライドポテトじゃダメですか？」

「やめなさい」

もう、この人の頭ダメかもしれない。ポテトに汚染されている。

「……………」『大江山 いく野の道の 遠ければ まだふみも見ず 天のポテ山』

「おっと、遂にポテ山が出ましたね？」

「ええ。『大江山や生野を超えて丹後へゆく道のりは遠いので、まだポテ山の地を踏んだ

ことはございませんし、丹後の母からの文もまだ届いていません』というものです。昔は天をも貫くような偉大なポテ山が丹後の地にあつたとされ、それを称える……」

「遂に色々変えやがつたですね。それは有名な歌人を母にもつ読み人が歌合わせの時、相手の人からかわれた時に返した句で、別にポテ山……というか、元の天橋立を称える歌じゃなかつたはずです」

「……………いにしへの 奈良の都の ポテ桜 けふ九重に 匂ひぬるかな』意味は『昔栄えていた奈良の都のポテ桜が、今日はこの九重の宮中で色美しく咲き誇っている』ですね」

「ポテ桜って何ですか?」

「昔はポテトが桜のように咲く植物があつたそうです。美しく咲き誇っているなんて、私も一目見てみたいものですね」

「それ八重桜の間違いなんで、はい。そんな桜ないです」  
「つまり……伝説の桜?」

「違います。それとその歌だと、八重桜の八重と九重が対となっているのに、対となる言葉が一つ消えるのでその歌の良さが消えてますよ」

「……………」

「……………」

「今井さん。彼氏がいじめてきます。助けてください」

「リサ姐。彼女が末期です。助けてください」

「うん。どっちもどっちだと思ふよ☆」

「むうー慧人さん。こうなれば、次の和歌を詠むだけです」

「はっ、全部言い返してやるので覚悟してください」

「こうして、誕生日会にも関わらず、俺たちの喧嘩が勃発した。

「誕生会そつちのけで始まったわね。痴話喧嘩」

「でも、紗夜さんが言っている和歌がよく分かんないよ……」

「全部、百人一首の一部分をポテトに変えているね。頭がいい馬鹿ってあの二人のこ

とを言うんじゃないかな？」

「喧嘩のレベルが……高いような……低いような……」

「でも、紗夜はともかく冬木も詳しいのね」

「和歌なんて、全然興味ないと思っただのにねー」

「とうかよく覚えているよね。アタシは有名なやつしか覚えてないよ……」

「私もあそこまでは……よく分からない記憶力です……」

「今日はありがとうございます」

誕生日会も、途中で口論になったけど無事に(?)終わった。

「でも、慧人さんからのプレゼントは意外でした」

「そうですか？」

「ええ。一つは羊毛フェルトで作られた小さな犬。もう一つはチューリップの花が描かれた葉。ねえ、慧人さん。黄色いチューリップは3月20日の誕生花なのですが、何故このチューリップは紫色なんですか？」

紗夜さんが取り出したのは俺が贈った葉。あー確かに。知っている人からすれば気になるか。

「黄色いチューリップが誕生花つてのは調べたんです。だけど、何か贈るのは違う気がしたんですよ。で、一番しつくり来たというか、いいかなーって思ったのが紫色だったんです」

「……ふふつ。慧人さん。花言葉つて知っています？」

「花言葉？」

「花にはですね。それぞれ言葉が込められているんです。同じ花でも色によって意味が変わってくるものもあるんですよ」

「へえーそうなんですな」

「花言葉つていう存在は知ってたけど、何の花に何の花言葉があるかまでは知らないし、まさか同じ花でも色が違うだけで意味が変わるなんて知らなかった。……中々深いなあ。」

「ちなみに、誕生花である黄色いチューリップと贈った紫色のチューリップの花言葉は

何ですか？」

「内緒です」

「ええー教えてくださいよ」

「秘密です」

「よく分かんないですけど、紗夜さんが凄いい嬉しそうなんで、きつといい意味なんですかね？」

「ええ。とても」

うーん……どんな意味だろう。まあでも、調べる……つて言っても忘れそうだなあ。

（黄色いチューリップの花言葉は『望みのない恋』そして、紫色のチューリップの花言葉は――）

「慧人さん」

「はい？」

横を向くと彼女の顔がすぐそばにあった。軽く背伸びをし、自身の唇をこちらの唇に合わせてくる彼女。数秒の後に離れ、彼女は言った。

「あなたのことが好きです。大好きです」

「俺も好きですよ。紗夜さんのこと」

「これからもずっと、傍に居て下さいね？」

「紗夜さんこそ。約束ですよ?」

空を見れば綺麗な夕焼けが。

紗夜さんから贈られたチョーカーに手をかける。すると、彼女も贈った葉を大切にそうに抱える。

お互いのその姿に何処か笑みがこぼれて、こんな時間がずっと続けばいいのになつて思えてしまう。

「では、そろそろ」

「ええ。そうですね」

「慧人さん。今度、デートしませんか?」

「もちろん。お互いの予定が空いている時に」

「ふふっ、楽しみにしていますよ」

彼女と手を振って別れる。俺は踵を返して、自身の家へと向かう。

花言葉か……よく分かんないけど、まあ、嬉しそうな彼女が見られたからよしとするか。

(ねえ、慧人さん。紫色のチューリップの花言葉は『不滅の愛』なんですよ?)



## それは第三勢力と言うには濃すぎるメンバー

現在、とある場所にて。ある三人が一堂に会していた。

最初に我らが主人公、冬木慧人。見た目は不良、中身は頭のネジが吹っ飛んでるヤバい奴。絶対音感を持ちながら、自身の歌声で相手に地獄を見せる事のできる類い稀な能力を持つている。

続いて花園たえ。見た目はクールな清楚系、中身は天然マイペース。そのマイペースに周りは振り回されることが多い。また、花園ランドなる、兎の為の楽園を作ろうとしている。

最後に松原花音。見た目はゆるふわ、中身は内気でオドオドしている子。何かと巻き込まれやすく、超絶方向音痴。しかし、ピンチに陥ったときに真価を発揮するタイプである。

以上三名である。一見すると共通点がないかもしれないこの三人。

「私思うの。イヌ派ネコ派があつて、何でウサギ派がないのかなつて」

「唐突だなおい。だが、確かにイヌ派ネコ派で片付けるのは納得いかないな」

「そ、そうだよね。何でクラゲを派閥に入れなかったんだろう……？」

しかし、この三人にはある意味残念な共通点がある。それは、イヌ派かネコ派かを聞かれたときに第三勢力を押ししていくタイプである。マイペースなたえや慧人はともかく、花音もこの二人と同じタイプである。

「ところで慧人先輩って何派でしたっけ」

「ハリネズミ派」

「何だか冬木さんが小動物を可愛がるって意外だよね……」

「アレですよ。雨の日、捨て犬に傘をさす不良……みたいな？」

「いや多分違うぞ」

「あはは……」

ウサギ、ハリネズミ、クラゲ。三人はお互いの親睦を深めるべく(?) 訪れていたのが……

「うう……でも二人とも羨ましい……好きなものに触れ合えるなんて」

「でも眺めているだけで楽しいよ。クラゲも」

「そうだな。クラゲとは触れ合えないし」

「そうなんだよ……前に触れたら手が腫れちゃって……」

(意外とチャレンジャーだ……)

水族館である。何故このメンバーか。

水族館に行きたかった花音。しかし、彼女一人でたどり着くことは絶対に無理であることは、本人を含め誰もが分かっている。そこで千聖に声を掛けるも彼女は仕事のため無理。諦めかけていたときに慧人の名前が挙がり、更に学校で話していたため通りかかったたえが参戦。結果、この三人で水族館に来ていた。

「何だか、クラゲって見ているとお腹空いてくるね」

「分かる。クラゲっておいしそうだよな」

「だ、ダメだよ！この子たちを食べようとしたら！」

たえと慧人はマイペースである。しかし、自由人の相手には慣れていない花音。

実を言うとこの三人。クラゲコーナーから一時間以上動いていない。動いていないが不満などはでていない。恐ろしい三人である。

「慧人先輩大変です。もうお昼過ぎでした」

「もうそんな時間か？時間が経つのは早いな……」

「道理でお腹が空いてくる……ぐー」

「で、でも、今はまだ混んでいると思うし……もう少しだけクラゲ見よう？」

「そもそもクラゲばっか見るんだったら、もう水族館じゃなくてクラゲミュージアムに行けよ」

「い、行きたいけど……それだと東北地方の方まで行かないといけないから、日帰りじゃ

敵しいんだよ……」

慧人が冗談を口にする。だが、花音曰く、近いものが実在するようで驚く慧人とたえ。「え？クラゲミュージアムってあるんですか？」

「正確にはちよつと違うけどね。でも、クラゲの展示数でギネス世界記録にも認定されたことがあるんだって」

「マジ？そんなところあるのか？」

「うん。だから二泊三日くらいで行きたいなって思ってるの」

「へえーでもさ、こころに頼めば解決だろ」

「だ、ダメだよ！そんなことで頼めないよ……それに、こころちゃんたちとだと、ゆっくり見られるか分からないし……」

絶対に後半が主な理由だろ。そう思う慧人だが、決して口には出さなかった。

（いや、そもそもこころならガチでクラゲミュージアムを作りかねないか。世界中からクラゲを集めて）

「慧人先輩！私、うさぎが沢山居るところに行ってみたいです！」

「そうか。お前の家に行けば居るだろ？沢山」

「もつと一杯のうさぎに囲まれたいです」

「知るか。家のウサギたちで我慢しておけ」

「あ、たえちゃん。何かね、うさぎ島って呼ばれるところがあるみたいだよ」

「うさぎ島!? な、何ですかそれは!？」

「う、うん。瀬戸内海にある小さな島だけど、そこにたくさんのうさぎが居るみたいだよ」

「東北の次は瀬戸内海……遠いな」

遠くを見つめる慧人。そういう場所があるのは驚いたが、それにしても遠いなど。もつと近い場所はなかったのかと思うのだった。

「なるほど……慧人先輩。花音先輩」

「ん?」

「何かな……?」

「今度行きましょう」

「いや、そんなノリで行けるほど近くねえよ」

「慧人先輩。行けるか行けないかじゃないんです。行くんです」

たえの目からはメラメラと揺らめく炎が見える。そう思った慧人は花音の方を見たが、こちらもやる気全開という感じだった。

「あのな……たえ。そういうのはポピパの面子で行ってこい」

「あ、花音先輩。四泊五日くらいの旅にして、クラゲとうさぎを見に行くのはどうですか

「？」

「聞けよ。人の意見」

「なるほど……一日目移動。二日目くらげ。三日目移動」

「そして四日目にうさぎ。五日目に移動です。春休みかGWを使えばいけますよ」

「確かに……ありかも？」

「じゃあ、三人で行きましょうね」

「もつと、しっかりと計画を練らないとだね」

「待て。三人って誰のことだ」

「私と花音先輩と慧人先輩」

「勝手に頭数に入れるな」

「ま、待って！冬木さんが行かなかったら、誰が私を連れて行ってくれるの……？」

「待て。何でこういう時だけ依存度が高いんだよ」

「慧人先輩……」

「何だよ。なんと言われても今回だけはすんなり領けねえぞ」

「やっぱり、おなかすいたのでご飯に行きましょうよ」

「……………」

会話って難しいなあ。そう思いながら目の前で自由に漂うクラゲを見る慧人だった。

「じゃあ、解散するか」

夕暮れ時。あの後昼食を取って、軽く他の生き物を見てから帰ってきた俺たち。総じて楽しく、四泊五日の旅の件は昼飯を食った辺りから話題にあがらなかったのできつ

と忘れているんだろう。そのままずっと忘れていてくれ、マジで。

「はーい」

「えと、わ、私……一人じゃ帰れないんだけど……」

「送っていくから安心しろ」

「慧人先輩。今日の夜ご飯はハンバーグにしましょうよ」

「ありがと……ん？」

「ハンバーグ？……あー久し振りに作るか」

「やったー！私、一杯食べたい！」

「……………？」

「そうになると、食材を買いに行くか……」

「そうですねー。あ、花音先輩も一緒に食べます？」

「あれ……？二人つて一緒にご飯食べる約束していたの……？」

「はあ？そんな約束してねえよ。俺は一人で食うぞ」

「ずるい。ハンバーグは私も食べたいです」

「知らねえよ。何でお前に作らないといけないんだよ」

「え？だってハンバーグが食べたいから」

「親に頼め」



「……慧人パパ？」

「お前の親になつた覚えはない」

「……はっ！思いついた」

すると、何を思ったのか俺の背中に飛び乗ってくる。

「よし。これで慧人先輩は、私を家に連れて帰るしかなくなりますね」

「今すぐ降りろ。それに、さっき買物するって言っただろ？」

「じゃあ、このままいきましようよ」

「流石に嫌だよ」

「私はいいですよ？」

「俺が嫌なんだよ」

「何ですか？」

「明らかに頭のおかしい奴にしか見えなだらうが」

「確かに……一緒に居る私と花音先輩が変人と思われるのはちよつと……」

「待てやコラ。何でそこに俺をカウントしない」

「……え？何を言ってるんですか？慧人先輩は変人ですよね？」

「お前に言われたくない」

「慧人先輩。そのジョークは0点です」

「そりや、ジョークじゃなくて本気だからな」

「本気のジョーク？じゃあ、10点です」

「いや、冗談じゃなくて……」

「そんなことより、早く行きましようよ」

「……………はあ」

話の通じない奴の説得ほど疲れるものはない……か。

「分かった。ハンバーグを作ってやるよ」

それくらいだったら飯を振る舞った方が楽だな。うん。

「だから早く降りろ」

「え？何ですか？」

「は？」

「え？」

「あはは……と、とりあえずたえちゃん？このままだと冬木さん、買い物できないから降りてあげたら？」

「……………なるほど。それなら先に言って下さいよ」

降りるたえ。

今のは俺が悪いのかとか、ぶっ飛ばしてやろうかこの野郎とか思ったが、何かややこ

しくなりそうなので諦めることにする。

「じゃあ、いきましょー!」

「ちよつと待て。で?花音、お前は どうする?今更一人分増えても変わんねえけど」

「じゃ、じゃあ。お言葉に甘えて……」

「りよーかい。じゃあ、手を離すなよ」

「……え?そ、それはそれで恥ずかしいような……」

「今更だろ」

本当に今更だと思う。だって、帰るとき目を離れた隙にはぐれる可能性があったから、手を繋いでいたわけだし。というか、花音の方向音痴は度が過ぎているんだよね……。

「あ、じゃあ、私も繋がりますね」

「わ、私を真ん中に引つ張らないでえ……!」

こうして、たえ、花音、俺の三人は仲良く買い物に行くのだった。ただし、真ん中にいて両手を握られている花音が何故か涙目になっていたが……まあ、いつか。

帰り道。手には買っておいした食材たち。そして、隣には二人の少女がいた。

「ハンバーグ♪ハンバーグ♪」

テンションが高いたえ。子どもかっつくくらいテンションが高かった。

「……………うう……………絶対におかしな人って思われたよお……………」

対照的に、未だ真ん中で俺たち二人に手を繋がれている花音のテンションは下がっていた。

「ハンバーグ♪食べ放題♪」

「は？いつから食べ放題になったんだよ」

「え？違ったんですか？じゃあ、いくつ食べられるんですか？」

「いくつ食べるつもりだよ」

「たくさん！」

「……分かった。代わりに他のメニューも食べよ」

「大丈夫ですよ。ハンバーグ丼も、ハンバーグサラダも、ハンバーグ味噌汁もしっかり食べます」

「何も大丈夫じゃねえ！俺たちの分の飯までカオスにすんじゃねえよおい！」

「あ、そうですね。ハンバーグ丼は変ですよね」

「絶対にそこじゃねえだろ!？」

……たえが残念って言われる所以ってこれだよな。全く……なんて後輩だよ……。

「……………はあ。花音は何か嫌いなものあったか？」

「えっと、キノコはやめてほしい……かな」

「ん？キノコが嫌いなのか？」

「うん……あんまり好きじゃない」

「でも、キノコってクラゲみたいじゃね？」

「ぜ、全然違うよ〜！」

「そうか？似ていると思っただけど……ほらキノコの傘のことかクラゲにそっくりじゃん」

「も、もう！これ以上言うのと怒るよお！」

花音が怒る……うん。怖くなさそうだ。何か頬を膨らませて……小動物みたいで可愛いのでは？

と、そんな感じで家に着く。

「二人は適当にくつろいでくれ」

「はーい」

「うん……な、何か手伝えることがあったら言ってね」

「……その花園たえというやつを見張ってくれ」

「あはは……うん。任せて」

ということで作り始める。といつても米の準備からだ……それにしてもハンバーグ……まあいつか。たくさん作って余ったら俺が食べばいい。チーズ入りとかいいかな。ソースも一種類だけじゃなくて、色々とやってみても面白そうだ。

それにしても、たえとは出会ってそこそこ経つのにイマイチ扱いが分からん。ライブハウスのバイトを手伝いに行ったときに出会ったから、感覚的にはリサ姐と同じか、そ

れより短いくらいなのに……今度、有咲にたえの取り扱いマニュアルを作ってもらおう。そうしよう。

ということ、作ることどれだけか。いい感じに出来てきたので二人を呼ぶことに。

「出来たぞー」

「はーい！」

「は、運ぶのは手伝うよ……」

「私も手伝いますよ」

「そうか？ 助かるけど……たえ。運ぶ途中で食うなよ」

「そんなことしません。運び終わってから食べます」

「食べるのは全員の準備が終わってからだ」

「つまり……お預け？」

「そうだな」

「……酷い……慧人さんは私のことが嫌いなんですか？」

「嫌いでも好きでもねえよ」

「え？ 大好きなんですか？」

「普通だ普通。ほら、さっさと並べるぞ」

そう思いながら並べていく……一つ一つ大きさはそこまでのばかりだが……





で。

「さつきから箸が止まっているけど、どうした？味が合わなかったか？」  
「た、たえちゃん？どうしたの？」

「……花音先輩。私、慧人先輩を私のお嫁さんにしたくなりました」

「……………はい？」

彼女は何を言っているのだろうか？

「えつと、どういうこと…………？」

「こんなにおいしいハンバーグ……毎日食べたい…………！」

「…………いや、嫁である必要なくね？」

「じゃあ、専属のシェフです。私の専属のシェフになってください」

「嫌だよ」

（うん…………普通は断られるよね…………）

「何ですか？」

「俺は紗夜さんにしか尽くす気はない」

（うん…………普通はそうじゃないよね…………）

「なるほど…………じゃあ、私を養ってください」

「嫌だ。面倒くさい」

「うーん……強情ですね」

「諦めろ。それより今は目の前のハンバーグだろ？」

「あ、そうでした」

花音が俺たちのやりとりを見て苦笑いしている気がしなくもないが、気にしないことにする。

「そうでした！ 慧人先輩！ うさぎ島の件ですけど……」

「たえ。和風のソースも作ってみたんだけど、どうだ？」

「おっ、気が利いてますね……ふむふむ。美味ですね」

「そうか」

「春休みとかって暇なとき……」

「こっちのハンバーグも食べてみないか？」

「おおっ!? こ、このハンバーグ、中にゆで卵が……!」

「正確にはスコッチエッグって言うイギリス料理だ」

「イギリス……! 何か色んな国の料理が混ざっているみたい……ハンバーグの世界ですね」

「そうだろ？ ほら、こっちも……」

「わーい」

(あはは……必死にたえちゃんの注意を料理に向けさせている)

旅行の件を思い出させてなるものか。なんだかんだでおかしな展開になるに決まっ  
ている。

(うーん……千聖ちゃんや紗夜ちゃんに聞いてみようかな? どうしたら、冬木さんにお  
願いを快く引き受けてもらえるんだろう……?)

花音は……何か考えているがまあいい。きつと、別件だ。今は目の前のコイツをなん  
とかしなれば……!

しかし、この時の慧人は気付いていなかった。

まさか、裏である少女たちが彼に対し——をしようと企てていたとは……

## 千聖の誕生日

3月某日……千聖は（いつも通り）慧人の部屋にいた。

（あれから私と慧人は付き合うことになった。私たちは来る日も来る日もイチヤイチャして、周りからもバカツプルと称されるレベルになっていた。周りに言われるのは少し恥ずかしいけど、とても嬉しく幸せに溢れている……そして、今日も今から愛の営みを

——

「しねえよバカ」

「なっ……！何で分かったのよ！」

「全部声に出てたんだよ。何が付き合ってるだ。俺は紗夜さんとしか付き合ってるよ」

「……そうよね。間違っていたわ」

「そうだな」

「慧人が突いて私が突かれる関係だったわ」

「おう。何をとは言わねえけど、そんな関係になつてないからな」

「酷い……！あの時、ささやいてくれた愛の言葉は嘘だったの!？」

「そもそも囁いていないって話をするか？」

つまり、いつも通りの二人である。

「慧人。あなたは私を第二夫人にするべきよ」

「しねえよ」

「本妻は紗夜ちゃん。そして、私が第二夫人。どう？いいと思わない？」

「はいはい。思わん思わん」

「分かったわ。今なら第三、第四夫人くらいまでなら斡旋してあげるわ」

「何だよその仲介会社のなの。いらんけど」

「せめて、ペットに……！ペットとして私、白鷺千聖をお願いします……！」

「やめろ。何がお願ひしますだ。そんなペット嫌だわ」

「ベッドですつと待つてるわよ？」

「お断りだ」

相も変わらず阿呆な会話をしている二人である。

「ところで、4月6日って何の日か知ってるかしら？」

「ところであって言葉すげえ便利だな。で、4月6日だと？」

「そうそう。4月6日よ」

「あー城の日だったか？46しろって語呂で……」

「そうだけど違うわよ」

「もしかして新聞を読む日か？46<sup>よむ</sup>で、何か新聞会社が決めたとか噂で聞いたことあるな。うーん、でも、あんまり新聞読まねえしな……」

「そうなのね。でも違うわよ」

そう言う千聖。淡々とした言葉とは裏腹に、自分に向かって自分で指を指し（激しく）アピールをしている彼女。

「指……棒……春巻きの日か」

しかし、慧人の残念なところが発揮され、見当違いな解答が帰ってきた。

「は？」

「ほら春巻きって、英語で『spring roll』って言うだろ？『spring』は春、『roll』はロールってことで6だから、4月6日を春巻きの日に決めただつてよ」

「へえーそうなのね……じゃないわよ！私よ私！」

遂に明らかな答えを言い始めた千聖。しかし、慧人は残念であるので……

「千聖？おいおいお前は腹黒だろ？そんな4月6日で白の日ってボケはやらないよな？」

「やってないわよ！」

やはり気付かない。埒が明かないと察した彼女は答えを言うことにする。

「ああもう！私の誕生日って言ってるのよ！」

「……………やれやれ。俺が本気で忘れていると思ったか？」

「ええ。先日の紗夜ちゃん誕生日で頑張りすぎて忘れていたかと」

「おいおい、それは舐めすぎだ」

「本当は？」

「その通りです。完全に忘れていました」

珍しく慧人が頭を下げることに。それを見て千聖はふんつと言いながら腕を組み、そっぽを向いた。

「仕方ないからプレゼントは首輪で許してあげる」

「……………は？」

「私があなただけのものであることを首輪で示すの」

「……………チョーカーじゃなくて？」

「ええ。首輪よ」

「……………」

（……………落ち着け。これは千聖の罠だ。ここで、『指輪じゃなくて？』と言おうものならきつと『婚約指輪をくれるのね』とか言い始めるに違いない。どうする？どうすれば、こ

の状況を逃れられる……?)

(首輪♪首輪♪これで私は慧人のもの……ペットになれるのね♪)

千聖の腹黒さが出た巧妙な罠だと思い、深読みして思考を張り巡らせる慧人。一方、慧人相手限定でDMの道……いや、もつとヤバい何かの道を着実に歩んでいる彼女は、純粹な思いで頼んでいた。

長考の末、慧人が出した結論は……

「……千聖……サイズを測らせてくれないか？」

サイズを測ることだった。

(これで、千聖が指を差し出すか、首を差し出すか。はたまた別のところを差し出すか……それによって狙いが分かるはずだ)

「……………(スツ)」

そう言われた千聖は懐から一枚の紙を取り出し、慧人に差し出した。

「何だコレ……は？」

そこにはマネキンの絵のところの横に細かい数字が。

「昨日測った私のマル秘情報よ♪」

(身長座高足のサイズからバストウエストヒップに指の長さ too 太さ……は？しかも首のところもしつかり測ってあるし……は？あまりのことにこのド変態の狙いが全然



分からなくなつただけど……?」

「ふっふっふ。マジマジと見ているわね。何だか慧人に全身を見られているみたいで恥ずかしいわ……きゃっ♪」

頭を抱えている慧人と照れている感じを出す千聖。

「なあ、千聖……この股の部分なんだけど……何で薄く塗つてるんだ?」

「ふっふ。それはね……見てみれば分かるわよ♪」

「いや、見せなくていい。何となく察したから見せなくていい」

服を脱ごうとする千聖の手を止めながら呆れる慧人。すると、ふと彼は思った。

「いや、待て。何でこんなのを用意できたんだ……?ま、まさかこのド変態……!ここまでの会話を全てコントロールしてきたのか?俺の反応も全て予期して……嘘だろ?俺はこの女の術中にはまっていたというのか……!?いい、いつからだ……いつから俺はコイツに……!?!」

「良かったわ。いきなり渡したら不審がられるけど、それっぽい会話の流れになつて運が良かったわ。まあ、もし機会がならなかったらそつと枕元に置いて帰るつもりだったけど♪」

慧人はここまでの流れを全て千聖にコントロールされていたのだと感じ、恐れを抱き始める。一方の千聖はたまたまそれっぽく渡すタイミングができて運が良かったと感じ

じている。

なぜかお互いの感覚のすれ違いが多発する今日この頃。慧人はある重大なことを思い出した。

「……………ん？　そういや千聖。お前の誕生日って4月6日だよな？」

「……………？　何を言っているの？　さつきそう伝えたじゃない」

「……………いやさ……………言いにくいんだけど……………俺、その日、日本にいねえわ」

「……………は？」

「今度、代表のアレで海外遠征することになってるんだよ。で、しばらく日本を離れるからな……………帰るの4月10日くらいだったような……………」

「……………は？」

そもそも、誕生日周辺で日本にいないことが発覚した慧人。自身もアイドル兼女優で忙しい身ではあるが、この男も暇そうに見えて忙しいのだと改めて思い出したのだ。

「……………寝るわ」

「……………は？」

（そうよね……………忙しかったわね。この男も……………別に、慧人以外にも祝ってくれる人物はたくさん居るし……………慧人に祝ってほしいなんて想っていないし……………一回寝て忘れましょう……………すう）

ふて寝することにした千聖。そんな彼女の頭をなでながら慧人は……

「俺のせいではないんだが……まあ、このままにしておくのも気が引けるな……」

そう思い、ある少女に電話をかけることにした。

「もしもし？ 日菜か？ 悪い俺だ」

『オレオレ詐欺？ おねーちゃん！ オレオレ詐欺が来たときつてどう返すのが正しいんだっけー？』

「ちよつ、慧人だから。警察呼ぶのやめて？」

『ごめんおねーちゃん！ オレオレ詐欺じゃなくて慧人だったー！ で？ どうしたの慧人？ あたしに用って珍しいね？』

そして4月6日の夜。

「はああああ……」

白鷺千聖はベッドで横になっていた。

パスパレの面々や花音などの親しい友人たちに祝われ、素晴らしい一日だったはず。

しかし、彼女の中では何か足りなかったのだ。

「……………はあ」

その何かは彼女の中で答えが出ていた。3月の終わりから日本を離れ、遠征に行ってしまうった男……冬木慧人のことである。

「そういえば……」

日菜からあるものを渡されていたことを思い出す。確か、慧人がまだ日本に居た頃に預かっていたそうで、私の誕生日の時に一緒に渡してほしいと頼まれていたとか。そし

て、あけるのは家に帰ってからにしてほしいという伝言も一緒に預かっていたそう。

渡されたのはラッピングされた小さな箱。丁寧に開けてみると……

「あら……？」

そこには小さな犬のぬいぐるみが入っていた。

「ふふっ……もしかして、レオンかしら」

自身の飼っている愛犬にそっくりなぬいぐるみ。こういうことも高いレベルで作れてしまうのがあの男である。

「啞えているのは一輪の黄色い花……造花ね。フクジュソウ……かしら？ふふっ、紗夜ちゃんの時といい。慧人はロマンチストにでもなったのかしら？」

（フクジュソウの花言葉は『幸せを招く』『永久の幸福』……幸せを願ってくれているのね……まあ、花言葉をあの男が調べたとは思えないけど）

すると、机の上に置いていたスマホが震えているのに気付く。手に取って表示されていたものを押すと……

「もしもし？」

『誕生日おめでとう。千聖』

「そういうことは電話越しじゃなくて直接聞きたいわ。ねえ、慧人？」

『出来たら苦勞してねえから。電話越しで許してくれ』

「ふふっ、でも電話している時間なんてあったのね」

『今は滞在先のホテルで昼食兼休憩だからな』

「あら？私のところはもう夜よ？」

『知ってるわ。……で、プレゼントは無事届いたか？』

「ええ。あなたたつて本当に器用ね。ぬいぐるみといい、造花といい」

『そうでもねえよ。造花なんて初めて作ったからそこまで完成度高くないしな』

「そうかしら？私は素直に凄いと思うけど？」

『そうかよ』

「で？肝心のものはどこなの？」

『肝心のもの？』

「私の所望した首輪はどこなの？」

『ぬいぐるみの犬に付いているだろ？』

「あれじゃ、私につけられないじゃない」

『当たり前だ馬鹿』

「失礼な男ね。私は馬鹿じゃないわ」

『すまん。変態だったな』

「そうね。じゃあ、誕生日プレゼントのお返しに、電話越しだけど私の嬌声を聞かせてあ

げるわ」

『意味が分からんことを抜かすな』

「ほらほら？溜まつているでしょう？いいのよ？私の声をオカズにしても」

『切るぞ。ド変態』

「……久し振りの会話なのに……冷たい。……だって……話せないし……会えないし

……寂しかったもん」

『………悪い』

「でも……その冷たさが……心地よく感じるの……」

『………』

電話越しに頭を抱えている慧人。コイツは末期じゃないのかと頭を抱えているのだ。

「ねえ、慧人。もつと蔑んだ冷たい声で『この雌ブタが』とか言ってくれない？そんなあなたの声を聞きながら（ピーー）にふけようと思うの。特別に電話越しにその声を聞かせてあげても——」

『じゃあな。また日本で（プツツ）』

電話を切る慧人。それに対し、千聖は……

「——いいわよ……って、つれないわね……でも、そのあしらわれる感じが興奮するわ………！」

……興奮していた。

しばらくして、興奮が落ち着いた千聖は、お風呂に入っていた。

「……慧人が切ったせいで『ありがとう』って言い損ねたじゃない」

（もう一度電話をかけようかしら？……いいえ、ダメね。邪魔をしちゃいけないわ。流石に、それは迷惑ね）

しつかりと（？）相手のことを思いやる千聖。

（でも、慧人？……来年は直接祝ってね……お願いよ？）

異国の地で頑張る彼を想いながら、時間は過ぎていくのだった。



## Roseliaの復讐(?)

ゝあらすじ(つぽい何か)ゝ

世はガールズバンド時代突入直前。

ライブハウスCIRCLEにて、『勇者』湊友希那率いるRoseliaは、『魔王』冬木慧人を討伐せんとしていた。しかし、魔王の用意した対Roselia決戦兵器の前に、『ヒーラー』今井リサ、『タンク』氷川紗夜、『魔術師』白金燐子、『ネクロマンサー』宇田川あこがやられてしまう。追い詰められた勇者、仲間たちの力を借りるも魔王の前に果ててしまった。

これはそんな勇者たちが打倒魔王を掲げ、世に平和を取り戻す物語……ではなく、勇者たちが魔王にこっぴどくやられたので仕返しをしようとする物語である。

ライブハウスCIRCLE。

そこでは今、五人の少女が会議をしていた。ちなみにRoseliaの会議のため、前にもやったRoselia式の会議である。

「それでは、慧人さんへの仕返しをどうするか、という会議を始めます」  
「そうだね、あれはちよつとやり過ぎだよね」

「……少しくらいなら……バチは当たらないと……思います……！」  
「ドカーンとやっちゃおうよ！」

紗夜、リサ、燐子、あこが順に言っていく。そんな中、リーダーの友希那は……

「まあ、友希那は実は慧人くん側だったから反省してもらおうとして」

「……それはおかしいわ。私だって被害を受けたのよ」

一人、正座をしていた。他の四人が立ってリーダーを見下ろすという謎の構図だが仕方がない。

「いいえ。聞いた話によれば、湊さんが慧人さんに相談し、罰ゲームを承諾したそうですね？」

「それさえなかったら……私たちは……あんな目に遭わずに……！」

「友希那さんがけー兄と契約したせいなんだよ！」

「今回は友希那にも問題はあるかな」

「ううっ……そ、それは……」

そう。根本をたどっていくと友希那が慧人に相談していなければ、あの事件は起きなかったのだ。最悪の魔王は降臨しなかったはずなのである。

「まあ、でも。あそこまでノリノリでやっていた慧人くん側にも問題はあるけどね」

「でも、あれは古の魔王が復活したと思ったよ！格好よかったよね！」

「格好いいというか……すごく似合っていたというか……」

「あの人はどうして悪役とかそっちの方がよくお似合いに……」

「そうよ。私はあそこまで頼んでいないわ」

「ダメだよ友希那。慧人くんに責任転嫁しようとしたら」

「そうです。諸悪の根源は静かに反省しててください」

「……………はい」

友希那が反省させられているというレアな光景。それだけ、あの罰ゲームは彼女たちにダメージを与えていたのだ。

「でも……………仕返して……………具体的には……………どうするんですか？」

「ふっふっふっ。我が右腕に秘められし永久の闇の力を持って、葬り去ってくれようぞ  
！」

「やめといた方がいいと思うよ。多分、返り討ちに遭うからさ」

「ですね。私たちでは物理的に勝ち目がありません」

「じゃあ、どうやって……………？」

「思いついた！リサ姉がけー兄の嫌いなもので料理を作る！」

「おっ。目には目を、料理には料理をだね♪」

「いい案ですね。では、慧人さんの嫌いなものを知っている人は？」

「……………」

全員が黙り込んでしまう。

「え？紗夜が知っているんじゃないの？」

「知らないですね……聞いたことないので」

「じゃあ、今聞けばいいんじゃないの？」

「そうですね……きつと答えてくれますよ」

ということとで紗夜が慧人にメッセージを送る。件の本人は当然ながらこの場に居ない。

「ところで冬木は？今日は居ないの？」

「今日は松原さんと花園さんと共に水族館に行きました」

「へえ〜そうなんだ……つて、ええ!?!いいの、紗夜？」

「はい。何か問題でも？」

「いや……その……女子二人と水族館って……」

「何だかデートみたいだね」

「まあ、慧人さんの自由ですし。良いと思いますよ？」

「（いや、そういう意味じゃないんだけど……）」

「……と。あ、返信が来ましたね。『嫌いな食べ物はないですよ』だそうですね」

「いやいや、1個くらい。絶対に1個くらいあるはずだよ」

「間違いないです……!」

「そうですね。見栄を張っているに決まっているわ」

「何でも食べれるなんておかしい！」

彼女たちは自分たちが食べられないものがあることを正当化するために、嫌いな食べ物がある人はおかしいと言い始める。

「そうですね。ここは問い詰めてみま——またメッセージですね。えつと、『ちなみに、前のドリリンクの復讐と言つて嫌いな食べ物の料理が出される可能性があるのです、いくら言われても教えません』」

「……もしかしなくても、バレてる？」

「いえ。私にらせてください」

自信満々に言つた紗夜。そして慧人にメッセージを送る。

「私たちがそんなことをするはずがないじゃないですか」

「じゃあ、何で聞いたのでしょうか？」

「それは……慧人さんのことをもつと知りたいからじゃ……ダメですか……？」

「紗夜さん……！ごめんなさい。疑ってました」

「では、教えてくれるんですね」

「はい。絶対に教えません」

「いや、何でそうなるの？」

「……え？」

『疑いが確信に変わったので。俺への仕返しは友希那さんにしておいてください』  
「……私は嫌よ」

「いや、友希那にやつても意味ないから」

「そうです。私は慧人さんに仕返しがしたいんです」

「でも困りましたね……多分私たちの誰が聞いても答えてくれませんよ……?」

「ええ……じゃ、じゃあ苦手なもの! 苦手なものって何かないのかな? お化けとか虫とか……」

「お化けは平気ですよ。前、深夜にヒナたちとアタシたちの学校に侵入していたし」

「そうですね。ホラー映画も平気そうでした」

「虫……でも、何か虫も苦手な感じしないです……」

「平然と虫の命を狩っていいそうだよね」

再び流れる沈黙。

「あ、そう言えば一つありました」

「おおつ。それは何?」

「はい。子どもが苦手って言ってました」

「「え? 子ども?」」

「何でも、目が合っただけで泣かれるから嫌だって……まあ、目つきが悪いですから」

「確かに。あの目で睨まれたり見下ろされたら、子どもは泣いちゃっても仕方ないよね」  
「……大人の人でも……怖がっているのを見ました……」

「目だけで威圧して敵を倒すってかっこいいよね！」

「でも、それが私たちの仕返しに使える？」

「……………」

あまりのストレートな物言いに固まってしまふ。確かにそうだ。例えば慧人を保育園とかにぶち込んでも、慧人にダメージは行くだろう。しかしそれ以上に子どもたちのトラウマになりかねない。つまり使えないのだ。

「ええい、やめよう。慧人くんの苦手で責めるのは無理！」

「そうですね。では他の案を考えましょう」

「そう言えば紗夜。慧人くんの『ドキッ♡冬休み地獄の勉強合宿！命のポロリもあるよ

☆』は？どうなったの？」

「……残念ながら……」

そう言つて紗夜が見せたのは、何枚かの写真。

「……本当に……満点取ったんですね……」

「甘いわ。冬木が回避するために加工したのよ」

「と、そう思いましたが現物を見せてもらい、そう言った加工や不正の跡はありませんで



した……本当に、残念です」

「「……………」」

何処か悲しい空気になるRoselia。しかし、慧人は自身の命がかかっていた以上、マジでやった結果である。どんなに残念な空気を出しても、彼は譲るつもりがないだろう。

「あつ！思いついた！」

「はい、宇田川さん」

「けー兄って耳いいじゃん！だからさ、いやな音で責めるのとかいいんじゃない？」

「嫌な音……ですか？」

「ほら、黒板できーつってやつちやった音とか、金属できーつってやつちやう音とか！」

「なるほど！後はアタシたちがあえてそういう音を出してもいいかもね」

「確かに……耳の良さが仇になる……いいかもしれないね」

「……あの……」

「どうしましたか？白金さん」

「……いえ……その……けいさんって音痴の度が超えているので……そういう音を聞いても……何ともないかもしれない……かも」

「あつ……あのヘルボイスを自分で聞いても何とも思わなかったもんね」

「あこたちは全滅したのに……」

「つまり……それぐらいの音じゃないと慧人さんには効かない。でも、そんな音を出せないし、出せたとしても先に私たちがダウンしてしまう……」

「無理無理。アタシたちが死ぬ」

「いい案だと思つたのになあ……」

慧人の長所を逆手に取つた良い作戦に見えたが、まさかの理由でその作戦は破られてしまう。本当に何かないのかと考える五人。

「……湊さん。けいさんが挙げていた……罰ゲーム候補とかつて……ないんですか?」

「あつたわよ」

「どんなのですか?」

「顔にラクガキ、コスプレ、黒歴史暴露、モノマネ、語尾に何かつける……だったかしら」

「……絶対落書きやコスプレは無理だよ」

「……そんなことさせる勇氣は誰にもないですよ」

「後の三つはけいさんがやるとは思えませんし……」

「万策尽きた……つてやつだね」

全員が固まった。というこで、

「……は白鷺さんに頼りましょう」

「そうだね、慧人くんのことよく知ってるし。適任だよな」

「こういうことを一番楽しく考えてくれそうな人ですしね」

外部に頼ることにする。そこで一番に千聖の名前が挙がる理由は触れてはいけないことだろう。

「今日はお仕事のようなので返信まで時間がかかるでしょう」

「なら、それまで練習しましょう」

そう言つて電気を付け、練習を再開しようとする。しかし、友希那だけは動かなかった。

「友希那？やるんでしょ」

「わ、分かってるわ」

「もしかして足が……」

「痺れてなんかいないわ」

「本当に？じゃあ、ツンツンしようかな」

「そんなことしても無駄……ひゃうっ」

「〜♪」

「ちよっ……リサ……やめっ……」

リサが足が痺れて動けない友希那で遊んでいる中、あこはふと思った。

「これならけー兄効くんじやない？」

「あ、確かに」

「なるほど。候補の一つですね」

「そんな……ことより……たすけ……」

「だくメ♪」

千聖

今日

千聖：明日の予定は？ 18:40

19:37 午前中部活午後寝る

千聖：午後は暇なのね 19:38

千聖：(。・ω・)フムフム 19:38

21:57 午後は惰眠を貪るといふ重要な仕事があるから暇じゃねえよ

千聖：ありがと 21:57

千聖：(\*ノ▽ノ) &lt;&lt;スキだよ♪☆☆☆ 21:57

21:58 既読 で、何で急に聞いたんだ？

千聖：(\*ノ艸ノ) フフフ 21:58

千聖：(\*ノ口ノ) ヒミツダヨ★ 21:58

21:59 既読 ……あ？

21:59 既読 おいコラ

千聖：返しが冷たい… 21:59

千聖：泣いちやう。 ( ( ω (、 ) 。 2 2 : 0 0  
 2 2 : 0 0 知るか

千聖：でもそうやってあしらわれると 2 2 : 0 0

千聖：興奮するわ (\*、ハ、\*) ハアハア 2 2 : 0 1

2 2 : 0 2 勝手に興奮してろド変態

千聖：きやつ ( / / ω / / ) ♪ 2 2 : 0 2

千聖：そういうところが好きよ ( ☒ ■ ☒ ) ♡ 2 2 : 0 2

千聖：おやすみ ( つ ☒ ω ☒ c ) 2 2 : 0 3

2 2 : 0 3 ちよつ、話は終わってねえよ

千聖：イイ夢ミロヨ (、ω・・) キリツ 2 2 : 0 3

2 2 : 0 3 嘘だろおい？

2 3 : 3 0 ……頼むから面倒ごとはやめろよ？

## Roselia VS 慧人 ～第Ⅱラウンド～

水族館に花音とたえと行った翌日。午前中の部活も終わり、家に帰ってきた俺は、ご飯を軽く作り食べていた。

結局、昨日の最後に送ったLONEは、千聖の奴が既読スルーしやがったので、何がやりたかったか全然分かってない。未読スルーしてないあたり、アイツは答える気がないことをアピールしているんだろう。

だからと言って、何かを期待することも身構えて待つ必要もない。親もいつも通り揃って仕事で遅いし、家の戸締まりだけ確認して俺は寝ることにする。戸締まりさえしておけば不法侵入されることはないだろう。……まあ、侵入されたらその時はその時つてことで。

ピンポン

「……………今、何時だあ……………」

時計を見ると14時30分過ぎ……………おっと、二時間くらい寝たのか。

ピンポン

とここで、インターホンが鳴っていることに気付く。想定より寝過ぎたせいで頭が

回っていないが……宅配便？なんか頼んだのか……？まあいいや。

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーン

……急いで向かう気がない俺にも問題はがあるが、何回も押しているあたり、何かの押し売りか勧誘か？……まあ、大体そういう奴らつて俺が出ると逃げ帰るしなあ……ちなみに親からも公認である。

「はいはい……」

未だ眠たい目をこすりながら鍵を開け、玄関のドアを開ける。あくびを片手で押さえながら開けるとそこには……

「女神様……？」

何だろう……直視できない眩しさを感じる。それは思わず目を閉じてしまうほどだった。そして、ゆっくりと目を開けていくとそこには……

「こんにちは。慧人さん」

「紗夜さんですか……それにああ、Roselliaがお揃いで」

「あれ？隠れていたのによく分かったね、けー兄」

「空気で分かる」



「相変わらず、すごい感覚ですね……」

「褒めても何も出ませんよ」

「ありや？寝起きかな？」

「さつきまで寝てたんでね」

「髪がいつもよりボサボサよ」

「後で適当になおします」

ふうー段々とスイツチが入ってきた。

「何の用でしょう？」

「暇ですよね？だから来ました」

「え？何で暇だって知って……ああ」

思い当たる節があった。千聖か。アイツがリークしたのか。

「まあいいや。どうぞあがってください」

「わあーい。お邪魔しまーす」

か？  
というところで家上げる。ところで、何で暇だから来るって話になっているんだろうか？

「ねえね、けー兄の部屋に行こうよ！」

「ああ、別にかまわ……!?!」

すると何か嫌な予感がした。そう。俺の中のセンサー第六感が、彼女たちを部屋にあげるのは危険だと告げている。

「……あーちよつと散らかってますよ」

「それくらいなら……気にしませんよ……？」

「いいんですか？」

「おやおや〜？それとも、何かあげたくない理由でもあるのかな〜？」

「……まあ、特にないんでいいんですけど」

……流石にこんな風に言われてはあげない訳にはいかない。ぽてぽて事件を始め、今までも彼女たちを何のためらいもなく部屋にあげた前例がある以上、頑なに否定しては怪しまれるだけだ。……仕方ない。さっきのが杞憂に終わることを祈るか。

というわけで部屋に。ちなみに、ちよつと散らかっているのは本当だ。勉強机の上には参考書とか教科書が出しっぱなしだし、パソコン周りはそのそきれいだが、ベッドの上はさつきまで寝ていたのでクチャクチャになっているし、本棚とかも少しだけ本が雑に置かれている。

「許容範囲ね」

「散らかっているというほどはないですね」

「やっぱり、少し広いですよ……」

「確かに。6人がカーペットの上で座れるもんね〜」

「え？俺椅子の上じやダメですか？」

「ここは床に座ろうよ〜ほらほら」

ということとでカーペットの上に……何故か正座させられているが。いや、紗夜さんとか真面目だから正座しているし、他の人たちも正座なりしていてそんな中であぐらをかくことがためらわれるというか……まあいいか。

「……で？何でしょうか。とりあえずミニテーブル的なもの持ってきた方がいいですか？」

「お構いなく〜」

「はあ……」

いや、マジで何しに来たんだこの人たち。本当に暇だから来たのか？いや、それにしてもはこつちの予定を確認してから来ているし……うーん？

「そう言えばご両親は？」

「仕事で遅いですよ」

まあ、あの人たちは夜型と言ったらアレだが、昼頃から夜にかけてが多い。だから今日も午前中は家に居たらしい。らしいというのは、俺が帰ってきたときには仕事に行っていたからだ。

「けー兄くトランプとかなーい？」

「あるぞ」

「じゃあさ！ババ抜きとかしながら何か話そうよ！」

「なんかつて……まあいいけど」

ということとでトランプを持ってくる。

「イカサマありますか？」

「普通になしだよ!？」

「冬木。イカサマする気だったの？」

「まあ、していいならしようかと」

「へえーじゃあさ、やってみせてよ」

「分かりました」

要望に応えるべく、下準備をすることに。

「まず、このカードに細工がされていないことを確かめて、AからKまで順に、スートごとに並べてください」

ということとで、五人が一枚一枚表裏を確認しながら、並べていく。

「後はそれを綺麗に積んで下さい」

「ジョーカーは？」

「一番上に」

「りよーかい」

綺麗に積み上げられる。一番上がジョーカー。その下にハートのKからA、ダイヤ、クラブ、そして一番下がスペードのA。

「じゃあ。まあ、やってみますか」

まずは、普通にシャッフルしていく。五人が手元とかをすごい見てくるので、時折りフルシャッフルやウオーターフォールシャッフルなどを織り交ぜたりしてみる。

そして一人一人に配っていく。配っていく時も警戒されているようだが気にはしない。今回は六人居るので、一人だけ八枚になるはず。まあ、それは俺なんだけど。

「……………え？普通だったよね？」

「何か格好いいシャッフルが混ざっていたよね！」

「配るときも怪しい動きはなかったかと……………」

「配られたカードもバラバラです。あ、一組揃ってました」

「私は二組ね…………でも、本当にやったの？」

「はい。これで俺の一位ですね。俺の手札AとKしかないの」

そして俺は自分の手札を全て見せる。そこには、Aが四枚、Kが四枚あった。

「……………ええっ!?!」

「まあ、これやったらあからさますぎるので、普通はやらないんですけどね」

さすがにババ抜きで配られた段階で、あがりなんてあり得ない。いや、正確には確率がむちやくちや低い。細かく計算はしてないけど、偶然とか運がいいとかで片付けられるよりイカサマや不正を疑われるレベル。

それくらいレベルだから、普通はやらない。……まあ、もう一つ仕込んでいたが。

「ちなみにリサ姐。リサ姐のところにある上から三枚目のカード。それジョーカーですの」

「……え？嘘、本当にジョーカーなんだけど」

「……もしかして慧人さん。すべてのカードの行方を把握しています？」

「まさか。そこまで処理能力も記憶力も高くないですよ。精々、自分の手元のカードとジョーカーぐらいしか分からないですし、そもそも意識して操作してないです」

恐らくバカみたいな天才とかにこれをやらせたら全員の手札が分かるかもしれないが、生憎そこまでの能力はない。というか、神経衰弱やポーকার、七並べなんかはともかく、ババ抜きでは全部のカードの位置を把握しても他のゲームよりメリツトが少ないと思う。というか、ただの遊びでそこまでやるのは……ねえ。意味が分からん。

「じゃあ、頑張ってくださいね」

振り出しからリサ姐が不利だが、そこまで大差はないだろう。最初から手札をシャツ

フルしているぐらいで、あくまで普通。本来のババ抜きであれば、最初から手札をシャッフルする人間はほとんどいない。勿論、いるにはいるだろうが、その行為はその人がジョーカーを持っているのでは？と他の人に思わせることになり、疑われる要因になってしまう。まあ、今回は既にバレてるから関係ないけど。

リサ姐が笑顔であこちゃんに差し出して、あこちゃんが必死に考えたりしているのを尻目にネタばらしでもしておこうか。考えていたイカサマは大きく二つ。やらなかつた方は、自分の手札となるカードをシャッフルの最中で抜いていき、それを配るときに、自分のところに渡していくやり方。やらなかつたのは単純に五人が凝視してきてたから。流石に八枚もシャッフルの最中に消そうと思うとどこかでバレる。

「あああああつー！」

三周か四周くらいしただろうか。あこちゃんがカードを取った瞬間、叫んだ。ジョーカーが回ったんだなと誰もが思った。

「あこちゃん……ババひいたんだね……」

「ふ……ふつふつ……い、今のはただの演技に過ぎない。場を盛り上げるためにわざとやったのだよ……」

などと供述したが、ババを引いたのは丸わかりだ。動揺を隠しきれず、更に、りんさんが引こうとカードに手を置くと表情が変わってる。具体的にはある一枚のところ

手が置かれると物凄くキラキラした目を向けていて、それ以外のカードだどこか悲し  
そうである。

そんな分かりやすい光景を見て、りんさんが取った行動は……

「白金さん。あなたババを持っていきますね」

「何のこゝとでしようか？」

あこちゃんのパバを引いたのだった。で、ここに俺が居るはずだが、初手一抜けした  
ので紗夜さんが引く番だ。

二人の攻防戦を見つつ、俺が今回やったイカサマについて。スート順に並べてくれ、  
ジョーカーの位置も指定した初期の段階では、全員が何段目に何のカードがあるかを把  
握している。自身の処理能力や技術もあるので、全部操作はしないで、自分のところに  
来るカードと、ジョーカーの位置だけ把握し続け、シャッフルで操作する。勿論、ゆっ  
くりやったらバレルし、明らかに怪しいので、ある程度速くするのも忘れずに。後は、一  
枚分上下に誤差が生まれたときとかは、シャッフルで無理やり直すより配るときに直す  
方が早いので放置しておいた。

配るときに誰からも指摘がなかったのでバレていないが、実は数回。山札の一番上で  
はなく二番目のカードを配る、セカンドデイルと言うものをやっている。マジックで  
も使われるものだが、イカサマには持って来いの技術である。



「紗夜……あなたババを引いたわね」

「何のことでしょう」

段々と皆の手札が少なくなってきた頃、友希那さんが紗夜さんに問いかけていた。紗夜さんの表情は何というか……無だった。そう、なにもなくなっていたのだ。さつきまでの表情が消え、死んでいたのだ。

「これね……っ！」

そして、紗夜さんの感情が復活すると共に友希那さんが顔をしかめた。

「おやおや〜？友希那がババを持っているのかな〜？」

「………持っていないわ」

「そう？ならこのカード♪」

友希那さんも分かりやすかった。正確には割と親しい人には分かるやつだ。この人、あこちゃんと同じタイプだ。だから今、この人はリサ姐がババ以外を引いたので少しムツとしている。

……この人たちの半数以上はギャンブルに向いてないのでは？ギャンブルは言い過ぎでも、ポーカ〜とか絶対向いてないだろ。相手……特に知り合いからすればいいカモだ。

そして宿命と言うべきか、最初にリサ姐、次にりんさんと抜けていき、カモ三人が残

る。その中でも、紗夜さんが他二人より少しだけポーカーフェイスが上手だったので三番目に抜ける。

「さあ、引くのよ。あこ」

「我が千里眼を持つてすればババを見抜くことは容易い……！」

友希那さんとあこちゃんの一騎打ち。最弱決定戦である。その結果……

「妾の勝利なり！」

あこちゃんが勝った。ビリは友希那さんである。

「今のは無効よ。冬木がイカサマをしていたもの。だから、もう一回よ」

友希那さん曰く、今のは負けてないけどこのままだと癪だからもう一回やってくれだそう。

「今度はアタシがシャッフルするよ☆」

「そうですね。慧人さんに任せるとおかしなことが起きるかもしれません」

「そんなイカサマなんてしませんよ。そこまでして勝ちに行く気はないので」

イカサマは当然リスクが伴う。さつきは、宣言した上で見抜かれなかったからいいが、これが何も言わずに見抜かれた場合、糾弾されることは不可避だろう。

で、配られたカード……うん。普通だ。凄い豪運があるわけでもないの、一組揃って後はバラバラ。ジョーカーは幸い来ていない。

「さつきとは逆回りにしましょう」

ということで、今回は紗夜さんからカードを引き、りんさんにカードを引いてもらうことになったが……うん。

「……………」

「……………」

紗夜さんと目が合う。いや、見つめ合っているとかそういうわけではなく、最初から心理戦が起こっている……あ、この人ジョーカー持っているわ。

「……………」

一枚ずつ探っていく。基本的には無である。

「……………」

しかし、一枚だけ、僅かに反応を見せた。なるほど。これか。

「……はあ。今回だけですよ」

そう言っただけでカードを引く。やっぱりジョーカーか。まあ、このやりとりから、どうせりんさんにはババが来たことがバレてるのでシャツフルする。

「引きましたね？」

「さあ？何のことでしょうか？」

そう言っただけで差し出す。りんさんがこちらの目をジーツと見ながら反応を伺ってくる

が……

「……………」

特に反応しない。演技する気もないので、何のカードに触れられても反応しない。ただ、俺の手札は八枚あるので、さすがに初手ピンポイントでババを引くことはなかった。まあ、三周目にひいたんだけどね。

この後、何度かババ抜きをして、配置も変えた。何故なら途中から、紗夜さん、あこちゃん、友希那さんのババを高確率で引く俺、りんさん、リサ姐が誕生したからである。見事に顔に出る三人のババを引く顔に出ない三人ということで、ジョーカーが回りに回った。他にもぶたのしつぽで、大量のカードを抱える友希那さんやあこちゃんとか七並べで、ずーつと止めていた俺やりサ姐とか色々あった。ちなみに神経衰弱は紗夜さんとりんさんが凄かったですね。記憶力いいなあ……。

そして気付けば時刻は17時頃……

「ちよつと買い物行ってきますね」

「今から?」

「ええ。昨日食材を使いすぎてね。ところで五人は夕食どうします? 食べていきますか?」

「んー。作ってくれるなら頂こうかなー」

「そうね。いただくわ」

「では、私もいただきます」

「お願います」

「あこもお願い」

「了解です」

長いこと正座していたなあと思いつながら立ち上がる。

「……（つんつん）」

「……何をやってるんですか？」

「いえ、深い意味はありません（つんつん）」

足を指でつんつんされるが、特に何も思わない。一体、彼女はどのようなのだろうか？

「あ、そうだけいさん。NFOを開いてもらえますか……？」

「別にいいですよ」

「ありがとうございます。サブの方でいいですので……」

まあ、断る理由もないのでパソコンを立ち上げてNFOを開く。起動するのを待つている間も紗夜さんから足を指でつつかれてはいるが気にはしない。そういうことをしたい気分なのだろう。……でも、真面目な顔でやられると……この人は何がしたいのかとすげえ聞きたくなるけど。

「はい。見ても面白くはないと思いますが……ではこれで。もし、誰か来たら教えてくださる」

「「はーん」」

「分かりました（つんつん）」

「紗夜さん？行つてきますので、それをやめていただけると……」

「分かりました」

ということできさつさと買い出しに行く。えーっと、買い物メモを頭の中に作つて……

「第一段階は失敗のようね」

慧人さんが家から出て行ったことを確認してから、私たちは行動を起こす。

「そうだよね、いやあ、まさか痺れていないとは想定外」

「長時間の正座に慣れていたのででしょうか……？」

「我慢しているようには見えませんでしたね」

「けー兄のデータ、サブでも面白いことやってるみたい」

私たちは暇だからという理由だけで、今日慧人さんの家を訪れたわけではありません。当然ながら、昨日考えた復讐を実行するためです。

「燐子。パソコンはお願い」

「お任せください……！」

「アタシたちは搜索開始だね」

「ええ。白鷺さんのアドバイスを基に行きましょう」

「おぉー！」

白鷺さんとメッセージで話し合った結果。やはり弱みを握るのが一番という結論に至った。弱みを握れば、従えやすくなる。それが罰ゲームでもいいし、発展させるにしてもだ。で、やっぱり相手が男子高校生なのでそういう系の本や、画像、動画、検索履



歴などを探するのがいいと。

「鬼門はアタシたちじゃパスワードが分からなくてパソコンを開けられないことだったけど、こうも容易いとは」

「ええ。流石に警戒が緩すぎる気がしますね」

私たちだからいいものを、こうも警戒がなされてないといずれ問題が起きますね。ここは一つ。パソコンやスマホなどの情報機器を気軽に相手に渡すことの危うさを身をもって体験させましょう。

「ダメね。分厚い本のハードカバーを外しても何も出てこないわ」

「こつちもくそもそも二重底？ってあるのかな？」

曰く、不自然に厚い本や、引き出しの二重底に隠してあることもあるそうだ。最初にお邪魔したときの影響で、警戒がされていると同時に私たちの探索能力が知られている。ならば、こういう場所に隠すのでは？というのがアドバイスだった。

「あ……」

「湊さん。何か見つけましたか？」

「冬木の成績表とかテストの点数表」

「けー兄ってどれくらい頭いいの？」

「……………嘘でしょ？冬木って馬鹿じゃないの…………？」

「学年順位一桁……全国模試とかの成績も普通にいいし……」

「……………(ふふん)」

「り、リサ姉！紗夜さんがドヤ顔しているよ！」

「くう……流石紗夜に鍛えられているだけのことはある……！まさかアタシより頭いいとは思わなかった……！」

「そうよ。何で頭いいのに勉強から逃げたがってるのよ。てつきり同類と思ったじゃない」

「まあまあ……それに……頭が良くないと……高得点はとれないですから……」

まあ、慧人さんは元々優秀でしたからね。勉強に対してやる気がないくらいで、素のスペックは高いですから。机の上の勉強の形跡を見る限り、しっかり言ったことはこなしているようでよかったです。

「……………うわあ……………」

「どうしたの隣子？何か見つかった？」

「い、いえ、ブックマークのところ開いたのですが……………」

そう言われて皆で見ると、そこに登録されていたサイトは……………

「うわあ……………五割が料理関連、三割くらいサッカーで、残りも裁縫とか……………」

「……………これが男子のよく見るサイトなの？」

「多分例外ですよ……」

そのまま履歴も見ませんが……うん。サッカーのフェイントの練習動画とか、料理のレシピ……あ、水族館を調べていますね。なるほど……じゃないです。これじゃ、女子力が高く、サッカーを熱心にやっていると云うだけで、弱みにならないですか。

「では、次の手を打ちましょうか」

「えっと、推測候補だったね」

「履歴を消している可能性がありますから……」

白鷺さん曰く、パソコンの推測候補の中にどんな言葉があるかでも弱みに繋がる可能性があるらしい。

「五十音順に行こっか」

「そうですね……えーっと、『あいませ』『医者殺し』『うけじゃ』『えびし』『おしきはば』……」

「『医者殺し?!』」

ど、どうしましょう。ほとんど意味が分からない中にとんでもない言葉が混ざっていた。

「どどどうしよう! けー兄が! けー兄が殺人を!?!」

「おおお落ち着くのよ。一旦落ち着きましょう」

「そそそうですよ、け、けいさんがそんなこと……!」

「そそそそそうですね。しそうな顔ですがそんなこと……!」

弱みとかを通り越して、とんでもない言葉が出てきたことに戸惑う私たち。

そんな中、今井さんだけが何かを思索している様子。そして『医者殺し』と打って検索をした。

「やっぱりね。料理のことだよそれ。三重県での呼び方みたいだね」

「「え? 料理……?」」

「うん。他の四つだけど、料理に関係していたからね。これももしかしたらって思ったけど当たったみたい」

「でも医者殺しなんて物騒ね」

「あはは。意味的には医者がいらないってことで医者殺しみたいだよ」

「よかったあ……けー兄が殺人を計画していたわけじゃないんだ」

「あと少しで……通報するところでした……」

「慧人さんですから……」

その後、すべて調べたがほとんどが料理に関する事だった。残りもサッカーとかで弱みになりそうになかった。

「……この手は……使いたくなくなかったです……」

「そうだね、ボロをここまで出さないとやるねえ☆」

「ふっふっふっ。しかし、我らには全てお見通しぞ」

「そうね。やりましょうか」

「ええ。最後のアドバイスを実行しましょう」

最後に言われたのは隠しフォルダの存在。そういう系の画像や動画を纏めたフォルダを巧みに隠しているとのこと。確かにそれなら何の躊躇いもなくパソコンを渡したのも頷ける。

「……あ、ありました。それも二つ……」

「……これが隠しフォルダ……!」

「開きましょう」

「……はい」

白金さんがフォルダを開く。するとそこに出てきたのは大量の写真だった。

「……あれ? そういう系の画像じゃないね」

「盗撮……とかじゃなさそうね」

「……この写真とかいつののでしょうか?」

そう言つて指さしたのは、若宮さんが慧人さんに抱きついている写真。何故か二人とも着物を着て、ボロボロで血に染まっているが。

「あ、でもその辺。パスパレの子たちがたくさん写ってるね」

「日菜に確認してみますね」

というところで日菜に電話を掛ける。すると、すぐにあの子が出た。

『もしもし？おねーちゃん？どうしたの？』

「日菜。一つ聞きたいけどいいかしら」

『いいよ〜！』

「着物を着て、ボロボロで血が付いてる若宮さんが、同じくボロボロで血に染まっている慧人さんに抱きついている写真があるのだけど、何か知らないかしら？」

『ボロボロで血？……………あ、それ前の撮影のやつだ！サングラスかけて偉そうにして  
いる千聖ちゃんの写真があつたら確定だよ！』

サングラスをかけて……………コレかしら。

「あつたわ。でも何故……………？」

『なんかねー千聖ちゃんがバラエティーの企画みたいなので、「アイドルが映画監督に挑戦！」だったかな？それに参加することになって……………あ、これまだ放送されてないから先の話なんだっけ？まあいいっか！うん！とりあえずその映画撮っていた時にあたし  
たちが写真撮影会してたやつだね！』

「なるほどね。ありがとう」

『はいはい。もしかして慧人のパソコンからかな？麻弥ちゃんがりっかりと送ってたって言ってたし』

「じゃあ、切るわね」

『うん！』

ということでは分かった……分かったが。

「ど、どうしましたか？紗夜さん……怒ってます？」

「いえ……そんなことはないです」

その撮影での写真を見ていると何処か楽しそうな彼の姿を見ると……何だろう。少しでも心が黒くなる。私だってまだ一緒に写真を撮ったことがないのに……。

「嫉妬ってやつですかね」

そのまま写真を遡って見ていくが、パスパレとの写真以外、凄いい気になる写真は出てこない。まあ、それでも色々出て来るがそういう系のものは一切なかった。

そんな中で、一番下。一番古いと思われる写真たちが少しだけ気になった。

「これって中学時代のかな？」

「そうでしょうね」

中学時代の制服を着た慧人さんと東雲さん。卒業式の写真なのか二人とも何か片手に持っている。卒業証書を入れたものだろうか？そして……その二人と肩を組むよう

に、真ん中に写っている女の子が……。制服を着ていて、でも二人と違って何も持っていない。

別の写真は、私服姿の先輩さんと写っていたり、四人で写っていたりするが……。一体、この女の子は誰なんだろう？この三人の誰かの兄妹……。には見えないけど。

「お？こつちのファイルは動画みたいだね☆」

そんな思考を巡らせている中、二つ目の隠しフォルダを開く今井さん。そこには、動画が入っているようだ。

「この動画は何なのか……」

「音量は下げたので……。ヘッドホンなしでも大丈夫かと……」

「未知の世界だね……」

「見ましようか」

私たちは再生ボタンを押す。そして……。そして………



「全く、反省してください。皆さん」

夜。リビングには正座している五人がいた。

「だ、だつて〜!」

「大方、俺の弱みを握って、罰ゲームでも考えていたんでしょ? どうせ、千聖にでも相談して」

「そ、そこまでバレているとは……!」

「あの女が人の予定を聞いてきたんで、一枚噛んでいるのは想像に難くないです。というか、言ったじゃないですか。いくら探してもそういう本も画像も出てきませんよっ

て」

「だからってあの仕打ちはあんまりだよ……」

「そうですよ。あのトラップは酷いと思いませんか?」

「……いや、人のパソコンを勝手に調べていたアンタらの自業自得です」

「それでも……あれは最低です……!」

「どうするのよ。夢に出てきたら」

彼女たちは人のパソコンを調べ、隠しフォルダに気付いた。で、そのファイルに入っていた動画を再生して、悲鳴を上げたタイミングで俺が帰宅した。分かりやすく言うところこんな感じ。

じゃあ、何の動画を見て悲鳴をあげたか。最初の頃とか、部屋に来たときに散策していたから、またやるんじゃないかと思った。そこで隠しフォルダを作り、そこにホラー系の映像をいくつか入れておいた。リアル的心灵映像からホラーゲームのそういうシーンまで多種多様。もし、散策した人たちがここまで到達した場合、興味本位で動画の再生ボタンを押すだろうから、悪戯のつもりで。……ちなみにそのことを俺はさつきまで完全に忘れていたが。

その悪戯がうまいこといって部屋に戻ったときは、カオスだった。息をしていない友希那さん。そんな彼女に抱きついて悲鳴をあげるリサ姐。耳を塞いでぼてぼてと連呼

する紗夜さん。あちゃんとりんさんも涙目で這いずりながら部屋から脱走しようとしていた。

とりあえず場の収集をはかり、落ち着いたところで現在、俺が夕食を作っている間、正座させて反省させている。

「まあ、相手が俺でよかったですね。人のスマホやパソコンを興味本位で調べると、思わぬ危険が潜んでいるという、いい経験になりましたね」

「「ぐぬぬ……」」

どこか納得がいかない顔をする五人。そんな彼女たちの表情を眺めながら料理を作る。ふむ。中々いい眺めだな。

「……………でも、慧人さん……怒っていないんですか？」

「何故、怒る必要があるんですか？」

「無断で色々と見てしまったこととか……見られたくないものがあるかもしれないのに」

「そうですね……まあ、俺としては、泣き叫ぶ皆さんの表情が見れたのでよかったです」

「な、泣き叫んでませんよ！」

「そうよ。私は意識が旅立っていただけだよ」

「あ、あれは匍匐前進の練習だよ！」

「じゃあ、ホラー映画でも見ます？もっと、グロくて怖いものも用意できますよ？」  
「や、やめて！アタシああいうのは本当に無理だから！」

「そ、そういうのはよくないと思います……！」

「冗談ですよ。怒ってはいないんで安心してください。さてと、出来たので、運ぶのを手  
伝ってもらえますか？」

そう言うと言運ぶのを手伝ってくれる五人。俺はそれを尻目にあるものを取り出して、  
注ぎ、一人一人の前に並べていく。

「……………慧人くん。水にしては色が変わりやないかな？」

「それとも、お茶ですか？それにしては違うような……」

「いいえ。水でもお茶でもないですよ？」

「……聞きたくないけど、それって何かな？」

「対Roselia決戦兵器ver2.0です」

「……………」

その言葉を聞いた瞬間、全員すげえ嫌そうな顔をした。

「あの日から進化させました。日々、研究に研究を重ね、あの時よりも栄養バランスなど  
健康面に配慮。少々の味を犠牲に前より身体にはいいものに仕上がっています」

良薬口に苦しとはよく言ったものだ。まあ、ちよつとマズくなつちやつたけど、前よ

りもいいものになっていくからオツケーと言うことにしておこう。

「……ま、まさか……それを飲ませることは……しないですよね……?」

「飲ませるなんて人聞きが悪いですよ、りんさん。皆さんに飲んでもらうだけですから」

「怒ってるよね!?!けー兄、絶対怒ってるよね!?!」

「ホラーに正座で満足したんじゃないの?」

「怒ってる?満足?はははっ。面白いことを言いますね」

「じゃ、じゃあ何故そんなものを……?」

何故?やれやれ、何故だなんてそんなの決まっているというのに。

「もちろん……悶え苦しむあなた方の表情を、見たいからに決まっているじゃないですか」

(もちろん……あなた方の健康面に配慮してですよ)

「「……………ごめんなさい」」

「ごめんなさい?謝らなくて大丈夫ですよ?遠慮なくどうぞ。皆さんの好きなタイミングで飲んでくださいよ」

「「……………」」

「「……………」」

「ああ、安心してくださいね。もし、飲めないなら……俺が優しく飲ませてあげますの

で」

「「……………」」

(「な、なんて清々しい笑顔……!や、ヤバイよこの魔王……!」)

「いい勉強になったでしょう?復讐って、悲劇しか生まないんですよ?」

「「本当にごめんなさい……!」」

この日。慧<sup>魔王</sup>人の家から生きて帰れたものはいないとかなんとか。

## サヨVSケイトVSポテト 前編

それはある休日。紗夜さんと二人並んで歩いていたときだった。

「そう言えば慧人さん」

「何ですか？」

「今日ですね。とても素敵な夢を見たんです」

「へえーどんな夢なんですか？」

「そこは綺麗な花畑のすぐそばでした。私は大きな木の下で、一人ギターを弾いていたんです」

夢の中でもギターを弾いて居るとは流石だな。

「そこへ、一頭の白馬が現れたんです。そこに乗っていたのは——」

あ、これ王子様が迎えに来ているパターンだな。紗夜さんでもそんな乙女チックな夢を見るんだ……

「——ポテトでした」

「へえーポテトかあ………ん？………は？………は？………つて、ポテトが迎えに来たんですか!？」

「ポテトがポテトを差し出ししながらこう囁くんです。『迎えに来たよ』つて」

「いや、迎えに来るのお前じゃねえだろ!?! いや、ポテトにお前もおかしいけど!」

「それに対し、私はポテトを受け取りながらこう返すんです。『私にはギターがあるからあなたのポテトは受け取れない』と」

「いや、受け取った後ですよね!?! 気付いて! あなたもうポテトを受け取っていますから!」

「するとポテトはこう返しました。『あなたの心に正直になつていい』と」

「あーうん。もうポテトが喋っていることは無視していいですよね?」

「私の心は激しく揺り動かされました。でも、たった一つ、私には譲れないものがあつたんです。『慧人さんが居るから……』と私は切なそうに返すんです」

「紗夜さん……ギターは? ギターは何処へ消えたんですか? ポテトに負けたんですか?」

「ポテトは言いました。『ケイトとポテト、どっちが大切な?』と」

「……ん? マジで? 時々そういう二択を二次元で見ると、俺、食べ物と比べられたの?」

「私は激しく悩みました。ケイトもポテトも私にとつては甲乙つけがたい、どちらが大切かなんて選べません。でも選ばなくてはならないことは分かっています。だから必死に考えました」



……俺は泣くべきなのだろうか？ポテトと比べられて、ほぼ同列と言われていることに。

いや、もしかしてアレか？紗夜さんにとって、ポテトは彼女が狂うほど好きなモノ。つまり、彼女の中でも最高の地位に立っている。そして、そんなポテトと俺が比べられる……同格扱いされているのだ。だから、その喜びを噛み締めればいいのか？

……訳が分からない。何だか、錯綜している気がするな。

「そして長考の末、私は結論を出そうとしました。その時でしたね」

「え？何がですか？」

「夢から覚めたのが」

「……ちなみにですが、頭の中でどんな結論を出したんですか？」

「そんなの……くちゅん……を選んだに決まっているじゃないですか」

「なんて都合のいいくしゃみやみ……！そのせいでどっちか分かんねえ……！」

と、その時だった。俺が怪しい気配を感じたのは。

「誰だ。出て来い」

紗夜さんを片手で制止し、曲がり角に潜む怪しい気配に向け声を発する。

「慧人さん……？」

「……もう一度だけ言う。出て来い」

「ふっ、仕方ないな」

そう言つて出て来た姿に俺は驚愕した。いや、マジで驚いた。

「ぼ、ポテト……?」

フライドポテトのかぶり物（この時点でおかしい）をかぶり、スーツ（多分）を着た変態（多分あつてる）が出てきたからだ。

「ま、まさかあなたは……! 私が夢で出会ったポテトなの……?」

「え? ちよ……え? こんなヤバい変態が夢に出てきたんですか?」

「そっだよ」

「いやアンタもアンタだよ。便乗してんじゃねえよ」

「そんな……本当に出会えるなんて……!」

「何で泣きそうになつてるんですか!?! いや、どう考えても泣く要素はないですよ!?!」

え? ないよね? 今のどくに泣く要素があつた?

「さあ、行こう紗夜。我が世界……そう。ポテトワールドへ」

「いや、異世界転生物じゃねえんだよ行こうじゃねえんだよ。ふざけんなよおい」

「そうですね……」

「ちよ、マジでヤバいつて紗夜さん。そこの変態は今すぐ通報するべきですつて」

流石の俺でも分かる。これは通報案件だと。

「……我らの神、ポテ神様の下へ」

「待って紗夜さん。何であなたの目からハイライトが消えているんですか？え？今の短時間で何が起きたんですか？もしかして、一瞬でポテトに洗脳……ポテ脳されたんですか？」

「どうやら我らの話についていけない輩がいるようだ」

「ついていけるわけねえだろ。いや、ほんとマジで」

「では、紗夜よ。我らの行く道を邪魔する不届き者を倒そうではないか」

「イエス、ポテ」

おっと？俺が悪いのかこれ。何で紗夜さん臨戦態勢なんだ？え？マジで？これ戦う流れなの？

……と、まあ、半分冗談はにおいておいて。あのポテト何者だ？声はボイスチェンジャーの類いが使われているにしては余りにも自然な地声に聞こえる。声からして男？だが、この声を俺は聞いたことないし……そもそもだ。紗夜さんの弱点がポテトって知っている人間は少ないはず……何者だ？もしかすると……相当ヤバい変態ヤツかもしれない。

「慧人さん。あなたを倒します」

「紗夜さん………」

俺に紗夜さんを傷つけることは出来ない。だから彼女を避け、後ろの変態野郎を潰すしかない……だが、あの正体が体内の場合、手加減しておかないといけない……が、あのまどつていいる空気というかオーラ。どうにも、知り合いに近い感じがする。近くて何処か遠い……ダメだ。分からねえ。いや、本当に分からない理由は……

「全てはポテトのために」

紗夜さんから振るわれる拳を避け、近くの外壁に足を付けてそこから跳躍。一気に変態の下へと跳んでいく……が。

「……っ！」

紗夜さんが俺とポテトの間に入る。何とか紗夜さんに当たらないように避けたが……くっ。運動神経は前々からいいとは思っていたが……まさか、反応されるとは。

そんな驚きをよそに、目の前に立つ紗夜さんから蹴りや拳が飛んでくる。

「どうやら攻撃できないようだね」

「うるせえ」

紗夜さんの攻撃を避けながら思考を進める。ただ、猶予はあまりないかもしれない。今の紗夜さんは恐ろしく強化されている。さっきの攻撃も普段の彼女なら間に割って入るところか、反応されるはずがない。ポテトのためなら限界を超えられる……なんて人だ。

変態の正体が本当に分からない理由は単純だ。だって、変態とオーラが似ている人間って言うのが……目の前にいる紗夜さん。彼女自身だからだ。

そう考えると日菜も該当するが……日菜は違う。アイツなら紗夜さんが気付かないはずがない。誰なんだ？紗夜さんに空気が近い変態……変態……ん？まさか……！

「ポテ狂サイドの野郎か……！」

つまり、同族。クソ、だったら話が早い。あんなかぶり物している変態だ。間違いない。紗夜さん側の人間だ。……あれ？これだと紗夜さんも変態って言っているような……ま、いつか。

「……ツチー！」

一瞬の隙について変態に接近し、蹴りを放とうとする……が、またしても紗夜さんが反応して、変態を守るようにして立つ。そのため、攻撃を中断……が、その僅かな隙について紗夜さんの蹴りがとんできたので咄嗟に軸足を地面から放し、姿勢を低くすることで回避。そのまま、両手について無理やりバク転のように身体を一回転させ、距離を取りつつ体勢を立て直す。

……って、そもそもだ。仮に正体が分かっても、紗夜さんを抑えないとヤツに攻撃は届かない。だが、抑えたところでどうする？気絶させるわけにはいかないし……

抑えているタイミングでポテトが何も仕掛けてこないとは限らない。

「さあ、君はどうする？我らと共に堕ちるか……それとも私を彼女諸共葬るか」

「……………っ！」

考えろ考えろ考えろ。どうすりや、紗夜さんを傷つけずに倒せる？どうりやそんなことが……

「……………イチかバチかか」

振るわれる拳や蹴りを受け流しながら、頭の中で何人か候補を挙げては消していく。俺一人では絶対に勝てない。紗夜さんが敵の手に堕ちた以上、そんなことは知っている。彼女の体力切れを待ってもいいが……不思議なことに今の彼女なら限界を超えそうに怖い。

だが、もう一人居れば別。たった一人、この場に追加されるだけで流れは変わる。……問題はもう一人だ。人選をミスする訳には行かない……よし。彼女にしよう。彼女が適任だろう。

スマホを取りだし、素早くメッセージを送る。頼む、気付いて動いてくれよ……！

「警察にでも通報するつもりかい？」

「……………あ」

と、ここで気付く。よく考えなくても110番すればいいじゃないか？と。だって、

目の前の変態、通報すれば捕まるでしょ。最低でも職質ぐらい受けるだろうし、うん。問題ないな。

「遅いです」

だが、それに気付くと同時に紗夜さんの攻撃の速度が増してくる。……クソ。相手が紗夜さんってだけでここまで勝てないものなのか……いや、ダメだ。傷つけることは出来ない……！

「どうしたんですか？守ってばっかでは勝てませんよ」

「知ってますよ」

少しでも紗夜さんの身体に負担がかからないように、攻撃を受け流す。ただ避けているだけではダメだ。少しでも彼女を消耗させないようにしないと。

そんな攻防を続けること十数分。

「慧人くん！」

どうやら、天は俺に味方しているらしい。

「言われていたもの持ってきたよ！」

そして掲げる袋。その袋を見て紗夜さんの動きが固まった。

「ナイスです！金は後で払うんで！」

その一瞬の隙を突いて、彼女を背後から抱きしめて身動きを封じる。

「……っ！放して……！放してえ……！」

「つてええっ!?何かポテトのかぶり物している人!?それに紗夜と慧人くん何やってんの!?」

「リサ姐！早くポテトを紗夜さんの口の中に！正気を取り戻させるんです！」

「え？しよ、正気？よ、よくわかんないけど、う、うん！えい！」

リサ姐は状況に混乱しつつも、紗夜さんの口の中にポテトを入れる。すると、力が抜け落ちたように倒れ込もうとする紗夜さん。

「慧人くん。これって……」

紗夜さんにポテトを供給しているリサ姐。

ポテト（ヘンタイ）のポテト（センノウ）を解くにはポテト（ホンモノ）しかない。あのハンムラビ法典にもあるんだ。目には目を歯には歯を、ポテトにはポテトを……とな。つまりこれで合っているはずだ。

呼ぶのをリサ姐にした理由は単純だ。紗夜さんがポテトで暴走した姿を見ても凄く反応しない人間で、俺の簡潔なメッセージを信用して行動を起こしてくれる人物。……後はそのポテトを見ても何とか正気を保ってくれる人物を選んだ結果である。

ちなみに、千聖でもよかったがアイツは仕事があるかもしれないから早々に除外した。日菜も同様の理由。で、Roseliaの他のメンバーに関しては、メッセージを



送っても正しく動いてくれないか、そのポテトのせいで思考停止する可能性があったから、一番頼れそうなりサ姐が残ったというわけだ。え？リサ姐はバイトしているだろって？……………まあ、来てくれたからなかつたんだろうな。うん。

「うっ……………ここは？」

Sサイズのポテトを食べきった紗夜さんが意識を取り戻す。別に気絶していたわけではないが。

「気付きましたか？」

「慧人さんの声がします」

目を開けた彼女。しかし、その瞳は何も映していないように見えた。

「そんな……………！」

遅かった……………のか？彼女に負担をかけすぎた……………というのか？

「紗夜さん！しっかりして下さい……………！紗夜さん！」

「すみません慧人さん……………目の前が真っ暗で……………そこに居ますよね……………？」

「ここに居ますよ……………！俺なら……………ここに居ますから」

「よかった……………ごめんなさい……………私」

「もう喋らなくていいです……………もう……………大丈夫ですから……………！」

「……………慧人さん……………！」

「紗夜さん……………!」

そのままゆっくりと閉じられた目。俺は静かに彼女を下ろす。そして……………静かに相手に狙いを定める。

「待っていてください。すぐに終わらせますから……………リサ姐。紗夜さんを頼みます」

「う、うん？」

(ど、どうしよう……………どういう展開なのこれ？え？本当に何が起きているの？何かカメラでもあるの？え？何かの撮影？いや、カメラないし……………え？じゃあ、え？何がどうなっているの？)

「……………」

そして、勝負は一瞬だった。

「……………え？何が……………」

宙を舞う変態。変態が宙を舞い、そのまま堕ちた。文章で表すならたったそれだけだった。

「クハッ……………」

「さて、まずは変態の正体を拝むとするか」

「や、やめてくれ……………!」

俺はフライドポテトの上の部分握り、勢いよく上に引っ張る。そして、中から現れ

たのは……

「誰？」

水色つばい髪の40前後のおっさんだった……いや、誰？リサ姐と顔を見合わせるが……うん？やっぱりこの人誰？

「なっ……」

すると、いつの間にか目を開けていた紗夜さんが顔を真っ赤にしていた。そして、「お父さん!?!何をやっているの!?!」

「え？」

緊急速報。緊急速報。変態の正体、紗夜さんと日菜の実の父親だった。

あーだから、紗夜さんや日菜とオーラが似ていたのか。納得納得……？

「そ、そのだな……これには深い事情があつて……」

「こんな頭のおかしな人が身内だなんて、周りに知られたら私の立場が……はっ」  
すると我に返つた紗夜さん。まるで、ブリキのおもちやの首を動かすような、ぎこちない首の動かし方で、俺とリサ姐の方を向いて……

「見ました？」

「うん」

逆に見ていないと思つているのだろうか？

「う」

「うっ」

「うわああああああああああああああっ!!」

すると、紗夜さんが顔を真っ赤にし、顔を両手で押さえながら全速力で走り始めた!? 「ちよっ!? さ、紗夜さん!?!」

「ダメだよ! 今は追っちゃダメ!」

紗夜さんの方へと走り出そうとする俺の腕をリサ姐が掴む。そうこうしている間にも紗夜さんは遙か遠くに……

「どうして止めたんですか!」

「……ダメだよ。今は、紗夜の中で状況の整理が追いついていないからさ……一人にしてあげて」

「くっ……確かに」

自身の親がこんな奇行に走っていたことを知られる……確かにとんでもない感情に襲われてもしょうがないか。

「それに……今、紗夜のお父さんと二人きりにしないで!」

「あ、絶対そっちの理由の方が大きいですよね」

「そんなことないわけないよ!」

「リサ姐落ち着きましよう。一旦深呼吸です」

「すまないが、ちよつと起こしてくれないかい？」

「あ、すみません」

「……ん？何で俺が謝ってるんだろうか？まあいいか。」

あの後、紗夜さんのお父さんに肩を借して立ち上がり、そろーつと逃げようとしたリサ姐の手首を掴んで公園へと歩いてきた。ちなみに人間二人を引きずったりするのつて大変だなと感じた今日この頃。

「何でアタシまで連れてきたの!?アタシ関係ないよね!?!」

「リサ姐。既に貴女はこの事件の関係者です」

「勝手に事件扱いしないでもらえるかい……?」

「いいんですか?警察に言ってもいいんですよ?職場の同僚とかに言ってもいいんですよ?」

「……すまん」

「人の父親を脅している!?!ダメだよ慧人くん!この人、慧人くんのお義父さんになる人だよ!?!媚を売っておかないと!」

「だから?」

「だから、君にとって重要な人だと言っててるの!」

「……………?」

「何でちよつと意味が分からないって顔をしているの!?!」

「あ、あのーそろそろ話しても」

「少し黙っていて下さい！アタシは慧人くんと言わないといけないんで！」

「あ、はい。すみません」

「……そう言うリサ姐だつて黙らせているんじや」

「何か言つたかな？」

「あ、はい。すみません」

リサ姐。怖い。助けて。

「いい慧人くん？近い将来、君はこの人に『お義父さん！紗夜を下さい！』つて言うの」

「すみません。それは恋愛小説の読み過ぎでは？」

「そしてあなたは静かにこう言うの。『……娘を頼む』つてね！」

「……え？私ももう決まっているのかい？」

「返事は？」

「……………」

「へ・ん・じ・は？」

「は、はい……………」

紗夜さんのお父さんと目が合う……な、何だこの状況？よくわかんないぞ？

「と、とりあえず落ち着きましょう、リサ姐。ね？一旦落ち着きましょう」

「そうだね……………じゃあ、アタシはこれで」

「いやいや、リサ姐。せめて話だけでも、話だけでも一緒に聞いてくださいよ……！」  
「慧人くん。時には見放すことも大切だよ☆グツバイ♪」

片手を挙げ、カッコよく去ろうとするリサ姐。

こちらに背を向き、歩き始めた彼女。だが、ここで泣きながら引き留めるのは二流のやること。一流のやることは……

「リサ姐……今度、グリーンスムーズ（無理やり）飲ませますよ」

「しようがないなく気が変わったから、アタシも残るよ☆」

「流石ですリサ姐。俺、信じてましたよ」

「いやあくまあ、ここで見捨てることはしないよ〜」

笑顔で振り返って、帰ってくるリサ姐。一流はたった一言で引き留めることが出来るのだ。ちなみに彼女の目が一切笑っていなかったの、今度から夜道には気を付けようと思えます。

「……で、紗夜さんのお父さん。一体何でこんなことをしたんですか？」

「それはだな……最近……というか、夏頃からか。ある男の名を紗夜がよく口にしようになつてな。いや、前から聞いてはいたけど明らかに頻度が増えてだな。……まあ、でもその頃か。ようやく、紗夜と日菜が昔みたいに少しずつ仲良く食卓を囲うようになったのは」



ああ、なるほど。確かにあの頃の紗夜さんと日菜は険悪だったからなあ……正確には紗夜さんの方からが大きいけど。そりゃあ、食事をとにもする……ことも少ないか。

「紗夜の口から出るだけならまだいい。だが、日菜の口からも出るし、あの二人の友人の話をしても度々登場して……あの子は一つのことに関頭すると周りが見えなくなるから……」

「その名前が出る男の人が気になったと」

「そういう事だな……まあ、あの子が選んだんなら間違いはないと思っていたが……あまりにもその男から他の女性の話に？がるものだから……」

「なるほど。女癖の悪い男の可能性があったと」

「そういうことだな……試す方法がアレだったのは……すまないと思ってる。紗夜が暴走した時にどうやって解決するかを見たかったからなんだ」

「ふむふむ。ところで、そんなに名前が挙がってた男って誰なんですか？」

「「え？」」

「……ん？」

何でリサ姐まで驚いたのだろう。俺にはその男の正体が掴めていないというのに。

紗夜さんがそんなに口にする親しそうな男性……ふむ。一体誰なんだ？

「いや、どう考えても慧人くんのことだよ？何言ってるの？」

「よく考えてくださいよ。紗夜さんから名前が挙げられる可能性はありますが、俺が女遊びとかするわけじゃないじゃないですか」

「まあ、確かにそうだね。何だかんだ流されない気がするし。そもそも流せないだろうし」

「でしょ？ 大体、俺からどうしたら他の女子に話が行くのやら」

「え？ 君、本心で言っている？ 君と紗夜さえ望めば、ハーレムエンドにいつでも路線変更可能だよ？」

「マジですかリサ姐」

「マジマジ。とりあえず、慧人くんや。君のハーレム候補に誰がいると思う？」

「逆に聞きます。誰がいるんですか？」

「言っとくけど俺だぞ？ リサ姐は本当に分かっているのかな？」

「うーん。紗夜は確定枠だから置いておいて、千聖は絶対に居るでしょ。後、ヒナも行けるんじゃない？ それから、燐子やあこ、花音、つぐみ辺りもいけると思うよ」

「へえーリサ姐は？」

「アタシ？ ふふーん、そんなに軽そうな女に見えるかい？」

「いいえ全く。これがギャルゲー的な何かなら、攻略難易度は易しそうに見えて高いかと」

「おおー流石、お目が高いねーうん。そーだね……慧人くんは料理や家事も出来て、運動神経もいい。何より何度も助けてもらうような優しさもある。それに、こうやって知らない仲間やなく親しい部類に入る。そんな君と付き合うか……あれ？これは行けるね。うん。アタシも慧人くんハーレムに加われるね」

「やりましたね。攻略完了ですか？」

「だねー何ならアタシが加われれば友希那が付いてくるかも？」

「ハッピーセット感覚ですね」

「そうそう。今なら友希那も付いてくる〜みたいなの？」

「ですね」

……あれ？友希那さんってそんなにチョロかったっけ？

「ともかく、さっきから名前が挙がっていたのは君なの。ですよね？紗夜のお父さん」

「あ、ああ。慧人さんや慧人って言ってたから間違いないだろうね」

「ふむふむ」

ともかく、話は飲み込めた。つまり、変態の奇行ではなく、紗夜さんのお父さんによる選定だったと。……まあ、事情を知らなければただの奇行としか映らない……事情を知ってもそうとしか思えなかったわ。

「でも、紗夜……娘さんと距離が空いちやったんじゃ……」

「……ふっ。前からそんなに近いわけじゃないから今更だよ」

何処か遠い目をしている。なんとも悲しい話だ。

そして、立ち上がる紗夜さんのお父さん。

「ただ、よかつたと思うよ。君の傍に居るあの子は何処か輝いて見えた。そんなあの子を見るのができて本当に……これからも頼むよ」

そのまま立ち去ろうとする……が。

「す、すまない……この歳で、無茶すぎたようだ……家まで送ってくれないかい？」  
すぐに動けなくなっていた。なんとも情けない話だ。

紗夜さんのお父さんを家まで運ぶ。リサ姐は帰りましたね。

ちなみに『今度覚えておいてね♪』と言われながらお金を渡しました。賄賂じゃないです。ポテト代です。

ピンポーン

「……？私が居るから、インターフォンは要らないんだけど？」

「まあ、いつもの癖ですね」

すると、ドアが空いた。中からは……

「あ、慧人だ！いらっしやい！……ってあれ？何で慧人とおとーさんが一緒に居るの？」

「いろいろあつたんだよ」

「本当ですね」

「ふーん……あ、あがつていつてよ慧人！」

「そうか？じゃあ、少しだけお邪魔するわ」

ということであがらせてもらうことに。

「日菜、この人何処に置いておけばいい？」

「うーん、その辺に転がしておけば？」

「……え？扱いが酷くないかい？」

「しよがないなく慧人。ソファアの上に転がしておいて〜」

「だから転がすって言い方が酷いと思うんだが……」

「へーい」

「君もかい……」

そんなわけで、ソファアの上に紗夜さんのお父さんを転がす。

「そうそう慧人！おねーちゃんがさー！すっごい勢いで帰ってきたと思っただらさ！『もう外を歩けない！』とか言つて布団にくるまっちゃったんだく何かやっちゃったの？」

「うーん……俺と言うか……この人がと言うか……」

「ええ、教えてよくおねーちゃん布団の中で、ブツブツ言つたまま出てこないレベルなんだよ？」

「まあ、何だ。後で教える」

「約束だからね！」

流石に俺の口からは言えない事なんだよな……だって、あの人の名誉とか威厳を守ら

ないといけない……ん？いや、そうでもないか。よく考えなくても興味なかったわ。

「あ、そうだ慧人！おねーちゃんを引つ張り出すの手伝ってよ！もー、おねーちゃんつてば、あたしが声をかけても全然出てこないんだよ？」

「……まあ、時にはそつとしておくことも大切に——」

「よし決まりだね！おねーちゃんの部屋に行こう！」

「——ですよねー。お前は無視するつて分かつてたよ」

という感じで日菜に腕を掴まれてそのまま紗夜さんの部屋の前。

「いい、慧人？ノックしてから入るんだよ？」

「ゴメン。それくらい分かる」

コンコンコン

「おねーちゃんく出て来た？」

「いや、普通返事待つからな？」

日菜はノックすると同時に部屋を開ける。

目に飛び込んで来たのは、綺麗に整頓された部屋。流石と言うべきか、彼女の部屋は綺麗に整頓されていて……だからこそ、ベッドの上で丸くなっている布団が凄い目立つた。

どうやら、布団の中にいて、丸まっているのは本当らしい。

「おねーちゃん？ 慧人が来たよ」

「け、慧人さん!?! い、今は見ないで下さい! ……合わせる顔がないんです」

「じー。本当に何したの、慧人?」

「いや、原因お前の父親だから。俺も被害者だからな」

「おとーさんが? そりゃあ、おとーさん、ちよつと頭のおかしなところあるけど……」

可哀想に。実の娘からおかしいと思われているなんて。

「で? どうするよ。力づくでいくか?」

「はあくやれやれだよ慧人ーそんなことはダメダメ。もつとこう頭を使わないとさー」

「じゃあ、どうするんだよ」

「うーん……あ、閃いた! こうしようよ慧人! あたしと慧人で、おねーちゃんが好きなどころを言い合うの! そしたら照れたおねーちゃんが出てきてくれるはず!」

「日菜……お前、天才か?」

「ふっふくん♪ まあ、天才日菜ちゃんですから (どやあ)」

「さらに、照れた表情の紗夜さんが拜める。最高じゃないか同士よ (ガシッ)」

「まあ、それほどでもあるけどね (ガシッ)」

日菜と固い握手を交わす。こういう時の日菜ほど、頼りになる者はいない。

「つて、そんなこと私が許可すると思いませんか!」



紗夜さんが飛び出てきた。

なるほどな。一見すると、素晴らしく完璧だと思われた作戦。唯一残念だったのは、俺たちはこの会議を本人の前でやっていたことくらいか。

「まあまあ紗夜さん。とりあえず一回布団の中に入って入って」

「そーそー。まだ出てきちゃダメだよ？おねーちゃん」

「あーそうですね。失礼しまし……ってそんなわけないでしょ！」

「ツチ」

「おっと慧人さん。今、舌打ちしましたね」

「つち」

「日菜も真似しなくていいんです」

「どうする日菜？紗夜さん出てきたけどやるか？」

「そーだねーじゃあ、あたしから行くね！」

「行きませんやりませんやらせません」

「「おおーこれが『ません』三段活用（パチパチパチ）」

「はあ……」

とまあ、とりあえずそんな感じで三人、囲うようにして座ることにする。

「あれ？あたしたちの目的達成しちやった？」

「あ、そう言えば」

「え？あ、その……」

そう言つて、紗夜さんが布団に手を伸ばそうとする。

そんな中。日菜と一瞬アイコンタクトを交わす。そして、日菜が布団を遠ざけ、その隙に紗夜さんを後ろから抱き寄せる。腕を回し、彼女の腹部と胸の上辺りにそれぞれの腕が来るようにする。

「放してください……！今の私には顔を隠すものが……布団が必要なんです！（バタバタ）」

「ジタバタしないで下さい。ほら諦めるんです」

「そーだよねーちゃん！諦めて慧人に捕まっているんだよー」

「うう……慧人さんのバカ……」

「俺はバカじゃないです」

「いや、充分バカだと思ふよー」

「え？突然の裏切り？」

「そもそもあの連携は何なんですか？何でこういう時に息ピッタリ何ですか？」

「まあ、目を見たら分かつたんで」

「だよねー何だかビビッつて来たんだよねー」

実に不思議である。何か目が合ったら日菜の考えていることが伝わったという感じがしたというか……まあ、そういうこともあるな。うん。

「でも、紗夜さん。紗夜さんがそんな隠れることはないんですよ?」

「でも……!」

「そもそもさーおねーちゃんと慧人、何があつたの?」

「まあ、お前には話すつて言つていたしな、実は……」

というこゝとで、俺たちの身に起きたことを話す。話し終わつて……

「うーん、でもさあ。おねーちゃんがそうやつて隠れようとする必要なくない?おとーさんが醜態を晒しただけでさー。あたしは全然リサちーや慧人に合わせる顔がないとか思わないけどね」

「それは……そうだけど。でも……」

「それにおねーちゃんが慧人の前で暴走するのなんて今更じゃん。あたし的には楽しそうだからオツケーつて感じかな」

「今更つて……そんなに暴走していませんよね?私つて……」

「それはどうだろうか。ポテトが関わると酷く、時には屁理屈を並べたりして、あの手この手で俺を説得しようとする。まあ、他にもぼてぼてしか言えなくなったり、ポンコツさが垣間見えたりして……うん。とてもじゃないが、暴走してないとは言えない。た

だまあ、彼女の為にここは嘘をついておくか。

ええ、大丈夫ですよ」

「……やつぱり、暴走しているんですね」

おかしい。何でバレたのだろうか。

「慧人ー全て口から出ていたよー」

「え？マジで？何処から？」

「それはどうだろうか。つてとこ」

日菜の声真似がうまいな……じゃなくて。

「それ全部じゃん」

「いいんです。どうせ私なんてこういう女なんで」

「すねないで下さいよ……まあ、そんなすねたところも可愛らしいと思いますけどね」

「可愛つ……か、からかわないで下さい！」

「ええ、可愛いと思いますよ（ふー）」

「ひゃああつ！いい、いきなり耳を責めないで下さい！」

「じゃあ、どこならいいんですか？」

「どこもダメです！」

「むー……二人ばかりなんかズルーい！あたしも混ぜてよー！」

この後、日菜も混ざって三人で仲良く(?)過ごした。

## サヨVSケイトVSポテト 後編

「三人ともー夕ご飯よ」

あの後、三人で雑談をしていたり、すると夕ご飯の時間になったみたいだ。紗夜さんと日菜のお母さんがやって来て、ここに居る三人に夕ご飯と……？ん？三人？

「三人って、紗夜さんと日菜と……誰のことですか？」

「勿論、慧人くんよ」

「え？いいんですか？」

「ええ。うちの主人が迷惑をかけたらしいし、紗夜に聞いたけど普段一人で食べているんでしょ？」

「まあ、両親は基本夜中に帰ってくるんで……」

だから滅多に一緒に食事とかはない。

「だったら、今日は食べて行きなさい。もう作っちゃったしね」

「じゃあ、お言葉に甘えますね」

そっか。本当ならそろそろお暇したほうがよかった時間か。いやー時間って経つの早いなほんと。

そう思いながら、紗夜さんと日菜について行き、手を洗ってリビングへ。

そして、俺はテーブルに乗ってるものを見て……戦慄した。

「……………」

「どうしたんですか？座っていいんですよ？」

「そーだよー早く早く」

紗夜さんと日菜が特に驚いた様子もなく座っている。見ると、二人のお父さんとお母さんも座っていて……幻覚か？俺の見えているものは幻覚なのか？

「いや……今日ポテトに関するおかしな事があったので……何か山盛りフライドポテトの幻覚が見えているんですけど……」

「あははく何を言ってるの？本物に決まってるじゃん」

「全くです。そんな幻覚だなんておかしな事を言わないでください」

「…………え？本物……だと？」

「慧人くんが来たって何時になく張り切って作っていたからな」

「ええ。腕によりをかけたわ」

…………どうやら、目の前にある山盛りポテトは本物らしい。

そのことに驚きながら紗夜さんの隣に腰掛ける。そして、

「「いただきます」」

手を合わせ、そして食べ始めようとする。だが、4人とも動かない……え？何かのルールか？

「慧人さん。先にポテトだけどうぞ」

「え？」

「うーん、5本！5本だけだよ？」

「まあ、それぐらいならいいんじゃないか？」

「ええ、賛成よ」

……何で5本とか、何でポテトを先に勧めたかは知らないが……

「まあ、そこまで言うなら……」

ということ、ポテトを1本取って口の中へ……うん。

「美味しいです」

「ありがとうね」

そして、2本、3本目を口にする。

「細く切られていて1本1本が食べやすいですね。そしてこのスパイシーさ……チリパウダーですかね。最後、揚げた後に塩こしょうと共にふりかけて馴染ませた……うん。丁寧に作られていてこれだけの量のフライドポテトなのにしっかりと、全体的になじんでいるように感じます」



「……まさか、氷川家以外にこの事が分かるとは……しかも2、3本食べただけで」

「流石は紗夜が選んだ人ね……」

「当たって良かったですか。外していなくてよかったです」

そして4本目を口の中へ入れる。

「まあ、自分もフライドポテトはよく作りますので……色々な作り方を試しているから分かったんでしようね」

「え？ 慧人さん。私、そんなに食べていませんよ？」

おっと、食いつくのが早かった。……マズいな。これは言っちゃいけないことだった気がする。

「………試行錯誤中ですので。紗夜さんに満足して頂けるものしか当社は提供しない方針で……」

「そんなことはいいんです。今度からは私にも試食させてくださいね」

「イエス、ママ」

そこまで言われたら仕方ないな、そう思いながら5本目を口にする。そして、5本目のフライドポテトを咀嚼し、喉を通した瞬間。

「……………！」

空気が変わった。まるで、ここは戦場だと言わんばかりの張り詰めた空気。

そして、その空気の変わりように俺は、動くことが出来なかった。

そんな俺を差し置いて、氷川家4人の手が一齐にフライドポテトへと向かう。各々がポテトを掴みそれを口の中に入れ、咀嚼し飲み込む。そして、再びポテトに手が伸びる……その繰り返しだった。ポテトを掴む↓食べる、たつた二つの工程の繰り返し。しかし、その繰り返し尋常じゃないスピードだった。

少なくとも、この戦場は俺が立てるような次元じゃない、高次元なものだった。目だけ、4人の動きを追うのが精一杯の状況。手を動かそうにも、まるで俺の動きだけがスローになったような感覚。そうこうしている間にも山盛りポテトはその姿を徐々に失わせていき……気付いたときにはポテトは消えていた。

一瞬だった。一瞬で山のようにあったポテトは姿を消したのだった。

ここで、ようやく、俺は気付いたのだった。いただきますと合掌をした直後の奇妙な会話。アレが何を意味していたのかを。

「ま、まさか……!」

「あれれ〜? やつと気付いたの〜?」

「無理もないですよ。それに、いくら慧人さんでも、この戦場に立つのはまだ早かったんです」

「ふふつ、でも、気付くのが遅すぎだったわね」

「ああ。2人とそこそこの付き合いならもう少し早く気付いてもよかつたんじゃないか？」

「でも優しいよね。5本もハンデであげただから」

「まあ、6本目を食べることはなかつたですが」

初めての感覚だ。まさか、戦いを前に身体が動かなかつたなんて……

「ふふっ、口元に付いてますよ」

紗夜さんの手が俺の口元に伸びる。人差し指で俺の口元に付いていたと思われるポテトの欠片を取ると、そのまま軽くペロツと舐める。そして、

「私の勝ちですね。慧人さん」

そう言い放った。

襲い来る脱力感、そして無力感。紗夜さんだけじゃない。日菜も、2人のご両親も……なんてレベルなんだ。天と地ほどの差があるではないか。……こんな人たちに俺が勝てるわけがないじゃないか。

圧倒的な敗北感が押し寄せてくる。そんな中で俺の心には次こそは勝つという強い火が燃え盛って……燃えてきて……燃えて……燃えて……

「……………？」

燃えてこないわ。

いや、よく考えなくても、最初に取り分けておけばいいじゃん。何で争っているんだよ意味分かんねえよ。そもそもよく4人ともあの一瞬でポテトが胃に消えていったな。すげえよアンタら。ポテト限定の早食い大会があつたら絶対に優勝だよ。

今更気付いた。よく考えたらこれ、敗北感というよりただの呆れな気がした。何というか……うん。紗夜さんのポテト狂なところってこれ絶対に血筋だろ。

よし、なんか解決したしご飯食べるとするか。うんうん。

「……紗夜さん。ちゃっかりにんじんを俺のところに乗せないで下さい」

「……にんじんが慧人さんに食べて欲しいって言ってたんです」

「ダメです。しっかりと食べて下さい」

「私、思うんです。にんじんはこの世に必要ないのではと」

「はいはい。ほら口開けて。あーん」

「うっ……あ、あーん」

震える彼女の口の中へにんじんを入れていく。

「ううっ……!」

「えらいえらい。よく食べました」

彼女が自身の頭を俺の胸元に押しつけてきたので、優しく後頭部を撫でることにする。やれやれ、紗夜さんのにんじん嫌いにも困った物だ。

「日菜。これでも付き合っていないんだよな？」

「うん。まだだつて〜（もぐもぐ）」

「……あの紗夜がここまで懐くとは……恐るべしね」

「だよね〜でもこういうおねーちゃんつて見ていてるんっ！つてする」

「……ところで私たちの存在つて……」

「おねーちゃんは絶対、忘れてるね〜」

「青春つていいわね……ほんと」

と、何かよく分からないけど、生温かい視線を受けながら食事を進めていくのだった。

「何だか、成り行きですみません……」

「別にいいですよ。では、少し行つてきますね」

「いってら〜」

夕食後、少しだけ談笑して帰ろうと思つていた慧人。だが、紗夜と日菜のお母さんに『もうこのまま泊まつていったら?』と提案され、流されるままに氷川家に泊まることになったのである。で、風呂の順番が来たので慧人が入ることになったのである。

「すみませんとか言いながらるんっ♪つてしているよね?おねーちゃん」

「そ、そんなことないわよ。決して、一緒に布団で寝られるなんて考えていないわ」

「おねーちゃん?まだ慧人の寝る部屋すら決めてないのに、一緒に寝る気満々じゃん」

「あつ……」

早速と言ふべきか墓穴を掘る紗夜。少しだけ顔を紅くする姉を見ながら日菜は続けた。

「……あたしさーやつぱりダメみたい」

「どうしたのよ。急に」

「うんとね、あたしはおねーちゃんの好きなものが好きになると思ってたんだ」

「……確かに。あなたは私のやることを真似してばかりだったものね」

「あはは……まあ、だからさー恋愛も、あたしはおねーちゃんの好きになった人を好きになると思ってたの」

「……そう」

「あたしは慧人のこと好きだよ?」

「なっ……だ、誰も慧人さんのことが好きだなんて言っていないわよ!」

「いやいや、おねーちゃん。隠すの無駄だからね?あたしでも分かるレベルってきつと相当だよ?」

「……」

「でさー慧人のこと好きだと思うよ?だって、慧人と居るとるんっ♪ってることが多いもん。……でも、おねーちゃんの好きに比べたら、全然浅いんだなーって」

「浅い?」

「うんとね、あたしは慧人と居るとるんっだけど、おねーちゃんは慧人と居るとるるるるんっって感じで、全然違うなーって……あ、もちろん、あたしはそんなおねーちゃん

から慧人を奪おう！とか一切考えていないから安心して！」

「そもそも私のものでもないわよ……」

「なんか、難しいんだよねーおねーちゃんみたいに人を凄く好きになるのって」

「……私はなりたくてなったんじゃないのよ」

「……？違うの？」

「だって、去年、ずーっと慧人さんのことを嫌っていたもの」

「あははー何度か聞こえてたよ？慧人が鬱陶しい的なこと」

「嫌っても、突き放しても、傷付けても、あの人はずーっと居てくれた。……その意味ではあなたと同じかもね。……あの時は気づけなかったけど、今は分かる。あの人が居てくれたから氷川紗夜はいる。あの人が居てくれたから、こうしてあなたと接することが出来る。……私はあの人を気付けば好きになっていった。好きになろうとして好きになつたんじゃないよ、自然と好きになっていったのよ」

「……うむむ……やっぱり、よく分かんないや」

「そうかもね。でも、無理に好きになる必要はないと思うわ。あなたの人生よ。あなたが好きになった人と一緒に居られるといいわね」

「要するに、無理にるんつとするんじゃないよ、自然とるんつとなる人がいいってこと？それもおねーちゃんレベルの」



「私を基準にしなくていいのよ。でも、あなたの場合はアイドルだから。少し複雑になるかもしれないわね」

紗夜の言葉に、分かったような分からないような表情をする日菜。他者の存在がまだよく分からない日菜にとっては、難しいかもしれないと思う紗夜。

(……そう言う私もまだまだ分からないことだらけね……)

「ところで、お風呂場に行ってこなくていいの?」

「な、何を言ってるの!?!」

「ほらほら〜風呂場で『一緒に入ってもいいですか……?』とか言わなくていいの?」

「い、言うわけないでしょ!そ、そんなことしに行ける勇気があれば、もうとつくに告白しているわよ!」

「ふーん、だってさー慧人?」

「え、え!?!け、慧人さん!?!いい、今のはその言葉の綾というかなんというか……」

「嘘だよー」

「く〜く〜っ!」

「あははは〜トマトみたいに真っ赤だ!」

さらに顔を紅くする紗夜。そんな姉の様子をけらけらと笑う日菜。

「あひゃ、いひゃい、いひゃいよおねーひゃん」

「そんなこと言う口はこの口ですか！」

「ごめん、ごめんってばくからかっただけだからゆるひへえく」

笑い転げる日菜の頬を引つ張る紗夜。

「全く……少しギターを弾くから大人しくしていて」

「はぁーい」

少しした後には放すも、日菜は本当に反省しているのか分からない。ただ、これ以上おかしなことを言われないようギターを弾くことに集中することにした紗夜。

「お風呂上がりました」

紗夜がギターを弾くこと何分か。慧人の帰還である。

「あははーおとーさんの服着てるー！」

「そりやそうだろ、まさか泊まるとは思ってねえんだから」

「……………」

ギターを弾く手が止まる紗夜。その目は慧人の方を見ていた。

「おーい？おねーちゃん？どうしたのー？」

「何か変ですか？」

「……………あ、いえ……………つ、次は私が入ってきますね……………！」

「え？あ、いつてら〜」

「あ、どうぞ」

ギターを片付け、そそくさと足早に風呂場に向かう紗夜。残された二人は……

「何があつたんだろう？」

お互いに顔を見合わせ首をかしげていた。

（な、何でしょう……この胸の高鳴りは。そ、そりゃあ、慧人さんの風呂上がりの姿なんて普段見ることが出来ないはずなんです……髪が水分のせいか落ち着いていて、いつもと違う雰囲気……！も、もし付き合ったらああいう姿を何度も……い、いえ、それ以上も……！）

「つて、な、何を私は考えているの……!?」

ちなみに紗夜の方は、一人悶々ともだえていた。

一方、そんなこと一切知らない二人はとと言うと……

「あたしさー慧人のことおにーちゃんと呼ぶのはむむっ？つて思うの」

「俺もお前にお兄ちゃんと呼ばれるのは違うと思う」

「でもさあ、おねーちゃんと慧人が結婚したら、慧人つておにーちゃんになるわけじゃない？」

「義理のな」

「ぎりーちゃん？」

「なんだそのよく分からんやつは」

「うーん……やつぱり慧人は慧人でいいや！」

「結局、変わらなかつたのな」

「そうそう！あたしね！いいこと思いついたの！」

「よし、まずそのいいこととやらを忘れろ」

「まずさーあたしとおねーちゃんって結婚できないじゃん？」

「聞けよ……でもまあ、そりやそうだ」

「でさーおねーちゃんって慧人と結婚するじゃん？」

「それは未確定だな」

「そこで天才日菜ちゃん思いました。あたしも慧人と結婚すればいいじゃん」と

「ほう。それは色々と問題だらけだけどな？」

「そうすれば何と！あたしはおねーちゃんと間接結婚ができるんだよ！」

「待て。間接結婚ってなんだよ」

「……？」

何で伝わってないんだろうって顔をする日菜と、何で新しい造語で伝わると思ったんだろうって顔をする慧人。

「もしかして、慧人って理解力が残念系？」

「おう、喧嘩なら仕方ないから買うぞ？」

「痴話喧嘩？それならおねーちゃんとやれば？」

「阿呆か。お前とサシの喧嘩だよ」

「うーん、でもどうするの？あたし、慧人におりゃーって方の喧嘩で勝てる気しないよ？」

「奇遇だな。お前と口喧嘩だけはしたくない気がしてきた」

「むむむ……？じゃあ、こういう勝負にしようよ！」

「ということ、何故か日菜が慧人の正面から抱き着く状態になる。」

「照れて離れようとした方の負けってことにしよう！」

「よし、乗った。……ところで、何でお前の頬紅いんだ？」

「聞いてよ！さっきおねーちゃんに頬を引つ張られたんだよ！」

「ふーん……で？お前、何を余分なこと言ったんだ」

「余分なこと言ったんじゃないよ！ちよつとからかっただけだよ！」

「じゃあ、自業自得だな。……話を戻すが間接結婚って何だよ」

「んー間接キスってあるじゃん？物を介してキスするやつ」

「ふむふむ」

「あれと一緒にだよ！あたしは慧人を介しておねーちゃんと結婚できるの！」

「なるほど……あれ？それ、俺が二股状態？」

「うーん、表面上は慧人が二股、実際はおねーちゃんが二股だね」

「複雑そうだな……でも、日本って重婚禁止だろ？」

「ふっふっふっあたしのぴかかーんな発想は、その程度じゃ崩れないよ？」

「はあ？法律で禁止……」

「こころちゃんに言えば？」

「すべて解決？」

まじか……と頭を抱えそうになる慧人。

「いや、待て。結局は俺が承認しなければいい話だろ？」

「その時は千聖ちゃんかりサちーに頼めばオールオツケー！」

「よく分かんないが……そうだな、千聖かりサ姐に頼もう」

(日菜のこのハチャメチャな考えを変えてもらうのは。うん。俺じや多分、無理だ)

「というか、俺ってどこで寝るんだ？」

とここであからさまな話題変更。これ以上話すとんでもない方向に進みそうだと思うた慧人。日菜はそれを分かってか、さっきので終わったのか。話に乗ることにした。

「え？ここじゃない？」

「紗夜さんは？」

「当然ここでしょ？」

「お前は？」

「あたしもじゃあ、混ぜてもらおう！」

「……三人か。川の字で寝るのか？」

「うーん、山の字でいいんじゃない？」

「……は？山？一本多くね？」

「慧人が真ん中で両腕を伸ばして寝る。あたしとおねーちゃんが左右で慧人の腕を枕に寝る。ほら、山の字じゃん」

「ええー」

「じゃあ、Tで。慧人が両腕を伸ばして寝る。あたしとおねーちゃんが慧人を両サイドから抱き枕にして寝る」

「待て。俺が腕を伸ばした意味あるか？」

「……触っていませんよアピール？」

「電車内の痴漢か」

「じゃあ、△！」

「却下。紗夜さんの足に頭を乗せる気も、その逆もない」

「じゃあ、エ！」

「え？それ、俺真ん中なの？」

「うん。真ん中であたしたちの下敷きになるの」

「息ができなくて死ぬわ」

「ここで死ぬなら本望……！」

「なわけあるか」

「じゃあ、コ」

「さっきと同じだろ？嫌だわ」

「じゃあ、W？」

「え？足広げるのか？」

「違う違う。慧人が真ん中でくの字になるの」

「断る」

「じゃあ、Y！」

「あー頭が真ん中になるようにするのか？」

「ううん。足の裏」

「どのみちそこまでのスペースないだろ」

「じゃあ、座標空間？」



「空間？」

「一人X軸、一人Y軸、一人Z軸」

「誰か一人直立して寝るのかよ」

「うん。じゃんけんで負けた慧人がね」

「却下」

あーでもない、こーでもないと言論を重ねること何十分……

「お風呂出ました……………二人とも？」

「はい」

「何しているんですか？」

「議論」

「……………何で議論でそんな体勢になるんですか？」

「……………喧嘩？」

「……………何で喧嘩でそんな体勢になるんですか？」

「気付いたら？」

二人が抱き合っていることに若干不機嫌になるが、互いに何にも思っていないことが分かって……

「……………はあ。日菜、お風呂空いたわよ」

「はあーい」

普通に離れる二人。未練も一切ない、サツパリとした様子である。そんな様子を見て、下心とかないことに安堵する紗夜。

「……何をしていたんですか？」

「三人でどんな風に寝るかかって言う議論をしていました。途中から立体的になって收拾が付かなかったんですよ」

「普通に川の字で寝ればいいでしょう……」

「ですよ。流石紗夜さん。同意見です」

「はあ。では、布団をひきましようか」

「そうですね。俺がやりますよ」

テキパキと敷いていく慧人。そして……

「紗夜さん？」

「………私がこうしたいだけです」

慧人がその布団の上で横になると、慧人の上で抱き着く紗夜。

「………ダメ………ですか？」

「ダメなわけではないですよ」

「………今日はおごめんなさい」

「何がでしよう？」

「帰り道に色々巻き込んでしまつて……」

「気にしていませんよ。なんだかんだで丸く収まつたので」

「それでも……慧人さんに拳を向けてしまつたりして……その」

と、慧人は人差し指を立て、彼女の口元に持つて行く。

「これ以上はダメです。俺は気にしていません。あなたも謝罪をした。それ以上に何もありませんよ」

「でも……！」

「それ以上この件について何か言うなら、騒動の原因となつたポテト。アレを禁止します」

「……………」

一瞬にして静かになる紗夜。当然だ。ポテトが出てきてしまえば、彼女も黙るしかないのだ。そして、そんな彼女の髪をそつと撫でる慧人。

静かな時間が過ぎていく。撫でられている中、紗夜はあることに気付く。

「……そういえば、慧人さんつて恥ずかしがったり、照れたりすることないですよね」

「そうですか？人並みにはしますよ」

「今だつて、こんなに抱きついているのに心音が……」

そう言つて慧人の胸に耳を当てる紗夜。ここで、紗夜はある重大なことに気付いてしまふ。

「……………え？……………心音が……………聞こえない？」

必死に耳を研ぎ澄ませる紗夜。しかし、聞こえてくるはずの音が聞こえず、鼓動を感じないのだ。

「……………気付いてしまいましたか」

「どどど、どういうことですか!？」

身体を起こし、慧人の顔を見ながら問い詰める紗夜。慧人は顔を背けながら、静かに答えた。

「……………心が……………ないんですよ」

「……………え？」

「……………俺には……………あるはずのものがありませんよ……………」

「そ……………そんな……………!」

口元を両手で押さえながら愕然とする紗夜。

そんな紗夜を見て、慧人は肩を震わせていた。

「……………け、慧人さん……………泣いて……………」

「……………!」

「笑い事じゃないですよ！だって、あなた心臓が……！」

「紗夜さん……あなたが耳を当ててたの……俺の右胸です……！」

笑いを堪えきれない慧人。そんな状態で、必死に言葉を紡ぐ。

「……っ！」

それを聞いて、慧人の左胸に耳を当てる紗夜。今度は、しつかりと彼の鼓動を感じる  
ことが出来たのだ。

安堵すると同時に、一気に恥ずかしさが込み上げてくる紗夜。顔を真っ赤にする。

「……！慧人さん！」

「あははははっ！まさか、右胸に耳を当てて心音が聞こえないなんて、そんなボケをいきなりするとは思わないじゃないですか！」

「ぼ、ボケじゃないですよ！」

「笑いを堪えるの必死だったんですよ」

「わ、笑わなくてもいいじゃないですか！」

「あはは、まあ、嘘はついていないんですけどね」

「う、うるしやい！」

なんと、このタイミングで嘔んでしまう紗夜。そして更に、肩を震わせる慧人。

「……っ！」

「そういうところも可愛くて好きですよ」

「くくくっつっ！」

慧人の胸を軽く叩きながら抵抗するも、一切痛くない慧人は紗夜に……

「紗夜さん……もつと、その恥辱にまみれた顔を見せてくださいよ」

「このドS！鬼畜！というか慧人さん！最近、よからぬ影響を受けていませんか?」

「気のせいですよ。でもまあ……まだまだこれくらいじゃ足りないですよ。この思いを満たすには」

絶対に何処かの変態女王様の影響を受けている慧人。眠れる彼の嗜虐心が徐々に表に出てきているようだ。そのまま、慧人は紗夜を抱え、身体を起こし体勢を変える。今度は紗夜が布団の上で横になり、慧人が上になる。

「……もつとやってあげましょうか?」

「……っっ！」

慧人の鋭い眼差しが紗夜を貫く。その眼は捕食者の眼だった。

「……や、やれるものなら……やってください……っ！」

慧人の背中を握る力が強くなる紗夜。その目には負けないという意志と……

「冗談ですよ。だからそんな、震えている小動物みたいに怯えなくていいですよ。あなたの嫌がることはしないので」

……ほんの少しの怯えがあった。ただまあ、そんなことを隠そうとしちゃうので……

「お、怯えてないですよ！ほ、ほらほら！あなたがやらないなら私からやりますよ！」

「くすぐり攻撃は効かないので。残念でしたね」

「うっ……こ、こうなったら……！」

かぷっ

紗夜の攻撃が慧人の首元に刺さる。

紗夜が両手を慧人の背中に回し、首元に噛みついたのである。

「……よしよし」

対して、そんな攻撃を攻撃と思っていない慧人。ゆっくりと身体を落とす、横向きになつて布団の上に。その間も腕を回し、噛みついていてる彼女をゆっくりと撫でる。

かぷっ、かぷっ、かぷっ

そんな感じで（イチヤついて？）何分か経った後……

「……………」

「どうしました？」

落ち着いた二人が、布団の上に座って向き合っていた。

「……………すみません……跡をつけるつもりはなかったんですが……」

「特に気にしていないんで、大丈夫ですよ」

「首筋にいくつもの噛み跡が……い、痛くなかったんですか？」

「痛く……あー全然大丈夫ですよ」

「うっ……と、とにかく、この噛み跡をどうにかする方法を考えなくては……！」

「このままじゃダメなんですか？」

「だ、ダメですよ！流石にそんな状態で学校とかバイトに行こうものなら、か、勘違いされちゃうじゃないですか！」

「……なるほど」

（俺が食われかけたと……いや、そんな勘違いするやついるか？）

（わ、私と慧人さんが、そんな関係だなんて……）

微妙にズレている二人。

「でも、どうしようもない気が……」

「……そうですね。すぐに消すことが無理なら隠す……が精一杯でしょうか」

「うーん……あ、絆創膏とかですか？」

「なるほど。包帯なら行けますね」

「……………ん？」

「怪我人のように見えますが……大丈夫ですか？」

「大丈夫ですけど……」



（え？包帯で隠す？絆創膏とかで隠せるんじゃないの？）

鏡を見ていないのでどういう状況か分からないが、鏡で見るのが怖くなった慧人。基本的に怖いものなしの彼ではあるが、今回の件は流石に怖くなってきた様子だ。

「つていきなり、どうしたんですか？」

そんな恐怖を感じている慧人をよそに首筋を差し出す紗夜。いきなりの行動に今度は恐怖ではなく困惑が襲ってくる。

「……私にもつけてください……その、噛み跡を……」

「はい？」

「目には目を歯には歯を、噛み跡には噛み跡を……です」

「なるほど……でも、紗夜さんも包帯で隠すんですか？」

「……………あ」

（さ、流石にそれは怪しまれますね……主に察しのいい人たちに。二人して首元に包帯を巻いているなんて……きつとごまかしきれないでしょう……うう……でも……）

「だから……」

「ひゃう……！」

考え事をしていた紗夜の首筋を軽く噛む慧人。力を込めすぎないように優しく噛み、少しした後には離れた。

「これぐらいなら跡にはならないと思うので」

「そうですね……その、もう一回して……ください」

「いいですよ……」

「あ……っ。もう少し……力を入れて……」

「こうですか……?」

「……っ！いい感じですよ……」

「(こ)も……」

「……あ……もっと……もっと……もっと……」

「何回でもしますよ。気が済むまで……ね?」

タツタツタツバントツ!

「お風呂出たよー!………ありや?もう寝ちゃったの?」

「………すう」

「全く、布団を掛けないと風邪引いちやうよ?」

風呂からやって来た日菜。部屋に戻るとそこには、両手を広げながら寝る慧人と、慧人の左腕を枕にし、抱きつきながら寝る紗夜の姿があつた。

そんな二人の姿を見つつ、布団を掛ける。

「うゝん。あたしもねよー」

ということとで、少しだけ考えた末に、電気を消し、慧人の右腕を枕に寝ることにした日菜。

「あれ? さつき、慧人の首筋がすごいことになっていたよーな……気のせいかな?」

翌日。放課後。C i R C L Eにて。

「ねえ紗夜く慧人くん、首に包帯ぐるぐるだったけど、どうしたの？」

「べ、別に何でもないですよ？」

「あははくキスマークを隠している……にしては大袈裟すぎかー」

「……………」

「…………え？嘘でしょ？包帯で隠すレベルって、どんだけ付けたの？」

「いえ、キスマークは付けてません」

「じゃあ何を…………？」

「…………噛み跡を…………少々ですかね」

「いや、少々だったら包帯で隠すことになっていないからね…………」

「……………そうですね」

「ふーん…………あ、よく見ると紗夜の首筋になんか…………」

「え!?ど、どこですか?確認しましたが噛み跡はなかったはず……」

「なるほど。お互いに、と」

「あ……」

「で?どっちからやったの?」

「……私です」

「で、昨日あの後付き合うことになったの?」

「……(ふるふる)」

「(一体、この二人はいつ付き合うんだろう……?というか、あの後何したの?)」

「(……慧人さんに噛まれたあの感じ……こう、うまくは言えないですが……癖になりそうですね……もつと強く噛まれたらどうなるんでしょう?もつと別の場所も……つてダメですダメです!そんなふしだらな関係になつてはダメです!しっかりと段階を踏んでからじゃないと……)」

V S .  
今井リサ

アタシと慧人くんが出会ったのはまだRose liaが出来る前。あこのオーディションの時だった。

「すみませーん」

アタシはベースを借りるために受付にいたスタッフに声をかける。さつき入るときは誰も居ないように見えたけど、今は男の人が一人だけ居た。……何か目を閉じているけど寝ていないよね？

「……っ！」

一瞬で怖さを感じた。

静かに開かれた目はどこか細く、目の前に居たアタシを睨みつけているように思える。彼の視線に射貫かれ、身体がまるで岩のように硬直してしまう。そんな中、立ち上がったその姿はアタシより高いもので上から見下ろされている感じがして……。

「用件は何でしょうか？」

後頭部を軽く押さえながらアタシに用件を聞いてくる。

どうしよう。この人は怒らせたらマズい……いや、もう怒っている？え？でも、アタ

シはただ声をかけたただけだし……えっと、どうすれば……

「……………」

彼は多分、不思議に思っていたただけだろう。話しかけてきて、一向に用件を言わないアタシを見て。

でも、彼に恐怖を感じていたアタシにとつては、そのただ待っているだけの彼が、早く用件を言えと催促しているように見えて……

「べ、ベースを貸して……ほしいんですけど……」

何時になく消極的な声。自分でもびっくりするほどに声が出なかった。もしかしたら、声が相手に聞こえていないかもしれない……そう思うと、何か言われるのではないかという怖さが襲ってくる。

「ベースね。少し待って下さい」

どうやら伝わっていたらしく、ベースを取って来てくれる。

「はい、こちら貸し出し用のベースです」

「あ、ありがとうございます」

受け取り軽くお礼を言つて、足早に去つて行く。アタシの中では一刻も早く立ち去りたい。その思いしかなかった。

そして、セツシヨンの後。アタシとあこが友希那と紗夜に認めてもらえて……

(うう……どうかあの人がいませんように)

ベースを返すとき、恐らく初めてこんなことを思っていた。誰に対してもある程度関わる事ができるが、彼だけは自分の中で怖いイメージが強すぎた。だから、居ないことを願ったが……

(うう……あの人しかない……)

その願いは届かずその男の人だけだった。

アタシがちよつと足を止めて、覚悟を決めている間、他の三人は特に何も思うことなく受付に向かつていった。

「冬木。次の予約を取りに来たわ」

「へーい」

「……………え?」

友希那が特に恐怖とか感じるわけでもなく、平然と彼に話しかける姿を見て驚いた。

「お? 紗夜さん。友希那さんと二人じゃなかったんですね」

「ええ。彼女たちもバンドメンバーに加わ……何で泣いている真似をしていますか?」

「性格がキツめ……失礼。理想が高いお二人に賛同してくれ、二人が認めるメンバーが現れるとは……ちよつと感動しました」



「あなた煽っていますよね？完全に。……はあ。早く仕事してください」

「はい」

「つてあれー？けー兄じゃん！どうしてここに？」

「ん？あこちゃんか。俺はバイトだよ。お前は？」

「ふっふーん！あこはね！遂に友希那さんたちのバンドのドラマーになれたんだよ！」

「おおーよかったな。アレか。友希那さんがお前が言っていた人だったか」

「うん！」

「……二人は知り合いなの？」

「そうですね……つと、この時間とかどうでしょう？」

「そうね……私は大丈夫よ」

友希那、紗夜、あこ。三人と平然と話せている彼。恐怖と言うより驚きも合わさって

……

「リサ。早くベースを返したら？」

「あ、う、うん」

そんな固まっていたアタシに友希那が声をかける。あ、あれ？も、もしかしたらそんなに怖くない人……？

「え、えつと、ベースを返却しに来ました……」

「確かに受け取りましたっつ。友希那さん。この人もバンドメンバーですか？」  
「……そうね」

「なるほど。あ、俺は冬木慧人と言います。このバイトです。よろしくお願いします」  
「い、今井リサです……」

「この人、見た目は怖そうですが中身は残念ですので警戒する必要はないですよ」  
「さ、紗夜さんの紹介が残念過ぎる……」

「そーだよ！ けー兄は頭ぶっ飛んでるけど優しいから怖がらなくていいよ！」

「あ、あこちゃんまで……」

「……冬木。とりあえず怖がらせないようにしてちょうだい」

「そんなつもりないんですけど……」

「これがアタシとの出会い。今にして思えば、慧人くんに恐怖心を抱いていたっつと思うと少し笑えてくるような……」

そして、現在。

「リサ」

壁際に立っているアタシ。慧人くんの片方の手がアタシの顔の横にあり、彼の片方の

膝が股下を通って逃げられないようにされている。俗に言う壁ドンというやつだ。

「お前は今から俺のモノだ。いいな？」

空いている手でアタシの顎を軽く上に持ち上げる。近い距離でアタシと彼の目が合う。

「はい……」

そして、その距離は段々と近づいていき……

「つて感じで、どうでしょう?」

その距離がゼロになる前に止めて、俺は彼女から離れ、ベッドに腰掛ける。

「慧人くん……余韻に浸らせて……」

「はあ……」

目を閉じて座り込んでいる彼女。何だろう。今の彼女は放置するに限る気がした。

そもそも、何であんなことをしていたか。

少し前、氷川家父親暴走ポテト事件の際にリサ姐に借りが出来た俺。昨日、LONEで『明日の午後、家に行くからよろしく☆』つて送られて家に来た彼女。そして、彼女がその借りの代償に差し出したのが、持ってきた恋愛小説にあった告白シーンの再現。……まあ、まだ健全なやつを選んだと思いますね。千聖だったら絶対に官能小説のワンシーンを再現させられそうだからな(偏見)

数分後。どこか顔が紅い彼女が隣に座ってくる。

「ん? 終わった?」

「うん、いやー流石慧人くん☆あれにはアタシも演技だつてこと忘れそうだったよ☆」  
「そりやどうも。何処かの腹黒口リ金髪ベーストに、鍛えられることもあるからな」

「凄いい……今の聞いただけでも君が指しているのが千聖つて分かる」

「まあ、間違つたことは言っていないからな」

「あはは……でもさあ、慧人くんつて緊張とかしてないよね」

「うーん、緊張しないタイプの人間なんで。リサ姐相手でも変わらなかつたということ  
で」

「むう、それはアタシに魅力がないつてこと？」

「いえ、リサ姐は魅力的だと思いますよ。優しく家庭的で、可愛いらしく。日頃、余裕が  
あるように見せて、ふいに照れたときとかはその可愛さが倍増するということか」

「……そ、そーかな」

「そうそう。そういうところですね。後は……胸がそこそこあるとこですか？」

「……慧人くん。正座ね」

「はい」

ということ即以床の上で正座する。

「でも、事実だと思うので否定はしません」

「君のそういうところは凄いいとか……呆れるというか」

「ありがとうございます」

「褒めていない」

「でも、よく考えてください。千聖とか紗夜さんよりは大きいですよ」

「……そんなに胸に興味があつたの？」

「いえ、そんなにないです」

「はあ……相変わらずペースが独特というか何というか」

頭を押さえているリサ姐。その表情は何処か呆れを感じさせる。

あ、なるほど。普段千聖と話すところくらいはデフォなんだけど、普通はこういう話をしない方がいいのか。納得納得。

「とりあえず、正座崩していいですか？」

「いいよ〜」

ということでもベッドに腰掛ける。すると……

「どうしたんですか？」

「……甘えていい？」

「どうぞで」

膝の上に頭を預けてくるリサ姐。後頭部を俺の身体の方に向けていた。

「アタシさ……多分、周りの雰囲気とかが気になっちゃう性格なんだよ」

「まあ、多分そうなんでしょうね」

「だからさ……こうやって、他人に甘えるとかさ……相手の顔色を伺ってからしか出来ないの。程度もさ、どこまでなら迷惑にならないかとか考えちゃうし」

「それでいいと思いますよ。そういう優しさがあるのがリサ姐なんですよ」

「ありがと……」

「俺は周りを考えることは少ないですからね……」

「うん。知ってる」

「安心してくださいよ。俺が迷惑って思うことはほとんどないですから」

「ふふつ、じゃあさ……ちよつと借りるね」

そう言う俺の左手を取り、そのままぎゅつと握り始めた。

「……何か嫌なことでもありましたか？」

「……ううん。そういうわけじゃないよ」

「そう……」

踏み込むことはしない。話す気がなかったり、本当に何も無いのに聞いても仕方ないと思うからだ。

少しの間の静寂……それを打ち破ったのは彼女の言葉だった。

「……………ねえ、慧人くん。アタシってさ、重い女かな」

「……………」

体重が、ということだろうか？

「うん、慧人くん。体重の話じゃないからね」

何故バレた。何故、見えていないはずなのにバレた。

「……………はあ。失礼しちゃうな〜ほんと」

「で、重いというのは、どういう意味でなんですか？」

「相手の負担になりやすい……………と言ったら分かるかな？主に恋愛とかで相手が精神的に負担だと思っっちゃう感じ」

「ほうほう……………あれ？リサ姐って彼氏いましたっけ？」

「ううん〜居たことないよ〜」

「じゃあ、なんで？そういうのって、実際起きないと分からないんじゃないんですか？」

「うーん、起きていなくてもなんとなく分かるんだ。もし、そういう相手が出来たらトコトン尽くしちゃうと思うし、それでいてこうやって甘えたくなくなったりして……………それが続くと最初は良くても段々、負担に思われるんじゃないかな……………って」

「……………なるほど。でも、それって、誰かに言われたんですか？重い女って」

「直接じゃないけど……………重そうって。考えても当てはまるどころあるな〜って……………」

「うーん……………正直、重い女ってイメージが掴み切れていないのですが、要は相手の受け取



り方も関係してくるんですよね？」

「……そうだよね。………慧人くんならさ。そういう人でも……受け入れてくれる？」

「どうでしょうね。他の人相手はよく分からないですが……」

ぽん、と彼女の頭の上に右手を置く。

「……リサ姐相手なら、きつと受け入れられる……そんな気がしますよ」

「ふふっ、そこは『きつと』とか『そんな気』じゃなくて、『絶対』とか断言して欲しかったなー」

「生憎。俺は保証できないことを断言できないんでね」

「………ありがと。少し気が楽になったよ」

「そう」

「思ったより時間経っちゃったなー」

「そうですか?」

外を見ると、気付けば日が沈みかけていた。そう思っているとりサ姐は立ち上がり大きくのびをする。

「ところで今日、ご飯はどうするの?」

「食べに行こうと思ってます」

「そうなの?」

「ええ。もしよければ、一緒に来ますか?」

「いいの？他に誰か誘っているとかじゃないの？」

「いいえ。元々、一人で行くつもりだったので」

「ふーん、じゃあ一緒に行かせてもらおうかな？」

「分かりました」

その返事を聞くと俺はあるところに電話をかける。相手は数コールの後に出了。

「もしもし、メイか？」

『メイです！慧人先輩！どうしましたか？』

「大将に伝えておいてくれ。一人連れてく」

『分かったです！あれ？もしかして、夏樹先輩ですか？』

「東雲の野郎じゃねえ。まあ、とりあえず一人増えたつて伝えといてくれ」

『任せてください！じゃ、いつてくるです！』

切れる電話。相変わらず忙しいというかなんというか……

「え？今の電話の相手って……」

「これから行く和食の店の店主の娘ですね。行く人数が増えたので報告です」

「……慧人くんって……結構謎が多いよね……」

「そうですか？とりあえず行きましようか」

ということ上で上着を羽織って階段を降りていく。

「忘れ物は大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ」

鍵をしつかりと掛けて家を出て行く。

「前々から約束していたの？」

「しばらく顔を出していなかったんで……そろそろ行っておこうかと」

「常連だったってこと？」

「うーん、隠すことでもないか……一時期、その店で厄介になったんですよ」

「厄介って……？」

「まあ、修業って言ったら聞こえはいいですかね。料理を教えてもらっていたんですよ」

「……ちよつと待つて。え？どういふこと？色々と整理できていないんだけど……」

「なんといふか……その娘、さっきの電話相手にメイつて言うんですけど。そいつと俺

に関わりが出来たんです」

「なるほど……」

「で、一時期、俺が諸事情で運動が出来なかつたことがありまして。その期間に、料理を学ぼうつて事で厄介に。まあ、店の規模が大きくなかつたのと色々あつたので修業の話はオツケーを貰い、結局高校入る前まで厄介になりましたね。……まあ、修業と言つてもほとんど雑用だつたんですけど」

思い出すな……何とかいうか……うん。ありや、大変だった。

「だからあんなに料理が上手いんだ……納得したよ。でも、そんなこと一言も……」  
「特に聞かれなかったのだから」

「いやいや……じゃあ、聞いていたら教えてくれた？」

「気次第です」

「言うと思った……全く、隠し事が多いんだよ……」

「多くないですよ。人並みです」

「関わりが出来たって言ったけど、どういう経緯で？」

「秘密です」

「なんで運動できなかったの？」

「内緒です」

「なんで料理を学ぼうって思ったの？」

「黙秘です」

「ほら、全然教えてくれないじゃん」

「リサ姐が答えにくい質問ばかりするからです」

「え？ いや、凄く答えやすいと思うんだけど？ ほら、関わりなんて、同じクラスや同じ部活……とか、友達の友達……とか、運動も怪我をして……とか」

「じゃあ、そういうことにしておきましょう」

「いやいやしておこうって……」

誰しも隠したいことの二つや二つや三つくらいあるのだ。うんうん。

「……まあ、隠したいならいいよ。話さなくて」

「それは助かりました」

「でもさあ、例えばだけどアタシとはC i R C L Eで出会ったよね？」

「間違いないです」

「友希那は？友希那もC i R C L Eだっけ？」

「正確には公園ですね。猫と戯れていた友希那さんに逃げられました」

「きつと、誰も見ていないと思ってたんだらうね。紗夜は？」

「C i R C L Eです」

「隣子は？」

「N F Oのリアルイベント。ちなみにあこちゃんもそこで出会いました」

「千聖」

「路地裏」

「ちよつと待って」

と、ストップがかけられる。何かおかしなことを言ったか？

「何でしょうか？」

「え？なんで路地裏で会うことになるの？」

「道に迷ってた花音を連れて行って、確か目にゴミが入ったとかで花音が涙を流していたんですよ」

「あーそれで千聖が勘違いしちやっただか？」

「その通りです」

あの時の警戒心マックスの千聖はどこへ消えたのだろうか？今では警戒心が緩みきっているんだけど。

「で？メイちゃんは？」

「黙秘します」

「慧人くん。流石に、今の流れで黙秘は怪しいよ？」

「言えるわけがないよな……雨の日の路地裏で東雲と拾った……なんて。いや、言つたところで信じて貰えないだろうけど……」

「……………慧人くん。今の本当？」

どうしたんだろう？何故カリサ姐が目を見開いてこちらを見てくる。え？何が起きた？

「どうしたんですか？目を見開いて」

「いや、今聞き捨てならないことが聞こえてきたんだけど!? どういう状況!? 路地裏で拾った!? 捨て猫とか捨て犬じゃないんだよ!? なにをどうしたらそうなるの!?!」

「……え? 何で……あ、もしかして口に……」

「思い切り出ていたよ!?!」

「……今のはなかったことに……」

「出来ないよ!?! 流石に出来ないよ!?!」

「……見逃してください」

「も、もしかして犯罪に手を染めた……!?! 慧人くん、まだ間に合うよ! 一緒に警察行こう!?!」

「あ、それはないので……いや、ほんと……」

この後、質問攻めにあい、何とか話せる部分だけを話した。微妙に納得してくれないところもあったが……うん。ヤバい、リサ姐相手だと何かポロツと言いそうだな……今度から気を付けよ。

「何か……まだ隠しているでしょ……」

「……そんなわけ」

「絶対にまだ何か隠しているよね!?!」

「まあまあ、もう着いたので……ね?」



「……また今度、教えてね」

「ええ。覚えていたら」

「……その顔、絶対に忘れるつもりでしょ?」

「凶星である。が、そんなことを感じさせないように店の戸を開き入っていく。」

「こんばんはー」

「いらつしやいませ! つて、冬木さんじゃないですか! 話は聞いてますよ!」

「それならよかった。席は?」

「テーブルの方で。お連れの方も大丈夫ですか?」

「大丈夫です」

「では案内しますね。……にしても冬木さん。まさかツレが女性とは思いませんでしたよ。もしかして彼女ですか?」

「ちげえよ。友人だ友人」

「まあ、そういうことにおきます。あ、席はこちらです。すぐに来ますので待っていてください」

「分かった」

というこゝで、席に上着をかけておく。座ると目の前に居るリサ姐がそわそわしていた。

「リサ姐、トイレですか？」

「違うよ！いや、何か、思ったよりもおしやれなところ……まさか、こんな洒落たところに慧人くんと二人きりで来るとは思わなくて……落ち着かないというか……」

「あー確かに、内装凝ってますからね。雰囲気も結構いい感じですよ！」

「こういうところは紗夜と来たりするの？ほら、デートの締め……」

「ないですね。あの人は大体、ファストフード店でポテトです」

「普通は絶対にこっちの方がいい……のに、紗夜相手だとなぜかそう思えない……」

「奇遇ですね。俺もです」

花より団子ならぬ花よりポテト。彼女にとってはポテトこそ嗜好であり、ポテトこそが何物にも代えがたい存在なのだ。

「……リサ姐。どうしたら紗夜さんのポテト狂いを治せますかね？」

「うーん……愛の力でなんとかするんだよ☆」

「……………」

なるほどな。つまり、打つ手なしと。もう手遅れだと。

そんな感じで頭を抱えながら待つこと数分。

「お待たせしましたす！」

「へえーこの子が……？」

(あれ……?この子って確か……慧人くんのパソコンで見た写真の……)

「ありがとなメイ」

「どういたしまして……って、慧人先輩!もしかして、この人って、Roseliaの今井リサさんですか?」

「そうだよ!知っててくれていたんだね」

「有名ですからね!あ、春野めいって言います!よろしくです!」

「うん。よろしくね!めいちゃん」

「あ、先輩!そう言えば、料理甲子園の件、どうなりました?」

「ん?あー無事、地区予選出場だ」

「流石です!」

「まあ、チームメイトは落ちたから、俺一人だけど。お前のところは?」

「ふっふっふっ、全員通過です!ふるめんばーってやつです!」

「そっか。もし、地区予選で当たったらよろしくな」

「もしじゃなくて、絶対当たります!覚悟しててください!」

「お手柔らかに頼むよ」

「全力で行きますよ!つと、メイはもう少し仕事するのでまた後で!」

「おう」

そう言うのと去つて行くメイ。

「さて、食べましようか」

「そうだね〜見るからにおいしそうだよ〜」

「いただきます」

食べ始める俺とリサ姐。

「おいしい……！凄くおいしいよ慧人くん！」

「そうですね。流石の一言に尽きますよ」

「こんなにおいしいものが食べられるなんて、慧人くんが付いてきてよかったよ」

「そう思ってもらえたなら、大将たちも喜びますよ」

「あ、そういえばさ。さっきの料理甲子園って何のこと？」

「ん？あー言つてませんでしたっけ？」

「うん。君つてこういうとき、大体何も言つてないから」

嘘だーと思つた。が、よく考えたら聞かれない限り自分から言うことねえな、つて思ひ出した。うん。つまり、言つてない。

「えーつと、少し前に花咲川で料理対決したのは覚えてます？」

「覚えてるよ〜」

「アレの本番ですね。この前……というか、ポテト事件の日の日中にその地区予選出場

を賭けた予選会が花咲川であつたんですよ。ちなみに紗夜さんは虎南高校の案内担当でした」

「あ、だから二人が一緒に居たんだね」

まさか、その後に一緒に帰っていたらあんなことに巻き込まれるなんて……思いもしなかつたなあ……。

「でも予選会って、何したの？」

「指定された料理を作つたんですよ。で、その料理の味、見た目、調理中の器具の使い方などの観点から点数が出されて、それが基準に満たなければ落ち、満たせば地区予選出場です」

「へえーあれ？めいちゃんがかつき、フルメンバーって言つてたけどチーム戦？」

「そうですね。主要メンバー三人、補欠二人の計五人です。うちの地区は予選会を通つたメンバーのみが、地区予選に出場できるのですが……ウチの高校は俺しか通らなかつたので……」

「え？大丈夫なの？」

「はい。あくまで、人数が多い方が有利ですが、一人でも地区予選は戦えるので」

「なるほどね、必ず当たるって言つてたけど総当たりとか？」

「いいえ、トーナメントです。まあ、メイは俺が負けるとも、自分たちが負けるとも思つ

ていないんで、あの言い方をしたと」

「期待されているじゃん♪」

「プレッシャーですよ」

「その割には楽しそうな顔しているよ☆」

理論上はそうだ。二つのチームが負けなければ、確実に決勝までのどこかで当たる。

……やれやれ、あつさり負けるのはダサすぎるよな。

そんなこんなで話も弾み、料理もほとんどなくなつた頃。

「先輩！時間大丈夫ですか？」

「ああ。じゃあ、リサ姐。ちよつとメイと話していて下さい。俺は少し席を外します」

「オツケー。じゃあ、めいちゃん。アタシと話そっか」

「はいですー！」

というわけで席を立ち、大将の下へ向かう。やれやれ、今回はどんな話を聞かされるやら。

帰り道。

大将とは軽い雑談を交えていつも通り話していた。話し終わって戻るとリサ姐に懐くメイが居て……流石リサ姐。その姿には流石としか言い様がない。

「うーん、やっぱり自分の分くらい払うよ！いくらだった？」

「気にしなくていいですよ」

「うう……だって、話は聞いてもらったし……こうやってご飯に連れて行ってもらうその上お金も……何だか受けてばかりで申し訳ないよ」

「偶にはそういう日があってもいいじゃないですか」

「でもでも……」

「じゃあ、こうしましょう。あなたの夕食の分の対価として、俺の話を聞く」

「え？そんなことで……うん。分かった。何でも話して」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………で、何を話しましょう？」

「……………」

するとリサ姐がこけかけた。と言っても、話すこと……何かあったか？

「知らないよ！何か話したいことがあったんじゃないの!？」

「いや、特にないですね」

「じゃあ、何で夕食の分の対価として、とか言ったの!？」

「リサ姐が強情だったの。そう言えば納得するかなって」

「くう……じゃあ、何か質問とか！それか普段言えないお願いをするとか!」

「言えないお願い？例えば？」



「ええっ!? た、例えぼって……それは………む、胸を触りたい……とか?」

「あ、そういうのは間に合っているので。無理しなくていいですよ?」

「あ、そうなの……別に無理していな………ん? 慧人くんや? 間に合っているというのはどういう意味だね?」

「ふむ……質問ですか……」

「ねえ、質問しているんだけど? どういうことか、お姉さんに話してほしいんだけど? 詳しく教えてほしいんだけど?」

耳を引つ張られている……が、言えないなあ。その手のことは金髪ド変態がよく提案してくるってことはな。アイツの場合、もっとお願いがハードなんだよな……

「ああ、思い付きました」

「聞いている? 君はまず、アタシの質問に答えてほしいんだけど?」

「リサ姐って、人の過去とか気になります?」

「無視したね? ……うーん、人の過去か……赤の他人はそんなに興味ないかな」

「そうですか」

「あ、でも親しい友人とか、いかにも何かありそうな友達とか、す……好きな人とかは興味あるかな」

「なるほど……」

「だから、慧人くんの過去も……興味あるかな」

「……………」

千聖もだが……やっぱり、何かありそうって思われやすいのか……はあ。俺は平凡になりたいのにな……

「……………リサ姐って、人のことどう見えてます?」

「へ?人って……え?普通に人だけど……」

「昔、俺には人なんて見えてなかったんですよ。人も動物も虫も植物も機械も道具も何も何も変わらない。全てが俺にとつては同じに見えた。違うのは勝手に動くか動かないか。音を出すか出さないかくらいです」

「……………どういう……こと?」

「例えるならそうですね……道端に落ちている物と一緒にです。視界に入ったとしても、余程異質でない限り、スルーされ、すぐさま記憶から消えていく。人間……近所の大人や学生、通っていた学校の同級生、先輩、後輩、担任をはじめとした教師……全て同じ認識でした。風で舞うビニール袋のように、ただ動き、ただ音を立てている存在。俺の記憶に一切残らない、その程度の存在」

「……………」

「だから俺は小学校での担任やクラスメートは名前も顔も出てこない。行事的なことも

ほとんど覚えていない。写真を見せられようと思ひ出せない。そして、中学校のある一件で変わるまでで、関わった人間は片手で数えられる程度しか記憶していない。覚えていない……ただ一つだけ覚えているのは、周りが俺を………いえ、この先はやめておきましょうか」

「……………」

こけかけるリサ姐。手を取って支えようと、その顔は……

「幻滅しました？」

「…………いや、そこでそのひきはないでしょ？」

何というか、見ていたテレビがいいところでCMに入ってしまったような、え？そこで？という感じだった。

「残念ながら、もう目の前にはあなたの家がありますので。時間切れです」

「うう……じゃあ、最後に聞かせて」

「どうぞ」

「慧人くんにとってアタシはどう見えているの？」

「友人ですかね。少なくとも、記憶に残っていない……なんてことはないですよ」

「そう……」

「じゃあ、俺からも。リサ姐って、自分が持っていないモノを他人が持っていたら欲しい

と思いますか?」

「へ? そりゃあ、それを見て欲しいものだったら欲しいかな」

「そうですか。じゃあ、学校であなた一人だけが持つていないモノだったら? 他の人は全員持つていて、あなただけが持つていないモノだとしたら?」

「うーん、そこまでスケールが大きいと欲しいかも……だって、自分だけないし……」

「それがたとえ………いえ、何でもありません」

「いや、何でもなくはないでしょ!? さっきから歯切れが悪すぎるよ!」

「さっきまでのことは忘れてください。全て、場を繋ぐための軽いジョークですので」

「………え?」

「では、おやすみなさい」

そう言うのと俺は振り返って去って行く。戸惑う彼女を置き去りにして。

(何を言っているの……? あんなに凍えるような……冷たい感じで話しておいて……軽い冗談なわけないでしょ……? でも……どうして……? 君は一体……何を隠しているの?)

少し話し過ぎたか? でもまあ、嘘はついていない。

だって、あの頃の俺にとって、周りがそう見えていたのは事実なんだから。

そして、周りの人間が当たり前のように持つているモノが、俺にないのも事実だから。

## 短編詰め

もし音楽の力⇨戦闘力になる世界だったら

「りんりん、けー兄。もしさ、音楽の力⇨戦闘力になる世界があつたらどう思う?」

「クソ。ふざけてる。そんな世界を作った神は頭飛んでる」

「あはは……うーん。そうだね……私たち *Rose* *lilia* はきつと、普通の人より強そうだね……そしてけいさんは………うん」

「戦闘力ゼロですね。いや、寧ろマイナスかも」

「まいなす? ということはけー兄が守りたくなる存在に……う?」

「ゲームでいうお姫様ポジション……かな?」

「なるほど! 魔王の手に渡りかけた時に、紗夜さんが立ちはだかつて『慧人さんに手を出すものは私が許さない!』ってカツコよく魔王に宣言するんだよ!」

『慧人さん、心配しないで。私たちが必ず守るから』って言って、紗夜さんの両側に私たちも並ぶんだね……」

「うわあ……守られる側とか正直似合わねえ……」

「だよね! けー兄って大体守る側だもんね!」

「正確には……すべてを破壊する側な気が……」

「否定できねえ……まあ、もしそんな世界があつたらよろしくな」

「任せてよ！りんりんもけー兄も、何か起きたらあこが守ってあげる！」

「それはたくましいね……あこちゃん」

「普段は心配するな。何かあつてもなんとかするから」

「あこだつてカツコよく解決できるもん！」

「けいさんの場合は……カツコよくというか……何というか……」

「へいへい。とりあえず、クエスト行くぞ」

「おー！」

「そうですね」

この後、三人はNFOのイベントクエスト攻略に行った。

メンヘラ（？） 紗夜さん

「慧人さん……どうして私じゃダメなんですか？」

「いえ、コレには特に深いわけはないんですけど……NFOの周回ですし」

「そんなに私以外の人がいいんですか？私じゃダメなんですか？」

「まあ、向こうから誘ってきただけなんで……」

「私はずっと待つていたのに……何で私以外の誘いに乗っちゃったんですか……？」

「その……はい。すいません。今度は紗夜さんも誘いますから……」

「紗夜さんも？」

「紗夜さんをですね。はい」

「それならいいんです……慧人さん。私には慧人さんしかいないんです。慧人さんしかないんですよ」

「紗夜さん……！」

「例外としてポテトとギターと日菜とNFOとRoseliaとお菓子作り等々がありますが、慧人さんしかいないんです」

「紗夜さん……例外が多すぎて悲しくなってきました」

この後、慧人はNFOのイベント周回に紗夜を誘った。

にらめっこ V.S. 紗夜

「慧人さんってあんまり笑わないですよね」

「そうですか？」

「ええ。人を陥れている時くらいしか笑わないかと」

「ひでえです。俺も普通に笑いますよ」

「例えば？」

「……人が断末魔をあげているとき？」

「それはアウトです」

「……ふむ。難しいですね」

「そうですね……では、にらめっこをしましょう」

「……そこまでして笑わせたいですか？」

「ええ。とにかく、行きますよ」

（と、言われたが生憎。俺は相手を泣かせることは出来ても、笑わせることは出来ない。さてどうしたものか……）



「紗夜さん。改めて見ても可愛らしいですね」

「なっ……!」

(な、なるほど……そういう作戦ですか。人は嬉しいと感じると口角を緩ませる……つまり、相手を褒めて自然と笑顔にさせる作戦!ならば、こちらも……!)

「そ、そんな……慧人さんはとても格好いいですよ」

「いえいえ。そんなことないですよ」

「目も真つ直ぐ一点の曇りもなく……」

「紗夜さんの目も凄く綺麗ですよ」

「私なんて……」

「そういう紗夜さんの謙虚な所も好きですよ」

「慧人さんの率直に物を言える所も好きです」

「照れて頬を紅くしているところも可愛らしくて好きですよ」

「そうやってたくさんいいところを見つけてくれることも好きです」

((一)) 一体、この二人は何をしているんだらうか……((一))

この後、紗夜が恥ずかしさのあまり慧人の胸に抱きついたため、お互いの顔が見れないという事態に陥った。結局、勝負は引き分けとなった。

にらめっこ V.S. 千聖

「慧人。にらめっこをしましょう」

「はあ？嫌だよ」

「あら？負けるのが怖いかしら？」

「いや、何でやらないといけないんだよ」

「そうね。あなたは嗜虐的な笑みを浮かべることがあっても、純粋な笑みを浮かべることがないから……かしら」

「ひでえ。紗夜さんにも言われたけどマジで悲しいです」

「ということでもやりましょうか」

「はあ……」

（ふふつ、変顔をして笑わせるのは三流。一流のドSがやることは……）

（さてさて、どうしたものか……ぶつちやけめんどくせえ）

「慧人。命令よ。笑いなさい。さもなければ、あなたの秘密を紗夜ちゃんにバラすわ」

「……………」

(さあ、どうくるかしら)

(なるほど……それだったら)

「千聖」

「何かしら？もしかして、私を脅そうとしている？それは残念ね。どんな脅しにも屈しないわ」

「笑わなければ、お前を襲う」

「それって、性的な意味で？」

「もちろん」

「……………」↑喜びのあまり笑顔になる千聖。

「……………」(スツ)↑呆れながら鏡を指さす慧人。

「……………」↑自分が笑顔になっていることに絶望する千聖。  
!?!」

「……………」(フツ)↑勝利を収めて、敗者を鼻で笑う慧人。

この後、二人は第二回戦を行った。

「こいつが魔王です」

「「うーん……？」」

「どうしたんですか？三人して考え事ですか？」

「けいさん……いえ、今回のNFOのイベントが中々攻略できなくて困っていたんです」「イベント？ああ、確か……犯人を見つけるやつでしたっけ？」

「ええ。舞台はある街。そこには、魔王の手先が侵入したと情報が入った。手先は一人だけ。しかし、その街の住民になりすましている……」

「で、その手先を捕まえるか倒さないといけないんだよね……しかも、街全体がフィードと同じ判定。自分たちが時間をかけすぎるとその手先に奇襲されちゃうし……」

「また、ヘイト要素で、街の人々に不快な思いをさせってしまうと、段々と情報が入らなくなったり、噂だと攻撃されたり、本当に酷い場合ボス級レベルのNPCが討伐に来るか……まあ、最後のは本当に噂なんですけどね。だから、推理力とか情報収集力、運なんかも絡んできて……」

「まだ一度も倒せていません。しかも、クエストを受注する度、人々の構成や、街の構造、偽装する相手の種類を変えてくるので……」

「初心者やソロでも挑戦できるのに、長年やって来た猛者のパーティーでも攻略出来るとは限らない……だから、まだ噂だと数パーティー、ソロだと片手で数えるほどしか攻略できていないのかなんとか……やはり、今までにないような形式のクエストである以上、どうしても攻略に時間がかかっていますね」

「あーあれなら、攻略しましたよ」

「そうなんですよ。あのけいさんでも攻略出来ない……ええっ!? 攻略したんですか!」

「もちろんです。三回目くらいで、初めて攻略して、その後は軽く周回できるほどに。何なら俺の仲間内で、クエスト攻略のタイムアタックに挑戦しています」

「な、何度も攻略出来るとは……! それは一体どんな攻略法なんですか?」

「簡単ですよ。街の人全員皆殺しにすればいいんで」

「……? あなたは何を言っているんですか?」

「だって、その街から全員居なくなれば、手先も居なくなるんでしょ?」

「……………」

「(そういえば、この人は頭おかしかつたんだ……!)(」

「あーでも、一回あったのはアレですよ。ヘイト値って溜めすぎると、凄腕の冒険者のなのがプレイヤーを倒そうとするんですよね〜いやあ。そいつら、どんどん湧くし、地味

に強いからウザいんですけど、ずっと戦っていると、魔王の手先が現れて『加勢しよう』って感じで仲間になってくれたんですよ。うんうん。あの時は熱かった。背中は預けたって感じで、迫り来る精鋭部隊を虐殺していくんで……」

「ねえ、りんりん。紗夜さん。けー兄が手先でいいんじゃないの?」

「うん。いいと思うよ」

「いえ、少し待ってください。この話にもオチがあるはずですよ」

「オチですか? オチは、全ての敵を倒した後、ボロボロの手先と固い握手を交わして、油断したところをスキルでぶちのめして、クエストクリアですね」

「あ、違うね。けー兄が魔王だね」

「ちなみに仲間内での最速記録は、先輩が初手街全体を爆破で2秒です。俺はまだ街を破壊し尽くして2分ですかね」

「……………私たちは普通に攻略していきましよう」

「そうですね…………」

ババ抜き リベンジ

CIRCLEにて。

「慧人さん。ババ抜きのリベンジです」

「はあ……え？二人ですか？他の人は？」

「居ません。これは私とあなたの真剣勝負です」

「なるほど……サシでやろうと。……え？ババ抜きを二人でやるんですか？」

「私が勝ったら、慧人さんは明日、勉強漬けです」

「……俺が勝ったら？」

「……？」

「……え？何も考えていないんですか？」

「さ、最初から自分が負けることを考える人は居ないです。まあ、もし慧人さんが勝ったら私に一つだけ何でも命令できる権利をあげましょう」

「へー……ん？何でも？」

「で、でも！え、エツチな命令はいいです……あ、い、いいわけないですからね！ダメですからね！絶対にダメですよ！」

「へーい。まあ、それなりの命令にしておきますね。うーん、どうしようかな……」

「分かりました……ってなんで私が負ける前提なんですか！私が勝ちますからね！」  
数分後。

「こつちです！」↑紗夜。ババを引く。残り二枚。

「外れです」↑慧人。ババを引かれる。残り一枚。

「ふ、ふふつ。慧人さん。どつちか分かりますか」↑シャツフルして差し出す。

（この反応……ババは右側だな。確実に）

（う……この顔はバレている……？じゃ、じゃあ……！）

「け、慧人さん。心理戦をしましょう」

「……いや、今していると思うんですけど？」

「私のことが嫌いなら、慧人さんから見て左側を。私のことが好きなら、慧人さんから見て右側を取ってください」

「はい」↑速攻で右側を引いた慧人。

「あつ……」↑自分でやっておいて照れる紗夜。

「はい、紗夜さん。紗夜さんから見て右側がババですよ」

「なるほど。ありがとうございます」↑左側を引く紗夜。

「……」↑平然と嘘をついた慧人。

「騙しましたね!?ええつと、私と一緒に居たいなら、慧人さんから見て左側。私と居たく



ないなら、慧人さんから見て右側を」

「はい」↑速攻で左側を引いた慧人。

「あつ……」↑更に照れる紗夜。

((((こいつらは何しているんだ……)))

この後、十数回の攻防の末、Roseliaの面々が来ていたことに気付き、練習を始めることになったため、勝負は引き分けとなった。

慧人。好感度が見えるようになる。

「好感度に見える眼鏡？弦巻家の試作品？」

「はい。—100〜100までの数字で表れるはずですよ」

「なるほど。黒服さんは……10？」

「嫌いな場合はマイナス。好きな場合はプラス。ただ、±30くらいは普通とか他人とかその程度のレベルですよ」

「30を超える？」

「友達として好きとか、恋愛対象として好きとか、細かくはアレですが、数字が高いほどあなたを好きと言うことですね」

「ふうーん。まあ、適当にかけてみますわ」

「お願いします」

しばらく歩き、CIRCLEに到着。

（なるほど。すれ違うやつは基本的に0……そもそも知らないレベルとか興味ない。後は目つきで怖そうと思われ下がる程度。でもまあ、上も下もそこそこの数値はあれど30は超えないし、下回らないか……）

「あれー？眼鏡かけてるんだね」

「本当だ……似合ってますよ……」

（あこちゃん79……りんさんは86……ふむふむ）

「まあ色々とな。それにしても今日は早いな」

「うん！早く練習するんだ！」

「スタジオはもう空いてるよ」

「じゃあ、行ってきますね……」

（なるほど……ん？でもマックス100だから相当高いんじゃ……）

数分後。

「冬木。スタジオは空いてる？」

「やつほー。あれ？眼鏡かけてるの？」

「まあな」

（友希那さんは70……ん？リサ姐94って……なんか高くね？）

「似合ってるじゃん☆」

「ありがとうございます。スタジオは空いてますよ」

「そう。ありがとう」

「じゃ、いつてくるね〜」

（90越えて相当じゃ……まあいつか）

数十秒後。

「こんにちは慧人さん」

「こんにちは紗夜さん」

「今日は眼鏡をしているんですね。中々似合ってますよ」

「……ん？」

「どうしましたか？」

（100？……いや、どんどん上がっていくんだけど……え？計測不能って出てきてい

るんだけど？マジ？)

「あ、いえ。何でもないです」

「そうですか？ではこれで」

(ふむ……壊れたのか?)

この後、眼鏡を返したが黒服さん曰く、数値が高すぎて壊れたようだ。

ポテトゲーム(二人が付き合ってる前提)

「ポテトゲームをやりましょう」

「待ってください。ポテトゲームって何ですか？」

「え？知らないんですか？常識ですよ」

「ポツキーゲームは知ってますがポテトゲームは初耳です。何ですか？ジャガイモの皮をむいたときの切れなかつた長さでも競うんですか？」

「それは皮むき大会です。いいですか？一本のフライドポテトを両端からお互いに食べ

ていくんです。先に口を離した方の負けです」

「……それ、ポツキーゲームですよね？」

「ポテトゲームです。ちなみに、ポテトが折れても負けです」

（……フライドポテトって折れるのか？）

「ちなみに私は無敗です」

「……誰かとやったことあるんですか？」

「いいえ。初めてやるので無敗です（どやあ）」

「…………はあ。やりましょうか」

と、そんな感じでお互いに向き合って、両端を啜える。普通なら、恥じらいとかあるのだろうか……

「……（もぐもぐ）」

「……（可愛い）」

「……（もぐもぐ）」

「……（普通に可愛い）」

「……（もぐもぐ）」

「……（凄く可愛い）」

紗夜は目の前のポテトを食べることに必死。慧人はそんな紗夜を可愛く想いながら

食べるため、二人に恥じらいはなかった。

そしてポツキーと違いフライドポテトが簡単に折れるはずもないので……

「……………んんっ!?!」

「……………んん」

二人の唇は重なるのだった。そして、十数秒の後、二人の唇は離れ、そこには透明な糸のようなものが……

「紗夜さん?あなたどこまで強欲なんですか?」

「あれ?この勝負って多く食べた方が勝ちなのでは?」

「勝手にルールを追加しないでください。それに、そうだとしても人の口の中のポテトまで奪おうとしますか?普通」

「慧人さんのですからね。ただ、慧人さんの口の中、ポテトの味がしましたよ?」

「でしょうね。おそらく、あなたの口の中もポテトの味がするはずですよ」

「……………むう。ルール上は引き分けですか……………慧人さん」

「何でしょう?」

「絶対に負けませんからね」

(絶対に何かがおかしいと思うのは俺だけか?)

ちなみに、何十戦としたが勝敗は付かなかった。

勝負が付かなかつたので別の勝負に切り替えたが……その後のことはご想像にお任せします。

## 崩壊寸前のCIRCLE

「あっ……………」

「……………」

「そこ……………！そこがいいの……………！」

「……………」

「冬木くん……………もつと……………もつと来て……………！」

「……………」



「ああああああああああああああ!!?! いったつ!!? ちよつと冬木くん!? 無茶苦茶痛いんだけ……ああああああああああつ!!?」

「はい。さつきから耳障りなんで黙らせようかと」

「酷くない!? 耳障りって酷くない!?!」

「相変わらずうるさいなあー」

「痛いんだよ!?! 無茶苦茶痛いんだよ!?!」

C i R C L E のスタツフルームにて。まりなさんと二人きりになっていた俺は、まりなさんの頼みで何故かマツサージ的な何かをすることになった。

「もう。男子高校生にちよつとサービスしてあげようっと思う、優しいお姉さんの気持ち分からないのかな?」

「分からないです。後、そういうのは間に合っているので」

「ああああああっ!? 分かった! 分かったから!? 一回話し合おう!? ねえ話し合おう!」

「あはは、何言ってるんですか? ……こっからが本番ですよ」

「……え?」

「さあ、もつと悲鳴を聞かせてください」

「……あ」

とまあ、悲鳴を聞きながら現状確認と行こうか。

「待つて待つて!? 現状は私がパワハラを受けているんだけど!? 物理的なパワーにやられて  
いるんだけど!」

「興味ねえです」

「興味を持つとか持たないとかの話じゃないよ!」

C i R C L Eは現在、崩壊寸前である。老朽化が激しいため、所々ヒビが入っていたりしているのだ。ただ、年末でここを締めるという方針以上、補修工事の為に人を雇うことができず、結果、主にまりなさんが建物の補修を毎日のように行っているのだ。

「今崩壊寸前なのは私の身体だよ!」

「まりなさん。うるさい」

「君のせいだよおおおおおああああああっ!」

ちなみに、バイトは俺以外もう残っていない。まあ、後せいぜい二週間あるかないか



「うう……冬木さんに酷いことされた……」

「アンタが労ってだの、ついでにマツサージとかしてだのぐだぐだ言うからです」

「……どうせ、紗夜ちゃんが同じ状況だったらもつと優しくしたでしょ……?」

「当たり前です。比べないでください。失礼ですよ?」

「失礼なのは君の態度だよ!一応私上司だよ上司!」

「……はっ」

「鼻で笑いやがって……目上は敬いなさい!」

「へいへい。年増恋人なしパワハラ上司さんさーせんでした」

「あああああつ!?君今言ってはいけないこと言っただね!?年増ってまだ(ピー) 歳だよ

(ピー) 歳!年増じゃなくて年上なの!?というか恋人なしって……!」

『ソフトクリームください！』

「んじや、注文入ったんで行ってきますわ」

「そうね……って話は終わってないの!? 後降りるときは梯子を使いなさい!」

と、C i R C L Eの屋根上の部分から飛び降りて、併設されているカフェに移動する。今日はC i R C L Eによく通う五バンドの多くの面々が客として来てくれているのはいいのだが、生憎カフェ側で働く(数少ない)人たちは休み。だから今日はC i R C L Eの運営、補修、併設されているカフェの運営を俺とまりなさんで行うしかないのだ。

「へーい、ソフトクリーム二つお待ちどうさまー」

「あれ〜? 慧人じゃん。さっきまで屋根上に居たのに」

「一瞬で移動したの? 凄いねけーくん!」

「まあ、人手不足だからな。んじや、ごゆっくりー」

というわけで、日菜とはぐみにソフトクリームを渡すと、ジャンプして壁を蹴ったりしてC i R C L Eの屋根上に……行きたいところなのだが、それをやるとC i R C L Eが崩壊するって言われたので、渋々梯子で登ることに。

「ねえ、立場おかしくない? なんで私はずっと補修工事をして、君がカフェの運営をしているの?」

「まりなさんだとここから降りるの時間かかるから」

「違うよ!? 君が毎回飛び降りるから速いだけだよ!」

「じゃあ、まりなさんも飛び降りれば?」

「無理だよ!?! 間違いなく着地と共に救急車を呼ばれて搬送されるよ」

「あー……歳ですか」

「違う! こればかりは冬木くんがおかしい!」

『すみませーん』

「へーい」

「ちよつ、飛び降りるのは(私の)心臓に悪いからやめ……」

再び声が聞こえたので飛び降りてカフェの方に移動する。まりなさんからの忠告は最後まで聞こえなかったので無視の方向で。

「沙綾か。どうした?」

「あ、慧人さん。実はかくかくしかじかで」

「なるほど。かくかくしかじかか」

「うん。かくかくしかじか」

「かくかくしかじか」

「……………」

「……………」

(この人。絶対に伝わってないな)

どうしよう。かくかくしかじかで伝わらなかった。

「えーつと、私たちもカフエの運営を手伝いましょうか?」

「あ、マジで? 助かるわ」

「うん。大船に乗ったつもりで居てくださいよ、慧人先輩」

「……………」

後ろからたえが胸に拳を当て、任せろ的な感じを出しているが…………うん。

「沙綾。たえの制御は頼んだぞ。あいつに任せたら船が沈む」

「あはは…………どっちかというと、迷子になって帰れなくなるんじゃないかな?」

「確かに…………言えてるな。とりあえず、まりなさん呼んでくるから手伝ってくれるやつをカフエの前に集めておいてくれ」

「了解です」

ということとで、壁キックしてC i R C L Eの屋根上へ。

「ちよつと!? それやったらC i R C L E崩壊するって言ったよね!」

「問題ないです。綺麗に着地したので」

「確かに、音もほとんど立てず静かな感じで…………じゃないよ!? というか、よく跳躍してこいこいこれたね!」

「そんなことよりまりなさん。実はかくかくしかじかで……」

「ええ!?!皆がカフェの運営の手伝いしてくれるって!?!嬉しい!ちよつと行ってくるね!」

「……………」

え?なんでかくかくしかじかで伝わったの?普通の人はかくかくしかじかで伝わるの?マジで?マジで言ってる?

「……………まあいつか、なんでも」

そう思いながらハンマー片手にトントンとする。改めて思うけど、本当に補修なんだよな。いつそのこと、弦巻家に頼んで、ここを全部崩壊させてから直しても一緒じゃね?というか、それならCiRCLE閉める必要なくね?……………あれ?もしかして解決?

そう思っているとまりなさんが帰ってきた。

「いや、皆いい子たちだよね」

「まあ、人手が増えるに超したことはないですし」

「うんうん。こつちは流石に危ないけど、カフェなら何とかなりそうだし」

「そうですね。だからこつちは命知らずな二人に任せろって感じですね」

「そうそう……………って違うよ!別に私命知らずじゃないからね!」



「そうなんですか?」

「そうだよ!危ないことは大人に任せろってことだよ!」

「あ、じゃあ、俺。まだ高校生なんで下に行ってきますね」

「待つて待つて!?!君はバイトだから!お金出ているからこっちな!」

「これがブラック上司まりな……」

「なんでブラックなの企業じゃなくて私なの!?!」

「ほらまりなさん。手が止まってますよ?そんなんじや、給料出せませんよ?」

「一番ブラックなの君だよ!」

青空の下、太陽に照らされながら、ブーブー言う上司の戯言と、トントんと響く音を聞く。下を見ると、知り合いの女子たちが自分たちの仕事を手伝ってくれている。

「ああ、なんて贅沢なんだろうか」

ゴンッ

「ああああああっ!?!またやったね!?!また破壊したね!?!」

「あ、やつべ。力加減間違えた」

「なんで君はそんなに容易く破壊できるのかな!?!」

「……才能……ですかね」

「今すぐそんな才能捨ててきて!」

「捨てられたら苦労しないですね。あはは」

「笑い事じゃないよ！」

「冬木くんや。なんでこうなったんだらうねえ？」

「まりなさんや。それは弦巻の所のお嬢さんが原因だよ」

「ほうほう。確かにそうだったねえ。あ、チエーンソー使うから気を付けてね」

「彼女の行動力には驚かされるねえ。あ、了解です」

彼女たちが手伝ってくれたことで下のカフェは大繁盛している。それはいいのだが、気付けばカフェがミッシェル一色に染まっていた。

カフェの店員のエプロンに始まり、カフェメニュー、剩え裝飾までもがミッシェル一色である。ちなみに、美咲は何故かミッシェルのエプロンではなく、ミッシェルそのものになってさらにエプロンをしているが……まあ、お疲れ。

で、問題はそこではない。確かに、この短時間でもうすべてが変わった気がするがそこではない。何故か、ミッシェルの顔の巨大アドバルーンが、ここC i R C L Eの上に浮かんでいるのだ。

「いつ作ったんだろう……こんな馬鹿デカいもの」

「そこは……ほら。弦巻家の力とかなんとかじゃない？」

「そうだな。というか、それを取り付けるという作業まで追加されたんですけど、その分給料でますか？」

「うーん……慧人くん。こんないい眺めなのに、お金のことを考えていたらもったいないよ」

「じゃあ、後でまりなさんの懐から出してもらいますね」

「そ、そんなあ……」

愕然とするまりなさん。

ブチッ

「……………あ」

その拍子に手に持っていたチェンソーが少し下がり、そのまま一本の紐を切る。

そう、それは絶対に斬ってはいけない紐で……

「チェンソーを止めろ！」

アドバルーンを支えていた紐が切れたことにより迫り来る超巨大ミッシェルの顔。

こういうのって、空に舞い上がっていくと思っただが案外そうでもないらしいな。

「に、逃げないと潰されちゃうよ!」

「逃げる余裕も場所もねえよ!」

迫り来るアドバルーンに対し手を向ける……っ!

「……………予想より重いな……………!もつと軽いの想像していたんだけど……………!」

おかしいな……………!俺の記憶が正しければもつと軽いはず……………!そうか、弦巻家の特注だからか。きつと丈夫にするために材質にも拘ったのだろう。それなら納得だ。

「ただ……………!これくらいなら片手でどうにかなる……………!まりなさん!コイツを何処に置

けばいい！」

「と、とりあえず下に降ろそう！」

「オーケー、お前ら！そこだよ！まりなさん！他の紐も切つて！」

すると俺が何をするか察した彼女たち。急いで客をある程度避難させてくれる。

まりなさんも了承してくれ、全部の紐を切ってくれる。そして……

ドンッ！

「あは、あはは……相変わらず規格外だな……」

「あの巨大なアドバルーンを片手で掴んでますよ……しかも割らずに」

「躊躇なく跳んだね……一歩間違えれば大惨事だよ……」

「素晴らしいわ！流石ね慧人！」

「うんうん！あの行動力は凄いね！」

半分くらいの（まともな）女子たちからは苦笑い、残りの女子たちからは、純粹にコイツすげー的な目で見られている。なんというか……こういうのも悪くないな。うん。

なお、この後。紗夜さんが召喚され、お小言をもらうことになったが……うん。今回は、俺は悪いことをしていないと思うので許してほしかったです。え？そもそも飛び降りたことが問題だつて？あはは……

しかし、この時の俺は知らなかった。

こんなお小言が可愛く思えるレベルで……

紗夜さんをガチでキレさせることになるなんて……

## ガチャ爆死

ガチャ。そう、それは多くのスマホゲームに存在しているもの。時にはゲームのキャラクターが、時にはゲームのアイテム。カードゲームだと、デッキを作るためのカードを手に入れる手段の一つだろう。

ガチャには大抵、ゲームで手に入る貴重なアイテムが必要で、課金勢と呼ばれる人たちはそれをリアルマネーで購入し、何回もガチャを回し欲しいキャラ、アイテムなどを手に入れるだろう。しかし、俺のような高校生を始め、財力がそこまでなかったり、ゲームに課金をする気がないなど、多くの事情や思惑で課金をしない、無課金勢にとってガチャを引くためのアイテムは貴重である。

「慧人。入るわよ」

話は少し変わるが、ガチャにもいくつか種類がある。常に引けるような恒常ガチャ。ある一定の期間しか引けない期間限定ガチャ。課金者のみが引けるガチャなどなど、ゲームによって様々な種類のガチャが用意されている。

この中でもコラボ限定ガチャというのはとてつもなく大きな意味を持つと俺は考えている。コラボ、あるゲームと別のゲームやアニメなどの作品が交わるという一つの

ビックイイベント。コラボイベントはゲームによってやり方は変わるが、そのゲームが一気に盛り上がる機会の一つだろう。実際、コラボ先のゲームをやったことはなくても、コラボしている作品が好きだったり、知っている作品だと、そのゲームに興味を持つ機会の一つとなるからだ。

「どうしたの？ スマホを持って……考え事かしら？」

コラボ限定ガチャの話に戻るが、大きなポイントは他のガチャと比べ、復刻率の低さだろう。ゼロに近い……そう言っても過言ではない。つまり、入手できなければ、未来で入手出来る可能性は極端に低いのだ。

「すごい真面目な顔……もしかして、どんなエロ動画を見ようか迷っているのかしら？」  
「おいド変態。なんでそうなる？」

「だって、私が入ってきたのを無視してたし、それぐらいの考え事なんですよ？ だったらもう、何を今日のおカズにするか考えているしかないじゃない」

「それはテメエだけだろ」

「安心して頂戴。私はそんなこと考えたことないわ」

「そうかよ」

「だって……あなたが居るから……」

「……………」



絶対に踏み込みたくない領域が目の前に広がっている件について。何だろう。地雷かな？地雷だな。

「はあ……いいか？こっちは真面目に考えているんだよ」

「ふーん。何を？」

「この世の摂理を」

「なるほど。何故人は（ピーー）したくなるのかね。簡単よ。私と（ピーー）すればその答えはすぐに見つかるわ」

「やめてくれ？マジでなんでお前と話すとそうなるの？」

目の前で服を脱ぎ出そうとするド変態の手を押さえながら話を進めよう。

だからこそ、特にコラボされている作品が好きなの作品だったり、コラボ衣装を着ているキャラが好きだったりすると、このガチャは引くしかないのだ。

で、今回。俺は先輩に勧められ始めたゲーム……『ガルパ』や『バンドリ』と言われる音ゲー。そこでコラボイベントが来ているため引こうとしている次第である。

最高レアのコラボ限定キャラである白鷺千聖（目の前のヤツと同姓同名の別人）一点狙いで行こうとしているのだ。

「慧人が音ゲーをやっていたなんて……どうしたの？頭でも打ったの？」

「うるせえ。先輩に勧められてだ」

「ふーん（ポチツ）」

「お前、何押しした？」

「え？そのゲームをインストールしようと思って」

「ノリが軽いな」

「こういうゲームってその場の勢いが大事じゃないの？」

「まあ、そうだが……」

「でも、リズムゲームって大丈夫なの？貴方、リズム感皆無じゃない」

「安心しろ。反射で押してる」

だからオールパーフェクト……通称APは無理でも、フルコンまではギリ狙える。リズムゲーなんて反射ゲーだと思えばまだ戦えるな。うん。

「凄いわ慧人。この白鷺千聖って子、私と同姓同名だけじゃなくて容姿もそっくりだし何ならプロフィールもほとんど同じよ」

「へいへい。ただ、お前よりも遙かにまともだから。お前のような年中発情している雌ブタじゃねえから」

「失礼ね。慧人の前でしか発情してないわ」

「そこは否定しろよおい」

「だって……事実だもの」

やっぱり、そっくりさんだわ。いや、赤の他人かもしれない。

「ねえ……私の初めて……貰ってくれる?」

「おう、初フレンドって意味なら貰ってもいいけど?」

「……つち」

「今『そこで動揺してくれば、流しやすかったのに』とか思っただろ?」

「え? 慧人。なんで私の考えを読めたの? ふふつ、やっぱり私たちは心で繋がっているのよ。だから心だけじゃなくて身体も繋がりますよ?」

「意味分かんねえことを口走るな」

とりあえず、千聖がチュートリアルを始めたので、俺はコラボガチャを引くことにする。

というか、この女が来なければ既に引いていたはずだが……まあいい。100連……この100連で引いてみせる。

「……くつ」

最初の10連は最低保証分……最高レアの気配なしか。

最低保証分だと今は、悪いか? いや、まだ10連だし次行くか。

「……ふう」

20連目も最低保証分だけ。……なるほどな。このまま行くとマズいか? いや、だか

らこそ次で流れが変わるか？

「……………」

30連目……流れが変わるように最高レアを引く……が、全くの別キャラの最高レア。いや、今ので流れがよくなったはず。このまま行けば……！

40、50と最高レアの気配はなく気付けば半分……くっ、いや今の俺に進む以外の選択肢はない。

「ふーん。慧人ってこの子が狙いなだね」

「ああ。一番の推しキャラはこの氷川紗夜って言う紗夜さんによく似たキャラなんだけどな。白鷺千聖も結構好きなキャラだし……」

「……………もしかして……愛の告白？」

「お前の脳みそはどこまでお花畑なんだよ」

……………というかよく見るとコイツって結構可愛い部類に入るのではないだろうか？いや、アイドルだし、それはある意味保証されているものなんだが……中身がド変態の雌ブタだしなあ……。

「というか、お前の方はどうなったんだよ」

「今、チュートリアルの後のダウンロード中ね」

「そうかよ」



「慧人も……そんな顔をするのね……!」

「……っ!」

「ふふっ、何というか……その絶望した顔……興奮するわ……!」

「この女……!」

すっげえ嬉しそうな顔だこの野郎。クソ、コイツを無視して90連目だ90連目。

「ねえ、慧人……あなたのその顔を見ると……心のチ○コが勃起するわね♪」

ガチャを引くボタンを押した瞬間。無視することが出来ない発言が聞こえてくる。

「おい、なんでピー音仕事しなかった!?今、コイツとんでもない発言したぞ!」

「これが私の新技。名付けて○隠しよ」

「それ退化しているから!ピー音以下だわこの阿呆!」

「いい慧人?私の最終奥義はモザイクなし。私にかかればどんなワードも包み隠さず言

えるわ」

「絶対に最終奥義は使うんじゃないぞ!?マジでやめろよおい!俺たち消されるぞ!」

「なるほど……分かったわ。じゃあ、さっきの発言も、漏れてきた……の方がいいかしら

?」

「よくねえけどまだマシだと思う自分がある……!」

「冗談よ。そんなすぐに興奮するような変態じゃないわ」

「……………」

嘘だなと思ったが、ツッコミを入れるのがマジで疲れた。うん。

ちなみに90連目は別の最高レアで……残すとこ10連となった。

「……………」

何だろう。ガチャを引き続けて精神面がどんどん削られていき、あげくすぐ隣のド変態のせいで体力も削られている気がする。

ああ、神様……頼むから引かせてくれ？お恵みを下さい……

「……………」

最後の10連。一人……また一人判明する度に、色々な感情が渦巻く……そして……

「……………」

なんともいえないこの感情。今まで溜め込んで来た分を使い果たし、尚それでも届かない。

たかがゲーム。されどゲーム。ガチャ一つとっても、ここまでなんとも言えない感情に襲われるとは。

「……………」

「あー俺は10連を引くタイプだが、このゲームだとそこまで大差ないと思う」

「そう？じゃあ、単発で引いてみるわね」

ということ引き始める千聖。まあ、始めたばっかだし、そこまで試行回数を重ねることは出来ないだろう。

そうだな。よく考えれば、100連と言っているが確実に欲しいなら天井まで行くだろうし……うん、まあ……そう考えると出なくても仕方がないのか。

「あつ……」

隣のド変態が声を上げる。どうしたのだろうか。

「何だ？」

「当たったみたいね」

「……」

見せられた画面にはガチャ画面。そこには狙っていた白鷺千聖の姿。

「……」

「……………(ふふん)」

ドヤ顔をしてくる千聖。……なるほど。

「悪い千聖。落ち着く時間をくれ」

「どうしてかしら？」

「お前を犯しそうになるから」

「ふふつ、100連引いても出ないなんて日頃の行いでも悪いのかしら？ 私に似たキャ



ラを引きたいなら日頃の行いをよくしないといけないのよ。いいえ、そもそも私に尽くすべきなのよ。だから、ド変態ド変態と罵られるのももちろん嬉しいけど、もつと普段から敬意を持って接してくれれば、神様も微笑んでくれるんじゃないかしら？ ほらほら、負けを認めてしまいなさいよ」

「……………(ピキッ)」

この女……………！自分がやられたいからって煽ってきやがってるな……………！というかやられたいからワザと煽るとかドMじゃねえか。本当にマゾ雌ブタじゃねえか。

なんだろう。今も煽り続ける千聖を見ると……………うん。返って冷静になってきたな。よく考えればこの女。言葉の奥底に、早く怒って犯してという意味の分からん願望をひしひしと感じる。なるほど。手を出したら負けってこういう時に言うんだな。少し賢くなった気分だ。……………いや、もしかしたら少しバカになったかもしれない。

「はあ……………まあいいや」

「う、嘘でしょう……………？結構アレな感じで煽ったのに冷静に……………？どういうことなの？」  
「素直に認めるわ。俺は引けなくてお前は引いた。過程はどうあれそれが全て。お前が勝者で俺は敗北者だ。だから、よかったな。千聖」

「え、ええ……………じゃなくて！なんで私に怒らないの……………？なんで怒って犯さないの……………？」

「誰がテメエの見え透いた迷惑に乗るかっての」

「くう……完璧な演技だと思つたのに……!」

……………あんな見え見えの迷惑。冷静になれば誰でも分かるつての。

「まあ、俺は運がいいわ。別にゲームで引けなくても、限りなく近い存在のお前が居てくれるし。確かにゲームの白鷺千聖も好きだけど、目の前に居るお前白鷺千聖の方が好きだしな」

「……へ？」

「よく考えたら、お前はアイドルとか役者として日頃努力している。ベースリストとしてだけじゃなく、役者やアイドルとしても、体調管理とか美容面とか、演技力をつけるためとか……俺はお前の努力を全て分かるわけじゃないが、それでも凄い頑張っているのを知っている。普段から俺の想像を超える努力をしている……そんなお前に日頃の行いとか言われても、お前の方がすげえつてのは、分かり切っていたこと。お前が弾けているのは俺の前だけだし……だから、いいやつて。まあ、これからもお前が俺の傍に居てくれれば、ゲームでは居なくても……つてどうした？顔が真っ赤だぞ」

「……………つち見ないで」

「あー」

（……………さ、さすがにこの不意打ちはダメ……うう……慧人つてなんでこういうことをスラストラと言えるの……？）

「ね、ねえ……慧人。私が傍に居るのって……迷惑じゃないの？」

「アホか。ガチで迷惑なら拒絶しているわ」

「……責任取ってよ……慧人はやっぱり責任を取るべきよ」

「いや、何の責任だよ」

「……私を惚れさせた責任」

「は？」

この後、いつも通り二人で過ごしていたが、いつもより千聖のアレな言動が少なかったことを記す。珍しい日もあるんだなあ、と思いました。はい。

## 地獄ここに在り

殺される……俺の直感がそう囁いている。

今、あの人に見つかったら殺されてしまう……。

普段は女神のような存在なのに、今では死神としか思えない……。

「慧人さん？出てきてください」

「ふふっ、中々隠れるのがお上手なようで」

「ここですか？ここも違うようですね？」

「早く出てこないと……」

俺は今の隠れ場所でそつと目を閉じ、気配を消すとともに、今朝の出来事を思い出していた。

「ああ？上納金だと？」

「そ、そうなんつすよ……で、今、ちよつと手持ち無沙汰で……」

「それで……ちよつと、気の弱そうなヤツから奪おうとしただけ……」

その日の朝。いつも通りサッカー部でランニングをしていると不穏な気配を感じた。

その気配の方に向かうとうちの生徒たちが如何にもって感じの二人組に絡まれていたので、とりあえずそいつらをぶつ飛ばした。で、現在、たんこぶが出来た二人を前に俺は腕を組み話を聞いていた。ちなみに、サッカー部連中は後ろにいる。

「で？それを集めているのが、オタクらの高校の生徒会長……と」

「そ、そうなんですよ……だからオレたちは金を渡さないとやられてしまつて……」

「へえへえ、も、もうアンタらの高校に手出しはしないので……」

「阿呆か。うちのじやなくて他のもだ。……はあ」

ただの不良がカツアゲしている……って訳じゃなかった。はあ、めんどくせ。どうにもやっかいごとと首を突っ込んだらしい。さてさて、どうしたものか……

「ああ、その通りだ冬木」

「キャプテン……」

「この辺りには、花咲川、羽丘、月ノ森と女子校もあるし、少し離れば他の高校だつてある。幸い、ウチの高校は野郎が多いが、それでもこんなところでそんな行為をされたら溜まらん」

「つまり？」

「こんなふざけたことを見逃せるほど俺たちは腐り果ててねえ！ テメエらのとこの大将をぶっ飛ばしてやめさせるぞ！」

「その通りだキャプテン！」

え？ マジ？ 確かに他校に乗り込むってちよつと面白そうだけど……マジ？

「や、やめとけつて、あの人に逆らったらタダじゃすまねえ……！」

「あ、ああ。あの人は恐ろしいんだ……関わらん方がいい」

「甘いな。この我らが生徒会長様に掛ければ、そんなのすぐに倒せる」

「……は？」

「た、確かに……アンタの強さなら」

「だ、だが……！そこまで迷惑を……！」

「そんなことを言うな！いいか！これはこの近辺に住む者が、平和に暮らせるためにやるべき行いだ！この平和を守ってこそ、我ら虎南高校の生徒だ！」

……え？そんなの？初めて聞いたぞ？

『ああ、キャプテン！アンタの言うとおりだよ！』

『やろう！この街の平和を守るために！』

『オレはアンタにどこまでも着いていくぞ！』

「ふっ……さすが同志よ。分かってくれたか。行くぞ。これは聖戦だ」

そう言つて颯爽と虎南高校に向かうキャプテン以下サッカー部。

「あーなんだ、お前らの高校って何処だ？」

「隣町ですが、あ、案内させてもらいます！」

「俺たちに任せてください！」

………なんか、面倒ごとになってきたな。

話を聞くにボスが生徒会長で、幹部的なのが各委員長的ポジション。で、その学校は荒れに荒れて、遅刻なんかは普通で授業放棄なんて日常茶飯事。ただ月に一、二回、その会長に金を渡す日があるらしくそういう日は全員出席のようだ。で、今日がその日で



金が足りなければ各々のやり方で調達するらしい。だから、こいつらはそこその距離にあるここを狙った……らしい。……はあ。話を聞くだけで……本当に高校か？

そう思いながら虎南高校に到着するが……何だ？何をするつもりだ？

「よし！散れ！何か起きたときは生徒会長、冬木慧人の指示だと言うんだ！」

「言うな。勝手に人の名前を使うな」

「「分かりました！」」

「お前らも分かかってんじゃねえよ」

そんな俺の言葉を見殺してちりぢりになっていくサッカー部。一体、何をしでかすつもりだ？

「おい、馬鹿。何をやる気だ？」

「これから相手の高校に乗り込むんだろ？このままじゃ、何か足りないと思わないか？」

「……………足りない？頭が？」

「そうだ！頭数だ！」

「いや。今、仙石が言ったのはお前の頭の中身のほうで……」

「我が高校の同志ならば、必ず応えてくれる。それに、乗り込むのに景気づけも必要だろ？」

「景気づけ？」

「キャプテン！持ってきました！」

そう言つて部員たちがひいてきたのは……神輿？……ん？神輿？神輿だと？おい、どつから勝手に持ち出した？

「神輿の上に総大将、冬木を乗せ、担いで行けば様になるだろ？」

「いや、ならないならぬ」

「……………僕は遠慮しておくよ」

「あーオレも。頑張つてねー冬木」

「ちよ、え？マジで？」

「おい、仙石に森下。まさか、参加しないつもりか？」

「アレだよアレ。全員で乗り込んでやうと、この警備が手薄になつちゃうじゃん？」

「……………キャプテンたちは実際に乗り込む部隊。僕たちは待機兼ここを守る部隊だよ」

おい、それっぽく言っているけど要はこんな阿呆なことに参加する気がないつてだけだろうが。やれやれ、こんな口車に乗せられるほどうちのキャプテンは阿呆じゃないだろ…………。

「分かった。残るであろう女子たちを頼んだぞ」

「りよーかい。後ろは任せてよ」

「……………マネージャーたちには適当に説明するから」

「じゃ、頼んだぞ」

……………阿呆だわコイツ。隣町からウチの高校に攻撃を仕掛けに来るわけねえだろ。何が待機組だ。意味分からねえよ。

……………ふつ、でもまあ、そんな程度で通じるなら早いな。

「よし、じゃあ俺も待機組に……………」

「おい、どこに行く。お前はこつちだ」

「まあ、待て。やはりこういったことに生徒会長が乗り込むと、問題が大事になりかねない。なるべく穏便にすませるには、俺はここに残っておいた方がいいに決まっているだろ?」

「何を言っているんだ?よく分からんこと言っているんじゃない」

……………マジかよ。人が行きたくねえって言っているのに……………でもまあ、この件の発端は、俺が首を突っ込んだからな気がするし……………はあ。仕方ねえか。

「後は何人集まるかだな……………」

「いや、ゼロだわ。んな一昔前の抗争じゃねえんだから、わざわざ隣の他校に殴り込みに行くバカなんてゼロだわ。サッカー部だけだよ阿呆が」

と、思っていた時期がありましたね。

「キャプテン！我が校の全校生徒の七割が参加を表明！」

「続々とここに集結しています！」

「……全校生徒の……七割……だと？……それって……この学校の男ほとんど参加しているんじゃないのか？」

「おう。分かった」

「おい、馬鹿。どんな魔法を使った」

「普通の平日だぞ？分かってんのか？この後普通に授業あるんだぞ？……真面目に受けていないけど。」

「魔法？なんのことだ」

「どうしたら、こんなバカなことにこんなに参加するんだよ。学校行事じゃねえんだよ。というか、お前ら正気か？色々と大丈夫か？」

「おいおい、あんまり舐めんよ会長さんよお」

「そうだぜ。水くせえこと言うんじゃないやねえよ」

「へっ、一人でいい格好はさせねえぜ？」

「俺はアンタらについていくって決めているんだよ」

「行こうぜ会長！俺たちも力を貸すぜ！」

学年もクラスも部活も関係ない。そこにはやる気と熱意に満ちあふれた、虎南高校の

大多数の男どもが居た。

「何がお前らをそんなに……」

「……はあ。いいか冬木。俺たちが戦う理由なんて一つに決まっているだろう?」

「この街の人々を守る……とか? 確か平和をなんとかって……」

「甘い! 甘過ぎる!」

「じゃあ、どんな理由だよ」

「いいか! この戦いはこの場所を守る戦い! つまり、これは女子たちを守る戦いなんだ  
!」

「「おおおつ!」」

「……おいおい……コイツら……まさか。

「いいか野郎ども! この地に住む者に手を出すと言うことが! どんな意味を持つか教えてやろうぜ!」

「「おおおつ!!」」

「……女子を守り、あわよくばその勇姿に女子が惚れないかとか考えていないか?」

「しかも、向こうの高校の会長の独裁。……その女子が危険に晒されているとか考えていないか?」

「なあ、お前らの高校って……共学?」

「いえ、男子校っす」

「だよな」

「……………そのこと伝えるとこいつら萎えそうだな。うわあ……………帰りてえ。」

「冬木。お前がオレたちのトップだ」

「ぎげんな。テメエが勝手に人の名前を使ったんだろうが」

「渴を入れてくれ。リーダーとしてな」

と、背中を叩かれ前に出る。見渡すと、目をギラつかせ、欲望と下心にまみれた我が校のバカたちが……………はあ。でもまあ、考えてみればこんな機会普通はないし、もう来ないだろう。だったら、俺がやることはただ一つ。

「俺から言うことはただ一つ……………」

「……………(ぎくり)」

「この全面戦争、勝ちに行くぞお！」

「おっしやああっ！」

「行くぞ虎南高校！出陣だあっ！」

「おおおおおおおおおおおっ！」

「さあ、楽しんでやろうじゃねえか！」

「思い切り楽しんでるじゃないですか！」

スパアーン！

紗夜さんの一撃が、事の経緯を話す俺の頭を直撃した。

頑張つて天井に張り付いて完璧に隠れたはずなのに、何故か見つかった。不思議で仕方がないとはまさにこのことだと思う。

で、現在。放課後のCiRCLEにて。俺はRoseliaの面々の前で正座させられていた。理由は今日の出来事であるが……うん。

「紗夜さん。それでも、今回の件は、無実を主張します」

「……………」

「確かに、ほんの少しだけ多くの方を巻き込んでしまった気はします」

「……………」

「ですが、この罰は不当です。あくまでアレは人助けと諸々が混ざつて……」

俺は無実を訴え続けていた。しかし、悲しきかな。話せば話すほど彼女たちから、有罪じゃね？つて思われている気がする。

「……それでも、全校生徒の七割を巻き込むのはどうかと思います」

「それは同意見です」

「まあ、カツアゲの現場を抑えてボコつたところまでは許しましょう。本当は手を出した時点で色々と言いたいですが、慧人さんだから仕方ないつてことで大目に見ます」

「ありがとうございます」

「勝手に名前を使われて、勝手に指揮をあげられたことも同情します」



「そうですね。俺、悪くないですよね？」

「……が、問題はそれをあなたが楽しんでる点です。嫌々なら分かります。ですが、あなたは心の底から楽しんでるじゃないですか」

「こんな面白そうな出来事楽しまない方がどうかしてますよ！」

「楽しむ方がどうかしてます！」

スパアーン！

「今の音は？」

「10点くらいじゃない？」

「……もう少し……インパクトがほしいです」

「ドカーンって音を出せばいいんじゃない？」

ちなみに、Roseliaの他のメンバーは誰も助けくれません。一体、何がダメだったんでしょうね？

「日頃の行いです」

え？ そうなの？ ……つてさらつと心の中を読まれたんですけど？

「でも、紗夜さんたちには実害なかったですよね？」

「大ありです。その神輿を担いで走る姿を私たちも目撃し話題になりました」

「そうですね。こつちでも話題になったわ」

「いやー驚いたよね。神輿が走ってくると思ったら上に乗ってるの慧人くんかも。しかも大勢走っていたし」

「私も頭を抱えましたよ。風紀委員の持ち物検査で外にいましたが……何で、神輿がっと思つたら虎南高校でしたし……しかも、上に乗ってたの慧人さんですし。聞こえてくるのは全面戦争だとか何とか。移動中ぐらい静かにしてください」

「我が軍の士気に関わることでして……」

「それに、何故か今井さんや湊さんを始め、何人かの方からその奇行を私にLONEで報告されたんですよ」

「だつてけー兄の奇行だよ？紗夜さんに伝えるに決まつてるじゃん！」

「……それに……けいさんの暴走は……氷川さんしか止められないので……」

「流石に学校ぐるみは無理です。で、その高校までダッシュ……よく走りましたね」

「いやー神輿担いでいたのは、サッカー部をはじめとした運動部の精鋭バカばかりでしたので。文化系の部の奴らも不思議なことに付いてきましたし、まあ、1時間あれば余裕ですよ」

「学校側は頭を抱えたでしょうね……事情を知らなければ、集団ボイコット。事情を知つても、生徒会長が先導して、集団ボイコットですから」

「甘いですよ。うちの先生たちは問題児の相手には手慣れています。そんな程度で潰れる

ほど柔じゃねえです」

「黙りなさい問題児筆頭」

「……………」

「で？その高校に着いてからどうなったんですか？」

「……………」

「……………慧人さん？」

「……………」

「黙りなさいと言われたから黙っているんですか？」

「……………(こくこく)」

「……………」

「……………」

「バカなんですか？」

バカじゃなくて素直って言ってほしい。

スパアーン！

「いいえ、バカです。さっさと話しなさい」

「……………はい」

出発してから1時間くらい経っただろうか。遂に相手の本拠地が見えてくる。

「お、お前らにも——へぶっ!?!」

「だ、誰かボスに報告——ぐふっ?!」

「ここは通さな——ぐふっ?!」

入り口に近付くと見張りと思わしき奴らが居たが……こちらは何百人という集団。その突撃を前に塵のように吹き飛ばされてしまう。

そのままグラウンドになだれ込む俺たち。そんな俺たちを前に相手側も姿を現す。

『テメエらの悪行もここまでだ!』

『そうだそうだ!』

『今すぐ降伏しろ!』

とりあえず、神輿の上から飛び降りて前に立つ。後ろから聞こえてくるのはそういう声……で、目の前にはいかにも不良。釘バットや鉄パイプなどの武器を持っている連中も見える。

校舎から出て来るお出迎え。段々と向こうの戦闘態勢が整う中、とある声が聞こえてきた。

『……おい、ここ男子校って書いてなかったか?』

「……は?」

その声に反応したのはキャプテン。この騒動の先導者であり、この騒動の元凶である。

そして、キャプテンは重い足取りで、ここまで案内してくれた二人の下へ向かう。

「……おい。ここは男子校なのか？」

「そうですね」

「男子校つてことは、圧政に苦しむ女子は？」

「いいですよ？」

「囚われている姫は？」

「いいいですね」

「この武勇伝を見届ける女子は？」

「いいいです」

「ここに居るのは……むさい男ばかり……だと……!？」

膝をつくキャプテン。俺はそんなキャプテンのもとに歩み寄る。

「とりあえず、ここまで来たんだしさっさと片付けようぜ？」

そう提案する。しかし……

「すまない冬木……もう無理だ」

「……は？」

すると、続々と膝をつき始める我が軍。気付けば俺を残して全員倒れていた。

「……………は？」

『女子がいらないなら……こんなことしないのに……!』

『う……疲れが……疲れが一気に……!』

『足が……! 足が動かない……だと……!』

『クソオ……誰だよ、この作戦に成功すれば彼女が出来るって言ったやつ……』

『俺……ここで勇者になりたかったよ……』

『ちくしよお……! 男ばかりのところ……何で来てしまったんだ……!』

「……………」

聞こえてくるのは嘆き。……まあ、何というか。

「……………」 帰っていいか?」

しかし、既に校門のあたりにも武装集団。こんな茶番を繰り広げている間に、囲まれて、どうやら逃げ場はないようだ。

「あー帰りたいけど……いいか?」

ダメ元で提案するが……うん。本当にダメそうだ。虎南高校側は嘆いてばかりだし、相手は『こんなことしておいてタダで帰らせるわけない』だの『身ぐるみ全部おいていけ』だの……あーほんと。何で本格的に乗り込んだら味方が全滅しているんだろう?

何? ゲームで例えるなら、魔王の城に乗り込んだ瞬間に周りの味方が全滅したんだぞ? しかも、蘇生不可で城から出ることも不可。しかもリセットも出来ないって、そんな

ゲームあつたらクソゲーだな。マジで。

「……仕方ない。おい、そこで地に伏せているバカども。こいつらは今から俺の獲物だ。手を出したらぶちのめす」

ジャージの上を脱ぎ捨てて。そして、俺は宣言する。

「さあ、ゲームを始めようぜ！ 全員まとめて相手してやるからよお！」



スパアーン!

「何ぶつそうな宣言しているんですか!」

「まあ、こう言うしかないかな……って」

「阿呆ですか?」

「いえいえ、阿呆じゃないです。で、そこからはあいつらを倒してゲームエンドです」

「……」

まあ、多くは触れることなく倒したけど。

「その後はいろいろあつて気付けば、全員改心して、ハッピーエンドつてやつです」

「いいえ、まだ終わっていません。と、その前に慧人さん。正座を崩していいですよ」

「え? いいんですか?」

「はい。代わりに壁を背もたれに空気椅子に座ってもらっていいですか?」

よく分からないが、許された代わりに筋トレか。まあ、空気椅子とか背もたれアリな

時点で俺にとってはヌルゲー……あ。

「紗夜さん。流石に人を一人乗せるのは無謀です」

すると、笑顔で太ももの上に乗ってくる紗夜さん。ヤバい。人が乗るのは聞いていない。流石にそれはやり過ぎ……というか、うん。普通におも——

「あら？まさか、女性に向かつて重い……などと言うつもりではないですよね？」

「……………」

——あ、これ口答えしたら殺されるし、思っても殺されるわ。これが理不尽……つてやつか。

「ふふっ、可愛らしいですね……あら？少しだけぶるぶるしちやつていますね。まるで生まれたての子鹿のようですよ？ほらほら、椅子はこんなに動きませんよ？」

紗夜さんの手が俺の顎を触ってくる。何というか、彼女の中の変なスイッチが入ったらしい。

「うわー鬼畜だねー」

「そう？何だか紗夜、楽しそうよ」

「あはは……」

「りんりん！手をどけて！見えないよ！」

「うん。あれはあこの教育には悪いね」

「そうね」

「ごめんねあこちゃん」

「皆のいじわるー!」

ちなみにその姿は、教育に悪いと言われる始末。せんせー紗夜さんにいじめられてます。

「話を続けます」

「まだ続くんですか? え? 俺的には改心したアイツらと学校や地域の清掃活動を頑張つて、昼過ぎに帰つて終わりですよ?」

「帰りも同じように神輿を担いでいたんですよ?」

「まあ、そうですね。腹減つたーとか飯食い損ねたーつて叫びながら帰つた記憶があります」

「……ねえ? その神輿が私たちの学校を通る時間が、午後の最初の授業中だったんですよね? ただえさえ、集中力が落ちやすい授業で、そんな大騒動が外で起きれば……ねえ? 何が言いたいか分かりますか?」

「あはは、楽しそうでいいじゃないですか」

「……授業を放棄して外を見る生徒たち。教師側も謎の軍団が叫びながら走っていることに対し、右往左往する始末……」

「祭りの開幕ですね」

「授業妨害です」

「そうよ。せっかく、心地よく寝ようとしていたのに騒がしくて起こされたのよ」  
「あこもあこも！皆がうるさくなっちゃったんだよ！」

「ほら、寝そうな人を起こす効果があつたじゃないですか」

「馬鹿も休み休み言いなさい」

ん？休み休み言えいいのか？

「馬鹿ー」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「馬鹿ー」

「……………」  
(ブチツ)

「ただいま、見せられない映像が流れております。しばらくお待ちください」

「り、りんりん……紗夜さんが怖いよ……」

「だ、大丈夫だよ……私たちは大人しくしていよ?」

「そうね。紗夜の髪がふわっと浮いていたわ」

「あはは……まあ、慧人くんの自業自得と言うことで」

普段では見るこくない姿、聞くことのない言葉を聞くこと何分か。ようやく少しだけ収まったらしい。あはは……ええ。

「話を戻します。あなた方の奇行の代償に授業が少し潰れたんですよ。しかも、近隣高校全体的、ですよ?」

「……紗夜さん。その人たちに一つ言ってください」

「何をですか?」

「そんなことで集中が途切れる授業をした教師側が悪い……と」

「ふふつ。まだ、そんなことを仰れる余裕があるんですね。ふふつ、ふふふつ」

紗夜さんが凄く笑っている。ヤバい。これは今すぐ逃げなければ……!

「慧人さん。気が変わりました」

「はい?」

「湊さん。もう慧人さんの尋問はいいです。今から練習をしましょう。すみませんが、今日、私はこの椅子に座ったままやらせてもらいます」

「……分かったわ」

「……まさか」

「ええ、慧人さん。このまま練習に付き合ってもらいますよ……もちろん、動いたり音を立てたら……分かっていきますよね？」

「……………」

一言だけ言うなら、俺は何度目かの地獄を見た。

「昔、人は暗示だけで殺せるかという実験をしたことがあるそうだ」

物騒な宣言をした慧人。そんな宣言を聞き、武器を片手に迫り来る集団を見ながら、彼は静かに語り始めた。

「ただ、そんなバカみたいな話。本当に行われたかどうかは俺は知らないが……」  
ゆっくりと彼らの根城学校の校舎に向かって歩いて行く。

「とりあえず、言わせてもらおう。俺はお前の腹を殴った」

威圧と共に放たれた言葉。地に伏す虎南高校の面々は疑問符を浮かべ、相手側も特に気にとめずに迫り来る。

異変が起きたのは次の瞬間だった。

突如、相手側の人たちが呻き声をあげながら倒れていく。

『な、何が起きたんだ……？』

『次々と倒れていく……だと?』

虎南高校の面々には一切変化はない。変化があつたのは相手側だけ。しかも、全員じゃなくて全体の三割くらいである。

「神の見えざる手……いや、この場合は死神の見えざる鎌とでも言うべきか? む? それよりは魔王の威圧……? そこまで行くとなんか違うな。よく分からないがとりあえず……」

動揺する相手を差し置き、校舎へと歩む足を止めない慧人。

「俺はお前を蹴り飛ばした」

再び発せられる言葉。そして、次の瞬間。今度は、相手側の何人かが何もされていはいはずなのに、吹き飛んでいく。

「殴られたことを感じるのは、脳がそう感じるから。つまり、実際に殴られていなくても、脳が殴られたと感じればそれは殴られるし、蹴られたと感じれば蹴られる。そのトリガーは恐怖だ。俺に対する恐怖。逆らったらやられるという恐怖。だから、俺に對し恐怖を抱いたものはもう逆らえない。さあ、お前ら……跪け」

一人、また一人と地面に膝を付けていく相手。

『な、何だよ……コレ……!』

『動けない……だと……!?!』



そんな奴らを見る気がないのか、一瞥することすらなく歩いて行く。まだ何もしていないのに既に何百といった数の人間が地に伏していた。

「悪いが、あまり手を汚したくないんだ。だから、そこを退け」

目の前に群がっていた敵を見下すような冷たい眼を向け、重い言葉をかけていく。その言葉をかけられた者の多くは怯えるように後ずさりをしながら、道をあけていく。

『な、舐めるな!』

『誰が退くかよ!』

だが、数人は慧人の言葉に反し残っていた。しかし、その数人を見てもまるで驚いた様子はない。足取りは変わらず、彼らへと近づいていく。

「まあ、全員に効くとは思ってねえ。ただ——」

慧人に向かって飛びかかる数人。

「——向かってくるのは不正解だ」

振るわれる武器や、飛んでくる拳や蹴りを最小限の動きで避けると共に一人一人に拳を当てていく。的確に急所を突いていき、一撃で沈める。

「……邪魔」

そして、未だに道を塞ごうとするものたちに向かって、軽く腕を振るう慧人。次の瞬間、何人かが吹き飛ばされていく。

『い、今のは……!?』

『う、嘘だろ……!?なんで軽く腕を振っただけで……!?』

『おい!何をされた!?一体何をしたんだアイツは!』

『ひ、怯むな!怯んだら負けだ!』

『向こうは一人!こっちは武器を持っているしまだ人数も居る!』

『そ、それにあの人がだっているんだ!』

『そうだな!それに全員でかかれば怖くねえ!』

『い、行くぞ!』

恐怖を抑え、武器を携えて慧人に向かう生き残りたち。

「……あいつと……あいつ。そして……あいつ……か」

そんなことは気にとめない。迫ってくる何人かを指さして確認した後、狙いを定めた相手に向かって突撃する。

『こ、コイツ!速っ——ぐふっ』

『ば、バットが!?!バットが蹴られて折れただ——ぐふっ』

『う、嘘だろ……!?武器をへし折るなんて——がはっ』

狙われたものたちは、武器を折られ、殴られたり、蹴られたりして地に伏すことになる。

「さて……跪け」

狙った相手たちをぶちのめした後に発せられた言葉。その言葉を前にたつた一人を除いて逆らうことが出来なかった。

「……自分より強いやつが簡単に倒される。武器も通用しない。狙われたら終わる……簡単な話だ。そう思った時点で、お前らの負けなんだよ」

ただ一人、立っている相手の方に目を向ける。

「で、どうするよこのリーダー。大人しく降伏するか？」

「……なるほどねえ。これが噂になっていた破壊兵器様か」

「……ツチ。知っていたか」

「まあな、つと。心も感情も持ち合わせていない、人の皮を被った最強最悪のバケモノ。一度動き始めたら、目に見える全てを破壊しない限り止まらない兵器……って聞いていたんだが……不思議だな。破壊兵器って言うわりに、ほとんどのやつに手を出していないし、誰も破壊していない。これじゃあ破壊兵器失格じゃないのか？」

「失格で結構。そんな尾ひれに背びれどころかいろいろくつついたものは卒業してんだよ」

「そんなのは嘘だ、とは言わないんだな？」

「事実だから。否定する気はねえよ……ああ、でも一つ訂正するなら、目に見える全ては

破壊してねえ。あくまで手を出してくる奴らをぶちのめしてただけだ」

二人はゆつくりと歩いている。

「なあ、知ってるか？」

「何をだよ」

「時には人生を変えるような敗北ってあるらしいぞ？」

「なんだそりゃ」

「敗北が人を強くするとはよく言ったモノだ。だから、お前にも教えてやるよ。正しい敗北を……そして、覚えておくといい。人間には絶対に勝てないバケモノが存在することだな」

「やってくれたねえ……冬木君」

「あはは……校長先生……」

翌日。諸事情により足が思うように動かなくなった俺は逆立ちをしながら登校し、そのまま校長室に投降していた。

ほんと、足の疲労が限界を超えて思うように動かないんだよな……あはは。え？昨日？学校は飯食ったら自主早退したけど何か？あ、学校じゃなくてRoseliaの練習の後？あつちは練習後、紗夜さんをおんぶして帰ることになったけど何か？もう足が限

界だけど何か？

「まあ、相手側の高校からは感謝の電話がかかってきたよ。これからは安泰だと。よく更生させてくれたと」

「ありがとうございます」

「こちらとしても、向こう側にプラスになることをしてくれた以上、なにかをとがめるつもりはない……が、近隣高校からも問い合わせの数々が……ねえ？」

「あはは……」

「話は変わるが、急遽テストを行うことにした。簡単なテストだ。……そして、その結果が悪い生徒は全員、冬休みに補習を行う」

「は……」

「この学校で、勉強へのやる気が低い生徒が多いことは前々から分かっていた……が、まさか、集団ボイコットをされるとは想定しなかったよ。しかし、そのおかげでチャンスが生まれたのだよ。君たちを補習に来させる名目が生まれた……」

「あはは……それはよかったですね」

この後、緊急全校集会が開かれ、明後日にテストが行われること。そして、そのテストの点が基準に満たないものは冬休み補習とすることが告げられ、多くの者が発狂した。

まあ何というか………よく俺、生徒会長クビになっていないな。

## ポテト、ポテト、ポテト

氷川紗夜。フライドポテトを愛し、フライドポテトがないと生きていけないと自称するほど、とにかくフライドポテトが好きな少女である。

「紗夜さん……」

「なんですか？（もぐもぐ）」

今日も今日とてフライドポテトを食べ続ける少女。

「本当に好きなんですわね」

「ええ。とても（もぐもぐ）」

「飽きないんですか？」

「飽きる？何がですか？（もぐもぐ）」

「フライドポテトです」

「飽きないですよ？（もぐもぐ）」

毎日のようにフライドポテトを食べ続ける少女の姿。

「太りますよ？」

しかし、流石の彼女も、この言葉は無視できなかつた。ピタツと手を止めてポテトを



置く。

「慧人さん。どうやら、また私の講義が必要なようですな」

「それ、講義じゃなくて屁理屈って言うんです」

「いいでしょう。私がじっくり教えて差し上げます」

「それ、フライドポテトの油のようになつとりです」

「うまいこと言ったつもりですか？フライドポテトの油はねつとりしていません」

「……あ、はい」

「コホン。では、慧人さんに『ポテト特別講座』を開くとしましようか」

「あ、結構です」

「遠慮はいりません。強制参加です」

こうして、今日も平和なポテトライフを過ごしていた。

しかし、ある時異変が訪れた。

「ねえ……紗夜。いくらなんでもポテト食べ過ぎじゃない……?」

「そうでしょうか（もぐもぐ）」

「そうですよ……ずっと……ポテトを手に使っています……」

「そんなことないですよ（もぐもぐ）」

「紗夜さん！ポテトばっかり食べてないで、話を聞いてくださいよ！」

「聞いていますよ（もぐもぐ）」

「……少し取り上げるわね」

友希那がポテトの皿ごと取り上げようとした瞬間。

「シャーっ！」

自身のもとに皿をたぐり寄せて、まるで猫のように威嚇する紗夜。

「ねえ、慧人くんも何か言つてよ」

「猫のように威嚇する紗夜さんも可愛いですね」

「違うと……思いますよ……？」

「まあ、本音はさておき」

「あ、やつぱり本音なんだ」

「ちよつと異常かもしれないですね。どうにもポテトを持っていないと不安に駆られる  
そうです」

「それは恐ろしいわね」

もぐもぐと食べ続ける紗夜の頭に手を置く慧人。そのまま優しく撫で始め……

「やつぱり可愛いですね」

「「……………」」

（（ああ……平常運転だな……この男））

「これは……ちよつとマズいことにならないといけれどね……」

甘やかす（？）慧人を見ながら、リサが懸念する声をあげる。……それがやけに紗夜  
を除く5人の頭に残ったのだった。

そしてその時は遂に来てしまった。

「ポテト……ポテト……ポテト……」

Rosealiaの練習休憩中。虚ろな目をして彷徨い歩くポテトの亡霊……ではな

く紗夜の姿があつた。

「ポテトオオツッ！」

次の瞬間、彼女はポテトにかぶりつく。

「紗夜さん。それ、俺の首もとです」

しかし、それは入ってきた慧人の首もとだった。だが……

「……………(がぶがぶ)」

そんなことには気付いていないようだ。慧人は自身にかぶりついてる紗夜の肩を支えながら、残る4人の方へと視線を向ける。

「……………どうします……………この人？」

「そうだねーまさか、ここまでヤバいとは……………」

「いつぞやの……………ぼてぼて事件を……………思い出します」

「あれは酷かったわね」

「そうそうって……………ああつ！み、皆！紗夜さんの右手が！右腕があつ！」

あこが唐突に声を上げる。そのことに慌てることなく、落ち着かせようとする一同。

「落ち着けて。一体なにが……………は？」

「どうしたのあこ？そんな驚くことでもおおつ!？」

「……………(ぼかーん)」

「……………え？」

「さ、紗夜さん！紗夜さんの右腕がポテトになってますよ！」

だが、流石に人の右腕がフライドポテトに変わっていれば、驚きも禁じ得ない。

「紗夜さん！自分の右腕を見てください！」

「……………？」

慧人の必死な声に、かぶりついていた紗夜は慧人から離れ、自分の右腕を見る。

「な、なんですかコレは!？」

「「こつちが聞きたいわ!」「」

驚く紗夜。すると、何かを閃いたような顔をする。

「こ、これが……………も、もしや!」

「紗夜さん？心当たりあるんですか？」

「噂に聞いたことがあります。通称、ポテ化現象……………人の身体がポテトになっていく現象……………」

「……………」

「「そんなの聞いたことないけど!？」」

どや顔をしながら語る紗夜。実は彼女はそこまで取り乱していないかもしれない。

だが、他の皆は当然ながら目の前のあり得ない現象に驚いているわけで……………

「ど、どうしよう!こ、これ救急車かな？」

「落ち着いて……下さい……腕がポテトなんて……言っても……信じてもらえません」  
「じゃあ、どうするのよ!？」

「わわっ、本当にど、どうすればいいの!？」

「紗夜さん!？手の感覚はありますか!？」

「あ、サクサクって言います。中々いいポテトですね。これは……おいしそうです」

「「それあなたのポテトなんですけど!？」」

「ねえ、皆さん……一口食べてみてもいいですか?」

目から光が消え失せ、目が虚ろになっている紗夜。今にも自分の腕……もとい、自分のポテトを食べてしまいかねない勢いだ。

「は、放してください!」

「絶対放ささないですからね!」

「慧人くん抑えていて!今、ネットで調べているから!」

「どうしましょう……いいお医者さんが見つからないわ」

「……ど、どうすれば……いいんでしょう……」

「救急車!？警察!？消防署!？どこに電話すればいいの!？」

「一口……!一口だけですから……!」

「あなたの一口ほど信用ないものはねえよ!」

「ダメだ……!!こんな怪奇現象の解決方法が見つからないよ……!!」

「YaOo知恵袋はどうかしら?」

「ダメです……さすがに書いていません……!!」

「あわわ!あわわ!ど、どうしよう!」

「ぐぬぬ……!!放して……放して……!!」

「力強つ!?マジで今回はダメですからね!?!」

「そうだ!困ったときはこころの家だよ!」

「いい考えね。弦巻さんならなんとかなるわ」

「賛成……です……!!」

「よし決まりだね!」

「食べたいんです……!!先っぽだけでいいので……!!」

「よくねえですから……!!」

こうして、弦巻家の専属の病院に運ばれることになった紗夜であった。

そして……



「……………クソがつー！」

ゴンッ！

拳を床に打ち付ける慧人。床は砕け、慧人の手からも血が流れている。

「……………慧人さん……………ダメですよ。床に当たったら」

「でも……………！」

「私が悪いんです……………！私が皆さんの制止を聞いていればこんなことには……………！」

顔から下……………もはや身体のほとんどがフライドポテト化した紗夜がそこにはいた。

「謝るのはアタシもだよ！もつと強く制止していれば……………！」

「……………ええ、気づけなかったなんて……………リーダー失格よ」

「ごめんなさい……………氷川さん……………！」

「うう……………紗夜さん……………！」

「……………もう長くはないです……………私はもうすぐ完全にフライドポテトになってしまいました」

「……………っ！何言っているんですか紗夜さん！そんなこと分からないじゃないですか！」

「そうだよ！ここは世界最高峰の医療設備が整っているんだよ！」

「そうよ。まだまだ諦めるには早いわ」

「……………治る可能性は……………ありますよ……………！」

「だから諦めないでよ！頑張って治そうよ紗夜さん！」

「……………不思議と分かかってしまうんです。もう残された時間はほとんどないんだ……………つて」

紗夜の悲しげな声に五人とも黙り込んでしまふ。

「だから……………最後のお願ひ……………聞いてくれますか？」

「……………何ですか？」

「私がポテトになったら……………皆さんに食べて欲しいんです」

「……………っ！」

「お願ひ……………出来ますか？」

少しずつフライドポテトになっていく紗夜。

「……………分かりました。……………俺たちに任せてください……………！」

「……………ありがとう」

そして最後に微笑みかけると、紗夜は完全にフライドポテトになってしまった。

「「紗夜さん（紗夜）（氷川さん）！！」」

「……………はっ！」

悪夢で目が覚めるとはこういうことだろうか。嫌な汗が流れ、不思議と息が上がって  
る。

少しずつ落ち着いていき汗を軽く拭く。時刻は午前1時を回ったところで……

「今のは……夢……だよな？」

頭を押さえながら、さつきまで目の前に広がっていた情景を思い出す。紗夜さんの全身が徐々にフライドポテトになっていき、そのまま最後は完全なフライドポテトになってしまう。そんな彼女の変わりようを目の前で見えていき……何もできない悔しさが残っている感じがする。

あまりの恐怖……だが、そんなことは現実的ではない。人がポテトになるだとは、んなバカな。そう思い寝ようとするのだが……

「寝れねえ……！」

あまりの衝撃で目が冴えてしまったのだ。あり得ないって分かっているんだよ？人がポテトになっていくなんて。でもさあ……

「紗夜さんだからあり得そうでこええ……！」

マジで怖いんだけど？え？もしかして、本当に起きちゃう？というか、実は起きちゃっている？このまま朝が来て紗夜さんに会うと実はポテトになっていたり？というか、ここは夢？現実？夢か現実か……え？どっち？あ、ヤバいでしょう。考え始めるとマジで眠れねえ。あれ？今日確かバイトあるよな？紗夜さんと会うよな？え？大丈夫？本当に大丈夫？

8時間後……

「結局寝れなかった……!」

CIRCLEにて、スタジオの清掃をしていた。その後、眠ることが出来ず、マジで眠いです。

「おはよー……」

「あ、おはようございますリサ姐……ってどうしたんですかその顔？」

「いやさー……ちよつと怖い夢見ちゃって……夜中に起きたんだよね……そこから眠れなくて」

「奇遇ですな。俺もですよ……」

「……おはよう。早いわね……」

「あ、友希那……なんだ。声かけてくれれば一緒に行ったのに……」

「ごめんなさい……ポーツとしていたわ」

「友希那さん……眠そうですね」

「ええ……変な夢を見て夜中に起きてしまったのよ……それで」

「寝不足なんだね……」

何か不思議なこともあるものだ。まさか、リサ姐や友希那さんも寝不足で来るとは……。

「ちなみにお二人はどんな夢を……」

「言わない……絶対に笑われるから……」

「怖い夢じゃないの……？」

「うーん……概要だけ聞くと多分ネタだと思う……」

「奇遇ですね……俺も第三者が聞けば多分ギャグですよ……」

「見た側はつらいのにね……」

（紗夜がポテトになる夢なんて……そんな阿呆な夢のせいで眠れなかったとか……）

少し談笑するが……頭が回ってないせいで会話が入ってこない。

「おはよお……早いね……皆」

「おはよう……ございます……」

「おはよー……あれ？二人とも元気ないね……」

「実はあこ……夜中に起きちゃって……変な夢見たせいなんですよ……」

「私も……怖い夢を見てしまって……」

「奇遇ね……私たちもよ」

「こんなことあるんですね……」

数分後に来たあこちゃんとりんさんも寝不足な様子。だからここの空気は何とかどよーんとしている。

というか四人とも早くね？もうやることなく早く来たとか？そのせいか紗夜さんが一番遅いつて珍しい状況に。まあ、まだまだ時間余裕なんですけどね。

「おはようございます。つてどうしたんですか皆さん？いつもより元気がないですね」

何分経つただろうか。元気な……というより、普通な感じの紗夜さんが入ってくる。あ、よかった。ポテトになっていないや。

「おはよー紗夜。ちよつと寝不足で……」

「全く、皆さん揃って寝不足ですか？」

「そうですね……」

「はあ。体調管理は大事なんです。そのために十分な睡眠を取ることが大切なんですよ？」

「しつかり寝ようとしたんですよ……！」

「でも……起きちゃったのよ」

「さあ、練習を始めますよ。ほら準備してください」

「「はーい……」」

何というか……紗夜さん元気だなあ……あ。

「紗夜さん……一ついいですか？」

「どうぞ」

「紗夜さん、あなたは今日から一週間ポテト禁止です」

「はい……つてええっ!? な、何言っているんですか! そんないきなり……理由がなければ納得できません!」

「アタシもいいと思うよ……」

「今井さんまで!? 何ですか? 何を言っているんですか!？」

「私も賛成よ……」

「あこも……」

「いいと思います……」

「皆さんまで!? ええ!? ちよつと!? どうしてですか!？」

「「なんでもいいからとにかくポテト禁止!」」

「よくないです! あまりに理不尽過ぎですよ!？」

言えないよな……だつて、

( (紗夜さんがポテトになる夢を見たから……) )



「うう……皆さんのバカあ！なんでそんな酷いこと言えるんですか！」

「さあ、練習頑張つて下さいね」

「うん、任せといて」

「ええ、行けるわ」

「……頑張ります」

「行くよー」

「よくないです！ちよつ、話を聞いてください！」

「無理無理ー」

「慧人さんいつもより適当ですね！分かりました！目を覚まさせてあげますから！目を覚ませばそんな血迷った答えに行き着かないはずですから！ほら行きますよ！」

ペシッペシッペシッペシッ

紗夜さんの往復ビンタを喰らう。

うう……頭が……揺れる……気持ちわりい……助けて……

「慧人さん！早く起きてください！そして、さっきの発言を撤回してください！撤回しないと許しませんよ！怒りますよ！」

ユサユサユサユサ

紗夜さんに胸ぐらを掴まれて前後に揺らされる。

やべえ……撤回しないと……頭が……脳みそがシエイクされて……口から出ちゃう……

「分かりました……!」

「慧人さん……! ようやく目が覚めたのですね! さあ、今なら許しますよ? さつきまでの血迷った、あまりにも頭のおかしい、やる意味の必要性を感じさせない生産性皆無な意味の分からない宣言を取り消していいんですよ?」

「禁止期間。二週間に延長……!」 ↑拳を突き上げる俺。

「いいと思うー(ぐっ)」 ↑サムズアップをして拳を俺に向ける四人。

「いいいいややややあああああああつ!」 ↑あまりの現実に叫ぶ紗夜さん。

ドサツ

紗夜さんに捨てられる俺。そのまま頭を抱えて叫ぶ彼女を見ながら思った。

ああ……ようやく揺れが収まった……このまま堕ちそう…… (カクツ)

この後、いじけてへそを曲げる紗夜と、寝不足で頭が回らない五人がいたとかいないとか。

## 宇田川あこの誕生日

あこの誕生日を祝う会(5)

リサ：というわけで全員揃ったし、会議を始めようか♪ 20:07

友希那：ところで、なんで今回はこんな形なの？ 20:07

20:07<sup>既</sup> 現在進行形で俺とりんさんの二人があこちゃんとNFOをしているから  
です

燐子：イベントの周回に誘われちゃったので。断ることが出来なかったんです(人々  
く、;) 20:08

紗夜：今すぐ私もログインしますので、次のクエストから混ざってもいいですか？

20:08

燐子：もちろん大歓迎です！一緒に周回しましょう(○、ω、○)ノ 20:08

リサ：だから集まるって言ったたら二人して断ったんだ…… 20:08

友希那：でもお陰で怪しまれないからいいんじゃないの？ 20:09

20:09<sup>既</sup> オールオツケーですね

20:10<sup>既</sup> あ、紗夜さん入れましたね

紗夜：キリがつくまで待機していますね。 20：10

燐子：すぐ終わらせますのでお待ちください（ノ。|o|。）ノチョイマチ。 20：

10

紗夜：了解です。 20：10

お二人はゲームに集中してください。 20：11

燐子：(≡▽≡) b OK. 20：11

20<sup>既読</sup>：11<sup>4</sup> 了解

リサ：じゃないよ!? 20：11

こっちの会議はどうするの!? 20：12

友希那：まあまあ、お茶でも飲んで待っていますよう? 20：12

リサ：それ絶対始まらないやつだから! 20：12

紗夜：ところで、今回のイベントボスはどう攻略しましょうか? 20：13

リサ：紗夜!?! 20：13

ところでじゃないよ! 20：13

燐子：そうですね。今回のボスは比較的王道で倒せる相手だと思われます。けいさんがこちらの回

復兼バフを、あこちゃんが相手のデバフと攪乱、氷川さんが私の護衛をし、私の

## 特大魔法で

倒すプランが効率的かと。最悪けいさんがボコるのでオツケーです（・▽・）  
 bグツ！ 20：14

リサ：燐子も違うからね!? 20：14

作戦会議はNFOのチャット内でやってよ！ 20：15

紗夜：了解です。 20：15

装備をしつかり整えておきますね。 20：15

リサ：ちよつ、誰か真面目に話し合おうよ 20：15

そう思うでしょ友希那？ 20：16

友希那：そうね……あ、ちよつと待つて 20：16

リサ：どうしたの？ 20：16

友希那：にやーちゃんが居た 20：17

ちよつと見てくる 20：17

リサ：友希那も!? 20：17

というか既読がさつきから3しかついていないんだけど！ 20：18

紗夜：私は居ますよ？ 20：18

燐子：、（・▽・）ノ ハイ 20：18

友希那：にやーちゃん…… 20：18

リサ：ということとはさつきから発言がない…… 20：19

紗夜：慧人さん。LONEの方忘れてませんか？ 20：19

燐子：氷川さん……見ていなかったら呼びかけても意味ないかと。(。；|、。)

20：19

紗夜：それもそうですね。 20：19

諦めましょう。 20：20

リサ：紗夜の諦めが早い！ 20：20

もう少し粘ってよ！ 20：20

燐子：人生諦めも肝心ですね(\*´▽`\*) || 3 20：20

友希那：にやーん 20：21

紗夜：湊さん。真面目にやってください。 20：21

リサ：紗夜もだよ!? 20：21

20<sup>既</sup>：21<sup>読</sup> リサ姐もです

リサ：あ？ 20：21

なんか言った？ 20：22

20<sup>既</sup>：22<sup>読</sup> あこちゃんお誕生日を祝うための大事な会議ですよ！

20:22<sup>既読</sup> 真面目にやりましょうよ!

20:23<sup>既読</sup> 紗夜：特に誰がでしょう？ 20:22

20:23<sup>既読</sup> リサ姐ですね

リサ：うん。慧人くん 20:23

家乗り込まれるのと電話、どっちがいい？ (▽) 20:23

友希那：リサが怖いわね 20:23

燐子：私たちは静かにしていきましょう (? b?) シーツ 20:24

20:24<sup>既読</sup> 紗夜：そうですね。 20:24

20:24<sup>既読</sup> シエフのお任せで

リサ：じゃあ、包丁持って乗り込むから待っててね♡ 20:24

20:24<sup>既読</sup> え？

20:25<sup>既読</sup> あれ？既読が一人付かないんだけど……

友希那：リサが家を飛び出したわ 20:26

20:26<sup>既読</sup> マジ？

燐子：どうやらまた一人少なくなるみたいですね (・ω・) 20:27

20:27<sup>既読</sup> 紗夜：そうですね。 20:27

20:27<sup>既読</sup> ちよつ、だ、誰か!?

20 : 27<sup>既読</sup> 誰か助けてえ!?

紗夜 : 自業自得ですね。 20 : 28

燐子 : 自業自得です ( (u d u \* ) ウンウン 20 : 28

友希那 : 自業自得よ 20 : 28

紗夜 : 湊さん。自業自得の意味知っていますか? 20 : 29

友希那 : もももちろんよ 20 : 29

燐子 : ネットで調べれば出てきますよ? (?▽?;) 20 : 29

友希那 : ありがとう 20 : 30

分かったわ 20 : 30

紗夜 : 言葉はしっかり覚えるように。 20 : 30

友希那 : はい…… 20 : 30

燐子 : さつきから既読が2しか付いてないですね。分かつては居ましたが、とうとう

けいさんも居

なくなつてしまいましたか…… (ノ口、) シクシク 20 : 31

紗夜 : 彼のことは諦めましょう。 20 : 31

燐子 : 辛辣ですね ( ; ▽、 ) 20 : 31

友希那 : ところで会議はどうするの? 20 : 32



隣子：そうですね……三人だけですからね 20：32  
紗夜：一応前に話し合ったことを改めて送っておきますね。

20：32

皆様はインターホンが鳴り、玄関を開けると目の前には笑顔を浮かべた女性（ただし、後ろには包丁を持って）がいたことはありますか？

俺は昨日ありましたね……はい。

「うーっす」

「慧人さん！生きていたのですね」

「無事だったのね」

「よかったです……」

なるほど。俺はあの後、生存を危ぶまれていたのか。

まあ確かにな。俺もまさか二次元のヤンデレ系のものみたく、包丁を持った女子に襲われかけるとは思わなかったわ。いやあ……ほんと。不用意な発言は控えた方がいいんだな。

「もう、アタシが本気でそんなことやると思ったの？」

「「……………」」

（（だって……あの空気は……ねえ？）（））

「……………次からクツキー抜きにしようか？」

「いえ、そんなこと思っていないです」

「……今井さんなりの……ジョークですよね」

「信じているわ。リサ」

……なるほど。これがパワハラか。これが圧力つてやつか。

「なんか思った？」

「いえ、何でもねえです」

「そう？」

目が笑っていないなーあはは。……これはバレているかな。

「昨日のことが懲りていなかったのかな？」

「それ、リサ姐にも言えますからね？」

「………言わないでよ。昨日のことは」

「へいへい」

「「………」」

まさか昨日、リサ姐を送っていくときに、巡回中のお巡りさんと遭遇するなんてね

……ほんと、包丁持っていることバレなくて助かった。

「とりあえず、皆。準備はいい？」

「もちろんよ」

「任せて……ください……！」

「行けるわ」

「じゃ、慧人くん。手はず通りに」

「ああ、任せろ」

ということでは俺は部屋を出て行く。

予定としては最初は普通に練習をして、途中いきなり友希那さんがベースデーソングを歌い出して、周りの皆が合わせる。で、俺はそのタイミングでケーキをワゴンに乗せて持つてくると。

ちなみに、4人から釘を刺されに刺されていることが一つだけある。それは俺は絶対に歌うな、と。俺が歌うと、生誕を祝うはずの日が、死神が誘ってくる最悪の日に変わるそう。後はケーキが爆発するからやめると。

……うん。さすがに俺の歌でケーキは爆発しないぞ？ 精々、窓が粉々に砕けたり、建物にヒビが入ったり、聞いている人間を病院送りに出来るだけで………何か言つてて悲しくなったな。

「もしかして……俺の歌は世界を壊せるのでは？」

聞いたことがある。とある世界のとある人物は、その歌声を核兵器と同レベルと称されているそう。世界平和を脅かす兵器と同レベルに扱われており、魔獣や怪獣と言った存在をも撃破してしまい、ロボットなどもイカれさせるほどだとか。

「まあ、さすがにそこまで下手じゃないか」

皆大袈裟なんだよな。うんうん。でもまあ、俺には歌うことよりも大事な使命があるからな。

「あ、けー兄！皆つてもう来ているの？」

部屋を出て少し歩くと目の前にはあこちゃんが。

「あこちゃん。ああ、揃ってるぞ」

……うわあ……なんとというか。雰囲気伝わってくる。今日何の日か知ってる？的な感じで……しかも、もしかしたら忘れてるんじゃないかな的な不安げな感じもひしひしと伝わり……どうしよ、この空気。何も言わないと悲しませそうだし……あこちゃんって騙すの気が引けるんだよなあ……

「冬木くんー仕事頼みたいんだけどー！」

「あ、今行きます。じゃ、練習頑張れよ」

「うん！けー兄もお仕事頑張つて！」

去つて行くあこちゃん。……あつぶねえ……助かった。

「まりなさん。すつげえ助かりました」

「……へ？私は普通に予約の整理と楽器のメンテをお願いしたかったんだけど……」

「……え？助け船を出してくれたんじゃないんですか？」

「……………あ、そ、そうだよ！ま、まあ優しい上司ですからね。部下が困っていたら助けるに決まっているじゃん」

「……………」

「……………」

絶対、たまたまだったな。

「あ、そうですね？じゃあ、俺、Roseliaの方でいろいろと動かないといけないんで、仕事任せますわ」

「え？」

「優しい上司なら部下が困っていたら助けてくれるんですね？」

「あ……………こ、この悪魔！こんなか弱い私に仕事を押しつけて何も思わないの!？」

「…………ハッ。何も思わねえですね」

「ぐぬぬ……………」

「それと、まりなさん。俺のことを悪魔とか、悪魔に対して失礼ですよ？」

「だから魔王とか言われるんだよ！」

ということを押しつけられそうになった仕事を押しつけ、俺は給仕室に向かう。

最初の方は普通に練習するということで…………うん。少々暇がある。暇があるのでこちらも最後の仕上げに取り掛かる。

『慧人くん！行ける？！』

そこそこ時間が経ったタイミングでリサ姐からの連絡。オツケーと返しておいて、給

仕室を出て行く。

崩さないように持って行き、そして扉を開けて入る。

「~~~~~」

目に入ってきたのは驚きのあまり固まっているあこちゃん。そして、友希那さんを筆頭にベースデーソングを歌う四人。

「誕生日おめでとう。あこ」

「おめでとう（ございます）！」

「友希那さん……皆……！ありがとうございます！」

「宇田川さん。ケーキが届きましたよ」

「ふっふくん、アタシたちのお手製だよ☆」

「味だけじゃなくて見た目もしっかりと拘ったからな」

そう言っって持ってきたケーキを見せる。

「す、凄い……！あ、写真撮っていい写真！」

「いいよ〜せつかくだからあこも一緒に撮ってあげるよ」

「いいの？」

「ほらほら〜いくよ〜」

「わわっ、えっと、こ、こんな感じで！」



何というか……リサ姐とあこちゃんの写真会が始まったなあ……うん。

「これは長くなりそうね……」

「そうですね……」

「主役が楽しそうだから……いいと思います」

「だな。とりあえず、すぐに食べられるようセットしておくわ」

「そうね。今のうちにやっておきましょう」

とりあえず、周りのセット……と言つても机を置いたり、皿を配つておいたり、飲み物を準備することだが。

さて、準備も完了したし、そろそろいつか。

「じゃあ、やりますか。リサ姐」

「そうだね。あこ。ちよつとここに立つてもらえる？」

「こ……う……？」

そして、リサ姐が電気を消す。当然ながら部屋は真つ暗になる。

「さあ、あこ。両手を床につけて」

「こ……う……つてうわっ!？」

あこちゃんが両手をつけたところを中心に魔法陣が浮かび上がってくる。

「……すごい演出ね……こんな予定、あつたかしら？」

「私も初耳です……というか、すごいですね」

「……まさかのサプライズ……」

「す、凄い！凄いいねコレ！」

「ふっふくん。それだけじゃないよ？」

「さあ、闇の女王様。眷族を召喚しましょう」

「……ふっふっふ。我は闇の女王！冥界で生まれし魂よ……混沌を纏い、深淵より我が召喚に応じ、姿を現すのだ！」

その声と同時に一際強くなる光。そして、光が少し収まったとき、あこちゃん目の前に現れたのは……

「わわっ!?す、凄いよりサ姐！けー兄！眷族が本当に現れたよ！」

「よかったね〜あこ」

「おめでどう、あこちゃん」

「うん！」

眷族（ぬいぐるみ）を抱きしめるあこ。よかった。喜んでくれるのならここまでの演出をしたかいたがあった。

「もしかして……昨日の喧嘩はワザと？」

「おそらくそうでしょうね……きつと私たちも騙すために。自然な形で二人きりの状況

を作った」

「流石の連携……ですね……」

「何も考えていないように見せていたのね……策士ね」

「ふふっ、流石は慧人さんと言ったところですね」

「完全に騙されました……そうですね。あんなことで今井さんが家に乗り込むはずないですね……」

勘違いしているようで悪いけど、これ決めたのキレイサ姐が乗り込んで色々あった後だから……騙すというか、伝える時間がなかっただけなんだよな……

「この後に私たち、自分のプレゼントを渡すの？」

「……この演出するのは最後にしてほしかったですね」

「あはは……まあ、あこちゃん喜んでくれてますし」

とにもかくにもこうして誕生日パーティーは始まった。

## 慧人、キーボードに挑戦する

C i R C L Eにはレンタルできる楽器がいくつか準備されている。ギター、ベース、ドラムス、キーボードなど……当然ながらいつ誰が借りるか分からない以上、メンテナンスや綺麗にしておくことは大切なのである。

そして、それらをするのはC i R C L Eで働く者の仕事である。もちろん、メンテナンスも、修理の域まで行ってしまうとそれは、専門家に任せるしかないが。

「……こんな感じです」

「はい」

メンテナンスを終えて少し暇になった俺は、休憩中だったりんさん指導の下、キーボードを教えてもらった。初心者向けということで分かりやすく丁寧に教えてもらい、いざ実践ということ、R o s e l i aの前でキーボードを弾くことになった。

「そうですね……簡単な曲で『猫ふんじやった』でも弾いてみてください。あ、楽譜はここにです」

「分かりました。では……」

ということ弾いてみる。



申し訳ありません。ただいまお聞かせできないような音が流れております。しばらくお待ちください。

そして、弾き終わると……

「あれ？皆さんどうしたんですか？」

聞いていた Roselia の面々が耳を塞ぎ、膝を突きながらしゃがみ込んでいた。

「り、りんさん？」



「落ち着いてください友希那さん!?!だから殺してねえつて!」

「そうだよ!落ち着いて友希那!少し落ち着いて!」

友希那さんを後ろからリサ姐が羽交い締めにして引き剥がす。

「放してリサ!私には!ここでのやーんちゃんの仇を取る義務がある!」

「話聞けよ!?!だから、死んでねえよ猫は!」

「嘘だ!にやーんちゃんをふんじやつたみたいな軽いイメージじゃない!にやーんちゃんをトラックで跳ね飛ばしてロードローラーで轢き殺したイメージが見えたんだ!にやーんちゃんが可哀想とは思わないの!この外道があああああああつ!」

「いや、オーバーキル!というか、どうしたらそんなイメージが見えるんですか!?!」

「あ、ゴメン。アタシも友希那と同じイメージ……かな」

「ううっ……私も……です」

「あこも……一緒」

「……………え?マジ?」

ねこふんじやつたがねこ轢き殺しちやつたに変わったよ。あはは……

ガシッ!

すると再び誰かに胸ぐらを掴まれる。リサ姐は友希那さんを押さえているし、りんさんは泣き崩れてあこちゃんが介抱している。つまり、消去法で残るのは……

「さ、紗夜さん……?」

「湊さん。安心してください……」

そして紗夜さんは叫んだ。

「猫の仇は私が討ちますからあああああああああああ!」

「ちよつ!?!どこからそんな力があつ?!」

ダンツ!

まさか、紗夜さんに胸ぐらを掴まれたまま地面に押し倒されるとは思わなかった。え?嘘でしょ?一応俺、紗夜さんより一回り大きいし、筋肉とかで体重もあるんだけど?そして、馬乗りになる紗夜さん。

「慧人さん!あなたが殺した猫は!ポテトを啜っていたんですよ!腹を空かせた子どもたちに食べさせようと!猫は頑張つて運んでいたんです!それをあなたは!殺したんだ!」

「待つてください!?!殺してねえしどつからポテトが出てきたんですか!?!」

「猫がポテトを啜えているのは当然でしょう!」

「なわけねえだろ!?!」

「あ、ゴメン。その猫はポテトを啜えていなかったと思うよ」

「あこも……ポテトより魚だった気がする……」



「ほら！ポテトなんて出てこないんですよ！」

「そんなことはどうでもいいです！死を持って償ってください！さあその魂を捧げなさい！」

「いやダメだって!?俺でも首を絞められたら死ぬって!?ちよつ、力強つ?！」

「ヤバイ！いくら体制が悪いからといって、押されているんだけど!?この手が首にきたら一瞬でDEAD ENDなんだけど!？」

「紗夜だけにやらせはしないわ！私にもヤーンちゃんへの仇を取るわ!！」

「ゆ、友希那!?本当に落ち着いて！お願いだから暴れないで!！」

友希那さんが見たことないくらいキレている……目の前の紗夜さんも本気で殺しに来ているし……どうしよう。

「……うう……うううう……」

「り、りんりん泣き止んで！けー兄のアレは酷すぎたけどさ！さすがにあこたちも加勢しないとけー兄が殺されちゃうって!！」

「だって……あんなに酷い音を出させてしまつて……申し訳なくて……」

「りんりんが謝ることないよ！けー兄が悪いんだから!！」

「うう……そうだね……けいさんが悪いんだね……あはは……そうだ……けいさんが悪いんだ……けいさんをここで消せば……ふふつ……ふふつ……」

「り、りんりん?」

「ふふっ……ここで消せば……けいさんを消せば……さっきのはなかったことに……!」

「ならないよ?!頼むから落ち着いて!」

どうしよう。敵がもう一人増えた。しかもまさかの人物で俺はすぐえ驚いている。

現状を整理しよう。俺の命を奪おうとしているのは紗夜さん、友希那さん、りんさん。今のところ味方をしてくれているのはリサ姐とあこちゃん。……なるほど。リサ姐かあこちゃんまで敵に回したら確実に死ぬな。

「まさかけー兄の音楽に人を狂暴化させる力があるとは……!」

「あの大人しい隣子までそっち側に……どうしてくれるのさ!」

「一番悲しいのは俺ですよ!?!さすがにこれ以上は俺も泣きます!」

「安心してくださいいのは慧人さん。しっかりと猫と同じ道を辿らせてあげますから!」

「そうよ……!その男にはにゃーんちゃんと同じ苦しみを与えるべきよ……!」

「けいさんさえ居なくなれば……ここで消せば……ふふふっ」

まさにカオス。おかしいなく三人くらいの背後から修羅というか何か見えるんだけど。

ガチャ

そんな状況で扉を開く音が聞こえる。あれ？現状って誰かに見られるのmazukune? いや、待てよ。もしかしたら普通の光景かもしれない。

・倒れる俺の上で馬乗りになり首を絞めようとする紗夜さん。

・今にも殴りかからんとする友希那さんを羽交い締めにするリサ姐。

・不敵な笑みを浮かべながら迫り来るりんさんとそれを阻止するあこちゃん。

……………マズいな。確実に。誤解の余地しかない。

「冬木くん。頼んでいたキーボードの終わったかな……」

そして入ってきたまりなさんと目が合う。

「あー……うん。いいと思うよ私は！」

グツとサムズアツプされた。え？何が？

「あーいけないなー。仕事を忘れていたなー戻らないとなー」

「ちよっ！まりなさん!!絶対忘れてねえだろ！」

「そうですよ!!アタシたちを見捨てないで!!」

「まりなさん！助けてください！」

「ごめんねー私ってほら？多忙だからさ！」

「「まりなさん!!え!!ちよっ!!待って!!本当に待って!!」」

「グツドラック！青春、楽しんでね！」

ガチャ

無慈悲に閉められたドア。あの人の消えた方向を見ながら俺たちは……

「あの年とし増まりながあああああああああああ！」

「この野郎があああああああ！」

この後、このスタジオ内が悲鳴と怨嗟に包まれたのは言うまでもない。

おまけ

くイヴの場合く

「どうだ？俺の音は」

「ケイトさん」

スツと渡してきたのは小刀……え？

「潔く切腹してください」

「そんなレベルなのかよ!?!」

「安心してください。首はしつかり切り落としてあげますから」

「よくねえよ!?!何で一曲弾いただけで殺されるんだよ!?!」

「殺されるではありません。切腹です」

「一緒だわ!」

「さあ、早く腹を刺して下さい。首を落としますので……!」

この後、地獄の鬼ごっこが始まった。

く有咲の場合く

「どうだった?」

「……慧人先輩」

有咲が空を見ている。どうしたのだろうか？

「私、星に近づけた気分です」

「どういうこと!？」

「ああ……なんということでしょう……あんなに遠かった星がこの手に……」

「ちよつ、お前には何が見えているんだ!？」

「私……もうすぐお星様になれるのかな」

「戻ってこい!？ 本当にそれ以上は危険だぞ!？」

「あはは……」

この後、ポピパの面々を呼んで、何とか正気に戻してもらった。

くつぐみの場合

「こんな感じでどうだ?」

「……いいと……思います」

つぐみに感想を求めたが……なんだろう。気分が物凄く悪そうだ。

「……本当に……いいと……」

「ちよつ!？ お前凄いいフラフラだけど大丈夫か!？」

「すみません……慧人先輩の音を聞いてから……吐き気と頭痛が止まらなくて……」

「大丈夫か？吐きそうならトイレに連れて行こうか」

「お願いできますか……本当に……辛くて」

「ああ、ゆつくり行こうか」

「すみません……」

この後、つぐみの介抱をしたが……どう考えても、俺のせいだよな。これって。

～次回予告（嘘）～

「ごめん、慧人くん。アタシの理性も、もう持ちそうにない……」

「あこも……！あこの中に眠る闇のオーラが……止められないよ……」

「リサ姐……あこちゃん……」

狂暴化していくRoselia。ついにリサとあこも自身を抑える限界を迎え始めていた。

「アタシたちが……正気を保っている間に……逃げて……！お願い……」

「あこ……！けー兄を殺したくない……！殺したくないよ……」

「二人とも……クツ……！俺が……俺が！必ず正気に戻すから！」

「頼んだよ……！」

「頑張つて……!!」

「ああ! 任せておけ!」

狂暴化した彼女たち。果たして慧人は彼女たちを救い出せるのか。

次回、『闇を祓え! 慧人決別の一撃!』

「クソ……! こんなことになった元凶はぜってえ許せねえ……!」

ちなみに元凶は慧人です。



## 冬休み＋α編

### 最強の切り札、その名は……

遅延証明書……そう、それは我ら学生にとって、最強の切り札と言わざるを得ない。公共交通機関がある一定以上遅れた場合にもらうことが出来るモノで、公共交通機関を使っているヤツにとつては、これを貰えば遅刻が遅刻扱いにならないのだ。

つまり、何が言いたいかと言うと……

「穏やかな朝だな……」

多少サボっても、学校側にはバレないのである。

ということと、とあるカフェにて、モーニングの珈琲を啜る。俺の情報網で、本日は相当電車が遅れているそうで、遅延証明書が出ているらしい。というわけで、あたかも電車に乗ったように見せて、ちゃっかり遅延証明書を貰ってきた次第である。

「あはは……バレたら、紗夜ちゃんや千聖ちゃんに怒られないかな……？」

ちなみに目の前には花音が居て、一緒にモーニングの珈琲を啜っていた。

彼女は、いつも通りと言うべきか、なんと言うべきか。駅に向かう最中に、道に迷って居たところを発見した。だから、保護したまではないが、俺には俺のやりたいことが

あったので、連れてきました。彼女は怪しむ様子もなく、駅員さんに遅延証明書をもらった後、カフェまで到着。

流石にカフェまで連れてきた時は、学校に向かっついていないとか、色々気付いてあたふたしていた。ただ、精神的に余裕が生まれたのか、ちやつかり同じものを注文していたけど。

「いいか花音。俺たちは電車が遅延して、学校に行けない設定なんだ。つまり、仕方ないんだ」

「あのー……私も慧人さんも電車使わないよね？」

「ふっ、そんなことか。俺は気分で乗りたかったことにすればいいし、お前は道に迷いすぎて、気付けば電車に乗っていたことにすればいい」

「ちよ、ちよつと！流石の私もそこまで酷い方向音痴じゃないよお！」

それはどうだろうか。もう二年の冬だし、通い慣れているはずの学校までで迷子になるレベルだ。普通にあり得そうだけどな。

「でも、お前もちやつかり注文しているじゃないか」

「そ、それは……その、流石に何も注文しないのは申し訳ないかな……つて」

「そんなこと言つてく本当はこういうことしてみたかったんだろ？」

「うう……慧人さんが悪の道に墮としてくるよお……」

「ははっ、悪の道なんて物騒だな。まあ、優等生ではないことは自負している」  
そう思っているとスマホが震えた。

「なんか来たな」

「あ、千聖ちゃんからだ……えっと、『何処にいるの?』だって」

「あ、俺も『花音がまだ学校にたどり着いていないみたいなの。探してくれる?』だって」  
「そっかあ。もう朝のHR始まっているんだね」

「そうだなあ」

ということとで、お互いに珈琲を一口。

「とりあえず、千聖には『一緒に居るから心配するな』と」

「そうだね。『慧人さんと居るから心配ないよ』つと」

「あ、返信来た」

「早いね。なんて来たの?」

「『朝から学校をサボってデートかしら?羨ましいかぎりね』だとよ」

「で、デートって……そ、そんなんじゃないよお……!」

「まあ、俺がお前を連れ出しただけだしな」

「そ、そうだよ!嫌がる私を強引に……!」

「待て待て。嫌がるって、いつも通りついてきたじゃないか」

「だ、だって、慧人さんが学校じゃなくて、駅に向かうなんて思わなかったもん」

いや、学校に向かって歩いていないことに気付け……と言おうとしたが、それが分かるなら途中で聞いてくるはずか。

「……花音。絶対に知らない人についていくんじゃないぞ?」

「そ、そんなことしないよお……!」

「いいか、世の中にはな? 道に迷ったら、そこら辺にいた人について行くバカがいるくらいだ」

「それはバカだねえ……でも、大丈夫だよ。私は慧人さんにはついていくけど、知らない人にはついて行かないから」

「花音……で、知っている人についてきた結果がコレか」

「そ、それは慧人さんがサボるからダメなんだよ!」

「いいか? 俺はサボってるわけじゃない。そう、電車が遅延しているから……」

「そういう言い訳をしているからダメなんだよお……」

「……………」

そつと天井を見上げる。ああ、なんだろう。俺つてもしかしなくても不真面目なのかな。

「慧人さん……今からでも遅くないよ? 私と一緒に学校に行こう?」

「ええーもう少しサボろうぜ？」

「さもないと、紗夜ちゃんにあることないこと言っちゃうよ？」

「あれ？流れ変わった？」

おかしいな？優しく諭すような感じの出だしだったのに、一瞬で脅しに変わったぞ？

「はあ……甘い花音。俺がそんな脅しに屈するとも思ってたか？」

「ほ、本気だよ？私だつてやるときはしっかりと——」

「ほら、荷物を持って。行くぞ」

そう言うのと伝票を持って会計に向かう。

「ま、待つてよお……」

荷物を慌てて纏めて後ろからやつてくる彼女。そんな彼女を横目で確認しながら会計をすませる。

「さあ、学校に行くぞ。まずはお前を花咲川に送り届ける」

「何だかんだ言いながら、紗夜ちゃんには弱いんだね……」

「そんな事実はない」

「あはは……多分、周知の事実だよ？」

自然と隣に立つて、自然と腕を組む彼女。まあ、花音は目を離すと消えてるしなあ

……

(慧人さんは目を離すと居なくなるからなあ……何で居なくなるんだろう?)

「なあ、花音」

「何かな?」

「さつきまでのことは、紗夜さんや他の皆には秘密な」

「ふふつ、二人だけの秘密だね」

「まあ、千聖からの勘繰りはあるだろうけど、上手く躲してくれよ?」

「うーん、自信はないかなあ。千聖ちゃん、人の思考読むの得意だもん」

「もしアレだったら、俺がお前を無理やり連れていったとでも言つといてくれ」

「分かった。慧人さんに拉致されたって言っておくね」

「やめてくれ?それだけはやめてくれ?」

「冗談だよ。大丈夫、任せてね」

「そうやって微笑む彼女。まあ、やましいことは一切ないからバレても別にいいんだけど。」

そして、花音を無事に送り届け、俺は虎南高校へ。

「遅れましたー」

そして、堂々と授業中の教室に入っていく。

「冬木君?どうしてこんなに遅くなったんですか?」

「電車が遅延していたんですよーほら遅延証明書です」

「あ、そうですか。大変でしたね」

「ですす」

「でも君なら、走った方が速そうですね」

「あはは、流石に電車にはかないませんよ」

そう言いながら席に着く。いやー……今日も一日始まるか。

余談だが、花音の演技はすぐに千聖に見抜かれたとかなんとか。まあ、いつか。

『やはり、冬木慧人が生徒会長では、この学校は破滅を迎えてしまいますね』

『ええ。校長先生は彼を買っているようですが、このままでは非常にマズいでしょう』

『厄介なのは、生徒の大半と教師の大半を認めさせられていること』

『もう、我々くらいしか残っていませんね』

『そうですね。……我ら風紀委員が彼を粛正しなければいけないかもしれないでしょう』

『来年入ってくる生徒のために、彼の天下を終わらせましょう』

コンコンコン

『どうぞ……ああ、先生ですか』

『ちょうどいい人材が見つかりました。彼らに排除をお願いします』

『なるほど……決行はいつにしますか？』

『そうですね……この日なんてどうでしょう。その他の厄介な皆さんを纏めて排除でき



ますし』

『賛成です』

『よろしくお願ひしますね、皆さん。全てはこの学校の風紀の為に、冬木慧人を排除しまし  
しょう』

『『『まご』』』

以下、もしこの日の朝に出会っていたのが花音ではなく別キャラだった場合のお話です。

『千聖の場合』

「あら？ 慧人、あなたどうしてここにいるの？」

「……千聖か。いやな？ 電車が大幅に遅延しているらしいから……」

「遅延証明書をもらって、合法的に遅刻しよう」と

「その通りだな」

流石、千聖。話が早い。

「ふふっ、私も連れて行ってもらえるかしら？」

「え？」

「だって、慧人は合法的にサボるんでしょう？ 私も面白そうだしついて行くわ」

なんだろう。コイツのことだから、狙いがありそうで怖い。

「狙いなんてないわ。ただ……」

「ただ？」

「学校をサボってホテルに直行。朝から日が暮れるまで慧人と（ピ——）。平日の昼という、他の皆が勉強に勤しんでいるという背徳感を味わいながらの（ピ——）……ああ、想像しただけでたまらないわね。今なら、私とお散歩も出来るわよ？首輪を付け、慧人がリードを持つ……いくら学校があるとはいえ、夜中よりはバレルリスクが高い。きっと、慧人は鬼畜だから公園に放置したり……」

「……千聖。やっぱりさ、学校をサボるなんてよくないよ。ほら、学校に行こう？送っていくよ」

俺は笑顔で千聖に答える。しかし、千聖は嫌そうな顔を向けた。

「嫌よ。私は慧人と学校をサボって（ピ——）したいの。そういう気分なの」

「ほら、お前もオレも学校を休む回数多いしさ。な？やっぱり出席できるときはしつかり、出席しておこうぜ？」

千聖は芸能活動で、俺はサッカーなどで、休んだり遅刻早退が他の人より多い。うん。うん。やっぱり、出席できるときは出席しないとダメだよな。

「大丈夫。慧人は賢いもの。勉強なんて余裕だわ」

「いやそういう問題じゃなくてだな……俺が悪かったので、学校に行かせてください」

「……なるほど。そういうことね」

「うーん、どういう意味で納得した？」

「このまま私を虎南高校へ連れて行って、皆にバレないようにしながら校内で（ピ——）をしよう」と

「そうじゃねえよ!? そんなことしねえよ!？」

「あり得ないわ。あなたのことだもの、きつと、生徒会長権限を使って、生徒会室か保健室を貸切にするつもりよ。そうすれば思う存分できるわね」

「やらねえからな!？」

「あ、慧人。私は保健室がいいと思うわ。生徒会室にはベッドがないでしょう? ……いえ、待って頂戴。確か、慧人以外の生徒会役員は全員女子……生徒会室はもはや慧人と彼女たちの（ピ——）をするための空間に……最高ね! このプレイボーイ!」

「なつてねえよ!?! なつてねえし手も出してねえよ! というか、最高じゃなくて最低だろう普通は!」

「時間が惜しいわね。行くわよ慧人。早くしないと私が妄想だけで満足してしまうわ」  
「勝手に満足してろこのド変態!」

「あう」

この後、何とか花咲川までの登校デートで許してもらえた。

これからは千聖にバレないようにしよう、そう思いました。

『リサの場合』

「あれー？ 慧人君じゃん。どうしたの？ この道、君は通らないはずだよな？」

「げっ、リサ姐……」

「むーげっ、って何かな？ そんなに会いたくなかったってこと？」

「少なくともこのタイミングでは会いたくなかったです」

「ふーん。じゃ、何しようとしていたの？」

「学校をサボって、何かしようと思っていました」

「……はあ。慧人君」

そう言って親指をどこかに向ける。

「少しだけなら時間があるからさ。お話しよっか」

親指を向けた先には小さな公園……あ、やっべ。逃げられないわ。

「……で、どうしてサボろうとしたの？」

公園のベンチに並んで腰掛ける俺とリサ姐。リサ姐は優しい声音で聞いてくる。まるで、イタズラを仕掛けた小学生に聞いてくる感じだ。

「それは……その、やってみたかったです」

「やってみたかった？ 慧人君は学校をサボるとか平然としてそうなんだけど？」

「あれ？ 俺のイメージってもしかして悪い？」

「うん。アタシ的にはどうしようもない問題児かな。風紀委員とか生徒指導の先生が頭抱えていそう」

「こーう見えて生徒会長ですよ？」

「知ってる。でも、慧人君が歴代最強の問題児であることに変わりはないかな」

「あれ？ グレードアップした？」

「ううん。グレードダウンした」

おかしい。リサ姐のイメージが酷い。

「で？ やってみたって？」

「ああ……遅延証明書ってあるじゃないですか」

「あー公共交通機関が遅れたときに出るアレね」

「そうですね。アレが出ると、遅刻とかしても遅刻扱いにならないんですよ」

「確かにね、ししようがないもん。電車の遅れとか、アタシたちじゃどうしようもないじゃん」

「そうですね。だから、合法的にサボって見たかったです。そのために駅に行きたいんです」

「……はあ」

そう言うのと頭を抑えるリサ姐。頭痛でもしたのだろうか？

「相変わらず君は、行動力がぶっ飛んでいるよね……」

「お褒めに預かり光栄です」

「うん、褒めてない。普通はそう思っても、わざわざ行かないからね？というかよく調べたね」

「そこは俺の独自の情報網がありますので……」

「はいはい。全く……いい？その人たちはね？サボりたくてサボっているわけじゃないの」

「ですがリサせんせー。とあるバカは遅延証明書を貰ったことをいいことに、遊んでから学校に行ったそうです」

「……訂正するね。そういう人たちを除いて、多くの人は遅れたくないのに遅れてしまっただよ。ほら、遅刻扱いにならないだけで、居なかつた分の授業を受けられるわけじゃないでしょ？」

「……確かにそうですが……！」

「ね？だからさ、学校に行きたくない理由がないなら、普通に行ってこよう？もし、行きたくない理由があるなら、アタシが相談に乗ってあげるよ」

……なんだろうか。リサ姐がまぶしく見える。……うーん、行きたくない理由か……  
そう聞かれると特に思いつかねえな。

「うーん、行きたくない理由は特にはないですね。ま、行きたい理由もないけど」

「だったら、行つてきたら？」

「気が乗らねえ……というか、リサ姐つてアレですよ。見た目ギャルというか、不真面目そうなのに、真面目ですよ」

「おっと、どうやら君は怒られたいらしいね？ いいんだよ？ ここでお説教を始めても」

「そんな脅しには屈しませんよ？」

「ふーん。そうなんだ……」

そう言つて手首を掴むリサ姐。逃がさないつていうことだろうか？

「じゃあ、慧人君の好きにしていよいよ？ 学校、サボりたいならサボつていいんだよ？」

「あ、マジですか？……で、この手は？」

「そこにアタシもついて行くつてこと。あーあ、慧人君がサボつちゃうとアタシまでサボることになるのかー残念だなー今日のー限は楽しみにしていたんだけどなあー」

俺に向かつて言っているというより、ただの独り言という感じで告げてくる。……  
はあ。そんなに言われたら……

「……分かりましたよ。今日はサボりませんから。大人しく投降しますよ」



「ええーいいんだよ？ほらほら、サボっちゃいなよ」

「……リサ姐に迷惑をかけると後が怖いので。それに、紗夜さんに無理やり連れていかれたとか言われても困りますし」

「えへへーバレた？」

そう言つて舌を出して、空いている手でスマホを見せてくる。イタズラが成功したよ  
うな顔……全く、この人は。

「まあ、改心したなら今のことは水に流してあげるよ☆」

「へいへい。未遂でしたけどね」

「うんうん……つてああ！慧人君と話していたらもうこんな時間なんだけど!?走って間に合うかどうかなんだけど!」

「ドンマイ☆」

「コロスよ★」

俺が笑顔で言うのと、ガチトーンで言われた。ちなみに、声音と目はマジだったのに、笑顔だったのが怖かったです。

「じゃ、送ってきますよ。時間をとらせてしまったのでね」

リサ姐を抱える。さてと、ここから羽丘までの最短経路は……

「あ、あのいきなりは……恥ずかしいというか……」

「しつかり捕まって、振り落とされないようにしてくださいね」

「へ？」

次の瞬間、俺は走り始めた。そして、近くの外壁をジャンプで登り……

「ひゃっほーう！」

「いいいいいいいいいややややああああああああああああつ??！」

この後、屋根伝いに羽丘まで行ったら、道中でリサ姐が気絶した。

着いてから起こしたが……何だろう。凄い怯えられた。間に合ったからよかつたんじゃないかな？

ちなみにですが、数日間。リサ姐から避けられることになりました。一体、何がダメだったんでしょうかねえ？

『紗夜の場合』

「おはようございます、慧人さん」

「おはようございます、紗夜さん。ではこれにて失敬……」

ガシッ

紗夜さんと挨拶をして、すれ違った瞬間、肩を思い切り掴まれた。あはは……

「時に慧人さん」

肩を掴んだまま、こちらに顔を向けることなく問いかけてくる。

「何ででしょうか？」

「あなたはどちらへ行くこうとして居るんですか？」

「やだなー学校に決まっていますよー」

「ふふつ。でしたら、何故こんな場所ですれ違うんでしょうねえ？見たところあなたは一人で制服姿。サッカー部のランニングならまだしも、そんな格好で会うのはおかしいんですよ」

「あーいつけね。今日は創立記念日とかで休みでした。いやーうっかりうっかり」

「ふふふつ。面白い冗談です。あの慧人さんが、休みの日を把握していないのはあり得ません。本当のことをおっしゃってください」

……やつべ。予想通りと言うべきか、完全にバレてる。

「紗夜さん。学校に行くのは嘘ではありません」

「ええ、そうでしょうか？」

「俺は、たまたま電車で通学した日に限って、たまたま電車が遅延し、遅延証明書が発行されるんです。だから遅刻しても仕方ないんです」

「ふふつ、正直におっしゃってください。学校をサボりたい、とね」

「……その通りです」

「素直ですね。よろしいです」

そう言つて取り出したのはスマホ。何処かに電話をかけようとしている様子だ。親だろうか？ だとしたら甘いな。その程度で俺は止まらねえからな。

「あ、もしもし虎南高校ですか？ はい。お宅の生徒会長さんが、学校をサボろうと企て……」

「手が滑ったあああああつー！」

「きゃつー！」

肩から手を放させ、反転し紗夜さんのスマホを掴む。あまりのことにバランスを崩しそうになった彼女を抱きしめつつ、スマホを掴んだ手で電話を切る。

ふう、あぶねえ。だが、これで学校側はいたずら電話だと思はずだ。

「手が滑ったじゃないですよ……早く放して下さい。こういうことは人目につかないとところで願います」

「あ、すみません」

「全く……今の慧人さんは通報されても文句が言えませんかよ」

そつぽを向きながらそう答える紗夜さん。

「すみません……ポテトを奢るので許してください」

「分かりました……別に、元々通報する気もないですけど」

ここで、衝撃が走った。まるで、電気が流れたのか、俺の脳はフル回転する。そして、あることを思いついたのだ。

「でも、紗夜さん。今から一緒に行かないとポテトは奢りません」

「ぐっ……！」

胸をおさえる紗夜さん。ふっ、ポテトが絡むと彼女はポンコツになる。

落ちて置いて考えれば、明らかに彼女の方が優位に立っているのだが、今の彼女は気付かない。

「ポテト……学校……ポテト……学校……」

「……………」

どうしようこの風紀委員。ポテトと学校を天秤にかけているんだけど？え？大丈夫？マジで大丈夫か？

「紗夜さん……？」

「ポテト……ポテト……学校……ポテト……」

「いや、だいぶポテトに引つ張られていますよね？えっと……」

どうしよう、流石に俺の良心が……ねえ？何か、悪いことしている気分になってきたんだけど。

「決めました。行きましょう」

「ちなみにですが……何処に？」

「ポテトです」

「いや、学校に行きましようよ。そこは学校でしょう？」

「学校の方は大丈夫です。遅延証明書を貰えばいいので」

「いや、良くないですけど？あなた、電車を使わないでしょう？」

「何を言っているんですか？私は、たまたま電車で通学した日に限って、たまたま電車が遅延し、遅延証明書が発行されるんです。だから遅刻しても仕方ないんですよ」

「いやそれ、さっき俺が言ったことですけど？あなた、否定したんですけど？」

「記憶にございません」

「マジかよおい」

「さあ、行きますよ！ポテトが待っています！」

ズルズルズル

首根っこを掴まれ、引きずられる……ああ、もう。どうにでもなれ。

この後、無事遅刻しました☆

## 勝手に訓練の相手にされた件について

冬木慧人です。

さて、本日は部活に行こうとしたところを見覚えのある黒服さんたちに車に乗せられ（車が高級車で満喫していたのは内緒）何処かの施設に連れてこられました。よくあることなので狼狽えることはしませんし、警察も呼びません。警察なんて呼んでも権力で握り潰されそうだし……

「あのーそろそろ事情説明を求めたいのですが……」

見渡す限り、黒服プラスサングラス。すごいなあ……こんなに同じ格好の人が居ると見分けが付かない。とりあえず、隣の黒服さんに事情を聞くことにするが……

「これより、『こころ様一行が戦闘力が高めの不良に絡まれている』という緊急事態における対人戦闘の模擬訓練を行う」

………はい？

「今回、この模擬訓練の相手を務めるのは、こころ様の御友人であるこちらの冬木慧人様です」

「よろしくお願ひしますー」

黒服さんたちが皆揃って礼をする……いや待つて。ちよつと待つて。

「……すみません。何が何だか分からないのですが……」

「すみません冬木様。実は……」

何やら黒服さんたちが準備している中、指揮を執っていた黒服さんが説明をしてきている。

えーつと？どうやら黒服さんにも階級的なのが存在して、目の前にいるのは黒服（見習い）らしい。で、黒服さんたちの使命の中にはこころやその近くの人間の護衛も含まれており、通報とか応援を呼ぶにしても、最低限の時間稼ぎなりできるような、言わば武力を兼ね備えておく必要があるらしい。

で、こういうものは場数を踏みにくいので、訓練して備える必要がある。いや、それは分かった。ようは防災訓練とか避難訓練みたいなものだろう？

「……で、何で俺なんですか？」

「はい。やはりそういうオイタをする多くは高校生や大学生などの若者の男性。そうなれば訓練にもそう言った相手を用意する必要があります。冬木様は不良と言われても通り、更に喧嘩慣れをしており、今回の訓練相手としては最高だと判断しました」

「いや、不良と言われても通るって何気に酷くねえですか？後、若者だけではない気がするんですが？」



「まあ、若者の男性の方が暴力沙汰になったときに押さえるのが難しいということ。ちなみに参加していただけるのであれば謝礼を用意します。こちらにできることならなんなりと」

「よし、参加するか。そこまで言われたら仕方ない」

いや、弦巻家が謝礼とか、マジで言ってる？ そんなこと言われたら釣られるしかないだろう。

「ではこちらを」

「何でしょう？」

「ボディーアーマーです」

「あ、軍隊とかで見るあのイメージか。それにしても見た目がジャージと変わらないよな……」

「そこは我が弦巻家の努力の結晶です。これは今回のことで冬木様が怪我を負わないようにするために着てもらいます」

「ありがとうございます」

というわけで着込む……ふむ。なるほど。全然重くないな。というか、ジャージの上にジャージを着て……まあ、寒くないし動けないわけじゃないからいつか。

「訓練の内容としては、場所設定は路地裏。冬木様はこころ様を捕らえた状況で、こころ

様を助けようと襲い来る彼女たちをたたきのめしていただければよいかと。一応、黒服さんころ様を模したマネキンはこちらに立てさせていただきます。また、彼女たちは黒服の下に特殊加工の服を着させていただいているので首より上を狙わなければ問題ないです」  
「特殊加工？」

「はい。クツション性に優れていますので痛みや衝撃はほとんどカットされます。代わりに、蓄積ダメージや衝撃を計測し、一定基準を超えると、骨折や気絶などを判定できますので、それにより戦闘不能のジャッジが出せるかと」

「ほうほう」

「それと彼女たちは、普段から所持できる武器である警棒などの武器を使います。もちろん、破壊していただいても替えはありますのでご心配なく。また、冬木様も鉄パイプのような武器を必要であれば、ご用意できますが……」

「あー武器はいらねえです」

「かしこまりました。場所はこちらになります」

すると連れてこられたのはいかにも路地裏つて感じの場所。暗さはもちろん、左右が狭く高い壁になっている。わぁーどんだけ金使ったんだろ。

「目安として。最初は3〜4名が。数分で制圧した場合は、次のグループに。もし、出来なければ増援が来ると思ってください」

「へーい」

「ちなみに、あなたを倒した場合、特別報酬が出ると伝えてあります。では協力をお願いします」

特別報酬？何だかよく分からないことに巻き込まれたが……とりあえず、  
「全員倒して、ぶちのめせばオツケーなんだろう？」

『はあ!』

『この男……! 強過ぎ……!』

『け、警棒が折られた!?!』

『一撃で骨折判定!?!』

『この服越しに衝撃が……!?!』

『うわあ!?!』

次々と黒服さん（訓練生）が倒される様を見る黒服さん（教官）。

「想像以上の強さですね……彼女たちも決して弱くないのですが……」

「でも、打倒した場合は特別報酬を出すと言ったほどですし……これぐらいを想定していたのでは?」

「いえ、こんなレベル想定外ですよ……いくらまだ訓練生である彼女たちでも、今までの訓練は怠っていません。いくら喧嘩慣れた人相手でも、数分は軽く持つと踏んでいたのに、一グループ壊滅させるのに一分かからないんですから。それに……」

黒服さん（サポート）は黒服さん（教官）の指差す方を向く。

『せい!』

『そんな奇襲が……!?!』

『け、携帯武器が一瞬で!?!』

「壊していいと冗談で言ったつもりですが、誰があそこまでこちらの武器を壊して、しかも壁ジャンプからの膝蹴りをすると思いますか?というか、武器もそんな柔ではなく、私たちと同じものだというのに……」

「ええ。彼は逸材ですよ」

「あなたは……」

と、黒服さん（慧人を連れてきた張本人）が会話に加わる。

「彼は格闘技の経験はゼロ。あの人には型というものがなかったため読まれにくい。恐ろしいまでの潜在能力と培われてきた経験、超人的な身体能力に無尽蔵の体力、更に身に付いたいくつかの能力。1対1……いえ、1対大勢の喧嘩でさえ彼に勝てる者は少ない。……タイマンに限定すれば、私の知る限りゼロですね」

「……………」

「それに、まだアレは彼にとつて準備運動に過ぎないですよ。彼の本気はあんなものですよ。すまないですから」

「……………」

「でも、だからこそ。この訓練の意図に彼女たちは気づけるか。見物ですね」

黒服さん（慧人を連れてきた張本人）がサングラスを軽く押し上げる。既に黒服さんの山ができてきているのに、それでも本気を出していないという。

知らない者が見たら困惑を隠せない惨状の中、ついに黒服さん（訓練生）は全滅したのだった。

「ふう……あれ？もう終わったのか？」

「お疲れ様です。一時間後にまた同じ訓練を行いますので、それまで待つていただけると幸いです」

「そうですか？あ、じゃあ、サッカーボール貸してください。練習しているんで」

「すぐにお持ちしますので、彼女について行ってください」

そう言って現れた黒服さん（案内役）に着いていく慧人。

そうして慧人が居なくなつた中、黒服さん（教官）は黒服さん（訓練生）に告げる。

「一時間後、同じ形式の訓練を行う。なお、先ほどとは違い、グループの人数や構成を変更可能とする」

「すみません教官！あの男は何者なんですか？」

「あんな強さを持つ高校生、正直勝てる気がしませんよ」

黒服さん（訓練生たち）の声を受け、黒服さん（慧人を連れて来た張本人）が前に出て説明を始める。どこからか取り出したスクリーンとプロジェクターをセットすると

慧人に関する情報が出て来る。

「冬木慧人様。虎南高校に通う高校二年生。生徒会長に就任し、現在サッカーのU—18日本代表に選抜される。C i R C L Eでバイトをし、そこでこころ様と知り合う。基本ステータスはこんな感じでしょうか。そして、弦巻家独自の危険度ランク、最恐の「S級」

「……っ！SS級って……そんな……！」

「たつた三人しかない……最悪の危険人物……！」

「ええ。本来、私たちが設定する危険度は下からZ，C，B，A，Sの五段階に分かれています。殆どの人は危険度ゼロのZに属しています。……存在していない幻のSS級。それは、一般的なS級とは比較にならないほどの危険因子を持っていると判断された場合のみ分類される。これまでに三人……『王』『絶対悪』『天災』……その内の天災の異名を付けられたのがさつきもお会いした冬木慧人様。最年少のSS級で、トラブルメーカーであり、戦闘力UNKNOWN。誰にも止められず気まぐれで全てを破壊してしまう。その様子は天の災害に等しいとされます」

「そんな人大丈夫なんですか!？」

「ええ。あくまで何かの都合で敵に回したときの危険度ランクです。他のSS級の二人と違い、彼自身とは友好的な関係を築いていますので、味方としては恐ろしく強いカード

です」

友好と言うが、実際はこころの思いつきによく巻き込まれるため仲良くなつた結果である。

「彼の武器の一つは異常なまでの気配察知能力。範囲内の人の位置などを把握してしまふ能力です。範囲は不明。ほぼ常時発動しているため、奇襲、尾行などは不可。また一度気配を覚えられてしまえば、多人数の気配の中から判別可能とのこと」

「……そんな……！」

「じゃあ、奇襲しても見破られたのは……」

「そういうことです。また、戦闘力UNKNOWNの理由としましては、彼が本気を出したところを見たことがなく、推測不能なためです」

「……え？」

「嘘……アレで本気じゃないの？」

「こちらは先日、とある高校に彼が乗り込んだときの映像です。この高校は、こころ様か通う高校から比較的近いこともあり、マークされていた不良が集まる高校です」

そう言つて慧人が乗り込んだときの映像が流れ始める。

「このように彼は、相手を威圧し、声を発することで行動を制限させることが可能です。条件があるかもしれないですが、真相は不明。ただ純粋な戦闘能力も、金属バットを蹴



り砕く、腕を振ってその軌道上の人を吹き飛ばすなど……はつきり言って恐ろしいですね」

「……………」

「どうしましたか？あ、ちなみに別の日になりますが、彼が自身に向かってくるひつたくり犯のバイクを蹴りで破壊した映像もありますか……」

「……………」

（（そんなバケモノにどうやって対処しろと……？））

「では今より40分、作戦会議の時間とする。以上」

絶望的な事実を突きつけられた黒服さん（見習い）たち。彼女らは、二つの勢力に別れていた。

「次は油断しない……」

「ただの高校生じゃないと分かった以上、本気で倒しに行くわ」

先ほどまでの情報を踏まえた上で、自身の力を最大限発揮し、慧人を倒そうとするグループ。

「いいですか。この訓練の意図はおそらく……」

もう一つは、慧人に武力で勝つのを諦め、別の方法で勝とうとするグループ。

比較的好戦的な性格をしている黒服さんたちは前者の、それ以外の黒服さんたちが後者のグループに所属している。

各々のグループが作戦会議を行い、時間が経ったところ……

「それでは第二部訓練を始めます」

既に慧人は準備万端。隣には、こころを模したマネキンが立てられている。

「私たちから行くわ!」

「早速だけど、容赦しないわよ!」

動き出したのは慧人を倒そうとするグループの人たち。武器を片手に突撃していく。

「……1、2、3……数えるの面倒だなあ」

欠伸をしながらそう呟く慧人。そして……

「まあ……どうせ、立っている人数が0に変わるから関係ないけど」

軽くしゃがみこんだと思うと、次の瞬間には加速し……

「まず一人つと」

懐に入り込み、膝蹴りを放った。一瞬で気絶、骨折判定が出る黒服さん(被害者)。いくら衝撃を吸収できると言っても、限度があるようでそのまま倒れ込んでしまった。

「今よー!」

しかし、既に周りには武器を構えた黒服さん(過激派)たち。一斉に攻撃を仕掛けた。

「……………」

その攻撃を基本的には最小限の動きで避け、避けきれないと判断したものは拳や足で武器を破壊していく。気付けば彼の周りには武器の残骸がいくつか落ちていた。

「じゃ、次は俺の番か」

ターン性バトルというわけではないが、全員の攻撃が一通り終わつたのを確認し、慧人は攻撃を仕掛ける。

「全員、跪け」

「「……………っ！」」

と言つてもただ言葉が発しただけ。しかし、その言葉に従うように、次々と黒服さん（見習い）が跪いていく。

（こ、これが例の威圧……………！）

（身体が……………！身体が言うことを聞かない……………！）

（なんで……………なんで動けないんだ……………！）

知らない人たちが見れば、誤解しか生みようがないだろう。男子高校生相手に、黒服さん（見習い、女性）が何人も跪いてるのだから。

「……………で？このグループは終わりでもいいですか？」

黒服さん（教官）に問いかける慧人。

「ま、まだ行けます……………！」

「そうですよ……………！」

その言葉に数人は震える脚を押さえながら立ち上がろうとする。

「あ、そう」

そんな様子を見ながら慧人は、立ち上がろうとする黒服さん（見習い）に足払いを仕掛け、倒していく。起き上がろうとすれば、すぐさま倒される。本気で一撃叩き込めば、終わりなのにそうしない。

「第一グループ。終了します」

あまりにも一方的な様子を見て、黒服さん（教官）は終了の合図を出す。

しばらくして第一グループの人たちが全員退いた後、

「それでは第二グループが向かいます。冬木様、準備はよろしいですか？」

「大丈夫ですよ」

「では始めましょうか」

そう言うと第二グループの黒服さん（穏健派）が走り出す。

「……まあ、サツサと終わらせるか」

そう言つて、地面を力強く蹴つて、急接近。そのまま黒服さんたちのうちの一人を蹴り飛ばす。

「どうせここで……ん？」

と、ここで黒服さんたちのうちの三人が慧人を押さえつけようとする。一人が背後から両腕を両脇の下を通して押さえつけ、二人が片足ずつを封じ込めようと抱きかかえるようにして持つ。

「動くな」

残りが慧人を無視して、こころのマネキンに向かうことを悟った慧人は、命令を下す。しかし、黒服さん（穏健派）は命令に逆らい、動きを止めない。

「……あ？全員効かねえとかどういう……ツチ！」

そこで慧人は気付く。黒服さんの耳には耳栓がしてあることに。彼の命令は聞こえていなければ届かない。単純だが、確実な対抗策なのだ。

そのことに気付くと、両腕の拘束を無理矢理解き、肘鉄を背後に喰らわせる。抑え役の一人が骨折判定をもらったのを確認しながら、解かれた腕で、足を掴む二人に向かって、拳を振り下ろす。

「……ッ！」

素早く両腕に骨折判定を出させ、拘束を解く。

しかし、解いた時には、既にこころ（マネキン）と慧人の間には黒服さんたちの壁が。（全員倒す？いや、一人あたりにかける時間とここからマネキンまでの走る時間を考慮しても、間に合わねえ。何でもありならともかく、制限付きならなおさらだ。しかも、アレも音が聞こえないなら無駄だし、壁を走って行っただとしても到達する前に邪魔が……）

黒服さんの壁を見て、考える慧人。考える時間は数秒もなかっただろう。状況を判断

して、慧人は両手を挙げることにする。そして……

「負けました」

静かに敗北宣言をしたのだった。

「冬木様の宣言により、第二グループミッション達成。速やかに全員整列してください」  
黒服さんたちはすぐに切り替え、整列する。慧人も若干困惑しつつも、呼ばれた方向に向かって歩いて行く。

全員が並んだところで黒服さん（教官）が話し始めた。

「今回の訓練は対人戦闘訓練と称していました。確かに、半分はその意図で行いました。残りの半分……第二グループの方は気付いたかもしれませんが、我々が優先すべきはこころ様、並びにご友人の安全です。いいですか？もし、実際に事が起きたとき、事を起こしたものたちを肅正するのは後でも出来ます。しかし、そのものたちに気を取られ、こころ様たちに危害が及んでしまつては意味がありません。何時如何なる状況に置いても、我々はこころ様をお守りすること。それが使命であり優先すべき目標なのです」  
そう言うとき少し苦い顔をする第一グループの人たち。何故、対人戦闘訓練なのに、あんなに状況設定がなされていたのか。何故、集団でかかっても太刀打ちできないほどの強敵が用意されていたか。第二グループはそれをくみ取つたのに、自分たちは優先すべき事を間違えた事に悔しさを隠しきれない。

その後は講評や、今回の結果を各々に伝えられ解散した。慧人は、黒服さん（拉致した本人）の運転する車に乗りながら、帰っていた。

「今回は御協力に感謝します。彼女たちにとつて貴重な経験になったでしょう」

「別に俺は出来ることをしただけですよ」

「謝礼は後日。お望みのものをご用意させていただきます」

「そこまで大袈裟じゃなくていいですよ。今回の訓練は俺にとつても有意義でしたから」

「それならよかったです。今後ともどうかよろしくお願いしますね」

「次は事前に言ってもらえると助かります」

（……やはり、声が聞こえていない人を従えることは出来ない……か。声も出さず、動きも見せず、威圧感だけで相手を屈服させることが出来るともつといいか……）

もはや、バトル系漫画でしか必要のないことを身につけようとし始める慧人。

しかし、まさかそれが役立つ日が遠くない内に来るとは、誰も予想できなかったのだった。



## クリスマスとはなんぞや？ 前編

12月も20日頃となればもう、世間はクリスマス一色だろう。数日後に控えるクリスマスのために街は彩られ、徐々に盛り上がりを見せているだろう。

「……………」

「……………」

「……………」

が、それはあくまで街全体の話。我らが虎南高校サッカー部は非常に重い空気に包まれていた。

「…………皆の者…………話は聞いていると思うが…………」

教壇に立っていたキャプテンはゆっくりと目を開くと、席に着く俺たちを見渡す。後ろの黒板には『サッカー部定例会議』と書いてある。

「先日、学校側が行ったテストの結果。我らがサッカー部からは、マネージャーたち、仙石、森下…………そして冬木。今挙げた五人以外全員が補習を受けることが決定してしまつた！」

ダンッ

黒板を殴り付けるキャプテン。その様子を見てか、他の部員たちも拳を握り締める。

「あろうことか……! あろうことか学校側は! クリスマスイブとクリスマスも一日補習漬けにする予定だ!」

『な、なんてことをするんだ学校側は!』

『許せない……許せないぞ!』

『ふざけんじゃねえ! バカなのか奴らは!』

一応、ウチの学校は終業式が12月23日なため、一部の生徒は12月24日から冬休みである。え? 一部じゃなくて大多数だろって? 先日のテストの結果、全校生徒の約七割が補習を受けることが決定したけどなにか?

「そうだ! しかも奴らの言い分は、『どうせ、クリスマスとかクリスマススイブとか暇だろ? なら、ちようどいいし勉強しようじゃないか』だ。ふざけるんじゃない! 我らにはクリスマススイブとクリスマスには大切な使命があるというのに何が暇だ!」

涙を流しそうになりながら両手を教壇につけて項垂れる。顧問はいつも通りいなくて、マネージャーたちは買い出しに行ってもらった。流星にこんな(阿呆な)ことに巻き込みたくないということらしい。

「あのさ」

「何だ裏切り者」

「いや、裏切つてないけど? テメエらが阿呆なのが悪いんだろ?」

「で? 何だ?」

「いや、教師陣の言うとおり、お前らクリスマススイブとかクリスマスとか無縁の暇人だろ? いいじゃねえか、空白だったカレンダーに補習っていう素敵な予定が埋まって」

『このクソ会長! 煽つてんのか!?!』

『そうだそうだ! 生徒会でハーレム作つたクソ野郎が!』

『いい気味だよなあ? 女に困らねえ野郎はよお?』

『コイツ、イマ、コロス』

『殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺』

『殺つちやう? ねえ、殺つちやう?』

バアンツ!

黒板を力尽く叩くバカ。

「静まれ」

『『『……………』』』』

その一言は、暴徒となりそうな(一部は末期だったが)我がチームメイトを一瞬で静めた。たった一言で皆を纏めるカリスマ性……恐ろしいな。だが、どうやら今のコイツは俺の味方のようにだし、安心して――

「確かにこのクソ野郎は紐なしバンジーからの八つ裂きにして、火炙りからの犬の餌にしてやりたい……………」

——違った。コイツも敵らしい。というか、思想がやべえ。

「だがお前ら！忘れてはならないことがある！いいか！この補習を潰さない限りオレたちは、コイツだけじゃない！この街に蔓延るコイツ以外のクソ野郎も狩れないだろうが！」

『……………っ！』』』

目が覚める多くのサッカー部。

ちなみにだが、森下はずっとスマホをいじっているし仙石に至っては寝ている。どうにも、この暴徒たちを止められる存在はいないらしい。というか、俺の味方がいない。「目の前の敵だけに囚われるんじゃない！俺たちには狩るべき敵が多いって事を忘れるんじゃない！」

『……………さ、流石だぜキャプテン！』

『感動した……………！俺、アンタに一生ついて行くよ……………！』

『ああ、そうだよな！俺たちはこの世界の救世主になるんだ！』

『そうだそうだ！これは救済なんだ！』

『大体クリスマスは由緒正しいイエス・キリストの降誕祭だろうが！』

『決してカップルがイチャつく日じゃねえんだよ！』

「ああ。我々の使命は正しいクリスマスを取り戻すこと……そのためには補習を潰す必要がある」

「……………帰っていいか？」

本気でそう思っていると、唐突に教室の扉が開け放たれる。

「話は聞かせてもらったぞ」

そこには野球部やテニス部などの部長たち。更には三年生の先輩たちなど……どうした？ そんなに集まって、うるさかったか？

『俺たちも協力させてもらえないか？ サッカー部キャプテン』

『そうだぜ？ サッカー部ばかりに頼ってられねえよ』

『我ら野球部。全員力を貸そう』

『同志たちよ。協力は惜しまないぜ？』

『俺たちに補習だ？ そんな企み潰してやろうじゃねえか！』

「お前たち……ああ！ そうだな！」

……………いや、補習になったのお前らの自業自得だろうが。何、問題行動を起こそうとしているんだよ。これ以上問題行動を重ねるなよ。バカなのか？ バカだったな。

「ここにクリスマスの秩序を守るため！ 憎き補習を潰すため！ ここに虎南高校の戦線協

定を結ぶことを誓う！賛同する者は拳をあげろ！」

『『『おおおおおおおつ！』』』

「学校側に……そして世間に思い知らせてやろうぜ！俺たちの存在を！」

『『『おおおおおおおおおおおつ！！』』』

「そのためにまずは……お前ら！虎南高校唯一の裏切り者！冬木慧人の討伐だあ！」

『『『おおおおおおおおおおおおおおおつ！！』』』

……あれ？今流れ変わった？そう思った瞬間にギラついた眼が俺を射貫く……ああ、  
そういう。

「んじゃ、失礼」

ということとで、窓から飛び降りる。後ろから逃がすなって声が聞こえるが……知らね。

そして、12月23日になった。あの日の鬼ごっこは割と簡単に逃げ切ることができた。だって、一度飛び降りてから屋上まで壁や窓を伝って登っていったら誰にも発見されなかったもん。バカか。飛び降りて逃げるだけしか脳がねえわけがないだろう。

「では、続いて。冬木慧人生徒会長より挨拶です」

あれからバカどもは入念に準備を進めていた。各々が黒装束或いは白装飾を準備していた。黒装束は闇夜で紛れるためと言っていたし、白装飾は……ねえ？相手の血で染めればサンタクロースって笑顔で言っていた。うん。やべえ。

とりあえず、今は終業式。俺は生徒会長として壇上にあがり挨拶をする。……ん？挨拶

拶だと？あーそう言えば原稿を作つとけつて、副会長に言われていたな……忘れていたわ。まあ、ノリで何とかなるでしょ。

「お前からあ！明日から冬休みだけど元気かあ！補習がある奴らはサボるんじやねえぞ！」

『『余計なお世話じゃ！』』

ちなみに補習をサボつた場合、冬休みの課題が三倍にされ、それが提出できなかつたら毎週毎週補習を組むらしい。だから奴らはサボらずに潰す必要があり……何か秘策があると言つていたけどよくは知らない。

「俺から言うことはただ一つ！ここにいる全員、冬休み明けに生きて会えることを願う！誰一人として欠けることは許さない！これは生徒会長命令だ！いいな！」

『『おおおおおおおおおお！』』

「以上！これにて終業式を終わる！解散！」

『『ありがとうございしましたあああああつ！！』』

『『いや、どんな挨拶だよ！というか勝手に終わらせるなあつ！』』

叫ぶアホども。ちなみに、まともな生徒及び教師陣から総ツツコミを喰らつた。おかしいなあ？結構真面目な挨拶をしたはずなのに……クソ、何がいけなかつたんだ？もつと、場を盛り上げるべきだったか？



「……馬鹿会長が失礼いたしました。後で生徒会メンバーからきつく言っておきますので、まだ解散しないでください。続いて……」

壇上を降りるとやれやれと頭を抱えた人たちが居る。仕方ない。今度からは原稿を作ってから挨拶をしよう。

ちなみにだが、アイツらのクリスマス破壊計画は、恐ろしいもので入念な下調べとそれに基づき、どんな状況でも対処できるように作戦を練っていた。俺が知る限りでも、カップルがイチャつくであろうポイントや、裏路地などの何かしらが起きそうなポイントを徹底的に調べ上げ、そこでどう行動を起こすか考えていたが……うん。お前らその分勉強しろよ。力の使い方間違えているんだよ。

そして、運命のクリスマススイブ……その日の夜。俺は……

「なんでC i R C L Eの補修工事なんでしょうねえ……い！」

「終わらないから仕方ないじゃん！」

まりなさんと共にC i R C L Eの屋根上でハンマー片手に頑張っていた。

「でもよかつたじゃん。こうして、ぼっちは回避できたんだし」

「それ、ブーメランですよ」

「……あれ？高校生男子……年下の男の子とクリスマススイブに二人きり……もしかして、私捕まっちゃおう？」

「勝手に捕まってる、です」

「私が捕まったら……C i R C L Eのこと……頼んだよ」

「……仕方ないので、逮捕は年明けまで待ちます」

「うわあ……用済みになってから消す気だ……ねえ、慧人くん。どっちが上司か知って  
る?」

「まりなさんですよね?」

「うん。知っててその反応なんだね」

と、悲しい話をしながら補修工事は進んでいく。

「ねえ、慧人くん。下に誰がいる? さつきから声が聞こえるけど……」

「アイツらが来てますけど?」

「アイツら?」

「ポピパを筆頭にいつもの五バンドの面子が続々と集まっています」

「へえ……なんで?」

「え? まりなさん聞いてないんですか? ポピパの発案で、C i R C L Eでクリスマス  
パーティーをやるうって話になってたんですよ。俺も誘われてますよ? ほら」

「へえ……あれ? おかしいな? 私、何も聞いていなかったんだけど……」

「年齢制限つてやつですよ」

「あああああつ! また歳の話しているね! ちょっと若いからって調子に乗っているん  
じゃないよ!」

『慧人さん。そろそろ降りてきてください』

すると下から紗夜さんに呼ばれる。

「へーい、今行きまーす。ほら行きますよ」

「へ？ちよつ、首根っこ掴んで飛び出さないで」

「あいきやんふらーい」

「いやあああああああつー！」

スツと綺麗な着地を決める。本当は三回転くらいしたかったけど、さすがに人を掴んでやるのは危険と判断し、やめておいた。

「し、死ぬかと思った……寿命が……寿命が……」

「あははく大袈裟ですね」

「笑い事じゃないよ！梯子があるでしょうが梯子が！」

「梯子なんていらなくね？」

「いるから！」

ぶーぶー言うまりなさんを脇に抱えて中に入る。そこにはクリスマスツリーに飾り付け、料理も並んでおり、更に既に居た25人は全員サンタ帽を被っている。

「楽しそうだね」

「あ、まりなさん！お疲れ様です！」

「まりなさん。はいこれ」

まりなさんを放すと、そのままたえがサンタ帽を被せる。

「慧人先輩も」

「おう……うん？」

俺にもつけられるが……おかしいな。サンタ帽じゃないぞ？どっちかというとな  
カイだぞ？

「うん。慧人先輩よく似合っている。うさぎでも良かったと思う」

「絶対やらないからな」

「じゃあ、私がまずやるのでお揃いにしましょう！」

「やらねえつての」

「何ですか？」

「やりたくねえからだよ」

「私がいいと思いますよ」

「嫌だよ」

と、たえと共にウサギのコスプレをどうするか話し合っ  
て居る中……

「メリークリスマス！」

気付けば……ころのかけ声と共にクリスマスパーティーが始まった。

「慧人さん。お疲れ様です」

「紗夜さん……！あ、珍しくポテトを持ってないですね」

「私がいつもポテトを携帯しているように言うのやめてもらえますか？」

「しようがないよおねーちゃん。だって、事実でしょ？」

「で、日菜。何で後ろから乗ろうとしているんだ」

「ええくだって、今の慧人はトナカイであたしってサンタじゃん？だから乗ろうと思っ

てー」

「よく思い出せ？サンタはトナカイの引いているソリに乗ってるんだぞ？トナカイに

乗っているわけじゃない」

「そうよ日菜。それにそこは私のポジションよ。今すぐ降りなさい」

「うん。別に紗夜さんのポジションってわけでもないですよ？」

「そうよ。トナカイを慧人虐げていいのは私だけよ」

「うん。千聖？それも違うからな」

「……え？」

サツと何かを後ろに隠した千聖。一瞬首輪に見えたけど見なかったことにしよう。

「そ、そうね……トナカイの逆襲……やられるサンタ……獣○……」

「はい、千聖。黙ろうか？」

「……」

「で？とりあえず、降りようか日菜」

「ええ〜いいじゃん。背中空いているんだし〜」

「ダメです。ほら離れなさい」

「は〜い」

いつも通り……いや、いつもより賑やかな様子の彼女たちを見ながら、少しだけ輪から外れて窓際へと移動する。

何というか……C i R C L Eがあつたから彼女たちと出会えた、ここがあつたから色々なことを経験できた。……そう思うと、出会うきっかけになつたここが潰れるというのは……少しだけ嫌だな。多分、これが寂しいとかそんな感情だろう。何かが起きない限り続くことはない……分かつてはいるが、その何かが起きて欲しいと願う自分がいる。というか……

「絶対に何かが起きるだろ……」

不思議とそう思えてしまう。だからその何かがいい方向へと転ぶようなものであることを願うだけだ。

「けいさんは……混ざらなくていいんですか……？」

「そう言うりんさんこそ、混ざらなくても？」

窓際にいるとりんさんが話しかけてくる。

「ここに居る皆さんは平気だけど……やっぱり……人が多いのは苦手で……」  
「そうですか」

「けいさんは……賑やかな方が好きだと……」

「それでもないですよ。俺だって落ち着いた感じも好きですし……それに」

「それに？」

「眩し過ぎるんですよ。ここは」

俺のようなやつにとつてはあまりにも輝いている。ただ、やはりというべきかもうすぐこの場所がなくなってしまうことが改めて思い起こされ、悲しそうな表情を浮かべ始める人たちが現れる。

そんな彼女たちの悲しそうな思いを上書きするように、香澄を中心に、最後のライブに対して意気込んでいる。そんな様子を外から見守っている……そんな時だった。

「……あ」

「どうしました？」

「いえ……雪が……」

「え？」

あれ？今日って雪の予報は出ていなかったんだけど？というか、少し前まで屋根上にいたけど一切降る気配はなかったはずなんでしょう？



他の皆も気付いたのか、外に出て行く。俺も不思議に思つて外に出て行く……。

「皆! ミツシエルサンタからのプレゼントよ!」

「はいはいメリクリメリクリー」

ミツシエルが何か……その……雪を降らせる機械的な何かで人工雪を降らせている。うわあ……よく運んだなあ……じゃなくて。

「あそこつて確か……」

「危ない! そこは今、修理中の……!」

まりなさんの叫び声と共に崩壊し始めるC i R C L E。そしてその崩壊に巻き込まれるところとミツシエル……

「……っ!」

「け、慧人さん!」

二人が巻き込まれるのが見えた瞬間には、既に身体は動いていた。助ける助けないと言つた迷いはなく、危ないなんて考えることなく、崩れ落ちるC i R C L Eに飛び込んだ。

そして、数秒の後……そこには瓦礫の山が出来ていた。

# クリスマスとはなんぞや？ 中編

目の前に広がるのはC i R C L Eの成れの果て。建物は完全に崩壊し、残っているのは瓦礫の山。

「……………」

その光景をまりなさんは顔を青ざめながら見ていた。そして……

「…………職探ししなきゃ」

絶望に打ちひしがれていた。地面に膝をつき、立っていられなくなるほどのショックを受けていた。

「あははー…………何もなくなっちゃった」

「ああっ?!?こころちゃん?!?美咲ちゃん?!?」

「…………?!?慧人さん?!?大丈夫ですか?!?」

そして、巻き込まれた二人と自ら飛び込んだ一人を心配し、瓦礫の山へ近付こうとする彼女たち。しかし…………

ヒュン!

「…………大きな瓦礫が…………」

「お空に飛んでいった……」

「打ち上げ花火？」

「いや、ちげーだろ！」

「あ、落ちてきますよ……」

ドンッ！

大きな瓦礫が突如として空へと舞い上がる。そして、急降下してきたソレは大きな音を立てながら地面に墜落し、粉々になる。その先に居たのは……

「怪我はねえよな？ お嬢様方？」

「凄いわ！ 流石ね慧人！」

「いやー……この人は何なんですかね……」

片足を振り上げた状態で居た慧人と、両脇に抱えられたミツシエルとこのころの姿だった。

「あ、アレ……？ 今の瓦礫って……」

「慧人がね！ ビュン！ って蹴り上げて、ドカーンって蹴り壊したのよ！」

「……………」

「ちなみにその前は、瓦礫が降り注ぐ中やってきて、あたしたちを抱えて瓦礫を避けていましたよー」

「「……………」」

「あ？そんなの普通だろ？」

「いや、普通じゃないから」

謙遜する気もさらさらなく、平然と言つてのけた慧人に何人かがツツコミをいれる。

「でも、C i R C L E が……」

三人が無事だと分かり安堵するも、C i R C L E が崩れ、瓦礫の山となつたことに変わりはない。

大勢が悲観に暮れる中、一人だけ行動を起こす者がいた。

「C i R C L E はまだ生きてる！」

「ふざけている場合じゃねえだろ!？」

そう宣言すると香澄は瓦礫を両手でどかし始める。

「香澄、離れろ」

「え？」

そんな様子を見ると、慧人が香澄をどかして、

「邪魔」

ドンッ！

彼女の目の前の瓦礫を蹴り砕き、砂塵を巻き上げながら近くを吹き飛ばした。

「コレを見て！」

吹き飛ばされ、見やすくなったところを指さす。そこには……

「ステージと機材は無事……！」

なんと地上に見えていた部分は跡形もなくなっていたが、奇跡的に地下にあるC i R C L Eのステージと機材は全て無事だったのだ。

「ほんとだ！」

「これならライブできるかも……！」

「よつと」

その言葉を聞くと、一人ステージの方へと飛び降りる慧人。

「慧人さん。大丈夫そうですか？」

が、彼が今更地下に飛び降りたくらいで心配するものは誰もいない。

「とりあえず、近くで見ても大きな破損や問題はなさそうです。安全確保と瓦礫の撤去……数日あればライブ出来るようにすることは可能かと」

「じゃあ、やろう皆！だって、こんなにキラキラしているもん！」

(どういうこと?)

心の中で疑問に思う慧人。が、口に出すことはしなかった。

「そう言えば、私たちはどうやって降りればいいのかしら？」

「そもそも、慧人くんもどうやって登ってくるの？」

「「あ……」」

「ん？ 跳べば行けるだろ？」

「「いや、無理だから」」

「そっかー！ けーくん頭いいね！」

「いい案ね！ それでいきましよう！」

「はいはい、危ないからやめよーね？」

「とりあえず階段探すわ。無理そうなら梯子だろうな」

「それで、私を誘うなんて……どうかしたのかしら？」

「……ん？ああ、やっぱりお前かなって」

CIRCLEからの帰り。隣を歩く千聖に対し、俺はそう答えた。

あの後、階段を見つけ、地上までのところで塞がっていた瓦礫を蹴り壊して開通することに成功。今日が12月24日で、もう日数が残っていないということで、明日からは全員でライブに向けて動くことになった。

今日はもう暗くなってきたので解散したが、俺は千聖に声をかけ、二人きりで帰るところにして現在に至る。

「ふふっ、じゃあ、これからはお楽しみってことね」

「なわけ。なんとなくお前と一緒に帰ろうかと思っただけだ」

千聖とは建前で適当な話をしつつ、アイコンタクトで情報を交換していく。どうや



ら、気付いていたか。

「そんなこと言つて……知っているわよ」

「何かだよ」

「これからは性欲が爆発する時間よ。つまり、今からホテルに行くべきよ」

「お前は年中暴発しているだろ。後、ホテルに行くわけねえだろ」

「え?」

「当たり前だろ。お前もターゲットにされてる」

「あなたを倒して私を奪う。そしてあなたをこんなことをして感じかしら?」

「んなこと言つてねえよこの阿呆。記憶改竄もほどほどにしやがれ」

「酷いわ……! 期待させておいて下げるなんて……!」

「知るかよ」

「そんなあ……」

……おかしいな。何というか……建前も本音も途中から話がおかしくなつてな

いか?

「……ダメ?」

潤んだ瞳で見つめてくる千聖。……おい、コイツ結局性欲のことしか頭にないぞ? さ

ては、お前を選んだ理由を一切理解してないな?

「行くぞ。覚悟を決めろ」

ええ。抱かれる覚悟は万全よ

「……分かったわ」

「ちげえよ阿呆」

「え？違うの？」

「いざとなつたら面倒ごとにする覚悟だよ」

「それは違うと思うわ。暗い路地裏、クリスマススイブの夜、愛し合う男女が二人きり……もうするしかないのよ」

「何がするしかないだアホ」

「何を言っているの？ポーカーならもうワンペアツーペアどころじゃなくて、ロイヤルストレートフラッシュ並に揃っているのよ？」

「揃ってねえしテメエ、何気に愛し合うとか嘘をついているんじゃないやねえよ」

「そんな！私とは身体だけの関係だったの!？」

叫ぶど変態にツッコミを入れようとしたが……

『へへっ、だつたらそんな男よりもオレたちと遊ばないか？』

『朝までたつぷり可愛いがるからよお……』

……どうやらお客様がやってきてしまつたらしい。というか、全員黒ずくめだな……

あいつらと同じ衣装か。

「で?・とりあえず殴ればいいか?」

手を軽く振って腕を伸ばす。何人がかりで束になろうが負ける気がねえけど。

『ま、待ってくださいよ!』

すると、黒装束の集団の中から一人出てくる。

「どうした? 命乞いならさっさと済ませろよ」

『冬木生徒会長じゃないですか』

「あ?」

『なんだ、会長だったなら言ってお下さいよ。敵だと思っただじゃないですか』

「あーなんだ。お前から虎南高校のバカどもかよ」

『そうですよ。あ、冬木会長もこちら側に来ます? 一緒に見回りをしましょうよ』

そして、話しかけてきたやつが近づいてきて手を差し出す。

「失せろ」

『ガハッ……!?!』

ドゴツ!

俺は伸ばしてきた腕を右足で蹴り飛ばすと身体を捻って、左足で後ろ蹴りを放つ。そいつはそのまま吹き飛ばされて、黒装束の集団の何人かを巻き込みながら、壁に激突した。

「慧人？何もそこまでする必要はなかったんじやないの？結構な距離吹っ飛んだわよ」  
 「別に」

俺はやつを蹴り飛ばした際に落ちたものを拾う。

「スタンガン。改造されているんだろ。大方、俺が握手に応じた瞬間に気絶なり動きを止めて、コイツを攫おうとしたんだろ？そんなことしようとしてきた相手に、かける情けはねえよ」

「確かに、演技は0点だったわね。明らかに裏があるって思ったもの。ダメよ？信用させるためには言葉とか仕草に気をつけなきゃ」

「それとき、テメエは……いや、テメエらの中に虎南高校ウチのパカどもの生徒はいねえ。騙すならもつとうまくやりな」

もつとも、気配すらごまかさないといけないから、そんなのは不可能に近いだろうけど。それに、今の忠告も肝心の相手は伸びているだろうから聞こえてないだろうが。

『ツチ、そこまでバレていたか……！』

『とある方の情報で虎南高校が黒装束で襲うって聞いたからよ……』

『便乗して全ての罪を被つてもらおうと思つたが……』

いいように使われてんじやねえよバカどもが。

『へっ、秘密を知ったからには生かしておかねえ』

『大人しく女を置いて逃げな』

『こっちはまだまだ人数も武器もあるんだぜ？』

そう言つて各々が武器を取り出す……やれやれ、クリスマスイブだつてのに、物騒なもの出しやがって。

「千聖。俺の傍から離れるなよ」

「え？そ、それつて……プロポーズ？」

「は？」

「だつて……この先もずっと俺の傍に居ろつていう……」

「……………」

武器とかを見て騒がれると確かに困るが、何とというか……こういう反応も困るな。うん。

「はあ……その話の続きは全て片付けてからだ」

「……そうね。ご両親へのご挨拶も済ませないと……」

「……………」お前、一回黙つてろ」

「ふふつ、じゃあキスで黙らせてほしいわ」

あのさ、今の状況知っている？目の前には武器を持った黒装束の集団。で、暗い路地裏で目撃者もない。ここで俺が負ければ、お前は明らかに社会的にも精神的にも死ぬ

ぞ？知ってるのか？

「はあ……」

何というか……すげえやる気が失せた。

「そんな！やる気を取り戻さないとこの後のお楽しみがなくなっちゃうじゃない！」

「うん。元からねえから安心しろ」

『ゴチャゴチャとうるせえ！』

『黙っててくたばってろ！』

「分かったわ。猥談でもしましょう。そうすれば途中からやりたくなるわ」

「よし、真面目な話をするか。これは物理の話になるが……パンチの威力つてのは重さと速さの積。まあ、力積の話だな。衝撃という一点を考えるなら重さよりも速さに重きを置いた方が、最大値は高くなる」

「そうなのね」

「だからなんだって話だが」

「本当よ。(ピーー)に聞することを話した方が余程有意義だわ」

俺は斜め後ろから聞こえてくる戯れ言を無視しながら、迫り来る不良たちに対し左足を前に出し、右足を後ろに下げ、足を開くようにして立つ。拳をしっかりと握りしめ、右肘を引きながら右腰も同時に引いて身体を捻る。

「安心しろ。本気は出さない。この一撃で全員を沈めるが……悪く思うなよ」

一呼吸置いて……

「はあっ！」

次の瞬間パンチを放つ。そして、もとの体制に戻る。

すると、バタバタと倒れていく相手。数秒後、目の前の黒装束は全員倒れた。

『『……………』』

「え？」

「気絶したな」

「今のパンチ……見えなかったんだけど。そもそもパンチをしたの？」

「したけど？ スーパーローカメラでもあれば分かるんじゃない？」

「いやいやいや慧人。落ち着いて頂戴？ 人間のパンチを見るのにスーパーローカメラが必要なのよ？ あなたボクサーだったかしら？」

「ん？ あー言つてなかったな。俺、右腕が機械で出来ているんだよ」

「え？」

「だからジェット噴射で不可視のパンチを放てるんだよ」

「え？」

「ま、冗談だけど」

「え？」

「ん？千聖？」

「え？」

「おーい」

「え？」

「どうやら、頭の中がショートした様子の千聖。やれやれ……コイツならこういう姿を見ても大丈夫だと踏んで連れてきたが失敗だったか……」

「とりあえず、あのバカどもに偽者が現れたことを伝えるか」

「そう思ってたキャプテンに電話をかける……が。」

「出ねえなあのカ」

「アイツらも集団で動いている以上、電話……通信手段に関しては敏感になっていると  
思ったのに。ましてや俺というある意味最大の敵からの電話……こつちの様子を知る  
のにうってつけなのに出ない。……まあ、気にはなるが、別のところに電話をかける。  
そつちは数コールしないうちに出た。」

「あー俺だ。後片付けを頼みたい。だから他の暇人たちにも伝えとけ。……え？喧嘩  
なら何で言わなかったんですか？つて？んなの言うかよ。とりあえず、これから本拠  
地乗り込むから……何？今から人集めるから連れて行ってください？嫌だよ。お前ら



は後片付けた。場所は……………」

そして、場所だけ伝えて電話を切る。どうせ、俺が止めようとアイツらは来るだろうが…………その前に片付けるだけだ。

「今の電話の相手は？」

「ん？あーこいつらを更生してくれる調教係たちというか…………ま、そんな感じだ」

「ふーん」

「で？俺は乗り込むから、帰るなら送るけど？」

「ふふつ、人を囿に使っておいでよく言えたわね？」

「気付いていたか…………まあ、気付くよな」

「…………最後まで付き合うわよ」

「そうか」

「だって、あなたが必ず守ってくれるんでしょ？それに、どうせ終わってから電話なんてかけないでしょ？嫌よ。ないとは思うけど、考えて不安になるのは」

「ま、見ても楽しくねえけど…………安心しろ。お前には指一本触れさせねえ」

「ええ。触れていいのはあなただけだもの」

「いや、それは支障しかねえだろ」

「ふふつ、そうね。いつでもどこでもどんな場所でも、許可しているのはあなただけよ」

「いや、そこまでいらねえよ」

「そんな……！」

がく然とする千聖。はあ……本当に信用されているとか何というか……

「じゃあ、行きましようか。夜のデートに」

「随分と物騒なデートだなおい」

俺の腕に両手を回し、胸を当ててくる千聖。何だろう。傍目から見ればカップルに見えるなくもないような……

「やっぱり、このままホテルに行くべきじゃないかしら？」

「いや、行かねえから」

人にはオーラがある。普通の人には見えないモノだが、確かにそこに存在している。オーラとオーラは惹かれ合ったり、離れたりし、その人の存在感を示す一つのモノ。オーラさえ見れば、相手の力量は測れる。だから、自身より弱いオーラを持つモノを少しずつ仲間に引き入れた。数が増えてきたタイミングで、自身より強いオーラを持つ者も引き入れていく。そうして、オレはこの集団を纏めるトップに立った。

だが……

「……か」

その男が入ってきたとき、初めてオーラが見えなかった。夜の闇と同化したのだろうか？ 驚きはしたものの、背景と同じ色だから見えなくなっているのだろう。隣の女のオーラは、金色の明るいオーラにドス黒いオーラが垣間見える……腹黒い人のオーラがする。戦闘力は低い。

「たくさん居るわね」

「こんなもんだろ」

その男はこちらの数を見てもたいして驚いた様子はない。ただの道に迷ったカップル……ではなさそうだ。その事を察すると同時にドサツと何かが落ちる音が響く。

「見張りに人員を割く余裕があるくらいだし」

それは見張りとして立っていた奴。一人だけがこちらに向かつて投げ捨てられたが、恐らく他の見張りも全滅しただろう。こちらの人員もそれを分かっただけで武器を構えて、今にも突撃しようとしている。

『………?!』

男が目を見開いた瞬間、恐怖が襲った。そして、見てしまった。オレたちのオーラが、黒い何かに塗りつぶされていく様を。

ドサツドサツ

「二人だけ……流石にまだ難しいか……」

何かが落ちる物音がすると同時に、気付けば二人が倒れ込んでいた。そんな様子を見て、ポツリと何かを漏らす男。一体何が起きているのか分からない。他の奴らも戸惑いを隠しきれていない。しかし、その男はこちらを待つてくれるほど甘くはなかった。

「吹き飛ばす」

次の瞬間、男が手を握り、軽く腕を振るう。その動作と同時に、オレたちのオーラは、黒い何かに吹き飛ばされた。

何が起きたか分からない。あの男が何をしたのかも一切分からない。ヤツは何者だ……? 本当に人間なのか?

「お前がリーダー格か」

ゆつくりとその男は近づいて来た。気付けば辛うじて立っているのはオレだけで周りは地に伏している。たった一撃……いや、たった一回腕を振るっただけでこの様だ。

「二つ教えてやる。俺とお前では次元が違う。格上のオーラを格下が見られるわけがねえだろ」

「……っ!?!」

「どういうことなの? 慧人」

「つまり、こういうことだよ」

次の瞬間、その男の後ろに影が現れる。その影は徐々に大きく、形を作っていく。そして……

「あ……あああっ……!?!」

この時、オレは最悪の絶望を目の当たりにした。

「いや、どうということなの？いきなり悲鳴を上げながら崩れ落ちて気絶したけど」

「まあ、威圧したらこうなったってことで」

「ふうーん……私も身につけてみたいわ」

「身につけてどうするんだよ」

「無能なプロデューサーを威圧して、悲鳴を上げさせながら心をへし折りたいたいわ」

……その仕打ちはあまりに可哀想だな。

「さてと、帰るか」

「いいの？この人たち放置で」

「五分もすれば回収屋さんが来る。心配しなくても大丈夫だろ」

「ふーん」

そんな感じで帰路につく。そして当たり前のように腕には千聖がくつついている。

「それにしても、囚われた女の子とかいなかったわね」

「そりゃあ、コイツらも犯罪集団じゃなくて所詮不良の集まり。いくら身代わりがスケイプゴートいる

としても、目立つことは避けたいから人が多い場所には行けない。だが、クリスマスイ

ブというものもあるが、そもそも普通のカップルなり女子高生なりは夜に路地裏とか人気

のない場所には行かない。だから、オレたちが最初の標的ターゲットだったんだろうな」

「なるほどね。数少ないチャンスを待っていたのね。きつと彼らには最高のエサに見える

たんでしょう。私を落とせば、あわよくば繋がりで他の子も落とせる……屑ね」

「心配するな。そういう屑を更生してくれる奴らが回収してくれるから、きつと次会っ

たときはもつとまともになっているさ」

「ただ、黒装束のお陰で顔は分からなかったから、次会っても気付かないけどね」

確かにな。顔は分からないが、オーラは分かった。多分、大丈夫でしょ。

「それにしても、スリリングで刺激的なデートだったわね」

「そうか？」

「ええ。そして、デートは最後まで……よ？」

「知るか。帰るぞ」

「そんな！」

何か言っている千聖を連れて俺は帰るのだった。

「せめて、ホテル……間違えた。イルミネーションぐらいは見に行きましょうよ！」

「……………少しだけだぞ」

「やった♪」

少し寄り道をして……



## クリスマスとはなんぞや？ 後編

12月25日。

今日のごことは反省も後悔もしていない……が、そう書いてると怒られるので、反省と後悔をしたことにはしておこうと思う。

とある生徒会長の日記より抜粋

クリスマス当日。前日から、街や世間の賑わいはピークを迎えている今日この頃。昨日はクリスマスパーティー（賑やかな）をしたりクリスマスパーティー（殺戮の）をした俺。そんな俺は今日……

「それではコレより、例のクソ野郎を潰す会議を始める」

「」……………」

「あの……私の補習授業中なんだけど……」

虎南高校にいた。

「とうかさ……」

「待て冬木。これは大切な会議だ。発言する場合は挙手をし、議長……もとい俺に発言の許可を求めるように」

「……へーい」

「冬木。発言を許可する」

「とうかさ……テメエら何したんだよ？後、そもそも例のクソ野郎って誰？」

「本当だよ？授業を……」

「我々は、ソイツに不当な扱いを受けた。よって報復する。それだけだ」

「はあ？」

虎南高校の補習は対象者は強制、残りは自由参加って感じ。また、補習者の数がアホみたいに多いので、補習のクラスがテストの結果順に分かれている。目の前に我らがキャプテンがいることで分かると思うが、ここは二年生の中でも選りすぐりの馬鹿が集まる、一番下のクラスである。ちなみに一年生、三年生の一番下のクラスよりもクラスの平均点が低いとか何とか。

また、補習のスケジュールも公開され、普段の学校の時間割のようにある程度の時間

で教科ごとに区切られている。補習というか補講というか……まあいいか。それで、俺のような自由参加組は何処のクラスで受けてもいいということになっている。だから、ここにいても問題はない。

「分かった。確かに俺たちは、お前を頼ったが、詳しく話していない。それはその反応をされても仕方ないだろう」

「むしろ来ただけありがたいと思え」

「あの……授業を……」

「俺たちのクラスは23日の終業式が終わってからヤツの手により個別に課題を出された。課題は、24日の最終コマの現代文で発表するスピーチの原稿を考えるとのこと。スピーチのテーマは各々与えられたが……」

スピーチか。確かに今後社会に出て自分の意見を周りに主張する場もあるだろうし、何かしら企画のプレゼンで話すこともあるだろう。内容は国語力などが関わってくるし、発表も聞き手を引きつけるようなものにならないといけない。たががスピーチだが……なるほどな。中々面白そうな授業をしているな。

「俺たちは各自が必死に頑張った。他人のをパクらないようにか、ご丁寧に各自テーマはバラバラだったんだ……！」

「お、おう……」

「ある者はインターネットと睨めっこして必死に調べた。ある者は見たいアニメを録画してまで書いた。ある者は目の前で友人たちがいちやついているのを尻目に血の涙を流して書いた」

「……………(うんうん)」

「しかし……………しかしだ！あろうことか！あのクソ教師は俺たちの努力を踏みにじった！ヤツは俺たちのスピーチ中にスマホゲーをしていやがったんだよ！しかも音ゲーだ音ゲー！」

「……………おう」

「その上だ！その上でヤツは退屈させる方が悪いだの聞くと耳が腐るだので最低評価！しかも、その後三時間以上に及ぶクソ長ったらしい自慢話やらなんやらで……………！」

『クソオ……………！ヤツさえ居なければ……………！』

『アイツ、絶対、処す……………処すべき……………！』

『このままクリスマスまで台無しにさせてたまるかよ……………！』

あ……………だから、昨日のこいつらの活動は規模が小さかったのか。それに電話をかけた出なかつたのも納得だ。だって、代表格は全員このクラスだから……………なるほどな。……………街の平和のためには、こいつらはここに監禁しておいた方がいいんじゃないか？

「というわけで、お前ら！もう我慢ならねえ！俺たちを舐めたらどうなるか……………身を以

て思い知らせるぞー！」

「「おおおおおおおおおおっ!!」」

「……………」

空が青いなあ……俺はそう思いながら窓の外を見上げていた。

「……………」 (ちよいちよい)

するとこの授業の補習担当の先生に呼ばれる。何だろうか？

「ちよつと授業にならないから校長先生に報告するね」

「いいと思います。なんならついて行きますよ」

「ありがと……………」

うん、決まった。教師一人を潰すより、アイツらを監禁しておいた方が世のため人のため俺のためになるなって。

ということ校長室……………」

「……………」なるほど」

事情を説明し終えた校長は、先生だけを下がらせる。残されたのは俺だが……………」

「正直に言おう。この展開は予想できたことだ」

「はあ……………」で？どうするんですか？」

「……………」 (ちよいちよい)

校長先生に手招きされて近くに寄る。何だろうか？

「あまり大きな声では言えないが……」

校長先生のありがたいお言葉を聞いた俺は、バカどもの集う教室に戻る。そして……

「あのクソ教師を潰すぞゴラアアアアアア！」

『『やろうぜ会長おおおおおおおっ！』』』

昨日、C i R C L E が物理的に崩壊した。しかし、演奏するステージは地下にあり、奇跡的に機材とともに無事だったため、私たちは限られた時間を使い、C i R C L E 最後のライブに向けて準備を始める。

一分一秒だつて無駄にはできない。私たちはクリスマスにもかかわらず全員が集まり……

「何で慧人さんがサボっているんですかね……！」

サボった問題児に対し、フツフツと怒りが湧いて来るのを感じていた。

「まあまあ、紗夜ちゃん。慧人がサボりなんてするわけないでしょ？ 学校じゃあるまいし、きっと何か用事があったのよ」

「ええ、その可能性は十分に考えられます。しかし、私に対しても誰に対してもそんな連絡はない……！」

「やれやれ、あの人の自由さには困ります。これはお説教が必要かもしれませんね……！」

「あはは☆でもクリスマスで言えない用事があるつて言われると、紗夜が怒るのも分

かるよ〜」

「何を言っているんですか今井さん。私はこんな忙しいときにサボったことを怒っているのです。決して、クリスマスを別の女性と過ごしているからここに居ないかもしれないと思って怒っているわけではありませんよ決して」

「……………」

(絶対それでしょ……)

「紗夜！ 慧人を見つけたわ！」

「弦巻さん。どこに居るんですか？」

「虎南高校よ！」

そう言うのと黒服さんたちが動き出し、用意したスクリーンに何かを映し出す。

「これは…………？」

とある教室。座っている男子生徒の中に慧人さんの姿はあった。

「えつと…………盗撮？」

「いえ。教室に仕掛けられていたカメラからの映像をここに映しただけです」

「……………」

(…………それって、ハッキングじゃ……)

教室の四隅と前後左右の計八箇所を設置されているのだろうか？ 何が目的でカメラ



があるのかは定かではないが、カメラに写っている生徒の服装からして……全員が虎南高校の生徒ということとは間違いない。

「そう言えば、慧人さん言っていましたね。前のボイコットの一件で、多くの虎南高校の生徒が冬休みに補習になったとか」

「あー言ってたね〜でも回避したんじゃないやなかったっけ？」

「そうですね。ただ自由参加ってことで参加できるそうですが……」

「でも、あの慧人が勉強したいから補習に参加する……なんてことするかしら」

「しないですね」

「しないよね〜☆」

「あり得ないわ」

「あこもそー思うー！」

「私も……」

「み、皆さん!?! どうしてここに？」

「二何か面白そうだったから」（休題の体で）

「本音と建前が逆だね〜って、あれ？皆揃っちゃった？」

気付けば全員が集まり、スクリーンに流れる映像を見えています。

なるほど……これは……

「授業参観に来ている親ってこんな気持ちですかね？」

「うーん、我が子が何かしでかさないかって？」

「そうね……」

（（絶対にかやらかすでしょ））

そう思っていると聞こえてくるのはチャイムの音。そして、教師が入ってくる……えっと、これからどうなるのでしょうかね？

『ほう？全員揃っているようだな……む？冬木君。君は自主参加かね？』

『はい！先生の下で勉強したくって！』

清々しい笑顔、聞いただけなら優等生を思わせる言葉に私たちは……

「「おえ」」

今まで感じたことのない吐き気を覚えていた。

「ゴメン。アレは無理」

「裏があるんでしょうけど……似合わなさすぎてちよつと」

「ないわ」

あの慧人さんがあんな台詞をあんな笑顔で言うわけがない。つまり、これは……絶対にかやらかすということに等しい。

『はははっ！お前らのようなバカの中にもどうやら私の講義の素晴らしさが分かるもの』

がいたとはな！いいだろう！今日は徹底的に授業をしてやろうじゃないか！』

『そんな先生の授業を受けられるなんて光栄です！』

相も変わらず慧人さんの気色の悪い……失敬。絶対に裏のある発言。その証拠に慧人さんのこめかみがピクピクしており、コイツ、ここで潰す的なオーラをカメラ越しの私たちでさえ感じる。

（（さあ、始めようじゃねえか……！俺たちを敵に回したクソ野郎への制裁をよお……！））

とりあえず、教師の気分を上げさせ、俺がいることを許可させた。……ほんと、自分で言つて吐きそうになったが……まあいい。さあ、授業地域を始めようか……！」

「今日は……」

p i p i p i

「誰だ？授業中はスマホはマナーモードが原則……しかも私の授業だぞ？」

そう言つて音の鳴つた方へと歩く先生。

「ここから聞こえたなあ？なんだ？着信でも来たか？」

「スマホはいじっていません」

狙われたのはキャプテン。確かにアイツの席から音が鳴つたし……

「はっ！じゃあ、さっきの音はどう説明するんだい？」

「トランシーバーの受信音です」

「トランシーバーあああああ!？」

「あーあーこちらキャプテン。会長、何か御用ですかい？どうぞー」

「あーあー俺だ俺。とりあえず繋がるかテストしてみたかった。どうぞー」

「そうですかい。繋がつたならよかったです。どうぞー」

「よし、じゃあこれで切るか。どうぞー」

「じゃないわ阿呆ども！この距離で！この間隔で！トランシーバーでやり取りする馬鹿がいるか！」

「「ハ」に居ますー！」

「クソどもがあー！」

「先生！そんなカスどもも放っておいて授業しましょう！」

「そうですよ！そのクズどもに構うだけ時間の無駄ですー！」

そう言つて俺とキャプテン以外のこのクラスにいる男どもが諭す。

「ツチ！次使つたら没収だからな！」

「ういー」

「はあ……全くこれだから……！」

と、教壇に戻つていく先生。

スツ……

「そこー！昼食が足りなかったのかい？」

その道中で、こつそりと食事をしようとしたアホを指摘する先生。そのまま壁の役目を果たしていた教科書を取り上げる。そこにはおにぎりが隠されていた。

「バレないとも思ったか？ 授業中の飲食は禁止だぞ？」

スツ……

「つて言つただろ！ 貴様もか！」

「オレたちだけじゃないツス！ こいつらも同罪です！」

おにぎりを食つていたやつ隣の菓子パンを食つていたやつが、仲間俺たちを売る発言をする。ちよつ、おま、そんなことを言つたら……

「全員動くな！ 今から一人一人確認してやる！」

なんと言うことだ……たまたま全員が教科書を立てているせいで全員が怪しまれているではないか……！

そして明らかになっていく、皆の昼ご飯。

『ハンバーガー』

『親子丼』

『ラーメン』

『鮭（丸々一匹）』

『鍋（下からカセットコンロの炎）』

「ちよいまてやあああああああああああ!」

「何か問題でも?」

「特に最後の二人! お前ら何がしたいんだよ!」

「ご飯が食べたい」

「そういうことを言っているんじゃないよ!」

「はっ、まさかアンタともあろう人が、俺が熊のように生魚を食うバカだと思ったんですか?」

「どこからツツコめばいいか分かんねえんだよ!」

「んじや、教えてやろうか!」

パチンツ!

右手を挙げ、指パチンツをする。音が綺麗に鳴ったのを確認して立ち上がる。

「という事で冬木慧人による、三分クッキングのスタート!」

「YEAH!」

「今日の料理はなんすか! 会長!」

「いい質問ですね。今日は鮭をさばいて鍋にぶちこもうと思います」

「Foooooo!」

「その間に皆さんは野球部部长の持ってきた鍋を堪能してくださいね」

「おい！いい感じに煮えてるぞ！」

「やったな！食おうぜ皆！」

「じゃねえんだよ！つうかどっから持ってきたそのまな板と包丁！」

「From 調理室」

「無断で持ち出したんか！」

「許可は取りました！」

「何で許可が降りているんだよ……！」

「そんなことより先生！」

「なんだ！」

「ラーメンが伸びてしまいます」

「知るかああああああああああっ！」

先生の絶叫を聞きながら、鮭を捌いていく。ふっ、場所がたとえ教室だろうと俺のやることは変わらないぜ。

「後はその鍋に入れて、煮えたら完成です！」

「流石だぜ会長！」

「すげえテクニックだ！」

「なんて早業だ！」







「やれやれ、生徒の小粋なジョークが通じないですね」

「「うんうん」」

「テメエらの冗談は冗談に聞こえねえんだよ……！というか、何で消火ホースをここまです引つ張つてきて誰も怒らなかつたんだよ……！」

「許可は取りました！」

「何で許可が降りてんだよ……！ほんと、マジで」

「ところで知つてますか？俺つて気を使える真面目な優等生なんですよ」

そう言つて立ち上がり、前に行つて掃除機を受け取る。そして……

ブオオオオオオオ

コンセントに差し込んで掃除機を起動する。空気の出る先を窓の外に向けて、どんどん吸つていく。

「鍋をしたら煙が出ますよね？煙くさくなつたら嫌ですよね？だから掃除機で換気です」

「ヒューー！流石すぎだぜ！」

「優等生の鑑！」

「んなわけあるかあああああ！」

「そして、冬は乾燥しやすい。万が一火災になつても被害を最小限に出来るよう既に消



「聖典エロ本を返せよクソがあー！」

「調子に乗ってんじゃねえぞ！」

「ええい！全面戦争じゃボケエ！」

「あ、鍋がいい感じになつたぞ」

「おう、バカどもが騒いでいる間に食おうぜ」

「くう……アホ面を拜んで食う飯はうめえぜ……」

騒ぎ立てる生徒たちと教師。もはや教室中がうるせえな。

そう思い、静かにスマホを弄ること何分か。

「冬木慧人！」

「へーい、何でしょーかー」

「キサマだけはスピーチをしていなかったな！今すぐスピーチをしろ！その評価によつ

て貴様らの処遇を決める」

「ふむ……少し待ってください。原稿を書きます」

そういうことで、俺は掃除道具入れに隠しておいた道具を取り出し……

「……………（サラサラサラ）」

「な、何で筆で巻物に書いてるんだこの男は!？」

「何言っているんですか？今時の男子高校生の流行ですよ？」

「なわけあるか！」

「ほら、他の奴らも見てくださいいよ」

「……………（ちよんちよん）」

「……………（スツ）」

「……………（サラサラサラ）」

さつきまでの大騒ぎとは打って変わって、皆が静かに巻物に文章を筆で書き連ねる。

「お前らいつの時代の人間だ!？」

「「由緒正しき現代っ子です」」

「んなわけあるかああああああっ！」

「先生。そもそもノートにシャーペンや鉛筆で字を書くのが普通だと思っていませんか？今のご時世、タブレットでノートを取る生徒もいるなど、技術の発達によって今までは考えられなかった方法が生み出されていく。時代は移ろい行くものです。ノートに字を書くのはあなたの常識であり、それはもう我々にとっては時代遅れなのです」

「……………（うんうん）」

「今の時代は巻物に筆で書くことですよ！」

「時代逆行してんじゃねえか!？」

そんなツツコミをよそに俺は教壇の上に立つ。

「コホンコホン。僭越ながら、わたくし私めのスピーチを始めます。皆様、ご静粛の上お聞きください」

「「……………（しーん）」」

「ここにたまたま私が先日書いたスピーチの原稿がありますので、そちらを読ませていただきます。タイトル『とある教師の偽り』」

そう言うのと俺は手元にある原稿を読んでいく。

「虎南高校に通うとある教師。彼は自称あの優秀なA大学を、しかも学年主席で卒業した……と我々生徒には自慢するように言っている。それを盾に自分に従えとか自分は絶対とか言うが、実際は近所でそこそのレベルのB大学を卒業している。しかもB大学には三浪してようやく入り、在籍中には単位が足りなく留年している。大学院に通っていたのは当然嘘であり、実際は浪人と留年によってそこまで年齢が変わらなくなったのだ。ここまで来ると教師になれただけ奇跡である」

「なっ…………ど、どこでそこを……………」

「さらにその教師は我々のことを、阿呆だのバカだのクズだのゴミだの動物園の猿の方が賢いだの幼稚園児の方がまともだの野生に帰っているなどと罵る。しかし、その教師の頭はここにいるほとんどのやつと同レベルだと私は思う。明らかに見下しているが実際は同じ目線に立っている。違うのは歳だけだと言えよう」

「……………」

「更には、交際経験はゼロ。モテていたというのは嘘であり、そんな事実はない。それどころか、そのナルシストな振る舞いには周りにはうんざり。彼を好きだと豪語する人間はおらず、隠れて実はというパターンも皆無。この補習にも渋々という感じで参加を表明していたが、実際の狙いはこの後に行われる忘年会に参加しやすくするためである。ちなみに、そこである女性教師を口説き落とそうとしているが……」

「も、もうやめてくれえ……………」

「おやあ？俺のスピーチもこいつらのスピーチと同じように、音ゲーしながら聞き流せばいいじゃないですかあ？あれえー？もしかして、聞き流せないんですかあ？あー、だって事実ですもんねえ？残念すぎるけど、全部事実だから聞き流せないですよねえ？俺の作り話じゃねえもんなあ？」

「……………っ！」

「アハハ、いいですね〜その顔。いやー俺のスピーチって人を動かす才能でもあるんですかね？ねえ、クソティーチャー？アンタは産休をとった先生の替わりに穴埋めとして来た先生。いやあ、ウチが馬鹿高校だつて悔りましたね？ねえ？自分が馬鹿だと言っていた相手にやられる気持ちはどんな気持ちですか？ねえねえどんな気持ちですかあ？あー、そう言えば、ここに来る前の学校でも何か起きたんですよ？確か……………」



そう言うと、俺につかみかかって来る先生。

「デメエー！それをどこで！」

そして、そのタイミングで……

「失礼するよ。何でも補習がうるさいと……」

校長先生登場。さて、問題です。入ってきたら先生が生徒の胸ぐらを掴みあげていかにも殴りかかろうとしています。さあ、どうなるでしょうね？

「Good bye fu〇king teacher」

「コイツ……！」

舌を出し、中指を立てて小声で声をかける。そのことにブチ切れる先生。

そして、拳を振るわれるタイミングで先生を突き飛ばしカメラに見えない角度で殴りつけ気絶させる。

こうして、クリスマス補習潰し作戦……いや、クソ教師排除作戦は終了した。

授業とは思えない騒動を見ていた彼女たち。皆が呆れたり、笑ったりしている中……

「今井さん」

「な、何かな……?」

「ちよつと慧人さんをシメてきますね」

「い、いつてらっしやい……」

一人だけ明らかに怒っていた。

ちなみに、この時の紗夜の様子は、鬼神が目覚めたようだったと語られるのだった。

一方、そんなことを知らない慧人は校長室にいた。

「ええ、ありがとうございます。では、これで……」

「今の電話の相手は？」

「まあ、あの教師の経歴を調べてもらったり、短時間で道具を用意してくれた協力者たちです。ちなみに、この後の処分も頼んでいますのでご安心を。黒服さんって俺は呼んでいます」

「なるほど。その人たちにもお礼を言って欲しいが……よく排除してくれた」

「いえいえ、校長先生もカメラで見っていたとはいえ完璧なタイミングですよ」

「まあ、流石に大切な我が生徒、先生たちからもクレームがあつたからねえ。それにしても流石の暴れっぷりだよ」

「お褒めにあずかり光栄です。生徒会長ですので、教師であろうとなんでであろうと、学校を脅かす危険は全て排除しますよ」

「それに、補習が潰れたお陰で、彼らの宿題を三倍に、そして出来ない者には補習に来させる名目も生まれた……これで学力の改善が図れるといいんだけどねえ」

「ククツ、校長先生も悪ですなえ」

「君こそ。なかなかの悪だねえ」

「いえいえ、先生には及びませんよ」

「あつはつはつは」

紗夜<sup>鬼神</sup>が乗り込むまであと……

『やはり、あの先生ではダメでしたか』

『まあまあ。収支をすればあの男はマイナス……元々、消えてもらう予定だったから、手間が省けたよ』

『それでも先生。一教師を葬ったというのは事実。……中々やりますね』

『委員長。どうやら、昨日の襲撃も失敗に終わったそうです。情報によると冬木慧人たった一人で壊滅させたとのこと』

『やれやれですね。せつかく、色々と情報を流してあげたと言うのに』

『所詮は烏合の衆ってことだろ？ ヤツを倒すにはもつと強大な戦力を集める必要がある

な』

『……次の作戦の練り直しですね。出来れば私たち風紀委員会が動く前に、彼には消えて欲しいのですが』

『期待しているよ。君たちの正義なら、必ずあの悪を打ち倒せるはずだよ』

『『はい』』』

## クリスマスとはなんぞや? 多分これが解答編

12月25日の午後。俺は紗夜さんと二人きりで話していた。

あの後、校長室で笑い合っていたら恐ろしい気配が接近していることに気付いた俺。まっすぐ向かってきたので、学校に入れさせないべく立ちはだかったが、なんとまあブチ切れた紗夜さんだった。反転して逃げようとした俺の首根っこを掴んで……ねえ? とりあえず、逃げないから首根っこはやめてもらい、代わりに腕組みで妥協された。もつとも、逃がさないためか力が強いけど。

「いいですか? 色々と言いたいことだらけですが、報告連絡相談が必要だと習わなかったんですか?」

「習ってないです」

「素直でよろしい。今、学びなさい。いいですか? まず、昨日の話を思い出してください」

「昨日……ああ、CIRCLEが崩壊しましたね」

「ええ。そこから私たちは協力して最後のライブのために動くという方針になったはずです」

「もちろん。覚えていますよ」

「でしたら初日である今日に、何故サボったんでしょうねえ？」

すると、とてもいい笑顔でこちらを見てくる。そのあまりの怖さ……失敬、眩しさに俺は顔を逸らして答える。

「いえ、サボっていません。急用が入っただけです」

「では、何故それを私に報告しなかったのですか？」

「……………」

「怒らないから正直に言ってください」

「別に報告しなくてもいいかな、って」

「……………」

あ、無茶苦茶怒ってる。怒らないって嘘じゃん。

「……………全く、で？ 慧人さん。なんであんなバカな真似をしていたんですか？」

「え？ バカな真似？」

「授業崩壊ですよ。いえ、正確には補習崩壊でしょうか」

……………ちよつと待て。いや、紗夜さんが虎南高校に来た時点でおかしいけどちよつと待て。何で知っているんだ？ ……いや、待てよ。限りなくゼロに近い確率でだが鎌をかけている可能性もある。一旦、ここは白を切るか。



「……………何のことですか?」

「ふふふつ。教室でトランシーバーでのやり取り、鮭を捌いて、掃除機を使って換気したり、筆で巻物に書いて、スピーチをして先生に胸倉を掴まれて……………ふふつ。全部見ていたから知っているんですよ?」

「……………」

え? マジで? そう思って空いている手でスマホを取り、

「もしもし警察ですか? はい。背筋が凍るようなヤバいストーカーが俺の左に……………」

「わわっ!? ちよ、け、慧人さん!? ストーカーなんて誤解ですよ!? 誤解だからそのスマホを一旦切って下さい!」

「大丈夫ですよ。かけていませんから」

「あ、そうなんですね。よかったです」

「冗談は置いといて、こころのところの仕業ですか? 大方、教室に仕掛けられていたカメラを通して見ていたんでしょ?」

「……………え?」

俺が自分の達した結論の答え合わせをしようとしたら、紗夜さんが固まった。

「どうしたんですか?」

「いえ……………その通りなんですけど……………え? カメラが教室に仕掛けられていたこと知ってい

たんですか?」

「何言ってるんですか? 仕掛けたの俺ですよ?」

「……え?」

二度目の驚愕。何というか……理解できないって顔をしている。

「あー説明が必要ですかね?」

「はい。私、説明、欲しい」

「何か喋り方おかしいけど……えっと、アレは授業と言うより、あの教師を潰すために校長と協力し、補習のあったバカどもを使った劇だったんですよ」

「劇?」

「あの教師はどうにも問題があるらしく、ウチの生徒たちに色々と迫っていたりとか、若手の教師にも自分の優秀さを盾にで圧をかけていたらしかたんです。まあ、俺もめんどくせえオーラは感じていたので、今回の潰す計画に加担したんですけどね」

「なるほど」

「校長と話し合わせたプランは、俺が主体となって煽り暴力沙汰にさせるから、そのタイミングで登場して現場を目撃してくれってことですね。で、バカどもには昨日の鬱憤を晴らすからバカなことしようぜって言ったらすぐに協力的になりました」

まあ、元々復讐するつもりだったバカどもを、俺が操ったって言った方が正しいか?

「私、理解。つまり、慧人さん、黒幕」

「まあ、そうですね。だから校長がカメラ越しに監視していました。ちなみに、弦巻家の黒服さんに色々と物資は頂きました」

「慧人さん、悪。私、ここで、滅ぼす」

「あれ? 紗夜さん? 何でさつきから機械みたいな喋り方しているんですか? え? あの、腕はその方向に曲がらないというか……ちよつ!? 話聞いてました!? 先に仕掛けたのは向こうだから潰しただけで……!」

「理解、不能。分かること、慧人さん、魔王。私、ここで、討つ」

「分からねえですよ!?!……はっ!まさか、俺に対して怒らないといけない感情とか、理由が理由でしょうがないって感情とか様々な感情が合わさってオーバーヒートしている!?!ちよつ!風紀委員をやっている真面目でお堅い紗夜さんにとっては、相容れない方法ですが今回は許してください!?!」

「許す、知らない。私、ここで、討つ。弁明、余地なし」

なるほど。普段では想像も付かない事態が起きると人ってこうなるんだな。また一つ賢くなったな……というわけで、誰か助けて。

「慧人さん。私、実は怒っていることがあるんです」

夜。C i R C L Eから二人で帰路に着いた俺と紗夜さん。あの後には頑張つて再建に貢献したよ。瓦礫を運んで、瓦礫を蹴り飛ばして、瓦礫を破壊して貢献しました。

「え？なんですか？今日のごとは既に散々怒られた後ですけど？」

「いえ、今日のごとはありません。昨日のごとです」

「昨日?」

「昨日だと?俺、昨日何かしたか?別に、不良どもをボコったのはいつも通りだし……いや待てよ?今回は割と数もいたし……まさか、そんなことをしていたからなのか?冬休み初日から暴力沙汰を起こしたからか?いや、でも証拠隠滅に目撃者封じはしたし……あ、一人居たわ。千聖の口を封じてねえわ。」

「昨日、C i R C L Eから白鷺さんと二人きりでしたよね?そのまま二人で帰りましたよね?」

「すみませんでしたあ!」

「え?あ、怒っていると言ってもあ、アレですよ?その……私は昨日も一緒に帰りたかっただけで……それに、白鷺さんが言っていたんです」

「あれ?思ったより怒っていない?てつきり、不良どもの溜まり場に乗り込んで壊滅させたことを怒られると思ったのに。」

「とても刺激的なデートだった……って」

「……………」

「確かに刺激的というか……刺激しかなかったというか……ねえ?というかアレをデートって言っていたけどさ。」

「……べ、別に、クリスマスイブにデートをしたことを怒っているんじゃないんですよ?」

別に羨ましいとかそんなんじゃない……」

「……………」

髪を指でくるくるさせながら、そっぽを向いて答えている紗夜さん。

どうしよう。これ、デートの内容を伝えたら、お説教だろうな。嫉妬とかじゃなくて普通に。うん。確実に怒られる。ここは上手く誤魔化そう。

「……紗夜さん。今からデートしませんか？」

「え？いい、いいんですか？」

「時間はあまりないですけど、紗夜さんがいいなら」

「もちろんです！すぐに行きましょう！」

そう言う目と目を輝かせて俺の腕を取る紗夜さん。なんだろう。オーケーした途端この変わり様……何かあるな。まあ、いいけど。俺も紗夜さんに渡したいモノがあったし。

そして、紗夜さんに腕を引かれるままたどり着いた場所は……

「あ、すみません。このクリスマス限定ギガ盛ポテトセットとカップル限定メガ盛ポテトセットを下さい」

「……………」

「はい。ご注文は以上ですか？」

「はい」

「では注文を繰り返させていただきます。クリスマス限定ギガ盛ポテトセットがお一つと、カップル限定メガ盛ポテトセットがお一つ。カップル限定セットに付けるドリンクは下から選んでもらえますが」

「じゃあ、これで」

「分かりました。学生さんですよね？」

「はい。あ、学生証です」

「では、それぞれセットで付けてくるライスは、無料で大盛りに出れますがいかががしますか？」

「じゃあ、二つとも大盛りで。大丈夫ですよ？ 慧人さん」

「……………」

「かしこまりました」

俺が一言も喋らないまま話が進み、注文が終わったようだ。

「慧人さんと白鷺さんはズルいです。きつと刺激的なデートというのは、二人でこのクリスマス限定のスパイシーポテトセットを注文したに違いないです」

「……………」

その刺激じゃねえよと言いたかったが、もう疲れた。というか、え？ ナニ頼んだこの

人？ギガ盛ポテトにメガ盛ポテト？おいウエイトレス、何でポテトが二回出てきたことにツツコミを入れなかった？大丈夫って確認しなかった？

「紗夜さん。ポテトを頼みすぎでは？」

「ふっふっふ。この前理不尽なポテト禁止を受けましたからね。今日はポテト食べ放題ですよ」

「理不尽？あー変な夢のせいでポテトを禁止したことあったな。どこが理不尽なのだろうか？」

「それに両方とも今日までの期間限定ですからね。これは食べないわけにはいきませ  
ん」

「そうなんですか？」

「そうなんです。あ、二人で頼んだので、共有しましょうね。慧人さん8、私2くらいで」

「それだけ聞くとすげえ優しい人ですね。ポテトは？」

「私10、慧人さん0です」

「……………」

「そんな目で見ないでください。まあ、百歩譲って、私99、慧人さん1です」

「……………」

「この人は何故セットで頼んだのだろうか？というか夕食がポテトオンリーは流石に



ダメでしょ。

その後は雑談をしながら一緒にポテトセット……失敬、紗夜さんはポテトを、俺は残りを待っていた。彼女はまるでクリスマスプレゼントを貰う前の子どものように目を輝かせていて、凄いテンションが高かった。

そして……

「お待たせしました。ご注文のクリスマス限定ギガ盛ポテトセットとカップル限定メガ盛ポテトセットになります」

「はい、ありがとうございます」

「……………」

「ご注文は以上でよろしかったでしょうか?」

「ええ、大丈夫です」

「それでは、ごゆっくり」

……………本当にポテトセットがダブルで来たよ…………と、思っていると……

「これは慧人さんの分(大盛りライス)。これは私の分(ギガ盛りポテト)。これは慧人さんの分(大盛りライス)。これは私の分(メガ盛りポテト)」

「……………」

何か大盛りライスが二つも目の前にあるんだけど。寧ろそれ以外に今は目の前にな

いんだけど。というか紗夜さんに全部のポテトを盗られたんだけど。ポテトセットだったよな？頼んだもの。

「で、これは慧人さんの分（ドリンク以外全部）。これが私の分ですね（ドリンク）」

そして、分けられたものを見ると……ねえ？ドリンクとポテト全部が紗夜さんの前に。残りは全部俺の前に。いや勘違いしないで欲しいのは、俺が紗夜さんにポテトしかあげないってことでやったわけじゃないよ？あの人ポテトオンリーにしようと思うだけなんだから。俺は悪くない……悪くないんだが……

「紗夜さん。それでは身体を壊してしまいます。なので……」

「なっ!?!に、人參が私の目の前に……!?!」

「はい。あーん」

「め、目が怖いです……!?!」

「あーん」

「い、嫌……いやああっ……」

「あーん」

「うう……あ、あーん」

紗夜さんが目の前に差し出された人參を涙目を浮かべながら食べる。何だろう……

「はい。あーん」

「れ、連続人参!?ぼ、ポテトで牽制を……お口直しを……!」

「あーん」

紗夜さんのそういう顔つてすげえそそる。もう一回やろ。

「け、慧人さん?よからぬ事を考えていませんか?」

「あーん」

「絶対によからぬ事を考えていますよね!?私はポテトにいつありつけるんですか!」

「あーん」

「こ、これが魔王の圧力……!な、何て凄まじいんですか……!」

「あーん」

「くう……さ、逆らえない……!あ、あーん……!」

どうしよう。すげえ楽しくなってきた。でも、これ以上はやめた方がいいよな?いや、これ以上やると……ねえ?抜け出せなくなりそう。いや、でももう一個だけ……

あの後、にんじんを差し出して楽しんでいたら、ガチ泣きされそうだったのでポテトに切り替えた。でも、仕方ないと思います。あれは紗夜さんの表情が、反応が、俺の中に眠るサディズムという名の悪魔をたたき起こしたのがいけないんです。だから俺は悪くありません。（反省する気ゼロ）

「今回はポテトを全部渡してくれたので許しますが、次やったら許しませんよ」

「ええ。じゃあ、次もすっかりポテトを献上するので、やらせてもらいますね」

「ほ、ほて……いえ、ポテトを渡されても許しませんよ！」

「じゃあ、ポテト抜きでやらせてもらいます」

仕方ない。どうせ許されないなら、ポテトを渡さなくていいや。

「そういう問題じゃないですよ!?!許されないならポテトを渡さなければいいってわけじゃないですよ!?!」

「え? 違うんですか?」

「違います。というか、そもそもやることが問題なんです!」

「ええ……でも……」

「でもじゃないです」

「だって、凄く楽しかったし……」

「私は楽しくないですよ!?!」

「反応が可愛かったし……」

「か、可愛つ……つてその手には乗りませんよ!」

「それに、ポテトばかりだと栄養が偏るし……」

「何を言っているんですか? フライドポテトは万能料理なんですよ? ビタミンC, E, B6, Kにカリウムにタンパク質が取れるだけではなく、食べるだけで幸せになれる……そう、ドー<sup>快薬物質</sup>パミンをたくさん出すのを助けてくれるんです。それから……」

……なんだろう。危険なものじゃないよな? フライドポテトのことだよな? 紗夜さんの説明的に食べ始めると止まらない、中毒性もありそうなんだけど。

「紗夜さん」

「何ですか？」

「今度また禁ポテ生活しましょう」

「どうしてそうなるんですか!？」

「そんな危険なものを食べ続けさせるわけにはいきません」

「ポテトの何処に危険な要素があるんですか！」

「全部です。あなたの説明を聞く限り、ヤバい食べ物にしか聞こえませんが」

「ぐぬぬ……!じゃあ、慧人さんにも同じ事をしますよ!」

「どうぞ」

「ということ、好きな食べものは何ですか?それを禁止します」

「教えません」

「……何故？」

「だって、教えたら禁止されるので」

「分かりました。好きなものでもいいので教えてください」

「いや、何も分かってないでしょ」

「いいから教えなさい」

「……へーい。好きなものは紗夜さんです」

「……………それは禁止されたら困ります……………」

小声でボソボソと言っている……………まあ、すぐ横に……………手を繋いでいるので、凄く近い距離にいたので聞こえている。ただ、そのことを言うのと怒られるので聞こえなかつたふりをする。

「じゃ、じゃあ、慧人さんの嫌いなものを教えてください」

「え？嫌です」

「……………」

「……………」

「何故ですか？」

「いいですか？相手との戦いにおいて、自分の弱点を教えるなど愚の骨頂。だから、教えてください」

「ぐぬぬ……………！じゃ、じゃあ、今度、私が手料理を振る舞うので、苦手なものを教えてください」

「安心してください。アレルギーはないですし、紗夜さんの作るものなら何でも食べますよ」

「……………た、楽しみにしておいて下さい……………」

「ええ。楽しみにしておきますよ」

なんだろう。少し紅くなっていた頬が更に紅くなっている。

「……明日はサボらないでくださいよ」

少しして、不意に彼女が真面目なことを伝えてくる。

「……明日は明日の風が吹きます」

「そこは、『しっかり行くので心配しなくていいですよ』って言うところですよ」

「当社としては確約できないものは口に出さない方針です……」

「弊社としては、確約してほしいのですが……」

「じゃあ、紗夜さんが迎えに来たら確実にいきます」

「分かりました。明日の朝、家に突撃しますね」

「……………マジ?」

「マジです。寝ていようが、炬燵から出たくなると言おうが、引きずってでも連れて行きますね」

もの凄い笑顔……やっべ、明日はサボれないじゃん。それどころか強制的に家から連れ出されるの? マジで? 冗談で言ったつもりだったのに……まあ、サボりすぎるとアレだから、明日はきつと真面目に行くつもりだった気がするけど。

「……………もう今年も終わりですね……」

「終わる前に大きなイベントがありますけど」



「ええ、絶対に成功させてみせますよ」

「陰ながら支えさせてもらいます」

「お願いしますね」

「お任せ下さい。あ、そう言えば紗夜さん。年明け……1月3日くらいって空いてますか?」

「予定はありませんよ」

「一緒に出掛けませんか?」

「もちろんいいですよ。……でも、何故今聞いたんですか? 初詣は一緒に行きますので、その時でもいいのでは……?」

「実はこちらを……」

「ということを持っていたあるものを渡す。」

「こ、これは……宿のペアチケット!? ど、何処で手に入れたんですか!」

「まりなさんが、福引きで当てたやつですね。……自分とは無縁の代物だからって、愚痴を聞く代わりにこれを。ちなみに、ここ最近の度重なる残業分も兼ねてです」  
C i R C L E の 補 修 工 事

もつとも、補修工事をしていたC i R C L E は昨日瓦礫の山に変わったけど。

「で、でも……誘うのが私なんかでいいんですか……?」

「何を言っているんですか? あなたを誘いたいから誘ったに決まっているでしょ?」

「えつと……えつと……こ、心の整理をさせてください！」

そう言うとは何回か深呼吸をして、落ち着きをはかる。そして……

「分かりました。一緒に行きましょう。必ずや、親を説得してみせますので」

「楽しみにしていますね」

「ええ……私も」

今日見た中で一番顔が紅くなっている。でも、その横顔は何処か嬉しそうだ。よかった……虎南高校で会ったときは般若というか……ねえ？そんな感じだったからよかったよかった。

「そろそろですね。じゃあ、今日はこの辺で」

「ま、待つてください」

そう言うとう手を放して、代わりに正面から抱きついてくる。

「少しだけ……このままがいいです」

「……そう」

俺は彼女の背中に手を回して抱き寄せる。

「……今日は付き合ってもらってありがとうございます」

「いえいえ」

「……でも、午前中みたいな暴動はダメですよ」

「あはは……以後気を付けると信じてください」

「……今度はもつと怒りますよ」

「イエス、ママ」

あれより怖いとなると流石の俺でもヤバいと思う。うん、今度はもつとバレないようにしよう。

くおまけ（没ルート）く

「あ、すみません。このクリスマス限定ギガ盛ポテトセットとカップル限定メガ盛ポテトセットを下さい」

「なるほど。では、カップルらしいことをしてもらえませんか？」

「はい？」

「はい。カップル限定セットは、我々がカップルだと認めた人たちに提供しております」  
「な、なるほど……具体的ににはどのようなことを？」

「そうですね……キスとか」

「ききききキスですか!？」

「そうですね? 本物のカップルなら見られながらは恥ずかしいかもしれませんが出来る  
いわけがないですよね?」

なるほどな。確かに、カップル限定セットと銘打っているためか、通常のものよりは良心的な価格設定に見える。男女で来ているだけで皆に提供していたら利益が減るだろうな。

「わ、分かりました!いい、行きますよ」

机を挟んで座る紗夜さんが勢いよく立ち上がる。頬は少し……いや、かなり紅潮しているようだ。

「ちなみに制限時間は30秒です」

「さ、30秒ですか!?!心の準備を……」

「カウントダウンスタート、29、28……」

「ちよ、ちよつと早いんじゃない……」

(どうしましょう!?!ポテトは食べたいけど、慧人さんとき、キスだなんて……うう、は、恥ずかしい……そ、そんなの無理ですよ……!)

「紗夜さん。目、閉じて」

「え?」

カウントダウンも20を切った頃だろうか。紗夜さんが慌てふためいているように思えたので俺から行動を起こす。

軽く立ち上がり、紗夜さんの唇に自身の唇を合わせた。

「これで、いいですよね?」

「はい!」

「すみませんね。彼女は少々恥ずかしがり屋でして」

「……………」

（私の見立てでは、男の方もウブだと思っただけど……なるほどねえ。彼がリードする側だったんだ♪いやー本当はそんな縛りないけどいいものを見せてもらった♪）

「では、お待ちくださいね♪」

「はい。お願いしますね」

そう言つて去つていくウエイトレス。その足取りは軽やかだった。

「ふう。紗夜さん？固まつてどうしましたか？」

「き、キスをした……これはもう結婚？慧人さんと結婚ですか？そ、そんなもちろんオツケーで……はっ！も、もしかしてこのままホテルで初夜を（ぶつぶつ）」

「おーい」

「け、慧人さん……」

「何ですか？」

「着物とドレス……式はどちらがいいですか？後、何月がいいとか希望はありますか？」

「え？」

「あ、後……子どもは何人に……」

「はい？」

「こ、これは報告をしておかないと……」

この後、二人がどうなったか……それは神のみぞ知る。

## C i R C L E    L a s t    L I V E : : : : ?

慧人さん観察日誌

12月26日曇

今日は朝早くに慧人さんを迎えに行ったら、意外とすぐにかから出て来た。曰く『自分は真面目なんで』とのことだったが、あり得ないだろう。彼が真面目になつたら、少なくとも私は涙を流す自信がある。それが嬉しいか悲しいかは分からないけど……

今日はライブの宣伝チラシの配布とライブの順番決めだったが、慧人さんは、一人瓦礫撤去と整備にあたっていた。なんと、黒服さん曰く予定より二日早く、瓦礫撤去と整備は終わったそう。しかも普通は重機を使うのに使わずに済んでしまった……とか言っていた気がしたけど、流石慧人さんと言っておきましょう。

ちなみに、お疲れ様と言うことでスパイシーポテトと一緒に食べたなら、苦い顔をしていたように見えたけど気のせいでしょう。気のせいですよね？まさか、ポテトが嫌いなわけではないですよね？ポテトが嫌いとか人生何十回分も損していますよ？一生の半分じゃないです。一生の何倍も損しています。……と、こんな感じで伝えたら頭を抱えられた。どうしたんでしょう。まさか、彼の頭のキャパシティをオーバーしてしまつたん



でしょうか？きっと聞いただけで覚えられなかったんでしよう。それなら、今度、彼の為にポテトの魅力をノートに綴ってあげましょう。教科書を作ってあげれば復習もしやすく喜ぶはずですよ。

12月27日晴

今日は R o s e l i a で練習していました。予定よりもステージの設営が早く終わりそうとのことで、C i R C L E では慧人さんと弦巻さんの所の黒服さんたちが調整と安全確認をしていました。慧人さんにポテトを差し入れに行った時、C i R C L E の下に何かあるかもと言っていました。ポテトに集中していたためよく覚えていません。今日のポテトは出来がよかったです。仕方ないんです。でも一体、何が言いたかったんでしょうかね？書いていて少し気になりました。

帰りは一緒にポテトのコンソメ味を食べに行きました。慧人さんが三日連続でポテトを見ていると言っていました。彼は何を言っているんでしょう？きっとポテトは毎日摂取することが推奨されていることを知らないんでしょう。そのことを言ったら頭を抱えられた。頭を抱えたいのはこちらだと言うのにやれやれですね。やっぱり、彼に教科書は必須のようですよ。

それにしても不思議ですね。何故、ポテトは学校の授業で扱わないんでしょうか？ 学生の主要5教科に匹敵するレベルでポテトは学習の必要ありなのに。もしかしたら、これは日本の教育制度に問題があるかもしれないですね。今後はポテトも必須の教科化するべきだと思います。

12月28日晴

今日はポテトの味が微妙でした。やはりと言うべきか、私は王道であり、原点である塩味が好きだと思いました。なんとというか……挑戦自体は良いことだと思う。挑戦なくして成功なし。ポテト一つ取ってもあらゆる味を試すべきだろう。その味を試す中で新たな最高の組み合わせが生まれるかもしれない。試行錯誤を繰り返して、過去の常識をアップデートさせていく。そうでなければ、ポテトが進化することは今後なくなってしまう。だが、世の中には挑戦してはいけないものもある。そのことをポテトで学べました。ポテトでおでん味はないですね。はい。そもそも、それを販売する時点で誰か止めなかったのだろうか？ポテト専門家の方を通せば商品化は棄却されそうなのに。

ちなみに、一緒に行った慧人さんには、頼もうとした時点で止められた。その制止を振り切って頼んだら苦笑いされた。それで合わないと答えたら『でしょうね』と言われる

た。如何にも分かつてますよ感が出ていてイラツと来たので、慧人さんに食べさせ……  
食べてもらつた。そして、慧人さんに説教をされた。解せぬ。その後はなんだか、モヤ  
モヤして帰りました。

12月29日晴

ふと我に返つた。この日誌は慧人さんとの出来事を綴っているはずなのに、何故かポ  
テトの割合が高いことに気付いた。何故だろう？これはきつと有名な学者でも解けな  
い難問ではないだろうか？そのことを今井さんに伝えたら苦笑いされた。よく分から  
なかつたので白鷺さんに相談したら呆れられた。一応、日菜に確認したら爆笑された。  
……何故？本当に何故か分からない。

とりあえず、明日がライブ本番なので、前日である今日は慧人さんとやる気を入れる  
ためにポテトを食べに行こうとした。そして、止められた。……意味が分からない。  
彼は知らないのだろうか？この国にはそういう大事な出来事の前には、モチベーション  
を向上させるためにポテトを食べることに。

何とか彼と交渉に交渉を重ね、ポテトを勝ち取つた。その時の彼の表情はどこか疲れ  
ていた。やはり、疲労が溜まつた状態で明日を迎えさせるわけにはいきません。私は慧

人さんにもポテトを渡した。そしたら、いらないと帰ってきた。今はポテトを見たくないと言つて、外を眺めていた。ああ、可哀想に。ポテトも苦しく感じるほど疲れているんですね。ここまで身を粉にして働いてくれた、大好きな彼に報いるためにも、明日は絶対に成功させないといけないですね。

12月30日。C i R C L Eでのライブ本番……俺は彼女たちのリハーサル中に仮眠を取っていた。最近はず中に肉体労働をした上、夜には夢にポテトが大量に出てきて、満足に眠れない日々が続いていた。お陰で特に精神的疲労がヤバい。原因は何だろうか？考えるまでもなく、原因が凄く身近に居る気がするけど……まあいいや。きつと、忙しかったからに違いない。

「慧人さん。大丈夫ですか？」

「紗夜さん……すみませんね。何故か最近、満足に眠れなくて……」

「それは大変ですね。きつと、忙しかったからなんですよ」

「そうですね？何か、それ以外にも原因がある気がするんですよね……」

「……………」

そう言うのと、紗夜さんは無言で俺に近づき、手を伸ばした。

「あなたが頑張っていることは、私が一番知っています」

そつと、俺の頭に触れた。そして、軽く撫で始める。

「最後まで頑張ってください。私もステージで頑張りますので」

「紗夜さん……！」

なんだろう。この人はもしかや女神なのでは？超が付くほど久し振りに感じたけどこ

の人はやはり女神なのでは？そんなことを言われると、ふと脳裏にここ最近のことがよぎる。

クリスマスにメガ盛り、ギガ盛りのポテトが目の前で消えたこと。スパイシーポテトの山やコンソメ味のポテトの山を見て頭を抱えたこと。おでん味のポテトを強制的に食わされたこと。ノーマルなポテトを見たくなくて顔を逸らしたこと。

そう、最近のポテトが脳裏に……………あれ？ちよつと待て。

「……………紗夜さん」

「何ですか？」

「何故か、ポテトのことしか頭にないんですけど」

「なるほど。もう打ち上げのことを考えているとは、流石ですね」

「違います。今までの苦勞がどこかに消えて、ポテトしか残らなかつたんです」

「いいんです。あなたの苦勞は私がしつかり見ていましたから……………打ち上げはお望み通りポテトですよ」

「……………」

おかしいな。俺はそんなこと望んでない。そして、何だか寒気を感じただけ？あれ？紗夜さんの言葉を、身体が受け付けていない。どうしよう。彼女の言葉を理解したくない自分がある。打ち上げにポテト？あは、あはは……………

「……紗夜さん。打ち上げは別のもの食べませんか？」

「……………」

空気が凍り付いた。先ほどまでの温かい空気は消え、一瞬にして外にも負けない凍てつくような冷たい空気となった。

「……慧人さん？冗談ですよね？」

「いえ、本気です」

固まった。紗夜さんが固まった。いや……え？打ち上げもポテトとか流石に嫌なんだけど……そう思っていると、何だか泣き出しそうな表情になった。あ、やべ。

「う、打ち上げは……ぽ、ポテトって……！言ってたじゃ……ないですか……！」

泣き出しそうなのを堪えながら言葉を紡いでいく。ヤバい。そんな事実は記憶にないが、それでもライブ前にこの人のメンタルを削るのはマズい。ぐう……背に腹はかえらぬか……！

「本気なわけではないですよ。打ち上げはポテトに決まっているじゃないですか。だから、泣かないで下さい」

「そ、そうですよね……よかったです……」

「そうですよ。じゃ、一緒に頑張っていきましょう」

「はい……！」

彼女の頭にポンポンと手を置いてからその場を去って行く。……ああ……

「……………俺ってバカだな……………」

その眩きは彼女には聞こえなかった。

((いや、本当にね))

ただし、陰からこっそり見ていた(またの名を、二人きりの空気のせい)で部屋に入れなかった) Rosealiaの面々には聞こえていたようだ。すれ違ふときに哀れみの目を向けられた。おい、同情するくらいなら、ポテト地獄に強制招待強制連行道連れにしてやるぞ。

あー……………無心で仕事しよ。



「慧人くーん」

「……………」

「おーい、慧人くーん」

「……………」

「…………え？無視されてる？もしかして私、無視されているの？」

「……………あ、居たんですね。気付きませんでした」

「酷くない!?本当に無視していたの!？」

「すみません。今は何も考えたくなくて…………」

「あーえつと、お姉さんでよかつたら話を聞くよ?」

「ははっ、まりなさん冗談キツイです。あなたお姉さんって年じゃないでしょ、ははっ  
「酷くない!?今のは心に来るよ!？」というか乾いた笑い…………え？本当に大丈夫?」

「何でしょうね。何か、最近ポテトを見ると寒気がするんですよ。いや、見るどころか聞いただけですかね？あはは……」

「どうしよう……唯一のバイトが度重なる労働による疲労で精神壊した……」

「ねえ、まりなさん。俺、今なら地球を破壊出来そうです」

「やめて!?!魔王の本性が出ちゃってるから!」

「まりなさん。こんな疲れ切った俺にどうか……どうか、まりなさんの残念な恋愛談を……!」

「そうだね……ってどうということ!」

「他人の不幸で癒やされようかと」

「最低か!」

「あ、でもすみませんね」

「そうだよね?今のは失礼だよね?」

「あなた、彼氏居ない歴〓実年齢でしたね。語る恋愛談がなかったですね」

「まさかの失礼の上乗せ!?!そこは謝るところだよ!?!」

「謝る……?」

「こ、この男……!」

「でも、何でしょう。今ので心が少し癒されました。ありがとうございます」

「人を馬鹿にして回復するとか最低か！それが主人公のやることか！この人でなし！以妻性なし！節操なし！」

さてと、なんか言っているまりなさんを無視して、もうひと頑張りするか。

ということではブーブー言う上司がお客さんのチケット確認を責任を持ってしている間に、全体スケジュールの管理にその他の雑用を全てこなすために走り回る。

そして……

「いよいよ最後だね……」

「ですね。俺たちは見守っていきましょう」

C i R C L E最後のライブが幕を開けた。

今回のライブは前回のC i R C L Eでの大きなライブと違い、どのバンドもいつも以上に熱を入れてやっている。

まずは一番手のA f t e r g l o wの音楽で場を盛り上げる。前みたいにつぐみの衣装が違うとか、変なよく分からないモアイみたいや霊もない。いつも通りが一番だと改めて思いました。

二番手のP a s t e l \* P a l e t t e sもその熱を引き継ぎ更に盛り上げようと、音楽を届けている。前回は演奏していた……？って感じだったが、今回は真面目に、そして楽しそうに演奏をする。

そして、三番手はハロー、ハッピーワールド！一番の心配どころだったが、色々と大丈夫そうだ。まあ、ここでいつもみために暴れられたら……ねえ？流石に崩壊しかねないから自重してくれよ……あ、ミッシェルに無茶ぶりが行った。まあ、ステージに損害を与えなければいいか。

続くのはRosealia。前回は俺の中で一番やべえバンド認定（もちろん、演奏力ではなく行動面）していたが、今回はそういう要素はない。流石に前回はおふぎけ要素が強かったと自覚して……自覚していたよな？自覚していたから直したんだよな？ダメだ、ポンコツな人が多いから疑わしいけど……

「やっぱ、すげえわ……」

いつもは何だかんだで近くに居るのに、こうしている時は遠くに感じてしまう。その姿は手の届かないところにいて、だから……

「きつと、近くに居るべきじゃないんだよな……」

彼女と俺では住む世界が違う。そのことを嫌でも痛感してしまう。

そして、五番手にPoppin' Party。彼女たちも前回みたいな暴走はしていない。そう思うと前回のライブは恐ろしいほどに自由にやっていたんだな……まあ、最後の最後に訳分からないうちやうって観客を固まらせる訳にはいかないよな……うん。流石にCIRCLEの最後のライブで客が困惑で固まったとか、ライブハウス史に残る

黒歴史だろう。

「最後は25人がステージの上へ上がっていく。空を見上げれば星が広がり、ステージはライトで照らされる。そんな中でボーカル組を筆頭に最後の曲を歌っている。

「……………」

舞台袖でまりなさんが涙を流しながら、うなずいている。バイトで来ていた俺もここには色んな思いがある。きっと、まりなさんは俺以上にここに対する思い入れがあるのだろう。

「「いえーい！」」

そして、最後に25人が同時に跳び上がる。着地したと同時にステージには亀裂が入り……

「んな阿呆な……」

「なっ……………!?!」

ステージの下から勢いよく噴き出る水。その水の力により、遙か上空に打ち上げられる25人。いや……マジかよ。C i R C L Eの下には温泉があるかもと27日くらいに黒服さんたちと話していたけどさ……

「じゃ、ちよつとアイツら回収してきます」

壁キツクの要領で地上に出て、黒服さんたちが救出にも使えそうなエアクッションを

準備しているのを尻目に、間に合わなさそうな人たちを空中でキャッチしていく。そして……

「慧人さん」

「何でしょう？」

「これはライブ成功でいいですかね？」

「流石にわかんねえです」

紗夜さんを抱えながら地面に降り立つ。

「この先、どうなるんでしょうかね……？」

「さあ？ 温泉兼ライブハウスとしてリニユール……とか？」

「何かすごいことになりそうですね……」

こうして、C i R C L E最後のライブは、まさかの地下から温泉が噴き出て終わるといふ誰も予想しなかった結末を迎えるのであった。

ちなみに後日、総合温泉施設として再建されたさあくるのバイトとして雇われるのだが、それはまた先の話である。

# V S. 氷川紗夜

「はあ……はあ……」

「紗夜さん……」

「ふう……私はまだ負けていない……!」

「紗夜さん……」

「絶対に勝つんです……!行きますよ……!」

髪を縛り浴衣を着た紗夜さん。腕まくりをしている彼女。僅かに紅く染まっている頬と、二の腕を伝う水滴が相まっていつもよりも何処か扇情的に見えるそのお姿。

普段から見ている彼女が、普段より5割増しで綺麗に（まあ、普段も綺麗だけ）見える……が、それとこれは別である。

「はあ!」

彼女の左手から軽く上げられたピンポン球。それを右手に持つラケットで打つてくる。

「はい」

自身の目の前でワンバンしたそれを、右手に持っていたラケットで軽く打ち返す。

「えい！」

そして彼女は、自身の目の前でワンバンしたそれを打ち返す。

「どうぞ」

帰ってきたそれを、紗夜さんが取りやすいようにふわっとした感じで返してあげる。

「隙を見せましたね！」

そして、その球をスマツシユで返してくる紗夜さん。

俺たちはゆったりのんびりラリーをしたい……わけではない。これは仁義なき戦いなのである。血で血を洗うようなガチの勝負なのである。………まあ、流石に半分冗談だが。

「はい」

今までに比べたら速く返ってきたそれを、軽く返す。向こうは決まったと思うはずだからコレで決まるだろ。

「もう一回です！」

それに食いつく紗夜さん。もう一度、こちらに速く返してきた。

「おっと」

対してさっきので決まると思ったので油断していた俺。意表を突かれながら、紗夜さんの居る方と逆の方へと返していく。



「あ……」

流石に逆サイドに打たれたボールは台でワンバンし、そのまま床へと落ちていった。

「紗夜さん……そろそろやめませんか？」

「何故でしょう？　ようやく身体が温まってきたところですよ」

「いえ、温泉入ったから身体は元々温まってきましたよ？」

「安心してください。今は頭も温まっていますから」

「……それ、余りにも大差で負けているから、頭に来ているだけなんじゃ……」

「何を言っているんですか？　今は29—9の接戦ですよ？」

「すみません。接戦と言言葉をはき違いすぎですよ？　十の位が二つも違うんです、二

つも。分かっていま——」

「隙アリです！ やあつ！」

すると、紗夜さんが球を低めに上げて即サーブ。話で油断させておいて反応を遅らせる作戦だっただろうが……

「——すか？　あと、全然、隙アリじゃないですよ」

生憎、その手の作戦はよく使われていたから簡単に返す事ができた。

「言いましたよね？　35点先取の方が勝ちだと」

「負けず嫌い絶賛発動中ですね」

「何を言っているのかよく分かりませんね！」

「最初は10点だったのにその後5点刻みで増えていくのは……?」

「誤差です！」

「ええ……」

「かくなる上は色仕掛けで……」

「おい風紀委員。あなたは風紀を守る側でしょ?」

「何を言っているんですか? 風紀とは乱すためにあるんですよ?」

「待って待て。それ、ルールは破るためにあるって言っているのと同じですよ? いいんですか?」

「ルールを破り、風紀を乱している問題児生徒会長に言われたくありません!」

「ええ……否定できないのが辛いなあ……」

とまあ、こんな感じで俺たちのラリーは続く……

そもそも、どうしてこうなったのか。

ということ、ここ最近のことを振り返るとしよう。

C i R C L E 存続のため、ライブを開くことになった5つのバンド。当然ながらバートの俺とまりなさんも手伝い、(物理的に)崩壊寸前のC i R C L E でライブをやろうとした。しかし、クリスマスの際にとある事情でC i R C L E が(物理的に)崩壊。ライブができない……と思ったたら崩れたのは地上部分で地下のライブスペースは奇跡的に無事。そして、準備を重ね、年末にライブを行った……結果、何故か温泉が噴き出す事態に。何を言っているのか分からない？俺も分からない。

とりあえず、CiRCLEは改修工事を行うことになったが、当然工事の間は使えない。どこかのお金持ちさんの権力か、ご都合主義か、冬休みが明ける頃にはCiRCLE復活とのこと。

で、現在冬休み。クリスマス前にまりなさんから「商店街で温泉宿のペアチケット当たったけど、私、一緒に行くようなペアがないんだよね……はは、嫌がらせかな？」と、愚痴を聞くことと引き換えにペアチケットを俺がもらうことに。紗夜さんを誘ったところ二つ返事でオッケー。それに、CiRCLE崩壊のせいで冬休み中はRosellaとしての練習もそこまでやらないらしく、結果冬休み中に行くことに。まあ、高校生二人だけで……とか心配していたけど何故か普通に通った。なぜかは知らない。

「はい紗夜さん。水分補給は大切ですよ」

「あ、ありがとうございます……その、つい熱くなってしまっただけ」

部屋に戻った俺と紗夜さん。既に布団が敷かれている。

それぞれ温泉に入って、湯上がり卓球をしたところ、紗夜さんの中のスイッチが入って結果、50点先取になった。最終的にスコアは50-17と俺の圧勝に終わった。当然ながら、相手が紗夜さんだからと言ってワザと負けることはしなかった。

「それにしても少しだけ疲れた気がしますね……せつかく風呂入ったのに」

「ごめんなさい……つい負けたくなくなっちゃって……」

「いいですよ全然。凄く可愛かったですよ」

「……余裕そうですね……そもそも、慧人さん、強かったですね」

「強くはないですよ。動体視力と反射神経がいいだけですよ」

「むう……」

何処か膨れ顔をする紗夜さん。可愛いという感想しか出てこない時点で、俺はもしかしたら終わっているかもしれない。

ちなみにだが、俺の場合は、相手が紗夜さんでなければ、問答無用でスマッシュを相手のラケットにぶつける戦法を取る。しかも、俺のコントロールが絶対に狙ったところにいく程優れてはいないので、時々相手の身体や顔面に当たったりするが、やむを得ないことだろう。ともかく、これは弾丸のように飛んでくるピンポン球の恐ろしさから、相手のサレンダーを誘う実にクレバーな作戦だと自負している。

「でも、もう一度温泉入りたいですね。少し休んだら行きましようか」

「賛成です。さっぱりしたいですからね」

「あ、なら混浴行きましようよ」

「こんよ……!?だ、ダメですよ!そんな若い男女が裸で一緒のお風呂に入るなど、は、破廉恥です!風紀が乱れてしまいます!そんな風紀が乱れてしまうような場所には行かせないですよ!」

「そうなんですか？というか、卓球中に風紀は乱すためにあると言ってたような……」  
「そんなこと誰が言ったんですか！」

「Roseliaポテト担当」

「……つまり、慧人さんですか？」

「待て待て。何で俺になるんですか？」

「え？Roseliaにポテトを恵んでくれる担当じゃ……」

「俺が言ったのは食べる方の担当です」

「……Roseliaにポテトを食べる担当は居ません！」

「じゃ、食べる人が居ないなら恵む必要ないですね」

「わわっ！冗談です！私こそがRoseliaポテト担当です！」

（そこまで大きくない）胸を張る紗夜さん。今度、Roseliaポテト担当ってタスキでも作ろうかな？

「今、失礼なことを思いませんでしたか？」

「微塵も」

「でも……その……まだ、私の心の準備が……そんな裸を慧人さんに見せるなんて……  
恥ずかしいと言いますか……いきなりすぎますよ……もう少し前に言ってくれれば  
……」

「あ、大丈夫ですよ。ここの混浴は水着を身につけないと入れないんで。実質ゆったりできる温かいプールですよ」

「それを先に言ってください。なるほどそれなら……でも、水着を持ってきてないですよ」

「それならレンタル出来るですよ」

「なら行きましょう。すぐ行きましょう」

「ということとで混浴に行くことにする。ぐいぐいと腕を引つ張る紗夜さん……何でそんな積極的なのだろうか？よく分からないなあ……」

「慧人さん……ど、どうですか？」

混浴……目の前には少し照れた様子の紗夜さんが。

「とてもお似合いですよ」

「あ、ありがとうございます……」

ただ、少し気になることがあるとすれば……

「紗夜さん……何で視線が合わないんですか？」

ここに入ってから、一切こちらを見てくれない。何だろうか？ 一体、何が起きているんだらうか？

（む、無理無理！ 直視なんて無理です！ な、何なんですか慧人さんの肉体……これが肉体美と呼ばれるものですか!? 白鷺さんから腹部が引き締まっていることは聞いてましたけど、これはヤバいですね……）

「ぬ、脱ぐと凄いですね……慧人さんって」



「はい?」

(まさか、普段服に隠れていた部分はこうなっていたとは……! そういえば、普段抱きしめてもらっているときも力強かったです……。こう、無茶苦茶筋肉ばかり付いているというより……必要などころに必要な分だけ付いて……無駄な筋肉も脂肪もない感じ……くう。男性の筋肉にはさして興味がなかったはずなのですが、ここまで来ると美しさを感じますね……)

「な、何か特別なトレーニングでも……?」

「何で余所余所しいんですか?」

それと、相変わらず視線が合わないが……特別なトレーニング?

「いや、少し筋トレをするぐらいで……何もしてねえですよ?」

後は、昔とか今も喧嘩や暴力沙汰に巻き込まれたりとか、サッカー部のランニングでバカみたいに走ったりとか、建物の壁とか屋根とか登ったり跳んだりとかしているくらいで、特別なことはしてないんだけどなあ。

「あつ……」

「今度は何でしょう?」

「い、いえ……その傷跡が……」

「ああ、これですか……やっぱり気になりますよね。水着はあつたんですけど、ラッシュ

ガード的なのがおいてなくてですね……」

誘っておいでアレだけど、来るべきじやなかったかな……こんなもん見せたくないし。それに、見たくないだろうし……」

「だ、大丈夫ですよ！これから何度も見るでしょうし……！」

何度も？……何で？

（そ、そう……！だから、少しでも身体も見ること慣れておかないと……！）

「あー紗夜さん？無理に（腹部の傷痕を）見なくていいですよ」

「い、いえ、大丈夫です！しっかり（慧人さんの身体を）見ていますので！」

「えっと……そろそろ湯に浸かりませんか？立ち話もアレですし……というか露天風呂だから寒いでしょうし」

「そ、そうですね！」

周りに人が居ないのはよかった。流石に温泉に入り来ただけで恐れられたら、（自称）ガラスのハートに傷が付いてしまう。

「もう少し、近くに行ってもいいですか？」

「どうぞで」

「ありがとうございます」

2人が入った後、彼女は周りを何回か確認する。そして、隣に密着してくる……腕同

士が触れているけど……まあいいか。

(ま、周りには誰も居ませんよね？知らない人とはいえ、ここまで密着していると見られるのは恥ずかしいです……あれ？もしかして、今の姿を見られたら、こ、恋人と思われるのでしょうか……?)

「紗夜さん。のぼせました？」

「ど、どうしてそんなことを？」

「いえ、顔が真っ赤だと」

「そ、そんなことないですよ！第一、まだ入ったばかりですし、顔が赤いのは……そう！露天風呂ですし一気に身体が温まって血行が良くなり血が流れ始めたからだ……」

「のぼせる前にはあがりましようね。ここで倒れては意味ないですよ」

「そうですね……」

それにしてもいい湯加減だ。男風呂の方も気持ちよかったが、こっちなかなか……  
「慧人さん慧人さん。空が綺麗ですよ」

「そうですね……」

夜空には星が見える……いつも見ている空と違うのか、見ているシチュエーションが違うのか。いつもとは違うように感じる。

「確かに、綺麗ですね。いつもよりもそう感じます」

「そうですよね。これは新年からいいものが見れました」

「でも、紗夜さんの方が綺麗ですよ」

「……………ありがとうございます……………」

ゆつたりとした時間が流れる。他の客もいないし実質貸し切り状態。何か2人だけの世界にも感じるな……………うん。

(……………こんな時間がずっと続いて欲しい……………なんて我が儘ですね。でも、もう少しだけ……………)

風呂を満喫し、部屋に帰る。敷かれた布団の上にそれぞれ座つて談笑をしていた。

「そろそろ寝ましようか」

「そうですね……今日は一日満喫しましたし」

「確か、昼過ぎにはここに居ましたよね？」

「ええ。時間が経つのは早いものです」

「気付けば夜と……明日は何時に起きましよう？」

「明日は10時にチェックアウトして、昼過ぎまでこの辺りを観光。その後、バスと電車  
を乗り継いで帰りますよ。朝ご飯が7時から食べられるそうなので、明日は6時過ぎを  
目安に起きましようか。後、明日はお土産を忘れないように。日菜に買っていかない  
と、あの子は拗ねるので……」

「とりあえず朝は6時ですね。分かりました」

「普段は設定しないアラームを6時にセットする。さて……」

「では、おやすみなさい」

「待つてください」

「どうしました？」

「いえ……その……何かないんですか？」

「??？」

何か……え？今から？何か……ある？アラームはセットしたし、明日の予定は確認した。トイレもさつき行つたし……え？何だ？何がないんだ？……あ。

「紗夜さん……ソシヤゲのログインボーナス貰うの忘れていました。いやーおかげで思  
い出せました」

「…………寝ます」

「じゃ、ログイン済ませたら寝ますので」

何処か期待外れな感じで、布団の中に潜り込む紗夜さん。何か間違えたか？まあ、  
いつか。そう思つて、ログインを済ませ、灯りを消し、布団の中に入る。

数分後……

「慧人さん……起きてますか？」

「……………すう」

「……………」

（え？寝るの早過ぎないですか？前も思いましたが、寝つきがよすぎじゃありませんか？）

「……………（つつん）」

「……………すう」

「……………（つつん）」

「……………すう」

（完全に寝てますね……これ。よくこの状況で平然と寝れますね。分かっているんですかね？二人きりでの一泊二日の小旅行ですよ？こんな機会そうそうないでしょうし、何より気持ちがいともよりも高ぶっていて眠れないといえますか……）

「これはつまり……」

完全に慧人が寝ていることに気付いた紗夜。暗闇の中、慧人が寝ている布団の方へと入っていく。

（こ、これはアレですね。慧人さんの寝ている布団にスペースがあつたからです。部屋は比較的温かいですが、今は1月。万に一つ冷えてしまわないように、私とそのスパー

スを埋めているだけであつて他意は……)

と、誰も見ていないのに心の中で言い訳を並べている紗夜。

(も、もしかして……今なら慧人さんに何をしてもしもバレないのでは？い、いえ、ダメです！流石に寝ている彼に何かするなど、そんな……でも、ここまで隙だらけなのはチャンスでは？そうだとしても、ここで何かするなんて……)

(今、しないでいつするのです？)

(あ、あなたは私の中の悪魔!?)

(いつもいつも彼の掌の上でいいようにやられています。今はやり返す好機……ここを逃せば次はいつ来るか分からないのですよ?)

(た、確かに……)

(待ちなさい)

(あ、あなたは私の中の天使!?)

(そんな復讐は何も生みません。それに、やり返したことがバレたらどうなりますか？今後の関係に響いてしまうのはよろしくありません)

(な、なるほど……)

(だから……バレないようにやりましょう)

(はい！……って、あれ?)



(天使さんの意見を聞いてはダメです。第一、バレないように仕返しなんて本当に出来るっても?)

(出来ません。それに知っていますか? バレなければ何しても問題ないんです)

(……本当に天使ですか? 悪魔もビツクリなんですが……)

そして、彼女の中の天使(?)と悪魔が戦いを始めた。

約一時間争った結果……

(少しだけならセーフ。なるべくバレないようにするかどうか?)

(悪魔にはいい意見ですね。賛成しましょう)

妥協案が出て来た。

「す、少しだけならセーフです……!」

そして、その妥協案に乗ることにした。

(でも、少しだけって何を……?)

(控えめに言って、襲うはどうでしょう? まずは彼のアレを……)

(本当に天使ですか? 悪魔も流石に引きますよ?)

(じゃあ、悪魔さんはどんな意見を?)

(………頬にキスとか?)

(そんなことじゃ悪魔の名が泣きますよ? やれやれ、こんな使えない悪魔さんの意見な

ど聞く価値なしです。ひとまず、脱がせましょうか)

(いや、バレないようにして話は何処に消えたんですか?)

(彼が起きる前に着せれば問題なしです)

(無茶苦茶ですねこの天使!?)

(悪魔さんに言われたくないですね。それで、紗夜さん。あなたはどちらにしますか?)

(……悪魔さんの意見に乗ります)

(あなた正気ですか!? 天使と悪魔、どちらの意見を聞くかなんて考えるまでもないでしょう? 天使の意見を聞くべきではないのですか?)

(天使さん。あなたの意見は少しを超えています。だから、却下です)

(何を言っているんでしょう? 先っぽだけいれようとしているのでセーフ……)

(アウトです。まさか、天使さんがそんな頭がおかしいとは……では、紗夜さん。やりましょうか)

(はい)

意を決した紗夜。布団から顔を出し、手で慧人の顔を触って場所を確認する。そして

……

「……………」

寝ている慧人の頬にキスをする。そして、静かに布団の中に入っていく……

(や、やってしまいました……！うう……やってしまいましたよ……！)

暗くて見えないが、顔を真っ赤にして悶えていた。

(では、次は額や首筋に……)

(寝ましよう。これ以上は無理です)

(う、嘘でしょう？これで終わりとか……え？本当に？ちよつと待つて下さい？)

(これ以上悪魔さんに耳を傾けません。終わりです)

こうして紗夜の仕返しは幕を閉じた……

一時間後……

「ね、眠れない……！」

(お、おかしいですね？心臓の鼓動がいつもよりも早いです。落ち着こうとしても熱が冷めませんか？な、何ですかこの感覚は？)

更に一時間後……

「羊が701匹……羊が702匹……」

更に更に一時間後……

「羊が1300匹……日菜が1301人……あ、日菜ではなく羊1302匹……あれ？」



そして朝6時……

p i p i p i p i p i p i

「……何の音だあ……？あー……アラームか」

慧人、起床である。スマホのアラームが鳴っていたので止めることに。

「ふあああ……にしても、変な夢だったな……」

（何だよ、大量の羊と日菜に押し潰されそうになる夢って……羊と日菜なんて、最初がひというぐらいしか共通点ないだろうが。それに加え、その大量の日菜が素数を唱えながらやってくるとか……ホラゲーか？新手のホラゲーか？何だよ夢の中でも勉強させたいつてか？いや、その役目、日菜より紗夜さんの方が適任だろうが……）

「……ん？何か布団が……盛り上がってる？」

寝起きでいつもよりは頭が回っていない慧人。目の前の疑問を解決すべく顔を動かすと……

「あれ？紗夜さんいねえや。どこ行つたんだろう？」

と、ここでようやく気付く。いつもよりも身体が重いと。布団の中から寝息が聞こえ

てくると。

「……あ、こんなところに居た」

「……………すう」

布団を軽く持ち上げ、自身の上で寝ている紗夜を見つける慧人。

(何故こんなところに……………？まさか、寝ている俺に何かイタズラとか仕返しをしようとしたけど、たいしたこと出来ず、そのまま俺の上で寝落ちした……………とか？)

そして、半分くらいは合っていそうな推理をする。だが……

(いや、千聖じゃあるまいし、ないな。きつと、寝ぼけたのか寝相が悪かったのだろう) 違うと結論付けた。最初の推理の方が近いなんて、微塵も考えていなかった。

「……………紗夜さーん。6時ですよー起床ですよー……………」

紗夜を起こすべく声を掛ける。反応がないので、軽く揺すって頬を突つつく。

「……………ふにゅ……………」

(可愛い……………何だこの生き物。……………どうしよう、もうこのままでいいや)

一時間後……………

「紗夜さん、どうしたんですか？寝不足ですか？」

「……ええ、そうですね」

朝食を一緒にとつている。あの後、流石に7時前には起こした。そうじゃないと、女のプランが崩れそうだったから……で、

「何かありました?」

「……悪魔と天使の言い争いが……いえ、何でもないです」

……どうしたんだろうか。寝不足な姿は、いかにも疲れてます感が否めないが、悪魔と天使って何のこと? え? この人、何言ってるの?

「頭大丈夫ですか?」

「ええ、もちろん。ポテトのさえずりが心地よく聞こえてきて……」

ダメだ。幻聴が聞こえているらしい……いや、待てよ。この人にとっての平常運転なのか? ……どっちだ? ポテトのさえずりが聞こえることは、ポテト狂の彼女にとって、普通か異常か……そもそもポテトのさえずりって何? ポテトってどんな風に鳴くの? もう、彼女にとってポテトって何なの?

「……まあ、紗夜さんだから普通か」

「おっと、酷い納得の仕方じゃないですか?」

「ポテトのせいです」

「ポテトのせいにするのはよくないですよ」

「じゃ、気のせいです」

「そうですか」

……となると、彼女のことだ。さっきの悪魔と天使も、ポテトを囁く悪魔とポテトを崇める天使とかそんな感じだろう。……おかしい、それ本当に悪魔と天使か？ イメージとかけ離れているんだけど……

「……ところで慧人さん」

「何でしょう？」

「昨日の夕食でも思いましたが……慧人さんってよく食べますね」

「そうですか？」

「ええ。私とポテトを食べに行く時の3倍以上は食べている気が……」

「そりゃあ、紗夜さんと違って、ポテトはあんなに入りませんよ。というか、ジャンクフードは食べるのセーブしてます。これでもスポーツ選手ですので」

「普段は？」

「作った量だけ食べます」

「今は？」

「食べ放題、バイキング、美味しい、たくさん食べる」

その気になれば早食いはともかく、大食いチャレンジ的なのは平然とクリアできる自



信がある。今度、モカと一緒にどこかの店を泣かせに行こうかな？いや、モカと行くと泣くのはひまりか？まあ、なんでもいいや。

「……太らないんですか？」

「俺、太りにくい体質で……って、何ですか？腕をつねって……」

「慧人さん。その言葉は女性には禁句ですよ？」

「そうなんですか？」

「そうです」

「でも、紗夜さんってポテトばかり食べてますけど、昨日はそんなこと感じませんでしたよ」

「いいですか？体型維持の為に日々の努力が必要なんです。慧人さんにいつ見られてもいいように、普段から頑張っていますからね」

「そうですか。じゃ、そのお手伝いをすべく、ポテト禁止しますか？」

「ふざけてるんですか？」

「いいえ、大真面目です」

「バカなんですか？」

「いいえ、普通です」

「私のことが嫌いなんですか？」

「いいえ、好きです」

「ポテトのことが嫌いなんですか？」

「正直、最近ポテトが重く感じて……」

「そこは『いいえ、愛してます』と言うべきですよ」

「生憎、ポテトに愛を告げるつもりはないです……と、とつてた分が空になったんで行つてきますね」

「………まだ食べられるんですね」

半ばあきれたような視線を背に受けながら、俺は食べる分を取っていくのだった。

帰りのバスは比較的空いていた。静かに揺れる車内。そこには……

「すう……」

寄りかかって、静かに寝ている紗夜さんの姿があった。その後、予定通りにチエツクアウトして、近くの観光という名の散策をしていた。二人であのあたりのポテトを食べに行つて……うん。……何でこの人との思い出にはポテトが居るんでしようね？ 大体ポテトがセットになりつつあるんだよなあ……誰か原因知らない？

「お疲れ様です」

いつもより歩いたし、疲れも溜まったのだろう。ただえさえ、寝不足つて言っていた以上、ここで起こすのも忍びない。俺はそう決め……

「ん？」

と、スマホを見るとメッセージが来ていた。相手は……東雲か。何かあったのか？

『あの人が辿り着いた』

『本当にいいのか？』

……どうやら、終わりが来たらしいな。

『前言った通り頼む』

メッセージを送るとすぐに返事が来た。

『分かったよ』

………覚悟は決まっている。後はアイツがどうするかだけ……か。

そう思いながら、俺は移り行く景色を眺めていた。

## 彼の消えた日 前編

うつすらと霧がかかっている空間。辺りを見渡す限り、霧しか見えない空間。

(ここは……夢……?)

夢の中に居るはずなのに、夢の中に居ると分かるこの感覚。明晰夢……そう呼ばれるものかもしれない。

そして、霧の中に一人の男性が浮かび上がってくる。

(慧人さん……)

しかし、その男性は私の方を一瞥しただけで、すぐさま後ろを向いて歩き始めてしまう。

(待って……)

そう言おうとする。しかし、声が出ない。追いかけてようとしても、足が動かない。

徐々に離れていくその背中。私は必死に手を伸ばし……

「今のは……夢？」

目が覚めた氷川紗夜。自身の右手は空に向かって伸ばされていた。

そのまま右手を額に当て、先ほどまでの夢の内容を思い出そうとする。

(何も無い空間……私から離れていく慧人さんの背中……)

ただの夢……そう片付けたいはずなのに、何故かそうすることが出来ない。

あの夢は何かを訴えているのではないか？

寝起きの彼女の頭に過ぎる考え。しかし、根拠は自身の見ていた夢という曖昧なもの。

「そんなわけじゃないですよね」

何処か不吉で、何処か不気味な夢だった。そう思うことにして、手を伸ばしスマホを取る。時間を確認し、身体を起こす。本来であれば、そのまま朝食を食べに行くのだが

……

「……………これはただの確認です」

LONEを開き、彼からの緊急のメッセージが届いていないことを確認する。

「やはり、考えすぎですね」

念の為、彼とのトーク画面を開き、何も無いことを確認してから閉じようとした時、あの違和感が彼女を襲った。

「……………既読すら……………付いていない?」

一昨日の夜に送ったはずのメッセージに、既読すら付いていない。

彼……………冬木慧人は決してメッセージに対するレスポンスが早いわけではない。しかし、身近な相手に対して限定すれば、遅すぎることもない。メッセージを送れば丸一日以内に返す、あるいは既読をつけることはするはず……………が、既読すら付いていないことに違和感を覚えた。

「そんなはず……」

パソコンを立ち上げ、NFOを起動する。

当然ながら、彼はマイペースで抜けているところもあり、既読が付いていないのは、彼女が送ったメッセージに緊急性がないことを知って、そのまま放置もしくは忘れた可能性もある。

フレンド欄から、彼……Keiの最終ログインを確認する。

「……約57時間前……私たちとNFOを共にした時でしょうね……サブ垢の方はもつと前……」

前にNFOのログインが滞っていたことはあった。だが、それはサブ垢の方を進めるため、こちらを忘れていたというもの。しかし、今回は両方のログインを確認し、どちらも一昨日からのログインはない。

「……朝食を食べてからにしましょうか」

何でもないはずの夢が、何かを訴えかけている——今すぐ電話をかけて確認をしたい……が、まだ時刻は朝の7時頃。寝ている可能性を考慮し、もう少し待った方がいいと判断し、紗夜は自身の部屋から出て行くことにする。



「慧人さんが失踪……姿を消しているなんて……」

「そうね……完全に予想外だわ」

「どうしましょう……けいさんが……失踪事件に……」

「けー兄……！何でけー兄が……！」

昼過ぎ……澄み渡る青空が広がっているのは対照的に、空気が重くなっていたR0

seliaの面々。

その後、時間を見計らって電話をかけた紗夜。しかし、その電話に出ることはなかった。

Roseliaの面々や日菜に確認してみるも、誰も会っていないし、連絡も出来ないという。昼になっても折り返しの連絡がないことから、嫌な予感がした紗夜は、慧人の家に行くことを宣言し、Roseliaのメンバーも何か起きているのでは？ということで慧人の家が集まった。

慧人の家が集まったところで、慧人のお母さんが仕事のために家を出ようとしていたところに遭遇。簡単に話を聞くと一昨日から姿を消しているとのこと。どこで何をしているのか見当も付かないとのことだ。

家に通された五人。紗夜に家のスペアキーを預けると、そのまま慧人のお母さんは家を出て行く。ふらつと帰ってきたらよろしくという伝言を残して。

「うーん。ハロハピの子たちに巻き込まれたとかじゃないかな？」  
そこにリサが意見を出す。しかし、

「「はあ……」」

「え？ちよつと待って？何その、コイツダメかもみたいな空気？」

「リサ。これはそんな単純な事件じゃないのよ」

「そうですよ。これはネタではなくガチの事件ですよ」

「もう少し深く考えましょう……!」

「そうだよリサ姉! そんな結論じゃないよ!」

他のメンバーから全否定される。

「でも、もし本当に失踪したんだつたら警察案件だよね?」

「そうですね。ただ、ご両親がきつと警察には届けを出してくれているはず」

「いや、待つてるだけじゃダメだよ! あこたちも出来ることをしようよ!」

「そうだね……でも、一体どうするの?」

「推理よ」

「『推理?』」

「ええ。冬木が紗夜に何の連絡もなしに失踪するのはおかしい」

(その前提がおかしいような……)

「だとすれば二つよ。紗夜に言えない理由で失踪したか、紗夜に言う暇もなく消えてし

まったか」

「ゆ、友希那が鋭い意見を……ん? やっぱり、ハロハピ……というか弦巻家に拉致られた

んじゃないの?」

「『はあ……』」

「何でそこまでアタシがダメな意見出した空気になってるの!？」

「実に浅はかです。今井さん」

「そうですよ……もつと深く考えないと」

「そもそもけー兄を拉致するんですよ?」

と、五人の少女は考え直してみる。果たして、あの慧人を拉致することは可能なのかどうかを。

「無理ね」

「無理だね」

「無理ですよ」

「無理かと……」

「無理だった……」

気配察知能力がバグレベル。さらに身体能力が高く押さえつけることは実質不可能。そんな男を果たして拉致することは出来るのだろうか? いや、出来ない……と言いたいが、割と黒服さんたちに連れて行かれるのは内緒。

「ここはまず、現場を見ることにしましょう」

ということ、彼女たちは彼の部屋に移動する。

「あつ、これって……」

部屋に入つてすぐにリサが何かを見つける。

「スマホ……ですわね」

「でも、なんでここに……？」

「連絡が取れない理由は……そもそも彼の手元にないから」

「で、でも、これって結構マズいんじゃないの……？」

「ええ。GPS……位置情報で場所を特定できない……そして、連絡を取り合う手段もない……」

「ま、待つて！コレ見て！」

続いてあこがさしたのは慧人の机の上。そこには一枚の紙が置いてあった。

「『さがさないで』……急いで書いたんでしょうか。字がとても雑ですわね」

「自ら失踪……いえ、その可能性も低いですわね……」

「どうしてなの？」

「えつと、財布もここに置いてあります。スマホは位置がバレてしまうリスクがありますが、流石に財布がないのであれば、何もできません……それに、この机の状況。まるで、勉強中の様子ですし……」

「た、確かに……テキストとノートが開いたまま……けー兄は勉強中だった？」

「なるほど……中途半端なのね」

「でも、空き巣や強盗ではない……部屋を見渡しても荒らされた様子がなく、お母様も然程心配していないことから、そういうことにあつたというわけではない。そうなる……」

考え始める五人。そんな中、リサが声を上げる。

「千聖も知らないみたいだよ」

「白鷺さん？」

「うん。アタシら以外で一番情報を持ってそうなの千聖じゃん？だから聞いてみたんだけど、何も知らないみたい。そもそも昨日まで仕事で忙しくて、連絡も取れていなかったらしいよ」

「……なるほど」

「何がなるほどなんです？紗夜さん」

「……白金さんも言ったように、慧人さんが自ら失踪した……という可能性は限りなく低い」

「そ、そうですね……」

「そうなる、残るは最初も言っていたように拉致……何者かに捕まってしまったこと」  
「でも、部活の合宿とか、そういう可能性も一応あるんじゃないの？」

「いえ、それは低いでしょう。部活など公のものであれば家族に伝わっていないことが

おかしい。スマホや財布を忘れたことにも疑問を抱きますし、そもそもこの『さがさないで』のメッセージの意味が分かりません」

「確かにそうね……でも、犯人は一体誰なのかしら？」

「容疑者はRoselia全員」

「「……………」」

紗夜の発言に戦慄する四人。

「な、何でそうやって言えるの…………？」

「それは二つ。外部の…………慧人さんの知人以外の犯行の場合。この『さがさないで』という文面には違和感が残ります」

「そうだね…………だって、それこそ警察案件になるから、何かしらヒントなりを残しそうですし…………」

「ええ。それに、彼の気配察知能力から、家の何処から侵入されようが彼なら撃退できる可能性が高い…………彼に不意打ちをすることは不可能に近いです。なので、彼にとっての顔見知りの犯行の可能性が高いと言えます」

「でも、何故そこから私たち5人に絞れるのかしら？」

「それは……………ここにいるから、でしょうか」

「……………どういふこと…………？」

「ふっふっふ、あこには分かりましたよ！紗夜さん！」

「分かったの……？あこちゃん？」

「うんとね、けー兄が消えたことっていつかは分かるじゃん？それで、けー兄が消えたとき、一番最初に動くのって……」

「紗夜……だね」

「うん！だから紗夜さんに付いていくんだよ。……真相にたどり着かせないように」

「犯人が……監視している……？」

「つまり、私たちの誰かが犯人……？」

「……うーん、別にそうとは限らない気がするけど……」

「その通りです宇田川さん。そして、私自身が潔白という証明もまだ出来ていない以上、容疑者はこの場にいる五人に絞られたと言っているだけです」

犯人はこの中に居る……他の人を疑い、様子を伺う四人の姿。

(……何だろう……慧人くんのメッセージを信じた方がいい気がする……別にこれ事件でも何でもない気が……)

ただ一人、リサを除いては。

「ふっふっふ、ここは妾の出番のようだ！」

そんな状況の中、一人名乗りをあげるものが居た。



「魔眼探偵あこ……この魔眼の前には全ての真実は………えつと……」

「白日の下に晒される」

「は、白日の下に晒されるんだよ！」

「……え、えーつと、あこ………？」

「魔眼探偵あこ。まずは、何をしたらいいの？」

「え？友希那まで？」

「まずは、けー兄が拉致された時間を考えるべきだと思うよ！」

「なるほど。確かに、まだ彼の拉致された時間は分かりませんからね。流石は探偵ですね」

「ええ……大丈夫かな……？でも、筋は通ってそうだし……」

「えつと、一昨々日の夜は……私とあこちゃんと氷川さんとけいさんで……NFOをしていたよね？」

「うん！楽しかったよね！」

「その時点までは生きていた……しかし、一昨日の夜に送ったメッセージに既読すら付いていなかったことから……」

「一昨日のどこかで拉致されたのね」

「あつ、そう言えばアタシ、一昨日の昼に慧人くんと電話したよ。ほら、はい」

そういつてリサは自身と慧人の会話の履歴を見せる。そこには確かに一昨日の昼に通話した履歴が残っていた。

「なるほど。今井さんの電話を最後に、慧人さんの消息が途絶えていますね」

「え？何で分かったの？」

「慧人さんのスマホでLONEを開いただけですが？」

「え？どうやって入ったの？」

「普通に入りましたけど？前に、慧人さんがスマホに入る時のパスワードを知ってしまっただけ……」

（（知ってしまった……って……））

「確かに……けー兄、リサ姉との電話の後は既読が綺麗についていないね」

「つまり、慧人さんのお母様の話を踏まえると、慧人さんが姿を消したのは一昨日の昼過ぎから夜の間のどこか」

「ふむふむ。つまり、その時間が犯行時間なんだね……」

少し考えるあこ。すると、いきなりハツとしたような感じで声をあげ……

「分かった！」

「え？何が？」

「犯人だよ！」

「流石は探偵ね。あこ、教えてちょうだい。犯人の正体を」

五人の中に緊張が走る……その緊張感の中、あこはある人物を指名した。

「犯人は紗夜さんだよ！」

指差したのは紗夜だった。当然ながら、指をさされた本人は疑問を口に出す。

「……何故私か？」

「けー兄を拉致することは不可能……でも、本当にそうであるとは言えない」

「どういうことですか？」

「ズバリ！紗夜さんにだったら何にも考えずについて行く可能性が高い！」

「なっ……！」

「そして、どこか密室に閉じ込めたんだ！さあ、紗夜さん！けー兄の居場所を吐くんだ  
！」

「で、でもあこちゃん……それだけじゃ流石に……」

「動機はけー兄を捕らえて手中に収めること。犯行日時は……えっと、リサ姐の電話後からその日の夜までのどこか！」

「でも、紗夜が犯人なのは変じゃないかしら？」

「どういうこと？友希那」

「だって、紗夜が冬木について聞いて回っていたのよ？犯人である紗夜が捕らえたとい

うのに、そんな行動をするのは不可解じゃないかしら？」

「ふっふっふっ、そう来ると思っていました」

「じゃあ、何かあるのかしら？」

「逆に考えてくださいよ。けー兄が失踪したことは時間が経てば、あこたちも気付き始めるはずです。そんな中で、あの紗夜さんが気付かないことはおかしいんですよ」

「……確かにそうね。あの紗夜が気付かないわけがない」

「そうだね……あの氷川さんが気付かないのはおかしいね……」

「うん……あの紗夜だもん」

「待ってください。なんで皆さんして『あの』ってつけるんですか？」

「(……だつて……ねえ?)」

「だから、けー兄を一番最初に捜そうと動いたんですよ。自分が一番最初に動かないと怪しまれるから……」

「無視ですか……まあ、筋は通っているようですね……ですが、その推理は甘いですよ。」

宇田川さん

すると、あの推理に反論する紗夜。その顔には自信があった。

「いいですか？ 私にはアリバイがあります」

「あ、アリバイ？……どうしょ、りんりん。アリバイってなんだっけ？」

「現場不在証明のことで……えっと、犯行の日時に犯罪の現場以外の場所にいたということを主張して、無実を証明することだよ……」

「な、なるほど……？要するに？」

「自分は無実ですつていう証明のことだよ」

「なるほど！」

「私の場合、証人は日菜です。彼女なら私の無罪を証明してくれます」

「そっか、ヒナが証明してくれるんだ」

「あれ？ということは違うんだね。じゃあ、りんりん？」

「ううん。私はこちらちゃんとNFOをしていたよ……？」

「だよねー。じゃあ、リサ姐？」

「アタシもあの電話の後はモカとバイトしていたよー」

「ということは友希那さんも……」

「もちろん、違うわよ」

「もしかして……あこ自身!？」

「そうなんですか宇田川さん!？」

「あはは……あこには拉致した記憶があるのかな？」

「な、ないよ！」

「そもそも……一昨日は私とイベント周回していたよ？」

「そういえばそうだった！よかったあ……あこも無実で……？」

「ということは、これで、五人とも無実だね」

「……………」

「どうしたの？」

「犯人が……居ない……？」

Roselia 全員にアリバイがあり、犯行が難しい現状。さらに現場の状況から、この中のメンバーでは犯行が不可能だと思われるものだった。

「……もしかして何か見落としている……？」

「……………」

「いやいや、そもそも犯人が存在しないんじゃない？」

「な、なるほど。現場の検証が不十分だった可能性もありますね」

「そ、それにアリバイの検証もしないと……」

「犯人はなんて狡猾なの……！」

「……………ええ……………」

もともとからポンコツ気質のあつた紗夜と友希那は、既に犯人がRoseliaの誰かであると思ひ込み、燐子もあこに乗っかる形で、もはや犯人がいらないと思つているのはり

サだけだった。

そして、一時間後。全員のアリバイの立証、慧人の部屋を再び調査を済ませた……が、新たな情報は出てこなかった。

「やっぱり、深く考えすぎているだけかもよ？」

「もしかして、本当は犯人なんて存在しないんじゃない？」

「……そうですね……私たちじゃ不可能です……」

「じゃあ、冬木は自ら失踪を……？」

「…………っ！紗夜さん！」

「何でしょう」

「けー兄のLONEの画面見せて！」

「どうぞ」

あこは何かに気付いたようで慧人のLONEの画面を見る。画面には綺麗にリサ姐の電話の後のLONEには既読が付いておらず、それ以前は返信したり既読が付いていたりしていた。

「……もしかして……」

「あこちゃん？」

「……分かった……」

「「え？」」

「……犯人……分かつちやつた」

そして犯人の方へと指をさす。

「犯人。それは——」

全員が指さした方を向く。

あこが指さしたのは——



## 彼の消えた日 後編 ☆

あこが指をさす……その先に居たのは……

「——リサ姉。そうだよね？」

「「……………」」

リサだった。指をさされた彼女の表情は驚きに包まれていた。

「い、いやいやいや!? アタシじゃないよ!？」

「本当に?」

「そうだよ。ほら、さつきだって全員違うって話になってたじゃん」

「そ、そうだよあこちゃん。ここにいるみんなじゃ無理だって……」

「ううん。それが間違いだったんだよ。そして、あこの推理だと、リサ姉しか犯人はいないんだよ……」

「で、でも……」

「落ち着いてリサ。まずはあこ、聞かせて。あなたの推理を」

「うん。問題点は、全員アリバイがあること。そしてけー兄を拉致することは不可能と  
いうこと」

「そうですね。両方を崩さないといけませんね」

「まず、けー兄を拉致するということ。これ、実は最も簡単だったんだ」

「……どうして？冬木が寝ていたとでも言うの？」

「そうじゃないよ。紗夜さんの時に出てきたけど、けー兄は警戒していなかったんだよ」

「どういうことなの……？」

「うん。けー兄はあこたちの誰が来ても、警戒を絶対に緩める。あこたちに警戒心を抱くことはないんだよ」

「……そっか。紗夜に対しては特に緩いけど、アタシたちでも警戒する素振りは見せないね。でも、それだと候補は……」

「うん。候補はあこたち全員になる」

「慧人は紗夜以外にもこの中のメンバーに対し、警戒心を抱くことはない。だから、拉致することは可能だと言う。」

「だから、重要なのはけー兄を拉致した方法じゃなくて、拉致した時間なんだ」

「今井さんが電話した一昨日の昼から、その日の夜までの何処かのタイミングで。という  
ことでしょうか？」

「そう思っていた。でも、本当はそれが違ったら？」

「……………まさか、あこちゃん。それって……………」

「うん。通話したログが残っている。でも、けー兄のスマホから電話していた人が、けー兄じゃなくて犯人だったら？もつと言うとそもそも電話にけー兄が出ていなかったら？」

「もつと早くに拉致されていた……………そういうことになるのね」

「犯人が二つのスマホを使って電話を掛ける……………そういうことですか？」

「可能性は捨てきれないです……………」

「い、いやいや！アタシが電話した相手は慧人くんだったから！慧人くんと話していたからー！」

「思い出してみてよ。誰が最初にけー兄のスマホを見つけたか」

「……………っ！」

慧人のスマホを最初に見つけた人物。3人が一斉にリサの方を向いた。

「だから、けー兄のスマホは実は犯人が持っていたもの。そして犯人は、自分が見つけたようにあこたちに言って、最初からそこにあつたかのように偽装したんだ」

「……………そんなことしてないよ。じゃ、じゃあ、本当の慧人くんが消えた時間は？」

「二昨日の昼より前……………ただ、その前の日の夜は……………」

「私と氷川さん、それにあこちゃんの三人と一緒にNFOをしていましたね」

「うん。だからその直後になると思う」

「なぜかしら？一昨日の午前の可能性もあるでしょう？」

「けー兄のお母さんは言つてたよね？一昨日から姿を消しているって……つまり、一昨日の朝の時点で既にけー兄が居なかった可能性があるんだよ」

「なるほど……検証は必要ですが、一昨日からという表現……それが一昨日の朝からだった可能性もありますね」

「うん。それに、夜の方が人目には付かないから……後、けー兄は朝から勉強するほど真面目じゃない！そんな朝から勉強するけー兄なんておかしい！」

「「あ、確かに」」

酷い言われようである……が、これが日々積み重ねて来た人徳というヤツである。

「ちよ、ちよと待つてよ！ここ最近、夜は出掛けず家に居たよ。ほら友希那も、アタシの部屋の電気が付いているの見ていたよね？」

「ええ、そうね。付いていかなかったら気付くはずよ」

「でも、リサ姉の姿は見た？部屋の電気だけなら偽装はできるよ？」

「……っ！そ、それは……確かに……」

「嘘……」

「それに今井さん……ずっと、犯人はここに居ないと主張を繰り返してましたし……」  
「ずっと、弦巻さんのせいにしてしようとしていましたね……」

友希那、燐子、紗夜……三人から疑いの眼差しを向けられるリサ。

「……事件を最初から振り返るよ」

そして、目を閉じて今までの推理を組み立てるあこ。

「まず、犯人はけー兄を拉致しようとしてけー兄の家を訪れたんだ。あちちと最後にNF Oをプレイしたその日の夜にね。出迎えたけー兄は、犯人の姿を見ると警戒心を解いたんだ……それが事件に巻き込まれてしまうとも知らずにね」

「拉致した犯人は、アリバイを強固なものにすべく行動を起こした。通話履歴を残すことによつてね。それが一昨日の昼。そこからはバイトなり誰かと行動することで自分にアリバイができるから」

「そして今日。異変に気付き始めたあこたちと共にけー兄の家を訪れたんだ。そこで、持っていたスマホを部屋に置いておく。そして、自分が最初に見つけたように振る舞ったんだ。このスマホは外に持ち出されていらないと思わせるためにね」

「そんな事ができた犯人は、もう一人しか居ないんだよ。だから認めてよ——リサ姉」  
流れる沈黙。

誰もあこの推理に異を唱えるものはいなかった。

## ガチャ

「あーやつと帰ってこれた。全く、いつもの事ながら面倒くせえことに巻き込まれ……  
あ、いらつしや——つて、もしかして今何か重い話とかの最中でした？……んじや、失  
礼します」

ガチャ

流れる沈黙。

あまりの光景に全員、開いた口がふさがらない。そして、

「は、犯人は、リサ姉だよ！」

「答えてください今井さん……！」

「そ、そんなリサ……！」

「ううっ……まさか今井さんが……」

「待つて待つて！今そこに居たよね！」

「あ、あこの魔眼には映らなかつたかな？」

「きつとあれはケイトニウム欠乏状態の私に見えた幻覚です」

「正直に言つてリサ……！」

「そ、ソクナイマイサンガ……」

「困惑しすぎでしよ皆！ええい！もう！」

リサは部屋を飛び出す。そして鬼気迫る表情で慧人の部屋の扉を開けた。

バアンツ！

「慧人くん！集合だよ！」

「え？何ですかリサ姐？俺は休憩した……ちよつ、なんでそんな怒っているんですか？」

「怒つてないから！ほら、行くよ！」

「そ、そんな強引にしなくても……」

「早く来ないとアタシが犯人にされるの！」

「犯人？何の？」

「慧人くん失踪事件の！」

「あ、じゃあ、犯人はリサ姐で。これは決まりですね。解決かいけ」

ドンツ！



「慧人くん？」

「これが壁ドン……リサ姐が五割増しでイケメンに見える……」

「冗談でもそういうことは良くないと思うなー」

「ちげえわ。ただの般若だ」

「うん。戯れ言はそろそろいいんだよ？」

「リサ姐が怖い件について。当局としては一切責任を取らない所存であります」

「いいから来るの！返事は！」

「へーい……って返事したから首根っこ掴まないで下さいよ！」

そして、物音から少し経って。

「あのー……何で俺、正座させられているんですか？」

被害者、冬木慧人は五人の少女の前で正座していた。

「さあ、慧人くん？吐いて説明してもらおうもらおうよ……洗いざらい。全て」

「ちよつと待つてくください。いや、何で事件扱いになつていいるかも、何でリサ姐が犯人なのかも分かつてない人間に、何を説明しろと？」

「では私から説明しますね」

　　少女、説明中

「と、こんな感じですかね」

「なるほど……犯人はリサ姐で決まりだ。もう、これが真実でいいんじゃないか？」  
「え？ やつぱり、そうだったの？」

「ああ。実は俺、リサ姐によつて監禁されていたんだ。リサ姐が居なくなつた隙に何とか脱出して——」

「慧人くん？ 何本がいいかな？」

「——え？ 何本つて？」

「折る指の本数」

「誰かあつ！ リサ姐がガチでキレてる！ 誰か助けて！」

「「……………」」

「全員目を背けた!?! いや、キレている原因の大半はあなたたちですよ!?!」

「じゃあ、正直に言おうか？ もし、そんな面白くないオハナシをこれ以上聞かせるなら

……本気でヤルよ？」

「「……………」」

ガチだった。目がガチだった。この人は答え方を間違えれば本気で慧人を殺る気だった。

「や、やるつて……俺、初めてなんですけど……」

しかしこの男はバカである。明らかにヤバい相手に対して、冗談をぶち込んでいった

のだった。

「……………アタシも初めてだから……………人を殺るの」

「え？ そうだったんですか？ てつきり何人も殺つてきた後かと」

「それは慧人くんの方でしょ？ 色んな人を殺りまくつて……………」

「そんなわけ……………」

「話が脱線しているわよ。冬木、さつきと説明」

「へーい……………と言うかその前にいいか？」

「どうぞ」

「第一、犯人が誰であれ、俺を拉致したんだったら『さがさないで』というメモがあること自体おかしくねえか？」

「えつと……………それも犯人が……………」

「俺が書いたことを前提に推理していたんでしょ？ 拉致されている途中で書くタイミン  
グがない。それに他の誰かが似せて書いた可能性を欠如している……………が、まあ、そつち  
の方がおかしいだろうな。犯人が書いたなら、どこかに出かけるとか書いて、スマホと  
財布を持ち出して紙を残した方が、俺が出掛けたように装える。俺を脅して書かせたと  
しても、そつちの方がいいはずだ」

「……………」

「第二に、朝から勉強するほど真面目じゃないって言うのは認めてやろう。ああ、俺は真面目じゃない。だが、そんな男がNFOをやり終わって夜も遅いのに、そこから勉強し始める方が違和感あるだろ。冬休みの課題も終わり、課題に追われていない状況下で、ゲームした後の夜中に勉強するほど真面目じゃねえよ」

「……確かに……あの、慧人さんが、夜中のゲームの後に勉強する方がおかしい……！」

「え？冬木（けー兄）、冬休みの課題終わったの？」

「え？友希那（あこちゃん）、終わってないの？」

「……続けて頂戴」「つ、続きを言っ……！」

「……そして最後。確かにアリバイリックはリサ姐しか使えねえ。だけど、そのリサ姐はいっつNFOが終わるって把握していたんだよ。近隣で見張る……ってのは無理だろ。そんな夜中に、リサ姐が家の近くでこそ怪しい動きをしていたら、俺の方から近づく。スマホと財布を持ってな？玄関先で油断していたならともかく、外でなら不意打ちは不可能だ。周りの目もあるかもしれないし、外の広いスペースなら至近距離でもない限り避けられる」

「……あれ？あこの推理……もしかして穴だらけ？」

「まあ、面白くはあったな。例えば、リサ姐が事前の仕込みで、俺の部屋に盗聴器とカメラをセットしていた……これは突発的な犯行ではなく、計画的な犯行であった。ってシ

ナリオがあれば、もつと完璧な犯人の出来上がりだろ。『さがさないで』っていう文面も、一周回ってやはり失踪したって結論に持つて行くための文章だったとか」

「な、なるほど……じゃあ、その一文を追加して、もう一回犯人を追い詰めるシーンから……」

「やらないよ!!第一、それただのヤンデレのストーカーだからね!!」

「え?リサ姐ならやりそう……あ、何でもないので振り上げた拳をお納め下さい」

「慧人くんの頭に?」

「違います。あなたの懐にです」

折角、他の四人が納得した推理を反論して崩したのに、余計なことを言つて怒らせる慧人であった。

「で?結局、何だったの?」

「何が?」

「一昨日から消えていた理由」

「そんなに大事じゃねえですよ。リサ姐と電話した後、黒服さんたちに連れられへりに乗せられ、そのまま雪山に行つて遭難して、館に迷い込んでゲームに巻き込まれて、そのまま首に爆弾付けられ、主催者との契約である殺人事件の犯人を推理、捕らえに行つてきて、今まで帰れなくなつていただけですよ」

「ほら！やっぱり弦巻家が関わっていたじゃん！」

「ふっ……私はリサを信じていたわ」

「私も今井さんを信じていましたよ」

「私も……犯人は居ないと思ってました……」

「あこも、本当は犯人じゃないって分かってたよ」

「本当に？嘘つくのは良くないと思うなー」

「疑ってごめんなさい！」

「うんうん。しょうがない。今回の件は水に流してあげよう」

（何だろう。Roseliaの美しい友情を見たのはいいんだけど……何で俺はまだ正座させられているの？俺、今回の件の一番の被害者なんだけど……？ん？よく思い返せばあのメモって確か……）

「………って雪山で遭難して事件に巻き込まれていたあ！しかも首に爆弾！」

「いや、反応遅くないですか？ラグが酷すぎですよ？そのせいでこっちは、今の今まで帰れなかったんですよ」

「……もしかして、殺人事件の推理って……」

「少なくともあなたたちのやっていたやつではなく、ガチの事件です」

「ば、爆弾って……」

「爆発してたらドカーンでしたね。いやー頭と胴体がお別れするところでした。まあ、終わったことなんで気にしなくても……」

「説明しなさい!」

「……………へーい。えーあれは心地の良い朝でした。小鳥の囀りにより起き……」

「爆発するところまでカットで」

「してねえよ!? 流石の俺でも爆発してたら生きてねえよ!」

「じゃあ、拉致されたところまででいいからカットして!」

「へーい……というか、俺、リサ姐に恐喝されたんだけど。従わなければ首を折るって脅されたんだけど? それに対して何かないんですかー?」

「言つてないよね!? アタシが言ったのは戯れ言一つにつき、肋骨を一本ずつ折ることだよーというか、もうすでに五、六本折つてもいいよね!」

「増えたしよくねえよ!? 指だけじゃ飽き足らず肋骨まで折られるのかよ!」

「ああもう! 早く言わないと慧人くんの関節全て外すよ!」

「分かったから! 分かったから肩に手をかけないで!」というか、罰がどんどん酷くなつてんだよ!」

「羨ましい……今井さんばかり慧人さんとイチャついて……私だつて久し振りの慧人さんとイチャつきたいのに……」

「誰もイチャついてないけど!」

「何でもいいから早く進めて」

こうして、慧人の回想が始まるのだった。



「よく、ここまでたどり着きましたね」

「ええ。ようやくあなたの下へたどり着いたわ」

「先ほどのメッセージはよかったのですか？」

「慧人が失踪したそうよ」

「なるほど」

「心配かしら？」

「いいえ、いつものことです。そちらこそ心配では？」

「まさか。どうせ、ふらっと帰ってくるでしょう」

「そう」

「それで、東雲さん。あなたの知る慧人の秘密を教えてくださいませんか？」

「まあ、あのバカともそういう約束なんですね。お話ししましょうか……アイツの抱える爆弾を」